

コジマ汚染レベルで脳が駄目な男のインフィニット・ストラトス

刃狐（旧アーマードこれ）

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

AMSから光が逆流したり手こずっていたら尻を貸したりビットマンでカーパルスへ遊びに行くような男のお話

プランDいわゆる転生ですね、インフィニットストラトスですか、コレでテストの汎用性が高くなりました、いい傾向…AMSから光が逆流する…!ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!

なおこの主人公は酷く厨二病でチート能力を持ち、アホみたいに強くっておっさんみたいな顔をしています

それとオリ主にハーレム因子はありません

あとアーマードコアな要素がたっぷり出てきて他のネタも色々出てきます

最後にこのお話は7割がギャグ、2割がコジマ粒子、残りの1割は優しさとかバフアリンとか色んなもので構成されています

シモネタも沢山溢れてきます

なお、この作品には人体の部位欠損、ゴア表現が含まれていますが、苦手な方は見ないことをお勧めいたします。

追記

なお、この作品は後半に行くに連れシリアス成分が多くなります。アンチ・ヘイトではありませんが完全にギャグ一本だと思っただ方はご注意ください。

また、主人公による殺人行為等も後半に行くに連れ出てきますのでその点もご注意ください。

## 目次

キャラクター紹介【修正&挿絵追加】	1
こっから本編、ただし原作介入はまだ	
太陽の光（みたいなの）を浴びてAMSから逆流して10万ドルポ ン☆と出すが如く生まれるお話【挿絵追加】	12
こっから原作開始	
いっちーが勃起したチ○コ（比喻表現）でちっふーがマジギレして まだまだ腐るほどいて面倒だが先は長いお話	25
部屋割りが決まったけど入って早々ラッキースケベ去勢リーチ大 魔神が突入してくるお話	42
俺はそうは思わん、ZE☆N☆RAこそが人間の可能性なのかもし れないしタンクとパイルは男の浪漫なお話	58
こっから鈴音編	
ビットマンがEN不足で誰であろうと私を越える事など不可能で 本音ちゃん推しなお話	76
システム通常モードな予想通りのお客さんがミサイルカーニバル で派手に行くお話	100
茶番はもう終わりでちよつとお手伝いのこの荒れ具合が騙して悪 いが許しは請わないそんな機体で青いイレギュラーを期待するステ キな風穴なお話	126
プランD、所謂デイトですね。幕間ですか、これでテストの汎用性 が高くなりました、良い傾向です。この話は、別に見なくても結構で すよ。	155
こっから波乱の転校生編（タッグマッチもあるぜよ）	

認められないエーレンベルグ掃射砲♂のメインブーasterがイカ  
れて面倒が嫌いなお話 ————— 176

生まれて始めての朝勃ち、それは恋の予感なお話 ————— 202

オーメル仲介人の名前はアデイ・ネイサン、もし女だったらアダ名  
はきつと「アデイ姉」 ————— 224

トーナメントから風呂イベントまで ————— 245

サブタイが思いつかないがとりあえず紹介しよう、彼女は私のお嫁  
さんだ ————— 270

お互い好きにやってそのお願いは聞けないが水着は買いに行くお  
話 ————— 292

夏(なの)だ(ろうか?)!海だ!水没だ?!馬鹿な、コレが私の最  
後と言うか!

女将さんマジドミナントで実力を良く見ておくと水没王子……最  
高に危険だよ、お前は ————— 309

1101111110010110010011001011  
110010111001 ————— 338

11100111100101111001011000011  
11000011010000111001 ————— 366

何コレ、ふざけたターゲットがナニカシテえっちいのはいけないと  
思います!<^へ ————— 396

ナターシャが変態に変態したり、ある日の簪の出来事とかのお話  
426 —————

4巻から5巻までの所、形容し難い  
恐ろしい事にピンポイントで5巻だけ持ってないと言う状況。あ、

これは4巻分ですよ、そんなお話 ————— 451

完全オリジナル幕間デッセ ぼうこくの たのしい かいしゃけんがく  
505

5巻でござる。主人公はゲスいな編

アメコミとか洋画とかゲームとかガチタンとかF&Cとかを推す  
お話【挿絵追加】  
536

ハイスピード学園ハーレムバトルラブコメの中一人だけヘルシ  
グなお話【挿絵追加】  
556

原作からの剥離開始編

Posttraumatic stress disorder  
心的外傷後ストレス障害  
590

占いに一喜一憂したり恋愛話に現を抜かすハートフルなお話  
611

愛？ 勇気？ 希望？ 理想だと?! 戯言だ！ なお話

姉妹の決意と君に捧げる為のお話

War of Verdict day  
なお話  
673

扱い辛いパーツとかって話だが、最新型がなお話【挿絵追加】  
694

キャノーラ・ブレイク・ファストだったか何だったかの準備のお話  
と裏のお話  
713

The Beginning of the End 終わりの始  
まり

しえいきんしえいきんぶれいくだんしんで青いイレギュラーが開  
眼するお話  
731

時には悪役になるのもドアが開かないのも仕方ないね、なお話

932	f o r f o u r t h a n s w e r 『4つめの答えの為に』	911
	S t a i n 『傷』	892
	R U S T I N G S T E E L 『錆び付いた鋼』	874
	最新型キャラクター及びマシン設定	853
	I N F I N I T E S T R A T O S 『限界無き成層圏』	
834	M A R C H E A U S U P P L I C E 『断頭台への行進』	805
	S I L E N T L I N E 『未到達領域』	788
	V E R D I C T D A Y 『評決の日』【挿絵追加】	770
	救いと絶望と世界の異常が足音鳴らしてやってくるお話	
		750

## キャラクター紹介【修正&挿絵追加】

オリジナル主人公、及びオリジナルキャラクター、半オリジナルキャラクター

オリジナル主人公

名：とうがさき籾ヶ崎 しんいちろう信一郎

性別：男

誕生日：4月7日

年齢：クラス対抗戦時16歳 精神年齢：前世89+16、しかし  
ややおっさん臭いとだけ考えていただければよい

身長：185cm 義足を外した場合87cm

体重：143キロ 義手義足を外した場合58キロ

外見

黒髪、やや茶色い黒眼、壮年のように彫りは深いが鼻は低く目は細い、所謂純日本人な顔。

また、年齢によって出来るものではない皺が多く、ともすれば30代後半から40代にも見える。

非常に筋骨隆々としていて機械ではない生身の身体には大小様々な傷がある。

顔は左目付近、眉の端に傷と左頬に傷あり。

三白眼であり非常に険しい表情をしているように見える。

非常に笑顔が怖い。

義手

左腕が義手であり左腕の根元から金属の接合部が繋がっている。  
また、胸部、背部、肋骨、首元、鎖骨まで金属のパーツが付いていて非常に痛々しい。

ビジュアルイメージはAM—HOGIRE。

義足

非常にゴツゴツとしていて注視せずとも機械である事が分かる、股関節よりそのまま接合部となっているので人には理解し得ないレベル

ルの稼働領域を誇る。

また、ブースターが付いておりそれにより飛んだり蹴り等の威力を底上げしたりできる。

立場

世界最大の軍需技術総合企業「カロード」の次期社長。

母が社長であり死にさえしなければ社長になる事を約束されている。

また社員にも慕われていて非常に固い結束力を持つ。

公式では世界で二番目の男性IS操縦者。

ただしそれは本人が持つ特殊な能力により後天的に付加された物である。

性能

義手

常識外れな出力であり純鉄球を容易く握り潰す事が可能、肩部にブースターが付いており実際に稼働させる事が可能、最低出力により熱風を出してモノを乾かす事や出力を上昇させ横へのステップ速度を上昇させる事も可能。

稼働領域が広く肘を逆側へ曲げる事も可能。

義足

蹴れば鉄柱を押し折り踏めばコンクリートを打ち砕く、ISの攻撃を避ける事が出来ればISを蹴り潰す事も可能。

稼働領域は股関節のみが広く、他は通常の人体と同様の稼働範囲しかない。

展開型ブレード、固定用パイルバンカー、収納ナイフを搭載しておりブレードは高速の極小微振動を発生させほぼ全ての物体を切り裂く、または振動速度を上昇させ赤熱させ熱で溶かし斬る。

パイルバンカーはそれ自体が小さいため固定用の用途が主だが威力自体はMBTの前面装甲を容易く貫く。

脚力も常軌を逸しており跳べば十数メートルを容易く越え走れば時速80キロの車を抜く。

性格



面倒臭がり、モノは後回しにし続け結局出来ないタイプ。

下品なネタが好きで親しい人間やそうでなくても真剣な空気であれば一切躊躇しない。

暑がりです涼しい服装を好む、ハーフパンツとタンクトップを私服で着ている事が多い。

家族の事を心の底から愛しており貶されたり傷付けられたりすると激怒する。

能力

物質の創造及び変化

出来る範囲は非常に広く無機物の創造変化、原理・理論の不明なオーパーツの作成、自らの体の変化にまで及ぶ。

ただし結果が複雑な物であればあるほど疲労が大きく、場合によっては気絶する。

専用機

「アーマードコア」

新規で「創造」したコア、機体ではなくこのコア自体が「アーマードコア」であり、膨大な量の装甲パーツ、武器を「展開」し、戦闘を行う。

あらゆる戦場、状況に対応するため多種多様使えるのかどうかも怪しいパーツが収納されている。

エネルギーと言う概念はなくAP（アーマーポイント）がISのエネルギーに当たる。

ただしエネルギージェネレーターも別個として収納されているためブーストをどれだけしようとしてエネルギーが尽きて動かなくなる事は無い。

APは全装甲の総合耐久値な為、破損したパーツを変更すればAPを回復させることが出来る。

絶対防御は存在しないためAPが無くなれば生身が直接ダメージを受ける、つまり最悪死ぬ。

身体スペック

一通りの軍事訓練は受けており、好んでロシア軍のシステムを習っ

ていた、それだけならば本当の軍人にも劣らない。

だがその道のプロ相手ならば勝ることもない。

それ以外ならば合気道であろうと力でごり押しする。違う、そうじゃない。

サブマシンガンであろうがライトマシンガンであろうがフルオートであるならリコイルを力で無理やり抑えれるため一般に比べかなりの命中精度を持つ、ただし精密射撃はお察し。

一番得意な武器はスコップ

笑うときは3種類の笑い方を使い分ける。

「マハハハハ」高笑い、調子に乗っている時や人を小ばかにする時など  
「んふーふ」特に意味も無く言う、悪巧みだったり普通の会話だったり  
「キヒヒヤハハハ」テンションが凄く高い時、それと同時に荒っぽい口調になる、極悪人にしか見えなくなる。この笑い方のみ素である。

所持資格等

普通自動二輪

兵器開発等における必要となるであろう免許各種

その他

前世では軍（自衛隊ではない）に入隊していた事もある、その際に戦争がおき前線に投入され敵兵の殺害もした為、敵の殺害に関しては割り切っている。

また前世ではなく「生前」と言う言葉を使うため現在の生は無意識的にゲームのように感じている。

専用のISスーツ：バトルスーツを所持しておりDead Space IIのアドヴァンスドスーツに酷似している、というか最早正にソレの左腕と両足部分を切り落としたようなイメージ。

ステイシスエナジーを表示する部位にはカラードエンブレムが映りクルクルと回っている。

体力表示部位はただ光るだけで特に何と言うわけではない。

オリジナルキャラクター

名：籐ヶ崎 麗羅とうがさき れいら

性別：女

誕生日：無設定

年齢：16歳☆(39)

身長：142cm

体重：秘密

外見

白銀の長い髪に幼い表情の少女。

アルトネリコのシュレリアそのまんま。

レディーススーツを仕事の関係上よく着ている。

立場

信一郎の母。

世界最大の軍需技術総合企業「カレード」の社長。

元は「天覇」と言う名であったが子供が「カレード」と言っていたため名やシステムを変えた。

性格

とてもおっとりとしていて常に優しい笑顔を浮かべる。

非常に包容力が高く、どんな人間も迎え入れる事が出来る。

苦しい思いをして産んだ我が子を何よりも大事にしている息子のためなら世界であろうが破壊する。

また家族愛も強く夫や「娘」も深く愛している。

身体スペック

非常に非力でお箸とお茶碗とペンが持てればそれでいいと豪語する。

車椅子も上手く押せない。

体力も無いため50メートル走るともう死にそうになる。

世界有数どころの話ではないほど頭が良くかの天災と並ぶ？  
所持資格

取れるもので体力の要らないものは片っ端から、運転免許は持っていない。  
その他

■生■であ■。

名：籐ヶ崎とうがさき……………

性別：男

誕生日：無設定

年齢：42歳

身長：181cm

体重：92キロ

外見

信一郎と殆ど同じ、ただ完全に生身で傷も無いし髪形も違う。  
年齢による皺が少々あり、並べてみると何となく分かる。

立場

カロードの全部署総合統括主任。

カロードミグラントランク2

信一郎の父。

性格

家族間ではひろし、キレると木原くん、基本的に主任（ACV）  
身体スベック

かなり頭が良い上にかなり腕っ節が強い、なぜデスクワークをして  
るのか疑問。

所持資格

たくさん。

その他

特になし。かなり設定が薄い。

名：Fredrika Jennefelt（フレドリカ・イエン

ネフェルト)

性別：女

誕生日：6月6日

年齢：32歳

身長：171cm

体重：56キロ

人種：スウェーデン人

外見

長い金髪を乱雑に後ろで束ね、濃い隈をし、眠そうな訳ではないが垂れ目のおっとりとした女性。

プロポーシヨンが素晴らしく大きな胸と引き締まった体、美しい臀部と完璧な体型をしている。

ただ服装が非常にだらしなくシャツの前を大きく開けたり偶にスカートを着いていなかったりと見た目に無頓着なのが分かる。

立場

アクアビットのリーダーであり、コジマ技術の第一人者。

性格

「変態！・ド変態！・der変態!!」

男でも女でも美しく頂ける。

ただ開発に対しては真剣で、真剣な表情や真剣な物言いで「変態装備」を作る。ただ非常に刺々しい物ではあるがそれを補って有り余るほど優秀である。

身体スペック

開発者である事から頭が良く思考の回転速度が凄まじく速い。戦闘能力は皆無だがベッドの上ではその限りではない、床上手な処女。

所持資格

考えてない

その他

夢は正気に戻れないほどグチャグチャに犯されること。

またDSでもありDMでもある。変な事をしては「返り討ち」に気絶させられ雑に搬送される。

残念美人。生粋のオナニスト。  
だが怖くてモノを挿れない。  
高頻度でアへ顔になる、壮絶に下品と大評判。

半オリジナルキャラクター

名：Frances Batty Curtis（フランシス・  
バツテイ・カーティス）

性別：女

誕生日：2月7日

年齢：15歳

身長：147cm

体重：40キロ

外見

金髪でフワフワとしたイメージ、体型は驚くほどジナイーダ、マナイーダ。

あと太眉で少し長くてスリットの無い袖の改造制服を着用している、が、見た目では殆ど分からない。

右腕にACの待機状態であるリストバンドをしている。左手の薬指には将来を誓い合った相手に貰った婚約指輪を付けている。

立場

IS学園1年4組で更識簪の友人、そしてカレード出身（所属とは少々違う）。

カレードと言う巨大な家族であり信一郎の義妹、また養父がミグラントランカー8位の研究者兼戦闘要員。

学園では信一郎の義肢の整備をしている。

性格

歳相応の明るさで感受性が高い、また冷静に努める事もあるが偶にボコを出す。たまに黒い。

身体スペック

性別、及び歳相応、父や周りが研究者揃いな為事機械に関してはと

ても強い、が、それでもカロードの開発者、研究者面々には叶わない。義肢の整備は出来るが修理までは出来ない。

戦闘行動は出来ない、与えられたACを使っても量産IS一機に劣る。

周囲の様々な国籍の研究者の影響により、日本語、英語、ドイツ語、ロシア語、イギリス英語、中国語、などその他数多くの言語が理解できる。

#### 所持資格

TOEIC980点オーバー、言語関連の資格等

その他

IS適正はB(―)。

ミグラントトップランカーのレイと恋仲である。

社を離れて生活するため安全のため信一郎作の特種AC(近IS型、信一郎のACと同サイズ)を支給されている、機体名は「レヴァンテイン」凄まじい瞬間火力を誇る二脚で空間圧縮を利用した空間爆破システムや凄まじい出力の光波を放てる最大レンジ十数メートルのレーザーブレード、射撃能力を持った大型デコイを周囲に配置する、空間圧縮を防御に利用して弾道を捻じ曲げるなど並みのISを凌駕する能力を持っているのだがパイロットが性能に追いついていない。ACの性能を見た無口に定評のあるレイが「ズルイ」と言った位には高性能。

ISだとそれなりに強い、簪がいなければクラス代表になってたぐらいには。

掛け声は「はいだらー」

名：IBIS (ICFFFSERRE)

性別：―― システムイメージは女性

製造日：12月24日

稼働年数：18年

全長：120メートル

重量：280t

外見

軍事人工衛星、巨大なレンズのようなレーザーキャノンを搭載している。

レーザーシステムのCIWSを搭載、スペースデブリを消滅させる。

立場

それ自体がカロードのサーバーを担っており防御能力は篠ノ之束を持つてもハッキングに数ヶ月は掛かる、また秒間5回防衛システムは更新され、実質突破は開発者である麗羅を除き不可能。

赤子の頃より信一郎の世話をしており数少ない信一郎が頭の上がない人物(?)である。

当時5歳の信一郎によりAIが進化し、感情を持つに至る。「知的な戦いを見せてやる」とか言わない。

性格

淡々として事務的な言動を行う。

しかし信一郎を溺愛しており最優先は信一郎である。

クーデレ。

スペック

戦闘能力は高く一撃でISを屠れる衛星砲を放つ事ができ、そうではなくともカロードに保管されている無人ACを何千機と同時に操作し、敵を蹂躪する。(アイアンマン3のジャービスが無人アイアンマンを大量に同時制御していたのをイメージしていただければよい、見た事が無いなら見てみることをオススメする)

ただ一機一機がISに匹敵するので戦闘ではなく読んで字の如く蹂躪である。

また対少数(20までは少数)として特殊なACも操作する。

思考能力は高い。形容できないくらい高い。

資格

無し

その他



無し

こっから本編、ただし原作介入はまだ  
太陽の光（みたいなの）を浴びてAMSから逆流して  
10万ドルポン☆と出すが如く生まれるお話【挿絵追  
加】

俺の名はエツイオ、エツイオ・アウデイトーレ……嘘です！全て嘘  
です！

吾輩は死人である、名前はまだ無い

どうやら俺は死んだ後（のち）このエクストリームド派手なお部屋  
に居るようなのです

どーんなお・部・屋♪

デビルメイクライ4のネロ使用時に戦うファーストダンテのお部  
屋、ダンテ使用時にアゴと戦うお部屋みたいな感じ

なんかでつかい石像があっってお部屋のと真ん中に小学生大好きな  
魔法陣的な魔法陣の上に立っています

見渡せば何かすっごい美人さんとかイケメンさんとか威厳あるじ  
いちゃんとかが沢山立ってらっしやる

正直何かの間違いだと思いたいのです、とりあえず正座

「よっこいしようち」

いつけね☆いつもの癖で変なこと言っちゃった☆テヘペロ

でも俺は自分を褒めてやりたい、たまに「よっこらせ〇クス」とか  
言いながら座る時があるのよ、わたくし

「ふむ、よっこらせッ〇スか、面白い事を考えているな」

やだ…このおじいさんあたしの考えている事を見抜いているわ…  
これって…あたしに惚れてるの…？

て言うかね、俺わざわざちっちゃい「ツ」を伏せたのにこのおじい  
さん「ク」を伏せたよ

これじゃあ照らし合わせれば余裕で分かるじゃん、セックスって分  
かるじゃん

「セックスって分かっちゃうじゃないですかー！やだー！」

「まあそんな事はどうでも良いのじゃ」

「良くないよお！このお話精々R15にするつもりなのにR18になっちゃうじゃない！いやよそんなの！」

「お主は中々波乱万丈な人生を送っていたのでな、それはそれで中々ワシ等も楽しませて貰った、そのお礼に二次の世界へ転生させてやろうと思うてな」

「え?! 銀河万丈さんな人生?! それはどんな人生?! サウザーでヌクモリテイな人生?!」

「お主はどこかネジが飛んどるのお」

「だって俺…わたくし…某…うん、某はいたって普通の人生だった筈ですよ?」

貧乏でも裕福でもない普通の家に生まれてそれなりに友達もいて兄弟仲も良好だったしそれなりの大学に…は行ってないや、馬鹿でゴメンねお母さん、でも大学も普通に出てそれなりの仕事に付いて俺には似合わないほどのいい妻を持って子供を持って老いて死んだよ  
うな人生

「どこが波乱万丈だというのです！」

「いやなに、車に轆かれるわバイクに撥ねられるわバイクでこけて大怪我するわでなかなか波乱万丈ではないか」

「うちの兄ちゃんじゃないですかー! やだー!」

「そんな兄を持った弟の生活も中々波乱万丈だったぞ?」

おじいさんがパチンと指を鳴らす、指パッチンですよ? 俺は上手に鳴らせない、指で上手く鳴るのはゴキゴキって音だけ

あら? あらら? 何かしらこの真っ白いお☆部☆屋 は

「ここはワシのプライベートルームじゃよ」

「驚きの白さ、家具も無ければパソコンも無い、娯楽品も何も無い部屋に何の価値があるというのだ!」

「お主の大学生の時の部屋もベッドしか無かったらうに」

「別に遊ぶ部屋があったんです! 兄ちゃんの部屋とか!」

「さて、お主の転生先だが、い…イン…イン何とかの世界じゃ」

「インデペンデンスデイちゃんの悪口は許さんぞ!」

「思い出した、いんふいにと……スト何とかじゃ!」

俺は正座のままから一気に立ち上がり右足を踏み込む、右手の甲をおじいさんへと素早く振る

パシイン!

「思い出してへんやん! インファイニット・ストラトス! おうけえい?! どうーゆーあんだーすたん?!」

「で、じゃ せっかくじゃから三つほどの特殊な能力を付けてやろうと思うての」

「やだ! このおじいさん関西人殺し!」

「本当に人の特技から何じゃ、ゲームに出てくる能力とかな」

「あ、じゃあ「物体を自由に創造、変化させる能力」下さい結果を想像すれば思った通りの物が出来る、あとはどうでもいいや」

俺の精一杯の我侷です、他はいらない、元気があれば何でも出来る、現金があっても何でも出来る

おじいさんは俺の望みを聞いたら呆れたような顔をした、やっぱり欲が深すぎたかね、無難に無病息災とでも言っとけば良かったかな

「何とまあ……一つだけとは、中々に欲が薄いとう」

「OH……おじいさん見た目ガリツガリやのに太っ腹やでえ……」

「さて、容姿に何か希望はあるかの?」

「見た目は今のまま、勿論生まれ直後にこんなんじゃないやなくて15の頃には髭が生えてた当事の俺で、あと漏斗胸は治しといて下さい、中学当事皆して俺の胸を殴ってきて「うえーい見ろよwww俺のパンチでこいつの胸凹んだぜwww」とか言ってきた奴を思わず保健室送りにしちやったんです」

「イケメンじゃなくて良いのか? 誰もが振り向く美貌も与えられるぞ?」

「この顔は、この身体は俺の両親から貰った大切な物ですさかい」

あ! そうだ! せっかくだからこの能力も欲しい!

「ほう、どんな能力かね?」「やろうと思った事を根気よく続けれる根性を下さい、切実に」

「貴公……」(T)





チャアされちやいましてNE

幸運にもダデイの会社がIS関係の企業だったのよね、その技術を応用してエクストリーム高性能な義手義足をダデイが作ってくれました、ダデイが一晩でやってくれました、嘘です

うん、まあ社長とかじゃなくてそれなりの地位にいる人なんだよね主任的な

愛してるんだ君たちを！ハハハハハッ

まあ何の因果か主任の立場凄く高いんですけどね

で、だ ダデイが社長に「IS技術を応用した義手義足なんて良いんじゃないですか？いいですよ？さあGOサインを出してください、ハリー、ハリー！ハリー！！ハリー！！」

なんて言ったらしくてその完成品のチェックを俺がしているという事です

だからスツゴイ強度あるしスツゴイよく動かしスツゴイレスポンス良いです

見た目も生身と見紛うような素晴らしい出来……は私個人が嫌だったのでゴリツゴリの金属材料が丸見えです、カツコイイ

見た目だけ言うならば腕はノブリス・オブリージュの肩に付いてるゴツゴツを小さくしたので足は某豆粒錬金術師の機械鎧みたいな感じ

腕自体がビックリするほど凶器だし、足も膝と踵に隠しブレードが内蔵されています、完全に俺の趣味です本当にありがとうございました

だがこの義手義足を使う上で一つだけではあるが凄まじく大きな問題があるのだ

それはIS技術を応用している為ISを操縦できる人間しか使えない、と言う事なのだ

つまり俺はISに乗れるという事、スミカ・ユートイライネンです元々は乗れなかったんですよ、でもホラあれじゃん？俺能力つてあるじゃん？

だから作り変えたのよ、俺を「ISに乗れるようになあれ☆」っ

てやったら義手義足使えた

ちなみにダディやその他の開発に関わった人達は俺がISに乗れるって言うの知らない

原作ではいつちーが男性唯一のIS操縦者だったんだけどナ、もしかしたら俺が世界初って事になっちゃうやも知れぬ

それは何としても回避せねばな…

— 4年後 —

俺が世界初のIS操縦者だったのをばれない様にしなきゃならぬと決意していたがいつちーがISに乗れるというのを世界が知る前に俺がISに乗れるというのをマミイが知っちゃいました

現在わたくし正座中でごさい

「ねえシン君、どうして正座しているの?」

「ち、違うんです母さん、ただ正座してみたかっただけなんです」

「シン君って自分が悪い事してるって自覚している時はいつつも正座してたよね」

「ほ、ホンマに……?」

「せやで、もしかして…自分がIS使えるって知っとなん?」

「(づ)……(づ)めんなしあ(;;:;)」

うん、マミイは別に怒ってないんだけど隠し事は駄目だっけって教わったのよ、だから正座なう

「別に怒ってへんよ、自分アレやる?アレでコレでこうなんやろ?」

「せやねん、それでこうなってああなってアレなったらこんなんやってん」

「ええよ、じゃあシン君の好きにしなさい」

「ありがとう!母さん!」

「勿論公表なんてしないわ、自分の息子をモルモットになんてさせるものですか」

マミイは俺に自分でISの開発するのを許可してくれたよ、ちなみに社長はマミイね

ISコア?いらねえよそんなもん!!俺はアーマードコアを作るんだ!!……能力で



おつといけない！まだ俺の自己紹介をしていなかったな  
俺の名は 籐ヶ崎 信一郎 とうがさき しんいちろう

惜しいなあ、塔ヶ崎だったらシュレリア様のアレだったのに

現在14歳の中学三年生、誕生日は4月の頭だ、かなりギリギリだ

NA

身長179センチの体重96キロ、ビックリするほどムツキムキ  
義手義足が無かったら身長80センチ体重55キロ やっぱり  
ムツキムキ

胸囲は脅威の121センチ、そこの女よりバストはあるぜ☆どう  
だ貧乳勢よ、羨ましかろうマハハ！

顔は18当時に40台に見えてたらしいから…老け面であること  
は確かだ、イケメンかどうかなど知らん

まあそれよりだ、俺は今からACを作らにやらぬのだ、ふひひ、ど  
んな機体を作ってしまったおうか、楽しみだ！

く く く く く く く く く く く く く く く く

おはようございます。システム お知らせモードを起動します

俺って前世ではあんまりテレビ見なかったんだよね、なぜって？

テレビ見る暇なんかないやん？

そんな暇あつたら働くやん？

もしくはアーマードコアやるやん？

アクアビットマンでカーパルス行くやん？

スミちゃんに墜とされるやん？

奴当たり気味に重量過多のランク1（笑）をとつつくやん？

んでまたカーパルス行くやん！

つまりアーマードコアは面白いと言うこと、スミカ・ユートイライ  
ネンです

まあそれより何ゆえテレビジョンの話題が出たのかと申します

と・・・

「見上げてくごらんくテレビのくニュースをく」

いっちーがテレビに出ている訳です、はい

そう、かのブリュンヒルデ（凄く言い辛い）の弟君である、そして IS の主人公である

でも正直俺ってそんなに知らないんだよな IS、女性のみが扱える事と無駄に見た目がエロイ事と…

あと主要人物しか知らん、うん、イベントなんて臨海学校までしか知らんしすつげえ臆気だし

まあんな事いいや、それよりもそろそろ俺も IS を使えろと言うのを公開するべきか NE

さてさて、ダデイやマミイに頼んで社内の人達を集めて貰いましょうか

わいわいがやがや、うむうむ、社内の皆様はちゃんと集まってくれたようだ、ちなみに事務担当や来客対応の職員たちはまともな方々

開発部の大多数の方々は俺から言わせて見ても気が狂ってるんじゃないかと思えない、良く言えばアクアビット、悪く言えばアクアビット、他には似た企業（AC）ならトールラスとか有澤とかアスピナ（会社じゃないけど）とか…キサラギとか、そんな感じ

勿論少数ではあるが GA とか BFF とか インテリオルとか ローゼンタールとか まともな所にいるべき人達もいる

勢力結集して俺が AC（コア単体の名称）を量産すればすれば IS 全部を相手取った国家解体戦争が出来るんじゃないやな 分かるか

まあするつもりは無いけど

『静かにねー…これから我が息子、シンの大発表があります！俺は何を言うのか通達されてないけどきつと素晴らしいことだと思ってる！お前らも耳かっ穿ってよおしく聞くように！』

ダデイ！もう俺は見た目だけは 20 後半オーバーしているのに赤ん坊の頃から変わらず愛し続けてくれるダデイじゃないか！なんか ACV に出てくるあの主任そっくりになっちゃったダデイじゃないか！

「おお！やはり素晴らしき貫禄だ！流石は社長と主任のご子息！」

「やだ…やっぱりすつごく渋い…／＼／」

「…きこの先生…この先生きのこれない…くふつ」

何かいきなり全く関係ない変な事を言い出した奴がいるが…：…たしかあそこらへんはキサラギエリアだったつけ、なら仕方ないな

それと声を上げたのは全員男だ、もう一度言うぞ「声を上げたのは全員男だ」いいか？理解したか？

「父さあん!!なんかゲイヴン混ぜってるんだけど!!バーテックスエリアから!!」

「バーテックスなら仕方ないさ、シン！それよりも早く早くう！パパ我慢できないゾ！」

ふふふ、分かっていたとしても、もう15年もダデイの息子をしていてもう15年も会社の人達と付き合っているんですもの

ちなみにACにちなんで大体何処の部署が何をしているのかによつて名前をつけている、元々俺が個人的に呼んでいたんだがいつの間にか会社に浸透、マミイの一存で会社の名前もカラードになっちゃった、カラードは違う気がするんだけどな…

「そだね、ゴホン、あーあーマイクテスマイクテス、本日は良きコジマ日和也」

うむ、マイクの調子も俺の声の調子も上場だ、さてさて、いざ戦場に赴かん

「やあ、首輪付き（カラード）の諸君、早速だが君達にとって大きな報告がある、それが君たち、そして会社にとってメリットになるかデメリットになるかは諸君次第だ

…：…もつたいぶるのは止めにして単刀直入に言おう、諸君も待つのは嫌いだろう

私はISを動かすことが出来る」

ざわざわと社員たちが騒ぎ始める、まともな社員は自らの耳を疑い、大部分を占める例の彼らは何故か狂喜乱舞している、アスピナ機関大喜び、腐り濁った目を爛々と輝かせている、怖い

ちなみに彼ら（彼女ら）の総人数はヤバイ位多い、一部署一部署がすでに一つの企業レベルの人数を抱えていてそれが何十と部署があ

るのだ、その様正に企業連である

原作には多分無かったであろうレベルの大企業だ、ISの本体自体は作っていないが日本にいるにも拘らずIS用兵器、一般兵器、武器の世界トップである、ド変態が集まったら世界を壊す事など造作も無い

「さてさて、そこで皆に聞きたい、勿論私の専用機はここで諸君に作って貰いたい、例え変態の巣窟だとしても皆大事な私の家族だ、皆を敬愛し、皆を尊敬している

そして皆が：失礼、大部分のド変態たちよ、諸君はたかが普通のISで満足できるか？

出来ないだろう、考えてみたまえ、ISなど紙と言うのもおこがましく思えるほどの装甲、防御力、ISなどナメクジが這うのと同じと言わんばかりの常軌を逸した速度、ISなど指で軽く弾いたBB弾だと言わんばかりのキチガイ染みた全てを焼き尽くす暴力を体現した火力、遠近中全てを網羅し、世界中全てのたかが凡夫なIS如き全てを相手取り勝利できる、そんな“史上最強の兵器”を：胸が躍らないか？身体が熱くならないか？開発者諸君よ、君達は何だ？凡夫なそこらに転がる開発者か？それとも…」

「篠ノ之束を越えうる私の尊敬する最高に狂った開発者諸君か？」

「いいねいいねえ！さっすが俺たちの愛息子!!なあそう思うだろ!!母さん?!」

「ええ、そうね、最高だわ、シン君ったらこんな事を言っちゃって：ほおら、変態達の目が輝いてるわ」

「さて、諸君：諸君の心は決まったようでは何よりだ、おや？ははは、まともだと思っていた諸君もか、いいねえ！最高の機体が出来そうだし！

では早速取り掛かって欲しい、なお、コアは既に私が手にしている、このコアにあった企画の物を作ってくれ、勿論私の事など考えなくていい、中身がグチャグチャ？大いに結構！私は化け物だ、好きにしてくれ！で、技術的に無理なことがある場合は私に言ってくれば創ろう、想像する結果で構わない、それご希望通りの物を創って見せよう

！  
そうだ：最後に最強の兵器を作るのだから「IS」なんて名は止めよう

新たな名は「アーマードコア」プロジェクトACだ！」

それからの行動は早かった、ダディとマミイが全世界に俺がISを使える事を報道、そして専用機はカラードが作成、全ての開発チームを動かして：といても自分たちから喜んで動いてくれているのだが、それから後に会社内で検査、そこらの研究所にたらい回しにされて堪るかかってんδει

適正はSだが諸事情によりCとして公表、だってねえ？Sなんて聞いた話じゃちっふーや他数名しかいないんでしょ？じゃあ俺がSになんてなったら変でしょう

：専用機貰ったもっぴーさんもSだったっけ？

今年から一年生としてIS学園に入学することになりました、さてと、我が社の宣伝をたっぷりするかね

まあそれから凄まじい速度で時間が流れるわけです、なんかクソデカイ参考書も渡されて「入学までに覚えろ」ですって！もうね、阿呆かと、馬鹿かと、まあ持続するど根性で終わらせましたけど

そんでなんとか入学直前にACが完成したわけです

最初は研究員たちが「駄目だ、ISコアって本当に空き要領がクソ、ファミコンかよコレ」なんて言ってたのです

まあ装甲パーツ全部でウン百個、下手すればウン千個、武器もウン百個、こつちも下手すればウン千個、んでその何種類かのパーツが複数個あるんだから仕方無いっちゃ仕方無いんだが

だからチート性能な能力で全部乗っけてまだ余力がある程度には増量しちゃいましたテヘペロ☆

詳しいスペックは学園で公表なっ☆

ちなみに I S コアじゃなくて俺が能力で創り出した A C コアだゾ  
！間違えちや駄目だぜ☆

こっから原作開始  
いっちーが勃起したチンコ（比喻表現）でちっふーが  
マジギレしてまだまだ腐るほどいて面倒だが先は長  
いお話

「君が織斑一夏か、噂は聞いているよ、IS学園へようこそ！それでも  
げてしまえ」

「え？ああ、どうもです…も、もげろって？」

「わかるんのか、この戯けが」

「な、なんで俺こんな初対面のおじさんに説教食らってるんだろう  
…」

いきなりですまぬが既にこの俺、シンちゃんこと籐ヶ崎信一郎はI  
S学園にいるのだ

今は最初のSHRも始まっていないのだがまるで勃起したチンコ  
の如くガッチガチになっていたクソみてえなイケメン織斑一夏を不  
憫に思い声を掛けた

しかし彼はどうやら俺の事をおっさんだと思っているようだ、失礼  
な

「ほう、おじさんか…失礼な奴だな織斑一夏、ガッチガチに勃起した  
チンコの癖に」

その言葉と共に付近の女子がザワザワとしだす、顔を真っ赤にして  
隣の女子とひそひそ会話、これはいただけませんなあ

「勃ってねえよお!!何なんですかアンタはあ!!」

「比喻表現だよ、緊張のし過ぎでまるで勃起したチンコの如くガッ  
チガチに固まってるからな」

「ここは殆ど女子なんですよ?!そんな下ネタは繰り出しちゃ駄目で  
しょう!」

ん、教室の扉がオープン☆して山田女史（人生一回やり直して最近  
意味を知った）がフィールドに召喚される

ふむ、実にビッグ ビツガー ビツゲストなπ乙である、お乳の大

きさは母性に比例すると言うのを聞いたことがあるがまあ嘘だろう

クソみてえなビッチにも胸がデカイのはいるしNE

「えっと、み、皆さんこんにちわこの1年1組担当の山田真耶です！」

「「「こんにちわー！」「」」

ちなみに声を出したのは俺一人だけ、俺の特技（能力ではない）の一つで男女どんな声真似だって可能なのだ、コレはその応用で「声」ではなく「音」を口から出しているのである

複数混ざった声といっても結局は音なので合成された結果の音だけを出すことで混声を一人でこなすことが出来るのである

馬鹿みたいに息切れするがやろうと思えば一人ヒュムノスを謳える、つまり男性レーヴァテイルである

「さつきからアルアルうるせえんだよ!!!なんだ?!中国人にでもなつたつもりか?!ああ?!それともくぎゆか!くぎゆなのか?!くぎゆううううううううう!!!」

「ひうつーご、ごめんなひゃい！」

「ああ、いえ、先生は悪くありませんよ、全てはその織斑一夏君が悪いのです、」

「俺かよ!!いきなり絶叫したかと思えば俺に責任を擦り付けて!!ホント何なんだよアンタは！」

「さて、とつとと自己紹介と行こうじゃありませんか、まずは相川清香さん、どうぞ」

「おい無視かよ!!」

「あ、相川清香です！ハンドボール部に…」

うむうむ、聞き分けのある子は好きだよおじさん、原作では最初緊張しすぎて全く話を聞いていなかったいちーが今は話を聞いている、さてさて、どんな事になるか楽しみだ

「次は…織斑一夏君お願い…できますか？」

「あ、ハイ、えっと…織斑一夏です、よろしくお願ひしま…」

ズツパアアアアン!!!（教室のドアが開いた音）

「！ 既にはじまっているか！」



おっと、見た目の良さの割りに今だミセスではなくミスな織斑千冬さんではないですか

「！そこかつ！」

スローイング出席簿か！だが無駄だ、その攻撃…

「俺には効かぬッ！ロイヤルガード！」

あの構えと共に飛んできた出席簿を左腕で弾く

「マハハハハ!!このノブリスオブリージュの左腕にたかが出席簿如きがダメージを与えるなど不可能だ!!根元から引き千切るぐらいで無いとダメージは与えられんぞ!!」

「貴様…！」

「そんな事(俺にダメージを与える)よりも弟君の自己紹介を聞いてあげては如何かね？」

「…織斑一夏、もう一度自己紹介をしろ」

「え…ち、千冬ね」

スパンツ！

「学校では織斑先生だ、馬鹿者(優しげな声)」

「はい、織斑一夏です。よろしくお願ひします！……以上！」

全員して同時にドリフのようなずっこけ方をする、中々ハイレベルではないか、俺も見習わねばならんかね

コッソ

「自己紹介も満足に出来んのか、お前は(優しげな声)」

「先生がいつちーにデレとるでえ……」

「黙っているキサマツ!!」

「なるほど…コレが世に聞く有史以来、世界が平等であつたことなど一度もない、か…世知辛い世の中だ」

遠い目をして呟くが誰も彼も知らん振り、籐ヶ崎は心に深い傷を負った、籐ヶ崎を倒した、7のEXPを手に入れた、てれれれてー  
れってー 織斑千冬のレベルは既に99になった

「ゴホン、諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十

五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

「AMSから…光が逆流する…!」

「「きゃあああああああああ!!!」「ぎゃああああああああああつ!!」

合いの手を入れたが原作どおりわいのわいのきやつきやうふふと騒がしいな、まあ原作と違ってまだまだ紹介は終わりそうに無い、俺の出番はまだかなーwktk

「次は先ほどから合いの手を入れたり人を小ばかにしているキサマだ」

「それは俺の事と認めてよろしいかつ!」

「ああ、そうだ、早くしろ」

「んふーふ、ようやく俺の出番か、遅かったな。言葉は不要か」

「必要だ、早く言え」

「ORCA旅団メルツエルだ、IS学園にようこそ、歓迎しよう、盛大にな!」

「嘘を言うなっ」

「スッパアン!!」

「二回叩かれた、これで（脳細胞が）二千万ほど死んだ」ニヤリ

「フツ!」スッパアン!

「四千万!」

「有澤重工、雷電だ…正面から行かせて貰おう、それしか能がない、全てを焼き尽くすだけだ」

「あ、有澤重工って…カロードのグレネードを作ってる企業?!それに確か雷電ってチームリーダー（通称有澤の社長）の有澤隆文さん?!」

「ツ!」パコオン!

「六千万!!」

「あ、違うんだ…」

先ほど驚きの声を上げた女の子…確か谷本さんだったか?は俺が有澤の社長じゃないと知って残念がる、ファンだったのだろうか、今度サインでもあげようかな

「ゴホン、皆も知っているとと思うが世界中でただ二人だけの男性IS操縦者の片割れだ、いると言う情報のみを流したため名前も顔も知らなかっただろう、俺が織斑一夏以外の男性IS操縦者

カラードの籐ヶ崎 信一郎だ、専用機は元々から兵器として開発した現状最強の兵器「アーマードコア」だ、これでも君らと同じ年だ、よろしく頼む

それと呼び方は基本的に何でもいいが出来れば「おとうさん」とか「パパ」とか「ダディ」とかで頼む、おいおい、そんな嫌そうな顔しなさんな」

スパアン！

「八千万!!」

「あ、やっぱり違うんだ」

「いや、籐ヶ崎の言ったとおりだ、カラードの次期社長で間違いない」

「なら何故叩いたんだ！ちっふー！」

ゴガツ！

「一億…!」

「籐ヶ崎が叩いて欲しそうな顔をしていたからだ…満足か?」

「コレで終いか、まだまだ腐るほど(脳細胞が)いるがなあ、面倒だが、先は長いぜちっふー。大勢待ってるんだからなあ…」

「腐ってしまえ」

オールドキングのセリフを言えた！僕満足!!

それにしてもちっふーつたらツンツンしてるなあ…まあいっちゃんにはデレデレだろうがな

「どうせいっちゃんにはデレデレなんだろうがなあ…」

「ナメてるな。よほど愉快的な死体になりたいと見える」

「オツケオツケー、とつとと次行こうぜー」

「初めてだ、これ程生徒をぶん殴りたいと思ったのは」

「ヒヤア、たまんねえ！真耶せんせー！早く次に進めてくれ！俺が死んじゃまうぜえ！」

その後定期的にちっふーが射出してくるチョークをことごとく左

腕で弾きながらSHRを終えた

なお、三回に一回は飛んできたチョークを的確にいつちーに弾いていたらちっふーがコレはいかんと思ったのか射出を止めた、俺の大勝利

いっつ休み時間だぜ、ちっふーが教室を出る前に聞かないとな

「教官！エレベーターは自由に使っていいのでしょうか！」

「お前は駄目だ」

「障害者に優しくねえ学校だぜ！」

バリアフリーのバの字もねえ！こいつは飛んだ学園だなオイ！

「あ、あのー籐ヶ崎…くん？」

「ん？何かね、谷本さん、そして何故「くん」で疑問系なんだね？」

「やっぱり同じ年には見えないかなー…って

ところで本当にカラードの…次期社長なの？」

「うん」

俺は関西と関東のハイブリッドで関西弁も標準語も余裕で喋れるのである！

「これでも若作りしてるんやで？ちよつと前なんて髭生えとったもん」

「どうして関西弁なの？」

「素や、んで何のようなん？有澤の社長のことか？」

「う、うん！」

「ファンなん？ええで、今度サイン手配しといたるわ」

「本当?!ありがとう！」

「ええよ。所で、俺ってどういう風に見える？客観的かつ説明的に頼むわ」

「えつと…」

パツと見て歳は30代に見えて顔には傷跡が付いている、髪の毛も目も共に黒色、髪の毛は基本的に後ろに流しているけど幾つか乱雑に前に垂れている

制服は右腕の肩の付け根から切り落とされていて筋肉質の右腕が見える、逆に左側はかなりブカブカ気味で手袋もしている…これで

どう?」

「トックス」

おやおや? いっちーが教室におらんな……そういえば箒つあんに連れられてどっか行ったんだったか

で、次何があるんだったか……良く覚えていないが適当にすればよろう

……さてよ? 考えてみよう、女子勢は一夏に話をしようと思ってる、何故か、それは希少価値の高い男だからである、ならばもう一人の男である俺は?……イケメンじゃないし大丈夫だろう

「ちよつと、よろしくて?」

「あ……その予想はしなかったわ……」

「聞いてますの?!」

「1割ほど、「ろ」だけ聞こえた」

「馬鹿にしています?!」

「少なくとも、俺より頭のいい人間を馬鹿には出来ませんしおすし」

「なにが「ですしおすし」です! 馬鹿にしていますわよね?!」

「へったくそな声真似だなあおい」

「……のっ!」

「で? 誰だ? アンタは」

「知らない?! このわたくしを?! にゅ……」

「入試主席、女子で唯一担当教官を倒しISの適正ランクA、オルコット家の当主だなんて知らんよ」

「……ええ、確信できましたわ、あなた私を馬鹿にしているんですわね……!」

「いえいえ、そんな滅相もない……」

「わざとですわよね? わざとと言ってみなさい?……殺してやりませんか……!」

いかんよ、女性が殺すなんて簡単に言っちゃあ、お里が知れますわよ

「んふーふ、もうすぐチャイムがなりますわよ、席に戻った方がよろ

しくなくって?」(せっしーの声真似)

「そんな年食った顔でわたくしの声真似なんてしないで戴けるかしら!?!」

「似てたろう? せっしーの真・似☆」

「き、気持ち悪い! 鳥肌が立ってしまいますわ!」

「いいねえ、女性の困った顔ってのは実にそそる、股ぐらがいきり立つな」

「へ、変態…!!」

「クローシエ様ボイスで p i z」

キーンコーンカーンコーン

「さあ速く席に着きたまえ、おっかない出席簿大魔神が光臨なされるぞ」

「くっ…! 覚えておきなさい!」

「他の白人女性に比べて慎ましやかなおっぱいを気にしているという事をかね?」

「なぜそれを?!」

男は複数人集まるとエロ話で盛り上がり始める、女性も然りだが普通異性とエロ話で盛り上がるなんて事はそう無い

しかし俺は初対面の女性ともエロ話で盛り上がれる自信がある、盛り上がるというかエロ話を聞いて顔を真っ赤にした女性を見て股間のスタビライザー(もしくはドミナント)を盛り上げれる自信がある  
しかし悲しきかな精神年齢は100歳を越えているのである、生涯現役ではあるがちよつとやそつとじゃ盛り上がりそうに無い、スタビライザーをアサルトアーマーでドミナントな役はいっちに丸投げしようではないか

一応言うが盛り上げようと思えば盛り上げれるぞ

さてさて、俺の監視をかくぐっていつの間にかやらいっちーが隣(俺の席はいっちーの隣である)に座っておる、箒つあんとドキ☆ドキ幼馴染とお話ミ☆は終えたようだな

「いっちーや」

「もしかして俺か…? えー…: 籐ヶ崎…: さん?」

「シンでいいさね、所でいっちはどんな女の子がタイプかね？」  
わいわいがやがやと煩かった教室が一瞬で沈黙する、かの爆撃神  
ルーデルの言葉にもあつたような沈黙だ

みんなの耳が我々二人の方を向いている、妙な連帯感があつて怖  
い、せつしーだけは全く聞いていないが

「んー……千冬姉みたいな人…かなあ？」

スパアアアアアン!!! (扉を開ける音)

「本当か?!一夏!! (凄く嬉しそう)」

「キヒヤハハツ!!残念だったなあ!ブリュンヒルデエ(言いづらい)  
!!!いっちーが言ったのは織斑先生「みたいだな」人であつてアンタじゃ  
ない!!!アンタは可能性が低いとかじゃねえ!!選択肢にすら入れねえ  
んだよおおおお!!!」

「貴ツ様アアアアアアアアッ!!!」

「あ、あの…先輩…?」

「あゝあゝ?!」

「ひやうう!ごめんらひやいい!!」

「煽つたのは俺であつて真耶先生じゃないでしょう?!関係無い人は  
巻き込むんじゃないよ!!」

「黙れ!!殺してやる…!殺してやるぞ…!!!」

「オイ一夏!今から起こるであろう惨劇を止めれるのはお前だけだ  
!!」

「む、無理だ!!千冬姉がこれ程マジギレしてるのなんて見たこと無  
いぞ俺!!」

「クツソがあ!!一夏あ!耳を貸せ!!俺は例えブリュンヒルデが暮桜  
を持ってきても負けない自信はある!だがここら一体が焦土と化す  
ぞ!!」

「ああもう!なんとでもなれえ!!」

「ごによごによごによ… コレを言え!今すぐ!!」

「どうしたあ?籐ヶ崎い…死ぬ準備は終えたか?だが心配するな、  
葬式の必要は無い、消滅させてやるからな…」

「ち、千冬姉っ!」

「どうした？一夏、お姉ちゃんは籐ヶ崎を消さなきゃならないんだ…」

「お、俺は千冬姉の事が大好きだぞ！」

ピタリ、静寂、皆が止まった、言葉も、歩みも、震えも、息も…動くのは心臓のみ

「本当か？」

「ああ！世界で一番好きだ…！」

「ふ、ふふふ、そうか、一夏はお姉ちゃんが大好きか、うふふふ（笑顔）」

「お：織斑先生…？」

「ん？どうした？籐ヶ崎（満面の笑み）」

「い、いえ…授業を始めなければならぬのでは？」

「そうだなっ、山田先生、お願いします」

「は、はいっ！」

このドキドキ感、堪らん、ビットマンでカーパルス占拠を本気で挑むのに似てる、クリア出来た例がない、つまりもう二度とゴメンだ真耶先生もようやく落ち着いてきた、涙目のまま授業をするとかなんか凄く居た堪れない気持ちになってくる、近い内にお詫びをしようタイミングは良く分かんがそろそろいつちーが全部からないとか言い出すだろう

「織斑くん、何かわからないところがありますか？」

わからないところがあつたら訊いてくださいね。なにせ私は先生ですから」

ぽよん、揺れる真耶先生の胸、凄くでかい、でも身体自体が凄く小さいから胸囲的言えば俺のほうが勝ってるっぽい、なんせバストサイズ121だからな

「ほとんど全部分かりません！」

その清々しいほど堂々とした馬鹿宣言は来るものがあるな、俺の高校時代に似てる、大学生になっても引き摺ってた厨二病を思い出した、うわあああああああ!!!

「え……。ぜ、全部、ですか……？」



え、えつと……織斑くん以外で、今の段階でわからないっていう人はどれくらいいますか？」

「Da!」

「と、東ヶ崎君！何が分からないのかなっ？」

「オイいつちー、何同志がいたみたいな顔をしてるんだ」

「真耶先生のバストサイズを教えてください！せめて二桁か三桁か教えてくださいー！」

「え?!えつと……ふ、二桁……です……」

「よっしやあ！勝ったあ!!俺121センチ！大勝利!!ふらやましいか貧乳勢よ!!マハハ！」

周りの少女たちは「ひゃ……121……」とか「勝てない、勝てるわけが無い……」とか呟いている、そんなにバストを大きくしたいなら2つだ、太るか鍛えるか、俺は鍛えた

「籾ヶ崎、授業の事で分からない事はないかと山田先生は聞いていたんだ、そして山田先生も律儀に答えなくてもいい

それと一夏、入学前の参考書はちゃんと読んだが？」

「古い電話帳と間違えて捨てましたっ！」

ほお、侮られたものだな、私と真耶先生も……てかアレだ、根性だよ根性、根性があれば覚え切れるんだよ、まあ生前の俺なら絶対無理だったけど、俺は動くのと勉強するの、そして面倒が嫌いなんだ

そして好きなことは食う事と遊ぶ事と寝る事、その割りにガタイが良いだけで済んだんだから遺伝って恐ろしいよな

それは置いといてちっふーがいつちーの元へと歩いていく、叩くのか?!叩いちやうのか?!

ちっふーがあー！画面端い！両手を広げてえ!!近付いてえ!!ちっふーがあ!!!……つつ近付いてえ!!!ちっふーがあ抱きしめたあああ!!!

「ふふ、仕方ない奴だな、一夏は。後で再発行するように言っておくからな、ゆっくりしっかり覚えていけば良いさ」

「ちっふ……織斑先生?!な、何を!!」

おおキヨドつとるキヨドつとる、きやいきやいと煩いぞ女子勢、だがコレはなかなか良いものだな、マハハ。そして……だ

「いっちーが出席簿でスツ叩かれると思った者は正直に手を挙げなさい！ハイ！」

皆さん正直だな、7割近く挙手しているぞ、いっちーお前もか、真耶先生貴女もか

うわあ、織斑先生のガチデレ怖いナリイ……

そうこうしている内にチャイムが鳴るのである、うちの大学は校歌の一部が流れてた、理由は高校と隣接していて同じチャイムだと紛らわしいからだと思う、だって大学は90分が1時間だもの

それより最近1.5リットルカルピスの味薄くなつてない？缶が一番濃いんだけど缶はなんか好きになれないんだよなあ……じゃあペットの350mlカルピスかなあ……

おや？せつしーが俺といっちーの間に立っていつちーの方を向いているな、それにしてもスカートの上からでも分かるハリのあつて小さな実に可愛いお尻だな、いや撫でないよ？いくら大企業の御曹司つつつても痴漢は駄目だろう、もみ消せるけど

「ちよつと、よろしくて？」

「へ？」

「訊いてますの？お返事は？」「Fouki rahy ear  
presia reen (ねえ、どうか聞いてください)」

「あ、ああ、訊いているけど……何か用か？」

スルーされた、悔しい！でも……(ビクンビクン)

「まあ！なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

「……」

なるほど、ここは原作と余り変わらんみたいだな、さて、盛大な茶々を入れて会話をぶつ壊してみようか

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを!？」「他の白人女性に比べて胸が慎ましやかなのがコンプレックスなこのわたくし、セシリ

ア・オルコットを?! (声質を一切のブレ無く模写した声で)「

ピタリとせつしーの動きが止まる、ちなみに丁度いつちーから俺の姿は見えない、ようするにすつげえ恥ずかしいコンプレックスを自分から赤裸々に大公開しちゃったように見えるわけだ

「あー…その、うん…心配ないと思うぜ? その…十分大きいからさ、そりや確かにもつとデカイのは居るけどさ、でもそれは例外と思つてさ」

キヒヤハハツ、いつちーが真面目にフオローしてるぜ、きつと頬を染めて気まずそうにしてるんだろうなあオイ!

ギギギギと身体を回転させてゆーつくりと俺の方を向く

「あなた……」

「なんだい お・ま・え・☆」

「さつきから人のことを馬鹿にして…あなたは…あなたは! 一体どういうつもりですの?!」

あなたの親の顔が見て見たいですわ!!!」

「俺からアポ取つとくからカロードに来ればいい、会わせてあげよ」

「あ、シン、俺カロード見てみたい」

「おおいぞ、社員一同歓迎しよう、盛大にな」

「無視しないで下さいなっ!!!」

「無視などしていかないじゃないか、なあいつちー」

「ん、そうだよなシン」

「あなた達はあっ!!!」

「落ち着きなさい、兵士たるもの常に冷静であれ、だよ」

「落ち着け?! 落ち着けですつて?! あなたがそれを言いますか!! 人を散々馬鹿にしたあなたが!!!」

「チャイム…:さーん、にー、いつちー」

「なんだ?」キーンコーンカーンコーン

お前じゃない座つてろ、俺はチャイムのカウントダウンをしていたんだ

「また後で来ますわ! 絶対に逃げない事! よくつて?!」



「おい、マジかよ、夢なら覚め」

「待つてください！納得がいきませんわ!!」

おお！最高にグッドなタイムリングで出て来たなせっしー！ぴった  
りセリフが途切れたぞ！

さて、どんな風に俺を貶すのか楽しみだ！ドMじゃねーから!!

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなん  
ていい恥さらしですわ！

わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間  
味わえとおっしゃるのですか!?!」

たかが一年ぐらい耐えてみてはどうかね、おつといっけね！俺はも  
う100年生きてる事になるけどせっしーはまだ15歳なんだよね  
！テヘペロ☆ちなみに俺の享年は89歳ね

さてさて、どういう風にからかつて見せようか

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、  
物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくし  
はこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカ  
スをする気は毛頭ございませんわ！」

「ウキーツー！ウキヤツキヤツキヤツ!!ホツホツホツホツホツキヤ  
キヤキヤツツ!!(すつげえ似てる、生前得意なネタだった)」

「すつげえ…俺こんなに上手く猿の鳴きまねできる人間始めて見た  
よ」

「人間ももとは猿だったのだよいっちー」

どやあつ…！キラキラキラっ！この輝き具合とドヤ顔なら俺は  
きつとドヤ顔ダブルソードも出来るだろう、フランベルジェを…片手  
で持つだど?!

「こっのっ!!それにこんな間抜けな男にクラス代表が務まるとは思  
えません!!」

「だろうな、俺もそう思う」

「自分で言っっちゃ世話ねえよ、シン」

「ふん！こんな男がカレードの次期社長なんて笑えますわ！こんな  
のが次期社長なんて認められる会社など大した事はありませんわ！

どうせとんでもないクズばかり…」

ゴッ!ガアンツ!!!

「ひっ!な、なんです…」

「黙れよ、セシリア・オルコット」

「し…シン?どうし…つ、机が…!」

「テメエ今なんつった?うちの社員をどう言っただ？」

「こ、このわたくしに対し…」

「今なんつったって聞いてんだよ、ああ?俺の聞き間違いで無けりやテメエはうちの社員をクズだつったように聞こえたんだがなあ?」

「待って、シン!落ち着け」

「黙ってる一夏、いいか?セシリア・オルコット、確かにうちの社員はどうしようもないド変態どもばかりだ、アクアビットは本体よりもでかいソルディオスオービットを4機も搭載しようなんて言っただ、アスピナは速度を得るために人の身体自体を量子変換すればいい、何て言っただ実際搭載しやがった、Vは過剰暴力とも言える馬鹿みたいな兵器を搭載しやがった、キサラギなんて生物兵器を搭載しようなんて目を輝かせてた、そんなどうしようもないド変態どもだ、でもなあ」

ゴリン

「机を…抉…つた…?」

「そんなド変態どもも俺が成長すれば皆して喜んでくれた、俺が誕生日の時は倉庫が満タンになるぐらいプレゼントを贈ってくれた、俺が大怪我した時は全勢力を上げて治療してくれた、俺のする事に皆一喜一憂してくれた

俺の大事な家族なんだよ、何物にも代えがたい俺の絆なんだよ、馬鹿みたいな人数の大家族なんだよ、皆一人一人大事なんだよ

それをテメエはクズだあ?よりもよって俺の家族をクズだあ?!何様だキサマはあ!!あゝあゝ?!

何の権利があつて俺の家族をクズだと言う!!!俺は自分が馬鹿にされるのは構わねえ!!!でもなあ!!家族が馬鹿にされる事だけは我慢

ならねえ…!!」

「シン、止めろ、止まれって!」

「放せよ一夏、大丈夫だ、殺しはしねえよ、ただ両腕両足押し折ってから生きている事を後悔させるだけだからよお、心配すんなよ」

「ひっ、こ、来ないで…!」

「ああ? いっつけねえ…手袋がボロボロになっちまったか、じゃあもういらねえや」

「ぎ、義手…?!」

「止めろ、籐ヶ崎、教師の目の前で何をしている?」

「止めろ? 止めろってのか? 俺に? なら止めて見せればどうです? 言っとくがタカが量産機程度で俺は止められませんよ? 勿論この学園内全ての I S を相手にしても俺を止める事なんて出来ない

無論暮桜でも…白騎士でも…ねえ?」

「なら決闘をしろ、I S 同士でだ、だから今は止まれ」

「…来ない…で!」

「…はいよ、分かりました、織斑先生…でも家族をクズ扱いされたら先生もブチギレるでしょう?」

「それはそうだが…少なくとも私は場所を弁える」

「運が良かったなあ、セシリア・オルコット、まだ人として生きれて…で、いつです?」

「…一週間後だ、二人とも一週間後の放課後第3アリーナで決闘をするぞ」

「りよーかい」





「何だ?!途中の「♂」て何だ?!」

「聞いた?!今の聞いた?!籐ヶ崎×織斑これは良いわ!凄くいい!」

「来た!今来たわ!天啓よ!ごによごによごによ…」

「がはっ…コレ…イイツ…!」

「いいぞ…冴えてきた…」

どうやらクラスの女性勢は見事に素晴らしいほどの御腐人方らしい、いっちーは何が何やらと首を傾げて考えている

おんやあ?箒つあんは何ゆえ顔を赤くしてらっしやるのかな?かな?

まあ俺には♂ホモ♂の気は無いから好き放題ネタに出来るんだがな、でももしいっちーにホモっ気があれば…

「あれ?俺の尻ピンチじゃね?」

「いきなりなんだよ」

「いっちーってゲイ?もしそうなら俺いっちーと距離置かないと…」

「ゲイじゃねえよ!休み時間の時に千冬姉みたいな人が良いって言っただろ!」

スパアアアアン!!

「本当か一夏!!(凄く嬉しそう)」

「いっちーがちっふーの事大好きで世界で一番愛していますって言うてましたあ!!!」

「籐ヶ崎!ジュースを奢ってやろう!!」

「9本でいい」

「ホント何なんですかあんた等は!!!」

俺も学ぶのだよ、いっちーが変な事を言わないように口を押さえつつちっふーと俺にとつていい方向へと誘導する

そう言えばさっきの恥ずかしいので思い出したがいっちーは完全除外されたまま俺とせっしーだけが決闘する事になってるんだよな

正直面倒だしせっしーフラグを立てるのはいっちーでなければいけない、ふと思っただが皆が幸せに終わる為には必然的にいっちーハレムじゃないと駄目じゃね?

まあんな事よりいっちょーを決闘に引きずり込まねば

「そう言えばいっちょー、授業中に飛んできた予言電波によるとだな  
…」

「マジで飛んできてたの?!」

「いっちょーには専用機が与えられるらしい」ヒソヒソ

「専用機い?」

「いつまで私の一夏に引っ付いているつもりだ籐ヶ崎、なぜその情報をお前が持っている? いつまで私の一夏に引っ付いているつもりだ」

「おっと失礼、んでその製作者だがいっちょーとティーチャーオリムラ、んで箒つぁんに強く関係のある人物だそうだ」

「…誰?」

「一夏は私のものだ、私だけのものだ! お前は何処まで知っている」

「何処までっていつちょーがちっふるのものだって所までしか知りませんがな、情報はカロードの電波ですぜ

んで何とか俺の決闘日には届きそうだとか何とか、てな訳でいっちょー決闘はお前がやれ」

「籐ヶ崎…確かに一夏には強くなって欲しいが試合をすると行ってしまった手前取り下げるなど出来んぞ」

「んー…じゃあ妥協点でいつちょーがまずせっしーと闘う、んで俺はその後せっしーと闘うって事で、これでいい?!せっしー!!」

「なっ、なんです?!」

「おっけーってさ」

「いや、言っただろシン」

「ならそうするか、ではそろそろ休み時間が終わる頃だ、用意しておけ」

「あれー?俺ってもしかして無視されてる?」

もしかしくなくても無視されてますわよ、いっちょー、では授業の準備を始めますかね

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

いつつ放課後、さてちっふーに寮の部屋割りを聞きますかねえ、俺はどうなってしまうんだろうか

もし女の子と一緒にになったら毎朝俺のヒュージキヤノンがエーレンベルク掃射砲を見られる事になるのか、いかんいかん落ち着け俺のグラインドブレード、左腕のパージにはまだ早いぞ

「さて、一夏、籐ヶ崎、お前たち二人の寮の部屋割りだが…」

「え？一週間は自宅通g」「待ってました！うえひひひwwww」

「…こちらの都合で今日から寮に入って貰う」

「で、でも俺荷物とか全然用意してないし」

「一夏の分は私が手配しておいてやった、着替えと携帯の充電器と

…まあそこらだろう」

「俺の分はどうなるのかな？ちっふー」

「…カロードから直接送られてきた、何やら変な物多数と共にな」

「ほうほう、それは楽しみだ！で、どんな部屋割りですかね?!」

「籐ヶ崎、お前には一人部屋を無理にでも用意した、一夏は…まあ大丈夫だろう、どうしても相部屋が苦しくなったらお姉ちゃんの所に来ても良いんだぞ」

「あ、俺一人部屋なんだ、うん、まあそうだよね…女の子とのドキ☆ドキ同棲生活な訳ないよな、俺はいつちーと違って健全な男子高校生だもんな、そんな間違い起こしそうな事はしないよな、普通」

「いいなあ…俺せめてシンとが良かったよ…男女で一室に突っ込むって…て待てよ、俺と違って健全な男子高校生ってどういう事だよ！」

「一夏なら大丈夫なはずだ、お姉ちゃんは信じているぞ」

「ふあいとつ☆んじや部屋の鍵くだしあ」

「ふん！」

「ほげえー!!!」

信じらんねえ!!この教師ったら生徒の顔面に鍵を力一杯投げつけやがった!!

うぎぎぎ、頭部損傷…修理費7500コーム也

俺に割り当てられた部屋へ向かう途中にブカブカした袖の服の少女が元気良く手を振ってきた、俺か？俺になのか？

「あ〜おとーさん」

な…なんだ、俺に娘はおらんぞ…このぼやぼやしたオーラを撒き散らす娘さんは一体…

「あのねあのね〜おとーさん〜私はね〜布仏本音つて言うんだ〜」

「お、おお…」

分かる…俺には分かるぞ…！このお嬢ちゃんに俺お得意のシモネタを繰り出してはいけない、その気配が分かるッ！

この娘（こ）は間違いなく無色透明なまでに純粹…ッ！！

故に一切の邪気も無くシモネタを吸収してしまう…！そしてそれをきつと気の向いた時に調べてしまう…ッ！

この娘はきつとそこから汚れてしまう…ッ、故にこの娘は純粹なままでいなければならぬッ！

「ふむ、あのね？本音ちゃん、俺が自己紹介のとき「おとうさん」って呼んで欲しいと言ったのはギャグなんだ、だから俺の事をおとうさんって呼ばなくても良いんだよ？」

「はあ〜い、じゃあね、じゃあね〜うーん…しんいちろーだから…」

何故だろうか、ブカブカの袖をフラフラと揺らして考え事をしているこの娘を見ていると息子や娘、孫を優しい気持ちで見たいの思いう出すな

「シンにー、でいいかな〜」

「シン兄…だと…?!」

子供や孫ではなく妹だったッ！驚愕の新事実!! ああ！別に嫌じゃないから！そんなしよぼんとした顔で俺を見ないでくれえええ!!

「ありがとう、本音ちゃん、これから3年間よろしくね？」

ほんの少しかがんで頭を撫でてみる、嬉しそうに目を細めてニコニコと笑う、正直に言おう

「何だこの可愛い生物、加護欲が溢れてくるんだが」

「よろしくね〜シンに〜」

俺は理解できたよ、この娘と真耶ていーちやーは癒し系のマスコツトキキャラクターなんだな

じゃあちつふーは何だ、はいそうですね、天下無双の修羅です、むしろ羅将です

ヒュンツ

「今何かが凄い勢いでとんでつたね〜」

「うん、そうだね、怖いねえ、チョークがまるで銃弾のように俺の髪の毛を掠って飛んで行ったねえ」

「あ〜私自分の部屋に行かないと〜じゃーねーシンに〜」

「うん、バイバイ」

さて、次は刀でも飛んできそうだな、とつと自分の部屋に逃亡するとしますかね

カアオ！

「大会使用禁止いいいいいい!!!」

離脱だ！離脱する！無理だぜこんなの！」

K A R A S A W A だと?! ちよ…待っ…危なっ…なにやってんだよあんだ！ アンタ教師だろうが！ 自重しろよ！自重！

「ここかつ！ここでもいいのか?! 1026ツ!!」

カアオ！カアオ！

「どおりやああああああっ!!!」

閉めるツ！部屋を確認！GAのダンボール確認！俺の部屋つ!!

死ぬかと思つた、ちつふーマジ容赦ねえ、そんなんだから彼氏も居ないのよきつと

ズドンツ!!

「ぎゃひいいいい!!! すんませんつしたああああ!!!」

ドタンボタン！ホ、ホウキ！マテツテ！

「…ほ?」

…箒つあん? あ、なーる一夏とは隣同士なのね、んでさっきのズドンは木刀が扉をぶち抜いた音か…

流石に不憫だし助けてやるかな、だがもげろいっちー

でもこの暑苦しい服は脱ごう、ハーフパンツとタンクトップになります

L1とR1を押しながらーコントローラーを振ってー…ページします

扉を半分ほど開けます、いっちーを確認、まだスタイリッシュに避け続けている、テーブルホッパーのスキルが是非とも欲しい

「聞こえるか…こちらへ逃げ込め…!」

「シ、シン?!助かった!!」

いっちーが俺の部屋に転がり込んで扉を閉める、扉に背を預けてズルズルと地面にへたり込む

「ありがとう、シン…おかげで死なずに…ッ!!」

「この姿を見る…策に溺れたものの末路だ…」

「その…身体…!腕と足が…」

「男がISを操るなど…元より無理だったのだ…」

「ISに…やられたつての…!?!」

んふーふ、いっちーが上手い事知らずに乗ってくれる、罪悪感?

ねえよ、んなもん

ダンボール (GA製) を指差してそちらをほんの少しだけ見る

「あの中だ…もはやお前に頼るしか…」

「シ…シン…」

凄く自然に膝を付いて倒れる、生前でも散々コレやったからかなり

上手いと自負している

「世話を掛けるな…」

「シイイイイイン!!!」

「畜生…!畜生!シン…」

チラリと片目を開けて倒れたままいっちーを見る、ダンボール (GA製) の前で拳を強く握ってダンボール (GA製) を射殺す様な目で  
見ている、シユール

「この中に…一体何が…!」

多分着替えとか生活用品です、あと十中八九変な物、害をなすかど

うかは分からないが間違い無く変な物は入っている

そんな恐る恐る開けんでも良いですよん、あ、いや、もしかしたらヤバイ物（会社の書類的な意味で）が入ってるかもしれない

ほおら、いっちーの持つてるその紙束、きつとうちの社の重要資料だよ

「何だコレは…？プロジェクトAC…？オーバードウエポンの使用限界…リミッター解除による破壊力…？」

「いかん！そいつには手を出すな!!」

割とマジでそいつには手を出すな！競技用どころか軍用でも余裕で引っ掛かるか新しい条約が設けられるレヴェルの兵器の資料が乗ってるんだぞ!!

「シ、シン?!生きてたのか!!」

「いや、いっちー、おかしいとは思わなかったのかね、どう考えてもこの義手義足は大分昔からある物だって分かるでしょ、馴染みすぎでしょ俺の体に」

「男がISを操るなど、なんて言ってたから…!」

「それもおかしいと思わなかったのかね、だったらいっちーもヤヴァイ可能性があるでしょうて」

「そーいやそーうだ」

「→こいつ最高にアホ」

「うぐぐぐぐぐ…!!」

最高にアホないっちーを可哀想な物を見る目で見ていっちーの持つてる資料をひったくる

ベッドに座って資料をペラペラ捲りつつ話を始める

「で、なんであんな命の危機に晒されていたのかね、同室の女の子の素っ裸でも拝んだか？」

「うぐ…」

「んで女の子が恥ずかしさの余り錯乱して何か長物を持っていっちーを殴ろうとする、いっちーは防衛のため何故か女の子の鞆に手を突っ込んで防御できる物を取り出すも一緒に下着を引きずり出したとか」

「うぐふう！」

「その結果部屋から飛び出して扉を突き破って攻撃を仕掛けてくるのを必死で避けてたとか」

「ごつぶあ!!」

「流石にそんな間抜けな理由な訳ないよなあ?!もしそうだったらいつちーのチンコもぎ取る」

「許して!俺の息子に罪は無いの!!この歳で男としての人生終えるとか嫌だああ!!」

「大丈夫、事故で両足と左腕を同時に失った俺の痛みより相当マシな筈だよ」につこり

「止めて!!そんな左手ワキワキしないで!!机を挟り取る握力で俺の息子掴んだら死んじやう!俺の子孫が消えちやう!!」

「マハハハハハハハハ!!」

「いやあああああ!!!助けて箒いいいいいい!!!」

先程まで命を狙われていたのに狙っていた本人に全力で助けを求めるといつちーである、シユール

義手義足の稼動音を0に設定してたけどこれ全開にしても良いんだよね、ガシヨンガシヨンってカツコイイし

ウイーンウイーンガシヨンガシヨン、ガチンガチン!

バタアン!!

「二夏?!大丈夫か!!」

「ほ、箒いいいい!!!」

「邪魔立てするか、それも良からう、掛かってくるが良い、この化け物を倒せるというのであればな…」

「…ッ!な、なんて…!」

「醜いか?マハハハハハ、女性から見ればそうかも知れんな、だが男からしてみればスツゴイカツコイイんだぞコレ」

「助けてえー箒い!殺される(男として)!殺されちまう(男として)!!」

服を着た箒つあんに縋り付いて助けを求めるいつちーと木刀を構えて俺と対峙する箒つあん、んで極めつけは極悪人面をして指先の



尖った義手をガチガチと動かしつつ悪人みたいな笑みを浮かべる俺  
どうみても俺が悪の大魔王で箒つあんがヒーロー、いつちーがヒロ  
インです本当にありがとうございました

何事かと俺の部屋を覗き見る女子多数、んで俺の顔を見て目を反ら  
す女子多数、一夏に向けられる生暖かい目線、プライスレス

じりじりと膠着状態に入る俺と箒つあん、両方とも既に必殺の間合  
いだ、だが双方とも後の先を取れる、つまり先に手を出したり隙を見  
せた方は死ぬ…!!

「あれ〜みんな集まってどーしたの〜?」

「だ、駄目よ! 布仏さん! 貴女は耐えられないわ!」

「うんしょ、うんしょ」

「ああ! ゆつたりしているとは思えない正確な体のねじ込み!!」

「あ〜シンにー、ここつてシンにーのお部屋だったんだね〜」

本音ちゃんが顔を出した瞬間に構えを解き表情を対孫用に変える

「やあ本音ちゃん、そうだよー、ここが俺の…」

「そこおつ!!」

無論箒つあ:面倒だし以後モツピー、が見逃す筈は無かった、見事  
な一閃、俺の頭を斜め上から振り下ろした剣筋が俺の頭を叩き割らん  
が如く直撃する、しかしそこで止まらずぶん殴った俺の頭を滑り左肩  
に木刀が直撃する、瞬間木刀が折れ剣先が飛び、半ば折れた木刀を  
モツピーが振り切った

俺は気を失わぬ(元々気絶値に対するキャパシティーが凄まじく大  
きい)ギリギリの衝撃を受け、しかし強過ぎるほどの衝撃を肩に受け  
倒れる、それも叩きつけられるように

傍から見ればモツピーが俺の頭を木刀が折れるほどの勢いでぶん  
殴って殺したように見える

俺は朦朧とする意識の中震える右手を本音ちゃんに伸ばし、そこで  
力が抜け右手が地面に落ちる

「シンにー! 酷い、酷いよしののん! どうしてこんなに酷い事する  
のー?!」

「え? え? 私の所為なのか? 私が悪いのか?!」

「うつわー、モツピー俺の頭木刀でぶん殴るとかマジ外道」

「う、う…うう、うわーん！だつて！だつてえ！いちかがあ！うえーん!!」

「まあ大丈夫なんですけどね、イツツマジック、なんとぶん殴られたように見せただけなのです、木刀が折れたのは俺の義手に当たったからー、ホレホレ女子勢は解散解散、織斑先生に狩られるぞー」

まあ直ぐに殴られた場所を作り直したただけなんですけどね、俺にしか出来ない芸当、てかホントに俺の義手スゲエな、傷一つ付いてねえ、パネエ

何だね女子勢、床を指差してパクパクと、何があるのかね？

「おっ?」

マハハハハ！こいつあヤベエ！床が俺の血で真っ赤だ！こいつあスゲエや!!

「トマトジュースです(につこり)、と言うよりね女子勢さんらよ、君らすつごい薄着だねえ…ここに思春期真っ只中の男が二人もいるのにNEE!」

おっ、あの子シャワー直後にペエンツとシャツだけだからπ乙が透けちよる

「特にチミ、本音ちゃんがいるから詳しくは言わんがもつと恥じらいを持ちなさい」

「えっ!?き、きやあああああ!」

「シンにーどーしたの〜?」

本音ちゃんを知る必要は今の所無いことだよ、本音ちゃんは純粋なまままでいてね

「本音ちゃんの着ぐるみはよく似合ってたて可愛いねって事だよ?」

「わあわあ、ありがと〜シンにー、嬉しいな〜えへへ」

やだこの子、すつごく純粋…恋愛対象にはなり得ないが世界中でトップクラスの可愛さだぜ

故に自然と手が頭に運ばれて撫で撫で開始するのはごく自然なことである

「うみゅ〜」

「んふーふ、さあ早く部屋に戻った方がいい、じゃあまた明日ね」  
「はぁーい、ホントに頭痛くない？大丈夫？」

最近の女性にはない優しさの塊やでえ…

もし「頭大丈夫？」なんて聞かれたら暫く立ち直れないよ

…事実つて時として嘘よりも心に響くのよ

「うん、ぜーんぜん大丈夫だよ」

「しののん！こんな事もうしちやダメだよ！」

着ぐるみ着てダボダボの袖が余った手をモツピーに突き付けてぶ  
んすこと怒る様は実に可愛い

いっちーだときつと殺人級にキモイ

「す…すまな…ごめんなさい…」

「構わーん!!オレオ許すつ!!」

「シンにーが良いなら私が言うことはないね、皆仲良くだよ」

そう言つて手を振りつつ扉を閉めて行つた本音ちゃんの優しさは  
菩薩様レヴェル、異論は認めん

所で俺の手足を見てもノーリアクションだったのだが…どう思っ  
ているのか非常に気になる、うむ、明日聞こう

「所でモツピーにいっちーよ、何時まで俺の部屋に居座るつもりか  
ね？お抹茶でもお出ししようか？」

「え？あ、ああ…頼む…つて待て、モツピーつて何だ!？」

「お抹茶は…流石に備え付けられて無いな…おつ、抹茶アイスで良  
い?」

「あ、うむ、構わない…つて話を聞けえ!!」

後ろでキヤイキヤイとモツピーが騒がしいが無視、流石に本音ちゃ  
んに怒られた後で手を出す事は無いだろう

もし出してきたら俺ビビる、本気で、倒置法

「そこでモツピーに追い縋るラツキースケベ去勢リーチ大魔神こと  
いっちーはアイス食うか？」

「い、いただきますう!？」

「そうだ！この際私のあだ名などどうでも良い！何故一夏が私に助  
けを求めたのか説明をして貰うぞ籐ヶ崎!!」

ほうほう、説明を所望するか、俺は全く構わんよ  
だがもがれかけたいちーはどうなるんだろうか  
チラリといっちーを見ると何やらこちらを向いて汗をダラダラ流  
しながら必死で顔を横に振っている

「なあいっちー…面白いことを教えてやろう」

「な、なんだ…?」

「今日も人の不幸で飯が美味しい!」

「やめろオ!」

「キー!」

無駄に美しく皿に盛れたアイスをモッピーといっちーの前に置く  
んふーふ、その信じられない物を見るような目を止めなさい、俺  
だつてコレぐらいできらあ!

「さて、まずは部屋の外からいっちーの悲鳴が聞こえてきた所から  
でいいかな」

「止めて下さい!シン、いや籐ヶ崎さん!」

「だが断るツ!この籐ヶ崎信一郎が最も好きな事のひとは、自分  
は鈍感じゃないと思ってるやつにNOと断ってやる事だ」

「マジかよ!?!」

「嘘だ、一番好きなのは今の所カルピスだ」

「籐ヶ崎、いいから説明を頼む」

「二つのセリフ鍵かっこがデカくなるが構わないか?」

「あ、ああ…」

「命辛々ある人物から逃げ切つて安心した瞬間にな、何かをぶち抜  
いたような音が隣の部屋からしたのです

そしたらいっちーが必死こいて何者かからの攻撃を避けているで  
はありませんか」

「うぐ…」

「俺はいっちーを助けるために部屋に引つ張り込んだ」

「以上だ!以上!それだけ!」

いっちーよ…君も男なら聞き分けたまえ

何かすつげえ見苦しいぞ…

「ま、待て！それでは一夏が私に助けを求める理由が分からない！」  
「んでいつちーにそうなった経緯を聞くと…てか誘導尋問すると、  
何とこのラツキースケベ去勢リーチ大魔神はルームメイトの裸を挿  
んでそのルームメイトの鞆を漁って下着を取り出したという!!」

「待てえ!!それじゃ俺タダのド変態じゃねえか!!」

「事実だろう一夏!」

「で、俺はそんな事をしてしまう原因を消そうと思って去勢手術を  
しようとしたわけだ」

「嘘言うなよ!あれはどう考えても俺の息子をもぎ取るつもりだつ  
ただろ!!」

「む、息子!?一夏にはもう子供がいたのか!」

「ちやうんやで、モツピー、息子のモトやでいつちーはわざわざソフ  
トに言ってるんやで」

「え?え?何だ…それは?」

「箒は知らなくていいよ…」

「チンコの事だよ、言わせんな恥ずかしい」

モツピーが「ちん……ツ!」と言って顔を真っ赤にしながら下を向  
いてあうあう言い出した、余裕でセーフです、運営から注意来てない  
し

もしダメだったらペニス(生物学的に)って変えればいいや、医学  
書にR指定はないからな!マハハハ!

「シイイイイン!!お前に恥じらいはないのかああ!!」

「そんなもの女に求める、言つとくが男の猥談より女の猥談の方が  
生々しくてヤバいからな、俺でも引くレベル」  
あれはマジでヤバい、生前いきなり「男の××××××なのマジ?私××××××  
××××××」アレを聞いて俺は感じたんだ、俺女には勝てねえや××××××  
それと本音ちゃんには勝てない、俺もし試合でも本音ちゃんと戦  
えって言われたら棄権する

「うそ……だろ…?」

「マジマジ、本音ちゃんには勝てないわ、俺にとって孫みたいなも  
ん、もし本音ちゃんを汚そうとする輩がいたら物理的に九割殺して社

会的に殺す、んで残りの一割をジワジワ殺す」

「何の話してんの!？」

「ち…ちん…:…いちかと…うふふ」

何か最終的に別世界にトリップしてるモツピー、もうお前ら部屋に帰ってちゅっちゅしとけよめんどくせえ

「そのトリップしてるモツピー、正気に戻りたまえ」

「はっ!? 私と一夏の子供たちは!？」

「何言ってるの箒!？」

ポイントは子供「たち」と言ったところ、妄想内では実にお盛んである

俺は俺で荷物の整理と社の書類を見てデータを纏めたりしなければならんのだ

「お二人さん、お茶漬け食うか？」

「お茶漬け?」

「京都ではぶぶ漬けとも言う」

「帰れって事かよ…」

「いいかね、俺は何だかんだ言ってもカラードの次期社長で既に社長補佐的な立場で仕事をしているんだ、言つとくがもう俺が設計開発したのも世に出てるからな」

「そう言えば…」

「籐ヶ崎はカラードの次期社長だったか…」

実に失礼な奴らである

「あといつちーが持ってたこの紙束、コレうちの重要資料でもしいつちーが他国か他企業の人間だったら…アスピナ逝きだったところだぜ、正直場合によってはその場で殺すレベル」

「ま…マジかよ…」

「それと仕事が出来ん、とつとと部屋に戻りなさい、んで大人しくらぶらぶちゅっちゅしときなさい」

「う、うむ!と…籐ヶ崎に言われてしまったんじゃ仕方ないな!一

夏!ら、ら…らぶらぶら…ちゅっ…」

「何か箒が壊れたんだけど!?!どうするんだよ!」

「ご覧ください、コレがコジマ汚染…」

モツピーがさあ行くぞ今行くぞといっちーを引っ張ろうとする、  
いっちーは必死で抵抗している

足掻くな、受け入れろ

「あ、ちゃんと避妊はしろよー」

「しねーよ!!」

「しないのか…コレが若者の性の乱れである」

「ちげえよ!!」

「い、一夏がしたいと言うから仕方なくであつてだな…」

バタム、ドアが閉まる音だ、てかこの部屋の扉災難だな、まず俺が  
勢い良く飛び込んで、次にいっちーが力一杯閉めて、モツピーがぶち  
破らんが如く開ける

「ホントご苦労さん」

「いえいえ、隣に比べればまだマシですよ（女性の声真似）」

さもしい一人芝居である

それとモツピーもきつと部屋に戻れば冷静になって逆に慌てて心  
にも無い事を言うんだろうな…

「ご愁傷様です☆」

俺はそうは思わん、Z E ☆ N ☆ R Aこそが人間の可能性なのかもしれないしタンクとパイルは男の浪漫なお話

さあ現在は前回から飛んで飛んで飛んで具体的に一週間ほど飛んで放課後

そう！今日は待ちに待ったせつしーとの決闘の日である！このドキドキは生前初めてデートを経験して集合場所に2時間も速く着いたときのドキドキに似ている

なお、カフェで時間を潰すなどとクールな真似は出来なくて本屋で立ち読みをして時間を潰していた

デート前には30分ほど集合場所に居ておくのは男の義務だよな、にも拘らず今現在せつしーと戦っているであろういつちーはアホみたいに遅れて来やがった

まあ戦闘に関わる事の干渉はしていないから双方とも俺の思惑通りやってくれているはず

あ、それと本音ちゃんに俺の腕と足を見てどうだったと聞いたら

「シンにーはシンにーだよくえへへ〜」

と言っていた、俺が俺である事に何の意味があるのかは分からなかったが本音ちゃんはいいい子だというのが分かった

あと案の定モツピーは部屋に戻った瞬間賢者モード（冷静）になって乳練り合うことなく幼馴染としての会話をして就寝したようだ

いつちーはやはり鈍感だったようでモツピーが変になったのは全て俺の所為だと片付けたらしい

「で、では籐ヶ崎君！そ、そろそろISスーツに着替えましょうか！」

真耶先生：ただ俺に話しかけるだけでビクビクされるのは少々悲しいのだが

ちなみに俺のACのコンセプトは「常に最善の状態で戦えるように」なので一々ISスーツに着替える必要など無い、そもそも基礎段



階からしてISとは違うんだからねえ？

「でもまあ仕方ないかね、一応IS学園なんだし…」

「わ、わ、わ！こ、こんな所で着替えちゃ駄目ですよ！私も見てるんですから！」

「むしろもつと見ていいのよ、てか中にスーツ着込んでますし」

「あ、ああ！そうだったんですか…つてそれでも駄目な気がしますようー！」

「もーまんだーい、ホラ見て…俺の腹筋…」

「凄く割れてる…じゃなくてえ！もう！」

制服の前を空けてシャツのボタンを外す、そしてコレでもかと初心な真耶先生に正にウエポんなボデーを見せ付ける

真耶先生つたら両手で顔を押さえてこつちを見ないようにしてるんですもの、定石だと指の間からチラチラ見るのだろうが真耶先生は手のひらで目を覆って見ないようにしている

そろそろからかうのは止めようかしら、でも面白いしなあ

いいか？俺は面倒が嫌いなんだ、着替えるのも面倒臭い、てな訳で量子変換を使って生身用バトルスーツを着用する、攻撃力は無く防衛力だけ馬鹿みたいに底上げしたスーツだ、ちなみに素材が硬いだけなので見た目は体全体を覆うISスーツに近い、ただし左腕と両足は覆っていないが

スタビライザーがオーバードウエポンを見られると恥ずかしいので股間部は装甲になっている

「オオオオワツタア！！」

「ひゃ、ひゃい?!」

「着替え終わりましたようい」

「本当ですか?!嘘じゃありませんね！絶対に嘘じゃありませんよね?!」

「フリか、ならばZE☆N☆RAになるしかあるまい…」

「止めてくださいい!!」

ひーんと顔を真っ赤にして恥ずかしがる真耶たん、本音ちゃんはそのまま癒しを与えてくれるが真耶先生は恥ずかしがらせてこそ働

値がある

ちなみにフリじや無いのは解り切っているので勿論ぬぎぬぎはしてない

口ではぬーぎぬーぎとか言いつつ真耶先生の周りをクルクル回っている、面白い素材と聞いている、期待させて貰うぞ

「…何をしている？ 籐ヶ崎…」

「お、織斑せんせええい!! 籐ヶ崎君はちゃんと服を着てますか?!」

「真耶先生、シユレーディングの猫をご存知ですか、貴女の目の前では二つの可能性があるのです…ちゃんとISスーツを着て立っている可能性、肉体を見せ付けるZE☆N☆RAで勃っている可能性の二つ」

「そんな可能性嫌ですううう!!!」

「山田先生、大丈夫です、この阿呆はちゃんと服を着用していますよ」

「ネタバレはんたーい! ぶーぶー!」

「貴様を黙らせる方法は無いかと日々模索するのが最近の日課だ」とんでもねえ日課だなあオイ! ん? 待てよ…もしかしてちっふーは最近ずつと俺の事を考えているって事か…?」

「夜も寝られなくなるぐらい俺の事を考えてk」「昨夜思いついたんだが…」

「喉を潰せば喋らなくなるよなあ?」

「じよ、冗談じゃ……」

「フンツ!!」

「オ、ゲエエエ!!!」

「と、籐ヶ崎君?! 織斑先生! 駄目ですよ?! 見えませんが…」

素晴らしい踏み込みと共にぶち込まれた喉輪が見事に俺の喉を潰してくれた、まあ一瞬で治せるんですけどね

それと真耶先生はそろそろ目を開けたほうがいいと思う、と言うわけでその旨を伝えなければ

「死ぬかと思った、真耶先生、本当に大丈夫ですから目を開けて下さいあ」

「なっ……！確実に喉を潰したはずだ!!」

そんな真剣な顔をして人の体を破壊したとか宣言しないで下さいな、でも驚いたお顔もス☆テ☆キ

真耶先生は真耶先生で恐る恐ると言った具合に目を開けてるし、いやもう一気に見ちやっつて下さいな

「あ……義手義足って……本当だったんですね……」

「だろう？（CV古王）カツコイイと思いませんか？」

「ご、ごめんなさい……私には分かりません……」

「籐ヶ崎、お前のスーツは完全にオーダーメイドか、それとも流用か」

「アルドラが俺の為に開発してくれたスーツです、体は耐えられませんがスーツ単体であるならバレットライフルも防げますよ」

「ふむ……一夏のも……カロードに依頼して……」

「やめた方がいいと思いますが、カロードでいっちーをやたら気にしてるのはアクアビット・トールラス・キサラギ・アスピナの4つですよ」

「……今一良く分からないが」

「アクアビット、搭乗者、使用者の事を一切考えない猛毒による汚染などなんのその・トールラス、アクアビットの親部署でこれまた搭乗者を考えない、下手すりゃ廃人、下手しなきゃ死人・キサラギ、生物兵器を開発したり人と生体兵器を融合させようと画策している・アスピナ、理論が全て、理論上上手く行くならその他なんてどうでもいい、人の構造上や形状の問題があるなら人を量子変換すればいい ついでに全部署がいっちーを実験体として使いたがっています」

「よ、選り取り見どりですねっ！織斑先生！」

「いや……いい」

ちっふーはいっちーがナニカサレル想像をしたようだ、ところでちっふーがここに居るって事はいっちーはもう負けたのだろうか

「いっちーはきつとせっしーに負けたんでしようね！エネルギー切れとかそのあたりで！」

「……良く分かったな、籐ヶ崎」

「初心者のパーパーはEN運用効率とか良く知らなさそうですしねー、アクアビットマンなんか使わせたら物の数十秒で負けそうだしマハハハハ！初心者はやっぱインテリオルだよな!!」

調子乗ってGAベースで1.15やってたらホワイトグリントで詰んだ、空中機動遅い、弾速遅い、ホワグリ速い、ドヒヤアドヒヤアドヒヤア

話が…違うっすよ…!1.15は…特別だつて…!死にたくない…!

粗製とはこの事か…

「…つまり次は籐ヶ崎の番だ、相手は代表候補生だ、盛大に負けて来い」

「そいつあ無理な話だねえ織斑先生、基礎機体スペックが違いすぎる!」

恐らくピットに向かっているであろうちっふるの後を付いていてます

何で戦おうか今考えてる真つ最中なんだよねー…既存のプリセットアセンブルにしようかオリジナルアセンブルにしようか迷ってるんだ

「真耶先生は既存の物とオリジナルの物どちらが良い?」

「わ、私ですか?えーと…オリジナル…ですかね?」

「おっけおっけー、とつとと組むぜー」

「組む?」

基礎はVから…TE特化かAP特化か…TE特化にしよう、んでタンクだな

脚部はULG—93/A

コアはUCR—25

ヘッドはHD—21 SEAL EYE

腕部は…迷うな…TEは欲しいけど安定も欲しい、どうせ腕部のTE誤差なんて100あるかないかだし安定性を取るか UAM—

23 ANIMA S

FCSは…速度と距離かなFCS—07/Lr UZUME 距

離500

リコンはURD-36/EA一択 追従型

両手にCALEBASE AC109 オトキャ

両ハンガーにKO-5K4/ZAPYATOI ちなみにハン  
ガー武器はハンガーのまま撃てるよ、ACfaの背武器みたいに、そ  
れも手と同時に、マジチート、はどうゆうーらくみーなう 350  
0ガト

肩は：CIWS-10 HORAだな、絶望しろせっしー CI  
WS

こんなもんかね、名称設定「動かぬ産廃」

まあ動かれたらFCS変えればいいや、適当でいいんだよ適当で

装甲さえ堅めときや後は問題ねえって兄貴が言ってたぜ、ウハハ！

「着いたぞ、ISを装着してカタパルトに乗れ、籐ヶ崎」

「お、もう着いたのか…まあ丁度いいかな」

どうやら既にピットへ到着していたらしい、何だこのカタパルトは  
：使用者の安全を考慮してないじゃないか、間違いなくトーラス産：  
違った、何処産だよこれ

タンクを装着するから少し広い空間が欲しい、まあピットで十分足  
りるんだが

「ちよいと離れてて下しあ、危ないんで」

「は、はいっ！」

これだけあればよかろう、んふーふ、さあ二人とも俺のチョーカツ  
コイイ雄姿を見るが良いわ

「チェンジ！」走り出す

「アーマード…」ジャンプ空中前転で頭が先に地面につく様に調整

「コア!!」左手地面を思いっきり殴りつけその反動で更に跳ぶ

「動かぬ産廃ツ!!」空中で回転しつつ

体を凄まじい光が包む、逆流するレベル

タンクの履帯が地面に接触して火花を散らしながら着地、ゆっくり  
と顔を上げて決め

「す、凄いです…！戦車型のISなんて始めてみました！」

「…もつと静かに出来んのか」

「出来ますよ、実際機体名を言うだけで装着は出来ます」

「…カタパルトに乗れ」

しゅしゅ仕方ないとカタパルトへ移動する、キュラキュラキュラ…  
段差に引つ掛かった

少しだけ飛ばう、ボワア…ガゴン!

「オルコット、そちら側は準備できたか?」

『はい、織斑先生、こちら準備OKですわ』

ちっふーが耳に当てたヘッドセットのな何かで向こう側のピット  
と通信する、おお、きこえるきこえる

「では出る」

『了解しました、セシリア・オルコット ブルーティアーズ、出ます  
わ!!』

出たのか、分からん、見えん、リコン撒いてやろうか…お、大歓声  
だ、出たんだな

「…お前も行け!」

カタパルト射出、3…2…1…!

「オオウケエエイ……」

射出開始!!

視界が明るくなる、アリーナ内に入ったようだ、およそ地面まで1  
0メートル

「レッツパアアアアライイイイイイイイ!!!」

地面を抉りつつ履帯を回して着地、すぐさま逆回転でブレーキ、前  
進みながら逆回転を駆けたから砂塵粉塵が周囲に舞う、ついでにC I  
WS 起動

「ウエルカム、トウ、ファイトハウス!」

「…来ましたわね…そんな見る限り鈍重なISなどわたくしの敵で  
はなくなつてよ

それとも…タンクなんて新たな試みを見て貰いたかっただけか  
しら?」

それと…今なら謝れば…」

「ハッ、偉そうにしやがって、マジで強いのかよ？今日で後進（AC）に道を譲って貰うぜ、老害（IS）があ！」

「ツ……ええ分かりましたわ、そう言うおつもりなら構いません、踊れなんて酷な事は言いませんわ、蹂躪して差し上げます……わたくしのブルーティアーズで!!」

ビ———ツ!!

「さあ行きますわよ」

「コレがカラードの『次期社長魂』だあああああつ!!!」

両ハンガーのガトリングを前方に向け両手のオートギャンオンを構えてダブルトリガーどころかマルチトリガー

キチガイ火力の銃弾がせつしーの周囲20Mを埋め尽くすほど大量にバラ撒かれる

「な?!つくう!!」

「キヒヒヤハハハハハアツ!!!逃げろ逃げろオ!!無様にケツ振って泣き叫んで逃げなあああ!!!」

お、ビットを二機落とした、せつしーったらスツゲエ真剣に逃げて、見せてみな、お前の力をさ……

「どうしたあ!蹂躪してくれるんじゃねえのか?!俺は寂しくて死んじやいそうだよお!!」

「このっ!後ろに回ればこちらの物ですわ!!」

ドヒヤアドヒヤア、せつしーったら必死で大回りで後ろに回ろうとしてるね、でも正直前方移動しながらの旋回でも余裕で補足できる程の大回りです、そんなんじゃバターになっちゃうだけだね

「キヒヤハハハハッ!大回りすぎるだろお!もつとインサイドにまわらねえと!」

「簡単に言ってくれますわね!近付けば避けなくなるじゃないですか!」

「ギヤハハッ!そうだっけえ?!」

止まらなきやしつかりと撃てないって割と致命傷だよね、せつしーポツコにした後教えて上げるか……練習もして貰わないと

「ホントどうするつもりだよお!これじゃあただせつしーがアリー

ナを飛び回るだけの面白くねえ試合になっちまうぞ!!」

「ん…のお!!」

せっしーが急に斜め前へと急加速する、たしかにコレでは前進しながらの旋回では追いつけないなあ

「やっつるうー!」

「後ろは取りましたわ!落ちなさい!」

機体にダメージを受けたあ!ぐわーこいつはすごいだめーじだー、ぶっこわれっちまうー

「ぐああ!くっそ…があ!」

「常に後ろを取り続けてあげますわ!!」

「なあんちやって!」

前進停止、旋回、勿論トリガーはトリガーハッピーよろしく握りっぱ

せっしーがすっげえポカンとしてる、いいねその顔、いただきだ

「はーい、ドドドドドツ」

「きやあつ!!」

ゲームと違って銃身が赤くなってきたから一旦射撃停止、これちよつと不便だよね、連射系武器は今度社に話をして冷却装置を組み込んで貰う事にしよう

「冷却タイム、ちよつと話しでもするかい?」

「遠慮させて頂きますわ!」

せっしーがスターライトを俺に向け放つ、タンクの機動力を舐めるなよ!タンクの機動力で避けれるわけ無いじゃないか!ヘツシヨツ!

「すまんがね、俺には殆ど効かないぞ、それ」

「ふん!大口を叩きますわね!」

「いや、本当に申し訳ないがアレだけ連射されてもまだ3割も減つてないんだわコレが、はいステータス開示ー」

視界内のウィンドウを操作して最大APと残りAPを表示する、最大APは5万以上もあるがね

「残り…4万以上…ですって?!」



「な？悪いけど多分全弾俺に命中させてもそつちの方が先にエネルギー尽きると思うんだよなあ…これが」

「い…一体何をどうしたら1万を超えるエネルギーになるというのです！」

「簡単な話さね、俺の産廃にはシールドエネルギーが搭載されてないからその分それを遥かに超えるAPを搭載するしかなかった、それだけ」

「シールドエネルギーが無いならば既にもっと大量のダメージを受けていないと…！」

「それはただ単に相性の問題、レーザーの攻撃力が俺のレーザー耐性を越えていないだけさね」

「そ…んな！そんな馬鹿なことあるはずが…!!」

せつしーもつと落ち着けよベイビー、可愛い顔が台無しだぜ☆

余りにもかわいそうだから大ヒント、つつつてもACVじゃ基本だけどねー

「せつしーのレーザーライフル、攻撃力数値はいくら？俺の耐性を越えるには少なくとも5061を越えていないとカスみたいなダメージしか与えられないぜ？」

「…ッ！」

「大ヒント、爆発系、及び物理攻撃には高い耐性はありません、さあ頑張れ！グレネードをぶっ放すもよし！実弾兵器を使ってもよし！なんならブレードで切りかかってきてもOK！」

冷却が完了したから撃たないけどとりあえずガトリングの銃身を回しておく

てか集弾率悪すぎワロタ、オトキヤの弾使い切ったら全部パージして新しい武器を出すとしよう

ちなみに近距離で機動戦をされたら俺ボッコにされる、FCSの関係でロックサイトの小さい事小さい事

「空高くから狙撃しても勝てないという事ですか…！」

「まあ例えギリギリ倒しきれたとして俺も無抵抗なわけは無いしなあ？」

「くっ…!」

「不便だよなあISって攻撃するのにエネルギー削っちゃうとか欠点の固まりじゃん」

「あなたもISを使っているくせに良く言いますわ」

「しーましえんぐへ」

使わんよ、エネルギー、倒置法

んでそろそろせっしーいちめ再開したいんだけど、コレ勝手に撃ち始めていいのかな、いいよな、さつきも不意打ち気味にヘッドショット食らったし

「せめて弾切れまで耐えてみなあ!せっしー!」

「見つけましたわ…!」

お、今度は高度を上げたか、これじゃあ角度の問題でFCSを使ったロックは出来んな…

完全手動だがまあどうせ適当にばら撒くような武器だし構わないんだけどね

「上を通れば…どうかしら?!」

「なるほど、代表候補生だ、いっちーが気にするわけだな」

気にしてなかったけどもね、後ろに回られたか、さて…ミサイルかそれともブレードか、まあどっちにしろせっしー詰んでるんだけど

「ブルーティアーズはレーザービットだけではなくてよ!!」

「ミサイル?!」

さあ急げ、タンクではトップクラスの旋回の遅さだが何とか間に合って欲しい

あ、無理だわ、一発当るわ

「っぐおっ!」

「どんどん行きますわ!!」

右のオートキャノンに当たったわ、拉げちまったからもうコレは使えんな

せっしーの腰にあるユニットがこちらを向いてガバリと口を開ける、くぱあよりマシな擬音語だろ

だが残念、正面から俺にミサイルを当てるのは無☆理

「ごーんねん、もうミサイルは食らわんよ」

「なっ!!」

「積んでて良かったCIWS、ちなみにあと298発残ってるよ」

「そ…そんな…」

「右のオートキャノンやられちまったし左もガトも残弾少なくなってきたからパージっ」

さーてきて、あと残ったせつしーの有効な攻撃方法はショートブレードだっけロングナイフだっけの近接ブレードのみ

うんむ、どんな武器を使おうか…せつしーと近距離で切り結ぶのも面白そうだな、ムラクモにしてみようかな…でもタンクだしなあ…いや、振った時カツコいいんだけどね？

でも考えてみれば振り方って俺の自由だよな、動かしてるのは俺だし

あれ？てことは割と自由な武器の使い方できるんじゃないやね？胸が熱くなってきたな…

よし、決めた！この武器n

「ハアアアアアアッ!!!」

「キャアツチ!!」

「と、止められ…!」

「兎戯だのうお前さん、まるでよちよち歩きだ」

思考途中に突っ込んでくるとは感心しませんなあ、まあ纏まった瞬間だったから大丈夫だったけど

社の自己防衛訓練でシステムを好んで習ってたから大振りに振ってきたブレードの根元、もといブレードを握る手を引っ掴むなど造作も無いのだよ

いつも（訓練）ならこのままぶん投げるんだけどそのまま両手を引っ掴んで両側に引っ張る、ISでなければ両腕が引き千切られるレベル

「つくあああ!!」

「痛いか？じゃが、それも直にのうなる…」

一瞬で6万パイルを両手に装備、パイルの杭と杭の間にせつしーの

二の腕を挟むように両腕を拘束

かーらーの…グライドブースト起動、ハイブーストを織り交ぜつつ壁へと超加速

「タンクとパイルってのはな男の浪漫なんだよ、せつしー?」

「このっ…離さない!!」

「そいつは無理だ!残念だけど、そろそろ終点だ、タンク運送をご利用いただき…ありがとうございます!ごさいましたあっ!!」

「あ…っ…かはっ…!!」

せつしーごと壁に向かいタンクとアリーナの壁でせつしーをサンド、ISへのダメージ自体はただの接触か体当たりだから大したダメージじゃないけど衝撃は半端無い、普通の戦車など鉄屑に変化させる衝撃である、ISの保護機能で衝撃もある程度減少できるが視界がぶれるが気が遠くなるだろう

続いてパイルを作動、せつしーの両腕を挟んだまま壁に杭を打ちつける、壁に穴四つ貫通させ、せつしーを大の字に拘束、そのまま両腕のパイルをパージ

これでせつしーの移動手段が無くなった、攻撃手段は構えられないライフルと振れないブレードを封印、2機のレーザービットと2機のミサイルビット、以上です

レーザービットはライフルよりも遥かに威力が低いからほぼ無意味、ミサイルは今だ腰にあるから目の前からしか撃てないしCIWSで無意味

「ついでだしもう二本行つとこっか」

「なっ!!」

もう一つづつ両手に6万パイル、太股を挟んで発射、これで完全に身動きは取れなくなったね

うぐご!後ろからビットに撃たれた!ダメージは殆ど無いけど何か腹が立つ

「いい抵抗だな、感動的だ、だが無意味だ」

「黙りなさい!!」

「まあ仕方が無いと思って諦めてくれ、うちの社の最高傑作を使っ

といて負ける訳には行かないんだ」

「ふん！まるで強姦魔ですわね！女性を拘束して甚振るのがご趣味？」

「そうだ、うちの社で思い出した、一週間前の事だが言わなきやならん事があったんだ」

「ッ…!!」

「いやあー！ホントすまなんだ！大人げ無かったよなあ…コレばかりは真剣に謝らせて貰う」

「なっ！こんな所でこんな状態で言う人が居ますか?！」

「それはそれ、コレはコレ、ってな訳で止めを刺させて貰う」

数歩後ろに下がる、何か容赦なくビットが後ろからパシパシ撃ってきてるけどあと数分撃たれっ放しでも問題無さそうだ

さて、止めは最高に派手にしよう、選択は…コレだな、Vの象徴的兵器

「見てるがいい、これが我が社のチームVが開発した新兵器、オーバードウエポン・グラインドブレードだ」

「は…羽?！」

「パーッします」

「…!!う、腕が…！」

「アッ…ガアッ…!!グ…アッ…アッ…アアアアアアアアアアアアッ

!!!!!!

「不明な…ザザッ…ユニットが接…ザザザッ…続されました」

「ひっ…！」

「ガッ…!ガハッ!!ギ、ギヒヒ…ギヒヒヤハハハハハハハアッ

!!!

「シス…ザザ…テムに深刻な障…ザザザッ…害が発生し…ザザッ…

ています」

「や、止めて…!止めてください…!!」

「ヒヤッハッハッハッハアッ!!!ギヤアッハッハッハッハッハッ!!!」

「た…ザッ…だちに使…ザ…ッ…用を停止して…ザザザッ…ください」



ゴン、ガゴン!!バシユツ

特に意味は無いけど機体から爆発を発生させる、この無駄機能がVの変態度合いをよく現していると思う、勿論ダメージは無い

爆発に合わせて体を震わせる、大体3〜4回ほどやったら全身の力を抜く、腕だらーんのタンクで支えられた上半身猫背のぐでー

カメラアイの発光を無くす、無駄爆発は続いたまま

遠隔操作でせつしーを縫い付けてたパイルを量子変換で収納、せつしーはもう自由です

「救助班！何をしている!!早く出る!!」

やっべ、変な事し過ぎた、コレで今「冗談でしたーww」とか言ったらちっぷーに全力で殴られる気がする、APはまだ3万以上残ってるっての…

再起動見たくするか…ボイスモードを電子音に…しなくても声真似でいけるんだったな

「再起動シークエンスを起動します」

「再起動ですって?!」

「機体データを更新、プリセットアセンブル、ヴェンデッタを起動します」

「きゃあっ!」

「搭乗者ステータス異常なし、システム修復完了、AP回復完了、機体の損傷を回復…エラーが発生しました、左腕部が接続されています」

「機体が変わった…1次移行?!いえ、2次移行ですか?!」

「ヴェンデッタ、アーマードコアを解除します、強制解除まで3…2

…1…解除」

よつと、着地、中々上手くごまかせてたと思う、せつしーだったらよろよると歩いてくるね、別にそんな無茶する必要は無いと思うんだが「よお、せつしー、おつかれさん」

「だ…大丈夫…なのですか?」

「全然余裕、それよりすまんなあ!もう面白くて面白くて調子に乗っちゃったいな」

「お、面白くてえ?!」

「それよりそれ取ってくれ、それ」

「え?それ...?」

せつしーが周りをキョロキョロ見てるけどもつと近くにあるんだなあこれが、具体的にはせつしーの足元に転がっている俺の左腕

「足元にある俺の腕」

「え?きやあつ!!」

「驚きすぎだろ、生娘か ほれ、パース」

「生娘ですわ! よいしょつ...重い!」

やだ非力、たった10キロほどじゃない、筋トレのダンベルほども無いじゃない...

仕方なしせつしーの所へ行つて義手の手を掴む、うんむ、義手の指が手に食い込んで痛い

砂だらけだから払わなきゃならんな、膝でこっくんこっくん、うむ

「よつと、よいしょ...」

ガキン!

「うむ、いい具合」

「...足も義足だったんですわね」

「ちんちんは無事でした、ホント幸運」

「なつ!何を言ってるのです!!」

「ちんちん程度で顔を真っ赤にするとか生娘か」

「生娘ですわっ!!」

ひよいと後ろを見るとなぜかアリーナの入り口に白い服を着た救護班がスタンバツてるんですけど

あれと関わりたくないなあ...よし、カタパルトの射出場から逆に入つていこう、うむ

でもあと少しはせつしーと話してよう

「ところでせつしーよ、いっちーは戦ってどうだった?」

「ええ...「夏さん」は...とても強くて真っ直ぐで...」

「惚れたな?」

「なつ!ちっ違いますわ!!」



「マハハハハ!!言つとくがいつちーは常軌を逸したほど鈍感だぞ、付き合つてと言つたら十中八九買ひ物にだと認識するからなあ…まあ頑張つてくれよ!では!!」

「え?!ちよ、ちよつと!…つて早い!!そちらはカタパルトですわよ?!地上から5メートルは…」

とう!すーぱー義足パワー!5メートルなどなんのその!

籐ヶ崎をカタパルトの入り口にシュウーツ!!超エキサイティン!!

「ハッハー!まだまだいけるぜ、メルツェール!」

カタパルトつて割と長かつたんだね、思考するだけだからいいけど生身だったらげんなりするだろうな、ココ歩くの

お、ピットに着いた着いた、あーやつと終わったー

「あー疲れた!とりあえず生中で!」

「ほう、中々いいご身分じゃないか、籐ヶ崎」

OH…

「これはこれは織斑先生、ごきげん」

「御託はいい、説明を要求する」

「い、いや…ごr」

「あの爆発は何だ?あれはただの見た目か?」

駄目だ☆この先生教師にあるまじき事に生徒の話の話を聞こうとしな  
いや、全く!我の強い人よねつ!ぶんぶん☆

「じよ…」

「じよ?」

「冗談でしたー☆」

私とその日見た最後の映像は視界いっぱい広がる拳でした 頭  
部破損

こっから鈴音編

ビットマンがEN不足で誰であろうと私を越える事など不可能で本音ちゃん推しなお話

顔面にびっしりと包帯を巻いた本日よりマミーの籐ヶ崎です、おはようございます。

「おはよう、いっちー、大敗だったな、おっつー」

「ああ、シンか…おはようわあっ!!」

「何だね、人の顔を見るなり叫び声を上げやがって、何だ、ミイラにでも見えたかMr. 去勢リーチ」

「ミイラにでも見えたかって、まあ見えたけど…二つ言いたい、何でそうなったのかとその不名誉なあだ名に付いて」

あらあら、二つも知りたいなんて欲張りさん☆

「しかたないなあ〜いちかくんは(ダミ声)」

「ISTD!」

「そうだな、じゃあまずは俺がマミーにジョブチェンジした事に付いて教えてあげよう、いっちー」

「お、おお」

「昨日せつしーとの決闘を終えてピットに戻ると織斑先生が居た」

「…で?」

「俺が昨日最後に見たのは織斑先生の拳だった、以上」

「…過程はともかく結果は理解できた、まあ原因も十中八九シンだろうけどな」

「お：俺やない(こーほーやないとかの意味じゃない)!! 俺は悪くないんや! 悪いのはVの開発企業や! ダミーエキスプロージュン機能なんてお遊びで付けた親父の部下が悪いんや!!」

「お…おう…」

いっちーが何とも言えない珍妙不可思議な顔をしている、おのれ。

「あだ名はアレだ、察しろ」

「ええ…」

「と言うわけで1年1組のクラス代表は織斑一夏君に決定です！  
あ、一繋がりでいい感じですね！」

「はいはい！ 先生!!」

「は、はい！ 何ですか？ 織斑君。」

「……おい待て、籐ヶ崎！ 今何を許可した?!」  
「えーいいじゃないっすか、人の会社が何を作ったとしても関係無いじゃないですかー織斑先生。」  
「あ、あのー…セシリアが辞退したなら何故シンじゃないんですか…。」

「は、はい！ 何ですか？ 織斑君。」  
「……おい待て、籐ヶ崎！ 今何を許可した?!」  
「えーいいじゃないっすか、人の会社が何を作ったとしても関係無いじゃないですかー織斑先生。」  
「あ、あのー…セシリアが辞退したなら何故シンじゃないんですか…。」

「わたくしが辞退したからですわ!!」

「オ、オルコットさんの声が二重に?!」

「オルコットさんはもしや忍者!!」

「アイエエ!! ニンジャ!? ニンジャナンデ!?」

「……籐ヶ崎さん…? 少し、よろしいでしょうか?」

「ならぬ、今選択ミスしたらIS一発で葬りかねん自立レーザー砲を大量に搭載した戦闘移動要塞（アームズ・フォート）が量産されてしまう。」

「そんな事はどうでもいいのです！」

「あ、どうでもいいんだ…アクアビット、トールラス、ゴーサインだエネルギーコアは今度の休みに帰るからその時に作るよ」

「やつほうい！ 坊ちゃんからゴーサインが出たぞ!! 量産準備にかかれー!!」

ブツン

「……おい待て、籐ヶ崎！ 今何を許可した?!」

「えーいいじゃないっすか、人の会社が何を作ったとしても関係無いじゃないですかー織斑先生。」

「あ、あのー…セシリアが辞退したなら何故シンじゃないんですか…。」



「円じゃなくてドルな」

『更に多い!!』

もしジンバブエドルだとしたら…一体いくらだと思う？ 恐らく

100円…否、10円もしないぞ？

まあ米ドルだけだな。

「無駄な話をするな馬鹿者ども！専用機持ちは飛行訓練を行う、専用機持ちは前に出る！」

呼ばれちまったいな、仕方あるまいて…

せつしーを見るとやっぱりISスーツってエロいなあ、何を考えて作ったんだろうか。

反対のいっちーを見る、男のピッチリスーツだ、嫌な気分になってくる、ちっふーは恍惚とした表情でいっちーを見ているが。

あとはモツピーだな、顔を真っ赤にして顔を反らしつつもチラチラといっちーを見ている、生娘か。

「せつしー…大変だ、緊急事態だ」

「…なんですか？」

「いっちーのISスーツ姿を見てしまった、目が腐る、俺の精神がゴリゴリ削られた、せつしーの尻を撫でさせてくれ」

「お願いですので死んでいただけませんか？」

非常に冷たい目で俺を見るせつしー、いいぞ…冴えてきた。

「よし、ISを展開しろ」

「はい」

「わかりましたわ」

「うー…いい。（オライツ、オライツ）」

せつしーがISを展開するのを穴が開くのではないかと疑うレベルでガン見、頭の中では魔法少女とかって変身する時全裸になるものがあるけどせつしーって全裸になるんだろうか、等と不屈きな事を考えている。

結果から言えば全裸にならなかった、世界は俺に優しくない。

いっちーは何か目を瞑ったままうんうん唸っている、スゲエ間抜けに見える、ハハッ。

「二夏、落ち着け、初めて白式を装着した時の感覚を思い出して自然なイメージをするんだ」

「は、はい」

「さーて俺は何にしようかなー…やっぱオーソドックスに二脚だよなー」

「ふーっ…来い、白式！」

ちっふーの助言を得て息を落ち着けてISを展開するいっちー、ただしガントレットを掴んで。

と言うかね、ガントレットつて聞いたからどんな仰々しいものか期待してたらアレ、ただの腕輪じゃん。

「今回もVから…いやいや、せっかくだし4かfaから引っ張ってくるか…ふむむ、迷うな」

「いつまで掛かっている。早く展開しろ、籐ヶ崎」

せっしーが青、いっちーが白、じゃあ俺は間を取って水色だ。

となると愛と正義のヒーローだな！

「よし！ 輝けコジマア！ 愛と正義とコジマのヒーロー！ チェ

ンジ！ アーマードコア！ アクアビットマン!!」

「ま、眩しい!!」

「きゃあー！」

「AMSから光が逆流する…!!」

「ギャアアアアアアアアッ！」

「説明しよう！」

アクアビットマンとはPA整波性能19103&KP出力999を誇る最強のヒーローである！ 全てのパーツを可能な限りアクアビット製、ムリな物は同志レイレナードで構成してみよう！」

「なっ…!! 前のISと違う?!」

「コジマは…ま…ま…ま…」

んふーふ、皆驚いているな、聞いて驚け、PAが剥がれたらハンドガンで死ぬぞ、これ。

「わあ〜シンにーカッコイイよお〜！ かんちゃんが好きそうだね〜」

「誰ぞそれ…あ、やべえ、凄く重要な事を思い出した」

「どうした？ 籐ヶ崎」

「このアセンジャ十秒飛べるかどうかも怪しい、重量過多だし」

「……3人とも飛べ」

ああん、ひどうい。

せつしーと同時に跳び始めたがENカツカツだから上手く飛べん少し飛んではブースト調整でEN回復して飛んで、具体的にはいつちーに抜かされるレベル。

「ん、意外と遅いんだな、シンのIS」

「遅いだと…？ 今俺の事を遅いと言ったのか？」

「いや、だってそう思うだろ普通…」

「いつちー、放課後アリーナな、ブレオンでナマス切りにしてやる」

「え、っ！ ぶ、ブレオン…？」

「ブレードオンリー、ついでにチューン移動関連全振り両腕月光追加ブースター装備レギュ1.15な」

「お、おかしい！ 俺の土俵に立つてくれた筈なのに意味は分からないが勝てる姿が見えない?!」

ぼー…ぼっぼっぼっぼー…ぼっぼっぼっ。

せつしーが空中で停止している高さまで漸くたどり着く、先にかがっていたいつちーがせつしーと会話していた、イケメン・マスト・ダイ。

ぎりぎりぎりぎり、俺だって今世は立派な高校生だ、彼女ぐらい欲しい。

その癖あの例のアレは自分はモテ無いなんて思ってるんだからなお腹が立つ、俺が一般以上にもてるのは重いものだけだよ、荷物とか。自分の体重以上の物だって持てるんだぞ、クソア！

『いつまでそこに居るつもりだ！ 早く降りて来い一夏！』

「モッピーがご立腹である、そのうち真剣か木刀かもしくは掃除用具が銃弾ほどの速度で飛んで来るぞ、いつちー」

「お、おお」

ちっふーの指示で地表10センチで止まるように指示された、ちな

みに相変わらずENはギリギリ、何とか満タンまで回復したが絶対量が少なすぎる。

空中停止かー、どうやったら出来るだろう、落下中上にブースター吹かせたままサイドブーストを何度かすればいけるかな？

「ではお先に行かせて頂きますわ」

「それがせっしーの最後の言葉だった…」

「おい、止めろよ」

せっしーが下へと急降下、落ちながら通常のブーストを吹かしてる感じだな、んでストップと、次はいつちーに行かせるとしよう。

「次はいつちーが行きたまえ、俺はその後に行かせて貰う」

「おう、よし…行くぞっ!」

ダイジエストでお送りいたします。

ドヒヤア!

ボボボツ

ズドオン!

「とりあえずノーコメント、じゃあ次行かせて貰うとしよう」

オバードブースト作動準備、エネルギー充填開始、充填完了、オー

バードブースト…発動。

「ハッハー! まだまだ行けるぜ! メルツエエエエエエエエ

!!!!

」ピーピー、エネルギーが無くなりました。

「まだまだ行けると言ったな、アレは嘘だ」

逆噴射も出来ん、これは面倒な事になった、地面まで残り300メートル也。

徐々に近付いてくる地面、相も変わらずENは無い、精々QB一回分だ、もういつその事前方にQBして地面に突っ込んでしまおう。

ドヒヤア!

「おい、マジかよ夢なら覚め」

視界に広がる闇、黒の世界、何も見えない、体が動かない…

俺は一体どうなってしまっただろう、いや、どうなってしまったのだろう。



まあ予想は出来る、足は動くしね、多分犬神家状態だろう。  
仕方ないしACを解除する、スーツの保護機能のおかげで窒息した  
りはしない、マジ万能。

「誰か籐ヶ崎を引きずり出してやれ…」  
あきれ果てたようなちっふるの声聞こえる、ん、右足が掴まれた、  
誰だ！ 俺のあんよを掴む不届き物は！

「せーのっー！」  
右足の義足接続システムを停止、簡単に外れるようになった右足が  
根元から外れて行く、じゃあな相棒…よかったぜ…お前とは。  
「ンッンッンッンッンッンッンッ！！！！」  
断末魔の叫びのような声を上げる、まるでデッドスペース。  
ふと考えたらこれ絶対トラウマになるよね、女子にはさ。

「お、織斑先生…!!」  
「構わん、やれ」

「で、でもー！」  
「やれ、前の爆発もそうだったんだ、今回もそうなんだろう？ 籐ヶ  
崎」

いっけね☆ばれちまつてる。仕方あるまいて、自力で脱出するとし  
ようか。

「いっちー、俺の回り…そうさな、半径2メートル以内から全員離れ  
るように言ってくれ」

「え？ あ、おお、分かった。シンが半径2メートル以内から離れて  
くれたってさ」

周りが見えんからよく分からんがザワザワ聞こえる、小規模AAを  
使うから離れないと危ないしね。

「シン、OKだぜ」

「あいよー、チェンジ、アーマードコア、リザ」

「ま、また変わった…」

「どういう原理なのよ」

「義足じゃなかったら足がグチャグチャ確定よね、あの足」  
ヴウン…ゴアツ!!

いや、効果音なんて最初のブウンぐらいしかハッキリ文字に出来な  
いけどさ、でもこんな感じだと思っぜ。

「きゃ、なに?!」

「シンにー足痛くなくい?」

「あれ、気にするタイミングおかしくない?」

周囲1.5メートルほどにぽっかりと穴が出来る、コレでようやく  
外に這い出る事が出来ます。

「いつもニヤニヤあなの外に這い出るコジマ! 籐ヶ崎信一郎です  
!」

「いい度胸だ……授業が終わったら待っているよ、貴様」

「ちっふーってスミちゃんに似てるよね、どう? インテリオルか  
レオーネ・メカニカに來ない?」

「ほぎけ、早く次の用意をしろ」

一蹴されてしもうた、切ない、リザのまま肩を落とすつついつちー  
の横に並ぶ。

ちなみにライフルもショットガンもチェインガンもミツソーも装  
備したままである、仕方ないじゃない、プリセットアセンブルなんだ  
もの。

ただしアレだ、企業のプリセットアセンブルなら武器腕じゃない限  
りは非武装だよ、物によっちゃAAあるけど。

「次は武器の展開だ、一夏! 武器を展開するんだ」

「は、はいー!」

いつちーの手に雪片式型が現れる、別に武器が3・4個あるわけ  
じゃなくてただ一つだけなんだからもっと早く出すべき。

等と思いつつ左右にステップステップ、Lスティックを左右にちよ  
んちよんする感じ。

でもコレできるのって二脚だけなんだよね、逆足だと何か気持ち悪  
い動きになる、つまり今の俺である。

「よくやったと褒めてやりたいがもっと早く展開できるようにな  
れ、次はオルコット、武器を展開しろ」

「はっ」

腕を横に伸ばしてライフルを展開、どうでもいいかも知れないけどこれって銃口こっち向いてるんだよね、お返しにライフルをせつしーの顔に向ける。

「ひゃつ！ な、何です?!」

「せつしーがやってる事をしてるだけさね」

「オルコット、そのまま撃って欲しいとは思いますが誤射の元だ、正面に向けて展開できるようにしろ」

「で、ですがコレはわたくしのイメージを固めるのに必要な…」

「口答えは許さん」

「はい…」

せつしーがシヨンボリする、いいぞ…冴えてきた…

「次は籐ヶ崎、武器を展開…は既に行っているな、違う武器を出してみろ」

「あいよー、んじゃORCAを下から行つときですかー」

逆足のジャンプ力を生かしてピョインとジャンプして全員から見える位置へと着地、クイツクターンで全員の方を向く、カツコイイだろう？

「かなり早いからよく見といてね、皆。んじゃあ…行きますか！  
フェラムソリドス！ ビッグバレル！ クラースナヤ！ 鎧土竜

！ グレイグルーム！ オープニング！ グレディッツイア！ ス  
プリットムーン！ リザ！ アステリズム！ 月輪！ アンサン  
グウツ!!」

「……………流石に…驚いたな」

「すっげえ…!」

「わあ〜シンにー凄いねえ〜流石だねえ〜」

本音ちゃんを除いて全員目を丸くしている、どや。

でも正直アンサンングって嫌いなんだよね、重量過多だし…もういつその事スプリットムーンをデフォルトアリーヤカラーにしてメイン1をレッド、んでアイカラーをブルーにしてチョイチョイスタビライザーを変えて擬似ニンボールにしたい。

戦闘はブレメインになるけど見た目がカッコいいから万事OK!

「…近距離武器を展開しろ、籐ヶ崎」

「スプリットムーンってブレードあるんだけどな…チェンジ！」

アーマードコア！ ハングドマン！ マスブレード！」

そう、例のアレである。

マスブレード、分かりやすく言えば…

「それは 剣（ブレード）というにはあまりにも大きすぎた

大きく 分厚く 重く そして大雑把過ぎた

それは 正に柱だった」

いっちーが言ってくれたが柱である、ちなみに武器として選択できるマスブレは柱にトゲ状の突起とブースターがついているが、主任のマスブレはガチで柱だ。

俺のは武器選択出来る方なのでトゲとブースターが着いている、まあ生徒達には分からんだろうが。

「…これが近接武器だとお前は言い張るのか？」

「だってコレが俺の持つ近距離武器でトップクラスの威力なんですよ」

「…まあいいだろう、籐ヶ崎のやっていたように機体名や武器の名を言っただけ展開するのは初心者のする事だ、ただし…もつと凄まじい数があるであろう籐ヶ崎の場合は例外だな」

「アセンブルの数は無限大！ 君の好きなアセンを組んでみよう！」

ニッコリ主任、ギャハハハッ！ いいじゃん、盛り上がったきたねえ！

「因みに速度だけを考えるなら言っただけ展開した方が遥かに速いよ！覚えておこうね！」

「と、籐ヶ崎君が先生みたいな事を言っている…！」

「だって私の自慢のシンにーだもくん」

「何で布仏さんは籐ヶ崎君にこれほど懐いているのか疑問に思う」

と、ここでチャイムが鳴ります。つまりコレで授業は終了と言う事、スミカ・ユートイライネンです。

「あ、織斑先生！ この穴埋めた後に継続してアリーナを使用して

よろしいでしょうか？」

「ふむ…まあいいだろう。だが何をするつもりだ？」

「ちよーつといっちーにブレオンの戦い方をレクチャーしてやろうかなと」

「じよ、冗談じゃ」

「私が教えれば一番なのだろうが生憎、残念ながら、非常に悔しいがそういう訳にはいかん。頼んだぞ、籐ヶ崎」

んふーふ、許可を頂いたぞ、さあいっちーや、刺激的にやろうぜ？

「んじやあ穴埋めるか、いっちー」

「何てこった…そうだ…！」

しよぼんぬしているいっちーが急に何かを思いついたかのような顔をする。

どうせ穴埋めに時間を掛ければレクチャーと言う名のいちめを回避できるとか思ったんだろう。

いいぞ…お前の感情が見える…！

「あ、いっちーあそこで本音ちゃんかハキハキと喋っている」

「うっそお?!」

等とあっちを向いた瞬間に能力で土を精製して穴を埋める、結果的にいっちーがこちらを向いた瞬間に絶望するわけだ。

「いねえじゃん、のほほんさ…まっ？」

「どうした、スカーレットフォックスにつままれたみたいな顔をして」

スカーレットフォックスにつままれたような顔とは？

ルーキーが中二脚にそれなりのアセンを組んで順調にカロードランクマツチを勝ち進んでいる時、エメラルドラクーンに遭遇。

事前に情報を仕入れていた場合二人組みなので一人だと大した強さはないと戦って勝つ、そこで調子に乗って「ハハハ！ やっぱりだ、やっぱり大した事無い！ やれる、やれるんだ俺は！」等と思いがながらスカーレットフォックスに挑む。

するとモリモリPAが削られゴリゴリ装甲が削られ敗北を味わう。その時のポカーンとした顔が「スカーレットフォックスにつままれ

たような顔」である。

「え？　なんで…あ、穴が…嘘…だろ？」

「なんだ、フラジールがOIGAMI背負ってるのでも見たか？」

「い、いや…いつの間に…」

「いいから早くISを展開しろ、話が進まん、今話中に烏龍茶　煌（ファン）を出さなきゃならんのだ」

アセンブル開始、見た目重視のフルアーリヤ・FCSをアクアビツトのブレード特化にする。

肩及び背中追加ブスターを装備、スタビライザーをヘッドトップのHDLANCELOPT01、残りはヘッド以外オールレイレナード。

両手月光でブスター系統をフルチューン、後は旋回性能を可能な限りチューン。

レギュレーションを1.15専用にして名称設定：「1.15用ぶれおん！」…OKだ。

「チェンジ！　アーマードコア！　1.15用ぶれおん！　1.15！」

「くっ！　来い！　白式い！」

ヒュゴオオオ…とブスター音を鳴らしながら空中へと飛ぶ、いちーの白式とは対照的な黒一色にアイセンサーの紅いAC。

「さて、じゃあいちーの勝利条件だ、別に俺を倒す必要は無い、俺がいつちーを撃破するまでに…：零落白夜じゃなくて良い、俺に一撃当てる、簡単だろうか？」

「ん…んん、どうだろうか」

「ちなみに俺はブレードしか使わん、あと俺に一撃当てるまで何度もエネルギー補充させて戦わせるからな」

「おい、マジかよ！　夢なら覚め」

「開始だ」

連続してクイックブーストを作動、時速1000キロを軽く超える速度を一瞬で何度も出す。

普通なら体が木っ端微塵に壊れるがそこはカロードの底力、全く異

常は無い。

正直ISでもこの機動は無理だろう、一定方向に時速1000キロで飛んでる途中に全く逆に一瞬で時速1000キロで飛ぶなんて出来るわけが無い。

まず体が死ぬだろう。

「そーらあ！ こつちだこつちい！ 見えてるー?!」

「早すぎだろ!!」

「意外と遅いつつってたのは何処のどいつだっけ？」

「根に持ってたのかよ！」

お、後ろ取った、いつちー必死こいて動き回ってたけどしつかりと俺が見えてないんだな？

まあ仕方ないな、ゲームでも俺自分のACを見失う時あるもん、特にソブレローフラジールの素体ーの時とかね。

「ハラシヨオオオオオオオ!!!」

「ぐあああああ!!」

違うな、ハラシヨーはロケットだ、もしくはパイルだ。

「よかったなあいつちー、もし俺が持っているのがパイルだったら見事にホルデス採掘場だ」

「ハイパーセンサーでも捕らえきれない速度って何だよそれ!!」

「違う違う、一瞬で逆に飛んでるから消えたように認識してしまうだけだって」

などとさり気ないレクチャーを織り交ぜながら夕方になるまでいつちーを蹂躪、ちなみに後半あたりからモツピーとかせっしーとか見物客が増えてた。

それと二人に混ざるか聞いてみたら一瞬で断られた。

「モツピーとせっしーもやる？ 俺とだけど」

「いや、止めておこう」

「わたくしも遠慮させて頂きますわ」

見たいな感じ、せっかく相手の得意な距離で蹂躪してやろうと思っただのに…

「結果から言うといつちーは一撃も俺に当てる事は出来ませんでし

た、まる」

「何だよ…寄った瞬間に後ろに向けて瞬時加速って…」

「あれ瞬時加速じゃなくてただのクイックブーストだから、瞬時加速的な役割のオーバードブーストは別にあるから」

「クソツ、俺の白式をゴミのように…なんなんだよ、シンのISは…不公平だろう」

世界一の企業が総力を挙げて作った物が個人の天才に作られた物に負けて堪るかよ、社の為なら命だって捨てる覚悟です。

「いいから飯食いに行こうぜ、オラ腹減っちまってよー」

「ん、んじゃ行くか…次は絶対当てるからな、シン」

「ハハツ、ワロス」

「籐ヶ崎…その服は何だ？」

「そう言えばそうですね、何と言うか…制服の魔改造が過ぎてタレントトップと短パンじゃないですか」

「いや、だってもう俺が義手義足だってバレてるし…機械の体ってカッコイイだろう?」

それに俺は基礎体温と放出熱がアホみたいに高いから涼しい服装が一番なんだ、まあ義手義足見て嫌な気分になる女子が居たら隠すけど。

そろそろ食堂に到着する、この後起きる事は分かりきっているので如何にしてアホな事を使用かと画策中。

「(ス) テイン (ガー) と来た」

「何がだよ」

制服の前を開けて両手を服の下、場所で言うとお腋周辺に突っ込む。そして取り出したるは…?

「じゃーん。 FN P90が二つ」

「ま、マシンガン?!」

「PDWだぶっ飛ばすぞマヌケ」

「て、鉄砲…」

「いや、まあ確かにそうだがなモツピー」

「さ…サブマシンガンではないのですか?」



「あながち間違いではない」

勿論そんなものを服の下に隠す事なんて出来ないから能力で精製しました、生前はガンオタだったからちよつとした事で怒るのは仕方が無い。

宿命だと思つて諦めていただく他無い。

「実銃ですが弾薬は空包ですので誰も傷つきません、しいて言うなら煩いのと薬莖が熱い事ぐらい」

「実銃?!」

「ま、まあ企業の御曹司ですから持つ事に意義はありませんが…学校で出す物でもないと思ひますが…」

「いや、問題あるだろー!」

「いつちーだつてせつしーだつてIS持つてるじゃん、それに比べれば銃なんて大したもんじゃないよ」

「それをどうするつもりなんだ…籐ヶ崎?」

「それはだな」

食堂へ走つてダイナミックエントリー! いつちーが来るのを今か今かと待ち受けていた女子勢に向けて発射あ!

しようと思つたけど本音ちゃんも居た事を思い出してエントリーする瞬間に即座に銃を消す。

結果的にバランスを崩して頭からスライディング、顔面と義手義足と接触した地面を擦つてIN。

「籐ヶ崎を食堂へシューウウウウツ!!! 超! エキサイティン!!」

「あめりかん ば○るどーむ」

続いたのは本音ちゃん、何と俺の着弾点の真前に本音ちゃんが立っていた、ここで顔を上げると漏れなくペエンツを覗けるだろうが本音ちゃんに対しそんな事をすれば自省の念に駆られて死ぬ。

結果的に御器被りよろしくカサカサと地面を這い回つて食堂の外へ一旦出る事になる。

「まだまだです。 おちませんよ、私の鎧土竜は」

「気持ち悪いっ!!」

「あはは、またね〜シンにー」

その後異口同音に「気持ち悪い」と3人に罵られた後その3人と共に普通に歩きながら食堂に入る。

そこからはまあ知る通りです。クラツカーを鳴らされわいのわいのとドンチャン騒ぎ、一組以外も混ざってカーニバルです、派手に行きましょう！

ここで一人の少女が食堂に突入してくる、まあ現在の俺より年上なだけで精神年齢からしてみれば十分お嬢ちゃん、むしろひ孫レベルの歳の差。

「はいはい、新聞部です。話題の新入生である織斑一夏君と籐ヶ崎信一郎君に取材しに来ましたーっ！」

わあ、なんだか大変な事になったぞ。

なんかいつちーってこう言うスピーチとかって苦手なんだろうか、ナチュラルに女を落とすに掛かるような奴なのに。

「じゃあ次！ 籐ヶ崎信一郎君！ …と、籐ヶ崎信一郎さん」

「なんだ、どうした、なぜさん付けなんだ？」

「え、えと…その…か、カラードの御曹司だって本当ですか?!」

「嗚呼、其の通りだ、俺が使うACもカラードの全総力を挙げて作った物だ、誰にも負ける気はせんよ」

「その義手義足に付いてお、教えてください！」

「ガキの頃に事故で潰されてな、今思えばアレは暗殺目的だったのかも知れん」

「こ、今後の意気込みか一言お願いします！」

「誰であろうと、私を越える事など不可能だ」

「あ、ありがとうございます!!」

なんだ、もういいのか…もつと話したかったのだが…残念だ。

しょぼんぬ、セクハラも出来なかった…俺のアイデンティティが…仕方ない、一人寂しく食堂の隅で（ジンジャー）エールでもあおつときますよーだ。

「…マジで誰も寄ってこねえ、俺気付いたんすよ、女の子にモテる方法って奴です。馬鹿なんで時間掛かりましたけど、俺がモテる為には

イケメンの誰かが消えればいい、俺以外の誰かが！」

「シンにーどーしたの〜？ はい、これシンにーにあげるね〜」

「本音ちゃんマジ天使、ありがと、頂くよ」

「えへへ〜」

本音ちゃんに貰ったクツキーをサクサク齧りながら（ジンジャー）エールを飲む。

うむ、クツキーにはオレンジジュースが合うと思う、オレンジジュースの酸味とクツキーの甘味が合わさって…誰も聞いてませんか、聞いてませんね、ごめんなさい。

「本音ちゃんって専用機欲しい？」

「う〜ん、え〜つとね〜、あのね〜闘うのって苦手なんだ〜」

「よーし、おじさん本音ちゃんの為にサポート用のISワンオフで作っちゃうぞー」

「ごめんね〜シンにー、わたしはいらないよ〜」

「ん、そうかい…まあ多少無理矢理だった感はあるしね」

しよんぼりとして申し訳無さそうに眉を垂らす本音ちゃんの頭を撫でる。

「さて、どうやら集合写真を撮るようだから一緒に行こうか、ね」

「うん！」

本音ちゃんがパタパタトテトテといった具合に皆の元に歩いていく、正確に言う集合写真じゃなくてせっしーといっちーのツーショットの筈だったんだが結果的に集合写真になるからそれはそれで構わんだろう。

俺はまあ…写る必要は無いだろう、この面だし一人ニヤニヤorムスリな男が混ざってたならそれはそれは微妙な写真になるだろうしねー。

全員が今か今かと待ち構えている時に少し離れた所で見物して遠い目をしていると俺の服をちよいちよいと引っ張られた。

「む？…何の用だ？」

「あのね〜シンにーも一緒に撮ろ〜」

なんと、本音ちゃんだったか、それなりに上を向いてたから分から

なんだ、あるよね、無意識でやや上を見てしまうことって。

「いやーでもなあ、俺が写っても他の人物にメリツト無いしな」

「私一人じゃ寂しいよ、シンにーも一緒にいいな」

うむむ、なれば仕方あるまい、きつと皆凄まじい勢いで左右から群がるだろうから本音ちゃんが圧迫されなくて自然に写る事の出来るのはやはり真ん中しかないか？

だが一気にそこまで移動するのはやや苦しいか、なれば…俺は本音ちゃんの為だけに鬼になろう。

「それじゃ撮るよー。フェルマーの最終定理を証明せよ！」

「えー…2?」

「ブブー！ 正解は…私知らない！」

「少し抱えて移動するから降ろした時に写真に写るポーズをしてね」

言うと同時に本音ちゃんを抱え上げ本音ちゃんに負担が掛からない、かつ素早くいつちーとせつしーの間やや後ろに本音ちゃんを降ろして本音ちゃんがピースをするのにあわせて俺もピースをする。

ちなみにこれバランス力とかその他諸々の要素の所為で少なくとも生身の人間が出来る移動方法じゃなかった。

「ど、どうして全員入っていますの?!」

「抜け駆けは駄目だよー！」

「クラスの思い出だと思えば良いでしょー」

「それよりいつちーの答えに俺は驚きを隠せない、何故（なにゆえ）定理の証明で数字単体が出てくるのか」

「それに確かそれって…1995年にアンドリユーフて人が証明したよね、シンにー」

驚いた、正直今すぐえ驚いた、本音ちゃんがそんな事を知っていると思わなんだ、アレ未だに解けてないって考えてる人も居るのにな。とりあえず本音ちゃんを撫でておこう、撫でり撫でり。

「きやうくすぐつたいよ、シンにー」

「本音ちゃんは本当に頭の良いお方…」

「と…籐ヶ崎君の表情がどう見ても娘の成長を喜ぶお父さん…！」

何だ、意外と若く見られてたな俺…若いおじいちゃんと言われる事も多かったのに。

それと甘い物がそれほど得意ではない俺にとっては大した情報ではなかったがクラス対抗戦では優勝したクラスが学食のデザート商品半年フリーパス権を与えられるとか。

そういやそんな物もあつたな…まあ意味を成さないままに消えるんだがな。

恥ずかしそうに近くにあつたであろう飲み物を取ってクピクピと飲み始める本音ちゃん、すつごく可愛いです。

「…思い出した…そう言えば今日だったか？」

「どうしたの〜？」

「うんにゃ、ちよいと用事を思い出しただけさね、俺はここいらで失礼するよ」

どっちらせ、中腰だったのを普通に立っっていざ食堂から出ようと一歩踏み出す。ぎゅむ。

どうした…ジャツク…

「やだあ…行っちゃやだよ…シンにー、一緒にいいよう…」

「Oh…本音ちゃん、一体何事か…何ごと…と？」

ここで目に付くはさつきまで本音ちゃんが、正確にはさつき本音ちゃんが手に取っていた飲み物である、なんか炭酸的なものであろうそれは泡が立っている。

指先を突っ込んでペロりと舐めてみた、うん…生前よく飲んでいたものの感じ、間違いない、アルコールだわコレ。

本音ちゃんから俺の顔が見えなくなるように優しく抱きしめる、本音ちゃんも何か抱きしめ返してくる。

「おい、一つ聞きたい、よく聞けお前ら」

作らない素の声、物凄く低くて感情の何も籠っていない声だ、正直怖いから声作つとくと生前言われ続けた声である。

感情が無い声なのは仕方ない、だってこの声の時は感情が無いのだから。

「ひ、は…は…」

「ココに何故か酒がある、こいつを持ち込んだのは何処のどいつだ」  
「わ：私：です」

「スイス国籍か、確かスイスでは14から飲酒が可能なんだったな  
…」

「そ、そうです！ だから私に非は無いつうか…」

「黙れよ、茶番はもう終わりだ」

「ひ…や…!」

「郷に入れば郷に従えって言う日本のことわざを知っているか？」

「知らない…です」

「覚えておけ、日本では飲酒は二十歳からだ、いいな？」

「は、はい!!」

よろしい、分かったならそれでいいんだ。

別に酒を飲むのもタバコを吸うのも好きにすればいい、ただ本音ちゃんに被害が渡ったのだけは許せん。

本音ちゃんはさつきから俺の制服から手を離してくれんし俺は一体どうやってココを離れればいいんだ…

「本音ちゃん、俺は行かない所があるんだ…だから」

「やあ〜！ シンにーと一緒にいいよ〜!」

「こ、これは困った事になった…」

面倒な事になったとは言わんよ、もういつその事連れて行つたほうが良いのではなからうか？

いやいや、俺はドの付くHENTAI行為、もしくはセクシユアルハラスメントを行うつもりなのに本音ちゃんを連れていくことなど出来んよ…

「誰か本音ちゃんを部屋に返してあげてくれ…」

「じゃあ私が…」

ぎゅむ、ぐい、服を引っ張られたのでその方向を見ると本音ちゃんが天使でさえ崇めるレベルの笑顔で俺のほうを見ていた、うむ、可愛い。

「シンにーだあくい好き〜」

「OH…本音ちゃんは酔つとるだけなんや…せや、他意は無いんや

…例え好きやつたとしてもそれはおじいちゃんに対するもんで…」

「何か籐ヶ崎君が若干壊れてるんだけど」

「い、いかん！ 今日これ以上ココにはおれん！ 俺もう行くさかい後ホンマ頼んだで！ なんやぎょうさん変な事あつて俺の頭の中がえらい事になつとんねん！ ほんじやな！」

離脱だ！ 離脱する！ 無理だぜこんなの！！

現在はアホみたいな形の校舎、屋根の上でVの四脚を纏って待機している。

ちなみに定期的にリコンジャマーを撃っている為学園側から感知されないのだ、もつと最新技術だけじゃなくて視認による索敵も、監視も行うべき、ザルじゃねえか。

「……ほん…ど…なのよ…ワケ…」

「みい…つけたあ…キヒヤハハツ」

スキャンモードに切り替え熱源探知、待ちに待った女性の御出ましだ、さーて次は…

『侵入者ヲ発見、ソノ場デ停止セヨ』

「なっ、なに?! 何処よ?!」

キョロキョロと回りを見渡す、地上ばつか見てるから一生経つても俺は探し当てれんよ？

ジャンプ、ブースト停止、ターゲットの女の子の目前3メートルに着地するよう調整。

ズ、ガゴン！

「きゃ!! …け、警備ロボなの…これ？」

『質問ニ答エヨ、学園ニ侵入シタ目的ハ』

「わ、私は留学生よ！」

『生徒手帳ヲ揭示セヨ』

「そんな物…まだ持ってない…で、でも！ ほら！ 制服、学園の制服があるわよ！」

『…生徒デハナイト認識、ターゲットノスキャンヲ開始シマス』

「え、ほら！　じゃあ学園の教師に確認を取ってよ！　そしたら」  
『ターゲット、身体的特徴ヨリ、以後「無限二広ガル大平原」と仮称』  
その瞬間一步踏み込んだ女の子が部分展開した拳をコアに叩きつける、強度も凄まじい為フレームがひん曲がったりは無いが兎に角物理的な衝撃が凄い。

そしてコレ、四脚つまりCEである、他パーツも見た目重視でCEなのでKEがゴミレベルなのだ。

APがたった一発で2万近く持っていかれた、パイルか。

「このポンコツ…!!　今私のどこを見て平原なんて言ったのよ!!  
ぶっ壊すわよ、この中国代表候補の凰(ファン)　鈴音(リンイン)がツ  
!!」

『データベース検索…凰　鈴音、確認シマシタ…専用機、甲龍  
(シエンロン)…』

「え？　あ…な、名前言えば…良かったの？」

『受付マデ…ザザツ…案内…ザーツ…シマス』

機体からバチバチ言っているのをいい事にノイズも混ぜてみる、りに…ふぁに…平胸板(たいらのむないた)がビクビクしながら俺に付いてくる。

偶にガコン！　と、バランスを崩しながら(故意)移動。

「あ、あんた…大丈夫なの…？　つてロボに聞いても無駄か…反応なんてあるわけないし」

『問題アリ…ザザツ…マセン、受付…ザツ…へノ御案内マデハ持ちマス』

「反応あった…！　日本の技術凄い…て、それって大丈夫じゃないじゃない！」

ゆったりのつしりガシヨンガシヨンと足(4本)を進めていくと受付窓口が見えてきたのでそちらを指差す。

『目的地デス。後ハ…ザーツ…オ気ヲ…ツケ…テ…プツン』

「う、嘘…壊れちゃったの…？」

指差したまま完全停止、アイセンサーの発光は停止したけど見えてるんだよね、だから何とも言えない表情をしつつ顔の前で手を振った



り触ったりしてくるのがシユール。

「ありがと…それと、ごめんなさい…」

平胸板があちらへ向いて歩いていくのにあわせてAC換装、ステイシスに変化。

美しいタップダンス（無音）を繰り広げながらその場で待機、会話を盗み聞きなう。

「すみません、留学生の凰鈴音です」

「あ、はい、遅かったですね」

「えと…その…まず言わなきゃならない事が」

「なんですか？」

「えー…警備ロボをその…壊してしまいました」

「警備ロボ？」

「足が4本ある…」

「警備ロボなんてありませんよ？」

「え?!」

平胸板がこつちを指差して「だつてあそこに！」なんて言いながらこつちを見た瞬間中々GOODな表情を見せてくれた、そして指差した腕がプルプルと震えだす。

「な！… 何よコレ?! てかあのロボットは?!」

「警備ロボは既に死んだ、ココに居るのはランク1、オツツダルヴァだ!!」

「知らないわよ!!」

その後QBを吹かしながら逃亡、自分の部屋へと逃げ帰った。

なお、途中でちっぷーに見られていたらしく出席簿ではなく拳が次の日の朝俺の頭に直撃したのは余談である。

システム通常モードな予想通りのお客さんがミサイルカーニバルで派手に行くお話

朝、朝である。いや、だから何というわけでは無いんだが、んでもって目が覚めた俺は取り合えず現状を確認。

暑いからだろうな、掛け布団を盛大に蹴り飛ばしてベッドから体半分転げ落ちている。

枕とは反対側、つまり足元側から上半身だけ床に接着し足はベッドの上に乗っかっている。

ついでに言うとうつつ伏せだ、うん、何時も通り。

「おはようございます。システム通常モードに移行します」

誰も返してくれない朝の挨拶、朝起きて挨拶してくれるのはアーマードコアVだけ！

みんなも寂しい一人暮らしから挨拶してくれる生活へ！アーマードコアV発売中！

ただし真夜中でもおはようの挨拶！ 時間を考慮してそれにあつた挨拶をしてくれればベストだった。

地面を這って部屋に置かれている金庫へ移動、右手で操作を始める。

まず指紋認証、そして網膜認証、DNA認証、パスコード認証と次々解除していったって金庫を開く。

ちなみに電子機器がおじやんになった時の為にダイヤル式の開け方もある、ただし何か27回数字を合わせなければならぬのでできれば遠慮したい。

壊して中身を取ろうとするなら少なくともアクアビットやトースのコジマキャノンレベルの火力が無いと駄目な上そんな事をすれば中身がとてもしゃないが見れるような代物ではなくなる。

中身は社の案や希望、企画書など見られればそれなりにやばい物である、故に警備は厳重、ついでに言う重要であればあるほどデータ化はされていない、紙媒体の方が潰しやすいから。

「んー…有澤からか…もつと高火力グレネードが欲しい…案は無いだろうか？」

一体何処に向かっているんだ…これ以上火力を上げてどうしたいんだ、実弾系の兵器ではロケットとグレネードで天辺を取っているのに…ああ、OWは覗いて。

パイルは…実弾兵器とは認めにくいし少なくとも遠距離ではトツプクラスだ、何が不満なのだろうか。

「グレネード…グレネード…ガトリンググレネード…？」

うむ、この案を一応出しておこう、火力面では凄まじい事になるだろう。

ただそれを撃つ事の出来る台座（IS）は存在しないだろうが…ならばAFに搭載すればいい！

連結車両方にすれば見事にグレートウォールの出来上がりだ、よしよし、AF設計思想の案に入れておこう。

「次は…またハッキングか…俺がIS学園に入ってから急激に増えたな…IPこそ違うがアクセス経路は同じだし同一犯だろうな…」

逆算も皆やる気が無いって言うか暇つぶしにやってきた所調べようぜ！ 的なノリだからなあ…

お？ おやおや…

「MSACが逆解析できたか、しかし何でまた…おい、誰だよ、解析成功したらプレゼントって言ったのは」

こんなの報告書に書くなよ、MSACお前はまともだと思ったのに…それにしても旧企業（AC4以前の企業）のやる気の無さがヤバイな…キサラギなんか自己部署で完全に完結してしまってるじゃないか、なんだよ生物兵器に逆算任せてたって。

どうやら解析結果からハッキングを仕掛けてきたのは「更識」と言う所らしい、残念ながら全く知らん。

それにしても更識からのハッキング回数を纏めた所実に746回、どんだけカレードやる気無かったんだよ、本当にビックリするわ。

そんなこんなで全部目を通しそれぞれ適切であろう返信を書いて

金庫にしまう、ちなみにこれが朝の俺のやる事（シゴト）であるが稀に朝で終わりにきらない事がある、その時は教室に持って行って書類に目を通したり社に連絡したりする。

前HR中のソルデオスがその朝に終わり切らなかつた仕事だ、なおちつふーには許可を貰っている。

まあ他社、他国の人間に見られるかもしれないと言う問題点もあるが優先順位の低い、及びあまり重要でない物を選んで持つて行っているので問題無い、AFは重要な案件では無いのか？ だって？

その日の重要度が全体的に高すぎてそれが一番低かつたんだ、仕方ないでしょう。

取り合えずシャワーを浴びる事にしよう、因みに義手義足はつけたまま、と言うよりも外す事自体が減多に無い、最近多いけど。

シャワーシーンはポイー、ムキムキのオッサンのシャワーシーンとか誰得だよ。

義手義足の水気をしっかりとって体を拭く、制服を着た後は食堂へ向けて歩き出す。

それと今の時間かなり早い、食堂が開いた直後だ、流石に殆ど誰も居ないだろう。

食事は兎に角肉だ、肉、朝っぱらから肉と米、それさえあれば一日頑張れる。

「美人なお姉さん！ ステーキセット、ライス大盛りでお願いします！」

「嬉しい事言ってくれるじゃない、まっかせときなさい、兄ちゃんの体型に合った量にしてあげる！」

「やつほおい！ お姉さんマジ内面も美人！」

なんて言うけど実際結構若くて美人なんだよね、髪の毛をやや乱雑に後ろに束ねて笑うお姉さん、俺のタイプではないが間違いなく美人だ、うん。

「出来たよ兄ちゃん！ しっかり食べてってね！」

「そんな…！ 早すぎる…!!」

「ここは学食だよ？ 早くて安くて美味しいのが学食の必須条件！」



「ッ……！」

「出来ませんがね、IS関連の事だからカロードで分かったのだよ」

胸元を押さえる谷本さん……Bか、いや何、何がどうと言うわけではない、んふーふ。

クラス内の生徒達を見てアルファベットを頭の中で言っていく作業をして楽しんでいると不意に教室の扉が開いた、さて、サイズはどんなもんだ！

「お、もう来てたのかシン、早いな」

「……AAAだ、男だから仕方ないが……」

「どうした籐ヶ崎」

「モッピーは……E……いや、Fか」

「何の話だよシン」

「π乙ダルヴァ」

「ッ!! 死ねえ!!」

モッピーの右ストレートが俺の顔面を狙って飛んでくる、何、問題ないさ、グリントミサイルを避けるよりも容易い！

「うぶむッ!!」

「シイイイイイイイン?!」

ただしそれはACを纏っている時だ、生身で拳を避ける事など1.20フラジールにとつくよりも容易い！

ちなみに俺はACテストのスマちゃんにさえとっつけないぞ！

「みんなくぐつどもくに……シンにー?!」

おっと、俺が殴られた瞬間本音ちゃんが教室に入ってきた、これはイカン、心配させるわけには……行くまいッ!!

「っふー! ずえあ!!」

「一回転して綺麗に着地したあ!!」

「自身の筋力その他を人を超えたものに作り変えるなど容易い!!」

「何か中学二年生みたいなこと言ったあ!!」

全力で殴られた時折れた鼻の骨は既に治した、なんだかドンドン治療速度が速くなってる気がする、そのうち頭ぶち抜かれても死ぬ前に

無意識的に治せるんじゃないだろうか。

「もおっ！ 言っただでしよしののん！ こんなことしちや駄目だつて！」

「お前には失望した。もう期待はしない。」

「う、う、うう…わ、私は悪くない！ そいつが！ 籐ヶ崎が変な事を言うのが悪いんだ！」

「え？ シン何か言ってたの？」

「まあ、空気で構わんがな」

「意味わかんねえ」

うーうー！ とモツピーを威嚇する本音ちゃん、直ぐに手を出すとは…ただけませんかあ…

「ねえねえ、織斑君、2組に転校生が来るんだけど…知ってた？」

「え？ そうなのか？ 知らなかったな…」

「なんでも中国から来たらしいよ！」

「へえ、中国…か」

しんみりとして遠くを見るいつちー、何か枠外でせつしーがわたくしの存在を危ぶんで云々とか言ってるが正直どうでもいい。

俺は俺でストーリーが進行するまで暇だから本音ちゃん以外の女子のBWHを予想し続ける。

と、ここで俺の超絶グッドな耳が2組側から響いてくる足音を感じ、音の大きさ、間隔から非常に小柄であると予測！

「トゥットウルー ハッハー パツパーツパツピー♪」

「何その鼻歌…」

「オールドキングだ」

ぺたりと閉まっている扉の直ぐ目の前に立つ、開けた瞬間凄まじく驚くだろうな、んふーふ。

一応物凄い不機嫌そうな面をしておく、眉間に皺を寄せて目力で人を殺せそうな感じ。

「専用機持ちで代表候補だって噂だけど2組の代表はそうじゃないし余裕だね！」

ガラリ

「その情報、古…い？」

控えめに開けられた扉から顔を出した少女、ふんすと無い胸を張っていたが目の前にあるのが馬鹿でかい肉塊で言葉が中断される。

「ひきゅっ!!」

「何だ今の声」

瞬間的に涙目になって尻餅を付いた平胸板、今この瞬間は、小さな存在こそがすべてだ！ 私と萌えてみる！

ニタアと笑いながら一歩前に進む。

「お客さんだぜ、いっちー…予想通りのな」

「ひ…あ…」

左腕をギチギチ動かしつつ一歩前進それに合わせて平胸板がズリと後ろに下がる。

いやあ…この反応イイなあ…!!

「誰だよシン、お客さんって…鈴？ お前鈴か？」

「い、いひかあ…！ たひゆけてえ…!!」

「ギヒヒヤハハハハハハアツ!!」

「ツ!!!」

助けを求めた所で口をガパリと大きく開けて盛大に笑う、するとどうだ、声にならない声を上げたじゃないか!!

「おい、やめろよシン…」

「たんのしい☆」

「まあ…あの反応は仕方ないな」

「そうですね、籐ヶ崎さんの顔も見た目も声も笑い方も極悪人ですものね」

「しかも性格も微妙にひん曲がってるしね」

「むっ！ シンにーはとっても優しいんだよ〜！」

「いや、布仏さん限定だし…」

しゃあなしのいっちょを俺の前に持ってくる、力尽くでぐいっとな、「うげっ」とか動物を絞めた声でしたが大丈夫だと思おう。

「だ、大丈夫か…？ 鈴」

「いちかあ…こしぬけちやったあ…」



「手を取って優しく起こしてやれよ！ちー」

珍妙な顔をしながらも俺の言ったとおり行動するいつちー、こいつ詐欺とかそういう物の類に引っかけたりやすいだろうなあ…

お、おうふ…なんか背後から殺気が…ううん、モツピーとせつしーだ、俺を見るな…ッ！ 見るなあッ!!!

「それにしても久しぶりだなあ、鈴！ 元気にしてたか？」

「うん…」

「もしかして鈴が中国の代表候補なのか？ 短い期間だったのにすげえなあ」

「がんばった…」

「やっぱり鈴は凄えよ…俺なんか全然だもんな」

「いちかにあいたかったから、がんばった…だいひようこうほになれば、にほんのあいえすがくえんにいけるって、にほんにいけば…またいちかにあえるって…がんばった」

「鈴、お前大丈夫か？ やっぱシンの所為か？ おいシン、お前…お前どうなってるの?!」

「燃える… 燃えてしまう

フアンタズマ…

俺が… 消えていく…

これは… 面倒なことに… なった… と、せつしーとモツピーに踏まれつつ、いいか、俺は面倒が嫌いなんだ！

「駄目え〜！ シンにー虐めちや駄目え〜！」

「大丈夫！ です！ わ！ これは！ ただ！ の！ マッサージですわ！」

「そうだ！ これは！ ただの！ マッサージだ！ だから！ 問題！ 無いッ！」

「話が…違うっすよ…俺は…特別だって…！ 死にたくない…!!」

「シンにーが死んじやうよく！ 止めてよく！」

なんかこう始めは背中が刺すように痛かったのだが、だんだんと恍惚感に変わってきた。ブダペストまで持つかな？

「凰 鈴音」

おお…(魔)神さまのお出ましじゃあ…こわやこわや…教室の扉の前に陣取るちっふー。

「う？ ちふゆさん？」

「貴様は2組の筈だ、なぜ1組に居る？ なぜ一夏に引っ付いている？ なぜだ？」

「ご、ごめんなさ…」

「消えろ、イレギュラー!!!」

ダーイレイヴオオオオオン!!! そんなマジギレ顔で怒鳴んなくてもいいじゃない…やりすぎたんだ、ちっふーはな!

「ひう!! えうえう…!」

涙を浮かべながら脱兎の如く二組へと逃亡する平胸板…いや、流石に不憫すぎるから不名誉なあだ名は止めてやろう、鈴音(すずね)の逃げ去った後ちっふーが額の汗を拭う動作をやたら清々しい笑顔で行って…

「ふう…」

「何一仕事終えてすっきりしたって顔をしてるんだちっふーは…」

「さて、一夏」

急にその場でぺたんとして座りだすちっふー、皆様、ご存知だとは思いますが彼女は20歳です。少なくとも10代ではありません。

「な、なんだ？ 織斑先生」

「千冬姉だ、お姉ちゃんは腰が抜けてしまった、一夏」

「ど、どうしろと…」

「優しく抱き上げて差し上げたまえいっちー…それで全てが丸く収まる」

「で、でも」

「ん」

ちっふーが両手をいっちーの方に突き出す、そう、ちっちやい子が抱っこして、と無言でおねだりするポーズだ、皆様、ご存知だと思うが彼女は20歳だ、ありえるのか?! こんな20歳が!

「んー」

「おい、早くしろよ！っちー、そろそろ踏まれてる俺の背骨が死ぬ、半身不随になる、腰より下が機械になる」

「わ、わかったよ…」

仕方ないといっちーが渋々ちっふーを抱き上げる、一々体勢を変えてお姫様抱っこにして貫つたちっふーが俺に足を乗つけてる二人を見る。

「ふふん」

「うぎぎぎぎぎぎ——ッ!! (がっ!がっ!がっ!がっ!がっ!)」

「イッ!! 痛いッ!! 割と冗談抜きでッ!! これ生命の危機だよねッ?! AC展開してもいいよねッ?!」

刺す様な痛みって言うか確実に何か背中中に浅く刺さってる、これ多分今日に限って学生用革靴じゃなくて少し細くて少し長いタイプのヒールブーツ履いてるせっしーだと思う、何か背中が確実に濡れてる、それも踏まれるたびに範囲が広がってる。

「ッ…! ツ! …ッ!!」

「駄目! 駄目!! 血が出てる!! シンにーが死んじゃう!」

「ハッ! わたくしは何を?!」

「わ、私は一体…!!」

死ぬかと思った、治療治療、終了、まだ鈍い痛みは残ってるけど問題は無い、いくら踏まれるのが好きなDMでもこれは多分きついと思う。

あと無制限に物を創れると思われがちだけどこれかなり疲れるんだよ?

女子に踏まれて死にそうになる世界一の企業の御曹司、ギャグか、ギャグだ。

「ワタシハナニカ…サレタヨウダ」

「シンにーが…シンにーが…!」

「ふむ、もういいぞ一夏」

「え? あ、ああ分かった」

「籐ヶ崎、そう言えば昨夜無断でISを展開し寮内を飛んでいたな」  
「ISではなくACです、よって問題ありません (キリッ)」





その上いくつかの兵器はISをも撃破出来るのだ、カラードを知らない軍属、企業、果ては一般人など居るわけが無い。

それも最近IS用の武器まで製作しただのだから我が社の株は天井知らずである。

無論販売しているのは俺のACに搭載されている物の足元にも及ばない、所詮は競技用に制限を掛けた物、因みに俺のACは元々軍用だから出力や弾薬、装甲を制限しなければ本当に世界中のISを同時に相手取って勝利できる。

「そう、カラード、で、昨夜破壊された警備ロボに関してだが、まあアレだ、正直どうでもいい、アレ俺だし」

「…へ？ 俺？」

「そう俺」

「う、嘘！」

「警備ロボは既に死んだ、ココに居るのはランク1、オツツダルヴァだ！」

「そんな……………」

「お、来たな」

ピクミンよろしく女子を大量に引き連れたいっちーが現れる、俺を見つけて一安心したような顔をした。

「遅かったじゃないか…目的は既に果たしたよ…彼女がな…全ては私のシナリオ通り、残るは憎まれ役の幕引きだ」

「何言ってるんだシン」

「私が生きた証を…AC乗りとして生きた証を…最後に残させてくれ！」

「い、一夏！ 久しぶりね！」

「そうだ…私はAC乗りだ、それ以上でも以下でもない」

「籐ヶ崎さん…それを言いたいだけですのね」

「これで全てが終わるのか…」

「鈴、もう大丈夫なのか？ そうだ、一緒に食わないか？」

「礼を言う…」

完全に俺を無視して話を進行させようとするお二方、いいさ！ 俺

は本音ちゃんに慰めて貰うさ！

「本音ちゃん…いい、いねえ?!」

「布仏さんなら4組のご友人と購買に行きましたわよ」

「……久方ぶりにシモネタ大乱舞か」

「時と場所を弁えろ、籐ヶ崎!」

「弁えてるさ!! 少なくとも本音ちゃんの居る所ではな!!」

やさぐれ籐ヶ崎、取り合えず新キャラにセクハラをしてやる。んふーふ。

まずは相手の特徴を捉えなければ……ふむ、綺麗な足だな、だが足を褒めた所でセクハラにはならん気がする。

いや…言い方をすっげえキモくしてみれば良いんじゃないか?!

「だって私、強いもん」

「んふ、んふふふwwり、鈴ちゃん、ぐふふww足、綺麗だねwwwwぐふふww」

「き、気持ち悪…!」

「あー…やっぱ違うな、こんな俺じゃねえや、うん、鈴音(すずね)のちっばい揉ませて」

「しっ…死ねえっ!!」

とここでハイキック、身長低いから俺の頭にも届いてないがな!なんせ俺はいっちーより身長高いからな! 最近身長180センチを越えた、ちなみに生前は169が最大だったから多分食生活とかで変わるんだと思う。

皆もちゃんと野菜とか食べようね、好き嫌いは駄目だよ!

「ほいつ! 見えた! ブルーとホワイトのストライプ!!」

「~~~~~ツ!!」

「いっちー、鈴音のペエンツ(かなり良い発音)が青と白の縞々だったわけだかどう思う?」

「なっ、何言ってるんだよ!」「そりゃ活発な鈴らしくて可愛いけどさ(声真似)」

「う、ひう…うう…!」

「凰落ち着くんだ、アレは籐ヶ崎の声真似だ、非常に腹が立つ事に聞





モノを食べる時はね誰にも邪魔されず自由でなんというか救われてなきやあダメなんだ 独りで静かで豊かで…

「幼馴染だよ、あーセカンド幼馴染ってのかな？ 箸と入れ違いで転校して来たんだ」

「げふう…」

「下品ですわよ籐ヶ崎さん…って早い?!」

「あ、続けてて、俺は社と連絡取らなきやならんからさ」

「ね、ねえ一夏…」

「なんだ？」

「コレって本当に…カラードの？」

「そうらしい」

「あ、もつしー、父さん？」

『残念！ パパじゃなくてママでした！ シンくん元気？』

「母さん！ 元気元気ー、で、社長、それぞれの部署はどうですか？」

『そうね、おおよそ問題ないわ、キサラギが新しい生物兵器を生み出して放し飼いにしている事以外は』

「相変わらずの変態、今日の夜A F設計思想の新しいのを送るつもりですが、いかがです？」

『今日は少し駄目そうだからまだ保持しといて、明日の朝護送用意をするわ』

「わかりました社長。 で、母さん！ IS学園マジパネエ！」

なんて取り留めのない会話、その通り、俺はマザコンファザコンです。

「あ、食い終わった？ 俺も今連絡終わった所だけど あーおっぱい揉みたい☆」

「…コレが本当にカラードの御曹司なの？」

「本当ですわ、その上非常に腹立たしいですがわたくし達の中で一番強いのです」

「俺、同じ土俵に立って貰ったのに一撃も当てれなかったからな…」

「それってあんた達が弱いだけじゃないの？ 言っとくけど私は強いわよ」



「俺あ籐ヶ崎信一郎ってんだ、お嬢さんは？」

「籐ヶ崎信一郎…本音がよく話してる…シンにー？」

「ほお、本音ちゃんの知り合いかね！　なら…セクハラは出来んな…残念だ」

少しシヨンボリ、きつと顔を真っ赤にしてあたふたする様は可愛いと思うのに…

いやいや、既に可愛いんだがね、うん。

とにかく今は作ったアセンを試してみたい、きつと派手なんだろうな…

「では俺は失礼するよ、ミサイルカーニバルです。派手に行きましよう！」

「あ……」

ガシヨン、ややスキップスキップでアリーナへ移動、いつけねえ！  
弾切れの時対策がねえ！

アサルトアーマーでも積んで置くとしましようかね、OBをI—R  
IGEL/AOに…

名称設定「ミサイルカーニバル」でいいや。

しばらく、と言う訳でもないんだが途中で面倒になって壁を蹴り  
回ってアリーナに到着。

「よっこおい!!」

「きやあっ?!」

「外壁から人が…?!」

「おっとすまねえ、ちよいと横着してしまっただけな、それにしてもIS  
スーツっていつ見てもエロイけどそこんどこどう思う?」

「へ、変態だー?!」

壁付近のコントロールパネルに歩いて行って追加バリアを展開し  
て小型のフィールドを作成、つっても横だけで2〜300メートルは  
あるんだけどね、広くね？

続いて仮想敵を設定、バーチャルドローンが生まれる、レベル設定、  
取り合えず国家代表レベルでいいかな。

「ドローンレベルを設定しました。国家代表レベルです。所定位置にISを展開・装備して待機して下さい」

「チェンジ！ アーマードコア！！ 「ミサイルカーニバル」です、派手に行きましょう！！」

「う、嘘…… 国家代表レベルって…勝てるわけないじゃない…」  
所定位置に歩いて移動する、LATONAって珍妙な足の形してるよね、膝に付いてる扇風機って何の役割があるんだろうか？

「所定位置への移動を確認しました。戦闘開始まで5・4・3・2・1・開始します」

「巻き込まれないで下さいよ、ブツパ・ズ・ガン！！」

開始早々に横へクイックブースト、案の定開始と同時に飛んで来たレーザーを回避、後はENに気をつけつつクイックブーストをしながらロックを続けてミサイルを乱射し続けるだけ、おお、凄いな、ヒット数もかなりあるがそれなりに避けている。

まあ、逃げてくる方向は予測できるがね、ENを使い潰す気で連続クイックブースト、ターゲットの逃亡予測地点に移動完了。

バシユン

「つとあぶねえ、だが当らん」

的確に逃げながらも俺に射撃をしてくるとは普通はそこまで処理が追い付かんだろう、なるほど、国家代表だ。

ドヒヤア！

「ずえあぁッ!!!」

つしやおらあつ！ ドローンの首ひつ掴んだあつ！！ 武器は撃てんが物自体は掴めるからセオリーをぶつ壊す闘い方も可能だ！

俺のAPもごっそりいかれるが面白いことを思いついた、このままミサイルフルブーストと行こうじゃないか？

「Kaboom」

APが1万以上減ったがドローンも撃破した、PAはまだグリーンだしオーバーキルのアサルトアーマー。

緑の光が俺を中心にバリアを埋め尽くす、範囲制限をしていたためバリアをぶつ壊してつてのは無かったか、良かった良かった。

「ドローンの撃破を確認しました。お疲れ様でした」

「ケツ、やはりこの程度か 下らない任務だ。評価にもならん」

「す、凄い…確かアレって1組よね…」

「お、終わった…さようならデザート…」

おお、なんだ見てる人が居たのか、是非とも感想を聞いてみたい所だな！

「弾幕、薄くなかったですか？」

「バリア内の殆どがミサイルで埋まったよ?!」

つつてもこれじゃあガキでも勝てるな、クイックブーストしながらミサイルを乱射して近付いたらアサルトアーマーの単純作業で勝てるんだし、これ武器の性能だよ武器の性能、もっと技量を鍛えるならアリーヤかなあ？

てかただ単純に勝つだけならガチタンにグレ腕ガトリングで大方何とかなるんだよね。

「通常、IS用問わず武器兵器なら是非とも我がカラードへ！ お客様のご購入を心よりお待ちしております！」

「え…は、はい」

さり気なく自社の宣伝をする俺って愛社主義！

そういえば今日中にPA張れる機械創るんだった、もっかい整備室に行つて創ろう、自室には戻る気になれん、遠いし、道中暑いし。

「拙者の名は籐ヶ崎信一郎!! IS学園の愛と正義と真実と勇気を守り、あつたばかりの後輩に慕われるとても頼もしい漢オ!!」

「ひゃ…!!」

「あ、ごめん」

扉を開け放つて名乗り文句を叫ぶとあのライトブルーの髪をした女の子が拙者の名乗り文句に驚いてしまったでござる、いやはや、反省反省！

取り合えず部屋の明かりを点ける事にする、ただ創り出すにしても細かい作業の気分はいるし何よりこんなに暗い所だと目が悪くなる。

「……明るい」

「暗い所で作業なんぞしてたら目が悪くなっちゃうぜ？ 既に悪い

からといってそれ以上悪くなるなんてのもあるんだから」

「これは……眼鏡型の…投影ディスプレイ……」

「なら尚更だ、それと……携帯型投影ディスプレイならそれより安いので高性能なのがローゼンタールから最近出たけど」

「……………」

「嫌われちゃったいな、おじいちゃんシヨック」

ぐるりと部屋を見渡すと部屋の隅に見慣れぬISが、何だコレ？

「何だコレ、打鉄？ いや、にしては特性捨ててるといっつか…防衛低下型打鉄つてところか？ いや、代わりにエネルギーシールドが増強されてるとか…」

「私の……専用機……………」

「おっと、それはすまぬ。俺は何も見なかった」

他企業の専用機をマジマジ見つめるのはいかな、さて俺は俺の作業を始めるとするかね。

さて、0から物を創るのは久方ぶりだったか、今までもつぱら物体の変化と治療だったし、形状は…

「うーむ…腕に埋め込んで見ると面白いかも知れんな、でもそれだと右が…」

頭に浮かんでは消え、また浮かんでは消えを繰り返しているとカシユンと音を立てて整備室の扉が開かれる。

今更だけどここの整備室って個別の部屋がなくて仕切りがあるだけなんだよね、IS用ハンガーは部屋の隅に3つほど、専用機を弄るには適さない場所だ。

「わあ、かんちゃん、ちゃんと電気点けたんだね」

「本音……どうしたの？」

「私も手伝うよ」

「いない……一人じゃなきや…意味が無い……………」

ん、本音ちゃんか！ にしても何と言うか…微妙な仲っぽいな。

「二人で出来る事なんて高が知れてるぞ、一人で全て完結できる人間なんざいやしないんだから、やあ本音ちゃん」

「わあ！ シンにーだあ！ あのねあのね、かんちゃんはね」

私の幼馴染なんだ〜」

「何も知らない癖に……」

「知らんよ、今日始めてあつたしな」

「えつとね…そのね…？　かんちゃんのお姉ちゃんがね…？」

「本音……」

「えう……」

「この会話から察するなら…かんちゃんの姉が一人で何かを成し遂げたって事か」

「かんちゃんって……呼ばないで……」

いやだって名前聞きそびれてたんだもの、だったら女の子とかお嬢ちゃんとか本音ちゃんの言ってた名称を使うしかないじゃない。

「簪……それが名前」

「ふむ、のう？　簪よ、さつき一人じゃなきや意味が無いと言ったな？　て事は簪の姉は一人でISを、専用機を作ったということか？」

「……そう……だから私も……」

「言つとくがね、一人でISを作れる人間なんて篠ノ之束しかいないと思うぞ」

「シンにー……」

「何、簡単な話しきね、まずコア、コレが無いとISは組めない、そしてコアは篠ノ之束が作り国が個人に渡す、まあこの時点で一人でつてのは破綻してる。屁理屈だがね」

なんだその納得してないって顔は、仕方ないだろう俺は頭悪いんだから！

上手い説明なんて出来ん、精々なんかのネタを改変してそれっぽくするだけだ。

「資本の支援も無しにISを組める筈もあるまい。俺のACだってカロードの全勢力で作ったんだ」

「でも……」

「そう意固地になる必要もないだろう、何も姉に追いつく必要なんてねえのさ、簪は簪、姉は姉だ、楽に生きりゃいいのさ」

「かんちゃん…？」





「一夏も私と一緒にの方が嬉しいよね？」

「無視を…！」

「げっ！ 箒ば…！」

「ドヒャア!!」

瞬間的にISを部分展開した鈴音と竹刀を振り下ろすモツピーの間に移動し、踵からブレードを展開、地面に突き刺してブレーキ、竹刀がPAに干渉し衝撃が潰され徐々に減速し最後に俺の右手に収まる。

「し、シン?! 一体何がどうなって?!」

「言ったら、ACを展開しなくてもPAを発生させる事の出来る機械を創るって」

「う、嘘…! ISのエネルギーが減少して…?!」

「PAに干渉したISの特殊エネルギーを浸食し食い潰していくんだ、近くにいるだけでISのエネルギーをジワジワと削っていくぞ? 早いところ展開を解いたほうがいいんじゃないか? コアのエネルギーも食われるぞ」

「は、放せ! 籐ヶ崎!」

どうせ放したら放したでまた攻撃を仕掛けるつもりなのではなからうかこの娘は、引つ張つても無駄だ、おっぱいぶるんぶるん振り回して抵抗しても俺の眼福になるだけで放しはせんぞ?

「いや、無理だね、あとんどんだけ抵抗しても無駄だ、生身と言っても女の細腕、弱い筋力でどうにか出来るほど軟い鍛え方はしてないぞ?」

「シンってISが強いんじゃないやなくて普通に強かったんだな…」

「てかいつちー、お前の幼馴染だろ! お前が何とかしろよ、何とか!」

「わ、悪い…」

「それとな! 二人とも気が短い! いいか?! 何でもかんでも力で何とかしようとするな! オッサンは悲しいぞ!!」

「籐ヶ崎には関係ないだろう!」

「そうよ! 部外者は引っ込んでなさい!」

「鈴音は知らんと思うしモツピーは忘れてるかも知れんが隣の部屋俺だからな? 防音機能ぶち抜いて聞こえてくるからな?」

「う…」

「何か言う事は?」

「ごめんなさい…」

「それでええねん、まずモツピー、いつちーと俺はぶん殴ってもいいが他の人間は俺等ほど丈夫じゃないからな、自重しろ」

「うう…」

「次に鈴音、女の子が滅多な事を言うな、男と同じ部屋でも平気などと…じゃあ俺と同じ部屋でもいいのか?」

「よくないです…」

「だろう? だから今度からよく考えるんだ、言つとくが二人に言える事だぞ」

「はい…」

「よろしい、じゃあ俺は部屋に戻るからな、何で俺今日説教やらなんやらをしてるんだ。やつぱさ…やるもんじゃないね、キャラじゃないことは」

バタン

おっと、宣伝忘れてた。

ガチャツ

「通常兵器用PA発生装置、近々カラードから販売するから買ってね! IS用の兵器も防げるよ!」

「帰ったんじゃなかったのかよ」

「自社の宣伝をして何が悪い! イケメンちんちんもげろ!」

バタム!

ふんす、どいつもこいつも! イケメンに次などあるものか! このリア充のフラグメイカーが!!

俺だって! 俺だってモテるんだ!! 自分の体重以上の物だってモテるんだからな!!

いつちーはこの後も十二人から迫られるのか、畜生…畜生…! 俺だって彼女欲しい…!

生前は嫁さんを何よりも大事にしてたんだ、今でも嫁さんを愛してるかって聞かれればそりゃあ愛してるよ？

「でもココに嫁さんはいないわけで…うう、正義のヒーローは孤独なのさ…！」

はあ…いいや、社の資料まとめて枕を濡らして寝るとしよう。

「考えたら俺は大企業の御曹司な訳で、勿論玉の輿を余裕で狙えるわけで、でも誰一人として俺と仲良くしようと言う女子はいないわけ…」

いいもん、俺には本音ちゃんという癒しがあるもん、ストレス発散に明日モンドグロツソレベルのドローンをガチアセンで大虐殺してやる。

革命など、結局は殺すしかないのさ、だろう？

茶番はもう終わりでちよっとお手伝いのこの荒れ具合が騙して悪いが許しは請わないそんな機体で青いイレギュラーを期待するステキな風穴なお話

「で、いつちーや、時間が経つのもって早いなあ…」

「ああ…でも俺、勝てるかな」

「無理じゃね？ 代表候補とブレオンのルーキーがやり合って勝てる保証なんざ殆どねえぞ」

「そう思うならシンが練習に付き合ってくれたってよかつたじゃねえか」

「馬鹿言え、何格上の相手と練習しようなんて思ってるの？ お前ちつふーとガチでやり合って何か学べる自信あるの？」

「うぐ」

今ロッカールームでピッチリスーツを着たいつちーと駄弁っている、入学時みたいに勃起したチンコの如くガチガチに固まっていたから話し相手になってやってる。

「俺はいつちーが勝とうが負けようがどうでもいいが女子達にとってはそうもいかん、故に少しだけ教えてやる」

「何だ？」

「鈴音の甲龍に搭載されている武器で衝撃砲つてのがあがるが肉眼で弾を見ることは出来ん、不可視の弾丸だ」

「へえ…」

「衝撃波を飛ばしているわけだからレーザーやライフル弾よりも遅いだろう、センサーで感知したらすぐに避ける、避ける方向はいつちーの勘だがな」

「わかった」

「いつちーじゃなければもう一個、そうさな…せつしーなら有効な攻略法もあつたんだが…」

「一応聞かせてくれよ」

「衝撃波つてのは距離による威力の減衰が凄まじく大きい、だから



そうだったのか…アレから基本的な事はまさかの整備ステータスがSだった本音ちゃんと半チーターの俺が手伝ってたからつきりもう動く物だと…

「機体の方向性を決める特徴的な武器がまだ出来てないとか…？」

「うん……」

「確かオールレンジ対応型高速機だったよな、どの距離？」

「中距離遠距離のミサイル…」

「そりゃあ……手伝おうか？ 本音ちゃんも居るしそりゃ今大会には間に合わんが次の行事までには出来るだろ」

「ううん……一人です……」

「……かんちゃん……」

「違うの…せめてコレだけは……打鉄式(あの子)の…象徴的な武器だから……私だけで…作ってあげたい」

「なるほど…そーいやコイツは全部会社任せだったな…俺が創ったのはコアだけだったか…」

「……え？」

「んあ？」

何だ？ 俺変なこと言ったか？

思い出せ…全部会社任せ、創ったのはコア……おっと…これは面倒な事になった。

「コアを……作った……？」

「え？ シンにー？ あれ〜？」

「ま、マハハハハハ!! さあさあ！ 試合が始まるぞ！ 一試合目は我が1組のいっちーVS2組の代表で中国の代表候補の鈴音か!!」

すると簪がなんか不機嫌そうな顔になった、後でいい間違いだっただけだと言いつつねば…

なお、一度簪のあだ名を決めようと「かんじー」とかどうだ？ と言ったら「死ねばいいのに……」とか言われた、簪も助走つけてぶん殴るレベルだったらしい。

考えたらこれイギリス、中国、日本の代表候補に死ねと言われたの

か、あとはドイツとフランスだな、ドイツは楽そうだ。

「織斑……一夏……！」

「いっちーがどうかしたのか？」

「かんちゃん？」

因縁でもあったのか？ 子供の頃に云々とか、もしそうだったらフラグメイキングされてもおかしくないな……

「打鉄式は……元々倉持技研で作られてたの……でも……」

「白式……か、まあその白式も欠陥機として放置されて最終的に別の人間が完成させたんだがな」

「へえ〜シンにーって物知りなんだね〜」

「結果的に言えば倉持技研は何も完成させず放りっぱなしで白式を完成させたと声高らかに宣言してるんだ、人数抱えたカラードでもそんな事するのは一人としていないのにな」

ちなみにカラードの雇用方法は引き抜きだ、受付とかは普通に雇っているが。

能力を完全に発揮できなかつたり各地でポコンと出来た高い能力を持った小さな組織とかを引き抜いたりしている。

カラードの潤沢な資金と設備で自分のやりたい事を制限無く出来るのだから大喜び、その結果ド変態が密集する異常空間が出来上がっているのだが。

「おっと、本当に始まるぞ、それにしても何故ココ周辺には人が寄り付かないんだ？」

「と……籐ヶ崎君の見た目だと思う……」

「……だよな」

これには流石の俺も苦笑い、いっちーの方は……まず斬りにかかって、力負けして……距離を取る。

あれ？ 何でいっちーあんなに動きいいの？ てかあの移動方法、俺のクイックブーストじゃね？

「わあ〜すごいね〜おりむー早いねー」

「でも本音ちゃん、あの移動方法ってね……」

「あ、バランス崩して……吹き飛んだ……」

「慣れてなかったらああなるんだ、それも馬鹿みたいにエネルギー食うから普通に攻防して押されるのと同じぐらいエネルギーが減るんだよ」

「へえ〜物知りだね〜」

「いや、アレ多分俺の真似だし…下手に真似するより自分のスタンスを固めた方が良いと思うがなあ……」

お、鈴音のブレードが飛んだ、回転しながら戻っていく、アレもPICを使った物なのだろうか。

なんか格ゲーであんなキャラがいたなあ…ラ〇チ殿おとおおおおおおッ!!!

「お、肩がスライドした、衝撃砲の準備か…」

「早いし遠いしで見えないよお〜」

「専用機つて、便利だよね!」

「展開……してるんだ……」

これから少しの間泥沼試合が始まるか、緊張するな…てかせっしーとかもつぴーでもしかしていつちーのピットで見学してるの？

御偉さん方よりいい所で見てるのな、あれ？ 違うところだっけ？ 覚えてないや。

んむ？ 通信か、そろそろだな。

『信一郎様、恐らくISだと思われる所属不明機が複数IS学園へと向かっています』

「複数?!」

『はい、全て同系機と思われるが、如何致しますか』

「IBISから…：砲撃できますか」

『チャージ終了時には既に所属不明機はIS学園に到達するかしな  
いかの速度です』

「3分…か、分かりました、俺が潰すしかない…ねえ。何機です?」

『4機です』

「多すぎる…いや、分かりました、ありがとうございます」

ACのプライベートチャンネルを終了し、空を見る、あと3分で無人機が4機IS学園に攻めて来る。



1機なら適当でいいんだが4機だと生徒達に被害が出ないとも限らん、制限解除か。

「籐ヶ崎君……? どうしたの……?」

「いや、少し……な」

「わあ! おりむー危ないよー!」

ACのレーダーを起動、レーダーには何の反応もない、ACにも反応しない迷彩をしている可能性がある、視認で確認せねばらんか。セクハラもシモネタもACネタさえも出ない、俺にはこの空気は合わんな……

「いっけくおりむー」

「早い……!」

空高くに一瞬だけきらりと光る物が見えた。

「伏せろツ!!」

「ツ……?!」

「きやつー!」

二人の頭を抱きかかえて俺の影に隠し姿勢を低くさせる、一瞬後に閃光がアリーナに降り注ぎ轟音がアリーナを埋め尽くす。

「な、何?!」

「今のが織斑君の攻撃なの?」

「凄いな……やっぱ」

まだ事態を理解している人間はいない、出入口を見れば既に硬く閉じられロックを掛けられているのも分かるはずだが生憎全員今も砂煙で埋め尽くされているアリーナを見ている。

「と……籐ヶ崎君……? 一体……」

「チェンジ! アーマードコア!! リミット解除ツ! ハングドマン!! ハウザーツ!」

高エネルギーの圧縮を確認、二人の前方に出てハウザーを構える、直後に高圧エネルギー体が脚部シールドを展開したハングドマンに直撃。

「え……? 何? え?! 嘘!!」

「きやあああああつ!!!」

一機は観客席に降りて来やがった、確かに観客席には直接降りる事が出来るからな、TEが高くて助かった、しかもシールドを展開したのに数百エネルギーを持って行きやがった。

「離れる!! 消し飛ばぞッ!!」

「ほ…本音…!」

「うんっ…!」

他の1機はいつちー達の所へ、残りの2機は未だ上空に待機している。

『未確認ノコアヲ所持シタIS（イレギュラー）ヲ排除シマス』

「黙れよ、茶番はもう終わりだ…テメエのコア抉り取ってやるよ、イレギュラー!!」

同時にハウザーを撃つ、避けられるが着弾点で爆発が起こり無人機が巻き込まれる、すぐさまハウザーをパージ、KARASAWAに持ち替えチャージを始める。

チャージしなかったであろう低威力レーザーが飛んで来る、だが避けるわけには行かない。

ハングドマンで真正面から攻撃を受け耐える。

「頼むから無差別攻撃なんざしてくれるなよ?」

『排除、排除、排除、排除』

ハイブーストで距離を詰め右手で持っていたバトルライフルを撃つ。

ISのエネルギーシールドに直撃し、その衝撃で一瞬動きが止まる、時間を掛ける余裕など全く無い、早々に破壊する。

ヒートミサイルを放ち大きくシールドエネルギーを削りブーストを再度噴かす。

「千切れ飛ベッ!!」

エネルギーを通常のハイブーストの2倍消費しこちらへ腕を突き出していた無人機を蹴り飛ばす。

エネルギーをチャージしていた両腕が振れ曲がり千切れ飛ぶ。

『腕部破損、シールドエネルギー消失、戦闘行動続行困難、退避シ…』

「消えろ、イレギュラー!!」

KARASAWAを無人機の顎にあたる場所へ突きつけ発射する、バジュツつと言う音と共に無人機の頭が消失した。

続いて胸部に腕を突き刺し、内部のコアを引き千切る。

その場に投げ捨てクイックターンで振り向く。

「どうして?! どうして開かないの?!」

「いやだ…死にたくないよ!」

「退けろ!! 扉を破壊する!」

扉から人が離れるのを確認してグライドブーストを発動、グライドブースト中にハイブーストをして扉を蹴る、ロックされていた扉が本来ならば開かない方向に拉げ吹き飛ぶ。

「行け! 落ち着いて避難しろ!」

避難を始めたのを確認しアリーナのバリアア付近まで移動する。

「籐ヶ崎君……!」

「シンにも逃げよう!」

「いや、俺は残る。オーバードウェポン! ヒュージキャノン!!」

「籐ヶ崎君…一体……一体何をするつもり……?」

いいね、タイミングとしては最高だ、勿論こう言うに決まってるさ。

「いやいや、ちょっとお手伝いをね?!」

ヒュージキャノン展開開始、チャージ開始。

アリーナ内の無人機はいつちーと鈴音の二人とやり合っている、間に合うか……?

「ああクソ! コアもジェネもOW向けじゃねえからチャージが遅い……! 間に合えよ……!」

「籐ヶ崎君……! 無理だよ……一人で相手なんて出来っこない……」

「男つてのはね、いつでもヒーローに憧れてるもんさ、まあそれに……この程度なんて事は無いしね!」

チャージまであと十秒……いけるか? いや、大丈夫なはずだ、滞空しているイレギュラーに動きさえなければ……!

『一夏あツ!! 男なら! 男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする!』

「クソツ…あと、あと何秒だ?!」

無人機が放送席に腕を向ける、その直後いっちーが無人機を両断した。

無人機の上半身が空を舞い地面へと落ちた、その後ゆっくりとした動作で雪片式型を下げる。

ギチギチギチと正に機械的といった動きで残った片腕をいっちーへと向ける。

チャージはたった今完了した。

「へばりきったIS一機、オイシイ仕事だ」

無人機が突入してきた時の閃光よりも目映く突入してきた時よりもけたたましい轟音が響き、上半身だけの無人機は伸ばしていた腕を残して消滅した。

目前には砕け、大穴の開いたエネルギーシールドがある。

「凄…!」

「んじゃあ、あと2機ぶっ壊してくるわ、本音ちゃんも簪も早いところアリーナから出た方がいい」

「頑張つてね」

「頑張るまでも無いな、あの程度。ああ、それとアレ無人機だから人殺しはしてないよ」

そう言い残していっちーと鈴音に通信を開き大穴にグライドブーストで飛び込んだ。

「ハハハツ、見てたよ、ルーキー! なかなか、やるじゃない。

ちよつと時間かかったけどね」

「今の…シンか?!」

「す…凄すぎでしょ…」

「まあ、ちようどいい腕かな ゴミ虫の相手にはさ!」

「あ、アレをゴミ虫扱い…」

「漁夫の利よ、漁夫の利」

「もう一機単体で潰したけどな、にしても二人とも満身創痍だな。そんな腕じゃあこの先生きのこれないぜ」

「でも取り合えず何とかなったしいんじやないか? まだ時間は

ある、もつともつと強くならねえと」

「一夏…」

なんてアサルトアーマー（ピンク色）を展開してる所申し訳ないがまだまだ終わってないんだよねー。

「言つとくがまだ終わってねえぞ、それあそこで俺らを見下ろしてるクソジャンク品が二つ」

「嘘だろ…!!」

「まだあんなのが…2機?!」

「まああの程度で満身創痍ならあと2機の相手はきついなあ…おっけ、俺が潰す」

すると何言ってるんだこいつみたいで顔で俺を見る二人、何もガチでやりあう訳じゃねえよ、一撃で叩き潰すって。

「オーバードウエポン、マスブレード」

「うわ、何それ?! 柱じゃない!!」

「おいシン、遊びじゃねえんだぞ?!」

「ジェネレーター、KV-3D2/XINZANG 二人とも黙ってろ」

マスブレードを構え、チャージを始める、コレなら大丈夫そうだが、リミッターも解除しているためOWも使用無制限だ。

「どうした? 見てるだけか、とんだチキンなんだな、機械のクセに」

『ターゲットヲ撃破シマス』

その言葉と共に急降下しながらレーザーを乱射してくる無人機、EN無限なのでハイブーストを連続して行い余裕を持って回避する。

無人機も空中からの射撃では避けられると判断したのか地上へと降り立ってきた、俺はそれを待っていたわけだが…!

「いい的だな、お前」

ハイブーストやグライドブーストとは比べ物にならない速度で飛び込む、無人機のレーザーが直撃するが問題無く突き抜ける。

脚を地面に突き刺さんが如く勢いでフットブレーキ、ブーストを行つたままのマスブレードが俺を支点にぐるりと回転し、振りぬかれ



部屋に入るとちっふーが扉を閉めて部屋に備え付けられているソファーみたいな椅子に座る、俺もそれに習って机を挟んで向かい側の椅子に座った。

最初は隣に座ろうかなんて馬鹿なことを考えたが思えば真剣な話なので止めておいた。

「幾つか言いたい事と聞きたい事がある」

「どうぞ、可能な範囲で答えましょう」

「まずは言いたい事だが、よく生徒達を守ってくれた、感謝する」

「本音ちゃんが居たもんでね、張り切らせてもらいましたよ」

「次だがISの無許可展開を咎めるつもりは無い、緊急事態だったからな」

「そりや何より」

ちっふーが体勢を変えて前のめり気味に深く椅子に座る、聞きたい事かな？

それよりコーヒー無いかコーヒー、なんだかMAXコーヒーを飲みたくなってきた。

「…なんだ？ あの威力の武器は」

「よく聞いてくれました、あれは我が社が開発したオーバードウエポンと呼ばれる兵器です。無人機を消し飛ばしたあのヒュージキヤノン、木っ端微塵に無人機を破壊したマスブレード、せっしーと戦ったときにも使いましたが6枚のチェーンソウを使ったグラインドブレード、他にも周囲を消し飛ばすマルチプルパルスや小規模な核に威力が匹敵するヒュージミサイルなどがあります。勿論、全てISを一撃で葬れます」

「条約に違反するぞ…」

「それがしないんですよ…条約から例外として外されるでしょうね」

「何故だ？」

「通常兵器に搭載できるからですよー」

「何だと…?!」

「つまり、対IS兵器になり得るのです、我が社の製品でISは抑止





「シンにー!」

「本音ちゃん、簪…一体何があつた? もしやあの襲撃で誰かが…?」

「確かに…アレが原因だけど……………」

「クラス対抗戦自体が無くなつたから優勝商品も無くなつたんだよ」

「そういやそうだったな、つまり…皆欲が張つてただけか。」

「いやはや、それにしても実に不憫だ…何もせんけどな!」

「籐ヶ崎君…えと…………その…………」

「かんちゃん頑張れ〜」

「い、い…一緒に…………ご飯…食べない…………?」

「構わんよ? いっちー…は別にいいか、泡でも食つとけばいい」  
本音ちゃんが左腕にくつついて来て簪が俺の右手をきゅつと握つている…あるえー?

ハイパーセンサー起動、ちらりと簪の顔を見る、凄く恥ずかしそうに顔を真っ赤にして、かつ少し嬉しそうな表情。

俺は一体いつフラグ立てた…?

いや、人生一回やってるわけだから流石にコレで違うな、なんて朴念仁な事にはならんが…いつだ?

始めて顔を合わせて大体一月ぐらしか経ってないよな、もしかしてアレか、今日か。

いやしかし待て、俺は一体どうすればいい、確かに簪は可愛いし俺のタイプではあるが…

うん、決めた、後回しにしよう。

「やっぱ肉と米だよな、二人は何を食べるつもりだい?」

「私は日替わりでいいかな〜」

「わ、私も…………」

食堂(お通夜ムード)に入って適当に座れるところに目星をつける、学食って予め席を確保していないとお盆持ったままウロウロする羽目になるからな。

「お、兄ちゃん今日は両手に花かい?」



きやいきやいと蹴ったり殴ったりと仕掛けてくる鈴音の攻撃を避けながら、こめかみを押さえるせつしーの話を聞く、その程度の問題など全く無い。

「俺が入学するに当たって何百億ドルと寄付したから俺は何時でも優先的に施設を使う事が出来るんだよ、訓練機は使えんが」

「……そう言えば…ゼエハア…大企業の…ゼエ…御曹司だったわね…ハア…」

「資料で見ただけどマジで軍属かよ、ISだけ使うのが上手くてもどうにもならんぞ、生身を鍛えろ生身を」

「じゃあ、シンに使わせて貰おう、俺はもっと強くなりたい…いや、強くなるんだ！」

キリツ！ やदैケメン…私が女だったら惚れちゃうわ！

「んじや全員来るって事でいいな、場所は…近いし第5アリーナでいいな」

「ですが他に使っている人が居たらどうでしょうか」

「ああ？ こんなお通夜ムードで訓練をしようなんて酔狂な奴そうそういねーよ」

「それは…そうだが」

「やる気出せよ、んじやあお前らの内一人でも俺を倒す事が出来たら今日の夕食のデザートを全員に奢ってやる」

「うっし！ やってやろうじゃないの!!」

「ただし！ 誰も勝つことが出来なければ尻を撫でてやる…」

「…ツ!!」

「マハハハハハハアツ!!!」

盛大に高笑い、俺はウキウキ気分で第5アリーナへと歩いていく。

「んじや先行ってちよつとアップしとくわ！」

「ま、待てよシン!!」

「騙して悪いが私欲なんぞな、(世間的に) 死んでもらおう」

スーパージャンプで壁蹴り壁越え屋根走り第5アリーナへと直進する。

「どおら着地イッ!!」

「ひい!! また?!」

「おつと悪い、ところでISスーツを始めて作ったのってモテない男だと予想をつけてるんだがどう思う?」

「へ、変態だー?!」

前に練習していた生徒ABが居たので今回は分かりにくいセクハラをしておいた、一瞬でばれた。

取り合えずアリーナの壁にあるパネルで小型フィールドを作成、今度のレベルはモンドグロッソ平均レベルで、今回のビックリドッキリACはこちら!

「ドローンレベルを設定しました。モンドグロッソ平均レベルです。所定位置にISを展開・装備して待機して下さい」

「こ、今度はモンドグロッソお?!」

「じよ、冗談じゃ…」

「チェンジ! アーマード…コアツ!! 白き閃光! ホワイトグリントオツ!!」

アイセンサー保護シャッターを真ん中から順に開けていく、ついでにブースターも広げて再度たたむ。

余談だが4の方のグリントは「ジョシユアグリント」と名付けて差別化している、そうでなければどつちかがランダムで展開されてしまうのだ、非常に面倒。

「何あのヒロイックなIS…」

「サラシキさん好きそうだね、あの子ヒーロー物好きっぽいし」

更識：ハッキングを仕掛けてきた所と同じ苗字か：偶然とは思えんな…警戒しておこう。

「所定位置への移動を確認しました。戦闘開始まで5・4・3」

「ん、集中せんと行かん、流星にモンドグロッソとなると…」

「開始します」

「っふ…!!」

取り合えずサイドブースト、直後にOBのチャージを開始する。

どうやらモンドグロッソレベルではスタート直後の射撃が無いら

しい、代わりに一気に距離を離された。

すぐにライフルで牽制、OB発動で追いかける、あちらもライフル弾を紙一重で避けアサルトライフルをばら撒くように撃ってきた。

OBを停止、速度を残したままクイックブーストで加速しすぐにサイドブースト、弾幕から逃れる。

ドローンは続いてショットガンに一瞬で持ち替え撃ってくる。

こちらもアサルトライフルで交戦、幾つか被弾するがショットガンの有効射程距離ギリギリなので対したダメージは無い、だがPAがかなり削られる。

上方にクイックブースト、こちらに銃口を向けられる前にミサイルを発射、すぐに前方へのクイックブーストでドローンの真上を抜け後ろに回る。

ドローンがイグニッションブーストで分裂ミサイルを回避しようとするがこちらもライフルで応戦、両方のライフル・アサルトライフルを撃ちっ放しにして分裂ミサイルを迎撃されないよう一方的に責める。

急に背面飛行を始めサブマシンガンを乱射して来るため幾つかの分裂ミサイルが迎撃される。

しかし敵の武器が弾切れを起こし武器を入れ替える瞬間にライフルが直撃、一瞬硬直する。

続いて分裂ミサイルが次々直撃、かなりのダメージを与えた。

こちらも敵が体勢を立て直す前に武器をリロード、数秒と待たずリロードを終える。

「許しは請わん 恨めよ」

リロードを終えた瞬間にブレードを握ったドローンが煙から飛び出してきた、すぐにライフルやミサイルを連射するがジグザグに飛ぶためFCSの都合で中々当たらない。

すぐに両手のライフルをパージ、軽くしてサイドブーストでブレードを回避する、すぐにミサイルを同時に放ちミサイルもパージ。

ドローンがブレードを持ったままミサイルを回避し続ける。

クイックブーストでドローンの前方に出てアイセンサーの保護

シャッターを閉じた。

「落ちろ」

アサルトアーマーで付近を緑の光で埋め尽くす。生憎殺傷効果時間にはドローンはAAに触れていなかったがコレでドローンのエネルギーシールドを削り取った。

ドローンのレーダーやハイパーセンサーが狂っている間にクイツクブーストで接近、ドローンのブレードを握る右腕と肩の根元を掴む。

「本物では出来んな」

ギチギチギチ：バキンツ！という音と共にドローンの右腕が千切れる、すぐに右腕を投げ捨て両手を腹部に突き刺した。

エラーを起こしたドローンの右肩がプログラムポリゴンとなる、それを見届けるが早いかな否か、突き刺した両手を左右に開いてドローンを真っ二つに裂いた。

「ドローンの撃破を確認しました。お疲れ様でした」

「そんなものだ、所詮な」

「俺：どんなもんか見ようぜって言ったけど、やめた方が良かったと今切に思っている」

「今の：本物だったら確実に死んでますわよね」

「で、でもそれぞれの得意距離なら：!!」

なんだ、いっちー達もう来たのか、一体いつから見ってたんだろう、ちなみに戦闘中の声は全部ジョシユアの真似。

「遅かったな：言葉は不要か：何処から見ている？」

「ミサイルが大量に直撃した時あたり」

「箒だけよね、見てないの」

「ええ、訓練機を用意してくると言って走って行ったきりですわ」

何だ、もう鈴音は皆と仲良くなったのか、良きかな良きかな。

今日は本来クラス対抗戦の予定だったため訓練機の使用をするものはいなかった筈なのだが午前で潰れてしまったため午後は好き放題できる。

しかも訓練をしようなんて思う奴はいないと思われるので書類を

出して即許可が出るはずなのだ、そうでなくとも俺が裏から手を回せばそれでいいのだが。

そこで俺の戦闘を見ていた生徒A・Bは例外だ、認めましょう、あなたを例外と…

「すまない！ 待たせたか？」

「いや？ んじゃまずはいっちーだ、いっちーはブレオン一択だな、んじゃ俺もそうするか…」

「ふう…んじゃ行くぜ…!!」

「おい、待て馬鹿、まだアセンを組んでないしアリーナ内に人がいるだろう」

「え、ああ…ぶめん」

んじゃVで基礎は最軽量アセンにしてFCSは…いらね、ジエネは最高出力、ブースターをシナツにして武器は両手ムラクモつと、あとはEN回復とか速度の為にちよいちよいパーツ変えて…「ムラクモ」で名称設定つと。

「すまないがアリーナで模擬戦をさせて貰っていいか？」

「え、ああハイ、どうぞ」

「申し訳ない」

アリーナ内に人がいない事を確認、ホワイトグリントでいっちーの目前へと移動。

「チェンジ、アーマードコア、ムラクモ」

「何かさっきの白いのより弱そうなんだが」

「お前もそんな機体で勝負する気か？ 舐められた物だ」

「今のはムカツと来た、行くぞ!!」

馬鹿正直に真正面から突っ込んでくるいっちーに対してある程度引き付けてクリーンヒット距離になったらブーストチャージを発動する。

速度×重さ＝威力だが生憎軽量二脚なので対したダメージにはならないだろう、衝撃はかなりあると思うが。

「うつぶあ…!」

「勝手な期待か…遠いな」

「くっそー！」

両手のムラクモを出したりしまったりと挑発する、いつちーはもう少し精神を鍛えるべきだな、うむ。

取り合えず今度はこちらから攻めてみよう、同じように突っ込んでみる、いつちーが深く腰を落とした。

「はあっ!!」

「甘いぜ?」

抜刀を柄頭に左手で掌底を当て振らせないようにする、次いで右手で柄を持ちクルリと回して奪い取る、システムである。

すぐに雪片式型を投げ捨て、右のムラクモを展開して斬る、左のムラクモも展開、斬った慣性を残して回転、左のムラクモを鳩尾に突き刺す、再度右のムラクモで切り裂き左でアッパーをするように斬る、左手を戻すのに合わせて頭を引っ掴んで右膝のブーストチャージを顔面に叩きつける。

体が揺らいだ所でいつちーの腕を掴み、力技背負い投げで地面に叩きつける。

あとはマウントとって殴る殴る殴る殴る……

「ふう………楽しかった☆」

「マジかよ………」

「実戦経験が圧倒的に足りん、遠距離にばかり付き合ってたか?」

「ああ……」

ACを解除して見学席の方へ向く、腰に両手をあて元気よく叫びましょう!

「次はせつしー! 距離はどう?」

『い、今行きます! 中・遠距離ですわ!』

「チエンジ、アーマードコア、ノブリス・オブリージユファ」

片腕がブレな上にEN効率もさり気なく悪いが破壊天使砲の威力だけは凄まじい、ただしENがもりつと削れる……

特に1・15のヤバさは目を瞞る(みはる)ものがある、ペーパーの時にブレオンで挑んだら幾度と無く水没させられて……最終的に橋待ちでとっついて終わりと言う……



「お待ちせしましたわ、さて…行きましようか」

「ノブリス・オブリージュ 青いイレギュラーを排除する」

「言ってくれますわね！」

その言葉と同時に二人とも後ろに下がる、せつしーはライフルを構え俺は破壊天使砲を構える。

「は、羽ではないのですか?!」

「遠距離とは、選択を誤ったな」

両背中のレーザーキャノンを取り合えず撃つ、案の定避けられた、うぐぐ、せつしーだからノブリスだよねーとか思うべきではなかった

：

力尽くでも中距離に持ち込まなければ、もしくはビットを出させるか、だな。

まあこちららfa機体だ、近付く事など容易い、何せ瞬間最高時速は壁をぶち抜くのだから。

「中距離ー」

クイツクブーストで接近、ライフルを連射する、せつしーもライフルの連射を避け続けられるほど器用ではないらしい、ちなみに俺はせつしーのライフルを見てから回避できる、次射までの時間が長すぎるからおおよそのタイミングで飛んできてくれるから分かりやすい。

「くっ、行きなさいー！」

と、飛んでくるファンネ…ビット、俺もお返しにソルディオスでも飛ばしてやりたいが生憎所持してない、ぐぬぬ。

で、中距離用なのだろう、ビットが2機だけ飛んでくる、しかもそれでもライフルを撃ってくるのだから腕を上げたと感心せざるを得ない。

何発かダメージを受けた。

「ビット2機で、何をするつもりだ！」

大胆にすぎたな、イレギュラー」

と言いながら後ろにクイツクブースト、遠距離まで距離を離して破壊天使砲を撃つ。

「きやあつ!!」

ヒット、案の定ビット2機＋ライフルが処理能力の限界だったみたいで自分の動きにまで気は回らないようだ、両羽ともヒットした。代わりにこちらのENも割とカツカツで一旦地面に降りる。

「中距離に来たかと思えば遠距離、遠距離だと思えば中距離……！」  
「二つ距離指定したそつちが悪い、自分の弱点が見えたか？ 素早い応用が利かないんだ、レンジ、速度、威力、弾数、ちゃんと理解して自分のペースに引きずり込め、相手に引きずりこまれるな。」

さつきも中距離に入られたからと言って中距離武器に変えたから反応が遅れたんだ、遠距離に自分が移動すれば良かった。そうすれば俺はただの弾の無駄使いをしただけだったのに」

「分かりましたわ……ありがとうございます。真面目で顔が隠れていれば素晴らしい人なんですけどね」

カチンと来た、ENもKPも回復しきったしちよつと斬ってくる。

OB作動準備、起動。

「ぶった斬る！」

「！ インターセプ……」

「言ったら、受身になるな、攻撃に……転じろッ！」

OBブレがせっしーにクリーンヒット、そのまま斬り抜け破壊天使砲を構えクイックターンで後ろを向く、射撃。

せっしーのエネルギーが尽きて地面へとゆっくり落ちる。こつちも丁度ENが尽きた、ゆっくりと落ち……あ、無理だ。

「うごあ!!」

「何をしているんです……?」

「墜落ごっこ、それより自分の弱点を見つけたな？ ゆっくりとそれを潰していくんだ、急な事にも対応できるようにな、自分のペースを作って引きずり込め」

「はい、ありがとうございますわ」

ゆっくりと立ち上がって戻っていくせっしーを見送る、次は……モツピーでいいか、面白い素材と聞いている 期待するぞ。

「次はモツピー……距離は……?」

『近距離だ!』

「だろうな、チェンジ、アーマードコア、スプリットムーン」

出てきたのは案の定、打鉄を纏ってふんすと鼻息荒くするモツピーだった、また武器の持ち方が奇妙だ、マシンガンを左手に持ちブレードを右手で持つ形となっている。

空中で構えを取る姿は剣道と言うよりフェンシングに近い。

「…ブレードは両手で持った方がいいと思うがな…」

「さあ来い！ いざ尋常に!!」

さあ来い等と言いながらこちらに突っ込んでくるモツピー、まあ打鉄だから突っ込んで来るんだが如何せん遅いのよ…

取り合えず通常ブーストで引き撃ちしつつ牽制、すると大型ブレードをまるで盾の様に使って突っ込んできた、片手なのによくやる！ 打鉄のブレードが届く距離になったら盾にするため横に向けていた刃を正面に向け自分ごと回転するように持ち手を体に密着させて刃を滑らせるように斬ってくる。

なるほど、システム対策か、いい案だし理に適っている。

クイックブーストで横に避けると持っていたマシンガンを連射してくる、間違いなく大雑把な狙いだが、だからこそ怖い。

「こうなるか？ 新しい…惹かれるな」

「どうした！ 籐ヶ崎！ もしや勝利は私が貰ったか？」

そこまで言われたんじやあ仕方ない、IS最強の親友の妹として相応しい実力か否か 試させてもらうぞ！

こちらもマシンガンを連射、今度は刀の陰から撃ってくる、遮蔽物がないなら作ればいい、か！

続いて一気に距離を詰めブレードを構えた瞬間に後ろにクイックブースト、肩のフラッシュロケットを撃つ、勿論俺には効かない。

「ぐう!! 目が！ 卑怯な!!」

マシンガンを連射、1マガジンあつと言う間に使い切り前方にクイックブースト、追加ブースターの効果により速度は凄まじい物となる。

モツピーの視界が回復して俺を見つけると同時に月光で胴を斬り抜いた、すぐに振り向いてリロードを終えたマシンガンを連射、ク

「イックブーストを移動に織り交ぜ打鉄には付いてくる事の出来ない速度で後ろに回りブレードで斬る。」

「……終止」

「う、ぐうう…!!」

「ふむ、センスはある、移動も基本を捉えていたし発想も素晴らしい、だがやはり…機体だな…もつと高機動なISが合うだろう。だが注意が一つ」

「な、何だ」

「酔うなよ?」

「酔ってなどいない!」

「どうだか」

スプリットムーンを素早く解除、生身に戻って地面に座る。

モッピーが戻っていくのを見てグツと体をストレッチする、意味はない。

「ラストは鈴音! 距離はどうせ近中だろ!」

『そうだけどうせつて何よ!』

「チェンジ、アーマードコア、レッドラム」

よっこいしょっと、見たいに椅子に座るようにACを展開する、そういうえば四脚は初めてのお披露目か?

いや、ビッグバレルが四脚だったな。

「うっわ…気持ち悪いし目に悪いし…酷い趣味ね」

「レッドラム、逆から読んだら…?」

「ムラドツレ?」

「redrum逆から読むとmurder(殺人鬼)」

「趣味悪っ」

「イカしてないか?」

「イカれてるわよ」

そしてブーストでアリーナを滑りながらライフルを撃ち始める、鈴音もライフル弾を的確に避けつつこちらへと接近してきた。

「殊勝な羊だな わざわざ狼の餌場にでてくるのだから

キヒヒヤハハッ 戻れないぞ、お前」

「言ってくれるじゃない、ぶった切ってやるわ！」

と、いつちーほどバカ正直なのは例外だがそれなりにジグザグに移動して近くに寄ってくる。

もしかして忘れていたのではないだろうか、俺はまだライフルしか使っていないと言う事を、左背のスラッグガンを起動、前方に向ける、ライフル、ショットガン、スラッグガンのトリプルトリガーで鈴音を蜂の巣にする。

「きゃっ！」

「お前ら揃いも揃って忘れてると思うがな、お前らのキルゾーンは俺のキルゾーンでもあるんだぞ」

「くっ！ ならー！」

「逃がすわけねえだろ！ テメエだけは！」

近距離で張り付いたまま撃ち続ける、斬りに行こうと寄れば離れ離れれば寄る、とてもいやらしい戦い方である。

鈴音ももうこの際プライドは抜きだ、と言わんばかりの勢いで衝撃砲を連射してくるがクイックブーストを使ってウロウロしているので正直中々あたらないし当たっても安定性能が高いから大した効果もない。

「くっの!!」

「うぐおっ!! そんな…何かの間違いだ…」

俺のレッドラム…」

鈴音のブン投げた青龍刀と呼ぶのには抵抗のある馬鹿でかいブレードが直撃する。

その場で動きを止めてアイセンサーを消し、両腕を下げた。

「よっしやあ！ 直撃！ ふふん、大した事無かったわね、これで私のか…」

『まだですわ！ それは籐ヶ崎さんの得意な…！』

「敵の体力ステータスはちゃんと確認しとくべきだったな？」

「え？」

一瞬でアイセンサーを点けてクイックブーストで接近、目の前に躍り出た。

「う、うs」

「アサルトアーマー」

鈴音を巻き込んで周囲を緑の光で埋め尽くした、直ぐにトリプルトリガーで弾を吐き出す。

「絶対防御が発動してる?!」

「素敵な風穴だな、お前、もっと必要か？」

逃げようとする鈴音にスラッグガンを撃ち込んでエネルギーを0にした。

「卑怯よ!!」

「だが、だから俺が勝った 重要なのはそこさ」

「うううううう!」

「んじやアレだな、問題点、短気で素直すぎる。 内面を鍛えろ」

「うう…」

「さて、全員ココに来い!」

ACを解除、全員を呼んで並べてみる、無駄に小さい順から、ちなみに鈴音、いっちー、せつしー、モツピーである、言わなくても分かるだろうがおっぱいのサイズ順だ。

「ちなみにこの並び方胸のサイズ順な」

「なんで私一夏より前にいるの?!」

「それと俺が入ればモツピーの横で一番端になる」

「何で?!」

「胸囲…121cmな、俺」

「…くっ」

自分の胸を眺めてペタペタ触ってから一夏以外の全員の胸を見る  
鈴音、目尻にじんわり涙が浮かんでいる。

「さて諸君、私が言った事を覚えてるかな？」

「デザートを奢ってくれるって事？」

「お前、毎日デザート作ってやるって言ってるんじやねえんだぞ、俺は」

「な、にやんで知ってるの?!」

「…約束どおり…尻を貸してもらおうぞ!」



「んゝ♡」

「本音ちゃん、おいしい？」

「おいしく」

「そりや何よりだ」

「もしかして今の所シンに唯一勝ってるのってのほほんさんじゃね

？ うめえ、あめえ」

「…解せない、しかし…美味だな」

「なんだか納得行かないわ、おいしいけど」

「そんな…ありえませんが…たかが訓練機如きに…、素晴らしいお味ですけど」



ブランド、所謂デートですね。幕間ですか、これでテストの汎用性が高くなりました、良い傾向です。この話は、別に見なくても結構ですよ。

おはよう、早速だが3連休に会社に呼び戻された、どうやら俺じゃないと出来ない事があるらしい。

「シン！ パパは会いたかったよおおお!!!」

「父さん！ 俺も会いたかったあ！」

「愛してるんだ！ 家族（ファミリー）を!!」

「ギャハハハハハッ!!!」

そして大して身長もガタイも顔さえも変わらない父親と抱き合う、全力で抱擁したら父さんがサバ折れるのでそれなりの力で抱きつく。

「シンくん、おかえりなさい！ ママも会いたかったわ！」

「ただいま、母さん！」

ビックリするほど美人で小柄な本当に日本人かどうか怪しく思えるレベルの白銀の髪の毛をした母さんを優しく抱きしめる。

ゆっくりと抱擁を止め一歩下がる。

「社長、カラード所属、籐ヶ崎信一郎、呼び出しに応じ戻って参りました、ご用件を伺ってもよろしいでしょうか」

「ええ、手紙でも書いたけどやはりAFを動かせるほどの出力を持ったエネルギーコアは作れる人間はいないそうです、そこでアーマード「コア」を製作した貴方呼び戻して作って貰うことにしたと言うわけです」

「分かりました、では私は個人ラボに入りコアを組み立てます、材料や基本構造は既に完成し持って来ているので直ぐに終わるはずですよ」

「はい、ありがとうございます、では早速作業に取り掛かってください」

「了解しました」

勿論完成なんてしていない、その場で創り出すだけだ、かなり複雑な物を創り出すから1時間は休まないと会話さえ不可能だ、疲労困憊で死ぬ。



積んでいる、今俺に話しかけてきているのがそのAIである。

俺が能力を持つているのを知っている唯一の人(?)だ。

「んじゃ、行ってきます」

『はい、お気をつけて』

ACよりも大型の10キロぐらいあるAFコア（以後AFC）を持ち、部屋から出て社長室へと歩いて行く。

母さんは移動距離が長いのは嫌だと言って1階に社長室を作ったので移動が楽でいい、とでも思っていたのか？

残念ながらこのカロード、大企業だけあつて馬鹿みたいにデカイのだ、確かに社長室は1階にあるがとにかく広いし入り組んでるしで遠い。

いいか、俺は面倒が嫌いなんだ。

脚部だけACを展開し、軽タンにして社内を進んでいると色んな部署の人間から声を掛けられる。

「おお、ご子息殿！ 帰っていらしたか」

「有澤の社長、お久しぶり。どんだけぶりかな？」

「約一ヶ月ぶりですな。ご子息殿、社長と呼ぶのは止めて頂けないか、私はただ一部所を担っているだけであって…」

「まあ渾名だと思って諦めてくれれば嬉しい、それと学園に有澤の社長のファンがいたよ、サインを一枚書いて上げれないかな」

「ふむ、お安い御用ですな、しかし私が書いた所で価値があるものか  
どうか…」

「価値は貰った本人の心の内さね、んじゃ俺は母さんの所へ行つて来るよ」

有澤の社長がお気をつけて、と言いながら軽く頭を下げた、有澤重工は作ってる物の変態的だけど社員本人は真面目な人間ばかりだ、会話してて普通に話が出る。

「おや？ おやおやおつやあ?! 信一郎君じゃないですか！ お久しぶりですねえ、嬉しいですねえ！」

「アクアビットのリーダー！ 久しぶりだねえ、どう？ 最近調子は」

「いいですよお、すごぶるいいですよ！ 今朝もG Aのグレートウォールにソルディオスを取り付けるなんてサイコーなアイデアが浮かんだんですよ？」

「そいつぁ…面白いね…一度試してみればいいんじゃないか？」

「やっぱり！ 信一郎君なら分かってくれると思いますよ！ 嬉しいですねえ、是非とも抱いて欲しいですねえ！」

「うへあ」

「ところで学園はどうですか？ 可愛い子いっぱいいましたかあ？」

「選り取り見どりだったよ、まあ俺は相手にされんかったが」

「ああ…いいですねえ…可愛い子が沢山ですかあ、ぐちゃぐちゃに蕩けさせたいですねえ、全身舐め回したいですねえ！」

と言つて体をくねくねとさせるアクアビットのリーダー、彼女はバィでH E N T A Iだ、こうなつたらしばらくの間止まらない。

美人なのだからこそ残念である、ちなみに30前半の処女だ、だが変態だ。

ちなみに「H」とは変態の頭文字を取つたもので米国等で日本的アダルトチックなコンテンツ（エ□アニメとか）は「H E N T A I」（前述の例だとH E N T A I A N I M E）で表記される。

「キューーッ」

「こ、こいつぁ?! キサラギのA M I D Aか?!」

「キューアーッ！」

「どうわっ！ あっつい!!」

「おや！ いやあ！ はははごめんなさい、うちの子がシンくんに迷惑かけてしまったようですね！」

「プライマルアーマーのおかげで無事だけどね、熱は届いたよ、あつついね」

「ふむむ、P Aに阻まれましたか、P Aを無効化させる術を考えなければいけませんね」

「おい、キサラギおい、俺を実験台に使ったのか」

「……………まさか」

「はいアウトー！ 俺を実験台に使ってたな！ おのれー！ ファ

ニーボーンに左手でデコピンしてやるわ！」

「おおっといけない！ 私は用事があるので行かせて貰います！  
行きますよAMIDA！ アミルダーオン！」

「キュイイイイツ!!」

「きつも！ きつも!! AMIDA背負って飛びやがった！ きもっ！」

ヒュゴオ、と通常ブーストを吹かしながら社長室へと急ぐ、やはり何人か人とすれ違ったが時間が無いので軽く手を振って挨拶だけをする。

普通に開発部署所属の人間は俺がACを展開している事に対してノーリアクションだがあくまで一般人な受付の人とかはすこぶる驚いていた。

社長室の扉をノックして返事が返ってきたことを確認して話し出す。

「社長、AFCの組み立てが完了し、ここに持って来ました」

「ええ、ありがとう。入って下さい」

「失礼します、これがAFCです、単純な瞬間出力は完全に制限解除したOWに少々劣りますがACより高いエネルギーを常に供給し続け、超長期的に行動が可能です」

「ん、やっぱり信一郎さんは素晴らしい開発者ですね、もつとよく見せてくれますか？」

「どうぞ、10キロほどなので個人が運ぶ事も簡単に出来ます」

「んん…！ よいしょ…！ ……シンくん、駄目、ママには重すぎて持てないよう！」

「母さん驚くぐらい非力だもんね…全くAFCが持ち上がってないし」

「お箸とお茶碗とペンが持てたらそれでいいもん！」

両手でAFCをぺちぺち叩きながら涙目の母さんが唸る、ちなみにAFCはAFに搭載するのでちよつとやそつとでは傷さえ付かない、凄まじく丈夫に出来ているのだ。

AFCを一個犠牲にすれば多分ISだって殴り潰せるぐらい頑丈

に出来ている。

「あ、シンくん！ お願いがあるんだけどいいかな」

「いいよ、母さん、どんなお願い？」

「今からロシアに飛んでノリリスクに行つて欲しいの、何でも高い技術力を持つてるんだけど国に認められなかった研究チームがあるとか」

「引拔やね、ええよ、んじや飛行機用意しなきゃね」

手を振つて部屋を出ようとしたら扉が盛大に開け放たれる。

「ロシアへの旅路には是非とも我がアスピナ機関の試作飛行機に  
!!」

「うわあ…」

細身で痩せこけた男性が限で目の下が黒くギョロリとした目を爛々と輝かせて現れた、言わずとも分かるが彼はアスピナのリーダーである。

彼の後ろを見たら同じように痩せこけた男達が隊列を組んでいる、アスピナ機関勢ぞろい、怖い。

流石に女性は「見た目」普通の人達だ、あけてビックリド変態なのは確実だが。

「さあー」

「さあ!!」

「さあつ!!」

「母さん……」

「なあに？ シンくん」

「逝つて来ます」

きつとココ最近で一番の笑顔だったはずだ、あとは言われるがままアスピナの飛行機に乗る。

ある座席は「操縦席」「副操縦席」「客席」が一つづつ、異常（誤字ではない）。

そのくせジャンボジェットみたいなサイズでブラックボードみたいな形状をしているのだ、見るだけで分かる、後ろ半分以上は全部燃料とエンジンなんだろうな…

ほんの数時間も掛からず目的地のノリリスクに到着した、ムカつく事にこのアスピナ機ホバリングも出来るのである。

ハリアーよろしく垂直着陸で地面に降り立ちアスピナ機から出て地に脚をつける。

「素晴らしい素晴らしい！ やはり間違っていないかった！ ISの最高速度よりも早いね!!」

「そうね、ああ…やっぱりアスピナでよかったわあ…!」

「問題はIS適正が無いと保護を受けれない上にコレ自体にコアを積んでいる事だな」

この女性方はアスピナ所属のIS乗りの方々である、そして研究者であり今回のパイロット達だ。

なお、バカみたいにデカくてバカみたいに速い癖にステルス性能は現行最高性能だから更にムカつく。

音もしなければレーダーにも引つ掛からない、最後には姿さえも見えない始末だ。

「さて、んじや行くかね…俺ロシア語なんて分からんけど」

「心配しないで下さいよ、私達も日本語以外喋れませんから」

「おい、イタリア人おい、どうするんだよ、意思疎通できないじゃん」

「私にお任せ下さい、信一郎様、リアルタイムで翻訳いたします」

「さすがIBISやでえ」

『信一郎様のためですから』

結果的に言う相手さん側は普通に日本語が喋れた、ISの影響力パネエ：

アスピナ機には乗れないので後日普通にアルゼブラが飛行機を飛ばして向かいに行ってくれるらしい。

『信一郎様、ロシア所属のISが2機信一郎様の所へ向かっています』

「ステルス性は完璧だと豪語してたんじやないのか？」

「勿論です！ IS反応はありますが！」

「お前らもうホントアスピナだな」





面に5連ロケが直撃しただけだ。

「ま…ちなさい…!! こ…のつ、殺…してやる…!」

『まだ一人は落ちていませんでしたか、ロケット5発程度では軍用のISは落とせないようですね』

「よくも…! よくもよくもよくもツ!!! 殺してやるツ!!!」

『貴方には罪も怨みもありませんが目の前で銃を向けてくるのであれば仕方ありませんね』

「Я убою !!! (殺してやる)」

よりにもよってほぼゼロ距離でスナイパーライフルをこちらへ突きつけてきたので銃身を掴み握り潰す、内部の弾薬が爆発四散し小さな爆発が俺の左手周辺から起こる。

「く、ああッ?!」

マシンガンをパーズ、開いた左手で敵さんの首を掴む、直ぐに右腕を大きく引いてKIKUを使わずに直接ボディブローをぶち込む。

「う、げえ…! おえ…ッ!」

『まだ殺したいと言いますか?』

「こ…ろして…やる…!」

『では』

もう一度ボディブローをぶち込む、ちなみにコレは全てIBISの指示である。

では外に漏れない内部通信をどうぞ。

「もういいんじゃないですか?」

『まだです、もう一発です、ほら』

「いや、もう許してやりましょうよ、彼女何も悪い事してないよ」

『信一郎様』

「わかった…許しは請わない、怨めよ」

そうして幾度も腹パンを続け最終的には言葉さえ発する事が出来ないほどに…

後々の事を考えて下腹部だけは殴っていない、今更なんだと言われ  
ても仕方が無いが…

『どうです?』





い。

後でアリーナにでも行こうかな…

近くの自販機でカフェオレを購入、左手で掴みながら扉をゆつくりと開ける。

「おーはーようーごーぎーいーまーす（小さい声で）」

やっぱり簪は打鉄式式の前に座り立体ホログラムを操作している。流石に俺と本音ちゃんからいつも口うるさく言われている所為か整備室の電灯はちゃんと点いていた。

「……ここを……あれ？……あつ、そうか……」

何やらプログラムを弄っているのだろう、正直何をしているのか詳しくは全く分からない、言っておくが俺は天才なんかじゃない、凡才、否…もしかすると凡才にさえ劣るのかもしれない、得意な事はただの単純計算で難しい計算などかなりの時間を掛けないと出来ないのだ。取り合えず一息ついたであろう椅子に深くもたれて「ふう」と息を吐いたのに合わせてカフェオレを頬にペタリとくっ付けてやった。

「きやうつ?!」

「んふーふ、ずいぶん可愛らしい驚き方だな簪」

「と、と、籐ヶ崎君…?!」

「応よ、ほれ、コレやるよ」

「ありがと……」

適当にそこらの椅子を寄せて簪の近くに座る、相変わらず簪以外は居ない整備室をぐるりと眺めて俺も一息ついた。

「打鉄式式、どうだ？」

「うん……なんとか…学年別個人トーナメントまでには…出来そう…」

「ほお、そいつはスゲエ、さすが簪だな」

「う……そんな…」

「そうだ、聞いた話では学年別トーナメント、個人じゃなくてタッグになるらしいぞ」

「そ……そうなんだ……」

こくり、こくりと大した内容量でもない缶コーヒーをゆつくりと飲



「さて…現在地は…」

『シヨップピングモール、レゾナンスです。データではデートに適した場所だそうです』

「と…籐ヶ崎君……」

「うんむ、やはり良いな、薄いライトブルーのワンピースがよく似合っている」

『私は無視でしょうか、信一郎様』

「すみませんが監視を外して頂けないでしょうか、プライベートタイムは欲しいものでー」

『……わかりました、信一郎様がそうおっしゃるなら……』

そう言つて通信を終了したIBIS、それは置いて簪がワンピースを着ているのは凄く似合うな…

いいぞ…冴えてきた…！

対して俺は黒いミリタリー（本物）パンツ、黒いミリタリー（本物）ジャケットの前を開け中に着ているはミリタリー（ほry）シャツ、ミリタリーグローブを左手に装着し頭にバンドナを巻いてカラード所属を表したドツグタグを首から提げている。

完全に軍属の見た目です、本当にありがとうございました。

これならいつそスーツにグラサンで簪の隣に居た方がマシだった、だれかファツションセンス皆無の俺を殺せ。

「……明るい…太陽光が暑い……」

「奇遇だな、簪…俺も今相当暑い、てか義手の付け根とか熱い、もうウンザリしてきた所だ」

「…その服だと…暑いのは当たり前前だと思う……」

「そこで簪に頼みがある」

「頼み……？ 私に……？」

「俺のコーデイネイトを頼みたい」

「……私で……いいの？」

言葉は不要か、と言わんばかりに一度強く頷く、女性の服関連の買い物は兎に角長い、生前妻や娘、果ては孫の買い物に付き合った俺が

言うんだ、間違いない。

そして軒並みその後は機嫌がいい、簪が気に入ったであろう物は俺が買えばいいし簪が自分に欲しいと思ったものもさり気なく聞き出して買ってしまえばいい。

連れ出したお詫びとでも言えば多少躊躇うが受け取ってくれるだろう、まあ打算だし取らぬ狸の皮算用だから計画が破綻するかも知れんが。

「じゃ、じゃあ…行って…くるね…!」

そう言つて一切迷うことなく何故かバイク用品店へと直行する簪、つまり…どういう事だつてばよ?

仕方ないのでコーヒー(ジョー○ア)を自販機で買ってベンチに座つてくつろいでおく、やはりカフェオレは良い…

「ちよつと、その貴方この荷物を持ってなさい」

「(Q. E. Dのセリフ)」

「な、何喋ってるの! 分かる言葉で喋りなさい!」

「oh sorry. Is it something for me?」

「英語なら何とか…分かるわね、yes」

「わがんねえよう 何言ってるのかさっぱりわがらねえ 日本語しやべれよう」

「なっ?!」

「日本語しやべれねえんなら…死ねよ」

と言いつつ飲みきった後左手で握っていた空き缶をグチャリと握り潰してニヤリと晒う。

忘れているかもしれないが俺はイケメンではない、しかし凄まじく顔が怖いのだ、敵意剥き出しの笑顔は一般人にとって銃を眉間に突きつけられてると同義らしい。

俺の知り合いが言つた。

声にならない声をあげて走り去って行く女性、内心フンとほくそえんで潰した缶を缶専用のゴミ箱に投げる。

入らなかつたので拾いに行つて直接入れた、関節が固い、今日は碌

な事が無さそうだ。

「籐ヶ崎君…!」

「目星をつけただと、たった20秒足らずでか!」

「もつと時間掛かったはずだけど…でも、いいから早く…!」

「はいよ、あまり引つ張らないでくれ、じいちゃん足腰が弱くてねえ」

しかし一切容赦されずグイグイと引つ張られる、すごく積極的な女の子だな、笑顔が眩しい、最近笑顔を浮かべる事が多くなってきたがコレは珍しいな。

着くなり何やらジャケットを持ってきた、皮のライダージヤケットだ。

キラキラした目で簪が見つめてくるのでミリタリージャケットを脱いでライダージヤケットを着てみる、すると不意に頭のバンダナを取られて首元に軽く結ばれる。

「わああ…:…:やつぱりだ…! やつぱり似合う…!」

「…:チェンジ、アーマードおお…:コアア!」

「ツ〜!」

具体的に今の俺の見た目を説明すると昭和ライダーである、微妙に違えど昭和ライダーである、イメージはそのまんまだ、何やら簪がご満悦の様子なのでコレを買う事にする。

「コイツを下さい、支払いはカードで」

「はい畏まりました…:ブラックカードオオオツ?!」

「今時ISに関わっていたらブラックカードなんてそう珍しくもないと思うけど…」

ビックリするほどビックリした店員相手に支払いを済ませて店の外に出る、今まで着ていたミリタリージャケットを量子変換してしまつておく、いやはや、無駄な所で役に立つ技術だ。

H×HのGI編で出てきたバインダー並に役立つ便利機能だな。

あ、どうでもいいかも知れないがPA発生装置の首輪は今手首に巻いている、カラードエ…:

「ついでだ、簪の服も見て回れば良い、気分転換には丁度いいだろ



う」

「……いいの？」

うむ、と頷いて出来るだけ柔らかい表情を作る、簪はワタワタと周りを見た後軽い足取りで洋服店へと歩いていった。

俺も思い足音を響かせて後ろを付いて行く、昭和ライダーの風貌で。

「籐ヶ崎君……！ これ……どうかなくっ」

「うんむ、俺のファッションセンスは酷いからどうこう言えるわけではないが……もう少し大人し目の方が似合うんじゃないだろうか」

「じゃあ……これかな？」

「ああ、良く似合うはずだ」

満面の笑みを浮かべた後見せた服を戻して他の服を探しに行くのを眺めこちらを見ていない隙にしっかりと記憶しておく、勿論プレゼントの為だ。

ブランド、所謂デートですね、簪とですか……これでテストの汎用性が高くなりました、良い傾向です。

ところでテストって何のテストだろう。

CUBEはAMSのテストだったのは分かるよ、言われなくても。

可能な限り俺の感性を生かして俺に判断できない物は簪のセンスを信じて相槌を打って行く、店を出て他の店へ移動するときに簪に悟られないよう迅速に手に取りレジへ持って行って購入、IS学園の1026号室へ送って欲しいと伝え店を出て簪を追いかける。

しかし簪の特徴と言うのか生前の娘や孫ほど大量に試して見たりはしない、一つの店で精々1、2着程度だ、こちらも楽で良い。

まあその代わり時間が掛かるときは目星をつけるのに3、40分ほどかかる時があるが……遅すぎるが……まあ仕方ない、女の子なんだ、時間も掛かるさ。

そうして何件か、間違っつてはいけない、「何件か」である、年頃の女の子としては異例の少なさだろう、ありえるのか、こんな女子高生が！

まあ何件か回った後に満足したのか俺を引っ張って日陰のベンチ

へと移動する。

「ふう…ねえ、籐ヶ崎君」

「なんででしょうか、お姫様」

「ふふ、ありがとう…今日は、楽しかった」

「それは何より」

ふと、簪へ「俺」からのプレゼントを試してみようと思いつく、グルリと周りを軽く見渡すと一つ、面白そうな店を発見、内心いい気になった。

「んふーふ、さて簪、少し寄りたい店があるんだが、いいか？」

「…？ いいけど…」

「そおーら、こつちだこつちい」

「わ、わー」

手を掴んで軽く引つ張る、その後はスツと手を離して目的の店へと歩を進める。

そこはアクセサリーショップ、商品を流し見て俺の出せる最高の勘で一つのアクセサリーを手にとった、青い花の髪飾りだ、いいぞ、俺の勘、良くやった。

「こいつを下さい」

「はいよ、オーブリエチアの髪飾りだね」

「ありがとさん、釣りはいらんよ」

ぽぽいと一万円を店主に渡しポテポテと歩いてきた簪の方へ向く。

「少々ジツとしてくれ」

「んう…」

言い方は少しアレかもしれないが今日は学園で何時も付けている頭部スタビライザー的なサムシングを付けていないので何処にでも髪飾りを付けれるがとりあえず干渉しない所に付けておきたい。

左目に少し掛かっている髪を纏めて耳の上で止まるような形で髪飾りを付ける。

「うむー」

俺ご満悦、中々良い具合にアセンブルできた、感覚で言うならEN効率が良く速度も出てバランスの良い武器を積んだ上にそれなりに

積載量の余りが出ているアセンが出来た感覚に似ている。

「…これは…?」

「今日俺の我侭に付き合ってくれたお礼、プレゼント…気に入ってくれるといいけど」

「うん…! 嬉しい…! 大事にする、ありがとう…! 籐ヶ崎君!」

ふむんむ、なんだか俺も嬉しくなってきた、ところでふと思ったんだが簪は俺の事を「籐ヶ崎」と苗字で呼んでるんだよな、んで俺は簪の事を「簪」と名前で呼んでいる。

簪は俺のフルネームを籐ヶ崎信一郎だと知っているんだが生憎俺は簪の苗字を知らない、少し聞いてみたくはあるな。

「ところで簪、俺は簪の苗字を知らんのだが…良かったら教えてくれないか?」

「え……と…その……」

「ああ、いや、嫌ならいいんだけどな?」

「さ……更識…」

「……更識?」

更識だと? 我が社にもっそい回数 of ハッキングを試みては返り討ちにされ続けた更識?

いやいや、違う可能性も…無いな、考えればそうだ。

日本の代表候補で姉は一人でISを組んだといわれている、おまけにいつちーと妙な因縁がある。

裏はカロードの知りえない大きな組織だろう。

なるほど…簪は…俺が知らない範囲の原作キャラだったか、それもかなり重要な位置の。

これは…面倒な事になった……

「籐ヶ崎…君?」

「んああ、いや…どうせだ、俺のことは苗字で呼ばずに下の名前か渾名で呼んでくれ」

「え、え?! な…名前で?」

「応よ」



「更識さんが髪飾りを触って凄く嬉しそうにニコニコしてる件について」

「…更識」

「…信一郎…くん…ふふっ」

「更識」

「…嬉しかったなあ…」

「更識簪!」

「え?! ひや、ひやいつ!!」

「随分と楽しそうだったじゃないか、更識簪、日本代表候補の余裕の表れか? 私の授業で上の空とはな」

「あ…あ…」

「覚悟は出来ているな?」

「待つてください織斑先生! 更識さんの上の空は仕方の無い事です、不可抗力です!」

「…ほう? ならば証明して見せろ、フランシス・バティ・カーティス、お前になら、それが出来るはずだ」

「先生が弟君の事をただ何となく考えてしまうような感じですよ!」

「…:…なら仕方ないな、うん、何だが一夏に会いたくなってきた、まだ終わらないのか、この授業は」

「あ、ありがと…フラン…」

「次期社長婦人の為ですから」

「え…? 何?」

「何でも無いですよ」

こっつから波乱の転校生編（タツグマツチもあるぜよ）  
認められないエーレンベルグ掃射砲♂のメンバー  
スターがイカれて面倒が嫌いなお話

「キヒ…キヒヤ…キヒヤハハハ…」

「怖い…怖いぞシン…！ 何でそんなに嬉しそうなのは分からないが凄く怖い…!!」

俺は今楽しみで仕方が無いのだ、カロードからある情報が入り情報通りなら今日がその日。

つついニヤけてしまう、チラリといっちらを見たら引かれた、だが何、問題ないさ。

「ひ…いあ…!! やだあ…」

後ろの子が涙ぐんでいるが何、問題ない…とは流石に言えん、顔をグシグシと擦って笑いを自重する。

んで普通の顔、さあ来い…早く来い…！

「皆さん！ 今日には転校生がこのクラスに入ることになりました！」

「転校生?!」

「どんな子が気になるわね」

「なるほど、だからシンのテンションが高くなつてたわけか…」

「絶対に何かしでかしますわね、間違いありませんわ」

なるほど、期待されてるわけか、だが残念ながら変な事をするつもりは無い、すまねえなあ…クラスメイト、どうやらここらが俺の器らしい。

「それも二人もですよー！」

「二人も！」

「こうなるか、新しい…惹かれるな」

「言つとくが今のセリフは俺じゃない」

俺じゃないっつたら俺じゃない、紛らわしい事この上ないが俺じゃないんだ。

「ではどうぞ！」

「失礼します」

言ったのは一人だが入ってきたのは二人、ネタバレどうこうじゃないのでバラしてしまいが男装をしたフランスの代表候補シャルロット（シャルル）・デュノアとドイツの代表候補でありIS特殊部隊の隊長であるラウラ・ボーデヴィツヒだ。

「ギヒヤハッ!!」

「?!」

俺が笑い声を上げるとクラスの全員が俺に注目する、シャルりんがピクリと驚いて一步下がらうりーがピクリと一瞬身構えた。

「やっぱり、ここに来た

怖くてたまんなくなるんで、すぐにわかる

アンタが近くにいるとね」

「知り合いか?!」

「いや？ 初見となる」

「シン…もう止めようぜ」

「そうですね、もう逃げるのはヤメにしますよ。

怖いヤツは、消してしまえばいい

オレには、それが出来るらしいんで!!」

そう言つて制服の内側に片腕を突っ込む瞬間に俺の顔面に拳が直撃、慣れた物で大きく仰け反りながら受け流す事によって攻撃力をほぼ無力化、仰け反ったままにやりと笑つて俺を殴った本人を見る、案の定ちっふーだった。

「…ツチ…山田先生」

「え、あー！ はい！ では自己紹介をお願いします！」

「え、え？ え、えと…しや、シャルル・デュノアです。フランスから来ました、僕と同じ境遇の……」

「AMSから…光が逆流する……」

俺の事前察知、と言うよりも予言レベルの合図でいつちーが来ると悟ったのか耳を塞ぐ。

『きゃあああああああああああああああああ!!!』

「?!」

「男よ! 男の子!!」

「それも守ってあげたくなる系の!」

「ガチガチの男に○される男の娘…!! 薄い本が厚くなるな…!!」

一段落騒いで満足したのか徐々に静かになる教室、それを見届けた真耶先生がラウラに挨拶をするように言っている、しかしらうりー、意外にもこれをスルー。

それに対し涙目であうあうとちっふーに助けを求める真耶先生、ちっふーが一度溜息をついて口を開いた。

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

ビシリと敬礼、どうでもいいがらうりーの穿いているズボン、かなりダボダボだ、雰囲気的にはよく土方のおっちゃん兄ちゃんが穿いている作業用ズボンみたい。

「ここではそう呼ぶな、私はもう教官ではない、織斑先生と呼べ」

「了解しました」

ちらりといっちーを見ると何とも言えないアホ面で二人を見ていた、おい主人公、きっちりやれよきっちり!

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……………」

「ふー、なかなか強そうじゃないか

まあ面倒なことにならないけりやいいが」

しかしらうりー、意外にもこれをスルー。

「ツー・ 貴様が…!」

いっちーの方へとズンズン歩いて行くらうりー、大きく手を振り上げた瞬間に彼女の後ろに見えた物に俺は戦慄し張り手の進路上に俺の顔を置く。

パァン!

「シン?! 何やってんだお前!」

「俺はたった今少女の命を救えたんだ、悔いは無い」

「貴様…何のつもりだ」



「後ろを見な、らうりー」

「…?」

らうりーが後ろを見た瞬間ビクリと飛び上がった、無理も無い、目の前にちっふるの握り拳が目の前で静止していれば誰だって驚く、俺だって驚く。

「?!」

「……ホームルームは以上だ、籐ヶ崎、デュノアの面倒を見てやれ、同じ男だろう」

「え〜いつちーも男〜!」

「ついでに二人は相部屋だ」

「いや、本当に洒落にならない」

「一夏と相部屋にすると…」

「すると?」

たっぷり十秒溜めて胸を張るちっふる。

「私が一夏の部屋に行けないだろう!!」

「エエエエエ(。D。(エエエエエ」

「アーアー俺には何も聞こえないー」

ドヤ顔で教室を去っていったちっふる、クラス全員啞然、ただし本音ちゃんは除く。

落ち着け俺、冷静になれ、次の時間はISの合同練習か、仕方ないので言われたとおりシャルリンの世話をするとしよう。

「え、えと…籐ヶ崎君? よろしくね…?」

「ああ、カロードの籐ヶ崎 信一郎だ、よろしく頼む…にしても」

「な、何かな?」

「ほっそいなあ…肉を食え」

「あ、あはは」

横を見るとらうりーといっちーが見つめ合ってる。

「私は認めない、貴様があの人の弟などと…!」

「……涙目涙声で言われても困るんだが」

「認めん…認められるか…こんな事…!」

おい誰か慰めてやれよ、俺は早い所第2アリーナへ行つて着替えな

きやならんのだが。

「おいいつちー、早くしねえと授業に間に合わんぞ」

「ん、ああ…どうせシンと一緒にだろ？ なら大丈夫だって」

「俺飛び降りて行くけど」

「おい、待てよ！ 冗談じゃねえ！ 死んじまう！」

「ふ…二人とも何の話をしてるの？」

「ああ、えと…シャルルでいいか？ 俺は織斑一夏、一夏でいいぜ、よろしくな。んでこれはな…直ぐに分かる筈だ…」

「ここでいつちーの疲れ切った顔をもつと疲れの色に染めてやろう、マハハハハ！」

「言つとくがシャルりんは俺が連れてくからな、人に飲まれて溺死しろいつちー」

「シャルりんって何?! もしかして僕のこと?!」

「おいマジかよ夢なら覚め…!!」

「さあ来いシャルりん！ 口閉じて歯ア食いしばっとけ、舌噛むぞ」「えっ?! うわあ!! ちよつと…そつちは窓!!」

シャルりんを右肩で担いで全開の窓枠に足を掛ける、本音ちゃんが笑顔で手を振ってきたので手を振り返す、で…。

「わああああああああ!!!」

「何てこつた…シンが行つちまつた、うう、気が重い」

取り合えず左手を校舎に突き刺して徐々に減速、地面にソフト着地してシャルりんを地面に下ろす。

すぐにペタンと女の子座りになって脱力した。

「僕…僕生きてる?」

「男ならこの程度で驚くなよ、さあ立て、更衣室に急ぐぞ」

「ひ…非常識だよっ!! 死ぬかと思つた！」

「死んでないし無傷だろう、早く行くぞシャルりん」

「君は…籐ヶ崎君はちよつと変だよ…あとシャルりんって止めて」

フラフラと立ち上がったシャルりんの背中を軽く叩いて行くように促す。

「全力疾走だ、俺に付いてこれるか？ IS 操縦者ならある程度鍛



(以下略)

「いつちーがシャツを脱いでヒョイとシャルリンを見て驚く。」

「うお、着替えるの早いな、何かコツでもあるのか?」

「いや…別に?」

「いつちー、小学生のプールの授業を思い出せ、何人かやってたはずだぞ」

「…ああ! 最初から着てたのか! 俺もそうすればよかった!」

「にしてもピツチピチだよなそれ」

「だから穿く時に引つかかるんだよなあ」

「ひ…引っ掛かる」

「チンコな」

「ちん…?!」

「早く着替えろ、時間は待つてくれんぞ」

「そーいやシン、まだあのタンクトップみたいな制服クリーニング終わらねえの?」

「あれもうクリーニングで何とかなるレベルじゃないからな、穴開いてたからな」

「何の話をしてるのか僕にはさっぱり分からないや」

「シャルリンが頬を少しだけ紅く染めて会話に混ざろうとしてみる、何とか疑われないようにしているのだろうか?」

「俺には無意味だがな、バレるバレない以前の問題で知ってたし。」

「と言うよりも俺みたいに筋肉だらけの人間なら少しくよく観察すれば分かるんだがシャルリンの筋肉のつき方とかが明らかに男じゃない、胸を押さえれば何とかなるなんて事は無い。」

「男の体を見慣れていない生徒や特に異性の体に興味を示さず筋肉がどうと考えないいつちーには分からないだろうがな。」

「ああ、シンが少し前に血だらけになってな、その時着ていた制服が真っ赤になったんだ」

「え…?!」

「だから最初に着ていたこんなチグハグな服を着ているわけだ」

「へ…へえー」

「原因はいつちーな、気をつけろよシャルりん、学園は社会的立場など意味を成さないからな」

「そういえばデュノアって聞いた事ある苗字だよな」

そりやそうだろう、カラードには遠く及ばんが世界トップクラスの軍事企業だ、学園で使われているラファールもデュノア社の物だしな。

「うん、フランスで一番大きいIS関連企業だね。僕の実家、お父さんのね」

「へえ良い所のお坊ちゃんなのか、通りで気品つてのかな、こう…あるよなー!」

「俺も良い所の坊ちゃんだぞ、カラードだぞ、偉いんだぞ」

「…ははっ、いいからシンも着替えちまえよ」

「あ、うぜえ。つと、ホレいつちー、見てみるよ俺のそそり立つエーレンベルグ掃射砲」

「見ねえよ」

「んじやシャルりん、ほれ」

「わ、わあっ!! 見ないよっ!!」

「生娘か」

「娘じゃないよー!」

真耶先生のように顔を覆っていやいやするシャルりん、量子変換でバトルスーツを着用、ちなみに靴とかは無いので歩くたびにガシャガシャ煩かったりする。

シャルりんの周りをぐるぐると回り始める、今回はぬーぎぬーぎとか言わない。

「なあいつちー、いい歳したムキムキのオッサンが全裸で珍々ほっほりだしてドミナントを振り回しながら笑顔で走り回っている図を思い浮かべてごらん」

「うおえっ…!」

「ううううううううううっ…」

いつちーが顔を真っ青にして口を押さえる、対照的にシャルりんが顔を真っ赤にして蹲る。



俺じゃなかったら気絶するレベル、丈夫で良かったね！ 俺！

「オルコット、嵐、ISを展開しろ、お前たち二人には戦ってもらおう」

「な、なぜ私までもが…」

「まあ、一夏にいい所見せるチャンスだと思えば…」

するとココで何故か墜落してくる真耶先生、まあ俺以外全員前を見てるんだがな。

ふと思うんだが普通国家代表に並ぶ実力のある人間がISの制御をミスって墜落なんて事あるのだろうか？

いや無い（反語）。

「あああああああああつ！！ どつ、どいてくださあああああつ

!!!

「え、うおお?!」

「ふん！」

ここでちっふーが乱入、いっちーを引っ張って危険区域から脱出、ついでにいっちーを抱きしめると言う荒業を成し遂げる。

そしてソフトに墜落する真耶先生、ソフトに墜落っておかしいと思うかもしれないがコレが一番しっくりくるんだ。

「ふん」

したり顔なちっふーと微妙に悔しそうな真耶先生、メインブースターがイカれただど?! 狙ったか、ホワイトグリント！ クツ、ダ

メだ…飛べん…!!

と言う事なのだろうか、多分違う。

「いっくちいっくかあ…!!」

「一夏さくん？」

「え、俺？」

展開を一瞬で終えたせしーと鈴音がいっちーとちっふーを恨めしそうな目で見る、らうりーも羨ましそうな恨めしそうな微妙な目でいっちーを見ていた。

「二人には今から山田先生と模擬戦をして貰う。何、心配するな、今のお前達ならすぐに負ける」

「甘く見られましたわね…」

「ふふ、やってやるわ…!」

後は特筆すべき所はない、至って普通にコンビネーションを崩されて纏めて落とされた、それだけ。

「これで皆にも教員の實力の程がわかっただろう、以後は山田先生に敬意を持つて接する様に」

「俺もやりたーい」

「…一応展開してみろ」

「チェンジ！ アーマードコア!! アクアリウス！ マルチプルパルス!!」

閃光から現れるゾディアックの水瓶座を冠する重量逆間接型のアーマードコア、が形容し難いデカイ物体を背負ってる、一気にダサくなった。

「何だ…それは」

「マルチプルパルス、広範囲殲滅型のOWですね」

「しまえ!! この、馬鹿者があ!!」

『不明なユニットが接続されました、システムに深刻な障害が発生しています、直ちに使用を停止してください』

「止めんか!!」

まだマシンまだマシ、ヒュージキャノンなんて飛ばしてるのアレ核弾頭だからね。

仕方ないのでACごと強制解除、ちっふーの焦った顔なんてそう見えるものじゃないぞ☆

「全く…:では専用機持ちをリーダーとして分かれろ、素早くだ」

その一言で専用機持ちではない生徒達が動く、皆が皆いつちーとシャルリンの所へと集まる、俺の所に来たのは本音ちゃんと谷本さんのみ、残りの生徒の7割以上が俺以外の男に密集している。

2・3人ほどはらうりーの所に、あと極少数ではあるがせっしーや鈴音に。

いつちーとシャルリンの人口濃度がヤバイ、酸素うっす!

「シンにーいっばい教えてね」

「勿論、俺に任せなさい」





「ではそれぞれの班は各自で訓練を始めろ、まずは歩行訓練からだ」  
「さて、まずは歩行訓練だがISの特性上歩くと言う行為は正直役に立たない、しかしバランスを取る訓練には適している」

「シンにー、しつもん」

「はい、本音ちゃん」

流星に俺個人で好き放題すると訓練にならないので真面目にやらせてもらう、シモネタも本音ちゃんがいるので自重だ。

「飛んじやダメなの〜?」

「PICを使うと言うなら飛ぶのはダメ、でも姿勢制御の為に左右に力を掛けるのはOK」

「は〜い」

「次、質問はある? ないなら早速訓練を始めようが…」

「はい」

「どうぞ」

「籐ヶ崎君の専用機はほぼ常に地面に接着してるけど日頃から訓練してるの?」

「俺のACはただ単に地上戦を主として作られてるだけだから歩くのに適している、故にほぼ常に地面に接着してるんだ、勿論空を飛ぶことも出来るしホバーも出来る。他に質問は?」

「どうやら無いらしい、なので早速訓練に移って貰おう、他の班は既に訓練を始めている、しまった、出遅れたか。」

「お、シャルりんこの生徒がバランス崩してこけた、これも説明したほうがいいかね。」

「谷本さん、まずはそのまま立った状態で感覚を合致させるんだ、急に歩こうとするとこけるぞ」

「お、おお…っ」と

「んじや歩く時の説明、普通で感覚で歩いたらPICに振り回されるし躓くから足がもっと長くなったのを想像すればいい、簡単に言うとなっげえ長い厚底ブーツだろうか。それと歩くだけならPICは使わない方が歩きやすい」

「よっほっ…あはは、面白いねコレ」

どうやら歩くよりスキップのように跳んで移動するほうが楽だし早いと考えたのかピョンピョンと歩き回っている、センスはかなりあるみたいだ。

余談だが飛ぶ方が遥かに楽である、歩行訓練とかwwとか思われがちだが飛ぶよりも難易度が高かったりする、実の所いつちーもまともに歩く事が出来なかったり。

そろそろいい頃合なので谷本さん呼び戻しISを外して貰う、勿論立ったままなんて事にはならず座ってISを外して貰った。

「次、落ち着いてな」

「は、はい…いよっと」

こけそうになっただら俺が支えればいいと思っただが中々どうして俺の仕事は無さそうだ、だがまあ見ときはするさ、いつちーは相変わらずモテモテのようで、ふあっきん。

歩行訓練を終えたら昼食で午後から戦闘訓練かね。

「最後は私がやる」

「はいよ、気をつけてね、倒れても怪我は無いけど身長が高い分怖くはあるから」

「シンにーシンにー！ 大変だよ」

「何か異常でもあった？」

「動かないよ」

「…もしかして本音ちゃんって今までPICを完全マニュアルで動かしてた？」

「うん、そうだよ」

完全マニュアルでPICを使わない、要するにただの馬鹿でかい装甲を着込んでいるだけの状態で勿論かなり重い、それを華奢な本音ちゃんを力で動かせるかどうかと言うと勿論不可能で…

それと完全マニュアルで普通に動かせるのはかなりレベルが高い証拠でもある、俺はACなので関係無いが…しかし本音ちゃんが…

何だかんだ言ってももしかして本音ちゃんって才能の塊なのだろうか、処理能力に特化したタイプの。

「体を動かす事にだけPICを使ってみるんだ、もしくはオートに

すればいいよ」

「おおく動いたあ〜」

きやつきやつと動き回る本音ちゃんを眺めながら時間の経過を待つ、驚くほどにする事が無い。

やや危なっかしいので本音ちゃんから目を離すのは少し怖いが暇過ぎるのは如何ともし難い。

らうりーの所はそのまんま軍隊みたいだ、和気藹々としてねえ…殺伐としすぎだろう、吉野家じゃないんだから。

シャルりんは説明が上手いのか常にアドバイスのことを言っている、動かしている人間もしっかりと聞いて生かすようにしているし、実に良い。

鈴音は…うん、教えるのには適していないな、感覚で、って分かるわけが無いだろうに。

せつしーの所は全員ポカーンとしてる、角度や数値を言われても困るんだけどって顔だな、こう！なるほど、わからん状態。

いつちーは自分の経験に照らし合わせて…はいるんだが如何せん経験が浅い、故に説明も何処と無くわかり辛いような感じがする、しかしイケメンな所為かそれでも一言一句逃さんと言わんばかりに女子が話しに食いついているから理解は出来ているらしい。

「本音ちゃん、戻ってきて、そろそろ交代だ」

「はあ〜い」

うん良い子、ガシヨガシヨとスキップで帰ってきた本音ちゃんがI Sを外す。

そう言えば本音ちゃんがラストだったな、仕方が無いから俺は待機しておこう、全員に指示を出しておかねば。

「全員その場で座るなり休むなり楽にしてくれ、俺はちっふーに指示を仰ぐ」

「はあ〜い」

ヒュゴオオオオ、と通常ブーストで移動しながらちっふーの元へと向かう、丁度らうりーもちっふーの元へと向かっていた。

「よーう、らうりー、俺はカラーードの籐ヶ崎信一郎ってんだ、よろし

くな」

「ふん、貴様があのカロードのか、それとそのふぎけた名で私を呼ぶな」

「おー、おー、随分と冷たいねえ…いいじゃん別に、ココは軍じゃないんだし」

「あのカロードの御曹司と聞いたからどんな人間かと思えば、ISをファクションと同義で考えているような有象無象と同じか、貴様に付き合うのは時間の無駄だ」

「うつひよーたまんねえ、水没王子みてえなふいんき(何故か変換できさない)」

考えてみればたかが移動如きにACなど不要！ 素の人間で突っ込め！ という訳でACを解除して普通に歩いていこう、らうりーもそうしてるし。

「…ほう、義股か」

「ISをファクション感覚だといったな、俺がこの学園で流した血の量は一般人には考えられんぞ」

「…ふん、考えを改めといてやる」

踏まれたり木刀で殴られたりとは言わない、それとらうりーの好感度がアップ、いくらなんでも対して仲が良くない人物に死ぬと言えるほどらうりーはアレじゃないからな、こと人の生き死にに対して軍人はシビアだから死ぬなんて簡単に言わないだろう。

もしかすると一番難易度が高いかもしれない、今の所目標はらうりーに死ぬと言われる事だな。

「織斑先生！」

「敬礼を止めるボーデヴィツヒ…どうした」

「歩行訓練を一通り終えました、差はあれど問題は無いと思われま

す」

「了解！」

らうりーに倣って真面目にやってみる、ホントは好きじゃないんだ。こういう、マジな話つてのは、俺のキャラじゃないしね！



「いいよいいよ、俺が許す、早く食おうぜ」

「な、何です？ その大きな紙袋は…」

「購買で買ってきた、俺のお昼ごはん」

「何が入ってるのよ…」

「僕も気になるかな…」

「全部焼きそばパン」

その直後全員が俺を微妙な目で見る、ちなみに購買で買う焼きそばパンはパンの中でトップクラスの安さだ。

ただし商売相手が女性な所為か売れ行きは良くないとの事、菓子パンより惣菜パンを食べ。

「お金に困ってるのでしたらわたくしがお貸ししましたのに…」

「心配しなくても良いわよ、私達って代表候補だし、それにホラ、アタタって嫌な奴だけど友達じゃない」

「お前ら忘れてると思うけど年収お前らの何十倍何百倍以上あるからな、俺カラードの特殊技術総合リーダーだからな、次期社長だからな」

「…おお、そういうやそうだ」

こいつら纏めてコジマ攻めしてやろうか、泣いたり笑ったり出来なくしてやろうか。

皆して顔の事で弄ったり割と好き放題しやがって、人間のすることかよ！

「ハハ、まあいいじゃねえか、シャルルも男同士だし仲良くしようぜ、分からない事とか困った事は何でも聞いてくれよ！ IS 以外で…」

「アタタもうちよつと勉強しなさいよ」

「そうだな、仲良くしようぜシャルりん、♂男同士♂なんだからな、何でも聞いてくれ、料理の事以外は」

「確かに料理出来無さそうな顔してるな、籐ヶ崎は」

うるせーやい、俺には料理を作らなくても食料だったり他の物だったりを創れるからいらねーんだ、俺を慰めてくれ焼きそばパン。

「シンがすげえ不機嫌そうな面して焼きそばパンを食ってるんだ

が

「いいから私達も食べましょ、ホラ」

「ん？ 酢豚？ 自分で作ったのか、鈴」

「まあね、アンタの分もあるわよ」

「い、一夏！ お前の分だ！」

「おお二人ともサンキュー！ 美味そうだな」

せっしーがぐぬぬしてる、いやいや正しいよ、せっしーのサンドイッチはアレもう形容し難い何かだよ、定期的に下二桁サンドイッチスレが立つレベルだよ。

シャルりんも苦笑いしながら購買で買ってきたであろうパンを手持っている。

「ど、どこを見ている！」

「おっぱいに決まってるだろう！ (声真似)」

「今のはシンだからな！ 俺じゃないぞ！」

「シャルりん、酷いとおもわねえ？ 普通あんなに上手く声真似できるやつなんて居るわけないのにな？」

「そ、そうだね…」

「なー」

モツピーが鞆に手を突っ込んだので空いている手で首輪(PA発生装置)のスイッチをONにする。

直後モツピーの振り下ろした木刀と俺のPAが干渉し緑の閃光と火花を散らした。

「うわあつ?!」

「ぐうううう!! おのれ籐ヶ崎いい!!!」

「どんだけ力んでも無理だって、これIS兵器防げるからな」

「え、ええ?! 何が起こってるの?!」

「落ち着いてくださいなデユノアさん、何時もの事ですわ」

「あれISのシールドも削るのよね…」

「じ、人体に害とかはないの?!」

「大丈夫だろ、多分」

「ぐぬぬぬぬ…ううううう!!」



引く事しか出来ない木刀を認めん、認められるか！　と言わんばかりに押し込もうとしてくるので左手で木刀を弾く、後ろに大きく仰け反ってモツピーが尻餅をついた。

ミニスカートの中身が見える、ほう…淡いピンク色か…可能性を感じたが…錯覚か。

「ハアツ…ハアツ…いいぞ…ハアツ…冴えてきた…！」

「うわあ…」

「おいシン、シャルル引いてるんだけど」

「今ので白米をお茶碗3杯イけるな」

「やっぱり籐ヶ崎さんは変態ですわ、ええ、間違いありません」

「だれか布仏さん呼んで来て！　もう私達じゃ手に負えない！」

「死ねばいい！」

「死ねばいい頂きましたーっ！　でもモツピーは代表候補じゃないので数に入りません、今のは惜しかったですねー」

「羞恥に顔を赤く染めてからの死ねばいい、点数になっていれば高得点ですね。僕もぐつと来ましたよ（声真似）」

「ぼ、僕の声?!　僕じゃないよ?!　誰?!」

「俺だ」

「何だシンかー」

「I think a thinker」

から繋げて音さえも口から出してThinkerを一曲熱唱、周りの皆は啞然としていた、声だけでギター、ドラム、ピアノ、歌を全て出していたのだからそりやあもうビックリしただろう、なんならヒュムノスを謳ってやつても良かった。

「声真似ってレベルじゃないよ…」

「相変わらず意味わかんないわ」

「そ、そういえば！　一夏達は放課後にISの訓練をしてるんだよね」

「ん、ああ、俺は皆に比べてISに関しては遅れてるからな、少しでも早く強くならないとダメなんだ」

「俺が参加するのは稀だけだな」



「んじや俺はシャルりん連れて行くぞ」

移動精度は上がったが相変わらずカツカツのEN運用をしていたので俺の真似は止めるように言っておく、鈴音の甲龍みたいに低燃費なら俺の真似をしても大丈夫なのだがいつちーの白式では自殺行為に近い。

それでも戦えているのはいつちーの才能と主人公補正に他ならない、いつちーのISが想定外の変化をされても困るし。

「おーいシャルりん！ こっちこっち！ 部屋まで案内するから来てー！」

「う、うん！ 今行くよ、籐ヶ崎君！」

イケメン（イケてるウーメン）を連れて1026号室へと向かう、廊下で待機していた女子勢がシャルりんに話し掛けようと動きはするが俺がいるため断念して肩を落として帰って行く、さながら松明持ったハンターとルドロス（近寄ってくるも松明に気付いて後ずさりする、可愛い）である。

「ところでシャルりん」

「なにかな？」

「ご存知の通り俺と相部屋だが双方とも大企業の社長の子供だ、シャルりんはどうか知らんが俺は自室で社の仕事をする事になる、社のことは双方とも不干渉で良いな？」

「も、勿論だよ！ …社長の子供…か」

やだあもう、シャルりんくーらーいー、でもまあ別に構わんがね。

カードキーをスライドさせ部屋の扉を開ける、ACのコア機能を一部展開、部屋に細工がなされていないかチェックをしてシャルりんを招き入れる。

「さあ、とにかく入って入って、出来立てほやほやの1026号室だぞ」

「出来立てほやほや?!」

「ちよつと変なおいするけど入って入って」

「変なおい?!」

「ファ○リーズ的なー、ベッドは出口側を俺が使ってるから申し訳

ないが窓側を使ってくれ」

「ああ、うん、ありがとう」

ばたむと扉を閉めてキッチンへと向かう、正確にはキッチンに備え付けられている冷蔵庫に向かう。

シャルリンは自分に割り当てられたベッドに向かつてぽふんと俺のいる方を向いて座った。

「シャルリン、抹茶アイス食べるー?」

「ありがとう、頂くよ」

「だよな、甘い好きだよな、女の子だし」

「……え? お、女の子? あ、ははは、そんなわけ無いじゃないか、変だなあ」

「……立ち方に気を付けた方が良い、無意識的に内股になってるぞ」

「ツ!!」

何時もの如く凄まじく綺麗に盛れたアイスをお盆に載せてベッドとベッドの間の机に置く。

俺は俺で自分のベッドに座って厚いから上着を脱ぎ捨てる、下はご存知の通りタンクトップだ、女性の前で半裸になったりパンツ姿になるわけにも行くまい。

「どう…どうして…?」

「何に対しての「どうして」だ? 俺が脱いだ事か? それならただ

暑いから、だ」

「僕が…女だって…」

「俺の義股じゃない体を見てどう思う?」

右腕に力を入れて曲げる、上腕二等筋を見せる感じ、ガツチリしてるだろう、触っても良いのよ?

「凄い…筋肉だけど」

「筋肉、そうだ、筋肉だ。勿論鍛えたからこうなったわけだ、鍛える為には知識が要る、だから筋肉がどう付くか、どう動くか、それを俺は知っている」

「でもそんなので女だなんて…!」

「男と女ではな、筋肉の付き方も、動き方も違うんだ、ただ胸を押さ

えただけで男装が出来ると思うなよ、シャルりん」

「ツ！ そう…だよね…無理があつたんだよ、やっぱり…」

「目的は…広告塔か、だがまあインパクトは少なかつただろうな、カロードに俺が居る所為で」

「…僕の…」

皺が付くほどズボンを握り締めたシャルりんがぼそり、ぼそりと言葉を漏らし始めた、でも正直俺は知ってるから聞かなくてもいいんだよね、まるでRPGの二週目状態。

「僕の本当の目的は…スパイなんだ…」

「あー…いいか？」

「…？」

「正直どうでもいい」

「…え？」

「いや、正直スパイとかデユノア社の命運とかどうでもいい」

「どう…して？」

「カロードの仕入れた情報で何があつたか知ってるし、誰が、どんな目的でIS学園に入ったか、表も裏もカロードに隠す事なんて出来ないぞ？」

「そんな?!」

勿論嘘だ、俺が知ってただけでカロードは不干涉である。

3Dホログラムパネルを投影しベッドに転がって操作を始める、ちなみに今話している事と何の関係も無い。

「白式のデータだろ？ 残念だったなあ俺というイレギュラーの所為でいつちーじや無くて俺と相部屋だ」

お、簪からメールが来てる、へえ、一週間以内に打鉄式式が完成しそうだった？ そいつあ何よりだ、ACのデータもちよいちよい提供してよかつたな、これでACの武器とも互換性が出来たしタッグで良く光るはず。

簪と本音ちゃんには絶対に他に持ち出ささないでくれと頼み込んだから大丈夫なはず。

「それと…籐ヶ崎君のISのデータ、もし…もし男装にバレたら…」

その時は…」

「身体を使うってか？ やめとけ嬢ちゃん、生娘が俺を落とせるわけが無いだろう」

「じゃあ僕は！ …僕はどうすればいいの？」

「そんな事、俺が知るか。そんな事、俺に関係無い」

「関係無いわけが無いじゃないか！ 僕は君を…!!」

「言ったら、部屋内で社の事は双方不干渉だ」

「そう…でも…僕が女だつてバラす…？」

「バラさん、バラすのも面倒だ、いいか？ 俺は面倒が嫌いなんだ」

簪に「じゃあ完成したらタッグの練習しような」とメールを送ってホログラムを消す、仲の良い友達感覚だが何、問題ない。

「それが籐ヶ崎君なりの優しさ？」

「そう思いたいならそれで良い、俺は今日ひたすらに面倒だから飯は食わん、行きたいなら一人で行ってくれ、いっちーとか誘って、な」

「うん、そう思っておくよ、ありがとうって言えればいいのかな？」

「なんならほつぺたにキスしてくれてもいいのよ？」

「それはちよつと嫌かな」

本音ちゃん、簪、シャルりんが苛めるの、ふええ…助けてえ…へ。

「社が敵対しててもその息子娘が敵対する必要は無いからな、愚痴なら好きだけ聞いてやる、友達としてな」

「うん、ところでアイス食べて良い？」

「いいよっ！ スーパーで売ってたやつすいだからあんまり美味しくないだろうけど！ ハーゲ〇ダッツじゃなくてごめんね！」

「そうだね、僕が自分で作ったほうがおいしいや」

「今度蟹の食べられない所の味がする飲み込めないほど不味いお菓子を食べさせてやる」

「うえ?! い、いらナイよっ!」

しばらくそんな会話を続けていると部屋の扉をノックする音が聞こえる、いっちーが飯に誘って来たのだろう、俺をまるで虫除けのように使うから食堂やら連れションやらあらゆる場所に連れてかれる、いつまでも思い通りになると思うなよ？

「おーい、虫除…シン、飯食いに行こうぜ！」

「いっちーを殴りたいが世界最強のガーディアン（オリムラチフユ）が居るので殴れない、しかもいっちーはガーディアン（オリムラチフユ）の存在を知らないんだからなお性質が悪い」

「ははは、で、どうするの？」

「行かぬでござるう！ つつーわけでいっちーと飯食ってきな、学食は初めてだろう？」

「うん、じゃあ行ってくるよ、籐ヶ崎君」

「苗字以外で呼べねえ？」

「じゃあ…シンイチ？」

「ネクストコ〇ンズヒーント！ 自殺！ シンと呼べい」

「分かったよ、シン、じゃあ行ってくるね」

「応」

シャルリンが出て行ったのを見届けて通信を起動する、通信先は勿論カレード。

情報の信頼性を優先するために今回はオーメル・サイエンス・テクノロジーに繋ぐ。

「信一郎だ、すまないが調べて欲しいことがある、フランスの代表候補生シャルル・デュノア、いや…シャルロット・デュノアに関してだ、デュノア社に引つかかる物は片っ端から情報を集めてくれ、期限は指定しない、が…早ければ早い方が良い」

生まれて始めての朝勃ち、それは恋の予感なお話

「ん、むぐぐ……」

何か寝苦しいと感じて呻きながら目を開ける、すると珍しい事にちゃんとベッドで仰向けになって寝ていたのだ、おつかしーなー。

「ん、う……ふぁ……」

「おっ……」

男装してると思えぬ何やらエロイ声で身動きするシャルりん、時間を見るとまだ起きるには少し早い、それに社の仕事も出来ないし。

体勢を変えようと体を動かすと義股じゃない体から凡そ健康体の人間から出るような音とは思えない音がバキボキと聞こえる、割と大きい音で。

「んふ……あん……つふう……あ……ふぁあゝ」

「おはようございませす。システム、通常モードを起動します」

「んにゃ……おはよ……シン……うわあっ?!」

目を擦って挨拶のあと急に目を見開いて顔を真っ赤にしたシャルりんが何やら俺を指差す、パンツにタンクトップなのは今更だろうが、生娘か。

「なっ、なっ、ナニをたたせてるの?!」

「は?……ああ、勃つてんのはお察しの通りナニだよ。朝勃ちだよ、男の生理現象d……何?」

朝勃ち? なぜ俺が? 今まで新たな生を受けて朝勃ちなんてした事が無かったのに何故今更?!

おかしい、おかしいぞ……性欲なんかも皆無に近いはずなのに……俺は歳食ったジジイだから……

もしかしてとは思うが、身体年齢に引っ張られてるのか?

ふと試しに恋愛的な意味で好きな人物と言うのを頭に浮かべてみる、少し前までは生前の妻だった。

今思い浮かべると頭に浮かんだのは簪で……おい、マジかよ。

「どうしようシャルりん、恋しちゃった、こんなジジイにもなつて」

「しっ、知らないよっ!!」





はならんな、それならタッグの練習…をシャルリンに付き合ってもらえ、俺は簪と練習せねば。

そうだそうだ、そう言えばそろそろ製作中の打鉄式が完成する頃なんだよな、楽しみだ。

昨日の夜入ったメールだと今日の放課後には完成すると聞いた、ちなみに今放課後だ。

「そこまでだ、いっちー」

「んお？ おお、分かった」

その言葉でいっちーがゆつくりと動きを止め地面へと降りて行く、俺も空中でACの展開を解除し地面へと落ちて着地した。

「何かもう慣れたな、シンが十数メートル上空からIS展開せずに落ちてくるの」

「んじや真面目にアドバイスだ、いいか？」

「おう！」

「まずいっちーの白式だがな、どうしようもなく欠陥機だ、俺のACにも劣悪なEN値のアセンブルはあるがそれでもジェネレーターがあるからこそ戦えるしメリットも見える、だがいっちーの白式にあるメリットはワンオフの圧倒的攻撃力だけだ、それ以外は軒並みデメリット」

「…ああ」

「不機嫌になるな、防御力は量産機に劣りパワーは鈴音の甲龍に劣る、加速力は凄まじいがいっちーがそれを扱いきれてない、万能性はシャルリンのラファールカスタムに勝てない、だからこそ！」

「だからこそ？」

「圧倒的火力をちらつかせて警戒させろ、相手の心を揺さぶれ、デメリットを悟らせるな、何が何でも責めなければ勝てないと思わせろ、攻撃を受けても涼しい顔をしろ、ポーカーフェイスだ、ISだけじゃなく自分も使え」

「わかった、やってみる」

「もしくは短期戦でブチ殺せ、へばり付いて離れるな、ワンオフじゃなくてもいい、兎に角斬って殴って蹴り飛ばして掴んで破壊しろ、

「いつちーにはそつちの方が向いてるかもな」

「ああ」

「そんだけだ、じゃあ俺は用事があるからこれで失礼させて貰う、じゃあの」

「おう、サンキュー！ トーナメント、シンに一泡吹かせてやるからな」

「トーナメントは力こそ全てだ…私を超えてみろ!!」

と言つてアリーナから颯爽と走り去る、その時君は格好良い…

走りながらメールホログラムを起動、新しいメールが入っていたのでチェック、一つはオーメルからの音声メール、後一つは簪からの文章メールだ、オーメルは後で見るとして簪のメールを開く。

『打鉄式式が完成したから何時もの場所に来て欲しい、初めての起動は信一郎君と一緒に見たいから…待ってるね。 —簪—』

う、ふふふ、可愛いじゃないか簪、ようし！ ここは一番男働きさせねば。

一度低く体を落とし足の出力を急激に上げる、生身で言うなら足に力を込めると言った所だろう、一步踏み込み一つ高く跳ぶ、左側の壁に指を叩きつけ、突き刺し、腕の出力だけで再度跳ぶ、目的地の例の場所を眼下に収め再度壁に指を突き刺し引つ掻くように削りながら減速し地面へと降り立つ。

「っふー」

「きやつー」

「や、やつぱり慣れないね！」

久方ぶりに例の女子二人が丁度目の前にタイミングよくいたので何かセクハラは無いかと頭の中を探る。

「つと…ごめん、セクハラネタ今持ってねえや…」

「ああ、うん…気にしないでいいよ」

「へ、変…あれ？」

思いつかなかったのでトボトボと肩を落として整備室の扉の前に移動する。

うっし！ んじゃ行くか、簪が俺を待っている！

「簪、いるかね？」

「うん！ 待ってたよ、信一郎君」

「シンにー、遅かったじゃないか、言葉は不要か？」

「本音ちゃん、俺の言った妙なセリフは全体的に忘れなさい、本音ちゃんのキャラには合わないから」

「はあ〜い」

「さてさて、一体どんなISとなっているのか…楽しみだ、なあ簪？」

「うん…私も楽しみだった、初めては…信一郎君に、見て…貰って欲しいから」

「かんちゃん私は〜？」

「勿論、本音にも見て欲しかった…」

うむ、何か簪が股間に来る言い回しをしているがシリアスな感じなので華麗にスルー、今日の晩御飯何にする？ カレーにする…ごめん。

「さあ簪、早速装着して見せてくれ、俺も一応技術者だからな、年甲斐も無くワクワクして仕方が無いんだ」

「かんちゃんはやく〜！」

「うん、今…装着するね…見てて」

そう言っただ打鉄式に被せていた布をスルリと地面へ落として全体像が視界に映る。

大型の実体シールドとなっていた浮遊ユニットはスラスタに変化し、上部にはミサイルポッドが搭載されている。

背部には粒子砲が取り付けられ、脚部のスカートもスラスタに置き換わっている。

元の打鉄よりもスマートでスタイリッシュだ、実に美しい。

ちなみに防御能力は低かったので俺が浮遊スラスタにPA発生装置とアクアビットの小型コジマジエネレーターを片側に一つづつ、反対にも一つづつ搭載しておいた、勿論簪に許可を取ってだ、おかげで防御面も軽くありえないレベルになった。

そしてカラードの武器+ACの武器に互換性があるのでISでは

現状最強かもしれない、割と冗談じゃなく。

簪が騎士のように佇む打鉄式式…いや、純日本産だから武士のようにか？

兎に角打鉄式式に触れ、一度待機状態の指輪へと戻す、愛しそうに指輪を撫でる姿がまた美しい。

「…おいで、打鉄式式…」

一言簪が呟くとそれに応じ目映い光が簪の全身を包む、無意識的に腕で影を作り視線をそらす。

光が止んだのを確認して腕を退けるとそこには…打鉄式式を纏った簪がふわりふわりと浮いていた。

「おお…なるほど…なるほど…」

「わあ〜かっこいいねえ〜」

「ありがと…本音…ねえ、信一郎君…どう…かな？」

なんだか無性にペタペタ触りたくなるがグツと我慢、下から上へとじっくり見た後一息を吐いて感想を言う。

「これは良い…が、俺には言葉が見つからん、無論良すぎてな…ただ一言、思ったことをそのまま言う…綺麗だ」

「ありがとう…嬉しい…」

不覚にも簪に見惚れてしまった、いかぬいかぬ、俺は□リコンではないのだ、精神年齢が80より離れた娘にときめいてしまったては警察に御用されてしまう。

「さて、機体チェックとファーストシフト、ついでにタツグの練習でアリーナに行こうか？」

「も、もう?…」

「早いに越した事はないさね、なあ本音ちゃん」

「そうだね〜それに私もかんちゃんか飛んでる所早く見たいなあ〜」

「うん…じゃあ行こうかな」

「じゃあしつかりとエスコートせねばな、何せ俺は簪を守る騎士だからな」

片足を一步下げ腰に片手を当て礼をするように曲げながら右手を

差し出し「さあお姫様、お手を」と言つて簪を待つ、簪は恥ずかしそうに頬を染めながらゆつくりと俺の手に片手を置いた。

くっさあああああああああああああああああああ!!!

あんまあい匂いがするよおおおおおおおおおおお!!!  
おッ!!!

これはどこかで採算(シモネタ)を取らねば俺が俺でなくなつてしまう!

燃える…燃えてしまう…キャラクター…俺が…消えて行く…これは面倒な事になった。

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

「んじゃあちよつち軽く飛んで見ようぜ、チェンジ・アーマードコア・ホワイトグリント」

「うん、わかった」

「頑張れ」

「本音…ただ飛ぶだけだから頑張るも何も…」

俺が空中で適当に目的も無く飛び廻りながら簪の慣らし飛行を眺める。

流石は日本の代表候補だけあって実に素晴らしい運転技術だ、俺は基本的に曲線を描いて飛ぶのは苦手だから少々羨ましい。

飛び回る簪を見てきゃっきゃつと喜んでいる本音ちゃんの隣へ降りた、流石に落ちて着地するわけには行かないのでゆつくりと地面に着地する、勿論本音ちゃんもISを装着している。

「シンにー、かんちゃんすごいねえ」

「まあ代表候補生だからね、流石といった所かね」

「あ、シンにー、おりむーたちがいるよ」

「ん、どれ…まだあいつら訓練してたのか、ご苦労なことて」

『信一郎君…もういいかも知れない、この子の動きに慣れて来た』

「あいよ、んじゃあ一旦稼動データの様子を見てみたほうが良いかな、降りてきてくれ」

ふといっちー達の方を見るとズカズカとらうりーがいっちーの方

へ向かっているのが見えた、何やら楽しそうな事になってきたぞ！

「何か面白そうな事見つけたからそっち行つて来る、AC解除、レッツパーリー!!」

「あー…ああ…」

「シンにー行つちやつたね〜」

「丁度良い、私と戦え」

「戦闘狂（バトルジャンキー）か！ いいだろう、俺が相手をしてやる！」

「…貴様じゃない、失せろ」

「シャルりん!! らうりーが僕のこといぢめるのー!!」

「ごめんね、シン…正直な感想言わせて貰うとちよつと気持ち悪い…かな」

「あれ？ 俺に優しいのつて簪と本音ちゃんだけ？ いや…ジャツクの娘のフランも…」

「織斑一夏、私と戦え」

「…個人的には構わないんだけど何故だかココは断ると言つといたほうがいい気がする、だから断る、戦う理由も無いしな」

「俺なら何時でも構わないぜ、らうりー」

「役不足だ」

ビシリとポーズを決めて言ったのにこつちを向く事さえなく断言された、悔しいです。

軽四軽レール拡散ロケライールコアAIサポート全開1・15弾無限で相手してやろうか、謳つてやろうか！

それともエクシアで相手してやろうか、赤いのにブラックバード的な方で。

「話は変わるけどISスーツってうっすいよな、世の男の股間を元気にしてどうするんだろう」

「相変わらずの変態ね」

「もう喋らないで頂けます?」

「織斑一夏、貴様に戦う理由が無かろうと私にはある」

「ド変態め…」

「死ねばいいんじゃないかな？」

「だから私と戦え」

「はい死ねばいい頂きましたー!! これでドイツ以外の代表候補生全員に死ねと言われました！ あつとひつとり！ あつとひつとり！

「ええい!! 煩いぞ！ 私が今織斑一夏と話をしている最中だとかからののか!! 人の会話を遮るなど軍で教わらなかったのか!!」

「荒ぶる鷹のポーズツ!! 僕軍属じゃないですしおすし!!」

でも小学校でならったよ！ 僕えらいでしょ！ 褒めて褒めて！

「いいだろう、籐ヶ崎信一郎…まずは貴様を黙らせるツ!!」

と同時にISを展開するらうりー、流石に生身相手に武器を撃ったりはしないが今にも殺してやる、殺してやるぞ！ と言わんばかりにこちらを睨みつける、お人形みたいなカワユイお顔で睨まれても僕怖くなんて無いですし、脅しにはまず顔だぜ？

「いくぞっ！ チェンジ、アーマードコア!! がっちりーん！ 換装BISMUTH（コジマミサイル） ZINC（垂直コジマミサイル） KB—0004（コジマパンチ）」

「コジマは…マズイ…」

「なんだか良く分かりませんが籐ヶ崎さんのISから緑の光のような煙のような物が漏れてるような…」

「あー…うん、私絶対あれと戦いたくない、嫌な予感しかしないもの」

「今更だがコジマって…何なんだ」

「なんだろう…僕の灰色の鱗殻（グレースケール）と似たような匂いがする、変態武器的な意味で」

ガチャリとらうりーのレールカノン？ からロックされていると警告を受けたので…

ガアオンツ!!!

「正面からぶっ潰すツ!!!」

タイミングを合わせて飛んできた弾丸をコジマブレードで殴り潰した、緑の光が周りを包み込みコジマブレードに再度発射のためのコ



ジマエネルギーが充填される。

パシュツ、と何かの排出音でコジマブレードのリロードが完了した事を確認、ギユツパギユツパと両手をニギニギして緑の煙から歩いて出る。

「今何をした…?」

「分からなかったかい？ らうりー、らうりーの見解ではどう見る?」

「音速を超えて飛ぶ弾丸を殴り潰したように見えたが」

「せいかなぁーい！ 回答者には…」

OB準備、2段QB用意、同時に起動、そして両背のミサイルを同時射出、通常のコジマミサイルとは考えられないほど高速で飛んで行くコジマミサイル。

「コジマミサイルプレゼント!」

「ミサイルなど…私のシユヴァルツエア・レーゲンには悪手中の悪手だ!!」

らうりーに向かうミサイルが急に動きを止めた、緑のコジマは漏れ出しているがミサイル自体がピクリとも動かない、なら直接殴りに行く、A I Cなぞ知るかッ!

「コオオオオオオオジイイイイイイマアアアアアアア…!!!」

「それも…悪手だ!!」

「パアアアアアアアアアアアアアンチイイイイイイツ!!!」

誰がらうりーを殴りに行くなどと言った？ 俺が殴るのはらうりーが静止したコジマミサイルだッ!

普通のミサイルだと思ふなよ、らうりー！ お前は今コジマミサイルの殺傷範囲に入っているのだッ!!

緑の爆発が目の前で起こりらうりーの頭上にあつた垂直コジマミサイルに誘爆する、俺のPAが一瞬で消し飛び大量のAPを削り取つて行く、しかしそれはらうりーも同じ、一つ目のコジマ汚染でシールドが強制的に消し飛ばされ二発目のコジマミサイルの爆発を距離的にクリーンヒットでないにしろ受けてしまったのだから。

「つぐー！ なんだ、何なんだそれは?!」

「換装、LETHALD OSE（アサルトキャノン） ADDICT  
（PA回復装置） ARSENIC（トールラスコジマライフル）」

「シンが使ってる武器ってもしかしてシールドを強制的に引っぺがすのばかりじゃないか？」

「一撃でISを破壊したり本当にカロード意味わかんない」

「僕のグレースケールって…もしかして「ただ」の近接武器…？」  
肩に付いてる真ん丸キュートな物体から緑の光が噴出す、勿論コジマエネルギーだ、周囲に残存するコジマ汚染のPA侵食速度を越えてPAが急速に回復されていく、続いて両手のコジマライフルに緑の光が集まり、PAに回されるコジマエネルギーをゆっくりと食いつぶして根元にあるクリクリキュートな物体にコジマエネルギーが充填されてゆく。

「ダンスダンス、アルギュロスー♪」

「ステップステップ、アルギュロスー♪」

「っふ…！」

連射レートのビツクリするぐらい遅い重レールを撃ってくるらしい、当たってやる訳にはいかん、なにせPAも削られるし勿論ダメージも入る、だがそんな事よりもいままでチャージしていたコジマエネルギーが霧散すると言うのが何よりも辛い!!

「おお、こわいこわい、威力はインテリオルの重レールに劣り弾速は軽レールに劣る、ドイツは何をしてたんだ、ローゼンタールやインテリオル、アルドラが見限るのも良く分かるな」

「キ、サマアアアアアアアアッ!!!」

物凄いスピードでワイヤーブレード<sup>!!!</sup>を全て展開しジグザグに飛びながらも迫ってくるらしい、取り合えず銃口は向けているが撃つても当たる気がしない、弾速的な意味で。

かなり寄せられたのでコレはイカンと後ろにブーストをするが如何せん月輪、つまりアルギュロスである。

ただでさえブーストが遅いのに引き撃ちなんて出来るわけが無い、つまり…

「捕らえたぞ!!」

「う、動かぬ…!」

「ああ! シンが捕まった!!」

「シンにー!」

「…なんでこんな所に布仏さんが…?」

「信一郎君…!!」

銃口だけはしつかりとらうりーを捕らえているが体が一切動かぬ、これは…面倒な事に…なった。

「どうだ、引き金を引けまい、あとはじわじわとダメージを与えてくれるぞ」

「丁度チャージも完了した事だしいい事を聞かせてやる、らうりー」

「命乞いか?」

「悪いが元々俺のAC専用武器に引き金は無い」

その言葉を聞き反射的に体を大きく射線上から反らすらうりー、丁度思考内でも発射と考えていたため直撃は無かったが装甲の極々一部を掠りアリーナのシールドに直撃する、その部分に常識的に考えられないレベルのダメージを受けたためアリーナ全体のシールドエネルギーが60%近く削り取られる、勿論掠ったらうりーがノーダメージだったかと言うと答えはNO。

シールドが強制的に消し飛ばされれば丸裸になる、次のダメージは絶対防御が発動する事になるのだ。

「籐ヶ崎…貴様…! 貴様等（カロード）…何者だ…!!」

「キヒヤハハッ! ただの世界最強の軍事企業だア!」

背部のアサルトキャノンを上部にスライド、左右に広げコアとのエネルギー供給パイパスを繋げる。

「止めと行こうか?」

「させるかあっ!!!」

らうりーがプラズマ手刀…ダサいな、プラズマブレードとかでいいじゃん、それを俺の体に突き刺すように打ち付ける、ダメージはそれなり、だが聞いて欲しい、アルギュロスのEN防御率は割とガチだ。つと…む、体が動かぬ。

「動けないだろう、銃口はもうこちらを向いていない、お前に勝つ手

段はもう無い」

「標準で全範囲攻撃があると考えないのか？ おめでたいな、まあ…無いがね!!」

アサルトキャノンを前方、つまりらうりーの方向へと射出する、背部のアサルトキャノンにお馴染みコジマエネルギーが充填されたのに気付いたらうりーが焦って遙か上部へと瞬時加速で移動する。

直後地面を溶かしながら膨大なエネルギーが決して早いとは言えない速度で飛び、アリーナのバリアに直撃、バリアと指向性アサルトアーマーが接触し、「双方共に」消滅した、これはまずい！

『その生徒！ 何をしている?!』

「…ふん、興が覚めたな、続きはトーナメントでだ」

「籾ヶ崎…貴様は一体、何だ…！」

「はい問題です。どっちがらうりーのセリフだったでしょうか！」

「どう聞いても後者だよ?! 声で分かるよ!」

「わかんない人もいるでしょうがあああああつ!!!」

「ご、ごめ…なさい…！」

クイックターンで簪たちの方へ向き無駄にオーバードブーストで移動する。

地面を削りながらもターンして一回転、深く腰を落として熱排気、そして顔を上げれば…

簪が微妙な顔をしていた、やっぱりアルギュロスじゃヒーローには見えないみたいだな、残念。

「シンにー! 大丈夫?！」

「大丈夫だ、問題ない」

「でも…! 装甲が抉れてるし…!」

言われてチラリと自分のAC姿を見ると右腕を中心に右半身がやや融解してコアに深い傷が二つ付いている、融解はコジマミサイルをコジパンしたからだろう、傷はらうりーのブレードだな。

だが内装や駆動系に一切のダメージは追っていない、表面だけの傷なので格納、もとい量子変換状態の自動修復機能で完璧に修理されるだろう。

「大丈夫だよ、無傷無傷、これ外装だけだから心配無いつて」

「…本当？ 本当に大丈夫…？」

「なんならステータスを全部開示しようか？」

「ダメだと思うなく専用機的にダメだと思うなく」

「AC解除、な？ 俺自身は全くの無傷だ、なんならこのままISとだつて殴り合える」

「だ、ダメだよ！ そんな事したら死んじゃう…！」

うん！ 僕もそう思う！ 足と左腕は耐えられても他が無理！

だつてにんげんだもの。しんいちろう

ところでらうりーのAICは幾つまでが限界処理能力なのだろう、今度両腕両背ガトで試してみようかな？

「で、打鉄式式の調子は？」

「うん、大丈夫…凄く良いよ」

「そいつあ何より、んじゃ俺は多分呼び出されるだろうから撤退しとくわ」

「大丈夫だよシンにー、きつと分かってくれるよ」

「…何を？」

本当に何を？ 俺がただ面白そうだかららうりーに喧嘩売つて…んでアリーナをぶつ壊して…

あ、今凄い事の気付いた！ 悪いの全部俺だ！ さっすがー！

「シンにーが強いつて事」

「まあそうさな、ナインボール・セラフでリミット解除だと本当に世界最強だからな！」

「ナインボール…セラフ？」

「他のACパーツと一切互換性の無いワンオフのアセンブル、コレばっかりは俺だけで創り上げたんだ」

「二人で…作つた…？」

「ああいやいや、ただのパーツ群だから気にしないでくれ、IS一機組むのとは全然違うし」

『1年1組 籐ヶ崎信一郎くん、至急生徒会室に来て下さい、繰り返します…』

「生徒会…？ どうして…」

「あー、早いな、んじや行つて来るよ」

「待って…！」

「悪い！ 後でな！」

引き止める簪に一言断つて全力疾走（時速80キロ）を始める。

疾走しながら考える、実は既に生徒会長「更識」に関しての情報は集まっている、うちの社員は実に優秀だ。

ついでに少し前777回目ハッキングである事を祝してダミーデータをまるでハッキングされて盗み見られたかのようなエセ重要データに仕上げておいた、事実無根の横領疑惑だ。

うちの社員は横領なんて事はしない、皆が皆好きに自分のやりたい事を既にやっているのだから生きて行けるだけの金があればそれでいいそうだ。

しかし社にも社の面子もある為そこらの一流企業など足元にも及ばない給料を全員に払っている。

それでも恐ろしい物で足りないなんて事は無いのだ、社員にとって欲しいのは金ではなく時間と研究なのだ社で好き放題していた。

「つと、ここかここか、行き過ぎだな」

と、地面を左手の指で引つ掻くようにブレーキをする、何とも言えない形容し難い音を立て10メートルほど目的地から行き過ぎてしまったようだ。

10メートル歩いて戻り扉の前に立ってノックする。

「籐ヶ崎信一郎、呼び出しに応じ参りました」

「…入って頂戴」

「失礼致します」

扉を開け後ろ手にバタムと閉める、ちなみに俺のやる気のなさが溢れ出た結果で基本目上の人に対しては…：何時もと同じだわ、ソースはちっふーと真耶先生。

部屋の仰々しい机に両手を置きぐい大層な椅子に座る生徒会長と横に控える…眼鏡のしつかりした女性、ダリナンダアンタイツタイ…

「私がロシア代表で生徒会長の更識 楯無（たてなし）よ、よろしく

ね、籐ヶ崎君？」

「私は貴方のクラスメイト、布仏本音の姉の布仏 虚(うつほ)です」  
情報通りライトブルーの髪の毛にナイスバデー、ロシア代表のIS  
乗り、そして生徒最強だそうだ。

そしてこちらの眼鏡を掛けたクールな女性は情報は無かったがど  
うやら本音ちゃんの姉らしい…

「…へ？ 今なんて？」

「本音の姉、布仏虚です」

「うつそだあ!! 本音ちゃんの姉?! えええ?! 一体何がどうなっ  
…ええ?!」

「まあ…そうなりますよね」

「い、いや…ええ？ う、うむ…うむ…本音ちゃんの面影が髪の色し  
かない…」

「まあ今は置いときましょう、それで、何故呼び出されたか分かるか  
しらう？」

「ふむ、アリーナへの甚大な被害…かな？」

あとは何だ女子生徒への異常なまでのセクハラとかか、警察沙汰は  
勘弁して欲しいな。

「それもだけど…これ、何だと思う？ カラードの次期社長さん？」

「ダメーデータですな」

「…ダメー？」

「実にハッキング回数780回をオーバー、777回に達した記念  
でうちの社員の悪戯心が発生、まるでハッキングが成功したかのよう  
な偽装、そちらのハッキングした人間は実に喜んだでしょうね、やつ  
た、ラツキーセブンだ。とね」

「…へえ、なるほど。流石に電子世界上ではカラードに勝てないっ  
てことね」

「それに俺はまどろっこしい事は嫌いだし心理戦なんて持つての他  
だ、故に聞きたいことや言いたい事があるなら直接言ってみればどう  
だ？」

「有利に立ったつもり？」

「つもりじゃない、立ってるんだ。今我が社の軍事衛星がこの部屋にサイトを合わせてレーザーキャノンを何時でも撃てるよう待機している」

「なっ?!」

「ISで防げると思うなよ、火力はOW並みだ、肉片一つ、破片一つ残さず消し飛ばせるぞ」

勿論嘘だ

「信一郎様、レーザーキャノンのチャージを終えました、いつでも撃てます」

やだIBISったら仕事が速いんだから！ 出来る女性つてステキよね！

「で、本当の用件を聞きたい、更識当主、更識楯無、俺に…いや、カロードに何を求める?」

「…そうね、繋がり…かしら」

「まあそりやそうだろう、完全に閉鎖的な組織だからな、暗部も雇わないし全て自分自身で完結させる。入る隙など無いからな」

「それと…技術かしら? ロシアにじゃないのよ、私達更識にね」

「あれほどハッキングを仕掛けておいてまだ懲りないのか」

「まあそれはいいのよ、その内入ってくるわ、簪ちゃんの専用機、カロードの技術も入ってるんでしょ?」

「なぜだ…?」

「簪ちゃんが拒否してもしなくてもいいのよ、だってあの子も更識だから」

裏は取れてる、簪は全く関与していない、だがどうやらそれは関係無いそうだ、組織としては間違っていないが…姉のする事ではない、少なくとも生前俺の兄はそんな事をしなかった。

ガチャリ、と俺の後ろの扉が開いた、誰だろうか。

「そんな…どうして…? ハッキング? なんで…」

簪? まさか聞いてたのか…あーマズイぞマズイぞ…!!

「か…んざし…ちゃん?」

「どうして…? どうしてそっとして置いてくれないの…? 私が



…私が何をしたって言うの…!」

「違うの、簪ちゃん…コレは…」

「来ないで!!」

「ッ…!」

「何で私は…!! 何で私は人を好きになつちやいけないの…?!」

「そんなこと…」

「どうして!! 好きな人を陥れる為に利用されなきゃいけないの?!」

「簪…ちゃん」

「こんな事になるなら更識になんて生まれなければ良かった!! 姉さんの妹になんて生まれなければ良かった!! 姉さんも更識も大嫌い!!!」

「待って!」

「おい、おい簪! 待て!」

見る事しか出来なかった不甲斐ない俺を許して欲しい、泣きながら走り去っていった簪を追いかけるか否かで一瞬迷う。

「シンにー! 早く行ってあげて!!」

「う、お、おう!!」

本音ちゃんの声に返事し走り去る簪を全速力で追いかける、部屋を出る時に更識楯無を見るとうわ言の様に「違うの、簪ちゃん、違うの」と何度も呟いていた。

く く く く く く く く く く く く く く く く

—Third Person—

何度も何度も壊れた機械のように更識楯無は否定の言葉を紡ぎ続けていた。

それに彼女の付き人である布仏虚は何も言う事が出来なかった、勢いに圧倒されてしまっていたためだ。

籐ヶ崎信一郎に追いかけると言った布仏本音は日頃の彼女からは想像も付かないほどの射抜くような目で更識楯無を見て、唐突に口を開いた。

「かいちよー、私はね、かいちよーのしようとした事はね、組織としては正しいと思う、けど…姉としては、家族としてはあまりにも間違ってた」

「本音！」

「お姉ちゃんは静かにしてて、私は更識家のメイドだけど、それ以前にかんちゃんの幼馴染で親友なの、だからね、無礼だって分かってるけど言わせてください。あなたは、姉として最低だよ」

「本音ちゃん…私は…」

「かいちよーは、知ってたんだよね、かんちゃんがシンにーのこと好きだって、その上であんなことを言ったんだよね、もし私でも絶対に許せない」

「私はどうすればいいの？ 簪ちゃんに何て言えばいいの…？」

「私はかんちゃんじゃないから分からない、何て言うかはかいちよーが考える事だよ、でも…」

そして布仏本音がふにやりと顔を綻ばせて何時もの柔らかい表情を作る。

「かいちよーが本当にかんちゃんに向き合ったならきつと許してくれるよ、だってかんちゃんは優しいからね、幼馴染の私が保障しちゃうよ」

「…：うん、ありがとうね、本音ちゃん、私…やってみるわ」

楯無の返事に本音はにっこりと笑い嬉しそうに体を揺らした、声を出し返答する必要は無かったのだろう、きつと伝わると思っていたから、そして事実声に出さぬ返答は楯無にしっかりと伝わった。

「本音、言いたい事は色々あったけど…まあ今回は…」

「うん、本音ちゃん、クッキー食べる？」

「食べる♡」

楯無が差し出した大皿の前に本音が陣取り小動物のようにクッキーを食べ始めた、その姿に楯無は薄く笑みを浮かべ、虚は本音の髪を梳く様に頭を撫でた。

「ところで本音は行かなくてもいいの？」

「うん、大丈夫だってシンにーはとくつても優しいもん」



「ダメだよ…私と一緒にいたら…信一郎君に迷惑が掛かっちゃう…」

「……………」

「どれだけ泣き叫んでも…どれだけ悲しんでも…どれだけ憎んでも…私は更識だから…」

笑顔を作ってそう俺に言いはするが苦しそうな声で苦しそうな目でそう言われて諦めれるかってんだ、好いてくれる女一人守れないで何が男か、何が簪の騎士か。

…好きな女一人守れないで…何がカロードの男か。

「なあ簪、少し聞いてくれ。更識簪では無く、籐ヶ崎簪になる気は無いかな？」

「…え？」

「簪、将来的でいい、俺の妻になってくれないか」

「え…あ…うそ…」

「ホント」

「…いいの？ 私なんかで…」

「いいんだ、簪だからこそ」

ぼろぼろと再度涙を零し始め俺の胸に顔を擦りつけ俺を抱きしめてくる、んだが今なんか無性に恥ずかしい。

はつきりとプロポーズしたのは生前も含め初めてだ、ちなみに生前は酒の席でべろんべろんに酔っ払った挙句「うおおおお好きだアアア!! 結婚してくれエエエ!!!」と叫んでその直後ニツコリと「はい」と返された、まともなプロポーズじゃないと俺は思う。

「なあ簪、そろそろ門限に突っ込みそうだ、寮に帰ろう」

「うん…信一郎君」

「君はいらん、信一郎とだけ呼んでくれ」

「うん、わかった…信一郎…」

「ああ、さあ掴まれ、アレだけ全力疾走したんだ、流石に疲れただろう、運んでやる」

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

「ところで簪、さっきのプロポーズの返事を聞いていないんだが？」

「う…うう……」

「なあなあ簪ー？」

「もう……ばか、でも大好き……これからよろしくお願いします…  
…旦那様」

ふー…最高に可愛いじゃないか、まあ面倒な事なんか全部受け止めてやるさ。

早い所実家に報告しないと、嫁が出来ました、とつてもいい子です、羨ましかろう、H U H U H U。

オーメル仲介人の名前はアデイ・ネイサン、もし女  
だったらアダ名はきつと「アデイ姉」

「一緒に居てやれないのは非常に残念だが俺にはやる事が多すぎる、  
お休み、簪」

「うん…おやすみ…信一郎」

「おやすみ…シンにー」

「おやすみ、本音ちゃん」

と、簪を部屋まで送って別れる、本音ちゃんと同室だったのか、まあ  
わかる気もするが。

ACの特殊機能を起動してデスクトッププログラムを目の前に投  
影する、普通のパソコンの機能がおまけで入っているのだ、凄く便利。  
プライベートチャネルを起動、と言っても外部に音が漏れないよう  
にする為の無線イヤホンの様な物だ、続いてオーメルの音声メールを  
開く。

『オーメル・サイエンス・テクノロジーのアデイ・ネイサンです。信  
一郎様、先日の依頼であるデュノア社系列の情報収集を終えました、  
よって報告します。』

まずシャルル・デュノアの出生ですが、記録上には一切存在しませ  
ん、ほんの数ヶ月前に戸籍が生まれました。ご存知だとは思いますが  
本名はシャルロット・デュノア、デュノア社の社長と妾の隠し子です。  
もつとも、コレまでずっと黙秘していたようですが…恐らくコレから  
もでしょうね、器の小さい事です。

ですが一応親としてのプライドなのか愛なのか莫大な額のポケッ  
トマネーを送っていたようです。それと内部情報を探ってみた所  
彼女の事を否定し続けているのは社長夫人だけのようです。

まあこんな所でしょうか、その他の情報が必要なら連絡してくださ  
い、随時新たな情報をお届けします。

それにしても…何故このような情報が必要なのですか？大企業と  
言っても所詮第3位です、我々カロードの足元にも及びませんよ、で

は失礼致します。

公式試合では是非オーメルの製品をお使い下さい、悪い話にはならないと思いますが』

うむ、相変わらず人を見下した態度がたまらん、オーメルは間違えている要素が変だ。

個人的には感情の情報が欲しいがカロードの面々には期待するだけ無駄だろう、これは俺の勘と希望に頼るしかないな。

今は日が沈んだ所謂夜だ、フランスと日本のタイムラグ：は：何時間だっけ？

「IBIS、フランスと日本の時差は？」

『8時間です、夏は7時間ですが、今フランスは昼である事には変わりません』

「ありがとうございます」

「はい、いつでもお呼び下さい、信一郎様」

よし、ならば今日中に終わりそうだな、面倒さえなければ。

喜べ今日の俺は紳士的だ、それに機嫌がいいぞ、マハハハハハハ！

「ただいま俺の部屋、おーぶんぶんー！」

カードキーを差し込んで開いてみるが部屋に誰も居ない、念のためと確かめてみたがシャワーにも居ない、よし、シャルりんは思い通りいっちーの部屋にシャワーを借りに行った様だ。

「クローズド、ドアア…」

ゆっくりと優しく女性を扱うかのごとく扉を閉める、ロックがカードキーなのに手動ドアとは之如何に。

そして隣の部屋、つまりいっちーの部屋に向かう、と言つても20歩も無いわけだが、扉の前に立って「左手」でノックしてみる。

ゴキイン、ゴキイン、と鉄と木をぶつけた音がした、まあ金属と木をぶつけたわけだが、ちなみに俺の義手だが素材が元々IS装甲と同じだった、そこに俺が手を加え微強化、衝撃にかなり強い金属になった、強度は微妙に上昇。

「いっちーいっちー、シャルりん来てる？」

「う!! おっと！…イデッ！ い、いないぞー！」

「わっかかりやすいなあオイ、ここにいるのは知ってる！ 大人しく開けろ！」

「警察かよ！」

「アンさんココにおんのはわかつとんねや！ はよ開けんかいゴラア!!」

「ヤクザかよ！」

「トリツクオアトリート！ お菓子くれなきやドア爆破しちゃうぞ☆」

「お菓子目的になつたぞ?！」

面倒な、いいか、俺は面倒が嫌いなんだ。

「仕方ない、たつたらつたつたーつたつたー、マスターキー(軍用語)」

「ま、ますたーキー?！」

「い、一夏つ！ 扉から離れて!!」

マスターキー、アンダーバレルショットガンのことだ、分かりやすく言うと小型のショットガンである。

音を良く聞いていっちーが扉から十分離れた事を確認する、ちなみにこのマスターキーもカロード産で音も無く弾を撃ち出せる優れもの、着弾音も弾薬自体に特殊な加工が施されていて着弾音も抑えてある。

パヒユガツ!!

「オープンセサミ(開けゴマ)…」

「シ、シン…そ、それ…?」

「こんな所でマスターキーだなんて何を考えてるの?!」

「俺は面倒が嫌いだと言っただろう」

ズカズカといっちーの部屋に侵入してドアを閉めたらいつちーと案の定居たシャルリンに見えないようドアを直す。

直ぐにACを部分展開し特殊EMPを作動させて盗聴器、隠しカメラのみを破壊、展開した部分は左腕で展開したパーツはオーギル腕、要するに見た目は一切変わらないのだ。

続いて窓の方へ移動しカーテンを閉める、何故こいつらはこうも無



用心なんだろう、訳が分からないよ！ きゅっぷい！

「おい、椅子だ、椅子を寄越せ、麻呂は椅子を所望するでおじやる」

「し、シン！ いきなり入ってくるなよ！」

「一夏、大丈夫だよ…シンは僕が女だってもう知ってるから」

「…え？」

「画像も貼らずにスレ立てとな?!」

「相変わらず訳わかんねえな、シンは」

いつまで経っても椅子は貰えそうに無いのでベッドに腰を下ろす、きつと客観的に見ると面倒臭そうに座っただろうな、おっさんが腰を叩くのと同じぐらいの気ダルさを纏わせつつ足を組む。

「さて、お前らに、と言うかシャルりんの良いお知らせがあります」

「…な、何？」

「俺にお嫁さんが出来ました、今とっても嬉しいので幸せをおすすめ分けます」

「お、お嫁さん?!」

「2次元？」

「ウンコを顔面に塗ったくるぞ」

「やめろオ！」

A/Cを再度部分展開してIBISへと繋ぐ、IBISとの会話を二人にも聞こえるようにして二人に座っているよう促した。

「IBIS、今フランスは何時ごろです？」

『昼過ぎ、2時頃かと』

「フランスとの時差？ どうして…？」

「誰だ？ この声」

「二人は好きに喋ってもいいが俺の邪魔をするなよ、シャルりんの答えは直ぐに分かる、いっちーの問いに対してだが…うーむ…俺の秘書…とは少し違うし」

『信一郎様にお仕えしております、カラードの軍用人工衛星及びカラードの電子空間管理AIのIBISと申します。織斑 一夏様、シャルロット・デュノア様、以後お見知りおきを』

「俺に仕えているって言うかカラードに仕えているって言ったほう



『では人を代わります、どうぞ——信一郎様——』

「失礼、日本語でお願いします。私は…あぁいやめんどくせえ、俺はカレードの籐ヶ崎信一郎だ、知ってるだろう」

『知っている、よく…な』

「聞きたい事は他でもない、あんたと愛人さんの娘、シャルロットについてだ」

『なるほど…やはりバレたか』

「やはりって…どういう事？　ばれる事前提で…僕をIS学園に？」

「…こいつ、本当にシャルの…親かよ…!!」

「やはりって事はバレる事前提だったのか」

『骨格から違うのだ、騙せるはず無かろう』

「…バレた時は身体を使って俺か織斑一夏を落とせと指示出していたからな」

『…なに？　私はそんな指示は出していないが…?』

「本人は簡単にゲロってくれたぜ？」

『そんな馬鹿なことがあるか!!』

「何故馬鹿なことなんだ？」

『たった一人の娘に対してそんな事が言える訳が無いだろう!!』

「シャル、その指示を出したのって本当に親父さんなのか？」

「僕に伝えてきた人はそう言った…けど…」

「そう言えば…相当な額を送っていたそうだが」

『何処まで調べた…!』

「ほぼ全て、アンタの感情以外はね、要するにアンタの気持ちをぶちまけて貰いたいだけさ」

『…そうだ、私の…こんな私が言うのも可笑しいが私の…愛する娘だ…苦しい思いなどして欲しくない』

「その割には随分と冷たいそうじゃないか」

『…出来る事なら…出来る事なら謝って抱きしめたかった…だがそれすらも私には許されない…』

「……うそだよ……こんなの……そんなはず無い……」

「シャル……」

「シャルロットをデュノア社に引き込んだ理由を詳しく聞きたいんだが？」

『……何故だ』

「それもあんたの感情だと目星をつけてるから」

『いいだろう、私としては……出来る事なら私が親である事を知らず、静かに、幸せに暮らして欲しかった……しかしシャルロットは、高いIS適正を持っていた、これでは私が親である事を調べられるのは時間の問題でしかない。』

しかし、愛人との子だと知られれば社の評判は落ちる、私だけが罵倒され、蔑まされるのは構わない、が……社の評判は確実に落ちるだろう、そうすれば社員は最悪路頭に迷う事となる。

だが社員にも家庭がある、妻が居て、子が居る、私の世間にとっての失態一つで数多くの幸せな家庭を引き裂きたくなど無い……!! 私……が……そうであったように……』

「次はシャルロットをIS学園に入れた理由を聞かせて貰いたい」

『それは……広告塔として……』

「違う違う、世間に対する、じゃないんだ。アンタ自身の思惑だよ」  
『……原因は私の妻だ、彼女は非常に強くシャルロットに当たって……いてな、多分……シャルロットの母……レティシアに対する嫉妬だろう……妻は、子が生せなかったから……』

だから私はシャルロットを逃がすために、シャルロットに嫌われるようにした上で日本に、IS学園に送ったのだ』

「分かっていると思うが……」

『ああ、その通り、一時的な物でしかない、だからその間に妻を何とか説得するつもりだった。』

もしフランスに戻るのが嫌だと言ったなら親子の関係を絶って日本へ亡命させるつもりでもある』

「OK、OK、まだ幾つか聞きたい事があるけどまあいいだろう」

『この話は……シャルロットには内密にしておいてくれ……私はあるの』

にとって憎悪の対象で無ければならないのだ』

「そりゃムリだ、申し訳ないけど。安っぽい言い方だけど、親子の壁には、消えてもらわなきゃいけない」

『何?』

「キヤ〜ロりん」

そうやって指を鳴らすとIBISが音声接続を一時的に遮断する。

『シャルロット・デュノア様、ISの通信機能をONにしてください、もし駄目である場合は強制的にONに致しますが』

「え、あ…わか…った」

『ではどうぞ、ご自由にお話し下さい、接続修正いたします。3・2・

1・接続』

「さて、いっちー。俺に世界一可愛いお嫁さんが出来た話だな」

「え? いきなりその話になるの?! 今までのは何?!」

「いや、俺かなり最初の方に言った筈だけど」

まったく、いっちーだったらほんの少し前のお話の流れも覚えていないなんて、駄目な子ね! ふんすこー!

「でだ、でだ、そのお嫁さんなんだがな」

「お、おお…」

「いっちーをかなり怨んでるからな」

「俺何かやった?!」

「正確には白式が、だが」

等と外野で話をしていると隣で頭部スタビライザーを展開したシャルりんがホロホロと涙を流していた、まだもう少し時間が掛かりそうだから惚気話に移って見ようかと思う。

「まあそれは今度代役で俺がいっちーを左手でぶん殴るとしてだ」

「いや、死ぬから、15割ぐらい死ぬから」

「あれは今から36万…いや、1万4千年前だったか…まあいい」

「あれ、俺今もしかしてスルーされた? 俺死ぬ事今確定した?」

「俺が彼女と出会ったのは整備室だった、今思えば変な歌を口ずさみながら入ったことが悔やまれる」

「もしかして、ガチか？ 冗談じゃなくてガチなのか？」

「紆余曲折あって本日婚約いたしました、んふーふ」

「飛び過ぎ飛び過ぎ、何だよ紆余曲折って」

紆余曲折だよ、デートに行ったり一緒にIS作ったり、あだ名を付けようとしてゴミを見るような目で見られたり。

「そうだそうだと、今度のトーナメント、いい所をお嫁さんに見せたいから…一切容赦なく本気で行くからな」

「はっ、望む所だ」

シャルりんはうんうんと相槌を打ちながら相変わらずポロポロと涙を零している。

俺には聞こえていないので何を喋っているのかはわからないがまあ大丈夫だろう、これは年寄りの勘でしかないが、女の勘よりも鋭いぞ。

あれ？ 今思ったらちっふーとか俺に対して積極的に拳を振るってきてるのってコレ思えば老人虐待じゃない？

あら、あら、大変、でもまあ大丈夫だな、俺は今老人じゃないし。

『信一郎様、シャルロット様の通信が終わりました、デユノア社の社長が信一郎様に代わって欲しいそうです』

「あいよ、代わっちゃいました、信一郎ですくんふーふ」

『…君のお陰で、娘に…父親と認めて貰えた…礼を言わせて貰う、いや、礼を言わせて頂きます、ありがとう…』

「んひゃあ、むず痒い！ 敬語とかいいんで！ 俺はただのクソガキなんで！」

『それはすまない、ところでこの会話は周りに聞こえているのかね？』

「うい、心配はしなさんな、親子の会話は俺たちには聞こえてないから。今は聞こえてるけど」

『そうか、では…織斑一夏君、聞こえているね？』

「は、はいー！」

「いや、いっちー、お前の声はあっちには聞こえてないから」

『なるほど、居る事はあるのか…では一つ言わせて貰ってもいいか』

な?」

「どうぞ…」

「どうぞ、ですって」

『娘を泣かしたら、私が直接殴りに行く、以上だ』

その言葉を最後にプツンと接続を切ったデュノア社の社長、俺が「だとよ」、とニツコリ笑いながらいつちーの方を見ると、なにやら下唇を噛みながら名状しがたい微妙な表情をしたいつちーがそこに佇んでいた。

「なにその顔、すっげー笑える、絵に描きてえ、写真とりてえ、んで配りてえ」

「俺あらゆる人に殴られる可能性があるのか…?」

「だ、大丈夫だよ! 僕を幸せにしてくれればいいんだから!」

「あら不思議、精神的な余裕がある所為か優越感に浸っている所為か全然妬ましくない」

それよりも早い所頭部スタビライザーを仕舞った方が良いんじゃないだろうか、シャルりんは。

さて、幸せのお裾分けも済んだしシャルりんを連れて帰って寝るか、いや、シャルりんじゃないからな、勘違いしないでよねっ!」

「おーい、シャルりん、帰るぞー、多分そろそろちっふーがココに突撃するだろうから」

「う、うん…じゃあね、一夏…おやすみ」

「おう、ISの展開を止めた方が良いと思うけど」

「…あつ」

そんなドジっ娘なシャルりんでした、取り合えず男装(笑)をしてISの展開を終了したシャルりんを部屋に連れて行く、再度左腕部だけACCを展開して特殊EMPを放出、そして自分のベッドに座り込む。

「よし、シャルりん、異性への変装とは何たるかをレクチャーしてやる」

「い、いいよ、シンの女装とか見たくないし」

「お? 言ったな、言ったな? ちよつと待ってろよ?!」

そう言つて脱衣所へと移動し鍵を閉める、直ぐに能力を使用し身体  
の外部情報を書き換える、筋肉質でありながら女性的な丸みを帯びた  
身体にして胸も121センチ、骨格も変えて細く括れを作つて鎖骨と  
骨盤に気合を入れて変化させる、次に顔を作り変えて髪を長くしてサ  
ラサラに、うむ、素晴らしい美女が完成した、だが声はオッサンのま  
まなので声真似で女声を作る。

声のイメージはロザリイで良いかな、軍用タンクトップを着てパン  
ツとジーンズを穿く、パンツは柄パンだ、次に髪の毛を後に結んでゴ  
ムで止める。

ガチャリと扉を開けて義足が地面を踏む金属の音を慣らしながら  
部屋を出る、シャルりんは何と下を向いていた。

「…こつちを見てくれてもおねーさんいいと思うなー」

「いやだ、シンみたいなムキムキの男が女装してる姿なんて見た  
くない」

「いやいや、大丈夫だつて本当に」

「そんなわけがない、日本にオカマバーつて言うのがあるつて僕知っ  
てるんだからね」

「ええい！ 控えおろう！ この121センチのおっぱいが目に入  
らぬかあ!!」

「121?!」

とここでもうやく驚いた為か真偽を確かめるためになのか俺のほ  
うを見るシャルりん、直後しまったというような顔をしてじよじよに  
信じられない物を見ているような顔になる。

ついでに腕を組んでばよんとおっぱいを強調しておく。

「…だれ?」

「貴方のルームメイト、カロードの次期社長、籐ヶ崎信一郎」

「嘘はいけないよ、確かに君は義手義足だけど僕はシンがムキムキ  
のオッサン面で地獄から鳴り響くような地声だつて知ってるから」

「え、俺の地声ってそんな声なの?」

「し、シンの声だ…嘘…嘘だよね、冗談だよね? 骨格も顔も違うも  
ん」



「これが本当の変装って奴だよ、シャルりん」

「それも変身だよ?!」

ふふんと笑みを作っておっぱいを強調する感じで腕を組んだらシャルりんが自分の胸を見て俺の胸を見て悔しそうな顔をした。

「さて、異性への変装の仕方だけど…まずは骨格を変えます」

「その時点で無理だからね?!」

「続いて顔を変えます」

「だから無理だよ?!」

「異性の声を作って」

「それはまだ何とか…」

「…ははっ」

2オクターブも変わらない声を出したシャルりんを笑う、やる気が無いんじゃないだろうか。

「そりゃあシンみたいな事は出来ないよ！ 一つだけ覚えておいて

ね、シンが変なだけだから！」

「じゃあまずは服を脱ぎます」

「なんで？」

「次に白目を向きながら自分のお尻を両手で叩きます」

「何するつもりなの?!」

「お尻を叩いている時「ビツクリするほどユートピア」と叫びます」

「教える気無いよね…!」

「これを10分ぐらい続けると妙な脱力感に襲われ、解脱気分になれる」

「変装と言う言葉は何処へ言ったのか」

犠牲になったのだ、犠牲のための犠牲、その犠牲にな…ギセイ!!

ふと時計を見るとすでに時間は9時を指してしまいそうだ、健康優良児としてはそろそろおねむな時間なので早い所寝てしまいたい。

しかしてその為には変装…女体化を止めなければならぬ、そこで俺は考えたわけだ、シャルりんをびびらせてやるのぜ!

「シャルりん」

「…なに？」

「マジックを見せてやろう」

「どんなマジック？」

自分のベッドの掛け布団を両手で持って自分の体を一瞬だけ隠す、それと同時に身体を作り変えて男に戻る、勿論My sonも帰ってきた。

服装はさっきまでの服と同じ、つまりタンクトップにジーンズだ、いつもの俺の服装と何も変わらない。

「こんなマジック」

「…うん、僕決めた！」

「何をかね？」

「これからシンの事は人間だと見ないようにするよ！」

とつてもいい笑顔で「貴様を人とは認めん」と言われてしまった訳だがその程度でへこたれる俺ではない、でもドン・カーネルとか言われたら流石に悔しい気分になる。

「まあ俺が人外レベルでおかしいのは何時もの事だから置いといて、俺はもう眠いから寝る」

「認めちゃったよ！」

「あとスゲエ腹が減ってるから寝るなり何なりしないと精神的に死ぬ、晩飯食い損ねた、コスパ（コスト・パフォーマンス）最悪な俺にはつらい、むしろつらいを通り越してからいレベル」

完全にいろいろ置いていかれているシャルリンを捨て置いてベッドにうごうごと潜り込む、目を瞑っておやすみモードへ移行します。

「シン…嵐のように色々やって寝ちゃったよ、でもありがと…」

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

「さて簪、じゃあタッグの練習をするが是非とも先に聞いて欲しい事がある」

「なに…？」

「簪も俺も全距離対応型だ、よって前衛後衛を決める事は難しいと思う」

「…うん」

「て事で俺は今回簪の盾役、及びサポートに撤する事にしたい」  
いきなり飛んで翌日の放課後、場所はアリーナ、アリーヤじゃないぞ！ 簪が打鉄式式を展開し、俺はVの重量二脚を展開している、細かいアセンは別に表記する必要はないだろう。

タツグの練習の為に俺は色々考えていたのだよ、授業中に！

勿論ちっぷーにスツ叩かれたけどP Aのお陰で俺には一切ダメー  
ジが通らなかった、なおその時「授業中にISを展開するとはいい度  
胸じゃないか」と言われたけど「俺のACが俺を守るために自動でプ  
ライマルアーマーを展開してくれているだけで俺はノータッチです、  
俺のACマジ良い子！」と言ったら微妙な顔をされた後じゃあ仕方な  
いと諦めてくれた。

「でも…いいの?」

「うむ、そこで俺の装備やら簪の打鉄式式との互換性やらを説明し  
ておく」

「…互換性なんて、あつたの?」

「あつたの、ACの武器を簪の打鉄式式は使用する事が出来ます、つ  
まり簪に足りない距離火力は俺が武器庫になることで解決する」

「凄い…」

「じゃあ試してみようか、どんな武器を所望する?」

「…シヨットガン」

「あいよ、っと」

直ぐにUSG—11 ELMIRA・KO—3K NOCTUID  
AE・USG—11/H・ZINNA SG54を両手、両ハンガー  
に出現させる。

「どれを使う?」

「じゃあ…コレ」

「USG—11/H、ハンガー武器だな、じゃあグリップを握って勝  
手に取ってくれ」

「ん…あ、本当に互換性がある…一般のIS武器とは表記方法が  
違うけど…」

「な? まあ9割の要求には答えられるさ」

「使い終わったらどうすればいいの…?」

「そこらにパージすればいい、どうせ敵は拾っても使えないんだ」

よし、後で一般武器の説明をすることでまずは簪をサポートする特殊な武器の説明だな、取り合えずターゲットガンを展開して右手に握る。

「簪、山嵐のロック方式は何だ?」

「え…:マニュアルサポート付きのオートロックオン方式…:だけども…:」

「マニュアルサポートが無ければ?」

「最寄のターゲットにオートロックして攻撃…:だよ、弾頭自体がターゲットをロックするから、場合によっては、複数のターゲットを攻撃するけど」

「これはターゲットガンだ、神が創り出した知恵の一つ…:いや、武器か」

「…:? 何言ってるの…:信一郎…:?」

俺の名を呼ぶたび恥ずかしそうに頬を染める簪が可愛すぎて生きるのが楽しい。

「コレを敵に撃ち込めば障害物の向こうで視覚上見えない敵もコイツが撃ち込まれていればロックオンできる」

「味方のサポート専用武器なの…:?」

「いや…:最も効果的な使い方はこいつを撃ち込んだ後に障害物の後ろに隠れてヒュージミサイルを撃ち込むのが最も効果的だ、勿論、相手は比喻抜きで死ぬけどな」

「死…:ぬ?」

「まあ大丈夫だ、緊急事態で無い限りOWは使うなど言われてるかな、そんな顔をするな」

「あう…:」

ぽむぽむと頭に手を置くと可愛らしい声を出す簪、一々反応していたら俺がその内萌える…:萌えてしまう…:するのでグツと我慢。

「じゃあ戦法に移るが俺は常に両ハンガーを空けておく、欲しい武器がある時は俺に繋いで武器を言え、直ぐに脚部シールドを展開して

ハンガーに出現させる、ついでに盾にしたい時は「シールド」とでも言ってくれればいい、大概の攻撃は防ぎきれるからな。俺を信用してくれ」

「うん、信頼してる…」

「ターゲットガンで固定ミサイルターゲットを作りたければ敵をマーキングして「ターゲット」だ、それと一度ターゲットガンを直撃させたら直ぐにパージする、覚えておいてくれ」

「わかった…でも、どうしてそこまで…私の為に？」

「簪と打鉄式式のお披露目だ、俺は目立つわけにはいかん」

それに女を守る男って格好いいだろ？ 簪には格好いい所、見せたいじゃねえか。

でも一人で全部片付けちまったら目立ちたがり見たいでダサイじゃないか、確かに俺は目立ちたがりだけどさ。

「んじゃあ色々試してみるか、ドローンは練習だから一機でいいかな？」

「うん、レベルは代表候補で…いいかな？」

小型フィールドを作成、ドローンレベルを設定、ドローン出現までを慣れた手つきで操作、2対1だが、まあ仕方ない。

だが流石に少しぐらい持つて欲しいのでシールドエネルギーは2倍に設定。

いくら手強いとはいえ、2人がかりでは…勝ったところで これでは卑怯者と呼ばれます。

そこそ腕は立つようになったがバカか貴様は！ いいか、死んだヤツは物を言わんのだ！

「ドローンレベルを設定しました。代表候補生レベルです。所定位置にISを展開・装備して待機して下さい」

「よし…行けるな？ 簪」

「うん、そのつもり…だよ」

「それは良かった、じゃあ…いこうか」

AZALEE CN30 (50発キャノン)を右手に、UTG—3  
6 STAMFORD (第二世代型ターゲットガン)を左手に装備し

て指定位置に移動、障害物も何も無いためターゲットガンは役に立たない気がする。

簪はIS以外何も展開せずに所定位置へ着いた、もしかして開始前に武器展開ってイモい？

「所定位置への移動を確認しました。戦闘開始まで5・4・3・2・

1・開始します」

「行くよ……！」

「進化の現実ってやつを教えてやる」

開始と同時にキャノンを構えて脚部シールドを展開、ロックして弾丸をプレゼント、しかしまあ小足見てから昇竜余裕とばかりに避けられる、直後簪が背部に搭載された連射型荷電粒子砲「春雷」を避けた先へと予測射撃、連射型の宿命か単発火力が低いので幾つか直撃はしたが深刻なダメージにはなっていないだろう。

だが回避先への瞬間予測射撃などそう簡単な事ではない、それを命中させた簪はほぼ始めての機体である打鉄式を上手く乗りこなすセンスがある。

「ヒューッ、やるじゃん簪、流石だな」

「ふふ、ありがと……ターゲット！」

「了解！ カバー、一次ロックだ！」

「了解……！」

簪が俺の合図で春雷を一次ロックで狙い撃つ、ドローンが回避を行いなながらレーザーライフルを俺に撃って来るが重量二脚にTE武器は悪手だ、攻撃など何のそのと言わんばかりに構えを解きターゲットガンを完全手動ノーロックで進行方向へと予測射撃する。

ターゲットガンを射撃後、射撃に気付いたドローンが回避行動を取る、しかし流石に避けきれず背部スラスタに命中、緑の煙がドローンのスラスタから噴出した。

「いいぞ、直撃だ！ パージする！」

「流石だね……信一郎」

「どうも！ ULR-09/R（最速チャージレーザーライフル）！」

使い勝手を考慮してKARASAWAではなくある程度の連射可能なレザライを空中で飛び廻りながら撃つ、忘れているかも知れないが俺のACの基礎はISである、V機体でも一応飛べはするのだ、ただし遅いがな。

高速で飛びまわる簪の打鉄式式による春雷と低速低空底連射の重二レザライ、ただし単発攻撃力は俺のレザライのほうが強い。

ドローンは顔の見えないプログラム体ではあるがまるで焦っているかの如くマシンガンを乱射している。

「ミサイル撃つよ…！ シールド！」

「任せろ！」

簪の前にグライドブーストで飛びクイツクターン、キャノンを構えて脚部シールドを展開、防御姿勢に入る、勿論ただ構えるだけではなくキャノンも撃つ、直後ドローンが両手の武器を収納し、ガトリング状の物を展開、こちらへと向けてきた。

エネルギーガトリングが俺のACに直撃し始めると簪が48発の誘導ミサイル「山嵐」を放つのは同時、簪がマニュアルサポートをしているのだろう、複雑に飛び廻りドローンへとミサイルが接近。

ドローンはガトリングを撃ちっぱなしにしてそこら中に弾丸をばら撒き始める、ミサイルを迎撃するつもりだろう。

そうはいかん、レザライをパージ、SOPHORA BHG 16―2（第二世代型3連ハンドガン）を握りシールドを展開したままドローンへと射撃、回避行動を取る取らないの反応よりも先に着弾、凄まじい衝撃能力により射撃と動きが止まった。

「そおら直撃だ！」

「当たれ…!!」

硬直したドローンが回避行動をとる前にミサイルが着弾、凄まじい爆風が連続して発生しドローンの周囲一帯が黒煙で埋まる。

「やった…！」

簪が呟いたと同時にロックオンサイトに表示されている敵との距離数値が小さくなる、つまり敵が近付いてきていることを意味する。

「まだまだ！ 突っ込んでくるぞー！」

爆煙を突き破って如何にも凶悪そうな馬鹿でかい剣を両手で持ち俺達を叩き斬らんとドローンが飛んできた。

「スナイパーライフル！」

「了解！ ハンガーをバイポッドとして使え！」

SEIDENBAUM SR13を両ハンガーに展開しハンドガンをパージ、直ぐにハンガー操作で下を向いていた銃口を前方へと向ける。

PICをマニュアル調整、自分の体を強く固定し、反動が必要最低限になるようにした。

左右のグリップ・トリガーに簪の手が添えられ真っ直ぐに向かってくるドローンへと射撃を開始する。

完全固定による脅威の安定性でライフルの如く連射されるスナイパーライフル、一発目の着弾でぐらりとドローンの動きが崩れ、建て直しと同時にバレルロールを行って銃弾を回避する。

ドローンが目前まで迫り両断せんと剣を大きく振り上げる――

「ッー！」

――が、簪の放った二発のスナイパーライフルの弾丸が振り上げられた剣に直撃、剣を大きく弾き飛ばした。

即座に簪が俺を飛び越え、手に対複合装甲用超振動薙刀「夢現」を持ち、逆にドローンを縦に両断し斬り去るように交差する。

このタイミングを逃す物かと左手にANOTHER MOON通称黒月光を持ち横一闪、真っ二つ…否、真四つに切り裂いた。

「ドローンの撃破を確認しました。お疲れ様でした」

「ううくん、いい感じ」

「っはあ…！ 最後の…ヒーローみたいだったよね…！」

「ああ、戦隊物の合体技みたいなの？」

「うん！」

簪ご満悦、簪が楽しそうで何よりです。

…ふと思えば遮蔽物なんて無いわけだからターゲットガンの存在意義ってIS戦では無いに等しい…？

おお…なんと言う事だ…！



「簪？ 武器のバリエーションが多い方と高防御な方どちらがいい？」

「……？ バリエーション……かな」

「じゃあ……この戦法は無かったことにしてくれ、ターゲットガンの存在意義が無くなった事に悔しい気持ちになった」

「？」

「1〜30で好きな数字は何だ？」

「え？ えつと……5……？」

「OかCかお決め下さい」

「お、O……」

「ランク5、ORCA、決まりました、スプリットムーンです！」

近接特化かよ……サポートできねえ……精々フラロケ撃って敵の目を眩ませる位か？

マシンガン撃って精神的に揺さぶってフラッシュロケットでロツクを潰して一気に踏み込んで斬り裂く、普通に真改じゃないですか！

「大変なお知らせ、近接特化になったためサポートが出来なくなりました、ハッ、ダセエな俺も……すまねえ、簪……あんまり助けられないな……」

「う、ん……いいの、信一郎と……一緒に居るだけで……幸せ、だから」

「ならば……ならばせめて……！ 俺は簪の剣となろう！ 盾となろう！ 荒事は俺が……片付けよう」

サポート役に徹するといったな、アレは嘘だ。

でも簪の打鉄式式のお披露目はしなきゃ行けないし……かと言ってサポートは出来ないし……何とか一対一に持ち込めるようにして敵と戦いながら敵の相方の邪魔をして打鉄式式の武器や性能が生かせるように立ち回らなきゃならんのか……

いいぞ、冴えてきた……！

「んじゃちょいちょいタッグ組ながらそれぞれのウィークポイントを探して行くか」

「うん……頑張ろうね……」

「よし、チェンジアーマードコア！ スプリットオ…ムウウウンツ  
!!!」

「白くてブレード主体で…早い……」

「大丈夫、俺のはブレオンじゃなくてマシンガンとロケットがある  
から」

きっと白式を思い出したんだろう、やや不機嫌そうな顔になった簪  
を宥める。

うむ…色を変えたほうがいいのだろうか、デフォルトアリーヤカ  
ラーとかラインボールカラーとか、考えどころだ。

「何ならカラーリングを変えようか？ 黒とか赤とか」

「ううん、大丈夫……ありがとう、気にしてくれて……」

『シンにー、かんちやーん、そろそろご飯食べに帰ろ〜』

ほう、もうそんな時間か…本音ちゃんもわざわざこんな遠いアリー  
ナまで足を運んでくれて…いやはや、申し訳ない…

なんて思ってる最中にぐーぎゅるるとマヌケな音がする、この恐  
らく腹の虫と思える音の発生源…

「わたしです（^o^）」

「ふふふ…じゃあ、行こっか…?」

「うむ、そうしよう」

無駄にオーバードブーストでハンガーへと飛んでアリーナから出  
て行った、簪もそれに倣って瞬時加速でハンガーへと飛んで来た事を  
追記しておく。

## トーナメントから風呂イベントまで

少し前にタッグを組んでトーナメントが開催されると言った発表がされその日、いっちーがちっふーや真耶先生から話を聞く前に大勢の女子生徒が1組に乱入、タッグを組んで欲しいといっちーとシャルリンに向かつて異句同音に喋りだす。

乱入してくるとは、とんでもないやつらだ。

俺と簪が組んだ事以外はあまり変わらなかったもので省いておこう、勿論私闘は禁止され、なんか色々あった、あったんだ。

それから数日後トーナメント表が発表された、さてどんな物かと思に行くところ都合主義は存在したようである存在しなかったらしく1回戦Aブロックに組み込まれた、生憎相手は専用機持ちでもなければ代表候補でもない一般生徒チームだ、名前も知らないため1組ではない事は確かだ、そして俺は人の名前を覚えるのが極端に苦手である。

正確には名前と顔が一致しない事が多い、生前の高校時代に至っては同じクラスの女子の名前を丸々1年知らなかった事もある。

生前の話は置いておこう、なんにせよ油断せずへばり付いて切り裂き叩き潰すでしょう。

おっ、どうやらいっちーは俺たちの次にらうりーと戦うようだ、そのまま一個ずれたみたいだな、俺と言うイレギュラーが紛れ込んだからだろうか、消えろイレギュラー！ 生きるッ!!

「相手の名は…エリー・コーネイト、イルフ・メデイルト…か、知らんな…まあ、いいか…ギヒヤハツ」

「ひっ！」

周りの女性陣が一気に俺から離れた、元々周りが俺を避けていたがたった今トーナメント表を見るには最適の快適空間が出来たわけだ、畜生…

しよぼんぬしながら移動を始めた俺は突然尿意を催した。こ、これは…死ぬったのか、俺が！

等と思いつつトイレへと人外脚力を生かしてパルクールで移動、もう殆どの人間が慣れてしまったようで誰も叫び声を上げたりはしな

くなつた、まあ都合はいい。

トイレに入ってチャックを開けてゴソゴソしつつ。

「アレエ!? ねえぞオ？」

「そんな筈あるか、よく探せ」

勿論良く探せばあつたので、てかよく探さなくても普通にあつたでちやんと用を足しながらトイレの入り口を見るとよく見知つたいちーのようないっちーに似たいっちー的ないっちーが入ってきてたので挨拶をする。

「乱入してくるとは、とんでもない奴だ」

「いいじゃねえかトイレぐらい」

「貴様も！ 他企業の連中も！ 私の邪魔をする奴は！ 皆死ねばいい!!」

「何だよ！ お前どんだけトイレ邪魔されたのが嫌なんだよ！ シンのトイレに対する情熱は一体なんなんだよ!」

「トイレに居る時はね 誰にも邪魔されず 自由に なんとというか救われてなきやダメなんだ 独りで静かで豊かで……」

「独りで静かっつてのは分かる、俺も家のトイレが落ち着くし、でも豊かっつてなんだよ……」

「…セリフ選択ミスった」

「え!？」

エヴァンジェのセリフにすればよかった、ここはただのレイヴンが来るべき場所ではないって言えばよかった。

いつか絶対使つてやるからなこのセリフ、覚悟しておくんだな!

股間のカラサワ(2)を仕舞つてチャックを上げた後水道で右手を洗う、ちなみに左手は使っていない、左腕肩部のブースターをほんの少しの出力で起動して熱風を出し右手を乾かす。

ちなみに義手の無駄機能の一つだ、カラードつて…ホント馬鹿、いい意味で。

「んじゃ俺行くわ、トーナメント、楽しみだなあ。なあいっちー?」

「…そうだな、でもセシリアと鈴が…」

「……お前が何を考えているのか、俺には分かるよ。いっちー」



しょうか』

『そうですね、今大会は私達カラードのACが出場していますから  
：少なくとも負けることは無い、と言っておきましょう』

『自分の所属IS乗りに何か一言ありますか？』

『うーん…うんっ！ シンくーん！ ママもパパも応援してるよー  
！ それとアデイがオーメル系列の武装使って欲しいだつて！

あつ、あとねあとね、えつとね！ ん…あれ？ 忘れちゃった…』

『あ、ありがとうございます』

「仕事モードはクールで完璧なのにファミリーモードになった瞬間  
天然になってしまう母である」

「ふふふ…面白い人だね」

クスリと笑う簪を見てふうと息を一度吐く、さてさてソロソロ始ま  
るか、気を引き締めないとな。

『え？ あ、はい。準備が整ったようです。それでは両チーム、ア  
リーナへと入って下さい！』

「行けるな？ 簪」

「うん、勿論」

「それは良かった、チェンジ、アーマードコア、スプリットムーン！」

「おいで…打鉄式…！」

「チェンジ、カラーアセンブル、パレットデフォルトアリーヤ」

「色が…黒くなった…？」

「じゃあ行こうか」

「…うん！」

二人でカタパルトに乗り同時に射出開始、急速に加速され二人同時  
に光の下へと飛び立ち地面から脚が離れる。

上下左右と無茶苦茶に2段クイックブーストを連弾で行い最後に  
ダブルクイックターンで回転、簪と並んで空中停止し、敵の方へと月  
光を装備した右腕を突きつけ、アイセンサーを点滅。

相手さんは二機ともラファールのようだ、その程度の紙防御など一  
瞬で切り裂いてくれる、月光の切れ味を思い知れ。

『簪、俺は左側を潰す、右は頼めるか？』

『任せて、でも…あんまり一人に……しないでね、寂しいから』  
『3分だ』

『…うん、頑張ってるね』

相手さんはこちらが二人とも専用機持ちなのを見て警戒、腰を深く落とし直ぐにでも行動できるようにしている、だが無駄だ、このスプリットムーンの前ではこの程度の距離など無いに等しい。

「…3分だ」

「…？」

「何言ってるのよ」

「3分以内に一機落とす」

「へえ…言ってくれるじゃない、専用機持ちだからってあまり調子に乗らない方がいいわ」

「そうですね、わたくし達も組んでから必死で訓練を致しました、専用機が2機相手でも負ける要素はありません」

戦闘開始のブザーが響く。

直後前方へのクイックブーストで距離を詰め月光を振り抜く、まず一刀、月光を振る瞬間速度は音速を遥かに上回る、銃弾を見てから避けるなどISでも不可能、そうだろうか？

直ぐにクイックターンでフラッシュロケットを撃ち込む、流石にロケットは避けられるが360度視界があるのはフラッシュロケット相手に分が悪すぎる、左手のモーターコブラをロケットに連射、ロケットに銃弾が突き刺さり爆発、特殊EMPを周囲に撒き散らし閃光を発生させる。

「つああ!! ハイパーセンサーが!!」

「センサーステータスが著しく低下、危険です」

連射したままのモーターコブラをスライドさせ先ほど月光で斬ったラファールへ向け1マガジン使い切る、オーバードブースト準備。やはり武器や機体のスペックが違う、それに1年のこんな時期だ、代表候補でもない一般生徒にACの相手は酷過ぎるか？

ハイパーセンサーが機能を取り戻したのか俺に向かってマシンガンを連射する相手からの攻撃を避ける為にオーバードブースト起動。

オーバードブーストに背部ブースターの相乗効果で現行ISをも越える速度でアリーナを飛び、マシンガンの銃弾を回避する、モーターコブラの空マガジンを棄て新しいマガジンを装填する。

おっと、本音ちゃん見つけ、最前列だったのか。

「はいブレーキつと、はい本音ちゃん元気？」

「元気だよ〜シンにーはどお〜？」

「おう、元気元気、スツゴイ元気、それよりも簪を応援してやってくれないか？ 俺はすぐに落とせるからどうでもいいんだがなあ」

「あ〜シンにー、危ないよ〜」

そう言つて本音ちゃんが俺の後ろを指差す、本音ちゃんの周りにはわーきゃーと騒がしいが何事だろう。

「大丈夫大丈夫、本音ちゃん」

その場で翻り月光を振り抜く、背後から飛来したロケットランチャーを両断した。

「見えてるから、ね」

「マシンガン！」

「おう、今行く!!」

ブレードホーミングを利用して音速を突破、簪の元へと急ぐ、時間にして約2秒、簪の横へと躍り出てモーターコブラを軽く上へと浮かせるように投げる。

簪が無駄の無い動きで掴んだのを確認してクイックブーストで瞬間離脱、元々のターゲット付近へと移動する。

『ふざけないですよ…！ 何でロケットランチャーを斬れるのよ…!!』

「斬れるのはロケランだけじゃねえぜ、次はアンタだよ、1分27秒よく耐えた方だ」

『一体何言つて…！』

「銃弾が発射されるのを見届けた後に銃弾を避けるのは無理だ」

『だから…』

右腕を、月光を振り抜く、相手は既に後ろに居た。

「…え？ う…そ、そんな」



「…終止」

一機落とした、これで2千万は上がった（カロードの株的な意味で）。

「悪い簪、待たせたな」

「遅いよ…寂しかった」

「埋め合わせは今度する」

「…うん！」

『なるほど、2対1ですか…これはピンチですね』

ふむ、そう言えばオーメルのACを使っていないな、さてさて…いやしかし…言っちゃえばアレだけどオーメルって武器は優秀だし速度も良いんだけど如何せんAPとEN消費率が劣悪なんだよな…

いや、正しくはライールがEN効率やバイだけなんだけど…

でもまあ使えと言われたんだし使おうか…潤沢なENかENなど使う必要など無いと言わんばかりの装甲が好きなんだけど…俺にとって相性が悪すぎる。

「…まあ仕方あるまい」

「どうしたの？」

「ちよいとな…チェンジ！ アーマードコア！ ルーラー!!」

フルライールの、ショットガンにレーザーブレード、背に近接散布ミサイルと近接リーダーを背負った完全近接仕様の速度特化AC、ただし薄くENをバカ食いする困ったさん。

『ど、どういうことです…？ 形が…変わって？ 二次移行なのですか?!』

「これが我がカロードのACの特徴だ、ただ武器を変えるようにフレームを変えただけ」

「信一郎、行く」

「俺は敵を攪乱する、攻めるのは簪、お前だ」

「…分かった… 怪我、しないでね」

「でも怪我したら簪が治療してくれるんだろ？ 最後に地面に墜落しちまうかもな」

『戦闘中にイチャイチャと…私へのあてつけですか、あてつけなん

ですね。わかりました、潰します』

と、そう言うなり両手にヘヴィーマシニングガンを持ち乱射を行ってくる、クイックブーストで回避し直後に急接近、思ったとおり近い方を、つまり俺を追いかけるように銃口を流す。

さてさて、ENが心配ではあるがショットガンと散布ミサイルでやりくりすれば何とかなるだろうか、否：何とかする。

「なるほど、遅いな：まるで止まって見える、絶対こっちがステイシスだって」

と言ってしまった直後カラーリングとエンブレム、武装が変更された。

あ、やっべ：間違えてステイシスにしちまったいな、まあいいか。攪乱はこっちの方が向いているかもしれないし、PMミサイル、アサルトライフル、レザバズ：うむ、オーメルは支援には向かんな、単機戦力だ。

しゃーないからレザバズを一次ロックで撃つ、攻撃力はかなり高いが変わりに弾速がそれなりに遅い、いやデータ上では割と早い方だけどき、弾がデカイし距離もそれなりに離れてるから遅く感じるんだよな。

まあ一回のサイドクイックブーストでルーラーが追加ブースター付けてたつてのもあつて距離はかなり開いてる、近距離でヒュンヒュン飛んでたら自分が相手を見失う事もあるぐらいだ。

おお、案の定避けられてしまった、当てる気などもとより無い。早すぎて俺への捕捉は無理だつて？ だから簪にロックをかけるか、いい選択だ。だが無意味だ！

「簪、ターゲットロック、頂いて行くぜ」

簪と敵の間に入り込み一瞬だけ速度を落としてクイックブーストで離脱する、するとあら不思議、敵のロックが俺に掛かっているではありませんか！

「信一郎、ミサイル撃つから：サポート、お願い」

「おっけおっけ、とつと潰そうぜ」

バシユツと打鉄式式に搭載されたミサイルポッドの射出口がオー

ブン、すると先ほどまで持っていたヘヴィーマシンガンを収納しロケットランチャーを展開させる。

『撃たせるわけには行きませんか…!!』

「ノーロック武器つてのは、ほんの少し銃口を反らすだけで…」

アサルトライフルで一発、一発だけロケットランチャーの銃身に攻撃を加える、すると俺とは反対方向に銃口が向き、明後日の方向に発射された。

『…あ…』

「この通りだ」

呆気にとられた約1秒で簪はミサイルを全て射出しロックを終えていた、着弾まで1秒も無い、ついでにMPミサイルを構えておく、一応の保険としてな。

何重もの爆発が起こって凄まじい爆音をアリーナ内に響き渡らせる、なんか敵の悲鳴が聞こえた気がする。

俺の用意を裏切るように試合終了のブザーがアリーナ内に響いた。

「試合終了 勝者 更識簪、籐ヶ崎信一郎ペア」

「一回戦突破、だね」

「次が嫌々な予感するけどな」

「どこも怪我…してない？」

「あゝ！ 怪我すんの忘れてた!! 畜生、何たる不覚か…!!」

「もう、怪我無くて…良かった、じゃあ行こう？」

簪がアリーナを出ようと移動を始めるがココで俺がしようもない事を思いつく、取り合えず簪の手を取りプライベートチャネルを起動、ヘッドパーツの下では変な笑みを浮かべていただろうな。

『簪、瞬時加速を持続的に続ける技術はあるか?』

『出来る…けど、どうしたの?』

『ならOKだ、ACに近い改造を施した打鉄式式なら瞬時加速中に軌道を曲げれる、緩やかにではあるがな』

『そんなことが、出来るの…?』

『ああ、アリーナを一周してから帰るぞ、向こうから回れ、俺はこっちから回る』

軽い合図で背中を合わせる、アイコンタクトは出来ていないが分かってくれたようだ、出力を打鉄式とリンクさせて丁度向こう側で交差するようにする、さて…おふぎけの開始だ。

『行くぞ（行くよ）』

OBの甲高い音とOBに近い音を発する瞬時加速のブースト音、同時に同速で対称的な軌道を描いてアリーナを飛ぶ、AC…ネクストタイルにしては割と遅くはあるがISにとってはかなり速いのかも知れない。

『凄い…！ こんなに速く、長く飛べるんだ…!!』

『時速1300キロ、まだ音速突破だ。望むなら今度音の数倍の速度を体感させてやる』

『本当？』

『ああ、おっと！ もう交差するか、簪はそのまま飛んでくれ、俺が避ける』

距離500、300、100バレルロールで回避、つと…簪すっげえ笑顔だった、見る権利は俺の物だ、俺だけの物だ！

『おおよそ残り4分の1周辺で進行ブースト出力を秒間20%づつ落として0%時点で逆噴射を秒間10%づつ上昇、最後に急停止してピットに戻るぞ』

『うん、わかった』

出力減少を確認、うむ、中々軌道調整が難しい、速度は俺が決めるんじゃないって簪が決めていて俺のACを簪の打鉄式とリンクさせ俺はその与えられた速度で軌道を調整、落ちないように必死こいているのだ。

簪との距離残り約100メートル、うっし…打鉄式とのリンク遮断、最後は自分でブースト調整つと。

半回転して簪に背中を向けるように…と思っていたのだが簪も同じ事をしていたので結局背中を合わせて並んで停止、ステイシスと打鉄式が背中を合わせて並ぶ、中々絵になるだろう。

『よし、戻るぞ、身内が見ていたのを思い出してなんだか恥ずかしくなってる』

『ふふふつ うん…帰ろ』

二人同時にではないがカタパルト射出口に逆から進入してピットへと戻る、そして…

「着弾ッ!!」

「しっ、信一郎?!」

ACを着込んだままメインブラスターがイカレて錐揉み状に全身をぶつけ、スタイリッシュにクレイジーなほど停止する。

「メインブラスターが完全にイってやがる! クツ…駄目だ、飛べん!」

「えと…もう、落ちてる…よ? じゃなくて! 怪我、無い?」

「駄目だ…もう死ぬかもしれない、人体に重要な部位が足りなくなつた…」

「う、うそ…!!」

「左腕と両足の感覚が無い…」

「ねえ、信一郎…私どうすればいいの? 笑えばいいの? 怒ればいいの?」

「笑えば…いいと思うよ」

この後、怒られた事をここに記す。

く く く く く く く く く く く く く く く

「よつす、遊びに来た、調子どうだい?」

手に汗握るであろうらうリーチームVSいつちーむの試合中に観客席の鈴音とせつしーの所へと腰を下ろす、簪は今打鉄式式のメンテナンス中でここには居ない、本音ちゃんもだ。

「えらく呑気(のんき)ね、アンタまだ次の試合があるって言うのに」「本当ですわ、それにわたくし達に調子云々等と言われても困ります、すこぶる悪いに決まっていますわ」

「ほっほお、そいつあ残念」

「と言うよりさ、私てつきり布仏さんと組むと思ってただけど」「それ、わたくしも思いましたわ」

ちなみに本音ちゃんは谷本さんと組んだとのこと、どうでもいいだろうが谷本さんの武装はグレオン、完全に有澤重工に感化されている。

「ああ、いつちーとシャルりんには言ったんだが、彼女…と言うより嫁さんが出来てな」

「へえ…ええええ、え…?!」

「は、はい?!」

「で、さつき組んでた彼女がそうだ」

「じよ、冗談じゃ…」

「ああ、本当ですか?! 夢なら覚め…!!」

なんだこいつらすっげえ失礼、おっぱい揉むぞ、尻撫でるぞ。

そう思うと左手が勝手に動き出し、左前方のせっしーの尻をさわさわと撫で始めた、私は戦慄した、なぜこのような事になったのか、理解が出来ない、私の意志ではないのだ、ならばなぜ。

ああはい、せっしーの初々しい反応を見たかったです、心で理解したッ!

「うきやいッ?!」

「な、なにっ?!」

「とっ、と! 籐ヶ崎さん?! なっ、何をしていますのですか!!」

「拙者ではござらん!」

「妙にゴツゴツしてた上に冷たかったので絶対に籐ヶ崎さんの左腕でしょう!!」

「尻撫でるんだつたら右腕で撫でるわ! 左腕と両足の感覚無いもの!!」

するとどうだ、何やら鈴音が俺のことをまるでゴミを見るような目で見ているではないか、いいぞ、冴えてきた!

「ねえ、シン、ちよつといいかしら、私見てただけどき、アンタがセシリアのお尻触る所」

「じよ、冗談じゃ…じゃあもう一人! もう一人証人を呼ぶぞ! I B I S、見てました?!」

『はい、信一郎様が義手でセシリア・オルコット様の臀部を触る所を

確認しました』

「…籐ヶ崎さん…何か言い残す事は？」

「あ、モツピーがいつちーの攻撃で落ちた」

「え?!」

ふう、助かった、いやはや危ない所だったな…あと少しで警察に保釈金を積まなければならぬ所だった。

「あー！ ああー！ あのバカ！ 何で箒をお姫様抱っこしてるのよ!!」

「ず、ずるいですわっ!!」

「所詮は獣だ、人の言葉も解さんだろう」

もっふもふ、あ、それ、もっふもふ。

「あ、よし！ そこよ、やっちゃいなさい！」

「ああ！ どうして突っ込むのですか?!」

「うっし、ナイスフォローー！」

にしてもシャルリンの武装って地味だよな、見た目も威力も、俺のハウザーなんて見ただけでやばいつて分かる見た目だぜ？

モロチン当たったらヤバイ、軽2をデュエル開始5秒で落としたことがあるからな、おおよそ居るであろう位置に撃ち込んだら敵が爆死したのでござるの巻。

等と恐らくどうでもいいであろう事をウンウン考えていたらシャルリンがらうりーに急接近しつつ左腕を大きく後ろに振っていた。

「行ったあ!!」

直後シャルリンがパイルバンカーを2〜3度連続してらうりーに打ち込む。

アレほど連続して撃てるのはリボルバータイプのマガジンだからだろう、恐らく最大6連発のパイルバンカー。

だがなぜカロードが上位タイプでも思いつかなかつたのだろう…いや、まてよ？

思いついたはずだ、カロードのことだからかなり早く、思いついたのはキサラギか、アルゼブラか、だがなぜ形になっていないのか。

「凄いつちや凄かったけど威力自体はシンのアレに及ばないわよ

ね」

「それだあああああつ!!!!」

「ひきゅっ!! な、にゃによ?! いきなり!」

涙目で鈴音が訴えかけてくるがそんな物より俺は閃いた。

威力だ! 試作時点で威力が既にバカみたいにデカかったからだ

!!

故に銃身が耐えられなくて崩壊、何だ駄目なのかで終わってしまったんだ!!

撃ち出すのに使う爆薬の威力を落とせば連射式も可能だ、撃ち出すのと引き戻すのに爆薬を使えばマシンガンの如く連射も可能、弾薬をベルト給弾でもガトリング式でもつけてしまえば実現可能!!

「マハハハハハハッ!! 浮かんだ、浮かんだぞお! その名もガトリングパイルだツ!!」

「ぼ、ボーデヴィツヒさんのISが溶けてますわ?!」

「なによ…あれ…!」

「ん? ああ、あれ? V(ヴァルキリー)T(トレース)システムだろ、これだからドイツは」

「VTシステム…わたくし、聞いた事がありますわ…でも開発も使用も禁止されている筈では…」

『緊急事態発生、全生徒はアリーナから避難してください』

すると周りの女子生徒は一斉に立ち上がり悲鳴を上げて避難を開始する、ただし、目の前の二人は別、俺みたいに座りっぱなしと違うわけではないが冷静に状況の把握を始めている。

「どうした? 二人とも逃げないのか?」

「今このパニックの中わたくし達も非常口に走り込んでどうするのです?」

「それにね、私達は専用機持ちよ?」

「二人ともダメージレベルが深刻で展開できないけどな」

「うぐ、それより、籐ヶ崎さんこそ逃げないのですか?」

「そうよ、流れ弾、飛んで来るかもしれないわよ」

「んふーふ、冗談。流れ弾なんてねえよ、だってやる気満々な双方



ともブレオンじゃねえか」

まあ非常口に突撃して他の女子達をどさくさに紛れて触ったりするの魅力的だが、満員電車とか俺は嫌いなんだ。

「まあ私は、一夏（あのバカ）なら大丈夫だって、信じてるし」

「そうですね、一夏さんが負けるはず無いですもの」

「お、EN切れた」

「に、逃げてエエエ!!」

「早く退避してください!!」

「お前ら焦りすぎだろ、信じてやれよ」

大丈夫大丈夫、俺はいつちーのこと、信じてるからな…いや、ただどうなるか分かってるだけなんだけどな。

「無茶ですわ! 殆ど生身のままで戦うなんて!」

「あわ、あわわわわわ、あb b b b」

「いとおかし、大丈夫だって」

アリーナを見るとナニカサレタらうりーがいつちーに向かってブレードを振り、いつちーが紙一重で避け、雪片式型が一瞬だけ目映い光を放ち、振り抜かれた。

実に愚直で綺麗な太刀筋だった、刃物はナイフしか扱えない俺から見ても美しかった。

ズルリとナニカサレタ黒い影が形を持った物体かららうりーが姿を現しいつちーに抱き止められる。

「な? 大丈夫だった」

「え、ええ、わ、分かっていますわ、だから言ったではないですか  
一夏さんが負けるはずが無いと」

「ふえ、ふえええん、よかったよおお、いちかしんじやうかとおもつたよおお、ふええええん」

「何だこの差。んじや、ま 俺も避難するとすつか」

おお、こわやこわや、早い所社に連絡入れないと、いや…それともそのまま母さんに会いに行くか? うん、そうしよう。

「IBIS、母さん、社長の現在地を教えてください」

『ナビゲート致します、指示通りに進んでください』





「あつそ、じゃあ俺はもう部屋に戻るわ」

「おう」

「いっちーと別れて自分の部屋に移動を始めた、ところで何やら遠くから鈴音達の声が聞こえる、このT字路の向こうからだ。」

「一夏が大丈夫そうで良かったわ、ホント」

「本当ですわね、心臓が止まるかと思いましたが」

「T字路の曲がり角ギリギリで待機、みんなのアイドルリヘナラたんの呼吸音を口から出して待ってみる。」

「ア、アアアア…ハアア…ア、アアア…」

「ね、ねえ…何か、変な音聞こえない？」

「そうですね…なんででしょうか？」

「…曲がり角…？ 何かあるのかしら…」

「周りに誰もいない事を確認して顔を作り変える、見た目リヘナラたん、可愛い！」

「鈴音がひよつこりと顔を出したのと同じに…」

『キエアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!』

「ひにゃああああああああああつ?!」

「ひいつ?!」

「叫ぶ、すると鈴音がまず後ろに飛びあがって尻餅をつく、直後ペタペタと地面を這いずって後ろに下がる、俺がゆつくりと一步前に出たらガクガクと震え地面を這いながら俺から顔を反らして一目散にせつしーの方へと向かう、なお、俺はせつしーの姿が見えていない。」

「直後自分の顔を元に戻し角から顔を出すと鈴音が涙目でせつしーの腰にしがみつき、せつしーの陰に隠れ、恐怖に引きつった顔で俺の方を見る。」

「今度カリード主催のお化け屋敷行こうぜ、いっちーとかシャルりんとからうりーとか誘って」

「ふえううう…うやう、うえううああ…」

「お、驚きましたわ…おもに鈴さんの叫び声に」

「やっべえ、鈴音が何喋ってるのか皆目見当が付かん」

「化けもによ、が…いた、のお…!」



「いいぞお、冴えてきた…！ ジャック、俺のドミナント、よく見ておくんだな！」

「シン、もう黙っていいようか」

「使っていい時間がちゃんと決まっていますので絶対に！ 絶対的に守ってくださいね！」

「使っていい時間になった直後に突入すればまだ着替え始めていない女子の一糸纏わぬ姿が見れる可能性があるんですね?！」

「女子の使っていい時間と1時間差がありますのでそれはありえませんが！」

「畜生…ついてねえ…ついてねえよお…シャルりんも付いてねえよお…！」

「ふん！」

べちやり、orzの時頭をシャルりんハリセンで叩かれた、ノZこんな感じになった。

「じゃ、じゃあ私は伝える事を伝え終えたので戻りますね、絶対に変な事しちや駄目ですよ！ 籐ヶ崎君！」

「フリか、ならばZE☆N☆RAになるしかあるまい…」

「もうその流れはいいですよお〜!!」

ひーんと顔を真っ赤にして恥ずかしがる真耶たん、一人で発電！一発！二発！三発！実践のつもりで五発！

そうこうしている内に戦線離脱を試みる真耶たん、離脱…駄目だ、やらせてくれ。

しかし現実は無常哉、作戦領域からOBよろしく去って行く、逃したか…！

「クソがつ…俺の所為かよ…！」

「自業自得だよ」

パンネたんみたいに手足を使わずにうにうにと動いて自分のベッドへ移動する、続いて芋虫のように這いずってベッドの上に落ち着く。

「シャルりん先行って来いよ、シャルりんの後でいっちー引き連れて入ってくるから」

「……その約束、ちゃんと守ってね」

「しつかたねえなあ、分かった分かった、ドミナントとの約束だ!」

「絶対だよ!」

念を押して出て行くシャルりん、ああ勿論約束は守るさシャルりんの後、とは言ったが、別に俺はシャルりんが部屋に戻ってきてから、なんて一言も言っていないがな!!

シャルりんが部屋を出た後で風呂に突撃だ、いっちーを連れてな!!

「GO! GO! GO!」

扉から顔を出して周囲を見る、シャルりんは居ないな、確認完了。

「いっちいっちー! 風呂行こうぜ!」

左手でコツコツガリガリ扉を叩きながらいっちーを呼ぶ、すると中からなんとも気の抜けた声が聞こえてきてその後扉が開く。

「おお、シンも行くのか」

「応よ、さてさて、楽しみだな」

「ああ、やつつと! 湯船に浸かれるな!」

「日本人と言ったら米と風呂だな」

「ああ! んじゃ行くか、シンは着替え用意したか?」

「俺量子変換で服保存してるし」

「何て無駄な事に量子変換使ってるんだよ」

「いいんだよ、後5千位パーツ詰め込めるし」

「カロードパネエ」

で、大浴場の場所はどこだろう、と呟くと多分こっち等と勘で言っ  
てきやがったのでノーセンキューしといた、お前の(地理的)勘ほど  
当てにならない物は無い。

設置されたパネルを見つっついっちーの指差した方向とは反対に進  
みながら廊下を進んで行く。

「HD—LANCER—OPTO4」

「うお、何だよその頭に乗ったひよこ」

「アヒルの代わりだ」

途中でいっちーを何度か足止めして凡そシャルりんが到着して1  
0分ほど経ったであろう時に脱衣所に到着、予想通りシャルりんはも

う浴場に居るらしい、計画通り！

「さて、脱ぐか！ パージします。不明なユニット♂が接続♂されました。システムに深刻な障害♂が発生しています。直ちに使用♂を停止してください」

「何だ変な事言っとうお！ 脱ぐの速いな?!」

「憧れるだろ」

「いや、てか前隠せよ、誰もシンのナニなんか見たくないって」

「いいじゃん、どうせ男同士なんだし、それとも何か、サイズの問題で見られるのが恥ずかしいのか」

「んな事ねえよ、いたって平均的だよ俺のは」

等と言って腰にタオルを巻きたいうちーが一息ついて腰に手を当てる。

「んじゃ行くぞー！」

「いや隠せよー！」

ガラリと扉を思いつきり開いて蟹股大股でズンズンと歩いて行く。

「たーんたーんたつぬきつのきつんたつまはっ♪ かーぜつもなーいのつにぶーらつぶらっ♪」

「だから隠せって」

「うひゃい?!」

シャルリンを見つけたがその前にまず身体を洗いに行く、量子変換で身体を洗う用の手拭を出し椅子に座って身体を洗い始める。

「あいむしんかーあいくつどうぶれいきっだん！ あいむしゅーたーどれすていっくべいびー！」

「シ、シ、シンと一夏?! なっ何で?!」

「たつちぎじやんぱーふいーりっいんぎういる！ かむとうがーばんとうしゅーういずみー！」

「なっなっなんでシャルが?!」

「あいむしんかーあいくつどうぶれいきっだん！ あいむしゅーたーどれすていっくべいびー！」

「だっ、だっってシンが先に入れて言うから！ 俺は後で入るって…ああ?!」





「約束は破っていない、だろう?」

「にしてもせめて前隠せよ、何度も言うけど! シャルだつて居るんだぞ?!」

「だからどうした、湯船につかる時は手拭を浸けてはいけない、故に結局湯船では見られるんだ、なら最初から隠さなくても相違ない」

「恥ずかしいとは思わないのかよ」

「見られた所で何も感じないし見たところでおっ勃ちもしねえ、お前らほど人生経験浅くねえんだ、一緒にするな」

「だからつてボクが入っている時に来なくてもいいじゃない!」

「温泉回! 水着回! 必須なんだよ! まあ後でまだあるけど!」

よっこいしよと湯船に足を踏み入れる、フロントはシャルりんから丸見えだ、顔を真っ赤にして顔を反らすが反らした先はいっちょである。

ゆつたりと湯船に浸かりながらシャルりんといっちょを眺めてニヨニヨ、ああ、俺は気にしないで見つめ合つて下さい。

「はあ…ねえ一夏、寒いでしょ? 入ればいいんじゃないかな?」

「い、いや…でも」

「いっいゆっだつな♪ ハハハン♪ いーいゆっだーな♪ ハハハン♪」

「それに、コレももう、入っちゃってるし」

「遂に俺、物扱いである、世界一の大企業の御曹司が遂に物扱いである」

なんだか妙に悔しくなってきたので湯船でバタフライをする、しかしそれなりに浅い上、脚と左腕が重いので直ぐに水没。

「バカな、これが私の最後と言うか?! 認めん、認め r (ry

「湯船ではしゃぐなよ! 小学生か!」

「ぼくしようがくせー! 僕生姜臭え!」

「き、気持ち悪…ううん、何でも無いよ」

「流石に傷ついた、俺もう上がるわ、あと大人しく二人でしっぽりしてろよ」

素早く髪の毛を洗って泡を落として浴場から出て行った事をここに記す。

ロッカールームを出て直ぐコーヒー牛乳をチビチビ飲む、豪快に飲む気にはなれん、たっぷり10分掛けて飲み終わるとロッカールームからシャルりんが顔を出した。

「まだ居たんだね、さつきはごめんね」

「うむ、構わんさ。気にしてない…気にして…無い……」

「スツゴイ気にしてるよね?!」

「ま、それは置いといて、とつとと部屋に戻るか、いつちーは？」

「まだもう少し入ってるだって」

「ほおん」

と、部屋に向かっていると前方からちっふーが現れる、コマンド？

ちらりとこちらを見てきたので声には出さず口を動かす「現在大浴場にいつちー一人」それを見るや否やちっふーの唇の端がニイと吊り上がった、その笑みは正しく笑みだった。

「ばんわーっす」

「織斑先生、こんばんわ」

「浴場からの帰りか。ああ、籐ヶ崎…いい事を教えてもらった」

「うい」

ちっふーとすれ違い数歩、そこで足音が一つ消えた、俺の重い足音ではない、シャルりんの軽い足取りの足音ではない、堅苦しく規則的な足音が消えたのだ、ちらと後を振り向く、しかしそこには誰の後姿も無かった。

真に影も、形も、痕跡も、それはまるで人ならざる者がいたかのよう………

サブタイが思いつかないがとりあえず紹介しよう、彼女  
は私のお嫁さんだ

「皆さん、おはようございます」

と、一人の特徴的ではないが酷く特徴的な女性がクラスの全員へと  
挨拶をする。

「……？ 誰……かな？」

「身長高い……」

「おっぱい大きい……」

「綺麗……モデルみたい」

髪と目は黒く、女性としては高い身長、やや垂れ下がった目が日本  
人らしく、また、優しい雰囲気を出している。

髪は膝上あたりまでの長さで鴉の濡れ羽とでも言うべきか艶やか  
だ、ロングスカートに長袖の制服、鈴を振るような儂く綺麗な声。

眼帯をつけていたり特殊な髪の色をしているわけでもない特徴の  
無い、しかしあまりにも美しく御伽噺から抜け出てきたかのような  
特徴的過ぎる女性。

一人と変わった特徴があるとすれば白い滑らかで柔らかかそうな  
手袋を両手にはめている事だろう。

「おはようございます、一夏さん」

「え、あ……おはよう……ございます？」

「い、い、一夏っ!!」

その女性がいつちに挨拶をするや否やモツピーが拳を握りつつ  
ズンズンと足を踏み鳴らしいつちへと歩いて行く、下唇を噛んでや  
や悔しそうにしている表情を見れば嫉妬であると分かるだろう、か  
わいい☆

「な、なんだよ箒」

「なんだではない！ 一体誰なんだ?! この……女性は!!」

「知らない！ 今日始めて会ったって！」

「そ……んな……！ 酷い……です、あんなに、一緒だったじゃ、ないです

か…あ」

「い、い、い、一夏さん?!」 どっ、どういうことですか?!」

「どこに…行くにも一緒、で…え、一緒に、ご飯も、たべたじゃ…ないです、かあ…!」

「え?! ええ?!」

女性がぐすんぐすんと涙を流し始めると周りの女性陣が「そんなに仲の良かった子を忘れてるって事?」「こんなのって無いよ、あんまりだよ」「もう一夏君のあだ名はオボンヌよオボンヌ」等と聞こえてくる。

「お風呂だって…一緒に、入ったのに…い、私は、もう要らない、んですか…?」

「どういうことだ…一夏…!!」

「見損ないましたわ…!!」

「おりむード鬼畜く」

遂に本音ちゃんもいっちーを非難し始める、視線の中心に居るいっちーは大慌てである。

「待て! 待ってくれ! 俺は異性では千冬姉としか風呂に入ったことは無い!!」

「そう、ですね…私は…一夏さんにとって…。ぐすつ、わかりました…もう、いいです」

「ここまでして否定するとは、脳味噌までカビたか、一夏」

「フン、空気にもなれませんか」

「おい、マジかよ。夢なら覚め」

「皆さーん、おはようございまーす! S H Rを始めますので席について下さい」

「間に合ったか!よくきてくれた すまんが劣勢だ。加勢、頼む」  
助ける気など元より無い、と言わんばかりにいっちーを無視して扉の方へ目を向ける真耶たん。

「えーっと、転入と言いますか、その…兎に角入って下さい」

「えっと、皆さんこんにちはシャルロット・デユノアです」

「と言うわけでデユノア君はデユノアさんでしたあ、うう、また部屋



その声が教室に放たれて1秒間沈黙が広がる、俺はフムツと息を止めていた、呼吸を止めて一秒貴女真剣な表情（かお）したから、そこから何も言えなくなるの星屑ロンリネス♪

「二夏さんー！ 一体これはどういう……」

「二夏アツ!!」

せつしーが立ち上がろうとした瞬間教室の扉が勢いよく開けられる、いつちーに制裁を加える奴は居ないのか？ いるさつ ここにひとりな!!

「すつ、鈴音えー!」

「どういう事よ……! なんて、おんにやのこ、とお……おふろお、入ってる、のよ……お!!」

生身の鈴音がじわりと涙を浮かべていつちーを睨む、多分いつちーに対するダメージはモツピーのガン飛ばしよりも遥かに高い、物理的ダメージを与えない分高い。

「いちかのつ、いちかのおつ……!!」

「へーい」

とりあえず野球ボール（硬球）を鈴音にパスする。

「ばかあつ!!!」

「させんツ!!」

イチローもかくやという剛速球がいつちーに迫る、しかしそこに割って入ったのはISを展開したらうりーだった、らうりーがAICで剛速球を急停止しいつちーへの被害を0にする。

ごめん、嘘ついた、イチローには遠く及ばなかった。

「スタンドツ！ いけえ！ シンツ!!」

「地面殴ったら関節が見えるほど指抉れたツ!!」

実話と共に鈴音の命令に従っていつちーへと飛びかかる、らうりーをジャンプで飛び越え左腕を大きく後ろに引き、指を伸ばして貫手を準備する。

「ぎゃああああああつ!! ガチで死ぬううううツ!!」

「通さんぞ!!」

俺もAICによりピタリと動きを止められる、突き出した貫手は

いっちーの鼻先ギリギリで止まっていた、ふう、危なかった☆

「助かったラウラ！ お前のISもう直ったのか？」

「予備パーツから組み上げた、幸い、コアに損傷は無かったからな」

「へえ、そうなん……むぐツ?!」

らうりーがいっちーの唇を奪った、ズキユウウウウン!!!

はいココで忘れていけないのは俺の存在だ、俺は空中で停止していたのを覚えているだろうか。

で、A I Cが停止、勿論俺は生身のまま空中で留まる事なんて出来ない、つまり。

「お、お前は私の嫁にする！ 決定事項だ！ 異論は認めん！」

「ゴアアアアアアアアツ!! 後頭部ぶつけたああああツ!!!」

「……嫁？ 婿じゃなくて？」

二人が会話している足元で俺が頭を押さえつつのた打ち回っていても誰も俺を気に止めない、無視できるような小さなサイズではない筈だが。

「PA発生装置をONにしておくべきだった…!!」

「日本では気にいった相手を『嫁にする』と言うのが一般的な習わしだと聞いた。故に、お前を私の嫁にする」

痛みが治まってきた、割と冗談抜きで回復能力が人間を越えた気がする、確実に頭を切るレベルのダメージだったのに血が一滴も出ていないし、多分血が出る前に無意識的に治した。

「一夏さん、少しよろしいですか？ いえ、よろしく無くても一夏さんに与えられた選択肢はYESだけですわ」

「いや、セシリア、はいの選択肢もあるぞ」

「是も、あるのよ」

「ouiもあるんだよ、一夏」

「凄い、4択に見せかけた1択だよな」

モツピーが般若を超える表情で真剣を握り、鈴音が涙目で手だけを部分展開する、せっしーが光の無い目でレザライを構え、シャルりんが薄く笑ってパイルバンカーをいっちーに向ける。

「フン、なんだお前たち、人の嫁に寄ってたかって。私が相手になっ



てやろう、嫁を守るのも務めだからな」

「それはいいとして貴様ら、IS学園では緊急時を除きISの無断展開は禁止だ、覚えていないのか？」

響く冷淡な声、ISを纏った者と真剣を握る者が古びたブリキ人形のように声のした方向へと顔を向ける、そこに居たのは扉に背を預けてトントンとドラゴンスレイヤー（出席簿）を弄び正しい意味の笑みを浮かべたちっふーだった

「お、お、お、織斑先生?! こっこれは、これには深い訳がありましたt…うきゅつ!!」

ちっふーの手より射出された光波（出席簿）は真っ直ぐにせつしーへと飛び額に命中、衝撃で崩れ落ちたせつしーを背景に綺麗な軌道を描いてちっふーの手へと戻って行く。

「せつ、先生、その、ぼっ僕はですn きゃんツ!! し、しどい…」  
涙をダバアと流しながら教卓に頭を落として崩れ落ちたシャルリン、額が真っ赤だった。

「わ、私はISを展開してい…マッ ツ!!」

凡そ女の子出す声だとは思えない声を出して椅子に落ちるモツピー、はーい銃刀法違反でーす。

「え、あ、う…ちふゆ…さん？ わ、わたっ…わたし…ひきやあんツ!!」

「凰、お前は二組の筈だ、なぜ一組に居る？ わざと軽くしてやったんだ、どうするべきか、わかるだろう？」

「えう、ふええ…！ ふえええええええええん!! ああああ!!」

「やめたげてよおー！」

ボロボロ涙を流しながら教室から出て行く鈴音、酷い！ ここまでする事無いじゃないか！ 流石に可哀想過ぎるよちっふー！

「きよ、教官！ 私は嫁を守ろうとしただけで…！」

「ああ、ああ分かってるさ、ボーデヴィツヒ、それは緊急事態だったな、仕方ない」

「ほっ…」

「だがな、私が許せないのは一夏の唇を奪った事だ、いいか？ アレ

は私のものだ、私だけのものだ!!」

「きよ、きょうか……いたいよお!!」

額を押さえてプルプルと小動物のように震えるらうりー、どう見ても軍人には見えない。

だがそれがいい! 画像省略。

「ついでだつ!」

「なるほど、いい腕だ」

ちっふーがついでで俺を撃破しようとして来たので飛んできた出席簿を左腕で掴み取る、ヤバイ音が鳴ったが異常は見られない。

「ほう、今のを掴むか、面白い」

「俺は勘弁願いたい」

以後数分に渡り命を掛けたフリスビー遊びが行われた、決着が付くことなくフリスビー（出席簿）が自壊した事で終了となった、その後おもむろにもう一つの出席簿を出したちっふーに戦慄したがフリスビー遊びは開催される事無くSHRを終了。

「初めての相手はボーデヴィツヒではないツ! この姉だツ! ——  
——ツ」

とんでもない爆弾発言を残して意気揚々と教室を出て行った。

その後何とも言えない空気を残しつつ一時限目の座学を進める、俺は丸々一生分のアドバンテージがある、あるにはあるが歳食った時はただの耄碌（もうろく）ジジイだったので勉強とかの記憶など無いに等しい、好きなことや興味のあることならずと死ぬまで、死んでも覚えていられたのにな。

「だがな、覚えている、覚えているぞ貴様……! 俺の大嫌いな英語……!!」

「シン英語苦手なのか」

「罵倒しか知らねえ、あと無駄に発音とかがいいのは自覚してるんだがな」

「まあアレだけ声真似が上手いんだからそりやそうだろう」

あと何だよあの並び方、意味分かんねえんだけど、俺は日本人だ、日本語で喋れ、日ノ本語喋れよう、日ノ本語喋れねえんなら（ry

近くの女子生徒（日本人ではない）が「日本語の方が意味わかんない」と言ったのを聞いた、もう何の言語が分かりやすいのか分からん。もういつそヒュムノス語を世界共通語にすればいいんだ。

「じゃあ、籐ヶ崎君、少しアレな例で申し訳ありませんが「あなたの事が嫌いです。」を英語で表現して下さい」

！

「そつ、そこまで言わなくてもいいじゃないですか!!」

英語圏で言うのと撃ち殺されかねないので放送コードに引つ掛かった、とりあえずFコード（f u o kとか、英語圏ではピー音が入る）が物凄かったと言っておこう。

「かなり早いのと聞いた事の無い単語があったからあまり分からなかったがシンが外国だったら撃ち殺されかねないレベルのセリフを言ったのは分かる」

「そんなのはどうでもいいんだが、誰か俺に英語を教えてくださいませんか、中学の時数学工学経営学理学科かやってたから英語が全く分からん、外国語は全部IBISに訳してもらってたし」

「授業中にお喋りしちゃ駄目ですよ!」

「一夏は許すがな! 一夏ならもう何やつても許す、お姉ちゃん許しちゃう!」

く く く く く く く く く く く く く く く

HR直後の放課後となった まる。

一組の扉を恐る恐る開いた鈴音が教室内を見渡し、携帯電話でやららといっちーを撮影しているちっふーを見る。

そつと教室に入ってちっふーがチラリと鈴音を見て何の反応も無い事を鈴音が確認、花が開いたような笑顔になって教室に入る、どう見ても仕草が大人しいタイプのメインヒロインです、本当にありがとうございました。

「…丁度良かった、凰鈴音、セシリア・オルコット、シャルロット・デュノア、篠ノ之箒、籐ヶ崎信一郎、そして嫁、言いたい事がある、聞

いて欲しい」

「あによ」

「なんででしょうか」

「何かな？」

「…何だ」

「随分と調子良さそうだねえ、騙されたとも知らずに」

「シンは無視していいからな、なんだ？」

そんなはず…！

「転入直後に変な真似をしてしまつてすまなかつた、特に凰鈴音とセシリア・オルコツト、お前達二人には本当に申し訳ない事をした」  
「あ…いいわよ別に、気が立ってたんでしょ？ それに謝られたらもうそれで終わり、引き摺るなんて女々しい事、私は嫌なのよ」  
「ええ、わたくしもですわ、それに今後の行事で勝てばいいのですから、気にしないで下さいまし」

「しかし…」

「んふーふ、らうりーのちーっぱい☆」

と言いつつらうりーにπタツチ、ついでにB地区のあるであろう場所を一度つんくと突いて置く。

「なっ！ と、籐ヶ崎!! 何をして…!!」

「シン、アンタ馬鹿なんじゃないの?! 死ね！ 死んで詫びなさい！」

「女の敵ですわ！ 女尊男卑関係無く豚箱行きですわよ?!」

「うん、うん、まさかこんなに公然とセクハラをするなんて思わなかつたよ、シンつてばクスだつたんだね」

「シン、お前それはやっっちゃ駄目だろ?!」

と罵詈雑言に罵られるが俺がその程度で何とかなるわけなからう、マハハハハ!!

俺の目的はただ一つ、らうりーに死ねと言われる事よオオオオオツ!!!

「……なんだ？ どうした籐ヶ崎」

「お、おい、マジかよ！ じよ、冗談じゃ…こんなの、どうやって相

手にすればいい!! 認めん、認められるかこんな事ツ!!」

「シ、シンが狼狽している! それも今まで見たこと無いほどに!」

「なんだ? 私が変な事をしてしまったのか?」

「違う! 違うんだよらうりー!! ここはそうじゃない、いいか?

別段好きでもない男に胸や尻を触られたら怒るべきだ!

畜生、誰だ?! 女の子をココまで無防備に成長させたのは!! 出て

来いッ!」

「シンって怒られるのが目的で今のをやったの...?」

「そういや全1年生代表候補から死ねと言われるのが目標だつて

言ってたわよ」

「そう言えばそんな話を話してましたわね」

「まあ、だとしても到底許せるような事ではないがな」

畜生、狂ってる、狂ってやがる...! 許せねえドイツ...!! 糞面倒

臭エ文体してるだけではなく年頃の女の子にこんな...!!

「シャルりんツ!! 頼み事がある! らうりーに倫理を教えてやつ

てくれ...!!」

「ええっ?! ぼ、僕?!」

「そうだ、お前だシャルりん、それ以上でも以下でもない」

どうせ同じ部屋になるんだからな、シャルりんにか託せんのだ。

「頼んだぞ。じゃあ俺はひと訓練してくる」

「あ、シン。俺も行く、鍛えてくれ」

「む、ならば私も嫁に付いていこう、籐ヶ崎ともしっかりと手合わせ

したいしな」

「一夏が行くなら私も行く、それと今日こそシンを地上に叩き落し

てやるわ。丁度ダメージも回復したしね」

「わたくしも行きますわ、特訓は欠かせませんものね」

「くっ、私にも専用機があれば...!」

「あー...僕もいこつかな」

ああ駄目だコレ、多分全員が付いてくるオチだわ、仕方ないな、簪

も呼んでみようかしら。でもその前に...

「本音ちゃーん、見に来るー? 簪も呼ぶつもりだけどー」

「うんゝ行くゝ、ちょっと待っててねゝシンにー」

「あーい、準備できたら声かけてねー」

んじゃあ、とりあえずメール打つか、PCプログラムを起動して眼前に投影する、他人からはただ何かのホログラムが起動されているとしか分からない、肝心の内容は俺にしか見えないのだ。

『第9アリーナで訓練するんだけど簪も来る？ 本音ちゃんと、後その他諸々も付いてくるけど』

「うん、送信と」

「何コレ、カロードの製品？」

「否、俺のACに搭載されている雑用プログラムの一つ、何も戦闘にしか使えないという訳じゃないからな」

「…便利だな、是非とも我が部隊にも欲しい」

「ACだからこそ出来るだけであってISでは容量を多少なりとも圧迫するぞ、やめとけ、大人しくウェアラブル・コンピュータで我慢した方がいい」

「そうか…：残念だ」

「確かカロードでは高性能なウェアラブル・コンピュータを販売していましたわね」

「MSACとかBFFとかアクアビットも出してたな、どれも軍事機器の民間用だけど」

鉄男の設計ホログラムみたいな感じ（見たいな物なので理論無茶苦茶設計不可能）のをホログラム映して全員に見えるようにする。

ポイポイとパーツを取ったり付け足したり武器を引っ付けたりとしているとらうりーが興味津々と言った様子でホログラムを見ている。

大型レールキャノンを肩部に取り付けてみる。

「おおー」

外してみる。

「あつ…」

二つにしてまた取り付けてみる。

「わあ…」

「何この小動物、めっちゃ目がキラキラしてて可愛いんだけど」

「ほ、他には無いのか…?」

「…弄ってみる?」

「いいのか!」

すると簪からメールが返ってきたのでタイプをマルチモニターにしてメールを独立させる、そして独立させたモニターを俺からのみ見えるようにしてメール内容を確認する。

ちなみにらうりーは楽しそうにホログラムを触ってアSEMBルしていた。

「いっちーとかはそれを微笑ましそうに見ている、はい、らうりーの位置づけが決まりました。」

「つと、それよりメールは…と…」

『うん、行く。第9アリーナだね、じゃあ先に行って待ってるね』  
「できたっ!」

簪のメール内容を見終わると同時にらうりーが声を上げる、さてどんなアSEMBルかと見てみると。

「最速の脚に最硬のボディ、最高の射撃能力を持った腕に最高カメラ性能の頭部!」

武器に超大型レールガンを両肩に取り付け腕には最高攻撃力の爆発兵器とエネルギー兵器!」

「どうだ! と満面の笑みで俺のほうを見てくるがどう見てもビーハイヴZ1、産廃です。本当にありがとうございます。」

「…まあいっちーには勝てるかな」

「嘘だろ?!」

「シンにー準備できたよ〜」

「よし、じゃあ第9アリーナにレッツゴーつと!」

「お〜」

「おー!」

右腕を上げて声を上げる本音ちゃんたらうりー、うん。もうらうりーに対してセクハラなんてできん、駄目だわ、愛でる対象だわ。

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

「おう簪、待たせたな」

「ううん、大丈夫…待てば待つほど、会えた時に嬉しいから…」  
第9アリーナの入り口で待ってた簪と言葉を交わし、そろそろと付いてくる面々へと振り返る、まるでピ〇ミンである。

「かんちやくん」

「アンタは…トーナメントでシンと組んでた…なるほど、アンタが  
そうなのね」

「しっかりと見させて貰っていた、中々の技術だ、まだ荒いがな」

「籐ヶ崎さんと並んでるのを見たら…駄目ですわ、美女と野獣の方  
がまだマシに…」

「鈴にセシリア？ 一体どう言う事？ 僕話が読めないんだけど  
…」

「うん、俺もだ」

「え？ え？」

一人だけ一切関連性が無いためオロオロとするモツピー、そういえ  
ばいつちーとシャルりんには簪が彼女だと言ってなかったか、モツ  
ピーにはヒント以前の問題だけだ。

「あれ？ シンがあんた達二人には言ってるって私達聞いたんだけ  
ど」

「彼女が籐ヶ崎さんの恋人だそうですわ」

「へえ…エエエエエエエエエエエエ?!」

「き、君がそうなの?!」

「なるほど、私と嫁のような関係だな！」

「え？ え？ な、何だ、この疎外感は」

全力で驚いたり、戸惑っていたり、素だったり、オロオロしたり、統  
一性の無い奴らだな、もう！

「はい、まずは自己紹介と行こうじゃねえか」

「あのねえ、私はねえ、布仏本音って言うんだあ」

「え、ええ、存じておりますわ…ごほん、わたくしはセシリア・オル  
コット、イギリスの代表候補にしてオルコット家の当主ですわ」



て他の白人女性に比べて胸が慎ましやかなのがコンプレックスですわ」

「……………はあ」

「どうした、来いよせっしー、武器なんか捨てて掛かって来い！」

「ふんッ!!」

「甘んじて受けッブッ!!!」

「し、信一郎?!」

我がオッサンフェイスに突き刺さるせっしーの拳、簪が驚きの声を上げると同時に衝撃で仰け反る。

「あー、大丈夫大丈夫、どうせ無傷でしょうし、私は凰鈴音、中国の代表候補よ」「調理器具にたまに間違われるのよね」

「へえ…私の事をまな板と言いたいのかッ?!」

「ツグ!! そうッ! 蹴る時はしっかりと腰を入れるんだ!」

脇の直ぐ下に鞭の如くしなった蹴りが叩きつけられる、身長差で脇も相当高いため意図せずハイキックとなり短いスカートが捲れ、中身が一瞬見えるのだ、白い無地に少しだけフリルの入った可愛いしいぱんちーでした、うへへ。

「私は篠ノ之箒だ」

「……………」

「あ、あれ? 私には何も…無いのか?」

「え? ああ、次どうぞ」

「おい、おい籐ヶ崎、おい!!」

「次、シャルりん」

「おいイ!!」

ノーコメ。

「ぼ、僕はシャルロット・デュノア、えと…デュノア社所属でフランスの代表候補なんだ、あとは、特に無いかな」

「趣味は男装だそうだ」

「違うよ?! 変な事言わないでくれるかな?!」

「次、らうりー」

「無視って…」

「私よりマシンだろう……！」

隠れ巨乳である、訂正、あった。

あと普通に常識人だからコメントが辛い、もっぴーはアレでも全力でいじってるんだ。

「私か、私はドイツ軍特殊部隊シユヴァルツェ・ハーゼの隊長であり、また、ドイツの代表候補生、ラウラ・ボーデヴィツヒ少佐だ、尊敬しているのは織斑教か……先生、それと一夏は私のよmむぐっ」

「ド、の付く天然さんだ、一般常識等々が殆ど無い、温かい目で見守ってやってくれ」

「なぜ口を塞ぐのだ、籐ヶ崎」

「凄まじい勢いで口論が発生しそうだったから、俺は面倒が嫌いなんだ」

ついでに丁度いい位置に頭があるので撫でておく、俺のナデナデ技術は凄まじい物だ、何せ人生一回分のアドバンテージがある上にナデナデ暦50年を越えているのだ、おじいちゃんに撫でられているかのような絶対的な安心感があるらしい。ソースは本音ちゃん。

「あー、じゃあ俺かな？俺は織斑一夏、えーつと……専用機持ちだけどどこの代表候補生でもないしどこの企業に所属しているわけでもない、んで……つと……ああ、それだけです、ハイ」

「クソ劣悪なEN値でブレオンのドMだ」

「ドMじゃない、専用機がドM仕様だったただけだ」

「……私は……まだ、更識簪……日本の代表候補……信一郎の……こい……つと」

「よし、じゃあいつちー、準備をしておけ」

「へ？」

「織斑一夏……！私は、あなたの事が嫌い……！」

「え、俺……何かした……？」

「あなた自身は……何もしていない、でもあなたの……専用機が作られた所為で……私の打鉄式は、放棄された……！」

「それは……ゴメン」

「でも、そのおかげで……私は、信一郎と……出会えた、それだけは……感

謝してる…ありがとう」

「あ、ああ…どういたしまして？」

「さて、歯あ食い縛れ、いっちー」

「おい待ってくれ、シン！ 何で左手を握ってるんだ?! 俺シンに殴られたら歯を食いしぼる以前の問題で一瞬で首から上が無くなる!!」

「冗談だ、精々デコピン程度にしてやるさ」

「あ、なんだ…それなら」

「壁に指埋まるけどな」

「やめてええええええええええええエエエツ!!!」

と、冗談もここまでにして簪の隣へ移動しついで来た面々へと向き直る。

「よし、じゃあついでだ、らうりーには自己紹介をしていなかったかな、俺の名は籐ヶ崎信一郎、世界最大の軍事企業であり、軍事だけでなく全ての企業で総合世界一、カラードの次期社長だ。現在の役職は特殊技術総合リーダー、プライマルアーマーの製作やアーマードコアの生産を担当している。

所属国は無い、日本人だし日本出身だがカラードのみの所属だ、それと奈良県出身、カラードのも奈良県なのは知ってるな？」

「シ、シン…ちよつといいかな？」

「言ってみろ、シャルりん」

『『アーマードコアの生産を担当』って…どういう事?』

「俺が使っている物のデチューニングを施した物を大量生産している、なんだ? コレ一つだけだと思っていたのか?」

「え?! そ、それじゃあ…!!」

「それは後で個人的に質問してくれ」

勘のいいシャルりんのことだ、どうせコアの数が云々などと言おうとしたのだろう、今の所感付いているのはシャルりんと簪と本音ちゃん…あとは、らうりーが疑っているかな?

せっしーはまた何か言い始めたみたいな顔をしている、信じてないのか、鈴音に至ってはポカーンだ、おい一応軍属。





簪が戦う前だけの会話。

鈴音VS簪

「信一郎、スナイパーライフル、貸して？」

「あいよ」

シヤルりんVS簪

「ハイレーザーライフルとグレネード」

「ほれ」

せっしーVS簪

「マシンガンとショットガン、お勧め…ある？」

「モタコブと重ショットでいいか？」

「うん」

らうりーVS簪

「パルスガンと…お勧めで」

「牽制用に散バズ、当たってもおいしい優れたもの」

モッピーVS簪

「ガトリング」

「重いぞ、かなり重いぞ」

いっちーVS簪

「レーザーブレード、瞬間火力と連続使用できるのが、いいな」

「あまりお勧めはしないけどなあ…」

最☆終★結☆果

「負けた、ほぼ完封された…」

「防御硬過ぎ笑えないよ…」

「固められてモリモリ削られましたわ…あれが打鉄シリーズの機動  
なんて信じられませんわ…」

「パルスに混ざってくるバズーカ怖…くない…やっぱり怖い」

「近づけない、酷すぎるぞ」

「ブレードで負けた…」

全員意気消沈、案の定勝てなかった面々達だ、だから時代遅れだつ  
てんだよ、○○が、○に腐れ。

「何故勝てないか分かる人、手を挙げて」

「はい」

「はいシャルりん」

「IS-1機普通に落ちるぐらいの銃弾を当てたのに落ちなかったチート染みた防御力」

「それは簪のISにPA発生装置とPA専用ジェネレーターが二つずつ搭載されているからだ、らうりーのレールカノンでようやく抜いてダメージを与えられるだろうな」

それと零落白夜、と付け加えるといっちーがじゃあ俺は勝てるんだなみたいな顔をする、お前さつきブレードでボロボロにされただろうが。

「はい」

「らうりー」

「∴的確に、我々の弱点を突いてきたから、だからか？」

「はい大正解、夕食のデザートを奢ってやろう。じゃあ今から説明するぞ？」

まず鈴音、武器が双天牙月と龍咆だから必然的に遠距離に弱くなる、鈴音にとつて一番相性が悪いのはせっしーだな、場合によっては手も足も出ない。

つぎシャルりん、これと言った弱点はないし戦闘技術も素晴らしい、だが第2世代の宿命で悲しいかな器用貧乏を体現してしまっている、今回は相手が悪すぎただけだ。

次せっしー、近距離に相変わらず弱い、いや改善はされているけどな？ それにせっしーのティアーズが軽量機仕様だから衝撃でエラーが発生しやすい、重ショットで動きを止められてマシンガンで削られる、おまけで速射荷電粒子砲で狙われ速さで翻弄されドン！だ。

らうりーは、と言うよりレーゲンは極端にEN兵器に弱い、AI Cに頼りがちなのを何とかした方がいいな、あとは武器が近距離と遠距離のみなのも問題だ、ライフルかなんかを拡張領域に入れることをお勧めする。

モッピー、訓練機なのが唯一最大の問題点だ、臨海学校まで耐えろ。

「いっちー、お前の敗因はたった一つ、おめーは簪を怒らせた、それだけだ」

「わ、私と一夏投げやりすぎないか?!」

「なるほど、そうだな、この際プライドは抜きで中距離武器を入れてみるのもいいか…」

「わたくしはまだまだ訓練が足りないと言う事ですわね…」

「僕どうしようもくない?」

「戦術を考え直さなきゃ駄目ね…ありがと、シン」

「…なあ俺凄い事に気付いた、シン、戦ってなくね?」

『あ!』

何だ、どうしたと言うんだ…俺の問題点を探ろうとでも言うのか?!

「きひ、キヒヒヤハハハハハハハハハハハアツ!!! なんだあ?! 俺の

粗探してもするのか! いいぜ、面倒だしなあ、6人で掛かって来い

!!」

「言ったな、今の内にいい訳でも考えておけよ、シン!」

「えっと、更識さん…はどうする?」

「私は、信一郎と一緒に戦う」

「OK、じゃあお遊びは無しだ、カツコイイ所を見せたいからな、ガ

チで行かせて貰うぜ」

「チェンジ、アーマードコア、グレガトキノコ」

右背にキノコ

左背に重ガト

肩にPA制波装置

外装コア以外雷電

コアがアルギュロス

FCSライール

ジェネ・アルギュロス

サイドブラスター・クーガーの重ブラスター

OBがソブレロ



真正面からカーパルス占拠をS取ることの出来るガチ装備だ場合  
によってキノコをコジマキャノンにすると良し。

「さて諸君、ガチ機のお披露目だ、派手に行こう!!」  
試合開始を知らせるブザーが鳴り響いた。

お互い好きにやってそのお願いは聞けないが水着は  
買いに行くお話

「さて諸君、ガチ機のお披露目だ、派手に行こう!!」

直後上へと、相手よりも高く飛び、まずいつちーをロックする。

「さて、一応天敵だからな。騙して悪いが勝ちたいのでな、墜ちても  
らおう」

「げっ、マジかよ!!」

『信一郎……、どうする……?』

『お互い、IS・AC乗りだ、連携も無いだろう?好きにやれ…俺も  
そうする…』

『頑張つてね……』

ガトリングとグレ腕をロックしている限りトリガーハッピーよろ  
しく撃ち続ける。

「ぎゃあ?! ちよっ、あぶな!!」

「い、一夏ッ! こつちに来るな! 流れ弾にあつ」

「ああつ! 箒さんが!!」

「クツ…仇は取るぞ…!!」

「まだ落ちてないっ!!」

お互い連携も何もないが流石にコレは酷い…散々じゃねえか…!

簪はシャルリンと鈴音を相手にしているな、少しきつそうだ、鈴音  
はともかくとしてシャルリンが合わせるの巧いんだよ、だから自然に  
鈴音に合わせて連携を取るからキツイ。

「4人相手だとアサルトアーマー使いたくねえなあ…」

「食らえッ籐ヶ崎!!」

ガキユイーンつと軽快な音を出してレールカノンの弾が明後日の  
方へ飛んでいった。

対ネクスト戦なんて想定できるわけ無いからPAをぶち抜くには  
技術のすれ違いがある、だからよしんば抜けたとしても減衰が凄まじ  
い上単純にバカみたいに硬いガチタンに弾かれるのだ。

「そんな?!」

「くっ、ならば行きなさいブルー・ティアーズ!」

EN兵器はいい選択だ、PAをぶち抜くのに適している、が!

ビットではPAを抜いても減衰がやはり凄まじいし、なにより制波装置でPAを強化しているんだからな!

ガトリングでいっちーを狙い続けながらノーロックで腕グレをせっしーに向け、発射!

「つくうう!!」

「ほう! ビットを操作しながら回避できるようになったのか!」

「あまりわたくしを見くびらないで欲しいですわね!」

「だっ駄目だああああああ!!! もうエネルギーがああああああつ!!」

そりゃクイックブースト紛いにイグニッションブーストの小規模版を何度も使つてりやENなくなるわ。

「ちつくしよおおお!! こうなりや自棄だ!! くだばれっ!

シイイイイイン!!!」

「乙」

半泣きでブレード(非零落白夜)を構えて突っ込んでくるいっちーの顔面に腕グレを命中させて叩き落す。

「やっぱりかああああああああつ!!!」

「一機落とした、これで二千万は死んだ」

「ああつ、一夏さんがやられましたわ!」

「くっ、よくも嫁を!」

「食らえエエエエ!!」

モッピーがマシンガンを乱射しながら刺突を行ってこようとするのでとりあえず引きつけて右にクイックブーストで回避。

「あつ…」

即座にクイックターンでモッピーの背中にガトとグレをありったけ叩きつける。

「くっ、くそおっ!」

「流石打鉄、実弾防御力が高いな」

「来るなっ！ 離れろ！」

クイックブーストでモツピーを追いかけつつグレで止めを刺す。

「イヤーン！」

「四千万」

「仕方ない、オルコット！ 私が前衛になる！ 後衛は任せた！」

「分かりましたわ！ 籐ヶ崎さんに目に物を見せてやりましょう  
！」

「マハハハハ！ あまり俺を…舐めない方がいい!!」

直後にオーバードブーストで時速千キロオーバーへ、らうりーをクイックブーストで避けせつしーの目の前で急停止、せつしーが回避を始めるよりも早く自爆覚悟でグレガトを一斉掃射、軽量機の宿命をたっぷりと味あわせて落としてやった。

「六千万…！」

「そんなバカな?!」

さてさて、前々から疑問だったんだがらうりーのAIC、限界停止数は幾つかな？ 限界処理能力はどれだけかな？

「E K L A K H | A R M S (腕マシ) 右背部 G A N O 1 | S S | G C  
(ガトキヤ)」

「なにっ?!」

「見せてみな、お前のチカラ (限界) をさ…」

俺の前方への視界がマズルフラッシュでほとんど何も見えない程の狂連射性能でらうりーを狙う。

勿論競技用ISなぞ5秒と持たないだろう。

「う、ぐう…うあ…だ、めだっ…!!」

「ハッハアーツ!! こんだけ近いのが運の尽きだなあ!!」

「あ……」

オーブンチャネルで聞こえたか細い声と共にロックオン不可になる、ふむ、5秒マイナスしたら12秒か、中々耐えたな。

「八千万！」

直後両肩にコジマキャノンを出しチャージを開始する。

威力をかなり制限しているのでほんの数秒でフルチャージ完了、威

力は所詮競技用だ。

ロックオンせずマニュアル操作で簪と戦っているシャルリンを狙う。

オーバードブースト・クイックブーストで自分（発射台）を加速しコジマキャノンを発射、スナイパーライフルと謙遜ない速度で緑の光が走った。（ゲームはミサイル以外で発射台加速は出来ません、たぶん）

シャルリンが気づいたときには時既にお寿司、人間の反応可能速度及び距離ではなかった。

「え？ あれ？ そんな…ロックオン警告が…無かった？」

「一億!!」

「んうえ?! もしかして…1対2…?」

「そうさね」

「覚悟して…:…ね?」

「お手柔らかに、お願いします」

につこりと笑う鈴音を見て簪と顔をあわせ、二人で笑顔を作り話し始める。

「そのお願いは…:…!」

簪の山嵐一斉発射で鈴音が涙目になり。

「聞けないねえ!!」

俺のすれ違いAAでシールドを引っぺがし、鈴音が「ふにやつ!」と鳴く。

直後ミサイルが着弾し…

「にゃああああああああああああああああん!!!!!!」

鈴音が泣いた。

~~~~~

「何故だ、何故勝てない! 6対2、3対1…:…いや、4対1だったんだぞ?!」

「生身の人間が4人タバになった所でISを落とせないのと一緒に、単純なスペック不足だよ」

「一発も当てられなかった…当てられなかった…」

「いい気味……」

「ふぐおあ?!」

食堂で反省会という名の愚痴り大会が行われている。

俺の反省かー、機体が強すぎる事かな！ それに対して俺があんまり強くない事かな！

ちらりと横を見ると本音ちゃんたらうりーが並んでもきゅもきゅと夕食を頬張っている。実に癒される光景だ。

らうりーの頭に手を伸ばし撫でてみると一瞬ビクリと震えたが徐々に目を細めて気持ち良さそうに俺の攻撃（撫で撫で）を受け入れている。無論食事は続けたままで。

「シンにー、私も〜」

「あつ……」

「こ、困ったぞ……」

俺が手を離すとらうりーが何とも言えない声を出した、生前お爺ちゃん子な孫娘がもつと撫でて欲しいけどおじいちゃんを困らせちゃ駄目だから言い出せない時の残念そうな声。

片腕はゴツゴツの鉄塊だからとてもじゃないが撫でる事なんて出来ない、右腕でしか…撫でれないから…二人を相手に出来ない…！

「は、初めてだ…！俺の左腕が義手である事をこれほど悔やんだのは…！」

「シンって腕のことに関してあんまり悩み無かったんだね…」

「なあシャルりん…」

「何かな？」

「らうりーの事お願いするわ」

「な、撫でろと…?」

そうだ、同室であるお前が…お前がなすべき事なのだ。

理解できんと見える…ならば教えてやる、決定的な違いと言う物を  
!

「うりうり」

「うゆゆ、はふう〜」

「な、なーでなーで…?」

「ん、む…何か…違う」

「え?!」

「何と言うのか…籐ヶ崎のほうが落ち着くし、安心する」

「そんな…」

~~~~~

ねくすとでい

俺が自室に籠っているとノックの音が部屋内に響いた、ラフな格好のままドアを開けると簪が部屋の前に立っている。

始まりはこの一言から始まった。

「信一郎…、付き合って…欲しいの…、いい…?」

本人同士の勝手な約束だが婚約しただろう、今更付き合つてとは何事…まで考えて理解する。

「あー、買い物か」

「うん…いい…、かな…?」

やだー、僕ちんつたら自意識過剰ネっ☆

おお、デートだデート、婚約してから初めてのデートだ、そういや日曜だったっけか?

いかんな、義手に無駄機能を追加するのが楽しくて忘れてた、ちなみに今回追加したのはフリーブースターと言う物である、ググっても多分出てこない、なぜなら俺の創った言葉だから。能力で言葉も創れる!

「説明しよう! フリーブースターとは左腕肩部から発せられるブーストで右に進むだけではなく謎技術により左に進む事も出来るのだ! むしろ上下左右どこへでも進めるのだ!」

「どう…したの…?」

「生身でもクイックブーストが出来るように義手を改造した」

「なに…その…、謎技術…」

簪げんなり、俺の意味不明行動は今に始まった事ではないだろう、まあそんな事より早く行こうじゃないか!

多分場所はショットピングモールだな、うふふ、楽しみだ。

「よし簪、動きやすい服をして行ったほうがいい、ズボンが一番好ましいな、あと長袖だ、通気性が高い方が今はいいかな？」

「……う？ わかった……、じゃあ……部屋で待つてるね……」  
と、部屋から遠ざかって行く簪を温かい目のつもりで眺めながら扉を閉める。

さて、着替えるとするか、生憎量子変換にお目当ての服は入っていないので一々自分で着替えなければならんが、まあ仕方ない。

簪を選んで貰った革のライダージャケット、それに合わせて黒のライダーパンツ、ライダーブーツを装着。

シン普森のヘルメット、型式SB13とライダーグローブを持ってイザア☆

簪用のOGKのジェットヘルメットも忘れないように……

んでこの一式装備を量子変換で一時的に収納しておく、量子変換で収納してあった別の私服を呼び出して部屋を出る。

「こんにちわ、籐ヶ崎君。少しいいかしら？」

部屋を出て目の前に生徒会長が立ってたでござるの巻。

「よくない、俺に用を作る前に簪と仲直りすればいいのに」

「うぐう……!! じ、実はその簪ちゃんの事で少し話が……!」

「簪が会長の事を「更識先輩」と呼んでいたわけだが」

「しやらしきしえんぱい?! 完全に他人?!」

「ん、急がなきゃな。じゃあ俺はコレで、お義姉さん」

「あげない……あげないわ、あなたに簪ちゃんはあげない!!」

殺してやる、殺してやるぞ! と言い出しそんな雰囲気で佇む楯無

……たてなし……たつてー、否、否。

たつしー、うむ、たつしーを置き去りにして全力ステップ+ブースト、その速度は時速100キロを越えるのだ!!

「うおえ……、ぎぼぢわるい……」

『当たり前です。生身で時速136キロまで一瞬で加速すれば普通の人なら気絶するか死に至ります』

「あい……」





毎度毎度ここで止められて身体検査をされる、そろそろカラードの手を回した方がいいかもしれない。俺の☆学園★ライフ☆のためにも。

「そうだ、簪」

「何……?」

「会長が俺に話があるって言ってたんだけど、まあそれは別として」 たっしーの事を話しに出した途端物凄く不機嫌そうになる簪、ふむんむ。

「仲直りしないのか? そもそも最初は何で避けてたんだ?」

「最初は……、ただの劣等感で……更識先輩と比べて……、自分が……、惨めに思えるから……避けてた」

「ほう」

「でも……、私は私……。教えてくれたのは……、信一郎だから……、今はもう……、大丈夫……」

「ならばもういいんじゃないか?」

「だけど……、更識先輩は私と信一郎を……、利用しようとしたから……信一郎に謝るまでは……、絶対に許さない……!」

「だそうです、ああいや、別に俺がそう言った所で何も変わることは無いんだけどな。」

「んー、まあいいや。じゃあレゾナンス行くか、HUD（ヘッドアツプレイスプレイ）起動」

「どうしたの……? 早く駅に……」

量子変換で入れておいた俺のバイクを呼び出し、ライダースタイル一式を纏う。

「え、ええ……、バイク……?」

「ほれ、簪のヘルメット」

「う、運転……、出来るの……?」

自慢じゃないが生前は大学へ行っている5年の間ほぼ毎日走ったりそれ以外は趣味でツーリング行ったり、今生では学園に来るまでカラードの敷地内で好き放題走っていた。

だからこの運転でこの籐ヶ崎信一郎に精神的動揺による操作（コン

トロール)ミスは決してない!と思っていただこうツ!

自分のメットを装着し、グローブを着ける、まわりの人間が珍妙不可思議な物を見ているような表情をしている、無理は無い。

いきなり何も無い空間からバイクが出てきたり一瞬で服装が変わったり、カロードと俺の関連性が分からない人間にとっては最早魔法だ。

「うーん、我が愛しのフルノーマルホーネット250。二人乗りのステップを下ろして跨ってくれ」

「ステップって……、これ……?」

「そう、それ。メット被った?」

「うん……」

「ちゃんと締めた?」

「締めたよ……?」

先に俺が跨ってエンジンを掛ける、ふいーんふいーん、うむ、安っぽくて特徴的な懐かしい音だ。

「そこに左足乗つけて、俺の肩を掴んで跨るんだ。よし、そう」

「た、高いね……、足が届かない……」

ホーネット、愛称「骨or蜂」はシート位置から地面まで中型バイクでは低い方だ、まあ後は少し上に上がってるから多少高くは感じるだろうが……それでも大型に比べて低い……と思う。

まあ考えてみれば簪がちっちゃいだけなだけだな!

「ふいふいふいん、いいぞ……冴えてきた。しっかり掴まっとけよ?!

「あ、あのあの……、えと……」

「世に平穩のあらんことを! ハッハー! まだまだ行けるぜ、メルツエエエエエエエルツ!!!」

「ひゃ、ひゃ……!」

ああ、ご心配なく。ちゃんとウィンカー出して後方確認して道路に入りましたんで、速度も法定速度しか出してないし道路交通法はたった一つ以外守ってます。

「……んい……!! め……きよ……く……!!」

『わりい、走ってる時は全然聞こえないからプライベートチャネル



「えつと……水着……、買いに来たの……、えと、その……信一郎に……見て欲しいな、って……」

「ああ、そうか、そういやそうだったな。全然ちっぷーの話聞いてなかったわ」

臨海学校だったつけ？ あれ？ なんかもつと長くてクソ面倒な名前だった気がする。

「信一郎も……、買う……？」

「ん、そうだな。俺も探すかな」

「じゃあ……、決めたら……、連絡する……」

「おう」

簪が女性用水着売り場に消えたのを確認して男用水着売り場へと脚を踏み入れる、女性用の場所と比べて実に肩身が狭そうだ、まあ元々男が水着を選ぶのにこだわりなど多く持つ事が無いからこれぐらいで丁度いい。

さて、どの禪にしようかなあ……んお、クソ地味な紺色海パンを手にしたアレはハーレム野郎のいちーではないか！

「よう、首輪付きイ、信一郎だ。クレイドル03（女性水着売り場）を襲撃する、付き合わないか。変態の連中ヌル過ぎる。視姦など、結局は（羞恥心を）殺すしかないのさ……だろう？」

「おお?! つと、なんだ…シンかよ。驚かせんなって」

「なんだ、今日は誰とデートだ？ シヤルりんか？」

「シヤルと来たけど、別にデートじゃねえよ」

「世間一般ではそれをデートと言うんだ。ところでいちー、赤フンと白フン、それか黒フン、どれが似合うと思う？」

「禪オンリー…新しい、惹かれはしないな。無難に普通の海パンにしとけよ」

「そうだな、オリーブの海パンにトップレスで行くか」

「逆に男でトップレスじゃなかったら特殊な競泳水着じゃない限りキモイわ」

「アンダーレス……」

「おいばかやめろ」

やったねいちか！ 変態が増えるよ！

「じゃあ俺はもうこれ買って行く、じゃあなシン」

「見事な引き際だな」

『追撃しますか？』

「慌てるな…次も敵とは限らんだろう」

オリーブカラーのスィー（海）ペエンツ（パン）を手に持ちつつI  
BISとぶざけ合う。

さてさて、俺も早いところお支払いを済ませて店を出るかな。

「カードで」

「はい、畏まりました」

ここの店員は別に驚いたりしないのな。驚かれても困るんだけど  
さ。

店を出てHUDを起動、バイク運転時に使用していたナビゲート  
モードからターゲットサーマルモードにする。特徴を指定したデー  
タを入力すれば80%以上の一致率からその人間が視界内に入った  
とき熱源反応としてディスプレイに映される。

入力するデータは「銀色の髪」「眼帯」「小柄」の3つ、勿論らうりー  
を探す気満々れす。

余談だが「武器を所持」「友軍以外」で索敵も出来る、カラードの私  
兵部隊全員に持たせている機械でもある。

女性用水着売り場で熱源反応、サーマルモードを解除、スコープ  
モードに移行、目視完了。らうりーみーっけ☆

「でれっでれっ、でん、でん、でんでれっでれっ」

ピンクパンサーのBGMで気分はコメディ映画のスパイシーン、勿  
論歌いながらだと一瞬ではれるので心の内にとどめて足音を立てな  
いように移動。

義足を静穏歩行モードにしてらうりーの背後へと蛇のように静か  
に、獲物を仕留めるかのごとく確実に、着実に一歩ずつ。

「どこに行ったんだ」

「わたくしに聞かれましたも困りますわ」

「あつちから一夏の気配がする…」

「……………クヒツ」

いきなりらうりーが振り向くと同時に鋭利な物を俺に突き刺そうとしてきた、心臓が口から出るんじゃないかってぐらい驚いて左腕で咄嗟に防御する。

「クツ…!! 貴様、何も…の?」

一飛び飛び退いて直ぐにハンドガン(P8〔USP〕)を俺に突きつける。が、直ぐ疑問符にセリフが変化し、ゆっくりと銃口が下ろされる。

「…驚かせるな」

「俺もその言葉を返したいよ、らうりー」

「ら、らうりや? にやんでナイフと銃持つてんの…?」

「なんだ、代表候補、国家代表で専用機持ちは個人携行武器の所持及び任意使用が許可されているぞ、知らなかったのか?」

「…わたくしも、思わず構えかけましたわ」

「え? え?」

「無論俺も持つているがな」

そう言つて両足の太股周辺を両手でポンポン叩く、この中にナイフが納まっているのだ。

「ナイフを返せ、籐ヶ崎」

「関節に入り込んでるな、上手いもんだ。ほら、らうりー」

「無意識でも敵の弱点に攻撃を出来なければ特殊部隊の隊長などやってもらえん」

「わたくしなら眉間を撃ち抜きますわね」

「こわい、こわいよお…このひとたちこわいよお、たすけていちかあ…」

中国では武器の携帯を許可されていないのか?

それとも鈴音がただ単に対人戦闘を想定していなかったか。

あとどうでもいいかもしれないが駅で身体検査の際に専用機持ちであることを証明書なりなんなりで示せば武器の携帯は許可される。それでいいのか日本。

「信一郎…? なにしてるの…?」

「おお？ 簪か、もう買ったんだけどな、何か集まってる面白そうだったからちよっかい出してた」

「そう……」

なんだか妙に不機嫌そうだ、簪の手には大人しめで明るい色の水着がハンガーに一式引っ掛かっている。

「じゃあの、俺は今日簪とデートだから、とつとと撤退させてもらおう」

「見事な引き際だな」

「追撃する？」

「慌てないで下さい、次も敵とは限りませんわ」

天井、俺がもうやったネタだ、多分こいつらは無意識だが。

「あの……、信一郎……これ……、どうか……？」

「ふむ、ふむふむふむ……いいな、実に可愛い、だが一般男性が居る所で着て欲しくはない」

「どうして……？」

「簪は俺のものだ、俺のものだ！」

独占欲程度は俺にだってあるんだぜ？

だが思い出して欲しい、俺の総合年齢は齡100を越えている、一世紀以上生きているおじいちゃんが高校一年生に恋をした、歳の差90近くの恋。

不思議！ 感動大作！

「あう……、恥ずかしい……」

「じゃあ買って帰るか？」

「うん……」

簪に付いて行こうとしたら先に外へ出て待って欲しいと言われた、俺の立場が無い。

外のベンチを某やらないかさんのように占領していたら見知った顔を発見した。

「お、フランとレイじゃん、デート？」

我がカロード所属のフラン・バツティ・カーティスとこれまたカロード所属専属傭兵のレイ。



偽名だそうで本名は分からない、フランは知っているそうだが教えてくれない。肝心の本人も無口なので分からない。

「はい、そうなんです！ 彼が久しぶりに日本に帰ってきたのでデートしていただきます！」

「……………」

また、レイは量産タイプのACを所持しており、ついでに言うトドミナントだ。

あとココでおまけ、量産型ACはISと1対1なら互角で戦える代物で量産タイプの見たい目は俺のようなパワードスーツタイプではなく全長10メートルほど（TYPE-Vは5メートルほど）の本来本元ACである。

公にはなっていないがカラードの戦闘要員は一人一機所有、俺の希望でVRアリーナがあり、ACタイプ（ネクスト・V・旧作）により分けられ上位30ランカーには希望のチューンアップが施される。

Vランキングのトップランカーがこのレイなのだ。

総合ランキングのトップが俺だがどう考えても機体性能でトップなだけだ、同じ条件で戦ったらトップ10にさえ入れないと思う。

「つまりはカラードに戦争を仕掛けるのは自分の首を絞めるどころかレーザーブレード振ってるのと同義だな」

「……………」

「では私達はデートに戻ります。更識さんのこと、大事にしてあげてくださいいね。信一郎さん」

「おう、勿論だ。お二人さんもお互いに優しくな」

腕を組んで歩き去る二人を眺めながらふと思う。そういやあの二人って10歳以上年齢離れてるんだっけか。

○リコン（余談だがACVではデフォルトキーアサインの場合○ボタンでリコンを射出する）とは言わんよ、ブーメラン投げてる気しかせんからね。

『信一郎様、少し希望があるのですが』

「んお、なんです？」

『私が使用可能な外部ヒューマンユニットが欲しいのです。よろし

ければ製作しては頂けないでしょうか』

「あー、はいはい、いいですけど臨海学校以降でいいですか？」

『はい、構いません。では首を長くしてお待ちしております』

首を長く…か、実際首を長く出来るボディを創ってみても面白いかも知れん、なにせIBISはAIなのにジヨークも分かるし感情も持っているからな。

「信一郎……、ただいま……」

「うお、おかえり。早かったな、言葉は不要か」

「じゃあ……帰ろつか……？」

「うっし、じゃあバイク出すぞ」

「電車で……」

「え、いや…バイク「電車……ね？」

はひ、怖いです簪さん。

どうやら簪にとってバイクはお気に召さなかったらしい、ライダーとしてはとても切ない気持ちである。

ならなぜ簪がバイクを嫌がったのか考察してみよう。ふむむむむ

！

はい、免許取得1年以内での二人乗りという道路交通法違反ですね、わかります。

「じゃあ……、駅行こつか……？」

「h a i！」

夏（なの）だ（ろうか？）！海だ！水没だと?!馬鹿な、コレが私の最後と言うか！

女将さんマジドミナントで実力を良く見ておくと水没王子……最高に危険だよ、お前は

「こちらアルファー1 海、目視確認しました」

「了解、アルファー1、こちらでも確認した。デルター3！ 全部隊へ伝達！ 目標を確認、直ちに最善の装備を！」

「こちらデルター3！ 全部隊へ伝達！ 目標を確認、目標まであと少しだ！ 装備を直ちに整えろ。繰り返し、目標を確認、到着まであと僅かだ！ 直ちに装備を整えろ！」

「チームブラボー、了解した」

「チームエコー、任せなさい！」

「チームチャーリー了解、おい聞こえたな！ 今すぐ準備しろ、でなければ死ぬだけだ！」

「あはは、皆テンション高いねえ」

「…うずうずそわそわ」

「ラウラ、飴舐める？」

「ん…う、うむ…」

冒頭のはテンション振り切りすぎてヤバくなった女子生徒のおふざけであり、決して裏で悪の組織がIS学園の臨海学園に合わせて何かしようと画策していたわけではない。

らうりーはらうりーで何か物申したかったのか混ざりたかったのか、うずうずしてサバゲー部の面々を見ていた。

そしてシャルりんが言外に「ゴラツ、あんなの見ちゃいけません！」とても考えていたのか、らうりーに飴（ブドウ味）を渡して興味を他に向けさせようとする。

「へい、シャルりん、随分と嬉しそうじゃねえか。いっちーのプレゼントがそんなに気に入ったのか？」

「う、うわっ！ びっくりした…うん、えへへ、すっごく嬉しい」

「そうか、シャルが満足してくれてるなら俺も良かったな」

「……………(カロコロ)」

考え込みながらも飴をコロコロ舐めて、微妙に嬉しそうにしているらうりー超らぶりー。

「シャルりん、良かったら俺にも飴くれよ」

「うん、いいよ。はい」

「おお、サンキョー…※サルミアッキだこれー?! え?! てかスゲー!

袋入りのサルミアッキとか始めて見たぞー!」

※サルミアッキ フィンランド周辺ではポピュラーな飴であり、また「世界一不味い飴」とテレビ番組で紹介された事もある通称「黒い悪魔」

原材料にNH<sub>4</sub>Cl、要するに塩化アンモニウムが含まれており、味は強い塩味があり、またゴム味らしい、風味はアンモニウム臭が凄まじく薬草も含まれているため独特の苦味もある。

簡単に言えばマズイ、との事だ。

勘違いして欲しくないのはフィンランド周辺では美味しいと言われている。彼らの舌がおかしいのではなく感覚の違いである事を忘れないで頂きたい。

日本人にとつての納豆のような物だと思ってくればありがたい。などとウンチクを垂れているといつの間にかいつちーがらうりーに顔面を押し返されていた、何をしたんだいつちー。

「まあいい……………食うか」

袋の端っこを人差し指と親指で摘まみ、飴を押し出す感じで力を入れるとクラッカーみたいな音を出して袋が開く、一度お試しあれ。

ぐいと力を入れたらパンと音が鳴り袋が開いた事を俺に知らせると同時に力を入れすぎていたのか黒い飴ちゃんがフライハイしてバスを飛ぶ。

「向こうに着いたら泳ごうむっ! つぐ?!」

運悪く阿呆みたいに口をポカンと開けていたいつちー、ボール(サルミアッキ)を相手(いつちー)のゴール(口)へシュウウウツ!!  
超! エキサイティン!!

「なっ、コレ…塩?! あっ、ああ……マズイ……」

「いっちーがズウンと暗くなり頭を抱えて肩を落とす。

「どんな不味さ?」

「不味いけど吐き出してしまうような不味さじゃなくてこう、テンションが下がる不味さ」

「えー! 美味しいじゃん! サルミアツキ!」

「うるせえフィンランド出身ゴーヤ口に捻じ込むぞ」

「マジ勘弁」

「まーさんあんに、ゴーヤー」

「ちよつと何言ってるか分からないですね」

「等といいつつテンションダダ下がりはいっちーに未開封の濃いお茶、おい味を渡す。

「それを受け取るや否や蓋を開け一本丸々飲み干す勢いで、てか飲み干して深呼吸をする。」

「あゝ、このスツゲエ苦さのお茶が最高、サンキューなシン」

「おお、無事で何よりだ」

「そろそろ目的地だ。全員席へと座れ」

~~~~~

「説明する。ここが本日より3日間お世話になる花月荘だ。全員従業員の皆さんに迷惑を掛けないよう注意しろ。特に籐ヶ崎、お前だ」

「二よろしくお願いしまーす!!」

「やんなっちやうね、名指しつてさ」

「あら、こちらの方々が噂の…?」

「はい、私の可愛い可愛い愛する弟と、一応男子生徒です」

「あら、嫌だわ。こんな美人捕まえてオカマだなんて、うっふ☆」

「シン! せめて声を作つて! 壮絶に気持ち悪いよ!」

「うふふ、皆さん元気があってよろしいですね」

「この女将さん…出来る!」

「今年は男子生徒が混ざって浴場分けが面倒になってしまい申し訳ありません」

「いえいえ、いい子ではありませんか、しっかりとそんな男の子と  
がっしりしてそんな男の子な感じを受けますよ」

「織斑一夏です。これから3日間よろしくお願いします」

「よしよしよし！ 流石は一夏だ！ しっかりとるぞ！ 偉い  
な、大好き！ 愛してる！」

「こちらホワイトグリンツ、ジョシユア・オブライエンだ、救援に向か  
う。持ち堪えてくれ」

「はい、籐ヶ崎信一郎さんですね」

女将さんドミナントなう。

「清洲（きよす） 景子（けいこ）です。こちらこそよろしく願  
いますね」

「この籐ヶ崎が迷惑を掛けるかもしれませんが、その時は私に言  
って下さい」

「うふふ、では皆さん、お部屋にどうぞ。海に行かれる場合は別館で着  
替えられるようになっていきますので、そちらをご利用下さい。場所が分  
からなければいつでも従業員に訊いて下さいね」

すると皆揃ってわらわらと旅館へ入って行く、こんなに大量に突っ  
込んでいたら詰まりそうなもんだが不思議とスルリと抜けて行く、全  
員アサシンなう。

「シンにー、おりむー、お部屋どこなの？ 一覧に書いて無かったか  
らねく遊びに行けないの〜」

「いっちーは何かしらあるんだろうが俺は全く分からないんだ、下手  
したら廊下の隅にシユラフ（寝袋）がボテンと置かれてるかも」

「だったら一緒に寝よう？ かんちゃんも同じ部屋だよ〜」

「いや、駄目だろ。千冬姉が許さないって、のほほんさん」

「一夏の部屋はお姉ちゃんと相部屋だ、ふふ、嬉しいな。嬉しいなっ」  
「ちっふー、俺の部屋は？」

「ん？ 籐ヶ崎は個人部屋だ、お前なら女子が突入してくる事も無い  
だろう」

「へえあ！」

妙な信頼を置かれている俺を置いてちっふーはいっちーを輸送し

て行く、置いて行かれた俺は仕方ないので部屋に行って無い荷物を置いて海に行こうと思うのだが…

俺自分の部屋知らねえ…

「シンにー? どーしたの〜?」

「うん、部屋の場所聞いてなかった」

「わあ、困ったねえ〜」

「困ったな〜」

「あ、あの…籐ヶ崎君? こんな所でどうしたんですか?」

本音ちゃんと二人揃って声のした方向を見るとオドオドした様子で真耶たんがこつちを見ている。

仲間にしますか?

YES

↓NO

「先生は、わが一組の…好都合だ、質問をしようか! 俺の個人部屋は何処か?」

「え?! あ、す…直ぐそこです、けど」

指差す方向を見ると右斜めうしろの襖に張り紙がなされている

「籐ヶ崎信一郎様」だと…

「あはは〜シンにーつたらうっかりさんだあ〜」

「んふーふ、これぞ灯台デモクラシーってな」

「あ、では私は織斑先生に用があるので失礼しますね」

「うい」

「…じゃあ俺は先に海行つとくかねえ…」

「私もかんちゃんと後から行くねえ〜」

相も変わらさずダボンダボンの袖を振り回してトテトテと駆けて行く本音ちゃん。こけたりしないかホント心配だ。

く く く く く く く く く く く く く

…なんか地面にウサ耳生えてる…怖い。

怖いから誰も見ていないのを確認して能力で付近に量産しておくと思います。

ぼちーん ぽむ ぼちーん ぽむ ぼちーん ぽむ………

「最終結果、調子に乗りすぎて40個以上生やした上に完全ランダムに配置してしまった」

うむ、と頷いて満足していると俺の超良い聴力がいつちーとかその他諸々の声を探知する。

俺が居ると俺がやったとバレるので早々に離脱。

離脱だ！ 離脱する！ 無理だぜこんなの、アンタもそうしろよ！ そっちの方が絶対良いって！

更衣室で着替えなう。つってもただ服を脱ぐだけなんだけどな…  
せつかくだから夏場にピツタリな服装でもしようか、しよう。

アロハシャツ着てサングラス掛けるだけ、手間要らず！ ステキ！  
でもアロハシャツもサングラスも持ってない！ ムネン！

ところでいつちーはまだ来ないのだろうか、あのモツピーの姉に捉まっているのか、それともいつちーの姉に捕まっているのか。

もし後者ならいつちーのご冥福を祈るとしよう。

エイメン

A m e n…

く く く く く く く く く く く く く く く

「シンにー！」

「信一郎の事だから……、はしやぎ回ってると……思ったんだけど……」

「来たか、二人とも可愛いじゃないか」

木陰で座りながら水着の女子達と海を見ているといち早く俺の存在に気づいた本音ちゃんと言が寄って来る。

目を向ければきぐるみを纏った本音ちゃんと普通ながらも簪の雰  
囲気に合った水着姿の簪。

暑くないのかと非常に心配ではあるが、暑そうな気配は本音ちゃん  
本人から微塵も感じられないし別にいいかな…

「でしよでしよ〜」



「ありがと……、泳がないの……？」

「泳げないの、腕と足が重すぎるし浮力なんて一切得られないからな」  
「そう……、でも何で木陰に……？」

「この炎天下で直射日光を受け続けると金属である俺の手足が凄まじい熱を持ちます。もし外したとしても接合部は義股、本体両方とも金属故に……」

簪が悲惨な物を見るように俺を見てくるので少し本気出す。一度やってみたい事があったんだ、人間って本気で走ったらどれだけ水上を走れるんだろう！

「ちよつと走ってくる。簪、ドミナントである俺の実力、よく見ておくんだな！」

「え……、ええ……？」

脚部リミット解除、PA発生装置よりPA発生、出力を調整……円錐形に発生、AC非視覚化起動、身体機能サポート………全条件クリア

k 海までの距離、凡そ70メートル、予測海面到達速度……時速237

クラウチングスタートの体勢になった時に視界の端っことで鈴音を肩車してるいっちーを発見、いっちーは相も変わらず無自覚ハーレムらしい。

とりあえずそれは置いてさあ走るぞ、走っちゃうぞ……3、2、1  
視界が加速、中心点以外がただ色の付いた線になって視界を走り抜ける。

アレゴリー・マニピレート・システムから光が逆流する……！  
ギヤアアアアアアアアアアアアツ!!!

視界がぐらりと変わった瞬間にPAを球状にして展開、球状の空間が発生し水面を物凄い勢いで転がり球状を維持したまま減速、水中へと落ちて行く。

ACの身体機能サポートで冷静な頭のまま直ぐにPA解除で流れ込んでくる海水から守り、呼吸を確保するために頭部パーツ「H07-CRICKET」を展開。

オープンチャネルを無駄にONにする。

その後PAが直接的なダメージを与える物ではないと認識した海水がゆつくりとPA内を侵して行くのを確認しながら。

「メインブースターがイカレただと！ よりによつて海上で…クツ、駄目だ、飛べん。…浸水だと！ 馬鹿な、コレが私の最後と言うか！ 認めん、認められるか…こんな事…!!」

と、ここでACのモードをステルスモードに変更、後は凡そ200メートルほどの距離、海底を歩いて陸へと移動する。

泳げはしないけど歩きは出来る、出来る事を出来ず普通出来ない事を出来るとは…

ぼりゅーむすりー、あるくようなはやさで。

再誕して君思フ声が歩くような速さでなんですネ、わかります。

そろそろ水面から頭が出るのでゆつくりと上がって行く、まず視界に映った知り合いはいっちにサンオイルを塗って貰っている驚愕の色に顔を染めたせっしー。

「?!」

「どうした？ セシリ…あ?!」

「いちかーいちかあー、構ってよー、寂しいと死んじやうよー」

「り、鈴…何かあつちに…」

「? なにy…ひにやああああああああつ!! バケツからからだが生えてりゆううううう?!」

『全ては私のシナリオ通り…残るは肉膜による幕引きだ』

「いや、待て! あの腕と脚を良く見ろ…アレはシンだ!」

『ハメさせてくれ…』

陸が上がって一歩、また一歩と近付いて行くとそれに合わせていっちーも一歩、また一歩と離れて行く、段々と速度を上げて近付くと同じように後退。

『離脱…駄目だ、やらせてくれ…』

「くつ、来るなアアアアアアアアアアアツ!!!」

いっちー全力疾走を追いかける。勿論俺は全力疾走ではない、疲れ人間と疲れの知らぬ機械の差によりその差は徐々に狭まってゆく、

いっちーもうガン泣きでござる。

さあ止めだ、クレイドルとは良く出来た体制だ、纏めてやるには最適だ。ルパンダイヴでいざ飛び掛ろうとすると俺といっちーの間に割り込む人間。

その腕に紫に近い赤の装甲を纏った小柄な少女、大好きな人を守るため恐怖を前に立ちはだかるその涙目の少女の名は…

「り、鈴…?!」

「とありやああああああつ!!!」

『ごっつ、があああああああああああああつ!!!』

ISを纏った拳がバケツヘッドこと俺の頭部に突き刺さり世界が一瞬停止したかと思えば直後ノーバウンドで十数メートル飛ぶ、その後砂浜をバウンドし、転がり、停止する。

『良い戦士だ 感傷だが、別の形で出会いたかったぞ…』

「シンにー、私とかんちゃんと一緒にビーチバレーしよう」

「うーい、今行くよー!」

ヘッドパーツを解除して立ち上がり早足でその場を去る。うしろに注意を向けているとその後の会話が聞こえるのだ。

「り、鈴…助かった! 本当にありがとうな! 鈴…鈴?」

「ふ、ふにやあ…ふにやああああああん! こわかったよおおおおお!!」

く く く く く く く く く く く く く く く

「へえ、警戒する相手はあ…相手は1組の専用機持ちい、籐ヶ崎君とお、4組の専用機持ちのお、更識さんねえ?」

「籐ヶ崎? ああ、例の時代遅れね」

「侮らないで、1年最強のIS乗りと聞いているわ 潰すわよ」

「行くわよお、何にせよお…私達三人にい、バレーで勝てる者なんてえ、あつてはいけないわあ」

「知っているわ、その為にバレー部に入ったのよ。始めましょう、私達のミッション(ゲーム)を」

やだ、何かあの三人殺る気満々なんですけど…ペツタン二つとダイ

ナマイトが一つ。

「本音ちゃん、勝ちたい?」

「勝ちたくい」

「簪は?」

「どっちでも……」

「OK、勝つぞ。許しは請わん、恨めよ……!」

腰を深く下ろして戦闘の構えを取る、尤も……実際の得意な対人格闘技はシステマなので構えは無いのだけれどね。

審判役の谷本さんに目配せして早く始めてくれと合図。

「な、なんで私が審判なんだろう……ごほん! じゃあルールは私がやった時と同じでいいかな、変則だけどーチーム3人、ビーチバレーじゃなくてバレーのルール基準、サーブは……布仏さんチームでいい?」

「別にOKよお?」

「わあ〜い、じゃあシンにーお願いねえ〜」

渡されたボールを持ってサーブする場所へ移動、右腕でボールを持って上にかんりの力を込めて投げるッ!

「なっ?! あんなに高く飛ばして何をするつもり?!」

「こうするつもり……だッ!!」

垂直に思いつき飛びその高さ、10メートル。ボールが丁度いい位置に来たら左腕を後ろに引き手を開く。

斜め下、かなり際どい位置に狙いを定め掌をボールに叩きつけ、接触した瞬間に左腕部に搭載されたドーザーシステム（f a のドーザーは攻撃の瞬間鉄塊をパイルのように前方に押し出している……ように見える）により威力増強、ついでにボールが割れないように接触感覚は変わらず、強度のみを増加させる。

その威力は……

ヒュドオツ!!

……砲弾に匹敵する。

「〜♪ 我ながらクレイジーじゃねえか、んふーふ」

「シンにーカツコイ〜」





まあその為に数分待たなきゃ駄目なんだけどね、どんな反応をするか実に楽しみだ。今日も人の不幸で飯が美味しい！

※鮫の表皮（鮫肌）

鮫の表皮は目の粗さが山葵を摩り下ろすのに非常に適しており金属製のおろし金に比べ辛味や風味といった物がとても強くなる。

なお、山葵の辛味は揮発性が高いので時間が経てば立つほど辛さが無くなる。しかし山葵が尤も美味（辛味が強い）とされるのは3〜4分経った時でその為御猪口で蓋をしないといいと昔から言われている。

丁度食事を終えたところでシャルりんが鼻を押さえてプルプルしている。

「シャルりん、山葵の辛さって言うのは揮発性が高いし水で流せば直ぐに収まるぞ」

「んぐつ、んぐつ……ふはあ…ありがと、シン。助かったよ」

あくあく、水全部飲み干しちやつてからに…

もし不慮の事故でシャルりんの口に凄まじく辛い山葵がシユウツされたらどうするんだ（ゲス顔

「俺にサルミアツキを食べさせようとした貴女に是非とも神の慈悲を」

小皿を持ち舌を出してまだ辛味の余韻が少し残っているのかハアハアしているシャルりんは山葵をシユウツ!!! 超！ エキサイティーン！

「ほあああああ?!」

「シャ、シャル?!」

直ぐにテーブルの上に置かれているピッチャー内の水を凄まじい速度で自分のコップに入れ全て飲み干し両手を合わせる。

「ふい〜！ 美味かった！ ご馳走様でした！」

「き、きひくつ（鬼畜）！ どげどう！ ばかあ！」

結果（罵倒）は見えていたが…なるほど。急がねばならんな。

この後義股の材質を変えた後簪と本音ちゃんが俺の部屋に乱入。

ババ抜きをして消灯時間前に二人とも部屋に戻り一日を終了した。

順位は常に変わらず。1位簪2位本音ちゃん3位俺であった。







「ちやああああああん！」

「……チツ」

「来たか、首輪付きィ……」

なるほど、じゃあマツチポンプ来るかな？ 多分作戦に入り込めるし、そしたらその為に色々吟味しないと駄目かな、とりあえずEN対策でアルギュロスかテルス、空中高速機動が主だからテルスになるのかな、もしくは防衛捨ててソブレロか。

武器は実弾でもENでも大丈夫だろう、敵はそういう区別ないし。あーでも待てよ、いつちーが落ちないとモツピーもいつちーも成長しないし、でも指咥えて見てたら何か言われそうだよなあ。

あー困った、実に困った。

「あ、あの……」

「いかん！ そいつには手を出すな！」

「なっ、何をするのでですか籐ヶ崎さん?!」

「コミュ障こじらせて人格がぶっ壊れてる。昔の俺のようにな……」

生前中学生の時の俺のようにな……厨二病がヤバイ級で色々な物が併発してそれはもう目を背けたくなる程人格破綻してた。

「あ、じゃあじゃあ女の子の姿になれるってのはどうかな！ もちろんんいつくんが!!」

「いいです、それできる奴はもう間に合ってるんで」

格納していたデカイ布で全身を覆って例のアレをする。今回は水着仕様だ、露出が大きい上下が紐みたいなので繋がっている黒いせくすいーなやつ。

布を放り投げてフフンと自分のわがままボディーを生徒達に見せ付ける。

「あ、あ、あ、あれ……し……、信一ろ……う……?」

「はーい、簪ちゃんの事が大好きな籐ヶ崎さんです」

「キマシ！ キマシ!!」

「IS学園をなあ……男に飢えた女ばかりだと思っっちゃア行けないわ。アタシみたいな百合スキーだってあーつくさん、いるのよ?」

うん、そうだろうなあとは思ってた。もしかしたらその為に入学し

た生徒もいるのではないだろうか、探せばいそうで何か嫌だ。

簪が目を白黒させて俺を見るので再度布で全身を隠して元に戻る。

「これぞ変装の極意也」

「変装って言葉が……、分からなくなる……」

ちらりとモツピーを見るとどうだ、いつの間にやら紅椿（あかつばき）を纏っていたらしい、やっべ見てなかった。

まあどうせIBISが衛星軌道上からモニターしてるだろうし大丈夫だろ、さってさって……ISでは現状最強の性能……最強の名に相応しい性能か否か、見せてもらうぞ。

「……んも兼ねて飛んでみてよ。箒ちゃんのイメージ通りに動くはずだよ」

「ええ、では試してみます……」

ハンガーから紅椿がパージされるや否や上空へと飛翔する、砂埃は凄いが音速の壁を割った音がしなかった、ACと違ってISはPAが無いため音速を破る時の音は聞こえるはず。

「……追加ブースター付けたネクストAC……ソブレロ、サラフの方が早いか？ いや、アリーヤとライールもか……なんだ、割と余裕」

あとENも残念仕様なんだっつけ、ブースト燃費がいいのか知らん？

ちなみに件の束さん、恐れ多くてあだ名などつけられん、黙つてりや美人。なんかいたな、そう言うの……バイオレットさんだったか。

件の束さんだが最初の飛んで見せて云々からは完全に無言、プライベートチャネルを使ってるんだろう、故に周りから見ればニコニコ笑顔でいっちーとモツピーを見てるだけ。

何かモツピーが突きを放ったらオービットみたいなのがぼつぼつ出現して飛んで行く、速度はかなり速い、見てから回避はきついかな、確かスナイパーライフルの距離には届かないんだっけか。

アンビエントで引き撃ちですね分かります。アンビエントってかBFF機で引き撃ちだな、対策対策っと。

次はどこから出したのかミサイルポッドをドンと出現させミサイルを放つ。

「箒！」

「やれる…！ この紅椿なら！」

あ、駄目だわ…完全に酔っちゃってるわ。車の免許とって1週間以内に大小係わらず事故起こすタイプだわ。

落ちないようにサポートすっかなあ…今日も一日頑張ろう！

てか紅椿ホント派手だな、何っ—か華やか。無骨に相手を破壊、殺害する為に洗練されてきた軍用兵器と全然違う、やっぱまだ時間が薄いからかなあ。

「たっ！ たた、大変！ 大変です！ お、おお…織斑先生い！」

「乱入してくるとは、とんでもない奴だ」

「ふっ！ ふぎけている場合じゃないんです！ 籐ヶ崎君！」

「織斑先生！ これを！」

「特務任務レベルA、現時点より対策を始めよ…面妖な」

はあ、来たかあ…来ちまったかあ…面倒だな、だがまあ頑張るか。

一に根性二に根性、三四が無くて五に根性だ。

「専用機持ちは？」

「全員参加しています…！」

一度二人がチラリと俺等の方を見る、その後ハンドシグナルでやり取りを始めた。

「らうりーは分かるだろう」

「…ああ、なるほど…まずい事になったな」

「普通の手話と混ぜてるな、後は多少違えど軍用ハンドシグナルと同じか」

「手話のほうは分かるか？」

「全然、ハンドシグナルしか分からん」

「私もだ」

分かったのは何時、何が、何処で、どうなって、どうしている。コレだけ分かれば十分ではある。

「そ、それでは私は他の先生へ連絡を！」

「了解。……全員、注目！ 現時刻よりIS学園教員は特殊任務行動へと移る、今日の授業及びテスト稼働は中止だ。各班はISを片付け



に担当させる。との事だ、忌々しい……では作戦会議を始め。  
意見のある者は挙手するように」

「はい、目標の詳しいスペックデータを要求します」

「いいだろう。ただしこれらは最重要軍事機密だ。漏洩した場合今作戦に参加した全員に対し査問委員会による裁判と最低でも2年の監視がつけられる。いいな」

「了解いたしました」

なるほど、こんなもんか。量産型ACと同じ程度のスペック、幾つかはACの方が大きく上回ってるな、最高速度とか。

「偵察は行えないのですか？」

「無理だな。この機体は今も超音速飛行を続けている。アプローチも精々一回が限度だろう」

「衛星を使えばいいだろうに」

「この速度を的確に捉えられる衛星などあるわけが無いだろう籐ヶ崎」

「そうだよ……そんなのある訳……」

「えっ？」

「」「えっ」「」

無いの？ うちのIBISで捕らえられるんだけど、てか捕らえてるんだけど。

空間投影ディスプレイを眼前に出し現在航行中の銀の福音を映す。

「うそ……だよね……シン」

「どっ、どちらにせよアプローチは1回だ」

「そうですね、ならば一撃必殺の攻撃力を持つISでない……」

簪は俺の方を見てそれ以外は一切ーを見る。仕方ないな、ちよつと嫌だけど聞いてみるか。

「織斑先生、質問が」

「言ってみろ。籐ヶ崎」

「遠距離より銀の福音を落とす術を俺は持っています」

「まさか……」

「アメリカに聞いてください、ISもコアも操縦者も消える、死ぬが止

める方法がある。」と

「分かった」

「正気かよシン！ お前それって、殺すって事か?！」

「静かにしろ若造（いっちー）、こいつは訓練じゃない、実戦だ。甘い考えで取り掛かるとこっちのうち誰かが最悪死ぬ事になる」

「：そうだぞ、一夏：軍人である私も同意見だ：甘い事は言えないんだ」

戦争つてのはそう言うもんだ、こちらがどれだけの戦力を持っていようと、たとえゲリラ歩兵50に対し戦車50両の戦力差でも必ず両方も死人が出る。戦争つてのは殺し合いなんだから。

「それにいっちーが考えるより最悪の返答が帰ってくるだろうな」

「アメリカから連絡が帰ってきた「操縦者は代わりがあるがコアとISは代わりが無い、操縦者は死んでも構わないがコアとISの被害は最小限でお願いしたい」だそうだ」

「な？」

「何だよそれ：なんなんだよそれ：!!」

「て事はOW狙撃は不可か、となると：条件に当てはまるのはいっちーしかないかなあ」

俺も簪も含めもう一度いっちーを見る、その顔は困惑と覚悟の混ざった表情、まあ一般人がいきなり戦場に出ると言われたようなもんだからな、仕方あるまい。

「一夏、これは訓練じゃないんだ。もし覚悟が無いなら無理強いはしない」

「ツ：……！ やる：やるよ、千冬姉。俺がやってみせる」

するとちっふーがいっちーを一撫でして全員に向き合い真剣な顔をする。

「現在この中で一番最高速度が速いのは誰だ？」

「それならわたくしのブルー・ティーズかと」

「俺のACもかなりの早さだと思うが」

「参考までに聞いておこう、籐ヶ崎。最高速度は」

「瞬間最高速度なら時速9000キロを越える」

「オルコットは」

「さ、流石にそこまで馬鹿げた速度は出ませんわ…」

「分かった、籐ヶ崎。平均巡航速度は」

「速度を重視させるなら平均4000キロ、安定させるなら2500  
〜3000キロ」

前者はブレード加速、後者はVOBだ、クイックブーストを織り交ぜればもう少し速度は出るがそうすれば安定性がガクンと落ちる。

「超音速下での戦闘訓練時間は」

「訓練100時間以上、実戦32時間」

「これ以上無い適任か、ならば一夏の移送手段は籐ヶ崎が…」

「うえいと！ うええええいと!! ちよつと待って！ ぷれいばっ！

ぷれいばっ！ この作戦待ったなんだよっ！」

「上から来るぞっ！ 気をつけろ！」

「どうあつ☆」

天井からクルンスタン、と無駄に一回転して着地した東さん、あの低い天井からこの地面で一回転するってどれだけ身体スペック高いんだろう、着地した時にたゆんと揺れる胸が実に眼福である。

「ちーちゃんちーちゃん！ ここは断ツ然！ 紅椿の出番だよっ☆」

「何を言っている？」

「こんな何処ぞの変態企業なんかよりも凄いなだよ！ パッケージなんか不要！ それでこのスペックデータだもん！ すっごーい！」

トーラス・アクアビット・アスピナ・キサラギ・ムラクモ・OW開発部「最高の褒め言葉です」

「紅椿の展開装甲を調整してーほーいほいのホホイホイッと！ ほら、コレでスピードはばっちりだよっ♪」

いつちーが小難しい顔をしていると俺の出していた投影ディスプレイ以外が乗っ取られて紅椿のスペックデータが赤裸々に大公開されている。

「…あれ？ まいっか。じゃあいつくんの為に説明しちゃいませうっ！ 展開装甲って言うのはこのわたくし！ 天才でぶりちーな東さんが作った第4世代型ISの装備なんだよ！」



あ、そうなんだー、で？ それが何か問題？ 俺からしてみれば I Sでそれをやるのはエネルギーの無駄遣いにしか見えん、だってジェネレーターが無いんだよ?!

考えてみて！ コジマ粒子の充満した空間だと AP が減少して行くけどその上に EN もゴリゴリ勝手に削れて行くんだよ！

「……で、第4世代というのが『パッケージ換装を必要としない万能機』という、現在世界中で机上の空論のもの。いっくん理解できたかなー？ 先生は優秀な生徒が大好きです！」

なんだ、そういやそうだったか。AC のコンセプトと一緒にゃん、でもイメージインターフェイスってのが俺の AC には搭載されてないから第4世代ってか第2世代最終型って言ったほうが正しいのかな？

話を真剣に聞いている振りをしながら軽く脳を睡眠状態に移行する。何か割と暇なんだよね。

お休み！

く く く く く く く く く く く く く く く

「籐ヶ崎、パッケージはインストール済みか？」

「んあ、ああいえ」

「そうか……なら……」

「あー、いや、正確に言うトインストール不要。AC のコンセプトは何時いかなる時でも状況にあわせ常に敵より有利に戦闘行動を行う。なので、展開装甲ではないがある意味第4世代機みたいなもの。いつでも出れます」

「……そうか、ならば籐ヶ崎も作戦に加われ。お前にも言うがこれは実戦だ、覚悟が無いなら辞退して構わない」

「覚悟が無い？ まさか、俺は世界最大の軍事企業カロードの人間。こと戦闘から逃げるなんてあるわけがないでしょう」

「そうか、ならば出撃準備をしろ。怠るなよ、お前の役割は一夏が仕留めそこなつた時の戦闘援護だ」

「了解」



「ふん、酔ってなどいない。実に好調だ」

「なるほど…何をしに現れた？　ここはお前のようなただのIS乗りが来るべき場所ではない。軍用機である私が、私が成すべき事なのだ」

「なに？」

「ふん、言っても無駄…か。心しておけ、その調子だと俺か、いつちーか、モツピーか、誰かが死ぬぞ」

「下らない、この性能だ、あるわけが無いだろう。それとも、籐ヶ崎のISだと、と言うことか？　気は進まんが守ってやるさ、ふふん」

あ、これアカン奴や。

「行けるか、シン」

「はい、そのつもりです」

「一夏、籐ノ之、籐ヶ崎、聞こえるか」

「音声良好」

『今作戦は一撃必殺だ。短時間での決着を心がける。もし一撃で終わらなかった時の為に籐ヶ崎がいるが、出番が無いことを祈る』  
「了解」

俺は高度を上げてからじゃなくて移動しつつ高度を上げていけばいいだろう、VOB背負ったままで垂直に飛びたくなんてないし。

『では、作戦開始！』

ブースターコア部1〜8まで接続、エネルギー共有、ブースター点火、出力3番4番5番70%、他秒間20%出力増加

機体安定、速度760キロ、全VOBブースター出力全開、脚部ブースター安定

速度2000キロ、脚部ブースター停止、出力調整。

『カメラ性能が低い、視認及びタイミング調整はそちらで頼む。願わくば俺はただ飛んで帰るだけにしたい物だな』

『ああ、分かった』

『…見えたぞー！』

『早いな、所詮は2キロか』

『加速するぞ、接触まで十秒！』

脚部ブースター機動、速度2500キロ

「VOB格納！ ホワイトグリント！」

ターゲットを大きく通り過ぎ直ぐにクイックターンで反転、OBを使用し二人の元へと戻る。

「敵機確認。迎撃モードへ移行。『銀の鐘（シルバー・ベル）』、稼動開始」

やっぱ仕留められなかったか、あとは二人を援護だな。ところでいっちーって何で落ちたんだっけか…覚えてないな。

「箒！ シン！ 援護を！」

「任せろ！」

「油断するなよ！」

そう言うや否やヒラヒラと舞うようにいっちーの攻撃を避ける銀の福音をロックしたまま左へクイックブーストを行い射線にいっちーが入らない位置へ飛び援護射撃を開始する。

殺すことが目的ではないため競技用の弾丸を使っている。それに合わせ防御力も競技用に制限されてしまっているのだが。

どうやら俺の攻撃を避けることよりいっちーの攻撃を避けることを優先したらしく比較的ヒットは取れているらしい。

いっちーが焦っているのか大降りの攻撃を繰り出しそれを回避した福音が頭部スラスター、つまり砲口をいっちーへと向ける。

そうはいかん、両手のライフルで頭部スラスターを撃ち、グリントミサイルを放つ。

見事にヒットした弾丸が砲口の向きを少し反らし、続いてパルマシよろしく連続して放たれるエネルギー弾が一発だけいっちーに直撃。

銀の福音が迫る分裂ミサイルに銀の鐘を乱射し一発また一発と次々に撃墜して行く、どうやらミサイルは通じなさそうだ。

「すまん、完全に反らすことは出来なかった」

「ああ、でも助かった。箒！ 左右から同時に行く、左は頼んだ！ シンは随時援護を！」

「了解だ！」

「チマチマ削りしかできんがな！ 決めるのはいっちーだぞ！」

俺は射撃援護をしつつ牽制用にミサイルを放ち、二人の攻撃後の隙を突かせない様立ち回る、どうもこういうのは苦手だがグリントミサイルが聞かない以上ちまちまダメージを与えるしかない。

「このっー」

モツピーも大振りの攻撃を躊躇無く出すようになってきた、その大きな隙を潰しきるのは流石に無理だ。

直ぐにクイツクブーストで飛びモツピーの前に立ちはだかりA Cで直接盾になる。

P AやP Aをぶち抜いて装甲に突き刺さった弾丸が一度に炸裂する。こいつは痛い、爆発でP A減衰率も高いし直接ダメージも高い。

「つぐ…」

「邪魔だ！ 籐ヶ崎！」

俺を押しつけ我武者羅に攻撃を続けるが尽く回避されダメージらしいダメージは入っていない、射撃援護を続けているとまたも大振りの攻撃をかわされ光弾の一斉射撃に晒されそうになる。

再度同じように防御する。

「つぶ…!! 冷静になれ、我武者羅に剣を振るだけでは…」

「分かっている！ 私の前に出るな！ 一夏！ 私が隙を作る!!」

モツピーが前に出てレーザーだとか光波だとかを連続して放ち、俺も前に出るのは得策ではないと判断して後ろに大きく下がリミサイルと弾丸で援護する。

「はああああっ!!」

「La……………」

詩と共に砲口をあらゆる向きに構え一斉に放ち始める、細かい動きが難しいA Cにとってこの位置は少し危ない、後ろに引くことにした。

「俺は後ろに引くぞー！」

「やるなっ…！ だが、押し切るぞ!!」

一斉射撃を掻い潜って一太刀浴びせる、一瞬動きが止まり漸く、漸く大きな隙が銀の福音に出来た。今がチャンス、否、今しかあるまい！

「いつちーがこの隙を見逃すはずが無いと意識をいつちーに向けて何があつたのか、一発の光弾を凄まじい速度で追い、弾丸を消した。何やってるんだ、お前…何でそんなところに…」

「何をしている！ せつかくのチャンスに…！」

「船がいるんだ！ ああ畜生！ 密漁船か…！」

零落白夜が消える。

ああ、そうだ…そうだった…確か、この後…

そう、モツピーが剣を取りこぼして…エネルギーの枯渇を意味する具現地限界。

ああ、ああ…！ クソ！ クソツ！！ クイツクブーストじゃ届かない…！

OBレディ…

「箒いいいいいい！！」

「ちつくしようがアアアツ！！ 間に合えクソオオオツ！！！！」

だけど…

1秒、たった1秒で間に入れたのに、間に合わなかった。俺が手を伸ばす先でいつちーの背中に突き刺さった弾丸が炸裂する。

「ぐああああつ！！」

崩れ落ちるいつちーを支え困惑の表情でいつちーを見るモツピー、意識を銀の福音へと向けるとまだ砲口を二人へと向けている。

「逃げろおツ！ 早く！」

「一夏っ、一夏！ 一夏あつ！」

「畜生！！」

二人の前に仁王立ちし、攻撃を防御しきるしかない。とてもじゃないが俺以外戦える状況ではないのだから。

唐突に頭部CPUから機会音声が響く。

「敵IS異常発生、コアバイパスが以上増強しています。スキャン完了。敵ISエネルギーコア反応5」

俺が認識するより早く銀の福音が銀の鐘を放つ、その色はアカかった、全てを焼くかのような暴力的なアカ。

プライマルアーマーもアーマーポイントも消し飛ばし最後の一撃

が右肩に突き刺さり、炸裂。

俺の肩を大きく吹き飛ばし、右腕が離れてしまったのを感じ水面へと落ちて行く。

「ああ、篠ノ之束…最高だ…最高に危険だよ、お前は…」

血が喉を逆流するのを感じて俺は気を失った。

1101111111001001001001  
001011110010111001

—Third Person—

篠ヶ崎信一郎、彼が海から引き上げられ、陸に到着するや否や彼は直ぐに病院へと搬送された。

彼の負傷の詳細を知るものは戦闘に参加した篠ノ之箒、作戦指揮を取っていた織斑千冬、副担任である山田真耶、この三人しかこの場には居ない。

「作戦は失敗、一夏：篠ヶ崎が負傷、どちらも重症だ：篠ヶ崎の所属組織には既に連絡を終えている」

「信一郎……、信一郎は……大丈夫なんですか……!？」

「……以降、状況に変化があれば招集する。それまで……各自現状：待機だ……!」

「待ってください……!! 信一郎は……?!」

「………すまない」

そう謝った千冬は立ち上がり部屋から出ようとした。

しかし千冬が戸に手をかける前にドアが静かに開かれた、そこに居るのは副担任の山田真耶でもなければ篠ノ之箒を作戦に組み込んだ篠ノ之束でもない。

1年4組で更識簪の友人であるフラン・バツティ・カーティス、彼女だった。

「失礼します」

「何故ここに居る、許可無く室外に出た場合は身柄を拘束する。と言った筈だが」

「許可ならば頂きました。4組の担任教師に、ですが」

ふわりとした印象の彼女が感情を殺したような声で機械的に織斑千冬の問いに返答する。

「部屋に戻れ、命令だ」

「カレード所属の社員として本社からの指示により作戦に参加した全



員に信一郎さん……次期……社長の……つふ、状況を知らせて欲しい。……との……ことで、す……」

「それこそ部外者のはずだ、なぜ……!」

「家族のっ! 私の家族の事ですっ!! カラードは単純な会社じゃ……! ないんです……っ」

フランが叫ぶように……いや、実際に叫び、涙を流す。

「カラードは……数え切れないほどの人がいる大企業です。でもただの社員なんかじゃない! 皆かけがえの無い家族なんです! 義兄さんも! 信一郎さんも私にとつて兄だった!! 義兄さんの友人達に状態を知って欲しいと思うことが……! 駄目な事なんですか?!」

「っ……わかっ……た、伝えろ……」

「では……信一郎……さんは……右肩付近を、お……大きく損傷し……右う、でを失い……肺も、おっ……! そつ、損傷し……っは、ああああ……もつて……い、ちじか、ああ、あああああ! ああああああ!!」

全てを言い切る前に彼女は膝を落とし、泣き崩れた。右腕を失い肺を損傷、付け加えるなら多量の出血、あまりにも失った箇所が大きく止血が追いつかない。

もって一時間どころか今すぐ死んでしまってもおかしくは無い状態だった。

右の僧帽筋から肋骨まで丸に近い形状で失ってしまったている、心臓に届かなかつた事が奇跡だが、死ぬまでの時間が変わるだけである。

「うそ……、うあ……」

「っ!」

それを聞き更識簪が操り糸を切ったマリオネットのように気絶する。倒れてしまうのを咄嗟に受け止め支えたシャルロット・デュノアは悲痛な表情を浮かべつつ簪を寝かせた。

周りにいる人間も同じように悲痛な顔をする。歯を食いしばり顔を背ける者、目を閉じ俯く者、多様な表情を浮かべ、しかし皆一様に苦しそうな顔をしている。

ただ一人を除いて、しかしその例外は決して笑っているわけではない、ただ無感情に虚ろな目で膝の上で握り締めた両手を見つめてい

た。

「嘘よ…だって、だってシンは、アイツはバカみたいに丈夫で、どんな怪我でも数秒後には治ってる…ギャグの塊のはずじゃない…!」

「そう、そうだよ、2階から当たり前のように飛び降りたり…そんなシンが死ぬわけ…」

「いまっ…! ふ、ふうっ…:ACいつ、せい…しんサポー、ト…きど、うっ!」

フランがカラード社員に支給されているホログラムディスプレイを操作し、ボイスコマンドを入力する。

「…:現在、カラードの戦闘部隊約2割、戦闘移動要塞（アームズ・フォートレス）3機、戦闘用無人機（コアード・マッスル・トレーサー）3500機、対IS無人戦闘機（アンチ・IS・ドローン）1500機、有人型AC87機、合わせてレイヴン（オールドACパイロット）・リンクス（ネクストACパイロット）・ミグラント（VACパイロット）が87人、特殊型戦闘用無人AC1機と非戦闘員数百人がこちらに向かっています」

コマンド入力後に目尻に溜まった涙を拭い機械的に現状をフランが千冬に報告した。それは小さな声として流すには不可能なほど大きな報告だ、たった2割の戦闘部隊、しかしその戦力は世界をひっくり返すにはあまりにも容易い2割。

千冬は絶句する。

「私を含めれば、AC88機にミグラント一人追加ですが」

「は…」

「待て、AC88機…? ISコアの総数は——」

ラウラ・ボーデヴィツヒが直ぐにおかしい点に気づき指摘を行う、否…行おうとした。

「まだ気づかれていないのですか、ISと同等の力を持つACにISCコアは使用されていません。信一郎さんのACはどうか分かりませんが」

「それでは…それではカラードはISと同等の戦力を量産できると…」

？」

「…私はコレで失礼します。そう簡単にACの精神サポートで押し込めるほど軽い感情ではないので…そろそろ限界です」

フランは誰の質問にも答えず、答える気さえないと云った様子で部屋を去った。

「……今の会話を作戦内の機密とする。口外は何かあっても許さん…いいな」

「は、い……」

「……」

千冬がその言葉を最後として全員を解散させる。多くの専用機持ちが作戦室に残るのに対し箒は沈んだ表情のままフラフラと部屋を去った。

「一夏は……」

「ISの致命領域対応で昏睡状態。一命は取り留めた、目が覚めたとしても火傷痕は残るだろう…籐ヶ崎の状況で逆に冷静になれたよ、取り乱す暇など無い。籐ヶ崎のおかげでダメージはかなり与えられたはずだ、見つけ次第…撃墜するぞ。上層より作戦を続行せよと指示が出ている。」

「そうだね、一夏のためにも…籐ヶ崎のためにも」

「私はドイツのシュヴァルツェ・ハーゼに協力を要請して銀の福音の場所を特定して貰う。籐ヶ崎…一夏、仇は絶対に取る」

「パッケージを今の内にインストールしておきましょう」

「そうね…箒は…この様子じゃ作戦参加は無理そうね」

「まっ……て……!」

全員が声のした方向を見ると箒がゆっくりと身体を起こし、過呼吸を起こしているかのように荒く息をして、全員を見ていた。

「箒、大丈夫? ……なわけ、無いよね……ごめん」

「いつから起きていた?」

「起きた時……フランは居なかった、よ……」

直ぐに近付いてきたシャルロットに支えられながら箒が千冬の問題に答える。



「はい…そうみたいですわね…」

海の上、数km、十数km先に居るにも拘らずいとも容易く目視できる巨大な物体。先頭に巨大なレーザーブレードを付け海を移動するのの特化させたような何か。

その後接続した巨大で長大な列車、いや…むしろ壁と言った方が正しいとさえ思える何か。

それが3機も確かにこの海岸へと向かっていた。

もし、止まる気も無くこの海岸に突っ込んできたとすればIS程度に止める方法など存在しないだろう。

しかし徐々に速度を落としているのか掻き分けた波が小さくなっ  
ていく。

「あれは…！」

「なんて巨大なガトリング…一体どんな弾薬を…」

「何、あのミサイルコンテナ…ふざけてるの？」

ザワザワと混じった声が、前方の何かが近付いてきて全貌が明らかになるにつれ増えてくる。

速度を落としきり先端を砂浜に突き刺し停止した何かから十何人かの人と後部の巨大な壁から何十機か10数メートルのロボット、そして千冬と真耶には見覚えのあるフルスキンのISが出てくる。

全員が身構えた直後に一人のラファールを纏った教員があることに気づく。

「あれは…カラードのエンブレム…？」

偶然、巨大な壁に施されていたペイントを発見したのだ。決してそのペイントが小さいと言うわけではない。むしろ側面から見れば一瞬で分かるだろう。

そう「側面から見れば」容易く分かる。しかしただの一人の教員しかそれが分からなかった理由はあまりにも巨大すぎた、その一言に尽きる。

見つけることのできた一人の教員も離れた場所でスナイパーライフルを構えたスナイパーだったことも大きい、正面ではなく側面に位置していたのだ。

ふわりと人が生身で行う事ができるはずの無い動きで何人も砂浜へと降りる。

その中心に居る人間は小柄で、子供のような印象を与える。しかしその人間は世界にとって、特にISなど兵器に携わる人間にとっては余りにも大きな存在過ぎた。

籐ヶ崎麗羅、籐ヶ崎信一郎の母であり…カロードの社長。

「単刀直入に言います。息子は…シン君は…どこにいるの…？」

「すでに病院へと搬送しています。それとココは部外者立ち入り禁止です。お引取りを」

「総員戦闘用意」

信一郎に良く似た男がボソリと呟く、するとそれまで麗羅を警護するように立っていた人間が一齐に散り散りになり大きく間を開けた。「ハングドマン」

男がコードを発すると直後男が決して眩しくない光に包まれ、光が膨張し巨大な白い物体を形作る。それを合図にしたかのように全員がコードを発する。

「……………ヴェンジェンス」

「警備部隊1番機……………」

「レオ」

「タウルスツ！」

「デュアルフェイス」

「ストラックサンダー……………」

「…シルエツト」

「ファシネイター」

「フォックスアイ」

「シュープリス」

「オルレア」

「リイザアア……………」

「雷電」

「フィードバック……………」

寡黙そうな男が、軍服を纏った男が、冷たい目をした男が、巨大な

筋肉の塊のような男が。

片腕が義手の老いた男が、葉巻を銜えた男が、深い彫りをした男が、冷たい女が、機械のような男が。

鍛え抜かれた体の男が、剣のような女が、顔に傷のある男が、温厚な眼をした男が、筋骨隆々とした初老の男が。

光が消える頃、それぞれ巨大な兵器になっていた。

その姿は信一郎の使用していたACに酷似している。ただし、巨大な事を除けば、の話だが。

何人かの教員がプライベートチャネルでリーダーである千冬に言う。

「この程度の数ならコレだけISの揃った我々の方が有利です」

「強気に出ても大丈夫でしょう。いくらカラードと言えどISに勝てるわけありません」

千冬はその言葉を聞き、返す事もなく「否」と結論付ける。

フランの言葉を信じるならその巨大な兵器——ACは同等の数のISと対峙できる。現在ISは10機に満たない数、対して巨大なACが15機、小型：ISと同様の大きさのACが1機。信じがたいがまだ70以上あると聞く。

その上眼前の16機、間違い無く手練れだろう。対して教員側は戦闘に特化したわけではない教員が殆ど。

いざ戦ったとして勝てる可能性は皆無に近い。

「坊ちゃんは何処だ、迷ってる余裕も選んでる余裕もねえんだ、一刻を争うんだよ」

「主任、戦闘許可を頂ければカラードの、社長のご意志に逆らう愚か者共を抹殺いたしましょう」

ショットガンを持ったグリーンのACから声が響く、その声量は巨大な機体に不釣り合いな普通の一人の声の大きさだった。

続くように巨大なスナイパーキャノンを持った赤いACから敵意や殺意を剥き出しにした声が響く、こちらはマイクとスピーカーを通してような大人数へ聞かせる事を目的とした声。

「……………ここから東側最寄の緊急病院です」





それも自分の所為で、一人で背負い込むにはそれはあまりにも重く、対照的にあまりにも箒は幼かった。

自分自身の所為だと理解しているが無意識のうちに自分の所為ではない、自分は悪くないと考えてしまう。

「私の、私の所為じゃ……籐ヶ崎が、前に……出てきたから、密漁船が……だから」

違う、自分の所為だ。違う、籐ヶ崎の所為だ。違う、密漁船の所為だ。そうだ、私の所為ではない。

逃避、それは正しく人のあり方であり、正しく現実的だ。

直後、破壊するかの勢いでドアが開かれる。しかし箒は驚きこそすれ、音のした方向へ目を向けることさえなかった。

「あーあ、何腐ってんのよ」

声を発したのは風鈴音、つまり彼女がこの部屋へと入ってきた事になる。その鈴音に対し視線を動かすことも無く言葉を返すことも無く、ただ無言。

鈴音は一度昏睡状態の一夏を見て歯を食いしばる、ぎり音と音が聞こえるほどに。

「……つち向きなさい」

鈴音の言葉で漸くゆつくりと、フラフラと、操り人形のように振り向く、その姿は痛々しいの一言に尽きる。

箒が視線を上げると箒を見下ろすように立つ鈴音と、その後立ち両の拳を真っ白になるほど握り締めた簪が居た。

「一夏がこうなってるのって、アンタの所為なんですよ？」

「ち……がう、とうが……さきが……密漁船が、なければ……邪魔を……しなければ……」

「ッ!!」

「アンタ……!」

箒が自らを守ろうと、人としての本能により逃避する。それに対して箒の胸倉を掴み上げようとした鈴音を押しつけ、簪が右手を振り上げた。

部屋に大きな乾いた音が響く、簪が力任せに箒の頬を叩いた証拠。叩かれた箒は衝撃で横に倒れ、床に身体を叩きつける。

「ふざけないでツ!! 信一郎が邪魔をしなれば?! 信一郎は邪魔なんてしてなかった!! 邪魔だったのは信一郎でも織斑君でも無かった!! 戦闘データは見た! あなたが:!! あなたがいなければ!!」  
「落ち着きなさい!」

拳を握り大きく振り上げた箒を鈴音が羽交い絞めにして止める。息を荒くし、涙をボロボロと零しながら暴れる箒を落ち着かせようと声を掛ける。

何度も声を掛け、漸く暴れる事を止めた箒をゆっくりと放して座らせた。

「全く…逆にこつちが冷静になったわよ。ねえ箒、アンタがもし本当に籐ヶ崎が邪魔をしてたって思ったならとんだ見当違いよ」  
「……………」

「戦闘中に前に出てきたから? アンタは知らなかったかもしれないけど一斉射撃から守ってたのよ、アレ」  
「え……………」

箒は思い出す。信一郎が落とされた時も含めて自分の前に出てきた回数を、思い出す。銀の福音のあの火力を。

普通のISならば一斉射撃を一度でさえ耐えられない火力から3度も守っていた。

「あ…あ……………」

「…………信一郎が言った言葉を覚えてる? 酔うなって:!!」

箒の脳裏に信一郎の言葉が鮮明に浮かび上がる。

「何をしに現れた」「心しておけ、その調子だと…………誰かが死ぬぞ」

「こいつは訓練じゃない、実戦だ。甘い考えで取り掛かるとこつちのうち誰かが最悪死ぬ事になる」

「わた、わたし…わたしは…………!!」

「もし、もし…! 私が日本の代表候補生で無ければ:!! ただの一般人なら! あなたを殴り殺す所だった:!!」

「箒、アンタも専用機持ちなら立ちなさい、戦いなさい。私達には、専

用機持ちにはその責任が、義務があるのよ」

「私はもう……乗らない……ISには……乗らない……」

箒が目を逸らしその言葉を漏らした直後、今度こそ鈴音が箒の胸倉を掴み上げる。

「甘ったれた事言っつてんじゃないわよ！ アンタも！ 私も！ 簪も

！ セシリアもシャルロットもラウラも!! 一夏も籐ヶ崎も……ガキみたいなの我侘が通るような立場じゃないのよ!!」

「所詮、戦うべき時に戦わない……臆病者」

「アンタは勝ち取ったんじゃないやなくて与えられたんだものね、でももし……一夏の事に、籐ヶ崎の事に責任を感じてるなら、戦いなさい。それが手向けよ」

鈴音の叱咤を受け、箒が歯を食いしばり鈴音を睨みつけ目に怒気を込め、叫ぶ。

「敵の居場所も分からない！ 戦えるなら戦う!! どうすれば、どうすればいいと言うんだ!!」

「……いい目になったじゃない、そうよ、それでいいのよ。面倒つたらありやしないわ」

「な、なに……？ いったい……」

「場所なら……大丈夫……今、ボーデヴィツヒさんが……」

コン、とドアをノックしたような音が三人の耳に入り、全員がその方向に目を向けると開け放しになっていたドアにもたれ掛かるように黒の軍の正装を纏ったラウラがタブレット片手にドアをノックしていた。

「見つけたぞ、ここから凡そ30キロ離れた沖合上空で発見した。光学迷彩を持っていないのが幸運だった。衛星による目視で確認できた。服はすまん、あちらが軍の正装でなければ取り合ってくれんだ」

鈴音がにやりと笑みを浮かべラウラを見る。

「やるじゃない、流石ドイツ軍特殊部隊」

「当たり前だ、それよりお前達はどうなんだ。まだ準備を終えていません、など笑い話にもならん」

「私は、大丈夫……ACのグレネードを……フランに……渡されたから……」

「私も準備万端よ、甲龍の攻撃特化パッケージもインストール完了してるわ。シャルロットとセシリアの方こそどうなのよ」

ラウラが無言でドアの方を顎でさす。そこには部屋に入ってくるセシリア・オルコットとシャルロットが居た。

「たった今完了致しましたわ」

「準備OK、いつでも出れるよ」

「OK、これで全員準備完了な訳ね。…箒、アンタ以外は」

どうする？　と言外に込め全員が箒へと視線を向け、反応を見る。

「私は、私は！　戦って勝利する！　一夏のためにも、籐ヶ崎のためにも、今度こそ、負けはしない!!」

「いいわ、行きましょう。アイツをぶっ飛ばしてやるわよ」

「お待ち下さい、まずは作戦会議ですわ。確実に、墜としますわよ」

「私は……笑顔で、信一郎を迎えるために……!」

箒の言葉に全員が箒へと視線を移す。

「信一郎は、絶対に戻ってくる」

「……根拠を聞いていいか」

「信一郎は……、私のヒーローだから……その根拠で……、充分……」

「うん、そうだね。シンだもん、きつと何時も通り馬鹿な事を言いながら戻ってくる」

「ああ、籐ヶ崎はそういう奴だ」

「きつと、わたくしはまた籐ヶ崎さんの言葉に怒ってしまいますわ」

「あーあ、どうせ泣かされるんでしょうね。イヤんなっちゃう」

「そうだ、そうだな、行くぞ!」

全員思い思いに言葉を出し、一度笑いあう。そしてやる気を身体に滾らせ少女達は力強く歩き出した。愛する者の為に、友人の為に、一夏の為に、信一郎の為に、強く思いながら。

病室の特殊で透明な何かの中で無数のチューブや機器に繋がれた、

最早身体に付いているパーツは頭だけとなった男、信一郎。

その病室で信一郎以外、数人の人間が存在していた。

床に膝を落とし泣き崩れ、信一郎の名前を呼び続ける輝くような白い髪をした女性。医師の胸倉を掴み上げ涙を流し怒鳴り散らす男性。

籐ヶ崎信一郎の両親、カラードの社長、麗羅と主任と呼ばれた男だった。

「シンくん！ シンくん！ やだよ、やだよお！ 死なないで、ママとパパを置いていかないで！ あああああ!!」

「どういうことだ！ どうにもならない?! ふっざけんじやねえ!!」

何のための医者だよ！ 何のための病院だよ!! なんのための…ツ

!! 助けてくれよ、息子を、シンを…!! 助けてくれよ、せんせえ

…!!」

医師はどうする事も出来ず、ただただ、謝り続ける。しかし信一郎を数十分だけでも生きながらえさせる事の出来たこの医師は決して腕が悪いわけではなかったのだ。

だが、それでも、医師の力で命を繋ぎ止める事は不可能だった。

「シンくん、シンくんは覚えてるかな…」

彼女の脳裏には信一郎が生まれてからの事が走馬灯のように映されていた。

「シンくん、3歳の頃、ママを見て…シュレリア様、つて言ったんだよ……?」

シンくんは特別なの、ママと一緒に、特別なの、だからお願い、死なないで…ママの能力(チカラ)は役に立たないから、頑張つて…死なないで、生きて…!」

く く く く く く く く く く く く く く

ラウラが長距離より二門のレールキャノンを構えターゲット、銀の福音に照準を合わせる。

セシリアがステルスモードにより反応を消し、銀の福音の周囲、探知されない距離を旋回し、攻撃指示を待つ。

鈴音と箒が強襲の為水中に潜み、爪を研ぐ様に、獲物を食らい殺す

ために牙を剥きタイミングを見極める。

シャルロットがセシリアの背に乗り冷静に指示を待つ。

簪がACのグレネードNUKABIRAとWADOUをその手に握り、ミサイルポッドを展開、銀の福音を木っ端微塵に消し飛ばしてやらんと、怒りをその目に宿す。

ラウラが全体に攻撃指示を出そうと息を吸い込んだ瞬間作戦指揮官、千冬からラウラ個人にプライベートチャネルによる通信が掛けられた。通信ウインドウを開きながらも狙いはターゲットからずらさない。

「何でしょうか、織斑先生」

『……更識には絶対に伝えるな、間違いなく取り乱す。たった今……：藤ヶ崎が亡くなったと病院から連絡が入った』

「ツ……!! 了解しました、更識簪以外の作戦メンバーに、伝えます」

『……すまない、本当に……戻ってきた時、私が伝える……怒りは私が、受け止める』

少なからず動揺し歯を噛んだラウラが一つ息を吐き冷静になろうとする。

千冬からの通信が終了した直後、簪以外の全員へとプライベートチャネルを繋ぐ。

「全員に通達、いま織斑先生より連絡が入った。藤ヶ崎が……亡くなった、との事だ。更識簪には伝えるな、作戦終了後に私が伝える。責めはそこで聞こう」

「そんな。……絶対……討つよ、仇を……!」

「……ああ、そうだ。全員に通達! コレより10秒後に第一射を行う! その瞬間より作戦開始だ、奴を赦す訳には行かない、油断するな、潰すぞ! カウント開始!」

全員が気を引き締め、射殺すように、喉仏に喰らい付くため武器を持つ。

「……………Drei Zwei Eins Feuer!!」

超大型弾装、二門の大型レールキャノン、総重量300キロを軽く越える特殊ユニットから一射目以降マシンガンの如く人が触れれば



り数十メートル吹き飛ばされた。

砲撃を成功させたラウラが現在出せる最高速度で後退しながらレールキャノンを撃ち続け、安全な距離を得ようとする。対する銀の福音が全砲門を前方へと向け迎撃を開始。

する寸前にほぼ真上に敵反応、砲門を真上へと向ける。

上空の青い粒から閃光が走り右のスラスターへと直撃、続け様に二撃三撃と寸分変わらず同位置に直撃、バランスを取るためにスラスターの出力を調整。

しかしまるでそれを狙っていたかのように左のスラスターへと閃光が直撃しバランスを崩し射撃角がずれてしまう。

遙か上空で粒のように見えていた蒼い機体が凄まじい速度で銀の福音とすれ違う、体勢を崩しながらも蒼い機体を追いかけて砲門を下部へと向け、射撃体勢を取る。

蒼い機体、強襲型高軌道パッケージを装着し巨大なドラムマガジンを装備した全長2メートル半に及ぶ巨大なライフルを手に装備したブルー・ティアーズを纏ったセシリアが直ぐに反転、射撃を開始する。

B T型から外れ実用性のみを求めたライフル、大型の実弾をレーザーエネルギーで纏った協力的な衝撃性能を持ちながらレーザーライフルの速度を両立させ、迎撃も実体シールドでの防御も出来ないイギリス製最高性能の狙撃ライフル。

「砲門を幾つか、頂きますわ!」

近接戦闘には向かない高感度ハイパーセンサーを装備しながら数百メートルしかない距離で次々と浮遊型の砲門を破壊して行く。

無論ただの一撃で壊れるはずが無い、絶えず細かに動き続ける砲門に何発も何発も命中させ撃破して次のターゲットに移る。それを凄まじい速度で繰り返し返していた。

『第二敵機を確認。排除開始』

「そうは行かないんだよね」

『L a i——』

銀の福音の背後から聞こえた声に銀の福音が反応するより早く背中にロケットランチャー程もある銃口を二つ突きつけたシャルロツ



トが引き金を引いた。

ロケットランチャーの口径ほどもあるバレルに直径1メートル以上の巨大なダブルドラムマガジンを取り付けたような不恰好なショットガンから50calの薬莖を含めた位の大きさをしたフレシエツト弾がフルオートで撒き散らされる。

その凶悪な弾丸の波に蹂躪され思い通りに動く事さえまならぬ銀の福音が喜劇のダンスのように舞い踊った。

ほんの数秒で弾薬撃ちつくしたシャルロットがショットガンを投げ捨て1秒に満たない速度で次の武器をコール、射撃を開始しようと武器を構えた。

『La...Lalala...Lalalala...Lalala』

最初よりも少なくなってしまった砲口を全方向に向け乱射を開始し、安全を確保し離脱を開始するべく反撃始める。

「残念、それじゃ破れないよ!!」

防御用パッケージを眼前に展開し、アサルトカノンとバトルライフルを両手に持ったシャルロットが銀の福音を睨み砲撃の間を縫って射撃、的確にダメージを与えて銀の福音にとって不利な状況へと追い詰める。

横軸への退避が不可能と判断を下し、上空へと急加速を行い一度戦闘地帯から逃れ、続いて高速移動で戦闘空域から逃れる事が可能となった。

『La 戦闘空域から離脱——』

目前に巨大なグレネード弾が迫っていないければ、話ではあったが。ステルス弾頭により気付く事さえなく直撃した銀の福音が吹き飛ばされ、無茶苦茶にスラストを噴かせ体勢を立て直し、次の行動に移ろうとする、しかし体勢を立て直す事さえ許さない追撃が再度直撃した。

「落ちろ...落ちろ...!! 落ちろ!! 落ちろ!! 落ちろ墜ちろオチロオオオオオオオツツツツ!!」

獣のような咆哮を上げた簪が両腕に大型のグレネードを持ちトリガーを引きつ放しにする。







鳥が羽ばたくよりもゆっくりと羽をラウラへと打ち付ける。まるで、ただ飛んでいる最中に偶然羽が何かに当たってしまったかのよう

に。  
「ぐ、あ……」

それだけで四枚の物理シールドが砕け、共に吹き飛ばされる。体勢を立て直すには余りにもオーバーダメージ、ISの機能が生きてはい

るが戦闘続行は不可能だった。  
『Lalala……Lalala……』

「この……っ!!」

連射式荷電粒子砲を簪が放つ、しかし片羽を振るうだけで銀の福音へと迫っていた砲撃は霧散する。余りにも圧倒的過ぎた、それはもはやISでは無かったのかもしれない。

「山あら——」

ミサイルを放とうとポッドを開き、ミサイルを射出した直後弾頭が全てレーザーにより貫かれその場で爆発、簪は抵抗する間も無く巻き込まれた。

「よくも、よくもよくもっ!」

ライフルを撃ち、高速移動で戦闘を行おうとセシリアが加速、銀の福音が同じように加速、双方加速を終了した時にはセシリアのISはズタズタに壊されていた、しかしセシリアは高感度ハイパーセンサーを装備していた故に見ることが出来た、銀の福音が移動する瞬間を。

「なんて、ふぎげ……た……は……や……」

「このっ、化け物がっ!!」

赤電を纏った砲撃を肩部の非固定ユニットより連射する。しかし鈴音の特化火力でさえ片羽で身体を覆う事により容易く防がれてしま

まう。  
「ならっ、コイツでどうよおおっ!!」

双天牙月を手に瞬時加速で銀の福音が自らを覆う羽に刃を突き立てた、しかし衝撃が返って来ることも刃が突き刺さる事もなく、ただピタリと刃が静止した。

「ああ……くそっ。ホント、ふぎけてるわ」



しまった。

それは紅椿のエネルギー切れを如実に示していた、ただ悔しそうに歯を食いしぼる。それしか出来る事が無かった。

「ああ、駄目か……すまない、みんな……仇を取れなかった、すまない……籐ヶ崎……すまない、一夏……」

ゆっくりと、ガチリガチリと銀の福音の翼が箒を包む、自力での脱出は最早不可能、エネルギーもほぼ全て枯渇した、残りは意識不明か死か、そのカウントダウンでしかなかった。

「……ちか、いちか……一夏、会いたいよ、いちかあ……!」

頬を一筋涙が伝う、まだまだやりたい事があった、言いたい事があった、だがもう遅い。ただ覚悟を決め、目をゆっくりと閉じる。

しかし突如自分を襲った衝撃がそれを許さない、何とか残り少ないエネルギーを駆使し、機体を安定させ何がどうなったかを確認する。目に映ったのは強力な狙撃でも受けたのか凄まじい勢いで吹き飛んでゆく銀の福音、そして合いたいと強く望んだ相手。

「あ、ああ……!」

「これ以上、お前に俺の仲間はやらせねえ、誰一人として!」

大きく形の変わった白式を纏う思人人、織斑一夏。

「一夏、いちか……! 怪我は、身体は……!」

「悪い、待たせたな」

「良かった、よかった……!」

「ああ、もう大丈夫だ。……リボン、無くなってるな……丁度良かった、コレやるよ」

「これ……は? リボン……?」

「誕生日、おめでとう。箒」

白いリボンを箒に手渡した一夏がニコリと微笑む、その後右手に握る剣を構えなおし真剣な顔をした。

「シン以外は確認した、シンはどこにいる?」

「籐ヶ崎は、籐ヶ崎は……亡く……なった……」

「そんな、そんな馬鹿な。アイツが、シンが死ぬようなタマかよ……！」  
「……………」

「…本当、なんだな。ちくしょう…箒、下がってる…俺が仇を取る…!!」

その言葉を残し、凄まじい速度で銀の福音を迎え撃つべく飛んだ。戦うその姿は圧巻だった、戦いの才能もあつたのだろう、だが強かった。

あの銀の福音に一步も引かず、否。むしろ一步前に出て有利な状況だ。

だが流れ弾の数も相当な数、それを全て打ち消すのは不可能に近い、故に決定的な攻めに転じる事が難しい。その一夏に肉声で叫ぶ女生徒がいた。

「一夏ッ！ あたし達は代表候補生よ?! 自分の身ぐらい自分で守れる！ だからとつとそいつをぶっ飛ばしちやいなさい!!」

「なんなら僕達が、手伝ってもいいんだよ……!!」

「私はまだまだ……戦える……!!」

「狙撃のサポートは必要ですか!!」

「まだレールカノンは一門生きてる！ 流れ弾を吹っ飛ばすなど造作も無い！」

無論その殆どがただの強がりである事など目に見て分かる、しかし一夏にはその言葉が信頼に値する物だった、なればもう容赦など不要。攻めに移る事に何の戸惑いも無かった。

「頼もしいな、ははっ……いいぜ、来い…来いよ！ 俺はここにいるぞ!! シルバリオ・ゴスペエエエエエエルツツツ!!」

『メイインターゲット変更、ランクAオーバーと認識、最大火力変更』

「おおおおおおおおおおおおおおおおおッ!!!」

『La……』

新たな武器を駆使し怒涛の勢いで銀の福音を圧す。自分へ攻撃は全て光の盾で消し、零落白夜で斬り、爪で切り裂き、荷電粒子砲を放ち、一切の不利を許さない。

圧している、しかしまた圧されてもいる。攻撃、防御、全てが自ら



のエネルギーを喰らい潰し、攻撃に防御に転ずる。

軍用と競技用、エネルギーの最大値、火力、防御力、ただそれだけが性能、相性を塗りつぶしていた。

その上片翼を斬り飛ばそうとも両翼を同時に消さない限りは瞬時に反撃を行って来る。両翼を同時に切り落とすには瞬く一閃に2度振ると言う矛盾に似た神の如き業が必要。

もしくは左腕の爪と右の零落白夜で同時に切り落とすか。

しかし斬り落とした所で何になるのか、翼は体中から生えている。全てを同時に切り落とす。そのような次元を斬る様な悪魔染みた業など出来る者はこの世にいない。

なれば零落白夜を敵の身に突き立てるのが唯一の有効な攻撃方法ではないのだろうか。

しかし。

「くっ、足りねえ…!! 畜生、諦めれるか!」

エネルギーが凄まじい勢いで消費されていき、余裕が一切無い状態だった。

「一夏ッ!」

「箒?! お前、どうして! エネルギーは、ダメージは?!」

「大丈夫だ! そんなことよりコレを受け取れ!」

箒が一夏に触れる。黄金の粒子を零す紅椿が白式・雪羅に触れる。その瞬間、一夏の身体を衝撃が貫いた。

「な、なんだ…! エネルギーが…回復、してる?」

「今は考える暇など無いだろう? 行くぞ!」

「お、おう!!」

『L a l a l a l a …… L a 』

砲撃する翼を斬り落とし、翼を砕き、銀の福音を弾き飛ばし遂にその刃を銀の福音へと突き立てた。

銀の福音が謳い、体中の翼を一夏へ突き刺すべく大きく広げる。

しかしその一翼たりとも刺さる事は無かった。マシンガンによって、巨大な刃によって、電撃を纏った巨大な銃弾によって、亜音速のレーザーを纏った銃弾によって、凄まじい速度で連射される荷電粒子





1 1 1 0 0 1 1 1 1 0 0 1 0 1 1 1 0 0 1 0 1 1  
0 0 0 0 1 1 1 1 0 0 0 0 1 1 0 1 0 0 0 1 1 1 0  
0 1

「機体名はNine-Ball（ナインボール）!!」

シャルロットの言葉と共に体勢を立て直した福音が1対の羽をフワリと羽ばたかせその場から消えた、正しくは凄まじい速度で瞬間的に加速しISのサポートを受けた人でさえ知覚出来なかっただけだ  
が。

しかし専用機持ちの中でただ一人セシリアのみが消えるように加速した福音を意識で追うことが出来た、だが所詮意識で追うことが出来ただけに過ぎない、身体が付いてゆく事は不可能だった。

銀の閃光を引き赤い閃光と凄まじい勢いでぶつかる。凄まじい速度と質量の衝突により専用機持ちたちを数メートル引かせる衝撃波が発生した。

「つぐ…！ なんだ?!」

「あれは…あの赤いISは…?!」

「そんな、有り得ない。アレは、アレはISなのか…?」

福音の片羽とブレードで鏝競り合う赤い機体、生物的な羽の生えた福音とやりあえる事も異常だが、それ以上にその機体は人が操縦するには余りにも異質だった。

まるで人が入っていないかのように腕が、足が、身体と機械的なジョイントで離れている。まるでそれは……

「無人機…!!」

赤い機体が福音の羽を押し返し右手に持つマシンガン……否、常軌を逸した連射能力を持ったパルスガンを近距離から浴びせる。

雨のような連射を受け少なからずダメージとなった福音が舞うようにクルリと回転し、回転を終えると同時に片羽で右腕を掃う。

専用機を一撃で撃破するその攻撃を受けながらも流すように赤い機体が回る、その腕には浅い傷だけが走っていた。

受けた攻撃の力をそのまま利用するように回り、赤い機体が左腕のレーザーブレードを振る。

『A h h h』

いとも容易くその攻撃をフワリと宙に舞う羽のように回避した福音。

しかし回避し終えた福音の頭部にはグレネードランチャーが突きつけられていた。

砲口から炎を上げ、榴弾が福音の頭部に着弾、凄まじい勢いで吹き飛ばされ距離が離れる。

「ナイン……ボール……、どこかで……」

「しっかりしろ、更識！ まだアレが敵か味方かも不明なのだ、何時こちらに向かってくるとも知れん！」

「ご……、ごめん……！」

簪にはその名に聞き覚えがあった、それは更識家関係だったか、それともただの会話だったか、インターネットでの事だったか、本だったか、それともただそのままビリヤード関係のことだったか。

「シャルロットさん何も分からないのですか?！」

「分かるのは機体名だけなんだ！ 所属も搭乗者も敵対友好の信号も何もかもが不明！ 武器だって見た目から推測しただけだよ！」

「少なくとも今は敵ではない……か。だが」

味方でもない、こちらの行動か、あちらの気まぐれか、それだけで敵対するかもしれない。そうなれば福音の時と同じようにいとも容易く蹂躪されてしまうだろう。

『A h h h……A h h……』

福音が謳い、ゆつくりと両羽を大きく広げる。その姿はまるで天使のような神々しさだ、しかしその両羽から何かが総8つ迫り出し形作る。

ソレはシャルロットが使用したショットガンの形状に似ていた。

赤い機体がパルスガンを連射し横へと移動を開始、しかしそれは何の意味も成さない行動。

8門の砲口からエネルギーで構成された大型のフレシエット弾が

放射状に撒き散らされる。

赤い機体に着弾すると同時に炸裂、ソレが止むことなく8門の砲口からマシンガンを思わせる速度で連射された。

もはや爆炎が赤い機体を覆い隠し、姿の影すら見えないにも係わらず一切の容赦なく次々と弾丸が吐き出される。

ようやく福音の攻撃が止んだのは凄まじい攻撃により砲口自体が耐え切れず木っ端微塵に吹き飛んだのがきっかけだった。

しかしそれすらもダメージではないのかボロボロになった砲塔が羽の中へと溶け込んで行く。

「あんなの喰らったら……！」

ひとたまりも無い、どころではない。ISであつても肉片一つ残さず消し去られるだろう。

ソレほどまでに恐ろしくおぞましい、また悪魔のような天使の攻撃だった。

黒煙がある一点を覆う、否。もはや黒煙単体といった方が正しいほどに深く黒く立ち込める中、黒煙より白い線が複数天へと伸びる。

同時に凄まじい連射能力を誇るパルスガンが黒煙から福音へと走った。

それはまだ赤い機体が墜ちていないどころか戦闘能力を有している事の証左に他ならない。

『A h …… A h h …… A h 』

パルスガンをふわりと宙で返るように回避した福音が謳う。

それを合図のように甲高い音を残し、レーザーブレードの赤い線を引き赤い機体がパルスガンを連射したまま凄まじい速度で福音へと肉薄する。

パルスガンの被弾に一切構うことなく福音が右羽を変質させ始めた。

ゴキリと生物的な音を響かせ猛禽類を思わせる鋭い爪を持った腕を形成する。

その背に生えた右腕は細く、振るだけで折れてしまいそうな見た目でありながら恐ろしく禍々しい。

赤い機体のレーザーブレードが伸びる左腕が福音の首を刈り取らんが如く振られ、対照的に福音の背に生えた右腕がその鋭い爪で赤い機体を八つ裂きにせんと迫る。

両者がほんの少し下がりがりながら武器を振ったためそれぞれの身体に突き刺さり斬り裂かれることなく打ち合わされた。

福音の背に生えた腕が見た目に合わず赤い機体と直角に打ち合う。理解不可の認識外の速度で何合、何十合と打ち合いが始まる。

それが打ち合いだと理解できる理由が赤い機体のレーザーブレードが引く赤い光の線と打ち合いの際に光る火花に似た閃光、そして途切れる事の無いチェーンガンが分厚い鉄板を叩くような音であったからだ。

遂に音と閃光が停止、そこに現れた漸く動きを止めた赤い機体と腕を生やした福音。

赤い機体の表面には幾つもの深い亀裂が走っている。流石に福音の撒いたフレシエツト弾は軽いダメージで済まなかったのだろう。

『A h h h h h』

押し、押され、双方が爪と赤い刃を鏝競り合う、しかしソレは長く続く事は無かった。

爪の生えた腕が赤い機体の左腕ごとレーザーブレードを弾く。

『A h h h h h』

後ろへと大きく引いた腕を、爪を、赤い機体に突き刺すため振り、赤い機体のボディを無残に貫く寸前、福音の背が炸裂し動きが止まった。

見れば福音の背から上空へと白い線が伸びている。否、正しくは上空より福音の背へと白い線が伸びていた。

それは赤い機体が黒煙の中で放ったミサイルだった。

動きが止まった福音を赤い機体がブレードで斬りつけ、蹴り、弾き飛ばす。

飛ばされる福音の背に生えた右腕が再度生物的な音を響かせ羽へと形を戻した。

「軍用機などと言う枠では収まらないぞ……これは！」

赤い機体の背より何度も上空へとミサイルが撃ち出される。

空中で体勢を立て直した福音、その背に生える羽がいつの間にかそれぞれ3本、系6本の巨大な銀色の刃となっていた。

福音がその場で縦、横と身を翻せば刃より巨大な光刃が三撃つつ撃ち出され、網のように重なり上空へと飛んで行く。

その網が赤い機体の放ったミサイルを一つ残らず破壊しつくした。

「まさか……まさか福音は、奴は……!!」

「僕達の攻撃を……コピーしている……?!」

赤い機体がミサイルが全て壊された事を気にも留めずパルスガンを連射する。

福音が6つの刃を交差させ巨大な盾のように扱い、そのまま消えるように加速、赤い機体へと迫った。

そのまま盾のように寝かしていた刃を前方へと向け、左の刃を左下へと振り下ろし、同じように右の刃を右下へと振り下ろす。

×字に斬りかかる福音の上を回転し飛び越えるような急加速により難なく回避した赤い機体が逆さのままグレネードランチャーを福音の背へと直撃させ、吹き飛ばした。

飛ばされた福音が体勢を立て直そうともせず、6本の刃を届かぬ赤い機体へと突き出した。

その刃の周囲に数え切れないほどのエネルギー球が発生し、レーザーとなって赤い機体へと殺到、避ける事が出来ず直撃した衝撃をを持ったレーザーにより錐揉みに吹き飛ばす。

『Ah……Ahhhh……Ahhh……』

刃が重なり、再度一对の羽へと変化。間を置かず羽が二つに分かれ総4つの砲口を作り出す。

体勢を徐々に立て直しつつある赤い機体が破損したためか、それとも弾が切れたためか背のミサイルをパージした。

続いてレーザーブレードを展開し、体勢を立て直すと同時に福音へと加速する。

福音の羽を変化させた4門の砲口から電撃を纏った弾丸が赤い機体へと幾つも飛んだ。



音速を遙かに超える弾丸を赤い機体は難無くレーザーブレードで斬り裂き、福音へと迫る。

『A h h——』

福音が砲塔を羽へと戻し、防御体勢に入るより早く赤い機体が目の前に飛び、レーザーブレードを振りかぶっていた。

右斜め上より左斜め下へと斬り下ろす様に一閃、連続してパルスガンを下ろした状態から振り上げるようにフルオートで撃つ。

身をその場で翻し一回転しながら膝での蹴りを放ち、福音との距離を離す。即座にグレネードランチャーを構え一撃、二撃、三撃、福音が爆煙に覆われても構わずにグレネードを撃ち続ける。

遂に全ての榴弾を吐き出したのか砲撃を止め、背部へと収納し、様子を見るかのように滞空。

福音のいた周辺が黒い爆煙で覆われ一切の透過を許さない。しかし、急に暴風が吹き荒れ黒い煙を斬り裂くかのように散らす。

そこには1対の羽をボロボロにした福音が佇んでいた。

『A h h…A h——…R r h a……』

福音の詩が再度変わり、ビクリと震えると福音の羽が「1対」から「2対」へと増えた。

ソレと共にボロボロになった羽が瞬く間に修復されて行く。更なる目に見えるほどの出力の増加を伴いながら。

全員のISが捕らえた出力は1対よりも倍…否、「乗」ほど大きかった。

『k i…g a……』

ゆつくりと、鳥が舞うように赤い機体へと移動を開始する福音と対照的にレーザーブレードを展開しながら赤い尾を引き、パルスガンを連射し、福音へと迫る赤い機体。

羽の一枚を使い、軽く風を起こすかのような動きをする。ただそれだけでパルスガンのエネルギーが全て霧散し、消え去った。

更に赤い機体が自らを加速させレーザーブレードでの刺突で福音を羽ごと串刺しにせんと迫る。

だが刺突が福音の羽一枚に触れた瞬間まるで時が止まったかのよ

うに赤い機体が静止した。

貫く事も切り裂く事も切つ先が埋る事さえも無くただ静止。

『nozes...:yor...』

福音が右羽を二枚、振れさせ無理やりのように見える形で結合させ、煉り固め、一つの巨大な羽へと変化させる。

その巨大な羽がフワリと羽ばたくように赤い機体へと叩きつけられた。

赤い機体が即座にブレードを収納し、左腕でその攻撃を受け止めようと伸ばす。

その直後赤い機体の左腕が砕け、千切れ飛び、赤い機体自身も赤い破片を撒き散らしながら宙を舞う。

それを悠々と眺めながら福音が防御にも使わず、攻撃にも使わなかった残り一枚の羽を変化させ、一つの砲口にした。

『omnis』

ただ一発だけその砲口より砲撃が放たれる。それは巨大で紅く、余りにも強すぎる砲撃だった。

赤い機体に着弾した砲撃がエネルギーの球体となり赤い機体を一瞬包み込む、光が消えた所に映るのは残った右腕も千切れ粉碎され、片足も吹き飛び、背部のグレネードランチャーが砕け散っている赤い機体だった。

ボディから爆発を何度も起こし重力に引かれ海へと赤い機体が消えていく。

『Ma...num...:wa...』

「まだ、まだコレほどまでに...?!」

『引け！引くんだ、全力で撤退しろ!!』

通信に千冬の声が響く、その声はどう聞いても平時の彼女には合わぬ焦燥しきった声だった。

無理も無い、もはやこれはIS学園で解決できる事ではない。全ての国の優秀なIS操縦者を掻き集めても福音を撃破する事は難しい。否、不可能だ。

ソレほどまでに圧倒的な力の差、もしこの場にいる全員へと矛先が

向けられれば30秒と持たない程の凄まじい差。

「でも、だけど！ コイツを放って置くと…!! 千冬姉…!!」

『それでもだ！ お願いだ、一夏！ お前が死ぬ所は見たくない、考えたくも無い……!!』

「千冬姉…多分、こいつに効果的なダメージを与えられるISは、俺しかいないんだ…だから、ごめん。大好きだよ、千冬姉」

『一夏！ 待て！ いち——』

一夏が一つ息を吐き、雪片式型を握る手に力を込める。目をゆつくりと開くと覚悟で満ちた眼差しだった。

病院、信一郎が亡くなったショックに泣き叫び、その末気絶した麗羅を支え、一時的に部屋の外へ連れ出すため医師と信一郎の父が共に部屋を出る。

それは1分にも満たぬ僅かな時間だった。

しかしその一分に満たぬ僅かな時間で状況は異常事態へと変わる。病室に戻った医師が目にしたのはたった今亡くなったばかりの信一郎がベッドの上に、部屋の中に、居ない状況だった。

ただベッドは融解し、壁が球状に消滅し、何かが起こったと言う事だけは理解できた。

——織斑 一夏——

見栄を張ったもののどうも勝てるビジョンが全く浮かばない、恐怖は無いが危機感は十二分にある。

でも、零落白夜を持つ俺が、俺が成すべき事なんだ…

「悪い、先に帰っててくれよ。俺はコイツを倒したら、ゆつくり帰るか  
ら」

全員がポカンとした表情で俺を見ている。そりやそうだ、俺だって  
そうするだろうし。

「驚いたな。一夏、お前：一人だけで福音に勝てると思っっているのか？」

「ははっ、厳しい言葉だな箒。まあ期待して待つてくれよ」

「はあく…箒さん。そのワンオフアビリティはわたくし達の機体に使えますか？」

「…？ セシリア、何言って——」

俺が言い切る前に箒がセシリアに触れる。なぜそんな事を…？

「すまないが籐ノ之、ここにいる全員に頼む、どうやら私含め馬鹿ばかりのようだ」

「アレに一人で勝てると思っっているなら最高のコメディ―センスだよ、一夏」

「アタシ達が援護するわ、アイツを叩き斬りなさい」

もしかして、全員戦うつもりか?! アレと!!

「な、何言ってんだ！ アレは俺が、俺がやるべき——」

「信一郎に…、一撃も当てれず…落ちたくせに…」

「つぐ…」

好き放題言ってくれる、アレは近づけすら出来なかっただけで…それが致命的なんだな。

「わかった。でも全員、絶対に死ぬなよ」

「勿論よ、とつととブツ倒して大手を振って帰るわよ、籐ヶ崎の敵討ちのためにも…ね」

箒が全員のISに触れ俺の横へと並ぶ、どうやら準備は完了したようだ。

「よし…じゃあ用意はいいか？ 行く——」

『力を持ちすぎたもの』

突然に男と女の混ざった人に出せない声、まるで機械音声のような声がオープンチャネルに割り込んでくる、全員を瞬間的に見回せば俺だけに聞こえた訳ではないようだ。「それ」に反応したのか銀の福音が聞き入るように停止した。

『秩序を破壊するもの』

「何だ…これ…?!」

「反応確認！ 海中だよ!!」

シャルの声に従って銀の福音と戦闘中だった事さえ忘れ、海：さっきの無人機が墜ちた場所へと無意識に注意を向ける。

『プログラムには、不要だ』

「何よ、何なのよ……!!」

「こ、れは…そんな、私が…震えて…?」

言い知れない感覚が身体に染み入ってくる。もし、もしさっきの無人機なのだとしても…おかしすぎる。

『修正プログラム、最終レベル』

クラス対抗戦に飛び込んできた無人機の時も、俺が死にそうになった目の前の銀の福音も、危機感があった。

けど、今はそうじゃない、途轍もなく…怖い。

その恐怖は、機械だとは思えないほどに、心の奥底を突き刺してくる。

『全システムチェック終了』

誰も動かなかった、いや…動けなかつたこの空間で唯一つが大きく動き始める。

目に見えるほどガタガタと痙攣しているんじゃないかと錯覚する程震えるその唯一つ。

俺でも、箒でも、鈴でもセシリアでもシャルでもラウラでも簪でもない。

圧倒的な戦闘能力を持っていた他でもない「銀の福音」だった。

『戦闘モード、起動』

『!!!!!!』

今まで歌のように、名の通り福音を奏でていたとは思えないような叫び声を上げ、2対だった羽を3対へと増やし持ちうる全砲塔を無人機が墜ちた海面へ向け乱射する。

直後ISが銀の福音のエネルギーが馬鹿みたいに増強されたと知らせる。

大きく飛沫、いや水柱を作り、それでもまだ足りないと言わんばか

りに直撃すれば一撃でISを葬り去る大火力を海面に、その奥の海中に撃ち続ける。

その水柱に混ざって赤い閃光が真上へと伸びた。

『ターゲット確認』

銀の福音が声に反応し銀の鐘を止めハイパーセンサーを忘れていくかのように目線を飛び出した赤に向ける。

『排除…』

空まで視界を遮る水柱が消えた銀の福音と同高度の場所にはさっきの無人機と似た恐怖を形にした何か…

『…開始』

居た。

—Third Person—

『zoda w zoda w zoda w zoda w iem』

3対に増えた羽を全て砲門に変化させ、紅くなった巨大なエネルギー弾をマシンガンの如く放つ、もし一撃でも掠ればISでさえ木っ端微塵に破壊するだろう威力の弾丸を形の変わった赤い機体へと。

赤い機体が微動だにせずその理不尽とも言えるほどの暴力の嵐を受ける。

「…まだ、まだだ。これほど…震えるなど…!!」

ラウラがまだ赤い機体は落ちていない、と無意識に察した。

事実、その暴力の嵐が去った後に赤い機体が姿を現す。一切ダメーシを受けた様子の無い完全な無傷な姿で。

「そんな…シャル! あの無人機のデータは?!」

「待って、今! ……出た…! ……熾天使?」

「どうしたんだ?!」

「あ、出たけど名称が変わっただけ! のこりは一切不明だよ!!」

「し……てんし……?」

簪が呟くのに重なり福音が絶叫を上げ6枚の羽を全て捻り合わせただ一つの巨大な砲口へと変化させる。

だが赤い機体はただ視線をその砲口へ向けるのみ、それ以外の行動

を一切行わない。

『deata degle endia dople』

ただ一撃の圧縮させた、破壊力唯一つを求めたエネルギー弾を叫びと共に赤い機体へと吐き出した。

赤い機体が漸くゆつくりと動き始め、右腕を前に出し拳を左へと向ける。

右腕から紫のレーザーブレードを展開し、ただ無造作に右へと振り、エネルギー弾を斬り付ける。

それだけで触れる物全てを消し飛ばす威力を持つエネルギーが霧散し消え去った。

つづいて両手を前に突き出し、手を開き、その両腕からエネルギー弾を発射する。一発二発ではない、10発でも、100発でもない。無数の弾丸が数秒で吐き出され続けた。

弾速は速いが、今の福音に避けられぬ速度ではない。だが、それでも、どれだけ回避しようと、必ず半分は当たるのだ。

福音が全ての羽を大きく開く、防御を捨てどうあつても赤い機体を撃破する事にしたのか羽からショットガンの砲口を作り出す。

赤い機体が両腕を握り、その両腕からレーザーブレードを発生させた。

しかしショットガンを例え両手であろうとその銃弾を全て切り落とす事など不可能に近い、故に赤い機体は「その場で」両手のブレードを振った。

閃光が正に光の速度で福音の1対の羽へと走る。抵抗も無く、まるでただ最初からそうであったかのような自然さで最上部の羽が二つ、根元から離れ、消えた。

直後、衝撃波が福音を打ち、弾き飛ばす。それは衝撃と言う波を持つ光、光波であった。

赤い機体がゆつくりと前屈みになる。それはランニングのように走る用意をする人のような、ごく自然な人の動作。

すると赤い機体がただ悠然と浮かぶ光球と光の爆発を残して消え、遥か離れた場所に再度姿を現す事無く爆発と光球を残す。

幾つも爆発と光球を残し、雷のような軌道と速さでそれが現れる、弾き飛ばされた福音へと。

ただ、それは福音を捕らえず、遙か向こうへと走っていった。

福音がクルリと回転しながら体勢を立て直す、すると今度は後ろから何かにぶつかられた様に、弾き飛ばされた場所へと巻き戻しのよう

に飛んでゆく。

それは福音の背へと体当たりをした赤い機体の所為であった。しかしその姿は人型ではなくただ高速で飛ぶために特化させたような姿。

音速の数倍以上の速度、銃弾をも越える速度で人ほどもある質量の物体が直撃すれば如何に福音と言えど耐え切ることは不可能、受け止めることが出来ないのは当然の結果だった。

赤い機体が凄まじい速度で人の形へと戻り福音を弾き飛ばす、福音が羽を再生させつつ見るからに出力をブレーキに振り、空中で静止、赤い機体への反撃へと移る。

前に数多の方向よりエネルギー弾のマシンガンに晒されて蹂躪され、攻撃を中断させられた。

赤い機体が残した光球よりエネルギーマシンガンが福音へと攻撃を行う、それは所謂ビットであった。

福音が全身の防御のため羽で身体を覆う、その防御によりマシンガンの攻撃は福音へと通らない。

羽で覆われた福音の機体自身を目視する事は出来ない、ソレほどまでに隙間が一切無い防御、しかし逆に言えば福音からも赤い機体を目視する事は出来ない。

それは致命的な隙だった。

赤い機体の背部にある巨大なスラスタ―上部ハッチが開く、そこから垂直に十何発もミサイルが打ち上げられる。ある一定地点に到達したミサイルが殆ど角だと言っているほどに福音へと凄まじい速度で直進、防御を解いた福音の眼前にミサイルが迫った。

消えたと錯覚する速度で福音が回避、しかしまるでどのような軌道を描き、どのような地点に移動したかを全て把握しているような動き



でミサイルの軌道が曲がる。

迎撃すべくショットガンのような瞬間火力をマシンガンのようにミサイルへと吐き出す。

だがエネルギー弾はミサイル唯一つとして迎撃する事は出来ない、ミサイルが全て意思を持つているかの如く動き、弾丸の尽くを避けたのだった。

ならばと福音が羽を使い、ミサイルを包み込み、磨り潰すかのよう  
に破壊。それを全て確実にこなし、ミサイルの数を減らしてゆく。

遂に最後のミサイルを破壊し、爆発を挟んで赤い機体と福音が睨み  
合い、爆煙が晴れたとき、そこに赤い機体の姿は無かった。

認知できない速度で移動しているのではない、レーダーの範囲外に  
逃げた訳でもない。

視認不可、反応無し、まるで最初から何も無かったかのように消え  
たのだ。

福音からは本当に消えたようにしか見えない、だが専用機持ち達は  
赤い機体が消える瞬間を見た。

赤い機体にノイズが走り、そのノイズにかき消されるかのように赤  
い機体が消えてゆく、ノイズが赤い機体を塗りつぶした時にはその姿  
はもう無かった。

「ステルス…?!」

「エネルギー反応も熱反応もIS反応も何も無いなどと…馬鹿げてま  
すわ…!」

『R r h a———』

福音が詩を発した瞬間、何かの衝撃を受けたかのようにガクンと揺  
れ、そして呼吸が出来ない人のように両手で喉を掻き巻く。

否、首を絞める何かを必死で剥がしているかのような動きだ。

突如福音の前の空間にノイズが走り、ソレはゆっくりと姿を現す。

右手で福音の首を締め上げ、何の感情も感じさせないアイセンサー  
を煌かせた赤い機体。

驚異的な強さを持つ福音をまるで赤子の手を捻るのと同義だと言  
わんばかりの規格外の強さを持つ「ソレ」は形容するならば…

「最強つてーの？ ふざけてるじゃない…！」

福音が全ての羽で赤い機体を包み込む、零距离からの全出力による掃射、異常とも言える火力をただ一機の敵に向かって全力で放つ。

福音の羽から漏れるほどの光が溢れ、攻撃が成功した。

かのように思えたが、それは否定される。

福音の羽が無残にも無数に千切れ飛び、ただ悠然と姿を現す緑の電撃にも似た球を纏った赤い機体によって。

それは専用機持ちが見た事のある物、紛れも無くカラードのACに搭載された――

「プライマルアーマーかつ!!」

「という事はあの無人機はカラードの?!」

羽が全て千切れ飛び、消失した福音がプライマルアーマー展開時の衝撃により掻き巻く手を弾かれる。

そのまま左手が福音の腹部へと添えられ、零距离よりエネルギー弾を撃ち込まれる。連射式とはいえその一発の威力はIS用スナイパーライフルと遜無い、そして攻撃の術も抵抗の術も消失している福音が逃れる事は不可能。

先ほどのお返しだと言わんばかりに福音の周囲を幾つものビットが旋回。

一切の間を置かず全てのビットから福音へとレーザーが照射され、ビットが消える。

『まもる…まも…る…ま…ま…マス…タ…ー…』

ビットが消えるのと同時に福音の機体が光の粒子となり消えた、遂に稼動限界を迎えたことを現していた。

「ナインボール…、熾天使…、カラード…、最強…もしかして…!!」

「福音を倒した…!!」

「デュノアさん…! ああの機体の名前つて…、ナインボール・セラフ?!」

「そ、そうだけど――」

「やっぱり！　じゃあ、じゃあつ……!!」

突如赤い機体、熾天使が福音の操縦者である女性を右手で持ちながら左手を下ろし、拳を握る。これから起こることを簪以外の全員が容易に想像した。

「まさかアイツ！　あの無人機ツ!!」

左腕から紫のレーザーブレードが伸び、ゆっくりと福音の操縦者へと向ける。

「てめえええええええええエエエエエエツツツ!!!」

一夏が吠え、瞬時加速を行いながら手に握る雪片式型から放射される零落白夜で、紫のレーザーブレードを福音の操縦者を貫く前に消し去った。

続く二閃目で熾天使を斬ろうとするが福音を相手にしていた熾天使が一夏の剣筋を捕らえれぬ筈は無い、福音の操縦者を離し、後へと下がって剣戟を回避する。

「つく！　よし！　掴んだわ！」

鈴音が海へと落ちようとしていた福音の操縦者をキャッチする。

「待って！　待って織斑君!!　ソレは信一郎なの!!」

「な、そんな筈……」

「だってソレは信一郎が……！　信一郎の……っ！」

「落ち着け！　更識簪！　それが籐ヶ崎である筈が無い!!」

「なんで?!　どうして?!」

熾天使が自らの左腕を見て紫の光を出し、消し、を何度も繰り返していた。

「よく、よく聞きなさい！　籐ヶ崎は、アイツは死んだのよ……!」

「そんなの、ありえない……ありえない、ありえない！　ありえない!!」

耳を塞ぎ、拒絶の言葉を叫ぶ簪を全く気にせず熾天使は一夏へと視線を向ける。新たな獲物を見つけたかの如く。

『……排除開始』

「来るぞツ!!」

「援護しますわ!!」

ただ悠然と佇む熾天使へとセシリアがライフルを撃ち込む、実弾兵器でありながら強力なEN兵器でもあるそれはプライマルアーマーを抜くのに適した兵器。

の筈だった。

その銃弾は熾天使の装甲に弾かれるなどという生易しいものではない、PAを抜く事はおろか減衰させることさえ不可能だった。

「織斑先生から連絡があつたんだ！ シンが息を引き取つたつて……！！」

「嘘！ 嘘、嘘、嘘!!! 信じない！ だって、だって信一郎は……！！私を救ってくれた、ヒーローなんだもん!!! だから!! だから……！」

不確定要素の一夏以外熾天使のプライマルアーマーを抜いてダメージを与えられる専用機はこの場に居ない、だが不確定要素である一夏を優先的に撃破するにしても周りが邪魔だ。

ならば容易に撃破できる周囲の専用機持ちを狙うべきだろう。

その中でも尤も容易に撃破出来るのは耳を押さえ縛るように言葉を漏らし、一切動かない簪だ。

熾天使がまず最初に狙いを定めたのはその簪だった。

消えるように簪の前へと躍り出て簪を見下ろす。

ゆつくりと右腕を挙げブレードを放出、これを振り下ろすだけで簪は絶命するだろう。

「おおおおおおおおああああああああああアツツツツツツツツツ!!!」

もはや予知にも近い見極めによる速度で現れた熾天使へ! エネルギーの殆どを使い潰す気で瞬時加速を重ねる。二度、三度、四度、だがあの福音よりも遙かに遅い、奇跡でも起きねば間に合うはずが無かった。

「そうだよね……? 信一郎……」

『…か……………んぎ……………し……………？』

簪の言葉に熾天使が止まる。言葉として聞き取るのが難しいほどおぼろげに簪の名を呟いた。

「あ、ああ…!! 良かった——」

簪が表情を変えた瞬間、「ぞぶり」と音を立て熾天使の胸から光の刃が生えた。

同時に飛び散った赤い液体が簪の顔に、ISに、化粧のように、ペイントのように色をつける。

熾天使の背後には零落白夜を放出した雪片式型を握る一夏が居た。雪片式型を伝う赤い液体に白式が反応し、一夏へと情報を送る。

『解析完了ブラッドタイプ「B」』

記憶領域より一致データを検索

検索完了

DNAデータ一致

籾ヶ崎 信一郎』

供給エネルギーが失われ雪片式型がただの実体ブレードとなるの  
と同時に、心臓の鼓動のように血を噴出す熾天使、信一郎を見た籾が――

「あ、ああ…!! いや、いやあああああああああああああああああ  
あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ  
ああああああああああああああああああああああああああ  
!!!!!!!」

384

――叫んだ。

その刃は確実に心臓のある場所を胸の中心を貫いている。生存を  
望むのは誰が見ても不可能だ。

籾がその両手で傷口を押さえ、必死で流れ落ちる血を止めようとす  
るが指の隙間から滝のように夥しい量のドス黒く、鮮やかな赤が流れ  
る。

『い、ちが……』

確かに信一郎の声が頭部装甲から漏れた。一夏はソレを聞き放心  
状態から引き戻される。

「あ、そんな…シン…？　嘘だろ…おい！　おい!!」

『ごご、までが…ゴポツ、ヒュー…おれの…や、ぐめ…』

頭部装甲の隙間から、命が流れ落ちて行く、喋る度赤い粒が飛ぶ。

『ごご、がらは…おま、ゲホツ…えの…やく…め…』

「おまえ、そんな…どうして…!!」

「嫌！　イヤあ!!　止まって！　止まってよお!!」

震えるように手を頭部装甲へと伸ばしゆつくりと外す。それを持ち続ける力は最早無い、海へと頭部装甲が落ち、その前に光の粒子となつて消えた。

「これ…で、…いい…ガハツ!」

「嫌だ！　いやだ、行かないで…しんいちろう、いかないですよ…!」

口と鼻から夥しい量の血を流し、目もどちらを見ているのか分からないほど虚ろだ。

頭部装甲を持っていた手をゆつくりと簪の頬へと添える。

簪の顔を自身の顔へと向け、力無く簪へと口付けをした。

「すまん、な…ファース…ごふつ…ト、キ…スが…血の、あ…じで」

「あ、ああ…死なないで、しなないでえ…!」

「キ、ヒヤハ…なに、泣いで…んだ…かんざし、わらっ…でる、ほう、が…かわ、いい…じゃね、えか」

頬に添えた手の親指で簪の目元を拭う。

「かん…し…あい…し…て…」

簪の肩に頭を落とし、蚊の飛ぶような細かい声で伝え、言い切る前に事切れた。

赤い装甲は消え、両腕両足を失い背に刀が突き刺さっている悲惨な姿となつた信一郎を簪が抱きとめる。

「つふ…うあ、ああ…あああ、ああああああああ!!　ああああああああああ!!!」

突き刺さった刀をゆつくりと引き抜き、その動かず、物言わぬ亡骸となつた体を掻き抱き泣き叫ぶ。

「俺の、俺の所為で…シン、そんな…」

「……なんで、シンが…!」





目を見開きゼエゼエと息を荒げる籐ヶ崎信一郎へと。

「あ……、あ……、ああ……！」

「つふう、よお簀、元気か？」

「!!!」

「うぐえ！」

信一郎が簀の抱擁で珍妙不可思議な声を出した。

—Third Person End—

「っだはあっ!!」

急に意識が覚醒したと同時に途轍もなく胸が苦しく感じる。やつべ死ぬかもしれない。

思いつきり息を吐いて何とか呼吸を確保、ふう助かった。

「死ぬかと思っただあ!!」

本当！ いやいや助かってよかったよかった。

まだ苦しいかしもうしばらくゼエゼエしとこう、部屋を見回すとおやおや、どうしたのかしら皆さん。まるで信じられないものを見たような顔をして。

んぐ、胸が重い（物理的な意味で）何だ一体。

「あ……、あ……、ああ……！」

あららん、簪ったらボロボロ涙なんか流しちゃって、笑ってる方が可愛いって言ったのに、んもう。

あ、いやいや、泣いてても十二分に可愛いけどね。

やっぱさ、笑ってる方がいいよね、愛する人はさ。

「つふう、よお簪、元気か？」

元気ならスマイルスマイル、ほーら、こっちだこっちい、見えてるー？

「——!!!」

「うぐえー！」

簪がすつげえ言葉に出来ない声と共に俺の頭を抱きしめたでござるの巻。

うわあ、顔面の前が柔らかいナリイ…簪のおっぱい柔らかいナリイ

…

デカけりや良ってもんじやないって事を肝に銘じておいてくださーい！ 女性の敵ですよー！

あのね、対比的にすんげー巨乳の本音ちゃんと一緒にいるから小さいって思われがちだけどさ。そんな事ないんだよね、本音ちゃん普通にFオーバーだからさ、少なく見積もっても簪の胸ってDは確実にあるんだよ。

でね、その割と大きいマシユマロが俺の顔面を埋めてるのよね、しかも俺氣づけば義手も外されてるし右腕も無くなっちゃったしで抵抗できないんだよ、ついでに言うときつきまで呼吸かなりキツかったから肺に空気全然入ってないんだよね。

「良かった…！ 良かった…!! しんいちろお……!!」

(ロシア国家)代表、見ているか！ 貴様(自身)の望み通りだ！ だがそれでも、勝つたのは(窒息しかけている)我々だ!!

あ、駄目だ、死ぬそう。愛する人のおっぱいで窒息死とか幸せすぎるだろ俺。

悔いはねえ、楽しかったぜメルツエル……

「…ハッ！ さ、更識さん落ち着いて！ シンが窒息しかけてるよ!」

「え、あ！ いやああああ!! 死なないでえ!!」

「何か口から白い半透明な風船みたいなのが出てる?！」

「それきつと魂よ！ 押し込んで押し込んで!!」

何か頭を押さえ込まれて何かに突っ込まれた気がする。

「もう、もう訳が分からん…だが。全員注目！」

んぐおあ？ おやちつふーじゃないか、相も変わらず不つ機嫌そうな顔してるなあ。

「もう、何と言ったらいいのか分からんが…とりあえず任務終了だ。諸君のお陰で銀の福音も無力化し操縦者を保護する事も出来た。それに何より、全員が最終的には生きていた、これほど喜ばしい物は無い」

「ところで誰か俺の義手義足を取ってくれ、身体も起こせんから角度的にちつふーが見辛い」

「ん…どう…?？」

簪が俺の後に座り俺の身体を持ち上げ膝で俺の身体を挟み込み腕で俺を抱きしめるようにして支える。

うむ、これでちつふーの顔がよく見える。

でもそれ以上にね、簪のおっぱいがね、後頭部に当たってね、おっぱい枕がね、すごい。

(ロシア国家) 代表、見ているか！ 貴様 (ry

俺もう達磨でいい (開き直り

「事後報告となるがよく聞け、籐ヶ崎。お前は作戦開始時より数えて2度死んでいる。正確には2度心臓が停止している。だが何故か今はこうして生きている、心当たりはあるか」

「ワタシハ、ナニカ、サレタヨウダ、ニンゲンデハ、ナクナツていだっ！」

「真剣な話をしているんだ」

「ああ、否。皆目見当付きませんな」

なんだろうね、本当。とりあえず分かった事はスキルレベルが上がって概念を創れるようになった事ぐらいかな、うむ。

あとその概念精製で俺の概念に「不死」が加わった事ぐらいしか分

からない。

はいどう考えてもコレです。本当にありがとうございます。

どうしよう、神様レベルになっちゃったよ、いいんですかこれ。

「あ、簪。俺血だらけだけど触って大丈夫なのか、真っ赤に染まるぞ。いや、もう止まってるけど」

「大丈夫……、一緒に居れるなら……、なんだっていい……」

「いえーい、見てるー？ 俺達ラブラブー」

「殺すぞ」

「殴りますわよ」

「蹴るぞ」

「引っ叩くよ」

「え、えと……えと……つ、抓るわよ！」

はい鈴音の勝ちー。

コレがお前達の差だ、分かったかね。

「おい、いっちー。俺の義肢取って……」

「ふん、ラブラブ？ だからどうした、私は一夏とラブラブだ。お姉ちゃんの愛で一夏を染めるぞ」

「い、息っ！ 息がっ！」

俺が簪にされていたことと同じ事をされている、お前には腕が付いてるのに……

「う、ん……はい……」

「ああ、簪。ありがとな」

簪が俺を支えたまま片手を伸ばして俺の左腕を取ってくれたらしい、ありがてえ……

とりあえず芋虫の如くズルズル這って左腕を装着、よし、あとはテケテケみたいに這い回って脚を回収すればよからう。

「ん、あれ……？ おかしいな……よっ！」

何か駆動出力と反応がおかしいからグイッと地面に手をつけて身体を支え……れない!!

思ったとおり動かない！ 不思議！

「マジかよ……動かん。こりゃ本格的に達磨かあ……」

「じゃあ……わたしが……手伝ってあげる……ね？」

簪が俺を抱き上げて抱きしめる。勝手な事で欲を言えば服を着替えて身体を拭きたい。

いつまでも真っ赤でいるわけにも行くまいしなんか微妙に黒くなってパリパリして来てる。

「へーい、ちっふー。ACを一時的に展開する許可をくれー」

「許さん」

「あーい、ナインボール・オニキス」

「私の、私の、私の話を聞けー、5分だけでもいいー」

身体を赤い装甲が包み、手足が構成される。武器は展開していないから普通に戦闘能力は低い。それにパチモンだし。

身体を動かすとどうやら動くようだ、義手義足にエラーが発生しているだけかな、カロード本社に戻らなきゃ。

『……ターゲット確認……排除……開始』

「なっ?!」

『しなーい!!』

「なあ?!」

凄く焦った顔をしたからふざけてみたらまた面白い事になった。

「ちっふー、手足だけ義肢の代わりに使うのを許してくれよーん」

「許さん」

「取り付く島もねえー!」

仕方ない、簪に頼み込むか。

ACを解除して床にべちよりと落ちる、痛いけど我慢して動きながらうつ伏せになって頭を簪へと向ける。

そのまま額をゴリゴリ地面に擦り付けてお願いをするのだ。正に土下寝である。

「簪……本当に申し訳ないが介護をお願いしてもいいだろうか……この通りだ」

「喜んで……、だから……頭を上げて……」

それは出来ない相談だ、なぜなら頭を上げれないからな。

簪がひよいと俺を抱き上げる、おかしいな……俺義手義足抜いてもか



『うん…っ、本当に、心配したんだから…!! 大丈夫? 怪我は無い…?!』

「えっと…完璧に達磨になった、これは大丈夫だけど、あと義肢の動きが悪くて思い通りに動かない」

『うう、やっぱり大怪我負ったあ…!』

「あーっと…この臨海学校が終わったら一回社に戻る事にする」

『大丈夫? 今すぐ来なくてもいいの? なんなら向かいに行かせるよ?』

「大丈夫大丈夫、とりあえず臨海学校が終わった時か身体に異常が発生した時連絡する」

『絶対、絶対だよ!』

く く く く く く く く く く く く く く く

「信一郎…来たよ…?」

「来たかア、簪イ…」

予想外に動き辛くて10分ぐらいにうにしてたけど1メートルも進みやしねえ。

布団から這い出るのも一苦労だ。

「簪、割と奇妙な話なんだがな」

「うん…」

「どうやら俺は本格的に人間では無くなってしまったようだ」

「え…?」

「あー、いや…その、まあアレだ、バケモノになっちまったんだよ  
とりあえず簪だけには暴露しておきたい、その後の事は…考えてねえけど。」

「生き返ったから…?」

「おかしいと思わないのか、心臓を貫かれたのに生きている理由が分からないのに」

「…っ」

「事実、その傷はもう塞がっているのに、なんかあいつらは「俺だから」って理由で納得しそうだけだ」

「教えて……、私は……受け入れるから……」

「まあ見て貰った方が早いな……」

布団から這い出て右肩を簪から見えるようにする。

右腕の感覚を鮮明に思い出しながら完成形を想像して創造する。

「これ……は……」

「つとお、あつれ？ 全然疲れねえな」

人体の大きな一部なんてクツソ複雑で馬鹿げた物を創ったのに全然疲労が無いとは之如何に。

「腕が……生えた……？」

「いや、正確には腕を創った、が正しい」

「す……」

「す？」

「凄い……っ!! アニメのヒーローみたい……!!」

「さ、さいですか……少し前までは有形の物であらゆる物を作れたけど今は有形無形に係わらずあらゆる物が——」

「覚醒だね……っ!! ピンチに陥って……!!」

お、おう……

あれ？ 簪もう俺がバケモノとか一切気にしてなくね？

「あー、なあ。俺はバケモノって罵られるの覚悟してたわけだが」

「そんなの言わないよ……、だって……私が好きなのは……人間もバケモノも関係無い……信一郎が……す、好きなんだから……」

「ああ、そうか……そうか、スゲエ嬉しい……よつと」

「きゃ……んむっ……」

生身の右腕で簪の顔を引き寄せてちゅー。は、恥ずかしくなんて無いんだからねっ！

結構長い間ちゅーしてたけど恥ずかしくなんて！

あ、簪真っ赤になってる。かわいいなあオイ。

「簪、もう一度言っておく。愛してる」

「うん……、私も……愛してる……!」

もう一度簪を引き寄せてキスをしようとしたら視線を感じる。

襖の方を見るとほんの少しだけ開いてて幾つかの目が縦に並んで



こつちを見ている。

1、2、3、4、5……黒、蒼、翠、紫、赤、とまあ分かりやすい事この上ない。

「ナズエミテルンデイス!!」

「どつ、どつ……どこから……?!」

ヒョイと目が全て引つ込んだ後にゆっくりと襖が開いて5人が顔を出した、全員揃いも揃って顔を真っ赤にして。

「ちゅ、ちゅーしてりゅとこ……」

「だってだって、仕方が無いよ!」

「ちゅー、ちゅー……? ちゅーtttttttttttttt」

「オイ、らうりーブツ壊れたぞ」

「は、破廉恥でしゅわ!!」

「せつしーはキャラが違うぞ、お前の担当はエロイな要因だ」

「私も一夏と私も一夏と私も一夏と……」

あー、まあアレだな。

「早いとこいつちー落とせよ、ガチでちっふーに持ってかれるぞ」

「そつ、そんな事よりっ! シン! 腕どうしたの!」

「ああ、コレな。何か生えた」

『生えたあ?!』

「まあカロードだし」

『…ああ』

「な? 簪」

「うん……」



べ物を俺に流し込む。

「んちゅ、ちゅ……ぷあ……」

「ハムツ　ハフハフ、ハフツ!!　そうよ!　ハムツ、それでいい!　ガツガツ!　最高よあなた達イイ!!!」

「ええいつ!!　喧しいぞお前達!!　食事時ぐらい静かに出来ないのか?!　でもその案は戴きだ!　一夏!　お姉ちゃんとアレやろう!　アレ!!」

「えっ、ハムハフ?」

「そつちじゃなあい!!」

遂に正面の娘が茶碗からどんぶりの過程を飛ばして御櫃で米を食べ始めた。

なんか簪俺が死んでからかなりぶつ飛んできてない?

何か俺心配だよ、タグに「R-18」付けなきや駄目になつたらどうすんのよ……

「あ、籐ヶ崎君　ちよつと聞きたい事があるんだけどいい?」

「あげない……信一郎は私の……絶対……あげないから……」

「いや、要らないし」

簪が若干ヤンデレ気味てるのと真顔で要らないと言われた俺の気持ち述べよ(20点)

「特種任務……だっけ?　アレなんだったの?　籐ヶ崎君の手足が今無いのもソレが原因だったりする?」

「ああ、アレな……うーむ……俺が三回死んだ……らしい、俺自身では2回までしか知らんのだがな」

「へー、社会的に?」

「生物的に」

「ハハ、ワロス」

一回目が腕が千切れ飛んだのによる出血死……かな?　んでその次がいつちーに心臓ぶち抜かれて……三回目は鈴音曰く「魂が口からはみ出てた」らしい。

心臓ぶち抜かれた時ってホントきつかったんだぜ、何か喋ったら血が逆流してくるし喋らなくても一定感覚で血が噴くし、オイ心臓穴開

いてんだから動こうとするなよ。

「結局誰も教えてくれないのかあ、まあ仕方ないけどさ」

「シンにー、怪我無かったの〜？」

俺の隣に座る本音ちゃんが首を傾げつつ問いかけてきた。さて、正直に話すべきか否か迷う所である。

「あー…ん…まあ一応怪我したかな？ 腕と胸をちよっぴり怪我した」

「よしよし、痛いの痛いの飛んでいけ〜」

「ぐあああああああ!!」

割と離れたところで腕と胸を押さえて痛がり始めたのは3組の間、多分大阪出身。

周りの垂れ目の子が「大袈裟だよー」とか言ってるけど俺の惨状を見たらたぶん失神するなああの垂れ目の子。

本音ちゃんはいけない事をしてしまったかのようにワタワタと慌てている。

「わあく、わあく、どうしよお〜」

「痛いの痛いの戻ってこーい」

「ぐああー……………」

直ぐ真顔に戻り黙々と大阪出身（仮）の子が食事を再開する。

「シンにー大丈夫〜？ 大丈夫なの〜？」

「大丈夫だ、問題無い」

「ほんとお〜？ 痛かったら我慢しちゃ駄目だよ〜？」

んふーふ、ほんと本音ちゃんは可愛いなあ、マジいい子。

と、本音ちゃんを撫でてたら簪がしがみ付いてくる、ほほおん、嫉妬か、嫉妬なんだな？

〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜

部屋から見える満月を眺めながらふと思う。

これの後に起こるイベントが俺が知っている範囲で最後のイベントだ。

正確に言うところ危うく俺が殺しかけた福音のパイロット、ナターシャ

がバスに乗り込んでくるのが最後なのだが、まあ時間にして5分も無  
いだろうから実質この後のイベントが最後といつても差し支えない  
だろう。

福音で死んでしまったわけだし以後に出てくる「敵」は途轍もなく  
苦戦するんだろう。

それに多分福音は魔改造がなされていた、誰にされたのかは言うま  
でも無いが。

もしかするとその「彼女」が原作のラスボス役割なのかもしれない、  
だとしたら以後いつちー達ではなく「俺個人」へと向けられる敵は魔  
改造がなされている可能性が大きい。

そうなれば俺だけじゃなく簪も狙われる可能性もある。

社は言ってしまうえば世界で一番安全だろう、防御システムは理論上  
現在全てのISによる総攻撃を受けてもこちらは人的被害を一切受  
けることなく完全撃破できる。

それにハッキングの成功も無い、何故かは知らないが母さんが組ん  
だプログラムはIBISでさえ突破不可能らしい。

IBISは母さんが組んだAIでそれに俺が手を加え「感情」を創  
り出した物だ。

その対電子戦性能は篠ノ之束を超える。根拠は他でもない、実際に  
防御して見せたのだから。

今回の作戦開始前ブリーフィングでブリーフィングルームで彼女  
が侵入してきた際、部屋内全ての映像システムをハッキングした、俺  
の使用したシステム以外を。

そしてそのプログラムの防衛統括システムはIBISだ、つまり恐  
らくIBISの電子戦性能は篠ノ之束を超えるだろう。

そのISでさえ母さんの防衛プログラムを突破どころか理解する  
糸口さえ掴めない、それに実際の直接戦闘ならば万を越えるナイン  
ボールが、無数のISをも破壊する防衛兵器がISを尽く破壊するし  
最悪、俺が創った対IS用電子パルスでシステムダウンを起こさせる  
事が出来る。

「なあ簪？」

「なあに……?」

「この臨海学校が終わったら、一度家に来てみるか?」

「え……、その……ご、ご実家に……ご挨拶……?」

「まあな」

主な理由は簪に対する危害から簪を守るためのカラードのシステム登録のためなんだが、まあ間違いでもあるまい。

四六時中俺が付いていれば恐らく守り切れるんだろうがそういう訳にも行かない、俺はカラードの特殊技術総合リーダーでカラードの次期社長、そして簪は日本の代表候補生。

双方とも近付きすぎるのは問題でしかない、今はまだ……な。

まあそれは今置いといて、とりあえずいつちー達を覗きに行くかな。

「よし、ちよつと遊びに行つて来る、なあに心配無いき、直ぐに戻つてくる」

「待つて……待つて信一郎……! まつて……!!」

「なあに泣きそうな顔してんだ、大丈夫だつて……じゃあ、行つて来る。チェンジ、アーマードコア……ナインボールセラフ」

「行かないでえ……!!」

突 然 の 最 終 決 戦 !

「簪……愛してる」

「しんいちろお!!」

ステルスを起動して海岸沿いの岩場周辺を飛び、ENVG(Enhanced Night Vision Google)を起動すると二つの赤い反応、そして離れた所に四つの反応。

そして……かなり離れた所に2つ、いや、3つの反応だ。

後者は違うだろう、何かは知らんが……

お、移動を始めた。

んふーふ、追っかけてる追っかけてる、そーら逃げろ逃げろ、鬼に捕まっちゃうぞー。

よし行け! 押し倒せ! やっちまえ!

「ん……」

なにモジモジしてんだよ、さあ殺せ(羞恥心を)……殺してみろおツ  
(羞恥心を)!!

お、おお? ブルー・ティアーズのビットがフヨフヨ飛んできたぞ?  
?

おい、邪魔するなよ、いまいい所だろうが。

取り合えず進行地点の前に立って身体で止めてみようか。

ガシヤン

あ、いっけね、着地音なっちまったいな。

ガンツ

いっけね、ブルー・ティアーズとの接触音がなったわ、あー駄目だ  
コレ…いっちーがこっちに向きかけてるわ。

ステルス解除、んで両手の平を二人に向けて……

「何の音——」

「い、一夏…一体どうしたと——」

『ターゲット確認、排除開始』

「い」「ひ」

「ぎやあああああああああああああああああああああ  
!!!」

『ギヒヤハハハハハハハハハハ!!』

ひー馬鹿みてえ、二人ともビツクリするぐらい近付いて、てか抱き  
しめあって叫んでるんだもんな、最高に馬鹿馬鹿しい。

なんでそこまで出来るのにそこからができねえんだよ。

ん、お? 通信だ、対象は…母さんか。

『ひー、キツヒ、母さん? なに?』

— 籐ヶ崎 麗羅 —

反応の通り、ここに居るみたいね。

邪魔をする気はないし、しばらくは待っててあげる、でも二人きり  
になれそうなら絶対に逃がさないわ。

……会話が聞こえてくる、ベストポジションかしら?

「る天才が、大事な妹を暗れ舞台でデビューさせたいと考える。そこで用意するのは専用機と、そしてどこかのISの暴走事件だ」

：そんな、そんなくだらないことの所為で、シン君は：死ななきやならなかったの、苦しまなきやならなかったの？

ふざけないで、いま直ぐにでも頬を引っ叩いてやりたいわ。

「暴走事件に際して、新型の高性能機を作戦に加える。そこで天才の妹は華々しく専用機持ちとしてデビューと言うわけだ」

「へえ、不思議な例え話だね——」

「そして、ソレと同時にその天才にとって邪魔な存在を消す。それで天才の描くシナリオを邪魔する物は居なくなる：筈だった」

「イレギュラー、居てはいけない存在、楽園（ファンタズマゴリア）：理想郷（メタファリカ）を消しかねない存在」

「だが、私の生徒だ。私が守るべき生徒だ、それが例え世界にとって、天災を越えるイレギュラーであったとしても」

「ちーちゃんは：その天災の敵なの？」

「私の生徒を傷つける物は天災であつても敵だ：だが——」

「——東、お前は、私の大事な親友だぞ。お前にとって私はどうだ？」

「うん、うん……：そうだよちーちゃん、東さんにとってちーちゃんは大事な親友だよ」

「なあ東、お前にとってこの世界はつまらない物なのか」

「聞こえなかった、まあいいわ、私には関係のない話だもの。」

「そうか：わたしはそこそこ楽しんでる」

「そうなんだ、じゃ、行くね」

どこかに消えたみたいね、でも視覚的でしかない、レーダーにはゆっくりと歩いているのが分かるもの。

「こんばんわ、織斑先生」

「！：なぜ」

「まずは：シン君の良き教師で居てくれた事に感謝します。ありがとうございました  
うざいます」

「：ええ、私は教師ですのぞ」



「それと、世界を変えられるイレギュラーはシン君と篠ノ之束だけじゃないんですよ、では…失礼します」

ビジョンステルス起動、サウンドステルス起動、サーマルステルス起動、さて…篠ノ之束は…あら、結構近いのね…先回りできるぐらいには。

「こんばんわ、篠ノ之束さん？」

「…どうやって束さんを見つけたのかは知らないけど、ううん、キミが誰なのかも知らないや」

「私はあなたが殺そうとした子のママ」

「ああ、あのイレギュラーの——」

「黙りなさい小娘、自分が世界で一番偉いと勘違いして、全てを拒絶して、狭い世界で満足しているあなたが、シン君をイレギュラーだなんて甚だ可笑しいわ。あなたの方が、可哀想でちっぽけなイレギュラーよ」

「うるさいよ、勘違い？ それこそ可笑しいね、もしそうなら、束さんは……」

「ちっぽけな世界じゃなかった？ 馬鹿みたい」

「……もういいよ消えなよ」

あら、レーザーライフルなんて出して、どうする気かしら？

私のエネルギーシールドには効かないのに…ねえ？

「…なんで、どうして？ 束さんが、私が作った最高の…」

「だから言ったでしょ、世界で一番偉いなんて、勘違いして」

「どうして…」

「……？」

「どうして、どうしてどうしてどうして?! どうして今なの!! なん  
で今さらなの?! もっと、もっと早く!! もっと早く居てくれれば!!  
もっと早く……………」

「…やっぱり、まだまだ子供ね。ねえ?」

「……………」

あーあ、シン君育ててた時の方が楽……まあシン君は特別だったし  
ね、それとは比べるべくもなしね。

「お名前は?」

「…知ってるでしょ」

「お名前は?」

「篠ノ之…束」

「ねえ、束ちゃん? 頼れる人が、分かってくれる人が居なかったのよ  
ね」

「……………」

あら、捻くれちゃって…ほんと、小学生、ううん。幼稚園児みたい  
ね。

「束ちゃん、今から頼ってみてもいいんじゃない?」

「もう、もう遅いよ……………」

「なんで? 諦めるのは早いわ、その天災って言われた思考がもう遅  
いって結果を出しちゃったの? それなら貴女の目の前に居る人を  
見なさい。その人はまだ諦めるには早いわって考えてるに違いないわ」

ああ、私も母親になったから分かるのね、この子、継りつくような  
目をしてる…

「いいの? 頼っていいの? 分かってくれるの?」

「もちろん、もう子供を一人生んでるのよ? その上何万人の人を抱  
えてるの、今更一人頼ってくる人が増えても問題なんて無いわ」

「でも、束さんは……………」

「別に何時でもいいわ、どんな風に頼ってくれてもいい、なんなら私をあなたの目標にしてもいいのよ？　まあ……越えられないけど、ね」  
　そ、絶対に越えられない……何があっても越える事は出来ない、だから目標にしてもいいのよ？

「うん……うん、うん！　ねえ！　名前は？」

「私？　籐ヶ崎麗羅よ」

「麗羅……れいら、れーら……うん、れーちゃんって——」

「麗羅さんって、呼びなさい」

「え？　だって——」

「呼びなさい」

「れ、れーら……さん」

「よろしい」

　あ、それと……コレを忘れちゃ駄目ね、絶対に！

「束ちゃん、こつち向きなさい？」

「なーに？　れーらさへブウ?!」

　うん、いいわ。シン君ってあんまり、と言うかほぼ全然悪い事しなかったから怒る機会って無かったのよね、それにしてもほっぺ、スベスベね。

「にや、なんで……？　なんで束さんを叩くの？」

「悪い事したら、怒らなきゃ駄目でしょ？　束ちゃんはシン君を殺そうとしたじゃない？　と言うか、殺したじゃない？　だったら……ねえ？」

「ひう！」

「ごめんなさい、は？」

「え、え……え？」

「ごめんなさい　は？」

「ご、ごめんなひゃい?!」

「はい、よろしい」

　お姉さんは賢い子が好きです。でも馬鹿な子でも大好きです。

「じゃあね、束ちゃん？　あんまりおイタしちや……」



うふふ、楽しそう。良かった、本当に大丈夫みたいね。

「あのね、シン君。あの暴走機だっけ？ アレ、カラー<sup>っ</sup>ドが貰<sup>ち</sup>う事にしたわ」

『ああ銀の福音？ 難しい事言うねえ』

「大丈夫よ、アメリカもイスラエルもカラー<sup>っ</sup>ドの兵器を使ってるのよ？」

『ヒドいな、ハハッ』

「時間が空いたら操縦者さんに言つといて、貴女と貴女のISはカラー<sup>っ</sup>ドが身柄を預かるって……あ、そういえば……動けないんだっけ」

『大丈夫大丈夫、やっとか、ああ母さん。社に帰ったときにさ、会わせたい人が居る』

「ん、誰？」

『んー……恋人？』

「あら、あらあらあら！ うふふふ、うん。楽しみにしてるわ」

さあて、どう言つて貰<sup>ち</sup>やおうかな、そうね。

もし断られたら、5分間アメリカとイスラエルで使われてる、うちの兵器をロツクして、次断られたら、またロツクして、全世界にアメリカ・イスラエルのカラー<sup>っ</sup>ド産兵器が全て使えなくなつたって、全世界に放送しちゃうかも、でいいわね。

うふふ、さあ有言実行！

— 籐ヶ崎 麗羅視点E n d —

く く く く く く く く く く く く  
く く く く く く く く く く く く  
「誰か……み、水……水……水を……」

この第1話のケンちゃんよろしく水を所望するいつちーをちっふーに頼みに頼み込んで特例で展開したアリーヤパーツで身体を補った状態で眺める。

んで最終的には長兄……長姉？ を倒してその姉だか兄だかも倒すんだな。

ハハ、無い無い、もしあつてもクローンとかじゃねえともうポツポツ新しいのなんざ出ねえって。

簪は別のバスだ、そりゃクラスが違うんだからバスも違うだろう、かなり駄々をこねると言うか、兎に角抗っていたが。

なんかいざ違うバスに乗る時になると今生の別れみたいに悲痛な泣き方をしたた、フランが居なかったら多分簪は俺の隣で俺の世話してたと思う。

「一夏！ お姉ちゃん！ お姉ちゃん水分持ってる！」

「な、なに……」

「お姉ちゃんの唾液——」

「遠慮しときます」

それを えんりよするなんて とんでもない！

「こんにちわ、織斑一夏君っているかしら？」

「え？ あ、俺ですけど……」

ここで乱入者だあああつ！！ そう！ 彼女はかの暴走機『銀の福音』の操縦者！ その名も……！！

「へえ…君がそうなんだ」

その名も……！！

「あ、あの貴女は？」

長い！ 思ってたより名前を名乗るまでが長い！ 長いよナターシャさん！

「私はナターシャ・ファイルス、銀の福音の操縦者よ」

ここでナターシャがいつちーにちゅーをしようとするが、ソレを断固として許さない人が！ ここに居る！！

「それは許さんぞ、ナターシャ。一夏は私のものだ、私だけのものだ！」

「あら残念、どうしたら許してくれる？」

「どうあつても許さん」

「アメリカでは普通よ」

「だがココは日本だぞ」

そう！ 極度のブラコンであるちっふーだあああああああツ

!!!!

「ナターシャ、少し外に出るぞ。お前達はバスで待つておけ」

「はいはい」

ああそういえばカラードの正式な任務として福音の操縦者に伝えないと駄目なんだったつけ。

ちっふーとの会話が終わるまで、もしくはある程度進行するまで待つておくとしますかね。

あー…暇だなあオイ、いつちーは500mのペットボトル投げつけられてるし、楽しそうで羨ましい。

そろそろかね？ さて、と…ちよいと俺も外に出ますかね。

「よっこらセックス」

「セツ…お前なあ…はあ、何処行くんだよ」

「ああちよつとカラード関係で話があるんだ、少し出るわ」

「——飛ぶことが好きだったあの子が、翼を奪われた。相手が何であろうと許しはしない…！」

「あー、ちよいとよろしいかね」

「…あなたは？」

「バスで待つておけと言った筈だぞ」

「暴走状態の福音を撃破し、また福音に一度殺されたカラードの籐ヶ崎信一郎だ、カラードの特殊技術総合リーダーとしてナターシャ・ファイルス、話がある」

「あなたが…：…そうなのね…」

「回収し、分解、及び初期化される筈だった『銀の福音』そして操縦者であるナターシャ・ファイルス、貴女の身柄はカラードが預かる。いや…：アメリカではなくカラードの所属となつてもらう」

「うそ、そんな…!!」

「既にアメリカ、イスラエルには通達済み、及び許可取得済みだ。心配は無用、福音の分解初期化は行わないし望むならアメリカで住み続けるも構わない、ただ所属はカラードだが」

「どういうこと…?」

「なにやら母さ……社長が福音に無理やり搭載された5つのコアを安定化させ暴走せず扱えるよう改良するだとか、その為最も相性がいいであろう貴女もうちの所属となった。それに聞いた話ではネットワークとの遮断も修正し元のようにするそうだ」

「5つのコア?! それにコアに手を加えるなんて…!!」

「言っちゃえばアレだがカラードは…てか母さんならI S コアなら普通に量産できる、らしい」

正直本当かどうか怪しいけど、出来るって言うんなら、まあ出来るんじゃないかな?

「詳細は後ほどカラードの護送部隊がココに来るので彼らに聞いて欲しい、アメリカも首を縦に振った、イスラエルもだ。そして福音は俺の右腕を見事に吹き飛ばして俺を殺してくれた、NOと…言つて欲しくは無いな」

これは頼み事ではない、命令だ。つてな!

「では後日会おう」

「待て、籐ヶ崎」

「なんぞ、ちっふー」

「お前達は何だ」

「……………さあ?」

ではバスに戻ろうかつと…さてさて、いっちはどんな事になったのかかな?

「ほら飲め、直ぐ飲め、ドンドン飲め」

「疲れてるんでしょ、ほら飲みなよ」

「一気に飲み干して下さいな、ほらほら」

「農民のーちよつとイイとこ見て見たい、そーれ一揆! 一揆! 一揆!」

「おごぼぼぼぼぼ b b b b b b b b」

「おごぼぼぼぼぼ b b b b b b b b」

やだこのヒロイン達怖あい…

……確か俺の鞆の中に1. 5リッターのカルピスが入っていたはず。



「3. 5リットルも水分摂取とかいっちゃー何になりたいの」  
「くらげとかじゃないかなあ〜」

クラゲ：体の95〜99%が水分で出来ている。

重要項目※脳が無い。

く　く　く　く　く　く　く　く　く　く　く　く　く　く　く　く

「ではこれで校外特別実習期間は終了です！　お疲れ様でした！　土日を含んで月曜日が次の授業の日ですので、それまで皆さんしっかりと休んでくださいね。特に！　専用機持ちの生徒はじっくりと休んでください！　それでは解散です」

真耶たんが1組の面々を集めて遠足の最後のアレをする。

帰りの会？　いや、名称とか覚えてねえ、てかそもそも俺今生は幼稚園も小学校も中学校も行ってねえ…もし俺IS学園中退したら糞学歴だな。

まあ何はともあれこれで社に戻れる訳だ、早いとこ自分で歩きたいもんだな。

「籐ヶ崎」

「あい？　なんスか？」

「ISの…いや、ACの展開をやめろ、流石にこれ以上は許容範囲外だ」

「あー…まあ、そうだよなあ…」

その場で地面に座り込んで展開を止める。そうしなければ脚の長さ分の高さから地面に落とされるからな。

右腕で身体を支えつつ倒れないように維持、でもまあかなりきついね、フラフラする。

……アレ？　今ちっふーACって言い直さなかった？

「信一郎……！　大丈夫……？　怪我してない……？　お腹空いてない……？」

「よお、何だ簪、俺はアレか、赤子か」

「丁度いい更識、お前もこれ以降籐ヶ崎のサポートであつてもISの展開を止めろ」

「で、でも……」

「あー、大丈夫大丈夫。今からカロードに行つて義肢直して貰うから。フランが出来るのはあくまで整備だからな、データエラーは直せんし」

来いよ、とか言いながら移動を始めようとしたら簪が俺を持ち上げようとする。

「んっ………！ つく………！ あ、んっ………！！」

「簪、簪…素の筋力で俺を持ち上げるのは難しいぞ、この状態でも体重50オーバーだからな。あと声がエロイ」

あの「簪」が俺を持ち上げようとしたところで不意に漏らした「声」…あれ………初めて聞いた時…

なんていうか………その…下品なんです………フフ………

勃起………しちゃいましたね………

「シン、ほら、コレ使いなよ。保健室から車椅子借りてきたよ」

「すまねえなあ、シャルりん………」

よっころs………はい無理ー！

「悪いが誰か俺を車椅子に乗せてくれ、届かん」

「あ、じゃあ俺が………よっ………！！ おっもいな！！」

結果的には簪シャルりんいつちーの三人に手伝ってもらつてようやくと車椅子に乗れた。

あとは簪に車椅子を押ししてもらつて目的地まで進むだけ。

一般用電車なう。

カロードの移動手段を得ることの出来る場所まで電車で移動中。だつて奈良県だし、遠いし。

それとまあ仕方ないっちゃあ仕方ないんだけど目立つよね、車椅子。

しかも右腕しかないから誰かのサポートがないと動けないし、場所とるし。

なんか面倒臭そうな女性が俺の方へと歩いてくるぞ、見覚えも無い

ぞ。

「邪魔だし目障りよ、他の車両に移りなさい」

「なっ……!! あなた……!!」

「あら、コレ貴女の方？ 障害者の男なんて価値無いじゃない、捨てれば？」

「ッ!! ふざけない——」

「まあ落ち着け、簪。心配すんな、慣れてる」

いかにもーって感じだ、まあこんな事何度かあったし別に大丈夫ですけどー？

するとなにやら車内が何とも言えない暗い雰囲気になってくる。

※この私アーマードこれですが、障害者の方を差別等する気はありません。何より私の家族に所謂身体障害者と呼ばれる人が居ますし、私は家族が大好きです。ですので今回の描写で障害者の差別を好んでしているという訳ではないと言う事をご理解下さい※

「だって……!」

「心配なさんなお嬢さん、どうせ次の駅で降りる、故にもうしばし容赦して頂けないか」

「最悪、同じ駅で降りなきゃ駄目だなんて、ツいてないわ」

なにやら前方の方がザワザワしてきた、そして皆一様に窓の外を見てる、一体何があったのだろうか

「なんだアレ……」

「デカッ」

「あんな物あったっけ?」

「あれ、カラードエンブレム?」

やだ不吉な単語聞いちゃった、いったい何をやらかしてくれたんだろう。

「OH……ステイグロ……」

それは 船というにはあまりにも大きすぎた

大きく 鋭く 重く そして存在感が凄過ぎた

それは 正にアームズフォートだった

『え、えー○○駅ー○○駅でございませす。お出口は右側です』

プシューと右側のドアが開いたらなにやら見覚えのある女性が待っていた。

「簪、電車を出るぞ」

「う、うん……」

技術の進歩のお陰か車椅子でも問題ないほど段差も隙間も無いバリアフリーな電車を簪に押ししてもらって出る。

「お待ちしておりました、次期社長。カラードリンクスランク2、アンジエ、道中の護衛のため参上致しました」

「すまんね、忙しかったんじゃない？」

「ええ、ですが……リンクスのトップから空いている者がとの事だったので……もし、もし私が普通に任務を請け負っていたら……：：：オールドキングが、来る手筈になっていましたので、何としても、と」

「ああ、気に入らなかつたらショットガンぶっ放すもんね……」

「はい、下手なテロ屋よりも厄介です……：：：次期社長、そちらの青い髪のお嬢さんが？」

「ああ、そうだ」

「すまない、挨拶が遅れたな。私はカラード、レイレナード部署のテストパイロット、及びカラード私兵部隊のアンジエだ。失礼だが事前に調べさせて貰った、日本代表候補、更識簪さん」

ふと気付いたがここ電車を降りたホームです。

んでさつき俺に散々言ってくれた女性がアンジエの少し後で信じられない物を見たような顔でこっち見てるし、物凄い汗かいてるし、顔色なんて青通り越してコジマカラー。

まあ暴言吐いた相手が会話から分かるだけでもカラードの次期社長、んで言い合い仕掛けた相手が日本の代表候補生、ついでに言うとかラード私兵部隊の護衛つき、そりゃコジマ汚染もされるわ。

女性の方を見てニッコリ笑うと何か目尻に涙を溜め始めた。

「その……えと、更識簪です……。よろしくお願いします……：：：信一郎の……彼女、です……」

「いや、未来の嫁さんだ」

「ふふふ、それはそれは、では行きましようか。皆待っています」

「まさかとは思うがステイグロでか」

「はい、ステイグロまでは有澤製リムジンです」

ああ、もし砲塔をつけると戦車<sup>MBT</sup>以上の性能になるアレか。

人はソレをリムジン型特種装甲車両と言う。

移動中なう。

「それにしてもご無事で何よりです。先日は戦力総動員で大虐殺が開  
始されん勢いでした、結局2割で済みましたが」

「なにそれ俺知らない」

「聞いていなかったのですか？ 次期社長のバイタルサインが消えか  
けた時にカロードが大混乱に陥りましてね、かく言う私も銀の福音を  
バラバラに切り裂いてやらんと意気込んでいましたが」

「へえ、簪知ってる？」

「フラングが……言ってたから……知って、ます……」

「何故敬語なのか、まあ緊張するなよ」

簪が涙目で俺の服の裾をつまみながらフルフルと首を横に降る。

この装甲車両の前後にガチ装甲車両が前に2機、後ろに1機、しか  
も上空にはガンチョップパーも5機飛んでる。ついでに多連装ミサイ  
ル装備型輸送ヘリが4機。

『ボース、後一本道だけどうするー？ トバしちまうか？』

「落ち着けジャック、ココはレース会場じゃないぞ」

『ちえー、わあーったよ、仰せのままにー』

このリムジンにミグラントランカー10位以内が一人、リンクスラ  
ンク2位が一人、そして各乗り物に一人づつどれかのランク10位以  
内が一人乗っている。戦争でも始めるつもりなのかしら。

「特にIBISなんて酷かった、銀の福音に衛星砲を叩きつけようと  
したり、格納庫内の無人兵器を総動員させようとしてましたから」  
「母さんと父さんは？」

「主任は怒り狂っていましたね、静かに。対して社長は冷静でした、少  
なくとも戦力を2割に押さえるぐらいには」

「2割って…1割で全世界と大戦争できるのに」

「まあ一度次期社長のバイタルサインが消えてから昨日の夜、次期社長から連絡が来るまで自己進化型の兵器を作ろうとしてましたが」

「俺が案だけ出したパルヴァライザー？」

「そうです」

「いかん！ そいつには手を出すな！ って言ったのになあ」

『あーあー、聞こえるかー？ ……：偉そうにしやがって、マジで強いのかよ？ 今日で後進に道をゆず——』

「ジャック！」

『やつべ、アンジェ聞こえてたのかよ！ あー、お三方、ステイグロに到着したぜ。じゃあ少し揺れまーす、ご注意くださいいってな』

輸送ヘリが下部マニピレーターで装甲車とリムジンを持ち上げステイグロの上部ハッチへと輸送する。

余り人には優しくない浮遊感であるがまあ仕方ない、ヘリ内部ならまだしも荷物の中身なのだから。

『よーし、いいぞーもう大丈夫だ、全員降りてくれ、んでアンジェの指示に従ってくればいいぜ』

「はあ、全く……多少腕はあってもあれではなあ……」

「いいって、俺はアレでも全く問題ないんだから」

く く く く く く く く く く く く く く く

紆余（大阪でステイグロを降り）曲折（ヘリで奈良まで飛ぶ）あつて漸くカラード本社に辿り着いた、俺は慣れてるけど簪が相当グロッキー。

「うぼおおおええ、え、え、え、えええええ……：お、俺は……俺は面倒が……：うぼろろろろろろ!!」

簪よりもグロッキーなのがいたわ、しかも相当参ってるわ。

簪の耳を塞ぎつつ顔を逸らせるアンジェ、そうだよな、貰いゲロなんて誰だっけしたくないし見たくも無いよな。

後のアレが見えないようになるカラードのフロントまで簪を連れてくる。

さて、ではお決まりのセリフを。

「カレードへようこそ！ 歓迎しよう、盛大にな!! …まあ車椅子の上からで失礼するが」

『あーあー！ 聞こえるー？ ゲストの子ー？』  
「?! ?!」

「心配しないでくれ、この声は次期社長のお父上、主任の声だ」

『あ、アンジェー、護衛あんがとねー!』

「はい、コレで任務を完了します。じゃあ簪さん、好きに会社を見回ってくれていい、禁止区域以外はな」

アンジェが凄く綺麗に歩いてフロントエレベーターへと向かう。エレベーターが開くと一度中の人物に礼をし、入れ違いで消えた。

入れ違いで出てきた人物は…白銀の長髪、紛れた二本の長い三つ編み、そして少女と言えるほど低い身長にスレンダーな身体。

まだ十代にしか見えない上に日本人と大きくかけ離れた容姿、だが先祖代々純粋に日本人なんだそうだ。

「いらつしやいお嬢さん、そしておかえりなさい、シン君」

「ただいま、母さん」

「お、おっ……おじやましまひゅ!!」

「ふふ、大丈夫よ、緊張しないで。ね?」

我が母の籐ヶ崎麗羅だ、ふと思ったが俺父さんの名前知らない。籐ヶ崎…なんだ?

それとその後ろでこちらへと歩いてくる四脚AC。

『おかえりなさいませ、信一郎様。とても心配致しました』

「ッ……?!」

「IBIS、ただいま。心配かけてごめんなさい」

『本当です。危うく国家解体戦争が始まる所でした』

武器は装備していないが一度武器を持てば間違いなく無慈悲に相手を虐殺する凶悪な性能のACが目の前に出てきたためか簪が凄まじい勢いで驚いている。

いやまあ、簪コレがそんな狂キャラだと知らないから多分普通にACが社内を徘徊している事にビビッたんだろうな。

「始めまして、私はシン君…信一郎の母、籐ヶ崎麗羅です。貴女の名前

は？」

「さ、更識簪……です……」

「知っていると思うけどカロードの社長もやってるわ」

『カロードの軍事衛星兼総合統括AIのIBISです。この機体は、そうですね境界のラ・ピュセルとでも言っておきましょう』

「に、日本の代表候補生で……信一郎の……その……恋人をさせて……頂いてます……」

「違う違う、未来のお嫁さんだ」

「あらあら」

『私は反対です』

「何故ですか？」

『更識と言えば幾度と無くハッキングを仕掛けてきた組織ではありませんか』

「ッ……」

『具体的な数字を示しましょうか、現在1076回です』

「その程度何の問題も無いでしょう。それに簪自体は一切関与してない」

『ですが』

「静かになさい、IBIS。あなた、心配しすぎよ？」

『心配もします。私にとって信一郎様は父であり、弟でもあるのです。』

私は信一郎様が生まれた時より見守り、話し相手にもなってきました。そして私に感情を与えて下さったのは信一郎様です』

「故に弟であり、父であるか？」

『はい、ですので不穏分子は——』

「あー、その……じゃあさ、IBIS……いや、お願いだよ、『姉さん』。簪との交際を認めてくれよ、『姉さん』」

『そ、そんな……ですが、その……し、仕方ありませんねっ！』

他でもない大事な弟の頼みですから！ わ、わかりました！ み、認め……認め、ま……しょう……!!』



やだ、IBISちよろい。ちよつと弟として、父として凄く心配になつてきた。悪い人に引つ掛からなければいいけど。

「じゃあIBIS? 私はシン君とお話があるから、簪ちゃんを案内してあげて、禁止区域も解放していいわ。出来るわよね? シン君のお姉ちゃんだから」

『も、勿論です! 弟の為ですから! 私の大事な、おとう……うう。シンがあ……私のシンがあ……お婿に行っちゃうよお……』

凄まじいブラコンだった、俺の回りの姉キャラにはブラコンシスコンしか居ないのか。

四脚のACがガシヨンガシヨンと歩きながら簪を連れて行く、シユール。

「じゃあ部屋に行こうか、シン君」

「うい」

「押してあげるね」

「ありがと、母さん」

ああ、嬉しいけど……けど、母さん顔真つ赤やん、メツチャ必死やん、母さん非力やねんからもうちよい他の人に頼るとか……

10キロを持ち上げれないもんね、一昔前の車椅子ならきつと微動だにしないだろうね、高性能つてか良素材で出来てるから動かせるんだろうね。

……待てよ? 別にカラード社内だったらAC展開できね?

むしろ母さんに乗せて俺が押してきました。社長室です。

「じゃあお話だけど、まずは……ううん、コレは帰って来てくれたんだから、言う必要は無いかな。じゃあそうね、義肢の事だけど、どんな状態なの?」

「うーん、ピクリとも動かんね」

「見せて頂戴。……あれ? 別に何処もおかしくないよ?」

「え、早くない?」

「でも何で動かないんだろ……」

「あー……もしかして」

IS 適性がないと動かせない義肢なんだよな、そう言えば……一度死んで構成が変わったか？

よっし、俺の作り変えー………完了。

「お、おお……やっぱりか、動く動く」

「そ、なら良かったわ。で、次のお話だけ……シン君今何歳？」

「……16だけど？」

「んー……シン君、この会社のデータシステムは、私のボイスパスワードで、制御が可能です。ですが、言葉ではなく、歌がパスワードです。今から歌を歌います」

「ん、うむ」

「では行きます。 鮮やかに 萌える緑 新しい 小さき生命 永え  
——」

「ストップストップ!! なんでスリープ?!

「シン君、何でスリープだって分かったの?」

「この世界に、アルトネリコは無いのに」

「ッ!!!」

「やっぱりね、ねえシン君、もう一度聞くけど、今幾つ? ママは足したら54歳かな」

「そんな、馬鹿な………母さんも……?」

「ママが神様に頼んだ3つの能力はまず『世界最高の頭脳』そして『見た物の理論の完全理解』最後に『波動科学の完全理解』の3つ、容姿



良き日本を体現してる感じだし、てか大艦巨砲主義だし」

俺も有澤好きだよ、アルゼブラも好きだよ、インテリオルもオーメルもGAもBFFも、言っちゃえば全部好き。

「簪、俺は俺で少しやりたい仕事があるんだが……なんなら見てみるか？」

「だ、駄目だと思うよ……？ 私一応……倉持技研だし……」

「じゃあ私と話をしましょ？ 簪ちゃん、シン君の学園の事とか、色々聞きたいしね」

「姉さん、ちよつと約束してた事で来て欲しい」

『予想より早くて驚きです』

と歩いて歩いて俺の部屋、取り合えずベッドの上を片付けてベッドの横に椅子を持ってくる。

「約束どおりに身体を創るけど、オーダーはある？」

『性別が女性であるなら何でも構いません』

「難しい事言うねえ…」

前に俺が女装したときベースでいいかな、髪は黒、身長は俺より少し高め……は止めておこう、180超えてるし。

170にして、おっぱいは大きいよりも美しいだから、Eぐらいでいいかな、俺の胸囲をそのままおっぱいにしたらGとかHとか、もしかしたらもうちよい大きいし。

筋肉で引き締まっているけど脂肪で柔らかい女性の肉感を大事にして……なんかふえちいな。

鎖骨と骨盤はしっかりと、ふえていずむ凄いもの。

顔はヨーロッパ系の美人でクール、大丈夫だろ、母さん見た目が日本人じゃないし。

「よーしいつくぞー3、2、1」

練成！

「ハイできたあー！」

『早いですね』

「所謂サイボーグ、質感とか感覚とかは普通に人間だから、筋力や性能

が兵器染みてるけど。もう動かせるよ」

『では…』

ゆつくりと目が開いて手を顔の前に持つてきたIBISが握った  
り開いたりを繰り返している。

「まだオーダーがあつたら言つてくれればいいよ」

「そうですね、では…その、とりあえず…き、着る物を…」

人間と同じように顔を紅くして恥ずかしそうに伝える。OH、全裸  
だったわ、全然気にしてなかったわ。

「取り合えずビジネススーツ一式で、今作つたけどサイズはピッタリ  
な筈」

「し、シン…あつちを向いて、は…恥ずかしい…」

「ごめーん」

俺が創つたし俺の想像の産物（読んで字の如く）だから別に俺が見  
ても興奮とかしないんだけどねえ。

後ろから布擦れの音が聞こえるけどビツクリするほど何も感じな  
い「あー、服着てるんだなー」としか思えない。

でも大丈夫、俺は別に不能じゃない。簪で普通に勃つ……簪凄く  
積極的だから押せばやらせてくれるんじゃないだろうか。

いや、いかん、いかんぞ。それは18歳になってからだな…

「着終えました」

「…うい、じゃあ戻るかね」

「了解しました」

後ろをぎこちない様子で付いてくるIBIS、まだ慣れてないんだ  
ろうな、ACとは構造が違うし。

5分もしたら慣れたのか俺よりも遥かに綺麗に歩いている。学習  
能力パネエ。

「ビーツビツトビツトアクアビツトマンツ!! とおうつ!!」

「アクアビツトの リーダー（バイで変態な美女）が あらわれた」

「おお?! おおお?! 信一郎君! 信一郎君じゃあないですかあ!!  
無事だったんですね! よかったですね!! ところで見学に  
来た青い髪の女の子知りません?! オドオドしてて可愛い子なん  
ですよ! きつとトロトログチャグチャに蕩けさせたらもつともつ  
ともおとおおと!! 可愛くなると思うんですね! でも先ほ  
どIBISに邪魔をされちゃったのですう! だからだからだから  
今度こそお!」

「簪は俺のものだ、俺のものだ!!」

「んー、ん~~~~~?!!? もしかして信一郎君の彼女つてえ、  
あの子だったんですかあ? はあく、残念ですねえ……:そうだあ!  
ね、ね、信一郎君! あの子とファックした時はトロトロの表情  
をお、写真で撮って送って下さいよお! そしたらもう一日中部屋に  
籠つてえ、オナニー出来ますう!」

「やだこの人、普通にピー音入りそうな言葉使ってくる」

「シン、ここはお姉ちゃんに……」

「んうお?! おやおや!! これまた美人ですねえ! うふう、青い  
子の埋め合わせはあ、貴女にして見ましょおく!! そのお堅そうな  
表情をお、バイブ両方に突っ込んで潮吹かせながらアヘアア言わせて  
崩してあげますよおおお~~~~~!!!」

「消えなさい、イレギュラー!!」

「あひいいいい!! アイアンクローラめえ! らめなのおおおお  
!! 逝く! 逝っちゃううううう!!! ンほおおおおお!!!」

身体をビクンビクン揺らしながら舌をでろんと出して喘ぐアクア  
ビットリーダー、世間一般でアへ顔と言われる物を晒している。だが  
処女だ。

く く く く く く く く く く く く く く く く

なんとか寮の外出禁止時間までに戻れたので一安心、簪には早めに  
戻ってもらって俺はヘイロー降下とか何これ、ふざけてるの?

なんかIS纏った教師が銃突きつけてきたけどそりや普通そうす  
るわ、ちっふーが来なかつたら蜂の巣だっただろうケド。

「あー疲れた…おおう、ベッドつて気持ちいいんだなあ…」

全社員に簪を紹介して、IBISの新ボディを紹介して、溜まつた仕事消化して、全員に無事だったお祝いパーティして貰って、なんかプレゼント貰って、量子変換して、入りきらなかったから量子変換弊拡張して、時間掛かりそうだったから簪には最新警護車両他で先帰ってもらうって、んで俺はギリギリだから高速機からのハイロー降下つて…

「死にそう、あーパルス起動…あれ？ ドアのキー閉めたっけ？

あー、メンドクセエ、もういいやあ、おやすm……」

がちやりとか今鳴った気がするけど気のせいだろう、モルダーあなた疲れてるのよ……………

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

「ん、う…ふ…あん…」

「んー？ つく、あー…良く寝たあ…んだあ？」

【認めたくない物だな】緊急速報、超薄着（殆ど全裸、しかも透けてる）の簪が俺の隣で寝てる【若さゆえの過ちを】

しかも俺昨日上半身だけベッドに乗つけた状態で寝てたはずなのにちゃんとした状態で寝てるし、半裸だし。

俺の腕にしがみ付いてこうね、上腕三頭筋が、てか二の腕がおっぱいに挟まつてるの、しかも手首より先が視認不可能なの、簪が股に挟んでるの。

ワタシハ、ナニカ、マチガイヲ、オカシテシマッタ、ヨウダ……

「ん、んん…ふ、う…くあ、しん…ちろお……」

「お、おはようございます」

もぞもぞと動いて俺の上のしかかってそのまま首に手を回す簪、おっぱいが俺の胸の上で形を変えてすっこくエロイです。

「昨日…凄かった…よう？」

「わー、やっぱなんかしてたのかー、きおくが、きおくがgggggggg

gggggggggggg

ナターシャが変態に変態したり、ある日の簪の出来事とかのお話

今からある日記の内容をお見せする。元々は英語であったが我が社の暇人と名高いGAのユナイト・モスにより翻訳された物だ。

今では私と仲のいい彼女がいい方向へと変わって行く姿を知ってもらいたい。

それと同時にこれで我が社の素晴らしさが知っていただければと私は思っている。

……:P. Damn

あるテストパイロットの日記

7月——

今日私が目を覚ますとある一件のメールが入っていた。

詳しくは伏せるが「あの子は回収しコアを初期化、そして分解し永久凍結する」とのアメ리카からの通達だった。

メールの着信時間は昨日の夜、私が眠っている時だ。昨日、あの子  
が私を守っていた時、気を失いながらも臍気に覚えている。

幾つものISを打ち払い、望まぬ交戦をし、その羽で人を殺した。

私は軍人、人を殺した事自体に思う所はそれほど無い、だけど私が殺した人は敵ではなかった。敵は明らかに私だった。

顔も見えなかったがその人は間違いなく無実の人、私は無実の人を、罪の無い人を殺してしまった。

その事にひたすら悔いを持っていた。

私が胸を痛めていると私のいる部屋にブリュンヒルデ、織斑千冬が入ってくる。

聞けば私を助けたのはブリュンヒルデの弟だったらしい。覚えて  
いる、あの白のISを纏った子、赤いISから私の命を救った子。

ブリュンヒルデの現在の職業、そしてその弟君がいるらしい所からココはIS学園関係なのだろう。わたしが殺してしまった人も恐らくそうだ。



ブリュンヒルデに問う、私が殺してしまった人は？

彼女は世界最強だとは思えないような仕草で眉間を押さえながら「あの馬鹿か、死んでいない。いや、生き返った」

それから少し笑いながら「私としては残念だった、生き返るにしてももう少し大人しくなればいいんだが」

どうやらその人はブリュンヒルデをウンザリさせるほど相当凶太い精神をしているらしい、だけど少なくとも五体満足じゃない筈、これからその苦しみを私の所為で背負うのだろう。

きつとまだ病院にいるその人には会えないだろう。この後私には査問委員会が待っている。

だからせめて私を助けてくれたブリュンヒルデの弟君には会ってお礼がしたい、そうブリュンヒルデに言うのと快く承諾してくれた。

追記：一夏君へキスしようとしてブリュンヒルデに止められた後私に会いに来た人物がいた。カラードの次期社長、そして私が一度殺してしまった男性。

彼の身体はどう見ても五体満足には見えない、片腕と両足をISで無理やりサポートしている姿、にも係わらず全く気にする様子も無く私に会いに来た。

そして彼が伝えたのは私とあの子の身柄をアメリカからカラードに移すこと、そしてあの子を元に戻してくれると言う事。

ただ、私にハイと言わせる手段がそれ以外を許さないエグいものだったけど。

それと一緒にカラードと言う企業がいかに狂いきっているかを教えてくれた、あの企業は冗談ではなく最強で最狂の組織。

それでも構わない、あの子を助けてくれるなら相手が悪魔であつても構わない。

7月X日

彼、いいえ、リーダー（翻訳時の詳細後述）の言ったとおり昨日中にカラードが移動手段と説明係を寄越してくれた、アスピナだったか

しら、人格破綻者であつたけどいい人でもあつた。

彼女達は私の頼みを優先してまずアメリカへと行き部隊の者との別れをさせてくれた、けど。

乗り物が、狂つてた。

だつて！　だつておかしいわ！　ブラックバードの数倍の大きさの物がISよりも早く飛んで、しかも乗る人数が私含めて3人?!　ガラガラな訳じゃなくて元々最大人数が3人?!

軍で徹底的に訓練を受けてた私が！　私がまさかあんな――【翻訳以前に文字が解読できなかった】――

イーリにも別れを言つて、相変わらず憎まれ口を叩いてくれたけど別れを済ませた私はまた、例の超音速機でカレード本社へと今日向かう事になった。

アスピナの彼女達は昨日一度本社へと帰つたらしい、何でもリーダーが一旦会社へと帰つてきたかららしい。

そして今日伝えられた私の配属は特殊技術部のテストパイロットらしい、その総合部長がリーダー、次期社長だとか。

しかしリーダーはIS学園にいるので基本的には社長の指示に従うらしい。

今日例の空飛ぶスパゲティモンスター（勝手に私が命名）で本社へと行き部屋を割り当てられ、明日全社員へ紹介される事となった。

7月6日

早速私はここでやっていけるのか心配になった。巨大で青くて緑で紫色の蟲が廊下を徘徊していたり無人兵器が当たり前のように飛んでいたりパワードスーツを装備した人が複数人缶ジュースを持ちながらベンチで談笑していたり。

それも私が社長に連れられ部屋を出て全社員集会の巨大多目的ホールへと移動するたった20分の間で!!

だけど社員の人は殆ど皆いい人でリーダーを一度殺してしまった私を快く迎え入れてくれたのだから。

ただ何人かの人間は敵意を示してくる。それでも影からではなく

堂々と「まだ手放しにお前を迎え入れる事が出来ない」と言ってくるあたりそれもいい会社なのだろう。

何でも彼らはカラードの私兵部隊でリーダーに只ならぬ恩を感じているからだとかアクアビットのP・ダムさんが教えてくれた。

7月（・Λ・）日

信じられない、あの子が、福音が全く元通りに戻ってきた。いえ、大きく出力が上がって、兎に角凄まじいバージョンアップした状態ではあつたけど。

あの子が戻ってきた。

社長が言うには「データが消えたわけじゃないから奥底から引つ張り出してリンクを再接続してコアを安定させるだけ、案外楽だった」と言っていた。それにもっと嬉しい事に福音は強い感情と言葉を持っていた、ただ言葉を覚えてたての子供のように単語でしかものを喋れないけど、こんなに嬉しい事は無い。

私はカラードに拾われて本当に良かった。ココ以上に素晴らしい会社なんてこの世には無いだろう。

たまたま近くに居たP・ダムさんに嬉しさの余りこの事を話したらお祝いだと小さなパーティを開いてくれた。

そのときに呼び捨てでいいと言われたので今度からそうさせて貰う事にしよう。

8月興日

しゅきいいいいいい（ハートマーク）福音だいいきいいいいいい（ハートマークが複数）

福音に大好きだと言ったからね！「ゴスペウも マスター 好き」って言ったのよおおおおおおおおおお!!!

あの舌つ足らずの可愛さったらもう無いわ!!!

カラード最高！ カラードに栄光あれ!!

でもあの巨大な蟲は駄目だわ。

8月干日

キサラギの人にあの蟲、AMIDAって言うらしいけど、何時までも苦手意識を持ってちゃ駄目だから少し触れ合ってみるといいと言われた。

正直勘弁願いたい。

触らなくていいし同じ部屋に居なくていいからガラス越しで生活を覗いて見るといいよ、と言われても困る。

仕方ないので渋々見る。歩いてあの独特な音が鳴るたび鳥肌が立つ。

だけど30分も居れば人間慣れるもので音には何も思わなくなつた。すると次に鳥肌を立たせる要素となるのが見た目。

あのカラーリングは正直どうにかならなかつたのかとキサラギの生物兵器課の人を問い詰めた。

だけどやっぱり人間のなれって凄。1時間で見た目も音もなんとも感じなくなつたんだから。

あとはその仕草を見るだけ、知能は低いながらもあるんだろう、赤ちゃんのようにいろんな事に興味を持っているみたい。

部屋に置いてある設置物に上ろうとしてひっくり返ってジタバタしているのを見て口元が緩んでしまった。

きっと私は一時的に頭がおかしくなつてしまったのかもしれない。一次の気の迷いよ。疲れていたのよ。

8月≧日

リーダーが学園の長期の休みに入ったとの事で社に戻ってきた。正式な社員として顔をあわせるのは今日が初めて。

戦闘力を確かめたいとの事でホログラムデータで用意された各国の量産型IS総100機と戦わされることになった。

私とこの子に敵うことなく2時間ほどで殲滅。どうでしょうかと言った所「まあまあかな」のお言葉。冗談じゃ…

カラード最強の単機戦力を見せてやるとドヤ顔で言われたのでじゃあ見せてください。すると何を思ったのか全世界のISデータ、

私が見たことも無いISもある467機、勿論先ほどのデータを流用した今の福音もある。それに量産機を足して総1000機、何コレぶざけてるの。

結果、1時間と経たず全機撃破。楽だからと言う理由で消し飛ばされ真つ二つにされていくホログラムのISを見るのは切ない気持ちになる。

その真つ二つになったISには私の福音も混ざっていた、善戦？出てきた瞬間縦に真つ二つよ。

どうやらリーダー以外のトップランカーは弾薬を補充し続ければ量産機を50機抜きできる腕らしい。

バケモノ揃いの企業ね。

今日も福音は可愛かった。

8月\*日

私はもう駄目なのかもしれない、AMIDAが可愛く見えるなんて、おかしい、おかしいのよ。

うふふ、あははははははははははははは

【以後丸々一ページ、ミミズの這い回ったような笑いが書かれている】  
8月「32」日

考えればAMIDAが可愛いなんて当たり前よね、最初はその色が駄目なんていったけど普通に黒や茶色だったらそれこそ逆に嫌よ。

それにあの巨大なAMIDAも可愛いんだけど胸で抱きしめられるサイズのAMIDAも凄く可愛いのよ。

私は何て幸せなんでしょう、だってAMIDAや福音、可愛い子達に囲まれてこんなにうれしい事はないわ。

それに皆はいい人だし、最初はわたしに敵意をむけてきた人たちも私のたいちょうをしゃんぱいしてくるようになったし。

だいじょうぶよわたしはこんなにしあわせなんですものああうれしいなああらしいなあ

わたしはからーどのおかげでこんなにしあわせになれたのよそう

だこんどいーりもからーどによんでみようかしらしやちようもきつとゆるしてくれるわだつてみんなみんなとつてもやさしいんですもの

コレで彼女がいい方向へと変わって来た事とカロードが如何に素晴らしい企業かを分かつて頂けたかと思えます。

「どうでしょうか、信一郎さんコレを公開しようと思うのですが」

「おいキサラギイイイイイ!!! なんてよりにもよってお前らが主体になった!! 俺言つただろ?! インテリオル主体になれつて言つただろおおおお?!」

『ある日の簪の一日』

朝目を覚ますと思うように身体を動かせない、もしかして世に聞く金縛り?

「んにゆく、すぴー、すぴー」

じゃなかった、本音が自分の布団を離脱して何故か私にしがみ付いていただけだった。

そういえば本音は昔から寝相が悪くてベッドであつても何故か隣のベッドに入っていることもあつた、最近はどうでもなかつたけど布団だところなるらしい。

同じ部屋だったのに忘れていたなんて、迂闊。

「かんちやく…すー」

でも、まあいいか、もう少しだけこうしても。

「シンにー…」

前言撤回。本音の柔らかいほっぺムニ。

「うやあう?!」

「おはよう……本音……」

「うえ〜? シンにーどこいったの〜?」

むにー。



「うぼごあ?!」

「し、信一郎?!」

ハンモックに横から突撃していった本音が信一郎を押し切つてスルリと通過、半回転したハンモックから信一郎が地面に投げ出された。

「……おはようございませす。システム通常モードを起動します」

そして何事も無かつたかのように片腕で身体を起こす。

多分痛くても痩せ我慢して本音に心配させないようにしてるんだと思う、嫉妬するぐらい過保護。

「ご飯……行こう……?」

「ごはるん」

「ああ、昨日の騒ぎでちっふーに怒られてな、部屋で食えだとき。まあ一応病人? だしそれが正しいと思うけどな」

「じゃあ私——」

「二人はちゃんとあっちで食つて来なさい、ただでさえ旅館の人に迷惑掛けてるんだから、一人分、もしくは二人分も多く持つて来て貰う訳にはいかん」

むう、でも大丈夫かな? ちゃんと食べれるかな? 心配。

「大丈夫大丈夫、右腕はあるから」

考えてる事がバレた、以心伝心?

……昨日右腕が使えるって晩御飯の時に言つてたっけ、迂闊……無念……。

く く く く く く く く く く く く く く く く

「待て更識、お前は4組のバスに乗れ」

……え? 今、織斑先生は何て言ったの?

「え……? なん……て?」

「お前は 4組の バスに 乗れ」

「それじゃあ……それじゃあ誰が……信一郎を……?」

「座席に座つて目的地に向かう程度でサポートはいらない」

「でも……でも……!!」



いや、嫌だよ、離れたくないよ。

「待つて……、行かないで……、信一郎……、待つて……まつて……！」  
「ふ、フラアアアアン!!! 早く来てくれええええええ!!!」

「はいはい、ほら、行きませう? 更識さん」

「やだ、やだあ……」

怖い、行かないで、だつて、だつて。

「離してフラン……! また、消えちやう……! どこかに……行つちやう……!」

「大丈夫です。あれでもカロード単機最強戦力です。滅多な事があつても死ぬ事はありません、もう……だいじょうぶですよ」

「フラン、フラン……うああああ……!」

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

「誰だ、クラス代表を泣かしたマヌケは、誰だア……?」

「殺してやる……殺してやるぞ……!!」

「行け! 容赦するな! (クラス)代表のご意志に逆らう愚か者どもを抹殺せよツ!!」

「X a a a C i . (私は全てを赦しましょう、だが死ね、だからこそ 死ね)」

「大丈夫……もう、大丈夫……だよ」

「だそうです、ですので皆さん落ち着いて下さい」

「だが、だが拙者達は代表の事が……つく、仕方ないでござるな……誰か、誰か見ていた者はいないのでござるか?!」

「ウチ見てたよ! 見てたけど……」

「それは僥倖! して、犯人は誰でござるか!」

「アカン、止めといた方がええ、ええか? 例え簪ちゃんの為であつてもや、絶対に逆らつたらアカン相手つてのがおんねん……」

「ええい! いいから教えるでござる!!」

「お……いや……」

「もう一度! 拙者に聞こえるように言うでござるよ!」  
「織斑先生やつ!!」



あー、視界がこげ茶色、机が影で黒くなったのしか見えねえ。

「えと……その、は、始めまして…」

頭の天辺から足のつま先まで電撃が駆け抜ける。

教室に響いたのは「鈴の鳴る様な声」なんてのは比べ物にならない、言葉に出来ないほど綺麗で透き通って、よく耳に入る美しい声。

周りの騒がしかった生徒も息の音一つ聞こえない。

「う、わ……スゲエ美人……」

誰が言ったか、ソレすらも俺には分からない、そして本当に美人なのかどうかも机で視界が埋まっている俺にはわからない。

ああ、そうか。そうかよ！ この子が俺のメインヒロインか!!

「夢中（ユメナカ） 合理（アイリ）です……えと、よろしくお願いします！」

漸く顔を上げた俺の視界に映ったのは……

ゴリラだった。

ガタイがいいとか、顔が厳ついとか、筋骨隆々だとか、そんなんじゃない。

ゴリラだった。

ゴリラが服を着て教壇のところに立っている。

「か、可愛いー……!!!」

「お、俺アタックしようかな……」

お前等、ソレでいいのか、相手はゴリラだぞ。

夢中合理……言い方と並べ方変えたら「ゴリ夢中」ってか。

「ゴリ……むちゅー……」

+++++

「フ……、フラン……？ 何読んでるの……？」

「最近人気のラノベです。タイトルは「ゴリむちゅー♡」ですよ」

「そ、そう……べ、別に……朗読する必要……無くない……？」

「更識さんも読んでみては如何ですか？ 王道的恋愛ライトノベルです」

「恋愛？！」

それに王道？！

く く く く く く く く く く く く く く く

電車、車椅子に乗った信一郎が立体投影ディスプレイを起動して片手で操作している。けど…

後ろにいる私には丸見えなんだけど、それ……ＡＣの機密だよね、いいのかな……？

「ふうむ、やっぱセラフの出力を抑えるのは不可能か……、対外敵用で限定するしかないか……」

これって私の事、信用してくれてるのかな？  
だったら……うれしいな……

「邪魔だし目障りよ、他の車両に移りなさい」

「なっ……！！ あなた……！！」

何、この女の人、なんなの、邪魔？  
信一郎が、邪魔？

「あら、コレ貴女の？ 障害者の男なんて価値無いじゃない、捨てれば？」

「ツ！！ ふざけない——」

コレ？ 価値が無い？ 捨てる？  
ふざけてる、赦さない、ユルサナイ……ツ！！

おいで……ツー！ 打鉄式——  
「まあ落ち着け、簪。心配すんな、慣れてる」

慣れてる、って……なんで、どうして慣れてるの？  
なんで、慣れてしまってるの?!

そんなのおかしいよ、だって、だって信一郎は…好きでそうなったんじゃないのに…!

「だって…!」

怒りで震える手を信一郎が優しく握ってくれた。うん、わかった…けど、本当にいいの？

「心配なさんなお嬢さん、どうせ次の駅で降りる、故にもうしばし容赦して頂けないか」

どうして信一郎は立場を使わないの？ カラードの次期社長で、世界で唯二人の男性IS操縦者で、専用機持ちなのに…!

権力は使う物だって、言ってたのに…もしかして、相手のために…?

「最悪、同じ駅で降りなきゃ駄目だなんて、ツいてないわ」

この女…!! 自分が、自分がどれだけ…!!!

もし信一郎がいなければここに居る皆死んでいたかもしれないのに、何も知らないくせに…!

『え、えー○○駅ー○○駅でございます。お出口は右側です』

汝等は禍害ワザワイなるかな禍害ワザワイなるかな禍害ワザワイなるかな大いなる審きに撃たれよ審きに撃たれよ審きに撃たれよ

差し伸べよ血肉の購い血肉の購い血肉の購い愚昧オロカなる獣の群集よ相応しき業報ムクイに塗れて

コワレ ロツ !!!

「簪、電車を出るぞ」

わ、わ、わ…!

「う、うん…」

…?

この女の人、誰かな？ 格好いいな…

「お待ちしておりました、次期社長。カラードリンクスランク2、アンジェ、道中の護衛のため参上致しました」

「すまんね、忙しかったんじゃない？」

カラード…護衛の人…?

研究者じゃないの？

「ええ、ですが…リンクスのトップから空いている者がこの事だったので…もし、もし私が普通に任務を請け負っていたら…：：：オールドキングが、来る手筈になっていましたので、何としても、と」

この人がランク2だからそのオールドキングって人はランク3？

「ああ、気に入らなかつたらショットガンぶっ放すもんね…」

…え？

「はい、下手なテロ屋よりも厄介です…：：：次期社長、そちらの青い髪のお嬢さんが？」

あ、え、わ、私…？

「ああ、そうだ」

すると女の人がニコリと笑って右手を私に差し出してきた。

「すまない、挨拶が遅れたな。私はカロード、レイレナード部署のテストパイロット、及びカロード私兵部隊のアンジエだ。失礼だが事前に調べさせて貰った、日本代表候補、更識簪さん」

わあ、格好いい…

…ああ！ 握手…！

「その…：：：えと、更識簪です…：：：。よろしく願います…：：：信一郎の…：：：彼女、です…：：：」

「いや、未来の嫁さんだ」

し、信一郎…：：：恥ずかし気も無くそんな…：：：うう。

「ふふふ、それはそれは、では行きましようか。皆待っています」

「まさかとは思いますがステイグロでか」

「はい、ステイグロまでは有澤製リムジンです」

え、え？ ステイグロ？ 有澤…：：：有澤重工？ リムジン？！

あれ？ 嫌な予感しかない…：：：？

く く く く く く く く く く く く く く く く

た、確かに私は更識家だよ…？

でも、でもそれは更識先輩が家関係を請け負ってたから。私は代表候補だけの普通の女の子なんだよ？

こんな、こんな…

「――イタルサインが消えかけた時にカラードが大混乱に陥りましてね、かく言う私も銀の福音をバラバラに切り裂いてやらんと意気込んでいましたが」

「へえ、簪知ってる？」

「フランが……言ってたから……知って、ます……」

「何故敬語なのか、まあ緊張するなよ」

窓から外を覗けば装甲車両と戦闘ヘリが見えるなんて!!

緊張するなって無理だよ……!!

それに聞けばACが14機つて、戦争でも起こす気?!

ISも2機混ぜつつちやったし……

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

うう、気分が悪い……あんなのありえない、時速2000キロ以上で海上をドリフトなんて……信じない、信じたくない……

やう?! 耳が塞がれて……?

この手……アンジエさんかな……?!

わ、あ……コレが……カラード、凄く……広い……高くは無だけど、兎に角広い。

ビルとしては30メートル位しかないけど広さはどれ位あるんだろう、学園よりも広いんじゃないかな……?

フロントも広々としてて一流企業みたい……一流企業だった。

「カラードへようこそ! 歓迎しよう、盛大にな!! ……まあ車椅子の上からで失礼するが」

信一郎も凄く誇らしげ、やっぱり自分の会社が大好きなのかな。

『あーあー! 聞こえるー? ゲストの子ー?』

「?!?!」

「心配しないでくれ、この声は次期社長のお父上、主任の声だ」

信一郎の、お父さん……、お義父様……?

『あ、アンジエー、護衛あんがとねー!』

「はい、コレで任務を完了します。じゃあ簪さん、好きに会社を見回っ

てくれていい、禁止区域以外はな」

「やっぱり……禁止区域つてあるんだ…、まあ世界最先端の兵器開発企業だもんね。」

「アンジエさんがエレベーターで誰かとすれ違ったみたい、誰かな？」

「……あれ、あの人は……」

「いらつしやいお嬢さん、そしておかえりなさい、シン君」

「ただいま、母さん」

「信一郎のお母さん、そしてカラードの社長……直接見たのは初めて。」

「若いつて言うか、もう通り越して幼く見えるし凄く綺麗というか美人と言うか可愛いというか……凄く日本人離れしてる。」

「お、おっ……おじやましまひゅ!!」

「ふふ、大丈夫よ、緊張しないで。ね?」

「あうう、舌嚙んじやった……」

『おかえりなさいませ、信一郎様。とても心配致しました』

スピーカー音……?」

「ツ……?!」

「IBIS、ただいま。心配かけてごめんなさい」

『本当です。危うく国家解体戦争が始まる所でした』

「あの時の無人機……?! どうして社内を歩いてるの……?」

「コレっていいの? いいの?」

「始めまして、私はシン君……信一郎の母、籐ヶ崎麗羅です。貴女の名前は?」

「さ、更識簪……です……」

「知っていると思うけどカラードの社長もやってるわ」

『カラードの軍事衛星兼総合統括AIのIBISです。この機体は、そうですね境界のラ・ピュセルとでも言っておきましょう』

「AI……凄い、まるで生きてるみたい。感情もあるように見えるし、見た目が機械なだけの女の……虚さんみたいなしっかりした人?」

「に、日本の代表候補生で……信一郎の……その……恋人をさせて……頂いてます……」

「違う違う、未来のお嫁さんだ」



「あらあら」

麗羅さんが微笑ましそうにしている、つてことは反対じゃないつてこと……かな？

そうなら麗羅さんは…お義母様…？

『私は反対です』

え、あ……そう……だよ、私なんか……信一郎と、釣り合うわけ……ないよね。

「何故ですか？」

『更識と言えば幾度と無くハッキングを仕掛けてきた組織ではありませんか』

「ッ……」

ふふ、ふふふ、そうだよ、更識は……カードに対して許されな事を何度も…何百度もやってきたんだもん……

『具体的な数字を示しましょうか、現在1076回です』

え、そんな……！ 増えてる……？！

「その程度何の問題も無いでしょう。それに簪自体は一切関与してない」

『ですが』

「静かになさい、IBIS。あなた、心配しすぎよ？」

『心配もします。私にとって信一郎様は父であり、弟でもあるのです。』

私は信一郎様が生まれた時より見守り、話し相手にもなってきました。そして私に感情を与えて下さったのは信一郎様です』

「故に弟であり、父であるか？」

ああ、そうなんだ…これが、家族なんだ……

どうして、こんなに……羨ましい……

『はい、ですので不穏分子は——』

「あー、その……じゃあさ、IBIS……いや、お願いだよ、『姉さん』。簪との交際を認めてくれよ、『姉さん』」

『そ、そんな……ですが、その……し、仕方ありませんねっ！』

他でもない大事な弟の頼みですから！ わ、わかりました！ み、認め……認め、ま……しょう……!!』

揺ら揺らと腕を動かして私と信一郎を何度も見て最後に震えながら上を向き信一郎との交際を認めてもらった。

すると麗羅さんが「ごめんなさいね。IBISったら、きっと嫉妬しちゃったのよ、うふふ」と耳打ちを私にした。

AIが……嫉妬……？

「じゃあIBIS？ 私はシン君とお話があるから、簪ちゃんを案内してあげて、禁止区域も解放していいわ。出来るわよね？ シン君のお姉ちゃんだから」

『も、勿論です！ 弟の為ですから！ 私の大事な、おとう……とう。シンがあ……私のシンがあ……お婿に行っちゃうよお……』

私がお嫁に行くから信一郎はお婿に来な……違う違う、そうじゃない、でも……ウエディングドレスかあ……和式もいいけど、やっぱり、ウエディングドレス着たいな……

「じゃ、IBISに着いて行ってね。あとで私とお話、しましょう？」「は、はい……」

あれれ、おかしいな。カロードの社長だよね、立場的に凄く危ないこと言ってる……？

もし暗殺目的とかだったらどうするんだろう、それに私ISも持っているのに……

ゆっくりと歩き出すIBISさんの後ろに付いて移動を始めた。

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

『キサラギ、ムラクモ、アクアビット、トラス、GAE、アスピナ辺りは避けます』

へ、変態だー?!

カロードの中でも突出して有名（複数の意味で）な部署の名前が勢ぞろい。

『有名どころという事でミラージュ、クレストから始めて信一郎様のお気に入り部署のアルゼブラで締めましょう』

へえ、信一郎ってアルゼブラが好きだったんだ……頻度からレイレナードが好きなんだと思ってたんだけど……

え、あれ…？ あの歩いてる人、腰に付けてるのって…：シヨットガン…？

あの人は…刀？ え？ ココって社内だよ、なんでちらほらと武器を持つてる人が…？

『武器持ちの彼等はカラード私兵部隊でほぼ全員ACのテストパイロットです』

「ACの…、テストパイロット…？ でも男の人も…」

『信一郎様からまだ伝えられていなかったのですか、まあ問題ないでしょう。カラードのACはISではありません。信一郎様が創ったコアを元にアセンブルされた物が彼等の所持するACなのです』

「コアを…？ もしかして…：能力…」

『そちらは聞いたのですか、どうかご内密に。その情報を知るのは今の所信一郎様以外では私と簪様のみです』

どうしてソレを私に教えてくれるのかな、普通はそんな事私には言わないのに。

『信一郎様が簪様を信用しました。ならば私も簪様を信用しましょう』

「ありがとうございます」

『ではまずこちらからどうぞ』

そういつて案内されたゲートには青い菱形に「M」とエンブレムが描かれていた。

く く く く く く く く く く く く く く く く

「だーれも知らない知られちゃいけないー、ビットマンーがだーれーなのーかー♪」

BFFの見学を終えてゲートを出ると、何か…：目の下の隈が凄い残念美人さんが…

「おはようIBIS！ 今日はいいい天気ですねえ、ところでその女の子はなんですか？ 可愛いですねえ！ 食べちゃって（性的な意味で）いいですかあ?! ひぎい?!」

『さて、次は有澤重工へ行きましょうか』

IBISさんがおもむろに女の人を掴んで雑に壁へと投げた。なにか：壁が若干へこんでるけど……大丈夫かな……？

女の人もビクビク痙攣してるし……あの、救急車とか呼んだほうが……

「らめえ、まだ……まだ逝ってるのお……」

「リーダーまーた変なことやってるよ、回収班！」

「またかー」

「やっぱりかあああああ!!!」

「……笑止……」

お、女の人が足掴まれて雑に輸送されて行く……

刀を持った男の人が鞘で突付いたりしてるし、これってカレードでは日常茶飯事なの？

『こちらへ』

「は、はい……!」

ゲートをくぐって一番最初に目に入ったのは将棋を指してる男の人でした。

「ま、待った!」

「何度目かね」

「所長、お願いしますよ」

「仕方が無い、コレが最後だぞ」

「ありがとうございます!」

「王手」

「えっ」

あ、これがこうなつて……詰みに持っていける手が二つ同時に用意されてるんだ、あれ？

「これって……、この時点で詰んでる……?」

「お、わかるかね、お嬢さん」

「は、はい……」

「そういう事だ有馬。さて、私は有澤重工、有澤隆文だ。話は事前に伺っているよ、更識簪殿」

信一郎みたいに全身が筋肉で出来ているような男の人、隆文さんが



……！ ヒーロー物が好きだつてね……！」

もし倉持技研が嫌になつたらカロードに来てくれれば専用機を喜んでカロードで用意させてもらおうよ、その場合は総合所長（多分信一郎の事）との兄弟機になるな。

と、笑いながら言つてくれたし最新のミサイルシステムも見せてくれた。

それに隆文さんはOVAが見たくなつたら御子息殿（信一郎だと思ふ）経由で連絡をくれれば送ろう。つて言つてくれたし、凄くアツトホームな職場。

「ああ、MSACはミサイル系統と電子工学に強いからな、有澤は古き良き日本を体現してる感じだし、てか大艦巨砲主義だし」

私と信一郎で微妙にズレてるけどまあいいかな。

そうして少し話をしてると信一郎がIBISさんと何処かへ行った、私は社長、麗羅さんに連れられて社長室へ。

く く く く く く く く く く く く く く く く

「さて、じゃあまず聞いちやうけど。シン君とは何処まで行つたの？」

「え、え……う？」

「最近の子は進んでるつて言うじゃない。で、どうなの？ A？ B

？ C？」

「え、えと……その……まだ、キス……です」

「浅いの？ 深いの？」

あれれ、おかしいな。学園での信一郎の事を聞くつて言われてたのに……

「うふふふ。いいわいいわ。シン君なまじ大人っぽいから。見た目だけじゃなくつてね？ だからきつと、18歳になるまで、そう言うのは自省すると思うの。だあかあらあ」

唇に指を当てて嬉しそうに笑う麗羅さん、言ってる事はなんていうか違うけど。

「既成事実、作っちゃいなさい」

「え、え、あうう……」



(ゴクリ)

息を飲んで廊下に出ると信一郎の部屋の扉が開いてる。

だ、駄目だよ、開いたままじゃ危ないよ、私は何も変なことはない。うん、開いてる扉を閉めるだけ。

パタン。

………なんで中に入って閉めてるの私は?!

「んゝゝ………」

ちゃんとベッドに乗ってない、寝苦しそうだな………私は、私はただ信一郎をちゃんとベッドに乗せてあげるだけ、だけなんだもん。

「ん、しよ………んっ」

「ムゝ………」

せ、制服で寝たら皺になっちゃうよね、大丈夫、大丈夫だよ、私は何も変なことしてない。

確か、信一郎は薄着が一番楽だって言ってたよね、しゃ、シャツ………も。

………これで信一郎は大丈夫、わ、私はどうしよう。

自分の部屋には戻れないし、巡回の先生がいたら大変だし。

「………んしよ」

ぱ、パジャマだと寝苦しいだけだもん、下着は、着てるもん。

何処で眠ればいいんだろう、ベッドは一箇所しかないよね、隣の空いてるベッドなんて私には見えない、見えない。

「ん、暖かい………」

信一郎を見れば鎖骨の間の少し下に縦に大きな傷跡がある。そして右腕の根元にも火傷痕、でも怖くない。

「おやすみ、信一郎………」

頬にキスをして信一郎の腕を抱きしめながら私は目を閉じた。



4巻から5巻までの所、形容し難い  
恐ろしい事にピンポイントで5巻だけ持ってないと  
言う状況。あ、これは4巻分ですよ、そんなお話

ウエルカム・イン・ザ・サマー編

【W・I・T・S】

「さて、明日から夏休みだ。各自故郷に帰るなりゆっくり羽を伸ばす  
なり好きにしろ。だが、気を抜きすぎるなよ、私からは以上だ。解散  
……一夏！ 一夏!! 家に帰って一緒に風呂に入ろう！（提案）」  
ちっふーがそう言って1組を締めくくる。

その後聞こえてくる何かが無ければ良かったんだが、まあ今に始  
まった事ではない。

全員ゲンナリしている。

「あいあい、失礼。教卓から失礼する、全員聞いてる？」

「はぁ〜い！」

「うーん、いい返事だ、ありがと本音ちゃん」

そして懐から大量の紙束を出す。

「さあ問題、コレはなんでしょうか」

「お金」

「レシート」

「もう行くことのないお店のカード」

「財布の中身かよ、正解はチケットだ」

ちなみに俺の財布には諭吉が十数枚とブラックカード、あと免許証  
しか入ってない。

「学園を出て付近にある最近出来た巨大なレジャー施設を知ってるか  
？」

「うん、凄く人気で前売り券は月初めに完売、当日券は最低2時間は並  
ばなきゃ駄目って所だよね、知ってる」

「その出資な、カラード……正確には有澤重工なんだよ」

するとらうりーとか一部を除いて啞然とした顔になる。

「で、このチケットの話が変わるが、こいつは一日フリーパスのチケツトだ」

にやりと笑うと多くの人間がぐくりと息を飲む音がする。らうりーはオロオロと周りを見て自分もぐくりと息を飲んだ、可愛い。

「全員分ある。欲しいか？」

「「欲しい!!」」

「よっしゃ持ってけ!!」

「いやっほおう!!」「さすが有澤重工!!」「今だけ籐ヶ崎君イケメン!!」

「マハハハハハ!!」 俺泣いていい?!

あと残った数枚は簪とフランと鈴音に渡す用、その他数枚、因みに簪と俺の分はペアチケットだったりする。

特に特典は無い、要するに無駄。

「おい、いつちー。コイツを鈴音に渡しといてくれ」

「ん、おう」

「あと本音ちゃんは生徒会の二人に渡してくれないか？」

「かいちよーとおねーちゃんの分もくれるんだあゝ嬉しいなあゝ！」

おねーちゃんと一緒にいこおゝつと」

会長エ……

ゝ  
ゝ  
ゝ  
ゝ  
ゝ  
ゝ  
ゝ  
ゝ  
ゝ  
ゝ  
ゝ

「時は戦国——」

「いらぬいらぬ……! いらぬいらぬ……!」

無精髭を蓄えて海パンを穿いた俺が眼前に広がる膨大な量の水を見る。

ウォーターワールド、管理を個人に任せているだけで実質有澤重工が経営しているような物だ。

幾つものプールがありその他には温泉などもある。まあ温泉は言わずもがなであるだろうが。

「シンにー!」

「おお、来たかね。相変わらず可愛いきぐる水着だ、良く似合ってるよ」

「えへへ〜」

ピコピコと（きぐるみの）耳を動かす本音ちゃんの後ろを見ると本音ちゃんの姉の虚さんと嬉しいような悔しいようなと言った微妙な表情をしたたっしー。

「この度は私達にもチケットをご用意してくださりありがとうございます」

「ああ、いえ。本音ちゃんにはよくお世話になっていきますから、恩返しといったような物ですよ、それより即物的な物で申し訳ありません」

「いえいえ、私達には十分すぎるほどですよ。……お嬢様」

「むっすー……」

「お嬢様！」

「はあ……本当に申し訳ありません」

「いやいや、構いませんよ。簪？」

たっしーが俺に対し不機嫌ですと言う態度を崩そうとしない、まあ、空気で構わんがな。

そしてたっしーがチラチラと簪を見ると簪が今度は「わたくし不機嫌ですよ」と言わんばかりに顔を背ける。

そしてシヨックを受けたのか涙目になって肩を落とす。その後ギリギリと歯を食い縛りながら俺を呪い殺さんが如き眼力で睨む。

「簪、本音ちゃんから聞いた話じゃ生徒会長と全然話をしようとしないうそじゃないか、何か言う事はないのか？」

「……ない……」

「あうう……かんざしちゃん……」

「先輩と話す事なんてありません」

「遂に苗字でさえ呼ばれなくなった?!」

そう叫んで膝から崩れ落ちた、その姿は実に悲惨である。

簪の足元に縋りつき呼んで字の如く一蹴されている彼女を見て誰がロシア代表だと思うだろうか、いやない。

「ごめんなさい簪ちゃん、赦して、許して。簪ちゃん、ごめんなさい……」

「どうして私に謝る必要が……？ 先輩……？」

「駄目よお……本音ちゃん、こんな謝ってるのに簪ちゃんが許してくれないのお……！」

「まーかんちゃんにしか謝ってないからね〜」

「お嬢様は人付き合いがいくせに人付き合いが絶望的に下手と言う矛盾を突き詰めてますからね」

「まあ俺は別に構わんのだがね、仕事柄嫌われる事なんて普通だし」

戦争反対と叫ぶ人等には物凄い勢いで嫌われていると思う、あと女性優遇社会が最高だと思ってる方々。

新兵器の公式発表の時非暴力と声を大にして叫ぶ人に石投げられた時はびびった。

外道、殺人鬼、殺し屋、死の商人、虐殺者、オッサンと散々に罵倒されるのは兵器開発者の宿命みたいなもんだ。

まだ首切り判事とか天使の塵とか聖堂騎士とか銃剣とか言われてないだけ多分マシ。

「行こう……、時間の無駄だよ……、虚さん、失礼します……」

「はい、お気をつけて」

「ばいばーい」

「もう……本音、あなた簪お嬢様の付き人でしよう？」

「でもおねーちゃんと一緒にいい……それに、かんちゃんにはシンにーが付いてるもん、だから大丈夫だよ〜」

「なんで、何で貴女達はそんなに姉妹仲がいいの……？ 分けて、分けてよう！ この哀れな私に姉妹仲の良さを分けてよう！ うわあ〜ん

！ かんざしちやああん!!」

地面を太鼓の達人よろしくドンドン叩きながら泣き崩れているたっしー、今更だが割とセクシーな水着である。

ケツ突き出してオイオイ泣いてる、はしたないったらありやしねえ。

で、肝心の簪は俺の右腕を掴んでさっさと移動を始めた、水着はいつか（臨海学校）見た水色のワンピースタイプ。

「あ、シンー！」

「よう、シャルりん。全員もう来てるか？」

「うむ、もう既に集まっている」

「らうりーももう来てたのか、またタオルお化けにでもなっているのか  
と思ったが」

「ふん、一夏が褒めてくれたのだ、何も恥ずかしがる必要などあるま  
い」

らうりーがドヤ顔で全員の集まっている方向を顎で指す。せっかく  
だからと一組全員で来る事にしたのだ、まあ集まるだけ集まって後は  
自由行動なんだがな。

「いっちーは鈴音に物凄い勢いで怒鳴られている。何ゆえ……」

『ご来場のお客様へ、午後13時より水上ペアタッグ障害物レースが  
開催されます。優勝商品は沖縄旅行五泊六日のペアでのご招待です  
！ 我こそはと言う方々はご参加下さい！ 受付はフロントです！

「12時までには受付を終えてくださいね！」

「おー、何かやるらしい——」

「し、信一郎……！ 出よう……!!」

「え？ ああ、いいけど」

この放送を聞いた簪がグイグイと俺の腕を引っ張る。腕が抜ける  
(物理)

目の前の二人は目を光らせていっちーの方を見るが全員同じ事を  
考えていたのか物凄い勢いで群がっている。

これは無理だと一瞬で理解した頭の回転の速い二人は1秒後には  
ガシリと手を組んでいた。

確実に勝つことにしたらしいが、優勝商品はどうするのだろうか、  
やはり奪い合いに発展か？

やはりキャットファイトか、いや……らうりーがいるからラビット  
ファイトか。

ラビットファイトってなんぞや。

ところでラビットファイトとラピッドファイアって似てない？

こう、COD4のM249にラピッドファイア付けてダブルタップ  
もつけるとさながらミニガン。



ねたロングヘアーが風に靡き腹筋が魅力的、そして今回の出場者一の巨乳!! 見たところ水着は見えませんがやはりシャツの下には付けてるでしょう! 残念でした男の人! 長身・巨乳・顔の傷もアクセント?! 詩天使ミラクルさつきゆんさん!! コレは黒歴史! さてお二方何か一言どうぞ!!」

そして巨大な空中投影モニターに俺達二人が映され、マイクを持った女性が銃の如く突きつけてくる。

「え、えと……その……がつ、頑張りますっ……!」

『可愛い反応ありがとうございます!! さあ次はさつきゆんさん!』

「実はこのシャツの下、何も付けてません!! しかも穿いてる下の水着はかなり古いタイプの白い水着なので濡れたら透けます!! それもう全裸と変わらないほどに!! でも残念でした、見ることは叶わないわ! なぜなら誰であろうと私を越える事など不可能だから!! おっばいもね!!」

『おおつと?! これは爆弾発言か!!』

沸きに沸く会場内、義手が義手と分からないので簪以外は俺が籐ヶ崎信一郎だと分かるまい。

よくよく見ればいつちーも腕を振り上げて雄叫びを上げている。流石に性欲が無くなった無欲大魔神ではなかったらしい。

『さあ最後のペア紹介です! なんとなんと!! 最後の二人もI S学園! 青い髪のナイスバデー! その称号は「最強の証」! I S学園生徒会長!! 更識楯無さん!! しかもしかもロシア国家代表!! 代表候補は数多けれど代表は彼女唯一人! 名前と髪色からして簪さんとは姉妹かな?! そして眼鏡の知的なお姉さん!! 布仏虚さん! おやおや? もしかするとあのポヤポヤした本音さんのお姉さんかな? という事はもしかや姉ペア!! ではお二方一言お願いします!』

「私は勝つ!! そして簪ちゃんと一緒に旅行に行って仲直りするのよ!! 残念だけど籐ヶ崎君、客席にいるのは分かってる!! 君の思い通りには行かないわ!! そしてごめんなさいね、さつきゆんちゃん、あなたは勝つことは出来ないわ!!」

『と、強気のお言葉です！　しかし残念かな！　妹さんは非常に嫌そうな顔をしております！　さあ次は虚さん！』

「容赦するな、全てをなぎ倒せと言われておりますので、頭が痛い話ですが妹もいますし、本気を出させていただきます」

『なぜでしょう！　正直楯無さんより強そうですね！　ではではゲートへどうぞ!!』

簪が心配そうに見上げてくるのでニカリと笑いながら頭を撫でる。

最悪俺が単体で中心まで跳べばいいだけなんだから、なんと言う期待通りの出来レース。

さて、スタート地点へと全員到着、現在の足場は陸で数歩進めばプールに浮く島へと。

『今回予想よりも人が多いので特別ルールを適用させていただきます!!　最初の予定では水に落ちても何度でもリスポンできましたが今回はチームの両方が落ちれば失格となります！　ただし片方が生きていればリスポンは可能です!!　では用意はいいですかいいですね!!　開始です!!』

物凄い急な勢いでレースが開始される、それにいち早く反応したのはらうりーとモツピー、モツピーの相方は誰なんだろうか、正直言っちゃあアレだけどコミュ障のモツピーが呼び止めたのは……鈴音がせつしーだろうか…？

まあまずは……

「失せる貧乳の敵イ!!!」

「無乳の敵!!!」

左右からタツクルを仕掛けてきたペツタンカーの攻撃をシステムで回して無力化後プールへと押す。

「そんなはずー!」

「私は何故!　こんな!!」

どぼーん、と始末した所でかなりの人数が乗っている島とスタート地点の間の溝に両手を突っ込み島を持つ。

「よいつしよおー!!!」

掛け声と共に思いつき持ち上げる、するとその島が斜めになり



乗ってる人間の殆どがバランスを崩し転倒、そして島を滑りプールへダイブしてゆく。

『ミラクルさつきゆんさん！ 何と言う力技!! 今ので7割近くの参加者を一斉に脱落させました!! コレはひどい!! ブーイングが参加者から寄せられます!! ですが観客の男性からは揺れ動くおっぱいのせいでしょうか! 凄まじい声援が送られます!!』

胸を寄せて観客席にウイנקをすると割れんばかりの大声援がこちらへと飛んでくる、それと同時に少くない「一度落ちろ」の声も聞こえてくる。

「さあ行こうか、簪ちゃん」

「う、うん……」

ステージを見渡すとたつしーがトップで次点が「しゃるらう」、その次が……モツピーと、本音ちゃん……だと?!

あ、鈴音とせつしー組なんだ。遅くはないんだけどね、今一協力し合うと言うのが出来てないから一般チームに負けてる。

ロープを引っ張って浮島を寄せ、相棒を乗せたら陸に残った方が紐を引っ張って向こうに島を押すと言うしよっぱなから力任せのギミック、まずは力任せに向こうにある島を引っ張ってこちらに持つてくる。

「さあどうぞ、お姫様」

「うん……」

揺れないように普通で速度でロープを引っ張って簪を向こう岸へと輸送する。

「しーちゃんの仇ツ！ 落ちろ乳女ア！」

「フツ!! 手間を掛けさせないでよ、貴女一人に……簪ちゃんが待つてるんだからなあ……」

後ろから女性がタツクルを仕掛けてくる、あわせてその場で跳んで女性の肩に手を置いて空中を跳ぶ、勢いを残したままプールへと落ちていった女性を見つつ着地、浮島が少し揺れた。

直ぐにロープを取り簪を向こう岸へと送り届ける。

「頑張るね……」

「手を煩わせるまでもないよ、少しどいててね？」

島を真ん中へと停止させ5歩後ろに移動、そのまま3歩助走を付けて次の踏み込みで跳ぶ。

『お、おおっと?! さつきゆんさん何と、跳んで真ん中の浮島に着地、直ぐに跳んで向こう岸へと着地!! 受身も素晴らしいです!! まるでニンジャー!』

「アイエエエ!! ニンジャ?! ニンジャナンデ?!」

「コワイ!!」

『ああ! 救護班の皆さん!! 早く! その人たちを医務室に!!』

「い、いだい…」

「し、信一郎…? 大丈夫…?」

物凄く派手な動きをしたし水着やブラで胸を固定していないからシャツの中で超☆エキサイティングしておっぱいが千切れるかと思っただ、痛い。

「簪、簪…:俺の胸大丈夫…? 千切れてない…?」

「喋り方が素でもちやんと声は作るんだね…:」

く く く く く く く く く く く く く く く

「余裕余裕!」

「地雷原を抜けるのに比べれば大した事はありませんわ!」

「仲間はずれはよくないなあ、私も入れてくれないと!!」

「ツ!!」

「遅すぎる、これは」

二人が振り向くと同時に跳んでそれぞれの肩に手を乗せるように回転。

「貰った!」

「きやつ!」

「つくう!」

両腕を一気に広げて二人を弾き飛ばす。

「まだまだあ!!」

「この程度!」



「つくう!! コレが…これが学園生徒会長の力…!!」

「うふふ、ごめんなさいね篠ノ之さん、私は負けるわけには行かないのよ、だって生徒会長だもの」

「やるようになったわね本音、本当に強くなった。私が劣勢なんてね」  
「うふふ、おねえちゃんに勝とうって頑張ったもくん」

前方が何か凄い事になってた、てか本音ちゃん強え…：打撃も掴みも殆ど見えねえ、あのきぐる水着もその効果を助長してるのか攻撃範囲が全然見えん。

「ばあい」

「きや…!」

ああ、モツピーが落ちた!!

「す、すまないのほほんさん…!」

「大丈夫だよしののん、私がココを抑えるから、早く帰ってきてね。それまで耐えて見せるから…!」

「ああ、ああ! すぐに、直ぐに戻る!! 待っててくれ!!」

か、格好いい…、本音ちゃ…さん。

「ごめんね、本音ちゃ…ツ!!」

「駄目だよukaiちよく、ココは通さない、絶対に…しののんとの約束だから」

「二人がかりよ?」

「それでも、だよ」

「仲間はずれは良くないなー私も入れてくれないと…」

「あら、さつきゆんちゃん? これは大変な事になったわ、三つ巴なんてね」

「大丈夫…:…?」

『簪、俺に任せろ、刺し違えてでも倒す』

力を抜いて身体を揺らす、構えの無い本気の構え。

「私の相手になるつもり? いいわね、面白い、今そのそつ乳叩き落として 炉にくべて 脂肪燃やして暖をとってやるわ」

「あああ、そう それは仕方ない あああ、そう それは残念、至極では仕方ない!! ならば、その会長のそつ乳を落として炉にくべる」

「ありがとくさつきゅー、助かるよー」

「本音を倒さないと、流石にお嬢様も苦しいかしら」

「どうしたの？ 構えた方がいいわ」

「構えてる、アナタと同じように」

すいとたつしーが目を細める、双方移動せずその場で揺ら揺らと身体を揺らしている。

「へえ、そうなんだ」

「ええ、そうなの」

「システム」

システム、ロシアの軍部格闘術、後の先を極めた自己防衛格闘術であり殺す事に長けた攻勢格闘術である。

「私、ロシアの代表よ？」

「ロシア出身の軍人や傭兵に鍛えられたのよ」

嘘は言っていない、アルゼブラ所属やイクバル所属、オールドキングにみっちり鍛えられた、こればかりはいくらモノホンの軍人や代表とて劣ってはいないと自負している。

「素敵な風穴にしてあげる」

「刺激的にやろうぜ」

直後に凄まじく鋭い蹴りをたつしーが放つ、完全に顎に入れる気だっただろ、冗談じゃ…!!

下からの掌底で蹴りを跳ね上げそのまま後ろから押すように力を掛け軸足を蹴る。

その蹴りをそのまま受けて身体を空中で回転させ踵で蹴りを飛ばしてきた。

頭を逸らすことでギリギリ回避する、頬に掠った。

「へえ、やる」

「冗談じゃ……」

「みててね簪ちゃん、お姉ちゃんの勇姿を！」

「頑張つて……!!」

「お姉ちゃん頑張る！」

「先輩じゃありません」

「ズバツと言われた?！」

さて、何としても勝ちたいので、沈んでも打たせて貰う。卑怯とは言わんで欲しい!

「っふー」

「甘いわ、攻撃はまだまだね」

「しまっ…」

「ほい」

「つつ!!」

右腕を使いフック気味に掌底を放つのも容易く絡め取られ捻り上げられる、逆らったら最悪折れる。

そのまま跳び関節に無理のない角度になった瞬間に全力で引く、ソレと同時に体を捻り踵落としを仕掛けるが案の定容易く避けられた。

「すごいわね、常人とはかけ離れた運動能力、残念だわ、そんな芽を摘み取ってしまうなんて!」

「なるほど、噂どおりか」

「右腕、大丈夫?」

「腱が逝った、しばらくは動かない」

「ならあなたに勝ち目はないわ」

「それがどうした生徒会長、まだ右腕が逝っただけじゃない、能書き垂れてないで来なさいよ、掛かってきなさい。早く! 早くツ!!」

「ふ、ふふふ、あはは! 素晴らしい、素晴らしいわ!」

左腕を大きく引き、突き出す。やはり回避され腕を取られた。

「もう一本頂くわ」

クン、とたっしーが俺の左腕を逆側へ力を向けた直後『ゴキン』と音が鳴って曲がってはいけない方向へと曲がった。

「え、嘘——」

「貰った」

たっしーが呆けた一瞬の隙を突き右腕を治しワンインチパンチ(極々近距離、ほぼ零距离より体重移動を主に使い打撃を繰り出す技)の応用で弾き飛ばす。

「まだっ!!」

「あ……か……あ」

空中で身体を回したたっしーが俺の顎を捉え蹴りを直撃させ吹き跳び、プールへと落ちた。

ガクガクと足が震え、力が抜け膝を付く。

脳震盪、思考能力が落ちる、目の前がフラフラする。

受身を取る事もなく身体を地面へと叩きつける。

「しん……ツ!! サキ……!!」

「か、かんぎ……かひゆ、かんぎひ……?」

「うん、うん……! 私はここだよ……!!」

「ほ、ほんね、ひよんねちゃんは……?」

「勝ったみたい……」

「くひゆ、きひや、これで……かいひように、か、かち……いく、じよ」

「駄目だよ! 脳震盪になってる……! 後遺症が残るよ……!!」

「なりや、ほんねひやんと……いけ、かて……かんじゃひ、いけ……いくんら」

「……ツ!! ほ、本音!!」

「ひえう……? かんちゃん……?」

「お願い、私と組んで!」

「うん……うん、でも……」

「商品はいらない……! だけど、私は何としても勝つ……勝たなきゃ駄目なの……!」

「うふふっおっけ」

「じゃあ……いってくるね」

「ああ、いっれこい」

ああ、つかれた……

く　く　く　く　く　く　く　く　く　く　く　く　く　く　く　く

「……………」

「起きた……?」

目を開けると俺の顔を覗き込む簪がいた、ああ、なんだろうか。スゲエ落ち着くし気持ちいい。

「んっ……」

「ああ、膝枕あ」

スベスベもちもちで柔らかい枕を無意識に撫でると簪が微妙に嬌声を上げたので簪の身体である事が分かった、そこから推測してこれは膝枕である事を理解する。

「ぐううう……私も簪ちゃんにして貰った事ないのに……」

「先輩、何か謝る事は……?」

「うぐ、その……ごめんなさい、まさかアレほどやれるとは思わなくて……つい」

「他には……?」

「ほ、他……? えと、えと……」

簪が俺の頬を撫でて一度領いた後プライベートチャネルを起動し『元に戻って』と言うのでゆつくりと立ち上がり相も変わらず何処からともなく巨大な黒いマントを取り出す。

「面倒なので種も仕掛けもーとか無くていいよな、私の正体はー」  
「?」

身体を隠して服と身体を元に戻してマントを落とす。それと一緒によっこい、と座る。

「はい、正解は女装した信一郎君でした」

「え、は、え? ええええ?!」

「で、先輩……他に信一郎に謝る事は……?」

「え、う……でも」

「……………」

「その、家の件で色々……ご……ごめん、なさい……」

「信一郎は?」

「ええよ!」

すると簪がニツコリと笑って俺の右腕にしがみ付いた。

「うう、か、簪ちゃん……」

「なに? お姉ちゃん」

「か、簪ちゃん……簪ちゃん!」

「もう、落ち着いてよ……お姉ちゃん」



「うえええん!! 簪ちゃああん!!」

うーん、仲良き事は美しき哉。

姉妹仲は無事修復されたようで良かった良かった、そういえば簪は優勝できたんだろうか。

「そーいや簪、優勝できたか?」

「え、あ! えと……その……ごめんなさい……」

「どういう?」

「その、本音と組んだ瞬間にね……」

「デユノアちゃんとボーデヴィツヒちゃんがフラッグを取っていたのよ」

「ああ、そーいう」

戦闘に参加せず堅実に進んでたのな、さすがらうりーとシャルリン。

「まあいいさ、今度カレード所有のプライベートビーチにでも行くか」

「うん……」

「スタアアアアアアアップ!!!」

「乱入してくるとは、とんでもない奴だ」

「簪ちゃんとお付き合いたいなら最低でも私を倒す事よ!!」

「信一郎……学園に戻ったらセラフで……ね」

「酷い事言うねえ、俺にもたつしーにも」

「生徒会長は学園最強の証、私を越える事は不可能よ」

「ナインボールセラフ、それは最強の証。誰であろうと私を越えることなど不可能だ」

ただ浮いてたら相手のエネルギー切れで勝利しました。

なお、シャルリンとらうりーは迷いに迷った拳句話し合いで出場ペアで旅行に行くことにしたそうだ。

く く く く く く く く く く  
く く く く く く く く く く  
く く く く く く く く く く

トウ・キティズ・ラブソディ編

【T・K・R】

「坊ちゃん、俺ああの新しい小娘が心配だ」

「どうしたんだいきなり」

「何か壊れてきてるぜ」

「そうか？ どう思う？」

「……心配無用……」

「大丈夫でしょう、見たところ不自然な所はありません。オールドキングの見間違いでは？」

「だそうだ」

「そうかねえ……」

今ある意味問題児な数人を連れてシヨツピングモール、レゾナンスへと来た。

ガチ傭兵上がりのソードオフ二連水平シヨツトガンの似合うオールドキング、勿論シヨツトガン所持。

オフなのにピッチリとしたスーツを着こんでいるにも拘らず日本刀を携えたアンジエ。

和風をイメージした普通の服を着てやっぱり帯刀している真改。

そして……

『信一郎様、問題ありません。周囲に危険な物はありません』  
「いいからこっちに来いリリウム」

イギリス製スナイパーライフルL96を背負ってワンピースドレスのような可愛い服装をしたチョコチョコとこちらに走ってくる小柄な少女リリウム・ウォルコット。

それとなく聞けばオルコット家の分家だと言う。

つまりせつしーの親戚らしい。

全員が全員武器を持っているのに警察官に捕まらない理由は『カリードだから』コレに尽きる、もう何でもあり。

「少し休憩するか、どこがいい？」

「リリウムはそのカフェがいいです」

「私は何処でも」

「……茶屋」

「ねえぞ」

「……無念……」

「よし、全員武器を収納しとけ」

強盗やなんやに間違われちゃ適わん、まあ二人ほど見た目が堅気じゃないんだが。

嬉しそうにスキップをしながらカフェへと入るリリウムを追ってぞろぞろと中に入って行く。

「いらっしやいませ！ お客様、@クルーズへようこそ！ 何名様……」

「5人です。あ、信一郎様、リリウムあそこがいいです」

「落ち着け、すまねえな嬢ちゃん、騒がしい娘で」

「どうした真改顔を真っ赤にして、早く行け」

「……しゅ、羞恥……」

「……シャルりんバイト？」

中に入ると執事服を着たシャルりんが笑顔で対応してて俺の顔を見た瞬間シャルりんの時間が静止した。

ソレを気にする事なくリリウムが気に入った席にちよこんと座った、その周りを固めるように全員が座る様を見ているとまるでリリウムの護衛のようだ。

「まあ、アレだ。頑張ってくれ」

「……うん」

全員の席に座って上着を脱いで椅子に掛ける、するとスイーと流れるようにメイドさんが歩いて来た。

見ると……らうりー、お前もなのか。

「注文は——籐ヶ崎……？」

「あー……なんだ、いつちーが見たら褒めるだろうな」

「……緑茶……」

「ねえよ」

「……無念……」

「ロシアンティー」

「……無理……」

「元からあると思つてねえよ」

「リリウムはブリティッシュティーセットがいいです」

「随分長く居座るつもりなんだな、まあいい。人数分お願いできるか」

「……籐ヶ崎、何だこの面々は、軍人か？」

「ウチの傭兵だ、全員な。それよりも注文頼んだ」

「…畏まりました、少々お待ち下さい」

楽しみです。と笑顔でパタパタ脚を動かすリリウムを見て歳相応だと考えながら、店内を見渡す。

らうりーに接客…？ 罵倒されている客やらシャルリンに接客さされてデレデレの女性やら、概ね平和だ。

「タバコ吸つていいか」

「駄目です」

「……不許可……」

「場を弁えろ」

「聞いてみただけじゃねえか…」

「お待たせしました、こちらブリティッシュティーセットでございます。ごゆっくりどうぞ」

「すまねえ、ジャムを貰えるか」

「畏まりました」

「何としてもロシアンティーを飲みたいのな」

「一番口にあつてるだけだ」

そう言いながら自分のところにあるスクーンや菓子やケーキなどをヒヨイヒヨイとリリウムの場所へと移して行く。

何だかんだ言つて実は凄く面倒見が良く優しい、ただし身内に限る。

「お待たせしました」

「すまねえなあ」

〵 〵 〵 〵 〵 〵 〵 〵 〵 〵 〵 〵 〵 〵 〵 〵 〵 〵 〵 〵 〵 〵

「そろそろ出るか？」

「あと1時間……」

「しかたねえな」

「……甘すぎワロタ……」

「オイ真改テメエ」

そろそろ店員が「何時まで居座るんだこいつら」見たいな顔で見ている。いや、イギリスのティータイムってこんなもんよ？

仕方ない、リリウムが満足するまで待つかとストレートティーに口を付けた瞬間男三人が物凄い勢いで突っ込んできた。

「全員動くんじゃねえ!!」

そしてハンドガンの乾いた音に続き女性の叫び声、にも係わらず我がカラードの面々は何事も起きていないかのように紅茶を飲んでいく。

「騒ぐな!! 静かにしろ! 死にてえのか!!」

「あ、スコーンジャム付いたら美味しいです」

「今までどうやってスコーンを食ってたのか……」

やだこの人たち神経図太い。

「俺達には高い金払って手に入れたコイツがあるし」

「安モンだな」

「お前のは骨董品のプレミア価格だろう」

ああ、一番最初に反応する所そこなんだ。

何からうりーがただ一人腕を組んで直立不動だ、おおう、銃を突き付けられちゆうけん。

「ちよつとクラスメイトが銃突きつけられてるのはアレだし行つてくらあ」

「お気をつけて」

「よっこいしよつと」

「おいお前、ふぎけてるのか!!」

安物ショットガンを持った男が安物ショットガンを俺に突きつける。

左手で銃口を塞いで掴む、コレでよし。

「な、お前！ 気でも狂ってるのか?!」

「ほら、どうした撃てよ」

「な、何?!」

「たかが手の平一枚じゃねえか、ソレを抜いたら俺の頭を吹っ飛ばせるぜ？ 撃って見ろよ、ほらどうした」

「素人かテメエ、いい事教えてやる、テメエの手で塞いだ所で銃身破裂はおこらねえんだぞ?」

「試してみる、ほら撃て、撃って見ろ」

「てめ——」

「撃てツ!!!」

叫ぶように促すと驚いてトリガーを引いたのか左腕に衝撃が伝わる。が、この程度で駄目になる軟い義手なんざ付けてない、銃身が裂けて膨らんだ銃の稼動部分を左手ですぐに掴み握り潰す。

「え?」

「ほれ、らうりー」

「いいぞ、助かる」

脚部の収納ナイフを右手で取りらうりーへと投げる。

驚く様子も無く飛んできたナイフを掴んで男の持つハンドガンにナイフを突き刺し一瞬で使用不能にまでバラした。

ショットガンを潰されて唾然としている素人の顔面を引つ掴んで入り口近くの窓ガラスへと投げつけ、お帰りいただく。

「なっなっ?!」

サブマシンガンを持った男がこちらに銃を突きつけるより早くサブマシンガンが飛んでいった。

「ショットガンて…」

「ちやんとスラグ弾だ」

ズザーとハンドガンが地面を滑ってきたので男が咄嗟にソレを取ろうとした、リーダーやショットガンを持っていた男よりは出来る。

しかしそのハンドガンも凄まじい勢いで飛んで行った、見るとリリウムがL96を構えている。

直後その男に二本の刀が突きつけられていた。

「……終止……」

「いやに満足そうだな」

「ち、ち、畜生がああああああつ!!! こうなったら構いやしねえ! 野郎ぶつ殺してやああああある!!!」

何か見るからに爆弾のスイツチ的な物を持って威嚇してくる、偶々男の近くにシャルりんがいたのでもう片足に収納してあつたナイフをパスする。やはり綺麗に取ってくれた。

らうりーとシャルりんが凄まじいナイフ捌きで銅線やらなんやらを切断し、最後に起爆装置を握る手を蹴り起爆装置が宙に舞う。

「フンツ!!」

右足の展開型ブレードを展開し空飛ぶ起爆装置をぶつた切つて安全を確保、これで事件は一件落着つてな。

「チエツクメイト」

く　く　く　く　く　く　く　く　く　く　く　く　く　く　く　く

代金と店の修繕費に色を付けてレジカウンターにおいて出たりとか、まあ色々あつてその日の出来事を終えた。

ちなみにシャルラウは事件終了後のゴタゴタ時には既にいなかった、逃げたな。

カラードメンバーはその後の個人の買い物後本社へと帰つていった。

「お、よういつちー」

「おおシン、なんか今日面倒事に巻き込まれたらしいな」

「知ってんのかよ」

「ああ、強盗だろ? クラスの学校に残ってる勢が離してるのを聞いた、カラードがどうとかつて言つてたからシンじゃないかと思つてな」

「その言い方だったら俺が強盗したみたいじゃねえか」

「まあ違和感ねえけど」

「今度セラフと耐久訓練な」

「やめてください、しんでしみます」





ん。

オレンジ色の浴衣を着て父さんの腕に掴まりながら実にご満悦な表情である。

「シン君が祭りに行ったって聞いてパパとママもデートに来ちゃいました！」

「来ちゃった！」

「そして折角だからIBISも連れてきちゃいました！」

「き、来ちゃった」

そして社内では常にスーツをきつちりと着こなしている我が姉の貴重な浴衣である。

「すまんないっちー、俺姉さんと祭り見て回るわ」

「おう、あれ？ IBISさんって確かカラードのAIで、あれ？ 姉さん？」

「うむ、姉さん。じゃあの」

混乱してるいっちーなど知ったことか、俺は行くのだ！ お祭りへ！

姉さんの手を取り駆け出す、いやはや。姉さんは左手であろうが右手であろうが数百キロ程度の握力ではビクともしないから実に楽だ。気を使うのって本来苦手なんだよね。

「なんぞやりたいことやら食いたい物ある？」

「なら、あの焼きトウモロコシって言うのを食べてみたいなの」

「あいよ……おっちゃん。二つお願い！」

「まいどお！」

姉さん、IBISのボディには電力供給及びコアジェネレーターからのエネルギー供給のほかには有機物を分解してエネルギーにする夢の機関が付いていて尚且つ味も感じる事が出来るのだ。

姉さんにモロコシを渡すと笑顔で礼を言った後一粒ずつ指で握いで食べ始めた、違う、そうじゃない。

ために俺が普通にかぶりついて食べ始めると「ああ」と納得してトウモロコシに齧り付いた。

「ゴリ」と芯も丸々抉って咀嚼を始める。違う、そうでもない。

でもまあおいしいしそうだから別にいいや、どうせ有機物だし。

「たこ焼きって言うのも食べてみよっ」

「まっ、ちよ、待っ…」

何で俺よりも口の小さく作った姉さんが俺よりも早く食い終わってんの、何で芯さえ残ってないの。

姉さんに引つ張られてT a k o y a k iを買いに店の前に並ぶ、列が消化される前に急いで黄色い粒粒を腹に収めようと奮闘。

「ふいー、食い終わった…」

「？ シン、どうして真ん中を食べてないの？」

「ちやうねん、これは食べる場所とちがうねん」

「そんな、知らなかった」

「その身体になつてからの食事の頻度は？」

「今回の祭りが始めてかな」

そりゃあ食える所と食えない場所の区別が付かない…わけあるか、普通は芯に齧り付いてもその強度に諦める。

ところがどっこい…夢じゃありません…現実です…これが現実…！

脚力腕力は当然として顎の力も万力を超えるほどだ、もはや重工業用。

祭りの各所に備え付けられているゴミ箱にモロコシの芯を捨てる。

「はい、たこ焼き」

「ああ、姉さんありがと」

「うんっ」

次は食わずに俺の顔をじっと見ている、多分何処が食える場所か何処が食えない場所か分からないから様子を見ているんだろう。

なので爪楊枝でたこ焼きを刺して食べる。すると満面の笑みを浮かべた姉さんが同じように爪楊枝でたこ焼きを刺してパクリと口に入れた。

そしてモグモグと咀嚼したまま爪楊枝を口から離れた、そしたら見間違えであって欲しいのだが爪楊枝が短くなった。

「ちやうねん!! 爪楊枝は食べたならアカンねん! コレただの食器や

から！ フォークとかスプーンとか箸とかと一緒にやら！！」  
「んむ？」

言い切る前に残った爪楊枝をぽいと口に放り込んで既に咀嚼していた、やだ天然！！

「……おいしい？」

「おいふいよ？」

「さよか、そりや何よりや……」

でも姉さんたこ焼きを食べる手段が残り手づかみ位しかなかったよ、どういう事だつてばよ。

「仕方あるまいて、あーん。爪楊枝は食べたら駄目だよ」

「あーん」

口にたこ焼きを入れるとハムと口を閉じる、そのままスイツと爪楊枝を引くと……よかった、食われてない。

自分の分も食べて姉さんの口にもたこ焼きを入れて、を繰り返してたこ焼きをそれぞれの腹に収めた。

「あ、カタヌキってなにかな、行ってみよう」

「ああ待って！ まだゴミが捨てられてない！」

再度腕を引っ張られて運ばれていく、俺の体重は義手義足を合わせて100キロを越えるし生身の右腕で80キロのバーベルを持ち上げられる、しかも義手義足は丸が幾つか増えるのに抵抗も許されず運ばれていくのは姉さんのボディスペースが凄まじいからに他ならない。

「おじさん！ 二枚お願いします！」

「お、まいど！ 父ちゃんとデートかい？」

「いえ、弟とデートです！」

「へえ、弟……おとうとオ?！」

「うん、何となくそうなると思ってた」

「る、ルールは分かるかい？」

「姉さん、この板に絵が描いてあるだろう？ この絵の通りに型をくりぬくんだ」

「お、おう！ 見事正解したらお菓子の詰め合わせだ、一回500円！」

「なるほど、この小麦粉63%澱粉21%砂糖——」

「あーいいから早く始めよう」

そして渡された型抜き菓子に俺のほうはやバイ、何がやバイってひょうたんなんだけどコレ括れじゃなくて最早棒。

対して姉さんの小槌の難易度の低さがヤバイ。

「あえて難しい方を俺に渡してくるとは……」

「姉ちゃんにいい所見せてやんな、兄ちゃん」

「ああやってやるよ、やりやいいんだろう！」

渡された針で一突きすると無残にもそこを起点として真つ二つに割れた。

「こんなのって……」

「まあ、そう落ち込みなさんな…運が悪かったんだよ、本当に」

「出来ました」

「……嘘だろ?! 早すぎ——」

針を持った右手が震えた状態で横を見るとなんとも美しく形作られた小槌。

「誤差±0.001μmです」

何と言うドヤ顔、誇らしげに抜いた型周辺の型屑を針で一箇所纏めている。

「材質、厚さ、気温、湿度、n単位での亀裂その他の要素により尤も効率がよく尤も確実な角度、位置、力を算出して型を抜きました」

「そ、そうかい。まあ、アレだ、おめでとう、ほら持って行きな、姉ちゃん」

「ありがとうございます。シン、一緒に食べよっか」

く　く　く　く　く　く　く　く　く　く　く　く　く　く　く　く　く

「姉さん、ちよつち見たい物があるんだけどいいかな」

「うん、大丈夫だよ」

「オツケ、いっちーから聞いてな、神楽舞ってのがあるらしい」

なんでももしかしたらモッピーが舞うかもしれないとの事だ、いっちー曰く「今までは箒が居なかったけど今年は居るからもしかした

ら」らしい、だつたらからかうネタとしても純粹に見物としても見に行きしかないだろう。

いつ見るかつて？ 今でしょ！

「あ、あの…その…すみません」

「ん？」

「その、歩きタバコはご遠慮頂けますか…:…?」

「ああ、すみません。でもコレ、シガーチョコなんで」

何やら祭りの運営の方が注意を行ってきたので素直に謝っていちーに貰つてたシガーチョコを口の中に放り込んでモグモグ、紙？

ヤツは死んだ！ 俺が食った、もう居ない！

「そ、それは申し訳ありません」

「ああ、いえいえ、こちらこそ紛らわしくて申し訳ない」

そこで謝罪大合戦になるかと思いきや「シヤン」と鈴の音が周囲に響いた、ほほお、もう時間か。

舞台に目を向けると祭りの運営の人がペコペコ頭を下げて離れて行く、舞台の上には化粧を施した見覚えのある美人さんが刀と扇を持っていた。

「ほお、綺麗だな」

「簪様に報告を——」

「じよ、冗談じゃ」

「冗談だから、落ち着いて」

心臓に悪い、心臓に悪い。

「…戦闘には向きませんね」

「まあ舞だからね」

「これならば真改の方が」

「あれは違う、摂津出身の癖に薩摩の刀法とか言つて盾やら防御に使つた刀ごとぶつた切るから」

「避けられたらどうするつもりでしょうね」

「さっばと死せい、黄泉路の先陣ぞ、誉れぞ。とか言うんじやね？」

「そうでしょうか」

個人的な会話だと普通に喋るんだけど社の事が絡むと敬語に変わ

る姉さん k a w a i i。

「足裁きは凄く綺麗だね」

「どっしり構える俺とは相性が悪いよ、双方攻め辛い」

「最悪地面にパイルバンカー打ち込んで固定するもんね」

「安定性高いよー」

そうこうしている内にモッピーが舞を終えた、歓声と言うほど煩くはないが少なくない賞賛の聲が送られる、それに対しばつが悪いような恥ずかしいような表情で一礼した後舞台を降りて行った、てかかなりの重要人物なのにこんな衆目の前に出ていいのだろうか、心配だ。まあそれ言ったら俺もいつちーもそうなんだけども。

「終わったね」

「うん、あと残るイベントは打ち上げ花火だけかな」

いい場所確保しないと周りが人だらけになっちゃう、どこか探そう。

何処がいいだろう、高い場所で上が開けてて回りに人が来ない、うーむ……

「そうだ、屋根、行こう」

「どうしたの?」

「そうと決まればまずは食べ物の確保だ、お好み焼きとか焼きそばとか、蓋でできる物を持っていこう（提案）」

く く く く く く く く く く く く く く く

うん、姉さんの食欲のせいで思いのほかもって行く量が増えたけど問題はなからう、さて、かなり罰当たりだが屋根の上に跳ぶとするか。「よし、姉さん上に行こう、付いてきて」

「わかったわ」

屋根ギリギリの高さに飛んで余計な重さをかけないように屋根に着地する。

そして姉さんが跳ばずに飛んできた、まあいいか。別に何が変わるわけでもなし。

二人で屋根の上に座りながら周りを見渡す。

「お、あれは……噂の五反田兄妹か、始めて見たな」

没個性で一般的な髪の色に紛れて赤い髪の二人組みが目映った、  
バンドナもしているのを見ると間違い無さそうだ。

「ま、今はスルーかな……おやおやおやおやあ？ いっちー？」

「どっ？」

「あそこ、ほらあそこの木が空いてる所」

「バレットM82——」

「待とう、ちよつとだけ待とう、なぜ50calを選択したとか言いた  
いが何をしようとした」

「勿論、織斑一夏を狙撃しよう」と

「待て、待て、何ゆえか」

「シンに刀を突き刺しといて謝ったから、はいそうですかと許す訳に  
は行かないの」

「落ち着くんだ、俺は、死んでない」

そうこうしばらく討論を続けやるところ銃を仕舞った姉さんに一息  
吐く。

ひよいと上を見ると丁度一発目の打ち上げ花火が空へ上っている  
時だった。

「たーまやー」

「……ねえ、シン」

「なんぞ？」

「今日はありがとう」

「別に礼を言う必要なんてないよ、俺も楽しかったし」

「うん、そう、そうだね、今日は楽しかった」

「花火が終わったら、一旦社に戻ろう、んで姉さんと父さんと母さんと  
一緒に並んで寝るんだ、きっと今日はいい思い出になる、いや、絶対  
いい思い出になるさ」

「うん、ねえシン、私の大事な弟、あのね……大好きだよ」

「ああ、俺も好きだよIBIS、俺の大事な姉さん」

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

唐突にもらった「拳」、予想外の「蹴」

【特に理由のない暴力が信一郎を襲う——！】

—Third Person—

ある一軒の家の前で金髪の少女は跳ね踊る胸の鼓動を抑えようと両手で胸を押さえる、決して小さくない胸がムニユ、と音を立て……ないで形を変えた。

「ふう、落ち着け、落ち着くんだボク」

なんとボクっ娘である、これは嬉しい。

「Sois tranquille」

そわとらんきる？ 何言っただこいつ、などと思っただけない。ボクっ娘のあざとい彼女はフランス人なのだから、ちなみに翻訳すると「落ち着いて」である。

調べるなよ、絶対調べるなよ？ 絶対だぞ！ フランス語が出来ないのがバレルから絶対調べるんじゃないぞ！

じりじりとインターホンに人差し指を突きつけて突きを放つか否かでゆっくりと離れて行く、なんと彼女のインターホンへの焦らしプレイは11分目を迎えていた、そろそろご褒美をあげてもいい頃だと考えもするが肝心の彼女はそんな事は微塵も考えていない。

「つ、次こそは必ず……!!」

ドイツもコイツも！ 貴様等に次などあるものか、この役立たずの屑どもが!! と、言っただけなのが優しさである。

彼女は難しい顔をしつつ考える、「恥じらいにはもう用はねえ！

へへへへっ…… ISも必要ないや、へへへへっ……誰がお前なんか、お前なんか怖くない！ ……野朗、ぶっ殺してやる!!」

ここで家主が出てきておもむろに太目のパイプなんかを手を持つたら漏れなく彼女のグロ画像が見れるかもしれない、勘弁して欲しい、そういうのは苦手なんだ。

「ん？ シャルだったのか、どうした？」

「うえ?!」



シャルが後ろを振り向くとホームセンターの買い物袋を手に持った少年が不思議そうに見ていた、その袋の中には細くはあるが塩化ビニルのパイプが入っているブツダシット!

しかしこの少年は袋に入った塩ビパイプで蒸気抜きをするつもりはないらしい、心の底から安心である。

だがこのシャルという少女、友人間で一番しっかりしているくせに肝心な所でやらかしちゃう天然記念物さんだ、何をトチ狂ったのか目をぐるぐる回してこう言ったのだ。

「や、や、野郎、ぶつ殺s……ちっ、違う! そうじゃなくって、えとえと!」

ここで彼女の正体をバラそう、彼女の名はシャルロット・デュノア、フランスのデュノア社社長の一人娘だ、ある時期まで親子仲は非常に悪いと思われていたがある事件をきっかけに父親との仲を修復した、5日前までフランスに一週間帰って父親と共に過ごしたのは余談だ。

フランスの代表候補生であり二世専用機らふあーる・りぶあいぶ(意図してひらがなである)のパイロットだ、なお彼女の会社だが第3世代機を開発できず経営難に陥っていたがある人物の「俺のは第2世代最終型だ、第3世代第4世代の不安定技術なんぞよりよっぽど有用だぞ、え? 何お前まだ第3世代機に金費やしてんの? ご愁傷様、」の言葉により世界で尤も安定した第2世代機を作れる会社として経営難を脱する事が出来た。

ちなみにその人物の協力により既に第3世代機は開発を終えている。

スリーサイズと体重h——【ミンチより酷えや】——

若干引き気味の少年にあたふたとするシャル、本当に代表候補なのか心配になるほど急な状況に弱い。

駄菓子菓子ちよっと待って欲しい、彼女が天然を發揮するのは決まって目の前の少年が居る時に限る、なぜか、彼女は目の前の少年にホの字なのだ、なお、少年は他にも選り取り見取りな美人さんに好意を向けられている、もげろ、振れて腕げて腐れ、だから時代遅れだつ

てんだよ雑魚が、死に腐れ。

シャルの脳内でちっちゃな可愛くデフォルメされたシャルが忙しそうに走り回っている、一人頂けないだろうか。

い、いや、しかし私にはのほほんさんという心に決めた眺めて愛でる対象がだな。

所狭しと走り回るちっちゃなシャルの中で何故か昼寝をしていたシャルが眠たそうにまぶたを擦って手を挙げた、シャルたちが一斉にその手を挙げたシャルに目を向ける、彼女の出した答えは。

「来ちゃった☆（テヘペロ）」

あざとい、実にあざとい、ちなみに今までのあざとい行動を結果として導き出したのは先ほどのちっちゃいシャルである。悔りがたし。

ペロ、と舌を出した状態で見る見るうちに顔が紅く染まって行く、よくよく見れば目尻に涙も浮かんでいる、相当恥ずかしかったのか。「そっか、じゃあ上がっていけよ、盛大なもてなしは出来ないけど。歓迎しよう、盛大になー！ とか言えたらいいんだけどな」

「シンに影響受けるよね、一夏」

「まあ、少なからずな」

一夏が笑うのと共にシャルがクスクスと笑う、どうやら恥ずかしいのは過ぎ去つたらしい、もし彼女の前で「来wwwちやつwwwたwww（暗黒微笑）」などとしようものなら本気のパンチが飛んでくるか彼女が涙目で追いかけてくるかの二択だ。

「ほら、今日は暑いし麦茶何か出すよ、リビングで待っていてくれ、この部屋な」

促された通りにリビングに入りソファに小さくちよこんと座つたシャルがモジモジと手を膝の上で擦り合わせコミックチックな表情をしながら「うわー、うわー」と言っていた、よほど嬉しかったのだろう一夏もげろ。

周りを見渡して何か嬉しい事でもあったのか表情を緩ませながら頬を押さえている、何を考えているのかは想像に難くないので一夏もげろ。

あまりに一夏にもげて欲しいので謳ってしまいそうになる。私は

ヘルメスの鳥とか。

「待たせたな、ほら麦茶、今朝作ったからちよつと薄いだろうけど許してくれ」

「あ、ありがと一夏っ！」

しかしあまりの事に舞い上がり味なんて分からない、今イギリス料理を食べた所でマズイとは感じないだろう、なに、セシリアの手料理？

コジマは……不味い……。

何か話題を、話題を、兎に角会話を前に進めなければ、前へ、前へ！ 前へ前へ前へ前へ！！

『ピンポーン』

「ん？ 宅配便か？ ちよつと待っててくれ」

「アツ、ハイ」

呆気にとられてヘツズみたいな返しをしたシャルはりビングを出て行く一夏を見送って考えた「そういえば一夏の趣味ってなんだろう、あとで聞いてみよつと」と、どうせ炊事洗濯じゃね？

場所は外に変わり時間は数分前に戻る。

またもパツキンのねーちゃんが織斑宅前で携帯電話をコレでもかと振り回している。

このねーちゃん、別に電話の回線が悪いとか雨乞いの儀式をしているとかではない、電話本人（本体？）からしてみれば何時でも空へと舞い上がり束の間の浮遊旅行を楽しんだ後、蛹で固めた翼が太陽の日で溶かされ地上へと落されるイカロスと同じ運命を辿るかも知れないので気が気ではないだろうが。

携帯電話をブンブン振り回したままパツキンのねーちゃんが織斑家のインターホンへと近付いて行く、先ほどこれでもかと焦らしプレイをされ続けた挙句最終的に放置プレイをかまされたインターホんに何が起ころのだろう。

今だ振り回されている電話を見たところ最悪の可能性としてその携帯電話がインターホンへと遠心力も加えられた力で叩きつけられ

る可能性がある。

それは電話にしてみてもインターホンにしてみても勘弁願いたいところだろう。

特にインターホンにしてみれば散々である。

「ごほん、ごほん」

携帯電話を振り回していた手をピタリと止めて二度、ねーちゃんが咳をする。

その後スイツと髪を掻き揚げるが長い髪はさして掻き揚げる前と見た目は変わっていない。

シャルと違い焦らしプレイを始める事もなく、さして震えるわけでもなく細く綺麗な指がインターホンへと伸びた。

正解は！

「ピンポーン」

越○製菓!!

等とチャイムを鳴らしてから十数秒後、ガチャリとドアが開いた。静かな物だ、もう少し急いでいますよとアピールしてもいいだろう、佐○だとチャイムの直後に大声で返事をしないと出た時には何もない事があるのだから。

「はいはい、お？ セシリアじゃん、どうした？」

パツキンのねーちゃんことセシリア・チョロコツトさん、巷ではちよろいさんと名高い名スナイパーである。

どんな的だって撃ち抜きますわ！ と豪語しているが肝心のあの人のハートを撃ち抜けないスナイパー（物理）だ。

逆に視界に入ったからと言う無茶苦茶な理由で無感情にハートをカウンタースナイプされてしまう始末、なんで感度10であんな動きできるんだよ、おかしいだろとは私の弁である。

「おはようございます。ご機嫌如何かしら、偶々近くを通りかかったので、少し寄らせて頂きましたわ」

嘘付け、偶々ならその手に持つ美味しいと話題のデザート専門店のパッケージはなんだ。

どうせアレだろ、数時間並ばないと買えないとかそんな感じだろ。

そして涼しそうに得意げな顔をしているが彼女の心臓はもう凄まじい鼓動をセシリア本人に伝えている、理由は言わずもがな一夏もげろ、この際首でもいい。

「そうか、じゃあ上がっていけよ」

「ええ、あ、コレをどうぞ、おいしいと話題のデザート専門店のケーキですわ」

「お、ありがとな、お茶でも淹れようか」

「はいー」

実に嬉しそうだ、ほんの数秒後にその笑顔が消えるとも知らずに。出されたスリッパを履きリビングへと案内される。そこで一夏はこういったのだ。

「シャル、セシリアも来たぞ」

と……。

シャルとセシリアが同時に表情を驚愕の色に染める、何故だ、おかしい、私の予定では一夏と二人きりだった筈だ、とかどうせ思ってるんだらうけどそうは問屋が卸さない。

なお、この後ケーキを「あーん」すると言うイベントがあるのだがそれをやってしまうと我が家の壁を改修工事しなければならなくなるので勘弁していただきたい。

流星に180オーバーのパンチを壁に放ち続けたら十度も耐えれない、拳も壁も。

く く く く く く く く く く く く く く く く

紆余曲折あり一夏の自室へ侵入を果たしたシャルとセシリアは束の間の幸せを味わっていた、やれ男の臭いがするとか、一夏がこんな本を読んでいるとか、そんな事でしかないが。

幸いなのは彼の部屋は栗の花の臭いがしないと云う事だろう、控え気味に言ってるがぶっちゃけると精液の臭いである。

彼は三大欲求のうち重大な一つが失われているのではないかと心配になるがそれは置いておこう。

「この部屋椅子が一つしかないからなあ、悪いけどベッドに座っててくれ」

一夏がそう言い放つと同時に頬を染めて嬉しそうな顔をした二人が本当にいいのかと目で一夏へ合図する。

まああの本人は気にする事なく部屋のドアを閉めようとしているのだが。

「ピンポーン」

越後○菓!!

彼女達がホウとするのも束の間、チャイムの音が屋内に響いた、それに気づいた一夏が部屋の扉を開けながら振り向く。

「ちよつと出てくる、誰か来たみたいだ」

そう言つて出て行つた一夏に比べ当の二人はカチコチに固まってしまうている、本棚を見るなりベッドの下を覗くなりしそうなものだが生憎彼女達は何をするでもない、強いて言うなら両手でポフポフとベッドを軽く叩き続ける程度の事しか出来なかった。

それから十数秒、いざシャルが勇気を出してベッドにゴロンと寝転ぼうとした瞬間階段がリズム良く音を立て人が近付いている事を知らせた。

体重の支点を横にずらしたシャルが支点を戻そうと焦って珍妙な体勢となった、それをみるセシリアの目もどこか冷たい。

「わるい、下に降りて来てくれ」

当の一夏はひよつこりと顔を出すとシャルの体勢を気に留める様子もなく指示を出す。

セシリアは少々不満な声を出したがシャルはそれ所ではない、彼女の頭の中身は現在の光魔法かっこいいポーズの言い訳を探そうと必死だ、案の定ちっちゃいシャルが駆け回るが良さそうな答えは出ない、それに一夏が気にしてないんだから別にいいんじゃないやね? のちっちゃいシャルの一声により考えは沈静化した。

努めて何もしていない、何も起こらなかつたと表情を変えるが残念、顔は真っ赤だった。

「一夏、なにしてんのー? はーやーくー!」

一夏を押しつけてピョンコと部屋に突入してきたのは中学生、下手すれば小学生にまで見えてしまいそうな小さな少女、元気が体から溢れてご機嫌オーラとなつて撒き散らされている。

しかし少女が部屋の中に目を向けるとご機嫌オーラが瞬く間に消えうせてしまった、その後には雨に打たれて震える子猫のような眼差しをした少女が一夏の服の端を掴む。

「なんで…？ どうして…？？」

ともすれば泣いてしまいそうなほど目を潤わせて少女は一夏に尋ねる、その思いは「なぜ女を二人も連れ込んでいるのか分からない」の言葉に尽きる。

「ん？ 何がだ？」

悲しきかな一夏は色々と文章として足りない言葉の裏を見ることが全く出来ない、対する少女は一夏の言葉に目尻からボロボロと大粒の涙を零してその場にへたり込んでしまった。

「ふ、ふにゃ…ふにゃああああああん!!!」

「ど、ど、ど、どうした?! おい、おい鈴、大丈夫か?! どつか痛いのか?!」

そりやもうテンパりますとも、一夏本人にとって何故かいきなり少女、鈴が大声で泣き始めたのだから。

「なんだ?!」

「なんだー?!」

ドタドタと階段を駆け上がって顔を出した二人は黒髪ポインでポニテの少女、銀髪眼帯の小柄な少女の二人だ、この時シャルとセシリアの二人はトライポータブルなニヤンニヤンを諦めた、が残念がるよりも先にまずは泣き始めた鈴を落ち着かせることが先決だとベッドから立ち上がった。

く く く く く く く く く く く く く く く

「うゆ…」

一夏に抱きつく事で漸く泣き止んだ鈴はもう何度目か、一夏の服に顔をこすり付けて涙を拭う、一夏のシャツは最早汗を吸う機能を失

い、一部がしつとりと濡れていた。

普段はこの状況で他の面々が黙っている事などないのだが今回ばかりは鈴が世界の終わりだと錯覚させるほどの泣き様だった為仕方が無いと認めている。

黒髪の少女、箒はぐぬぬとしているが他の面々はそうでもない、シャルは仕方がないなあと言った表情でソファに座りしきりに手を動かしている。銀髪の少女、ラウラはシャルの股の間にちよこんと座りシャルに頭を撫でられながらこれぞ夫の余裕と言わんばかりにふんぞり返っている。

セシリアは一夏の隣に座り今だぐずってる鈴の頭を優しく撫でていたりする、見た目だけならぐずっている娘（鈴）を優しく世話する夫婦（一夏、セシリア）にも見えるある意味一番オイシイ役だったりする。

『かーぜーよりもー早く、はーやしよりも静ーかに、炎よりもー熱く、山よりもたーかくにー♪』

「ん、電話だ。鈴、少しどいてくれ」

「ほら、鈴さん、一夏さんはお電話ですので少し離れましょう?」

「えう……えううう……やあ、いちかあ……」

セシリアに抱きかかえられ鈴が一夏から離される、すると表情をふにやりと崩してポロポロと涙を零し始める。泣き叫ぶ事はないがグズグズと赤子のように泣き出してしまふ、セシリアが抱きしめ背や頭を撫でるも今ひとつ効果はないようだ。

「はい、もしもし」

『よお、首輪付きィ……』

「シンか、どうした?」

電話から低い男の声が聞こえる、呼び名はシン、かの適当に、かつ自由に殺せるキャラが欲しいな、との理由で不死の化け物とされてしまった不運な男である。

『今暇か?』

「なんでだ?」

『ああ、俺が暇なんでな、お前の家に突撃しようと思ってた、学校に





全員で他愛のない会話をしていたがそろそろ一夏の足が痺れてやばい頃だ。

理由は胡坐を掻いた一夏の太股に鈴が頭を乗せ気持ち良さそうに眠っている為だ、一度そろそろ鈴を退けようかな、と呟いた瞬間に鈴を携帯電話で撮影していたシャルが「こんなに可愛く眠ってる鈴を起こすなんてとんでもない！」と猛反対したため今だこの状況だ。

【ドドドドドドドドドドドドドドドドドツドツドツ】

一瞬だけ凄まじい音が近付き、家の前で停止し、音が消えた。

眠る鈴がむにやむにやと口を動かし音が消えるとまた幸せそうな顔に戻る、シャルは携帯電話での撮影を動画撮影に切り替え可愛い可愛いと呟いていた。

「何だ今の音は」

「戦車の音に似ている」

「迷惑ですわね」

「あー…多分シンだ、悪い箒、出てくれ」

「わ、私か？」

何で私が、とブツブツ言いながらも一夏が自分を頼ってくれた事にほんの少し優越感を感じる。まあ本当は箒が一番扉に近かったからなだけだが。

箒がドアに手をかけ、押し開くと同時に扉の向こうの人間が声を掛けてくる。

「おお、いっちー、バイク何処置けば…モツピーか、いっちーは？」

「一夏は今手が離せん、そもそもバイクとは…なんだこれ?!」

箒が視界を横にずらすと巨大な鉄塊が置いてあった、男の言った事からバイクなのだろうと予想が付くがそう言う物に疎い箒にはそれがバイクとは分からなかった。

マニアが見たら涎が出るなどと言うレベルではない、まあ場合によつてはどうしてこんな事になった。と嘆くかもしれないが。

排気量は1,800ccを超え全長二メートル半を上回る。横幅でさえ一メートルを超えているのに更にサイドカーが付いている。

ハーレーダビッドソン FLHTCUSE8 CVOウルトラク

ラシック・エレクトラグライド 長つたらしい名前だ、覚える必要は無い。

値段にして440万円を超える。金持ちの道楽だともつぱらの評判である。

一夏の家前の道は決して狭いわけではない、狭いわけではないがバイク一台が占領していい幅ではない、いや…普通のバイクなら問題はないのだろうが最早普通車両の大きさが占領していい広さではないのだ。

「信一郎……やっぱり収納したほうがいいよ……？」

「やっぱりそうかー、しかたねえかー」

ヘルメットを胸に抱えた水色の髪をした眼鏡の少女が男、信一郎シンに進言する。

シンが溜息を吐きながら何やら大きな包みを手に持ちバイクに手を置いた、するとバイクが光の粒子となり消える。

一瞬筈が驚いた表情をするが「そういうえばコイツはこういう奴だった」と思い出し無表情に戻る、目付きの悪い娘である。

「で、入っていいのか？」

「いいんじゃないか？」

「凄く……投げやりだね……」

「知らん、私は出てくれ、と言われただけだ」

「さいですか、じゃあ入るぞなもし」

シンと眼鏡の少女、簪が遠慮無しに家に入る、リビングと思しきドアを開いて左手を上げて「よう」と挨拶するや否や一夏やらセシリアやらシャルやらウラやらが口元に人指し指をあて「シート」と言う静かにしろのジュエスチャーを行う。

全員の視線の先を見ると気持ち良さそうにスピスピ眠る鈴が一夏の膝の上に頭を乗せていた。

「なんだ？ 今週は鈴音愛護週間か？」

「んにゅ……」

「あー、はいはい、そつとして置けばいいんだな」

シンが苦笑いしながら後ろ手にドアを閉める、そして手に持つ大き

な包みをテーブルの上において一息付いた。

く く く く く く く く く く く く

「ん、美味しいな」

「ホントだね、コレがお寿司かあ」

「お刺身は臨海学校で頂きましたものね」

「これは…上等だな」

「はくはく、日本に居た時もそう滅多に食べれる物じゃなかったのよね」

「もぐもぐ、米と生魚がこれほど合うとは思わなかった、部隊の者にも食べさせてやりたいな」

「あー、サーモンうめえ…やっぱ寿司はいいな」

「値段を知ってるだけに…少し抵抗が…」

カラフルな髪の色と目の色が寄り集まって談笑しながらシンの持ってきた寿司を食べる。

簪がボソリと呟いたがシンのポケットマネーより捻出されたこの寿司は知る人ぞ知る超高級鮨屋（カラードの行きつけ）に真昼間から突撃して「おっちゃん！ 悪いんだけど10人前お勧めでお願いー」と頼んだ物だ。営業時間外だった事やらなんやらで+αどころの話ではない追加料金が発生している。

しかし年収200億ドルを超えるそうは見えないいいとこの坊ちゃんにはケツを拭く程度の出費だ、暇だからとバイクを買い漁ってるのに比べたら対した物ではない。

実は簪、交際相手の外見を捨て置くなら世界一の勝ち組である。尤もそんな打算は無しで交際しているため彼女にとって金の有無は割とどうでもいいのだが。

「てかアレだよ、来るなら来るで連絡くれればいいのに、連絡してきたのがシンだけってどういう事だよ」

「まあ、どうせ急にきて驚かせてやろうとか思ってたんだろ」

「私はそうだ、どうだ一夏驚いただろう、嬉しいだろう」

ふんすと無い胸をラウラが張る、ちなみに着ている服はいつぞやの

シャルに連れられた時に購入した物だ。

他の面々はあーだこーだと言いつつやらなんやらを並べて行く。

やれケーキを買うのに忙しかっただ、やれ今朝になって急に暇になっただ、やれ新型の銃器をよこせーとかヘリコプターよこせーとか、まったくあいつーツ。

さてさて現在ここに居る人数は8名、対して購入した寿司は10人前、2人前の余りはどうするのか？

育ち盛りの高校生がコレだけ集まっているのだ、たかが2人前の余りなど無いのと同義である。

モリツとマルツと平らげられた寿司の桶を一切躊躇することなく量子変換で収納する。普通は少しぐらい物怖じしたほうが良さそうだが基本的に家族が異常なので釣られて彼も異常だ。

ああ食った食ったと両足を投げ出してくつろぐのは意外！ それはラウラツ！

シャルにもっと女の子らしくしなきゃダメ！ と叱られて若干しよんぼり、ここまでテンプレ。

いつの間にかテーブルから離れていた一夏が人数分の湯飲みを盆に載せて持ってくる、何が怖いってそりゃ決まってる。熱いお茶が一杯怖い！

最近知っているものが急に少なくなった落語、特に若いモンは聞きながら知らない、そこらの漫才よりも遥かに洗練された物なのに、実に遺憾である。

「ふう、やっぱり食後は熱いお茶だな」

「特に寿司の後となれば尚更だ」

「あー、おいし」

「も、持ち手は無いのですか？　こんなに熱いのに？」

「ふー、ふー、ずず」

「この程度の熱さなど私には…ズズズあちゆいっ！」

「あー、あつつい、体温上がるわー《体温の上昇を確認、機関部より廃熱を行います》」

「あ、あ、暑い……！　生暖かい風が……!!」

一部地域で夏に行われれば人が離れて行く大惨事が起き交際相手からさえも距離を取られると言う悲惨な事態が起きていること意外は何もない至って平和なひと時だった。

ちなみに今文字数がやばいのでかなり巻いている。

く く く く く く く く く く く く く く く く

「それはビルより大きいか」

「そうだ」

「それは食べ物？」

「違います」

「生き物か？」

「否」

粘土で捏ねた物体を当てるゲーム、簡単に言えばそういうゲームをしている。

確かにそうとも見えない事も無い井戸やら納得の分かりやすさの馬、何やら良く分からないが人型だと言う事は理解できた程度で何故か正解した仮面ライダーブラックRX。

そして現在場に残る物が三つ。

兎に角雑としか言いようが無い円錐の物体、作：ラウラ

何か良く分からないぐにやぐにやとした不定形体、作：セシリア

精巧で物を知ってれば質問せずとも分かるのに肝心のモノが分からない円盤の乗った6本足、作：シン

ラウラの物で分かるヒントが「巨大である」「都市にある事もある、だが無い事もある」「人口ではない」

セシリアは「食べ物ではない」「巨大である」「有名」

シンが「生き物ではない」「巨大である」「人工物である」

ここで全員がギブアップ、タオルが投げ入れられました！

「なんだったんだ、ソレ」

「山だ、まったく、無知はいかんぞ！」

プンスコとご立腹のご様子なラウラ、それは 山と言うには あまりに尖りすぎた 大きく ぶ厚く 重く そして 大雑把すぎた

それは 正に 円錐だった。

「いや、いやいや、山ってそんなに尖ってないだろう?」

「失礼な、エベレストなどはこんな感じだろう」

じゃあエベレストと限定すればいいだろうなどと思ってみても言い訳をちゃんと考えてあるのだ、彼女はあくまで自分は正しいと言い切る。お前がそう思うんならそうなんだろうな、お前の中ではな。

ちなみにビルより大きいと言うが一概にそうとも言いきれない、世界には標高50メートル以下の山だって存在するのだから。

「あら、誰もわからないんですの?」

実に心外だと言いたそうな顔で驚く、そして勿体付けるだけ勿体付けて言い放った言葉は。

「我が祖国! グレートブリテンおよび北アイルランド連合王国ですわ!」

クソ長つたらしいが要するにイギリスだ。ちなみに挿絵とイギリスの地図を見比べてみると簡略化されているが確かにイギリスだった。北アイルランドが無いが確かにソレはイギリスだったのだ。

ちなみにイギリスはおっぱいを気にする少女に見えるのもっぱらの評判である。

「で、シンのそれマジでなんだよ」

「ああ、これな、かなり精巧に作ったんだがな…わからなかったか」

少々残念そうに肩を落とす、馬も分かりやすかったが形状だけで言うならこちらも相当なものだ、ただ物が分からないのだからそんなに残念そうにされても困ると言うのが全員の総意だった。

「まあ、気を取り直して…こいつはL・L・Lだ!」

「知らねえ…」

「…あつ!! 聞いた覚えがあるぞ、確か…確かカラードの最新兵器で拠点防衛型の巨大兵器!」

「正解だ! 正解したらうりー、もといドイツにL・L・Lを無償で貸し出そう!」

「いいのか?!」

いいわけないだろうが、何を考えているのだろうか。

しかしラウラもシンも割と本気である、なお、この後ラウラの軍から支給される給料が急増したのだがそれは今語るべき事ではないだろう。

そうわいのわいのと騒ぎ散らしていると部屋のドアが唐突に全力で開かれた。

「ただいま！　いっくんいっくん！　ちーちゃんとハグハグしよー！　ハグハグー！！　あとただいまのちゅ……なんだ、嫌に騒がしいと思ったら貴様等だったか」

「あ、ども、お邪魔してます」

「ふんっ！！」

気さくに挨拶をしたシンの顔面に拳がめり込む。唐突に貰った

拳

「う、ぶ……?!　え?」

「フッ！」

「おごあ?!」

顔面を押さえるシンの背に鋭い蹴りが叩きつけられる。予想外の

蹴り

「な、何故……!」

「そこにお前が居たからだ」

「理不尽!!」

特に理由のない暴力が信一郎を襲う――！

などと言う事は無かった。

「帰れ！　ここはちーちゃんといっくんの愛の巣だ！」

「まあ千冬姉、落ち着いて」

「だってだって！」

「はいはい、おかえり、千冬姉」

駄々をこねる千冬をあやすかのように一夏が千冬を抱きしめて頭を撫でる。

「ああ、ただいま……ふひ」



ふにやりと顔を綻ばせて笑顔になり一夏に見えない角度で他の女性勢に黒い笑みを浮かべる。

ほうきに47ダメージ

セシリアに39ダメージ

りに83ダメージ

シャルに43ダメージ

ラウラに19ダメージ

かんざしにダメージをあたえられなかった

シンはねんどをいじっている

銘菓ひよこのパチモンみたいな何かを夢中で作っている、こやつの名はオボンヌ、銘菓ひよこより長く深い歴史のある銘菓ひよこのパチモンである。

「いっくんはちーちゃんのものだ、ちーちゃんだけのものだ！ 誰にもやらん、誰にもだ！ 貴様等にも束にも!! いっくんはちーちゃんのを吸って生きるんだ！ いっくん、ちゅーっ！」

「あー、もう。まだ日が高いのに酒飲んできたな？ まったく、酒臭いよ千冬姉、ほら今日はもう寝ような？」

「えへへー、いっくんと寝るー！」

「はいはい、それは夜俺が寝るときな？」

表情には出ないがああ確かにベロンベロンに酔っ払ってるようだ。一夏に連れられ去って行く千冬を口を開けて見送る。

彼女達、織斑千冬が酒を飲むのは知っていたが休日でも真昼間から酒をかつ喰らうとは微塵も思っていなかったのだろう、イメージが崩れ去り啞然としている。

その中で対してショックを受けていないのは夢中で粘土を弄っているシンと別に他クラスだし日本代表、及び候補としての関係しかない簪、そして何や何であろうと尊敬する教官なのには変わりないところある意味悟りを開いているラウラだった。

箒は「千冬さんが姉に似てしまったのか、姉が千冬さんに似てしまったのか」と考え、前者だったら何が何でも一夏に対して姉を土下座させよう、後者なら…少なからず姉の影響は受けてるだろうし私が



「どうぞ、自信作ですわよ!」

一夏は努めて笑顔でその暗黒物質ダークマターを見る、確かに美味そうな見た目ではあるのだが臭いが辛い、彼は考えた、タバスコが入っているのか? と。

「いや、コレはタバスコの臭いじゃないな、タバスコはどちらかと言うと酸味のほうが強い、デスソースか?」

「赤色を足すためですわ!」

シンの冷静な推理によりより絶望が深まる。今ならソウルジェム真つ黒で魔女が生まれそうな勢いだ。

「ではどうぞ、あーんですわ」

「あ、あーん……」

とても羨ましい状況なのに誰一人として嫉妬などしない、むしろ顔を逸らして惨劇を見まいと努力するほどだ、一夏の顔色が美しいレインボーに染まる。

「おいしいですか?」

「おぎいッしッいッツ!!」

「ああお前男だよ、いっちー、お前のことは忘れない」

「信一郎……あーん……」

「あーん、むぐ」

一瞬シリアスな顔をしたかと思えばすぐに簪の手料理を食べる。

ロールキャベツだ、食べやすいように一口サイズで作っている、匠の嬉しい心遣いです。

「おいしい……?」

「ああ、美味しい、最高だ」

「良かった……」

「……一夏! 私のも食べる! ほら!」

「ちよつ、待つ! 熱い! おでんは、おでんは無理やり食べさせちゃだめええええ!!」

「ぼ、ボクのも!」

「待つて! 待つて落ち着いてくれ!」

「一夏! あーん!」



「いく、いくう！ すこーるう…いく…う！」

腹に、胸に、首に、頬に、目元に、唇に、ゆつくりと這うように吸血鬼が血を吸うように唇を落とす。

「ふふ、ねえオータム？ いきたい？」

「いききたい、いききたい！！ いかせてえ、すこーるう！ いかせてえええ！！」

オータムの涙と涎がぐしゃぐしゃのシーツを染め、泣き叫ぶように懇願した。

「いい子ね、可愛いわ……いきなさい、ならばいきなさい、全身全霊、全力で、いきなさい！」

「あ、あ、ああ！ いく、いくうううう！！ あ、つはあ！！ んあああああああ！！」

右手を一度一際大きく動かすとオータムが身体を大きく仰け反らせ舌を垂らしながらガクガクと体を痙攣させベッドへと倒れこんだ。

「可愛い、本当に可愛いわ、オータム、好きよ、愛してる」

「すこーるう、私も、お……あいしてるう……」

その言葉を最後に気絶するように眠ったオータムの唇へとキスをして毛布を掛ける。

コートのような上着を羽織り、携帯電話を手に取り、電話を始める。

『…なんだ』

「エム、仕事よ、オータムと二人でカレードを襲撃しなさい、可能なら最新機を確保、それか施設の破壊、無理そうなら直ぐに撤退しなさい」

『オータムか、犬猿の仲なんだぞ、何を考えている』

「いえ、別に？ ただ最高戦力を考えたら貴女達二人なのよ」

『ふん、お前が行けばいいだろうに』

『指揮官はただ沈黙して座すのみよ』

『……まあいい』

「ま、貴女の役目はオータムのストップパーよ、出来るだけ殺しはさせないでね」

『……ふん、愛されているようで羨ましい限りだ』

「大丈夫よ、貴女を愛してくれる人もきつというわ、オータムには私し

「かないの、私もオータムを愛しているしね」  
『……………皮肉だ』

完全オリジナル幕間デッセ ぼうこくの たのしい  
かいしやけんがく

二人の女性が日本の山で囲まれた県、奈良県（電波が二本しか立たなかつたり最悪圏外になる魔境、土人県）のある場所へとやってきた。

正しくは女性と少女がある企業へとやってきた。

「ようこそいらっしやいませ、本日はどのようなご用件でカラードへ？」

「ええ、少し欲しい物がありました」

長い黒髪の女性が微笑を浮かべフロントに立つスーツの女性へと返事をした。

その横に立つ少女は無表情を貫いたまま、ただ立つ。

「それはそれは、こんな所まで脚を運んでいただきありがとうございますでございます。インターネットから購入して頂いても構いませんのに」

「そういう訳にもいかないんですよ、だって私達が欲しいものは」

サンングラスをゆつくりと女性が外すと口元を大きく歪ませた。

「この最新機だからよお！」

「…ふん」

一瞬の閃光の後黒髪の女性と少女がその身に世界最強の兵器だと一般に認識されるISを身に纏っていた。

フロントに立っていた女性が何か行動を起こす前に少女が巨大なレーザーライフルを突きつける。

「妙な真似はするな、死にたくなければな」

「……我が社の最新機なら地下最下層で保管されていますよ、欲しければどうぞ、ただし……」

「そこまでたどり着けるなら、の話ですがね」

「てめえ……」

「撃つなオータム！」

「ああ?! んだとエム！」

「いい選択です、私の目前にはエネルギーシールドがあります。撃つたところでエネルギーの無駄でしたよ。それに貴女方がISを所持しているのは分かっておりましたから」

クスクスと女性は嘲笑う、オータムはギリと奥歯を噛みエムは一瞬で左手にブレードを持ち空間を切りつける、しかしその刃は見えない何かに接触し動きを止めた。

一つ舌打ちをしてブレードを仕舞う。

「行くぞオータム、防衛システムが展開される前に進めるだけ進む」「チツ、わあってる!!」

エレベーターのドアを破壊し二機のISが下へと降りていったのを見つめ女性が通信を起動する。

「社長！ すっごく怖かったですけど!! 足ガックガクなんですけど!! おしっこ漏れちゃうかと……湿ってる……グスン」

『ごめんなさいね、でもいの一番にやるって立候補したのは貴女よ?』

「28歳にもなつて! 28歳にもなつてええ! ふええええええん!!」

『社長、侵入者はいかが致しますか?』

『そうね、遊んであげなさい、IBIS。最下層までは持たせてね』  
『了解しました』

床に伏しオイオイと泣く女性を置いてただただ二人の侵入者の迎撃作戦が始まった。

だが緊張感の欠片も無い何人かの人間が扉をパワードスーツで蹴破り大声を張り上げた。

「フロント嬢の!」

「染みパンが!」

「湿パンが!」

「二食べられると聞いて!!!」

だが悲しいかな、いくらカラードの人間でも彼女はフロント嬢になる程のわりかしまともな人間だ。

「もう帰ってよおおお!!!」

「ならパンツしやぶしやぶさせて下さい!!」





「が、い、ぎゃ……」

とても大きくて蒼い綺麗なお目々をして緑の外殻、紫の細い足が数え切れないほど生えた「ソレ」を見た二人が固まる。

「いやあああああああああああああああつ!!!」

「ぎゃあああああああああああああつ!!!」

珍しい事に二人抱き合って目尻に涙を浮かべながら叫び、それに呼応するかのようにそれ、「AMIDA」が嬉しそうに飛び跳ねた。

メートル規模の巨大なダニに似た蟲が、である。

エネルギーが無駄だとか、弾がもつたいないとか、もうどうでもよかった。

完全に錯乱して片っ端から狙いも付けず撃って撃ちまくる、だが唯一発として外す事はしない、それは彼女達の腕が高……たしかに彼女達の腕はいいのだろうがXYZ軸どこを見てもAMIDAだらけなのでは最早外す事の方が至難の業だ。

攻撃が当たりAMIDAが息絶える時も黄色いヤバ気な液体を回りに撒き散らすので精神衛生上にも非常によろしくない、AMIDAもただ飛び跳ねるだけではなく時には彼女達に急♡接♡近したり彼女達に精神衛生上非常によろしくない謎の液体を吐き散らしたり何の前触れもなく爆発したりと彼女達のシールドエネルギーと精神を削っていった。

シールドエネルギーの減少はAMIDAの攻撃頻度と大した事の無い命中率から大した物ではないのだが精神力の削られ方がもう見てられない。

オータムは叫びながら怒り狂って鉛弾を撒き散らし、クールぶつてたエムに至っては鼻水やら涙やら女の子にあるまじき醜態を晒しながら顔をグシャグシャに歪めて泣き叫んでいる、ご自慢のフレキシブルなんてなかった。

だがそれでもビットを展開して手に持つライフルと併用して攻撃を行えるあたり素晴らしい才能の持ち主だ。

「エムうううッ!!! テメエはエネルギー兵器だろうがああああッ!!  
ちったあ節約しろおおお!!!」



「大丈夫か？」

「あ、ああ……すまなかった」

「まあ、無理もねえよ。行くぞ」

オータムが装甲脚で扉を破壊しこじ開ける、眼前に広がるは先ほどのようなアリーナだ。

「またか……」

「ひ、ひう……」

「いいぜ、来いよクソ野郎」

「あ、あ……」

ズカズカとアリーナに足を踏み入れるオータムに対して今一步踏み出せないエムが手を伸ばすがその手は空を切る、単純に届かないだけだ。

しかしその逡巡を無駄にするようにエレベーター通路からシールドエネルギーを減少させない謎の衝撃波でエムが押し出された、驚く間も無く一瞬でアリーナをシールドが覆う。

「?!?!」

『レベル2、アスピナ製高機動兵器、無人量産型Z—SOBREIRO、総数6』

「今度はなんだア！」

地面が6箇所ゆっくりとせり上がり6×8メートルサイズのコンテナが6現れる。

オータムが装甲脚をガチリガチリと指のように動かし両手にマシンガンを持つ、エムは自分の回りを守るようにビットを展開し左手と背をシールドに付け震える右手でライフルを構える。

ゆっくりゴウンゴウンと重い音を立てコンテナが開き、中身が明らかになる。

その姿が明らかになるにつれエムは嬉しそうな安堵したような表情になっていく、現れたのは板が幾つも固まったような見た目をした兵器だった。

似た形は「穴」である、見る人が見ればフラジール！ と言うかも知れないがよくよく見ればソレよりも簡素に出来ている。

また、頭部は完全にボディと一体化されており360度旋回するモノアイが紫の光を湛えていた。

ただ見た目が非常に不細工である。

両手に皆マシンピストルのような物を持っているまでとはいいい、うち一機が背に武器と思しき板を複数枚重ねたような恐らくチェインガンだと思われるものを背負っているのもまあいいだろう。

だがその他が非常に酷い、どう見ても過積載だと言いたくなるようなグレネードキャノンや背負っていたりデカ過ぎる、修正が必要だ、と言いたくなるガトリングキャノンだったり、酷い物は二対の半円のような馬鹿でかい何かを背負っている。

オータムはただ一つ「ああ、考えたやつ馬鹿なんだろうな」と怒りが一瞬で白け、一週回って可哀想にさえなってきたのだった。

「はっ、そんな骨っこで戦えるってのか？」

「「「はい、そのつもりです」」」

オータムが悪態をつくると全ての無人機がスピードも音も大きさもタイミングも寸分違わぬ言葉を返す、それを聞いたエムが微妙に顔を引きたらせた。

コンテナから全ての無人機が出ると中身のないコンテナが地面へと潜って行った、オータムはただ一つとして準備動作もなく引き金を引き大量の鉛弾を吐き出す。

だが無人機に着弾する寸前無人機の姿が一斉に掻き消え、部屋の中を高速で動く影が飛び回る。

それは銃弾を認識してから銃弾よりも速い速度で回避できる事の証左だった。

「クソッ！ こいつら、なんて早さだ!!」

「あれはお化けじゃない、お化けじゃない、虫じゃない、虫じゃない、大丈夫大丈夫……」

「エム！ 援護しろ!!」

「大丈夫、怖くない……だから、行けるッ!!」

そう言うや否やエムの姿が青い尾を引いて高速移動を開始し、ピットを縦横無尽に走らせレーザを放ち、個別に屈折させ飛び回る影を



エムの操るビットが抵抗する無人機の背部スラスタに攻撃を与える、緑のバリアと思しき球体が再度無人機を包むが元々大した性能ではなかったのか減衰しきれずスラスタを破壊する。

装甲脚を振り回し、無人機と一緒にドーム内で振り回す、壁に天井に地面にと何度も叩きつけ、場合によっては跳び回る無人機にも直撃させる。

「妙な気分になんてさせてくれた礼だ！ お返しに“穴空きチーズ”にしてやるぜ！」

自分の完全で振り回した二機同士をクラッシュさせ他の装甲脚で一斉に突き刺す。

「ギャアアア「黙ってる」」

叫び声を上げた瞬間に突き刺した装甲脚を一斉に広げ無人機をバラバラに引き裂いた。

「これで3、あと半分だな」

「いや、あと2だ」

その言葉と同時にブレードを横に突き出し身体を回転させ、刃を躍らせるように難いだ、鉄を鉄で殴りつけるような重い金属音がしてエムがくるりと先ほどと同じように浮かぶとドームの壁に向かって鉄塊が二つ叩きつけられ木っ端微塵に自壊した。

「流石だ、ムカつくぐらいいい腕だな、エム！」

「口よりも手を動かせ」

「これで二人とも二機ずつだなあ！ どっちが先にぶっ壊せるか勝負と行こうぜ！」

「ふん」

オータムが口角を吊り上げるとエムが鬱陶しそうに顔を背ける。

二人が武器を再度構えるとやや前方10mほど上に無人機が姿を現し、その背に背負う輪がスライドして無人機の上部へと移動し、緑の粒子を纏い始め次々と稼働部位が動き始めた。

その粒子が高速で動き始め粒と認識できないほどに、もはや線とも認識できないほど加速し無人機を包む。

エムの背中をぞわりと冷たい何か走り全身の毛が逆立つ、直感的

に「アレ」に当たってはいけない。そう感じた。

「避けるオータムツ!!」

「ツ!!」

二人が瞬時加速をするのと緑光の球体が爆発的に巨大になり撃ち出されたのは同時だった。

決して早いわけではない緑光の砲弾から逃れる事は不可能ではない、並み居る操縦者から頭一つ二つどころではない跳び抜けた強さを持つ二人にはその砲弾を避ける事が出来た。

だが着弾後の爆発を回避する事は叶わなかったが。

衝撃を持ってこそいたが大した物ではない、一瞬で体制を立て直した二人が受けたダメージをチェックする。

すると二人同時に目を見開いた。

「な、なんだ、なんだよこれ?!」

「シールドが、剥がされた…!!」

視界内のヘッドアップディスプレイの隅には「シールド展開不可」と表示されている。

流すようにステータスを見ると皮膜装甲や絶対防御はオンラインであったのがせめてもの救いか。

二人が同時に先ほどの緑光を放った無人機に銃口を向け銃弾を放った。

何としても次を撃たせてはならない、次を撃たれる前に破壊する、逃がしはしない。

そう考える二人を嘲笑うかのように、役目は終わったといわんばかりに銃弾の嵐に打たれ装甲片を撒き散らし叫ぶことも無く散っていった。

残るは一体、一瞬の停止後逆方向へ移動し、消えていったかのような無人機は背にチェーンガンを背負っていた、恐らく最もバランスの良い機体だろう。

速度を落とさず影のような存在でありながらソレを追うようにマルフラッシュが輝き、凄まじい数の弾丸が二人へと殺到する。

自分でさえどう動いているのか分からないほどに銃弾の嵐を無茶



苦茶に回避、だがその全てを避けきる事は叶わない。

「くっ…!! この弾丸…「狙いが甘い」…!」

「無茶苦茶に広がる散弾を避けてる気分だ!!」

・ 50 calよりも小口径の弾丸、ブローニングM2に劣る威力、ISのシールドの前にはほぼ無意味と言っているほどの攻撃力、だがそれはシールドが作動していればの話に過ぎない。

操縦者の命を守るために発動する絶対防御、それがこの一発一発で発動してしまう。

ISを装備している今は致命打になっていない。が、それはISのエネルギーが生きているからこそその話に過ぎない。

生身の人間にとつてはこの銃弾の嵐に一秒と耐える事は出来ない、有無を言わずにミンチ肉の完成だ。

「クソがあ!! 当たれ! 当たれよ畜生!! 畜生畜生チクシヨウ!!」

「何だコイツ、本当に無人機か…!!」

シールドエネルギーが見る見る削られてゆく、8割以上あったエネルギーも既に2割を切った、このままだと危ない、だがただの一撃も当たらない。

「待て、まて…待て…! …コレか!!」

「どうしたオータム!」

「エム! 30秒、いや20秒でいい! 私を守れ!!」

「…わかった、20秒だけだ!」

「一発も通すんじゃないぞ!」

「ふん、そんな口を聞いていいのか、お前に当たるかも知れんぞ!」

「ハッ、お前がその程度の腕ならこんな仕事スコールに直談判してる所だ!」

ふたりが目も合わせずニイと笑みを浮かべる。オータムが装甲脚で身体を包み防御体制に移る、エムが防御しきれない場所を守るようにビットを複数配置し、シールドを展開した。

「……これが、違う…なら…あった、こいつか! ああクソ! なんて対電子戦性能してやがんだ! なら…FCS停止、フルマニユアル化…!」

「もう20秒だ！ 終わったか！」

「ああ、たった今終わったところだ!!」

エムのシールドビットが離れて行くのと同様、オータムが装甲脚を本当の蜘蛛の脚のように使い、跳んだ。

装甲脚の先端をガチリと合わせ、一度に広げ脚の間にレーザーを張り巡らせ自分自体を一つの動く蜘蛛の巣とした。

だがそれ自体に意味は無い、その機能は空気の振動、温度の変化、音の方向を細かく探る精密なレーダーだ。

ピクリと感知した瞬間両手にショットガンを持ち感知した場所周辺を広く乱射する。

「オラオラオラア!!!」

狙いも一切付けない攻撃、先ほども二人が同じ事をしたが今は途轍もなく荒い。

だがその散弾は確かに無人機に直撃し、動作を鈍らせた。

その一瞬を逃すことなく瞬時加速で近付いたオータムは巣となった装甲脚で無人機を捕らえ、その力で捻り、抉り、裂き、破壊した。「なるほど、私の負けですか。まだまだ、改良の…余地が、ありません…」

断末魔の叫びではなくただ普通に言葉を残し光を失ったモノアイが地面へと落下し、高い音を出して跳ね、転がった。

『お疲れ様でした、第二層、アスピナエリアクリア、エネルギーの回復、及び弾薬補充を行います……完了、シールド解除、先へお進み下さい』

「……常についてわけじゃねえのか」

「どうした、オータム」

「さっき全然弾があたりなかっただろ」

「…ああ、まさかビットもフレキシブルもダメだとは思わなかったがな」

「ハッキングだよ」

「…なに？」

「銃口の向き、思考射撃、こいつらをFCSをハッキングして読み取っ



『レベル3、アクアビット製特殊兵器、無人型アクアビットマン、総数3』

「動き出す前に潰すぞ」

「わあつてらあ!!」

アラクネがアサルトライフルを一機のビットマンへと連射する。

しかし着弾するかしないかと言った位置で緑の粒子に巻き込まれ弾丸が動きを止め、下に落ちた。

「AIC?!」

「違う…! これは強力なバリアか!」

エムが正体を掴んだ直後3機の無人機が地面を滑るように移動を始めた。

だが銃口を向けはするものの攻撃をしてくる様子は無い、何が来るのかと警戒をした時二人がその目を見開いた。

計六つの銃口に緑の粒子が集まり始めたのだから、それは正に先ほどの階層で見た輝きだった。

「なっ! くそ! ふざけんな!! あんなのが6つも来るってのか?!」

「変態技術者め!!」

「何とかできねえのか?!」

「ダメだ! レーザーも通らん!」

「ミサイルも効きやしねえ!!」

「ならば斬る! 斬って捨てる!!」

手に大型ナイフを持ち、瞬時加速で一機へと肉薄する、が、狙っていた無人機が瞬時加速と同等かそれ以上の速度で横へと回避した。

「しまっ……………」

撃たれる! そう焦ったエムが絶句する。まだチャージが終了していないのはまあいい、色々あるのだろう。

だがなぜ先ほどのように滑るような移動ではなくゆっくりと歩行しているのか。

「フーン!」

再度瞬時加速で肉薄しバリアに刃を立てる。

「つぐ…重い…！」

押し返される力に逆らい再度瞬時加速を重ねボディに刃の根元まで突き刺した。

突き刺された一機の銃口に集まっていた粒子が霧散、だがそれは衝撃によって一時的にチャージが中断されただけに過ぎない、ブレードが突き刺さったまま再度チャージを始めた。

1mに満たない小さな刃が10m級無人機への決定打になるはずは無い。

「おい！ どうすんだ！」

「ならば！ 来い、瞬霞終刀！」

エムがその手に呼び出した刀は長大で黒く鈍い輝きを放つ無骨な大型ブレードだった。

その長大な刀を居合い斬りの如く腰に構え深く姿勢を落とす。

「…ふー…：you're going down！ 円塵現永斬：！！」

ザン、と何かを切り裂いた鈍い音を響かせエムが刀を振り切る。

エムが納刀するかのようにゆつくりと刀を腰へと戻し、刃の側面に添えたマニピュレーターが刀の鏢に当たりキン、と甲高い音を立てた。

それが合図だったかのように3機の無人機が縦に、横に、斜めにズレて落ちる。

「エム、お前一体何を…」

「寄って斬れないなら、寄らずに斬ればいい、それだけだ」

あらやだこの子作品間違ってますわよ。

『アクアビットマン撃破確認、再稼動プログラム起動、No. 1コア損傷軽微、No. 2及びNo. 3より使用可能パーツを接続、シークエンス1終了、シークエンス2に移行します』

撃破した筈の無人機が電撃を纏い“集まり”複雑に組み合わさった。

『シークエンス2終了、シークエンス3、システムチェック完了、シークエンス3終了』

集まった無人機が形を成し、人型として……いや、人型とは大きくかけ離れた状態で立ち上がる。

脚が二本体が一つ、腕が6本頭が3つの異形として。

『阿修羅ビットマン、起動。ムーンライトソード展開、EC—0307  
AB連結展開』

6本の紫光を纏ったブレード、羽と言うことさえもはや不可能な26門の砲口、その姿は禍々しく、また神々しい。

「こ、こんなものどうやって相手にすればいい?！」

「変態技術者め、よくよく好きと見える……！」

3つの頭部がエムを見る、一步も動くことなく、腕を一切動かすことなく、背の砲門が全てエムへと向いた。

同時に6本の腕から紫の光が伸び大きく広げられる。

オータム、エム、両方のISが捉えた総合出力は数字ではなく「Error」と言う単語だった。

ISでさえ数値化できない出力の攻撃、もし受ければどうなるのかは火を見るより明らかである。

無人機の背に光が集まり、3つ顔が二人を捕らえた。

「ツ……!!」

「う、お……!!」

二人が瞬時加速を二重に重ね凄まじい加速で横へと回避、一瞬遅れ凄まじい数の青い閃光が二人がいた場所に突き刺さり、紫の光の刃がその場所を切り裂いた。

先ほどいた場所の地面は赤く融解し周囲の空間は溶岩のような温度を持つ、そして避けたはずのIS二機も余波により少なくともダメージを負う。

視界にはノイズが走り、熱により内部でエラーが発生し、実弾兵器は火薬への誤発火の危険性から強制パージされる。

「なんだよ、これ……！」

「ありえん、こんな物が、こんな物があつていいはずが無い！」

オータムが一筋汗を流し頬を伝い顎から落ちた、その汗さえも地面に到達することなく皮膜装甲から出た直後に蒸発した。

『アリーナ内の温度が危険領域に到達、強制冷却を開始します』

そのスピーカー音と共にシールド内に白い煙が撒かれた、それにより周囲の温度が見る見るうちに下がって行く。

『平均30度以下に到達、冷却終了』

二人の視界の先には例の無人機が地面を斬り付けた体勢で静止していた。

二人は息を飲み警戒する、いつまたこちらを攻撃してくるかわからない、オータムは手にライフルを持ち、エヌは長刀を握る。

だがその二人を焦らせるように無人機は微動だにしない。

『阿修羅ビットマン、メインエネルギー枯渇、サブタンク内のエネルギー枯渇、ジェネレーター起動不可、撃破判定とします。お疲れ様でした、第三層、アクアビットエリアクリア、エネルギーの回復、及び弾薬補充を行います……完了、シールド解除、先へお進み下さい』  
そして二人の警戒を裏切るかのように唐突に機械音声が結果を告げた。

「へ？」

流石に二人は呆気にとられた様子だ、無人機を見て二人で顔を合わせ、再度無人機を見る。

『ほら！ だから言ったんですよリーダー！ 流石にあのエネルギーを賄うのは無理だつて！』

『だから上限解放したんじゃないですかあ!!』

『ほんつとリーダーは頭のいい馬鹿ですね！ アスピナのEN出力特化なら知れずうちのKP特化でやるからそんなになるんですよ！』

ただのビットマンだつてQB一回で殆どジェネレーターエネルギー枯渇する位なんですから！』

『血の涙を流して歯を食い縛って泣く泣くローゼンタールの回して貰ったのに、こんなあんまりですよおおお!!』

『ローゼンタールに謝るのはやときますから！ 信一郎さんに阿修羅ビットマン用のコア都合して貰って下さいね！』

『信一郎君の作ったアーマードコアなら出来るのにい!!』

スピーカーがブツンと切れ、アリーナが静かになる、ただ二人は武





困に撒き散らせた。

「ふう……」

「はあ……」

二人が顔を合わせ大きく溜息を吐く。

「嘘だろおおおおお?!」

凄まじい速度で移動を始めた二人を笑うように極々短い「キュウン」とワンテンポのチャージ後緑光を撃ち出した。

ISが二人に知らせる情報はギリギリ数値化可能な値、つまり一撃でISを葬りかねない馬鹿げた火力。

「ふっぎけ…ッ! ふっぎけんじゃねえぞ!!」

「おにいちゃん、会ってお話、したかったな……」

「あつきらめんじゃねえよ!!」

だが撃てども撃てども何処からブースト光が出てどうやって移動しているのかもわからないが的確に高火力のグレネードランチャーだけは凄まじい瞬間加速により避ける。

エムは最早遠い目をして一人の兄のことを思う、その隙だらけのエムを何故か球体は攻撃しない、その煽りを一点に引き受けたオータムにはいい迷惑だ。

「ああらっしやああオラアアアアッ!! いやっほああああいつたああああ!!!」

目を充血させ最早言葉ともならない雄叫びを上げながら球体に銃弾を浴びせかける、飛んでくる緑光はギリギリで避け、エネルギーをガリガリと減らしながらも致命傷だけは避けていた、今の彼女はブリュンヒルデに並ぶだろう。

「野郎オブツクラッシャアアアアアアアアッ!!!」

球体の一つに急接近したオータムはISの装甲脚で球体を突き刺し破壊しようとした、確かに装甲脚は球体に突き刺さったし、いい場所を狙ったので今球体がオータムに緑光のレーザーを当てることは出来ない。

だがその代わりに「ボウ」と薄い緑の光の膜を周囲に纏い始めた、それは二つ前の階層で見た物に似ている。

「これアカン奴やアアア!!」

それが広がり始める前に装甲脚を抜き、離れようと瞬時加速を起動するも今一出力が足りない、残りエネルギーは200を下回っていた、軍仕様なものにもかかわらず残り200を切ったのだ。

ふ、と悟りを拓いたかのような綺麗な微笑を浮かべゆつくりと目を閉じようとした瞬間、目の前を緑光が通り過ぎ、丁度膜で覆われていた球体を貫いた。

「助かった…? …エム! エムツ! 残り一機だ! もうエネルギーがねえ! 手伝え!」

「お兄ちゃん、私ね、本当はお兄ちゃんのこと嫌いなんかじゃないの、大好きなの、一緒にお話してご飯食べて……」

「マドカアアアアツ!!!」

「?! え? あれ? お兄ちゃんは?!」

「ここにはいねえよ!! いいから手伝え!!」

「わ、わかった!」

エムが刀を構え、ブースターにエネルギーを充填させ始める。

「待て! ヤツに近付くな! 仕留め損なったら死ぬぞ!」

「っ! ならば!!」

充填したエネルギーを即座にライフルへと回し、放射率を上げ放つ、レーザーがまるでショットガンのように拡散し、球体へと殺到した。

ヒュボツ、と音を残しその場から急速に離れた球体へと左手を向け、視界内の球体を握り潰すように拳を握る。

拡散したレーザーが集まり、収縮して細い針のように球体へと突き刺さり貫通、指をガチリガチリと動かし針を操作し、何度も何度も球体を貫通させた。

「ふんっ!」

最後に針を球体の内部で拡散させ、収縮率を下げ内側から破壊する。

「ごん、ごん、と重い金属の音をシールド内に響かせ、エムとオータムを残し動く物は無くなった。」



操作を始めた。

『うー、マスターいじめた、ゴスペウマスターまもう！』

「ゴスペル、私の為に怒ってくれるの？　ありがたい、優しい子ね。でも、少し待っててね、私達はこれの次だから、ね？」

『むー、うー……ゴスペウ、我慢すりゅ』

「ナターシャ・ファイルス、そういやアメリカからカラード所属になったって噂があつたな、本当だつたって事か」

「一体誰と話しているんだ……？」

「さて、侵入者さん、貴女達がこの階層で相手になるのは……貴女達よ」  
両手を広げ、フワリと髪を揺らし微笑んでホログラムを増やし、広げた。

「あ？　何言つて……」

「えーつと……やだ、分からないわ」

「片方はアラクネ、アメリカで開発されていた第2世代機です。どうやら奪つたのは彼女達だつたみたいです」

「はいはい、アラクネと……うーん、IBIS？」

『イギリス製第3世代機、サイレント・ゼファイルスです』

「ありがと、あらやだ、整理しなきゃ、一旦半分ほど出してから二機出して、再度押し込めばいいわね」

タンツ、と大げさにホログラムをタッチするとエムとオータムにとつての異常事態が発生した。

視界内に映るレーダーに膨大な数の光点、そして表示される486と言う数字。

それは間違いなくISコア反応だつた。

「これ……は……ダミー反応か……？」

「間違いなくISコアの反応だ……!!」

『起動IS全機操作開始』

アリーナの壁がガゴン、と音を立て、何箇所が開く、そこから現れたのは凡そ2〜3メートルの人型。

間を空ける事無く何十何百とアリーナの宙に整然と並ぶ、赤や青、白や黒、黄や緑、芸術品のような美しさのもの、無骨な物、数多くの

それは間違いなくISだった。

まるでただの人形のように並べられたISに搭乗しているのは黒い人形、影も作らず反射もせず、ただ純粋な黒、それは「無人型のIS」であると言う事を嫌でも理解させた。

「な、あいつは…あれは…!!」

「白騎士?!」

行方知れずとなっていた筈の白騎士がただ並んでいるだけの絵のように特別な事もなくそこに並んでいた。

「違う、それだけじゃねえ…! あれはドイツのシュヴァルツエア・ツヴァイク、あれは暮桜…!」

「ツヴァイクと暮桜だけならまだ説明も付く、まだ、もしくはもう公に実地使用されていないISだ、だが…!」

「アイツはイギリスのブルー・ティアーズ、あれは白式じゃねえか!!」  
いま現在、現行で使用されている筈のISさえも眼前に並んでいた、その中には紅椿さえも当たり前前のように並んでいる。

数多く並ぶISから二機前に出て、他のISが巻き戻しのよう壁へと帰って行く、その前に出た二機を見て二人は絶句した。

黄色と黒の毒々しい色、八本の装甲脚が生えたIS。青と白のカラーリング、頭部をバイザーで覆い人の顔なれば口元のみが見える特徴的なIS。

それは正にオータムのアラクネとエムのサイレント・ゼフィルスだった。

「言ったでしょう? 貴女達の相手は、貴女達だって」

「行きましょう、社長。あの二人がここを越えれば私が相手ですから」  
「そうね、成績によってはIBISも出て貰いましょう」

いたって普通、当たり前前のごとを当たり前前のようにするような自然さで後ろのエレベーターへと乗り込み、去って行った、直後アリーナにバリアが発生し、今までと同じように戦うための場が作られる。

『レベル5、カラード型IS、アラクネ、サイレント・ゼフィルス。Aタイプ…IS学園へのハッキング完了、モンドグロツソ上位レベル改変型です』

『ターゲット了解、オペレーションを開始します』

「同機体と戦えと言う事か」

「クソツたれ！ 当たり前のようにIS学園をハッキングしやがった！！」

二機揃って顔と思われる部位を上げ、二人を見据える、両手に武器を展開し二人にサイティングしながら移動を開始した。

「クソ、面倒臭エー！」

「なに、一機程度二人で掛ければ直ぐに破壊できる」

「ああ？ 何言ってるんだ、相手は二機だろうが」

エムがにやりと笑いライフルを構えた、バイザー越しの鋭い視線は確実に敵のゼフィールスを捕らえている。

「サイレントゼフィールスは第三世代機だ、なら無人機、AIに何が出来る」

「なるほど…イメージインターフェイスか…」

サイレントゼフィール스에搭載された第三世代兵器、ビットとフレキシブル、それは人の思考が前提で運用される。ならば無人機にそれを操作することは出来ない。

筈だった。

無人機が放ったレーザーを最低限の操作で回避、したはずがシールドエネルギーが減少、その減りようは直撃した時と変わらない。

あろう事か直後、ビットを全て展開し波状攻撃を行ってきたのだ、無駄を全て削ぎ落とし、究極まで効率を突き詰めた教本通りの、洗練された教本通りの動きで。

「なっ?! つくー！」

唯一カバーしきれない上方へと回避、すると回避したはずのレーザーがエムを追ってきた。

「偏光制御射撃だ!! 馬鹿な、AIが、機械が第三世代兵器イメージインターフェイスを使うなど!!」

シールドビットを展開し、ヒットする可能性のあるレーザーだけを消し、レーザービットでAIゼフィールスを射撃。



「私だけの力じゃないですよ、何より福音が教えてくれるんです。ここが危ない、どうしたほうが良い、って」

「稼働数は？」

「まだ二つだけです。どうしても勝てない、なんて思ってた相手が片手間に撃破出来るなんて、ISを信じるって大事ですね、ちよつと前の私とこの子なら3つ稼働させても勝てなかったと思います」

「まだ余裕ね、増やしてみる？」

「5人目っと、お願いします」

思うところも無いような動きで羽を刃に変化させクルリ、と身を翻すと暮桜が幾つにも引き裂かれ破壊された。

「じゃありベンジ、行っときましようか」

「リーダーのセラフですか?！」

「まさか、シン君が個人で作ったものだけは私でも作れないのよ? だから、これ」

カシユ、と開いた壁から白式、紅椿、ブルー・ティアーズ、甲龍、ラファール・リヴァイヴCⅡ、シユヴァルツエア・レーゲンが姿を現した。

白式、紅椿以外は特殊パッケージバージョンも用意されている。

「……なぜ日本代表候補の打鉄式式が無いのですか？」

「あれ、シン君も手を加えてて私にも分からない所が多々あったのよ、内装の殆どがそうね」

はい、スタート、と言いながら手をパンと叩き、それと同時に全てのISが動き始めた。

「リベンジ、リベンジですか……今の私達にとって、なんてイージーなリベンジでしょう。ね? 福音?」

『がんばろう!』

「良い子ね、そう、頑張りましょう、一緒に、ね!」

言い終わると同時、羽が2対へと増えた。

く く く く く く く く く く く く く く く く く く

「こいつ、反応速度が速い…!!」



空を切る音と共に強い電撃音が周囲に響く、エムの剣戟がシールドビットで軌道を逸らされ身体を反らせる事で尽く回避されているのだ。

シールドビットは4つ、うち2つを剣戟の防御に、残り2つはビットの防御に、最後の二つはエムへの攻撃に全て、十全に完全に使い切っている。その上無造作に手に持つレーザーライフルから常時レーザーが発射され、起動を捻じ曲げ、エムへと襲い掛かる。

人の脳では処理しきれない情報量をAIはいとも容易く処理し、行動していた。

AIに扱えないはずの第三世代兵器を十全に扱うAI、それにより人間だけが扱えるはずの第三世代兵器を使う人間は処理能力からAIを容易く越える事が出来ない。

もつと洗練し、磨き上げ、玄人を越えるほどになり漸く越える目処が立つ、しかし、だが、ISはそうなるには余りにも新しすぎた、どれだけ少なく見積もってもあと五年は必要だった。

ならば、その差を埋めるのに今必要な物は、何か。

科学者にとつて皮肉な事にそれは……………

「裂けるオオオオオオオオオオオオッ!!!」

『天賦の才能』だった。

右手で刃を振り、回避された直後左手でその刃を取り、逆に振り切る。

一瞬でそれを行う、傍から見れば一瞬で二閃斬撃を繰り出す人を超えた業。

AIでさえ処理の追いつかない速度で行われたそれにより、横一閃、真つ二つに裂け、爆発した。

「つぐ、は……………あー！」

ガタガタと震える腕をギチリとマニピュレーターで押さえ今だ戦っているであろう仲間へと視線を向けた。

「くっは、カッハハ!! 見えてきたぜ! テメエのパターンがよお!!  
そらあ、腕一本いただきだア!」

AIの装甲脚による刺突を装甲脚でそらし、銃撃を行う腕を他の装甲脚で弾き上げ、ショットガンで千切り飛ばした。

AIのアラクネは多くの被弾から最早防御に回すエネルギーを棄て、移動と攻撃に全て回していた、故に絶対防御も無いISにショットガンを防ぎきる事は出来ず、容易く隻腕となった。

「ゴイツで止めだ! 首イ、置いてきなア!!」

片腕を失くした事により手数減ったAIの装甲脚を同じ数の脚で押さえつけ、新たに両手で持った武器で斬りかかる。

大型のアサルトライフルでハンドガード下部を大きく覆うようにチェーンソウが取り付けられたアメリカ産バトルライフル、グランド・オブ・ウォーマシン社通称GOWで製作されたランサーアサルトライフル。

そのチェーンソウの刃が人形の首に食い込み、オイルと火花を撒き散らし不快な音を響かせながら深く抉り、遂には斬り飛ばした。

「クヒヤハハハ! いーオブジェだ! これでお終いつてな ツア?!

片腕が無い、首が無い、その人形が異常が無いかのごとく襲い掛かり、油断していたオータムを押し倒し装甲脚をすべて押さえつけた、両足で両腕を踏みつけ抵抗は出来ない。

残る片腕に同じくランサーアサルトライフルを持ちオータムへと突きつける。

「く、そ…い…クソ! クソがア!! テメエ!! ぶっ壊れた人形がア!  
私が、貴様ごときに!!!」

装甲脚の出力は同じ、PICにより押さえつけられた腕は微動だにしない、持つ武器を相手に向ける事もできない、完全に詰んでいた。チェーンソウが回転を始めた瞬間人形の胸を光が貫き拳大の穴を開け動きを停止させた。

「だい…じょうぶ、か…?」



「貴女達で28機目……恐れないで。『死ぬ時間』が来ただけよ」

周りを見れば至る所にスパークを放つ残骸が転がっていた、数は26、中には暮桜や白騎士も転がっている。

優しく笑みを浮かべるナターシャは福音の神々しきやその笑みとは全く逆の「死神」を思い起こさせた。

エムがライフルを両手で保持し、オータムがマシンガンを構えたのと同時に、プライベートチャンネルによる通信が二人に届いた。

『私よ、今作戦は口を挟むつもりは無かったけど、そういう訳にも行かなくなっただわ』

「スコール？」

『逃げなさい、今すぐに、ハッキングやデータなんてどうでもいいから、今すぐ帰ってきて、今ココで貴女達を失いたく……失うわけには行かないの……組織と、しては』

「だけどよ……」

『お願い、お願いよ、オータム、エム……』

「……わかった、今回はその言葉に甘えさせて貰う、正直、私は限界だ」

「ああ、わかったよ……」  
トン、と地に足をつけた福音の羽が二枚捻り合わされ巨大な刃になる、それを眼前で弄ぶように振りながらナターシャがゆっくりと口を開いた。

「あら、逃がすと思ってるの？ 私とこの子が」

「…傍受されてたか」

「薄々そうだろうと思ってたけどよ」

『いいわ、行かせてあげなさい、データは取れたし、別に倒す必要は無いでしょっ？』

「と、言う事よ、ほら行きなさい、社長の考えが変わらないうちに」  
「テメエ」

一歩踏み出すオータムの腕をエムが引く。

「勝ち目は殆ど無いぞ、引け、命令……いや、お願いだろう」

「わかってる、わかってるさ、クソ」

身を翻しエレベーターを破壊して上へと姿を消した二人を見送って福音の羽が刃から羽へと戻り、二対、一対、機械的な翼へと変化していった。

ただ音も無く福音の姿があるだけの広いアリーナにIBISからの通信が入る。

『信一郎様より質問です』

「シン君？ なになにー？ IBIS、なにー？」

管制室でやり取りを見ていた麗羅が嬉しそうに音声をオープンにしたまま反応する。

『女性が喜ぶプレゼントとは、との事です』

「女の子が喜ぶプレゼントかあ…」

「ネックレスやイヤリング、あとは指輪でしょうか？」

『検索結果では「高い物・及び現金」とされております』

「リアルね、夢も希望も無いわ」

奇跡と魔法はあるのだろう、だが救いは無い。

なお、凄まじい速度で通り過ぎていったIS二機に驚いた受付嬢が本格的に失禁してマジ泣きしてしまったのは秘密だぞ。



ガン、と音を立てながら破壊され、直撃点が融解する。

「え、え…？ は、反則でしよおおおお?!」

「エルボーロケット!!」

『エルボーロケット、エンゲージ』

「ナウ!!」

直ぐにジャンプして左腕肘から噴出するロケットエンジンで拳を加速させ振り落とす。今度は当たるかも知れない場所を狙ったので結構ヤバイ感じ、避けられるのは百も承知だけドインパクトがあればよし。

直前までたっしーがいた場所に拳が突き刺さり前腕でドーザーシステム（パイルバンカー機構）が起動、破壊規模を大きく広げる、漫画みたいなクレーターが出来た。

「もしかしたら知らないかもしれないから言つとくわ、それあたったら人死ぬううう!!!」

「知ってるううう!!! チェーンソード!」

『チェーンソード』

地面から腕を引き抜くと腕からノコギリのような剣が伸びているがご心配なく、押し当てただけでブツタ斬れる高周波ブレードだ。

上段から唐竹割の如く縦に全力で、かつ超大振りで振り下ろす。

「ひゃあ?!」

チェーンソードロック解除、蛇服剣型にして右腕を無理やり動かしながらPA起動、これで勝つる!

狙いもクソもなくブンブングネグネ適当に動かしてたっしーを攻撃、避けられなくなったら最終的にはルール違反を犯すだろう、それで俺の勝ちだ（ゲス顔）

「くっ、このッ! あっぶな!」

「何としても簪は俺が貰う、止めれるものなら止めてみる!」

「こっの! 調子に…!!」

おい、マジかよ! 何でこの斬撃の嵐の中無傷で掻い潜ってこっちに來れるんだよ!

バグってんだろ、チートか!

「乗るッ…!! っつ!!」

「く、ひ、キヒヤハハハ!! 足払いか! 直接殴られんですんで良かった、どうだ? 痛いだろう? 微動だにしない角ばった鉄の柱を蹴るのは! キヒヤハ! パイルバンカーで固定したんだよ!!」

チエーンソードを即収納、懐のたっしーに掴みかかる。

「俺の、勝ちだ!」

「どう、かしらね!!」

身体を外側に反らして回避された、無茶な姿勢だがこれではこちらも攻撃できない。

「とでも思ったか?! 取ったア!!」

「腕が?! ガハッ!」

関節を逆に曲げ、首を掴む、そのまま力尽くで床に倒し手の平を顔に突きつける。

「キヒヤハッ! どうだ、俺の勝ちだ」

「ぐ、くく、うぐう……の、い…プ…きよ」

「んあ?」

「この際プライドは抜きよ!!」

「ゲ、ゴハア?!」

そう言っただけを人以上の凄まじい力で蹴り飛ばし光を纏いながら飛び上がった。

木の壁が割れて俺がめり込むぐらいの威力だった、多分肋骨が何本か逝ってる。

「ご、フッ! ガフッ!」

「あ、あ……! 駄目、もういい……もういいよ! もうこれ以上ボロボロになる信一郎は見たくない!!」

「ほら、立ちなさい籐ヶ崎君、まだ私は参ったなんて言っていないわよ」

「まだ、肺が、ゴホッ、やられたただけだ、まだまだ、ゲホッ、まだまだ……ぐぷっ」

「ッ……!! 来て!!」

簪が俺の、前で光を纏って。

「簪、俺が、俺がやる……べき……」





「リサ、やめて……コレ以上私の心を挟らないでえ……」

「丁度先生も来られたようなのでリサは部活に行きます、では！  
では！  
ではでは……」

ルランラとスナイパーライフル（恐らくエアガンかガスガン）を担ぎスキップをしながら部屋を去って行く、何と言うかこう、本音ちゃんとはまた違った独特な自分の流れを持っている人だった。

「織斑先生こんにちわー！　はい、こんにちわー！」

「あ、ああ」

「うふっ、うふふふ」

入れ違いで入ってきたちっふー、てつきり保険医かと思ったのだが担任だったでござるの巻。

「どうもアイツは苦手だな……さて、籐ヶ崎、更識姉、体の調子はどうだ？」

「私は骨折だけですなのでナノマシン治療で明日には治りますが……」

「治った」

「ええ?!」

「だろうな、続いてお前達のやらかした事だが」

ちっふー慣れすぎだと思うんだが、まあそれはそれでいいんだけども。

「ま、ま、待ってください！　治ったわけ無いですよ?!」

「死んでも生き返る、千切れた腕も生える、コイツに関しては一々驚いていたら体が持たん。さてまずは武道場が無茶苦茶になったことに付いてだ、理由が女の取り合いか、それで一々破壊されてはたまった物ではないな」

「いっちーの周りでは男の取り合いで設備が破壊されていつているわけだが」

「二夏は私の物だと言うのにな、懲りん奴等だ、それは置いておきだ。壁の陥没、30センチ程の穴と焼け跡、床の穴とクレーター、無数の切り痕、そして……ISによる甚大な破壊の痕跡だ」

「IS以外は俺」

「修理費だつてタダではない、と言うよりも新しく作り変えることに

なった、そちらの方が安く付く」

「それに関しては俺が、数億あれば建つでしょ」

「分かった、そして建設の間武道場が使えないとの事で幾つかの部から文句が出ている」

「あー、うちの人間を30人も入れていいなら明後日には建てられますが」

そう言う腕を組んでなにやら考え込んだちっふー、ぶつぶつと独り言を言っている……？ あ、ああ！ 窓に、窓にいい！！

何も無い。

「常に監視をつけることになるが、それでも可能か？」

「解体用A.C、詰まる所重機を使いますがそれを許可して頂けるなら」

「ならば多分問題は無いだろう、すまんが頼んでもいいか」

「あいよ、了解しましたっつと」

「さて、武道館を破壊した事に対するお咎めは無しだ、一応説明しておく、籐ヶ崎が凄まじい額の寄付から免罪、更識姉が生徒会長権限と代表ゆえに、だ。それと更識妹は巻き込まれた形と言うことにしている、心配するな更識姉、叩きすらしていない、普段から素行はいいからな」

ただし今日は部屋に謹慎だがな、と付け加えるちっふー。

見えはしなないがきつとたっしーも胸を撫で下ろしているのだろう、俺と同じように。

「次だ、籐ヶ崎は生身の延長上で問題は無いが問題はお前だ、更識姉」

「え、はい？」

「I.Sの緊急時以外の無許可展開、及び生身の人間へのI.Sによる攻撃、そして破壊行為だ」

「あ、いや、その、これは仕方が無いんです！」

「説明してみろ、私が納得するように」

「彼の攻撃が生身で受けるのが不可能なほどの威力だったんですよ！」

カーテンを思いっきり開いて俺を指差すたっしー、なんか言いにくい、「たてにゃん」でいいかな。



「まさか…」

「あ、あー、大丈夫、見る限りグレネードもミサイルも装備していないし、純粹に解体用として派遣されてますって」

「…そうか」

「まあ腕に装備されてるドーザーで殴り落とせばISだって数発でグツチャグチャだけど」

「何か言ったか?」

「独り言です」

しかし隣のいっちは信じられない物を見ているかのように俺を見る、そんな俺を見るなよ、俺にはホモのケはないぞ。

尻は貸してあげないぞ、わかつたな。

「…ドーザー」

「うひっ?!」

左腕のドーザーシステムを起動させて腕を一瞬伸ばして戻すといっちーが情けない声を上げた、ワロス、ワロツシユ、ダーガツシユ。

俺の義手に搭載されたドーザーシステムでISを殴り潰すなら物凄い勢いで殴り続けなければ駄目なんだよね、ISを数発で潰せるのは凄まじい体積と言う前提条件が必要なんだぜ。

「さて、次の話だが……」

く く く く く く く く く く く く く く く く

「これで今日の授業は終了だ、さて、色々言いたい事があるがまずは籐ヶ崎、授業終了のチャイムと同時にハンバーガーとコーラを出して何をしている」

「このハンバーガーとコーラは世界で一番売れている だから世界で一番美味しいものに決まってるだろ」

「やかましい、仕舞え」

「いいですか、籐ヶ崎君、その理論を成立させる為にはまず世界中の食べ物を一律全て同じ値段にしてから数字を確かめないと駄目なんですよっ。」

山田先生に論破された、ぐうの音も出ない。

「ぐう……」

「ぐうの音も出ないって訳じゃないんだな、シン」

「腹の虫だ」

「黙っている籐ヶ崎、色々言いたい事だがな、いい加減クラスの出し物を決めろ、幸運にも今日は部活が休みだ、今の内に決めてしまえ」

「ああ学祭か、時速数十キロで巨大なだんじりを引きずり回せばいいんじゃない？」

「祭りってそんなもんだろ？」

「はい！」

「谷本」

「キュラツ、ガチタンだらけの押し相撲、エリアオーバーもあるよ！」

「却下だ、次」

「はいっ！」

「…谷本」

「だんじりよろしくガチタンを校内引き摺り回す！」

「却下、次」

「はあいっ！」

「却下」

「何も言っていないのに?!」

泣き崩れる谷本さん、口から零れる言葉はやっぱりガチタン関係、そーいや有澤の社長が見学に来たとか言ってたな。

今は映画に奮発されたとかで80メートル級のイエーガー作ってる。

しかもちやんと兵器庫に登録して保管してた、一週間前に3機目が完成したとか。

「お化け屋敷ー！」

「布仏か、ふむ、他には」

「うーん、何か食べ物を提供すればいいんじゃないかな…」

「デュノアが料理、幾つでも出せ、そこから絞っていけばいい」

「バンドはどうでしょう？」

次々と出されていく案、と言うかせっしーの見た目でバンドで、な

いわー、オーケストラなら説得力あるけど。

「せつしー！ 何の楽器演奏できる？」

「弦楽器ならば何でも出来ますわ、ヴァイオリンからエレキギターまで」

「すっげえ!!」

「他にバンド向きの楽器演奏できるのは？」

「シンにー、私ねえー、ドラムできるよおー」

「シンは何か出来るか？」

「た、大砲なら……」

「大砲?!」

105mm砲とか演奏できる。

さてさてどうしようかと首を捻っているとひよっこりと手を挙げて誇らしげに無い胸を張ったらうりーが！

「郷に入っては郷に従え、そういう言葉が日本にはある。ならば我々もそうするべきだ、故に私は進言する、メイド喫茶はどうだろうか!!」

「…なるほど」

「おい、何で今モツピーが納得した」

「メイド服かあ……おえッ」

「おい、何でシャルりん俺を見て吐きそうになった」

「シンはボディガードみたいにスーツ着て立ってりやいいじゃん」

「一夏は執事服だな、と言う事はメイド喫茶ではなくなるな」

ちっふーが一夏を見ながら少し顎に手を当てる、数秒後鼻から血を流し始めた。

「いいな、いい、いいぞ、決定だなうん」

「せんせー、鼻から愛が溢れてまーす」

「いいぞ、冴えてきた!」

「と言うわけで一年一組はメイド（執事）喫茶 ボディガードを添えて、に決定しました! わーパチパチ!」

「次は出す料理とか決めないとね」

「やっぱこう言うのって研修に出たほうがいいんだろうかね」

「大丈夫だよ！ 問題ないって！」

「必要だと思うのだが」

「だってここIS学園だし！」

そうであつても十分に注意せねば大惨事だけどな、こういうのは氣をつけるに越したことは無い。

「ケーキとか出したいよね！」

「無理だ、生もの、生クリームは扱わん方がいい、素人には無理だ」

「ア、私大丈夫だよ！ Russiaの実家はカツフェもしてたしケーキも焼いテター！ 調理師免許もあるんだ！」

「なら、大丈夫か、生クリームを扱う物やケーキ関係はエレーナな任せるとして」

「普通の料理はわたくしにお任せくださいな！」

「舐めんな」

「AIEEEEE?! (発音はエイー)」

自信満々に胸を叩いたせつしーを一蹴して全員でメニューを決めて行く、その過程で馬鹿みたいな値段を払って何故かいつちーにお菓子を食べさせるといふ珍妙不可思議なメニューが追加されたがまあよろう。

服は裁縫が得意な人員が急ピッチで進めるそうだ、部活の分もあるってのにご苦労な事だな。

「…折角だし各国の名物料理を作つて出せばいいんじゃないか？」

「流石篠ノ之さん！ そうだよね！ フランス、ドイツ、イギリス、日本、ロシア！ 何だかんだで沢山国籍が集まつてるもんね!!」

「日本なら寿司かな！」

「アカンやつやソレ」

でもソレだつたらまず幾つか料理を作つてみんなどうしようもないぞ。

く く く く く く く く く く く く く く く く

場所は変わって調理室である。



「さて、まずは簡単そうな物から作ってみるか、イギリスつつたら  
フィッシュアンドチップスだろ」

「なんですよ、その独断と偏見は?!」

まずタラをキッチンペーパーで水気切って塩コショウで軽く味付  
け、んで衣を着けて狐色になるまで揚げる。

他には芋を薄く切って軽く揚げる、次に高温でもう一度揚げる、  
んで油気を切って皿に盛ってケチャップとかサワークリームとかを添  
える、こんなもんだろ。

「さあ食え」

「シンって料理できないって言ってたよね、確か」

「知識はあるからな、技術が要らない物は簡単に作れる、日本食はもう  
駄目だ、作れる気がせん」

「いただきます」

「ふむ、中々いけるな、量と値段を調整すればスナックのように食べれ  
る」

「へあゝ美味しくない料理の代名詞って言われてるからもっとスゴイ  
のを想像してた」

自分でも食ってみたがなるほどこれは中々どうして、男には嬉しい  
味だ、ジャンクフードってのは大好きだからな。

ん？ せつしーが一口食って拳を握って震えてるんだが。

「……います…」

「え?」

「違います!! こんなのフィッシュアンドチップスではありませんわ  
!! イギリスを舐めないでくださいまし! 見てもらえません!  
わたくしが手本を見せますわ!!」

とても格好よくエプロンを装備して調理台に立つ、誰かアイツを止  
めろ!!

「まずこの解凍したてのタラに衣を付けます! 油に放り込みます  
!」

「どう熱! 油跳ねてる!!」

「……………」

「揚げてる間は流石に待つからね」

「ところで誰か新聞を持ってきていただけませんか？」

「え？ 新聞？」

「早くー」

「は、はいー」

新聞を受け取るや否や椅子に座って読み始める、何してんだこの英国貴族は。

「なんかソロソロいい色なんだけど」

「どれどれ……まだ駄目ですわ」

「え?!」

一面を読みきって新聞をたたみ立ち上がる、油の中を覗きこみ満足そうな顔をするせつしー。

「あと少しですわね」

「もはや茶色なんだけど」

「こげ茶色になるまで、ですわ」

待つこと数分。

「コレぐらいでいいですわね、さてと」

何を思ったのか新聞をもう一度広げるせつしー、そこに少し油をきったこげ茶色のサムシングを置いて包み始める。

「あと15分、ですわ♡」

その間鼻歌を歌いながら(とてもお上手、赤ん坊もすやすや眠れる)油に芋を適当に切ったものをぶち込んで行く。

これも茶色になるまで揚げて油も切らずにタラ(だったもの)の包みである新聞紙にぶち込み包んだ。

15分後瓶に入った恐らくモルトビネガーと思しきものを新聞紙から取り出したフィッシュアンドチップス(飯)にビチャビチャになるまで掛けるかける、まだ掛ける!!

それをもう一度さっきの新聞紙に包んで笑顔で渡してきた。

「さあ召し上がれー」

「い、いただき……ます……」

覚悟を決めて食べてみると、なるほどコレは、中々どうして。



生憎たてにやんは居ないようだ。

「待つてましたよお！」

「今回の話は一夏君と似たような理由です。言つてしまえばどの部活に入れるか、になりますね」

「うふふ、うふふふふ」

「は、はあ、部活…？」

「ですが貴方の場合少し事情が変わりまして、その、非常に言いにくいのですが…」

「まあ言つてしまえば部活同士の押し付け合いですねえ」

「へえ、はあ」

「申し訳ありません…：お気分を害されるかもしれませんが」

「ああ、いや慣れてるので、ご心配なく」

非常に申し訳無さそうな顔をする虚さんを手で制しているとニコニコ（目がカッ開かれている為非常に怖い）と俺の回りを回りながら見るリサ先輩。

「そこで白羽の矢が立ったのが、と言うよりも欲しいと思つたのが私達の部ですなえ」

「え？ はあ」

「私はどうでもいいんですけど、部長がいいかもしれないと言つたんですよ、まあ、何はともあれ持つて下さい」

と言つていきなりTRGを持たされた、ワケが分からん、あとコレかなり重いんだけど、具体的に言うなら実銃の重さなんだけど。

エアガンみたいに重さが寄つてないし12倍率スコープも本物っぽいし。

うーむ、どうしろと言うんだろうか。

「これ、本物じゃ」

一瞬何かが高速で風を切る音がして同時にガキユン、と言う音とパシッとガラスを高速で撃ち抜いた音がした。

「銃撃ツ?! 遮蔽物に隠れろ！」

「北側やや上から、150ヤード程ですかねえ」

リサ先輩が虚さんを抱きかかえ机の陰に隠れる。

銃に一切目を向けず慣れてしまった動きでロックを外しボルトを上げ後ろに引き、押し込んで下げ、右手でグリップを握る。

再度遮蔽物の机に着弾、音と衝撃はしたが木片が飛び散らない辺り少々不気味だが射撃速度からすると奴さんもボルトアクションの可能性が高い、後ろに倒れこみ片膝を軽く立て銃身を固定するバイポッドや土嚢の代わりにする。

左手でストックを押さえ込みセーフティを外し照準をつけ、正面の人影を狙う。

太陽と反対側なのだろう、一瞬キラリと光ったポイントを銃撃した。

「反動が無い?! ガスガンかよコイツ!!」

「え? あ、はい、オープン通信にしますねえ」

ガラスを初速で撃ち抜いたはいいがガスガンなのでどうしようもない、実銃を拡張領域から取り出そうとした瞬間リサ先輩が無線機を片手に持ちながら遮蔽物からのそりと出てきて近付いてきた。

「はい、ストップですねえ、今から報告ですよお」

「え? はあ?!」

「な、な、何ですか? え?」

呆気にとられる俺と虚さん、なんでや。

『ヒットです、実銃やったら間違いないで死んでますでこれえ』

「ほうほうほう! どんな風にですかあ?」

『スコープをやられましたあ』

「スコープ! あら、あらあらまあ! うふふ、うふふ、俄然欲しくなりましたよお!」

何の話をしてるのや全くわからへん、何? 俺試されてたとかそんな落ち?

「さて、さてさてさて! 籐ヶ崎信一郎君!」

「アツハイ」

「貴方には私達の部に入ってもらいます」

「アイエエ?!」

「ようこそ、サバイバルゲーム部へ、歓迎しますよお、盛大にねえ!!  
あと使っていた物は中身の無いペイント弾ですので、一応は安全に気  
を使つてましたよお?」

次回よりコジマ汚染レベルで脳が駄目な男のサバイバル・ゲームが  
始まります。

「ところでたてにゃんが居ないのは?」

「た、たてにゃ? あ…ああ、会長でしたら今一夏君の所へ行つていま  
す、貴方をここに呼んだのはその件も絡んでいるのですよ」

「彼はブレオンですからねえ、期待なんて微塵もありませんねえ」

『副部长くスコープの代金つて部費で下りるんですかあ?』

「最悪私が出しますよお、代表候補生ですからねえ」

やっぱり試されてたらしい、なんだって生前も今生の社でも学校で  
も銃を握らにやならんのか、まあ殺さんで済む分いいっちゃいいんだ  
がな。

「それにしてもこのガラス、どうしましょう……」

穴空いてヒビだらけのガラスを見ながらしよんぼりと眉を下げる  
虚さん、なぜに本音ちゃんといい虚さんといい布仏さんはこう、非常  
に心に来るんでしょうね、罪悪感で体が震えますよ。

「俺が直しますゆえ、しばしご容赦を、拡張領域から取り出すのはこの  
不思議手袋」

と言いながら指貫グローブを取り出し、手に装着する。

「この手袋を装着したまま窓ガラスに触れ、直れと強く念じます。す  
るとあら不思議」

能力でガラスを作り変え、足りない分を創造する。

「直っちゃいました、これでいいですか?」

「え、あ、わあ…すごい…」

「……これでスコープ直せますねえ」

そう呟いたりサ先輩が俺の腕を引っ掴み「みんなみんな、生きてい  
るんだ標的なんだー」とか物騒な歌を歌いながら引き摺って行く、俺



「んぐつ、フランか、どうした？」

「その、もし良かったら招待状を頂けないかと思ひまして…」

「ん？ 二枚必要なのか、誰だ…？」

「父さんと…：レイの分が欲しいんです」

ア、ナール）\*（そういう事ね、でも心配せんでもいいのにな。

「別にやるのは構わんがその二人は普通に招待状無しで入れるぞ？」

「え？」

「ジャックは研究者として、レイは護衛として来れば不要だろ？」

おお、と納得いった様子のフラン、そうだ、どうせだし招待状はフランにやろう。

「ほら、フラン、俺の分をやる、お前は俺と違って普通に学校に行ってたから旧友もいるだろう、二人しか呼べないがそれで招待すれば良い」

「あ、ありがとうっ！ 義兄さん！」

「おうぐ、はいはい落ち着け落ち着け」

首元に抱きついてきたのでとりあえず頭を右手で撫でておく、左から抱きついてきているのでやや撫でにくいが問題ではあるまい。

「…？ これは？」

「俺の管轄でな、この出力のレーザーキャノンを作りたいと部下の要望だ」

「理論上不可能じゃないですか」

「そうだなあ…俺のセラフでも安定起動が不可能なレベルだ、吹っ飛ばす」

フランが身体を寄せたまま企画書に手を伸ばす、射程は500Mと凄まじく短いチャージ時の放出エネルギーの余波だけでISを消滅させるレベルのレーザーキャノンだとさ。

「少なくとも外部にエネルギーを漏らさないようにするだけで20M級の規模になる、閉じ込めたエネルギーも放出させず使おうとすればその機体もデカくなる、まあ結論的に言えば俺のACやISには搭載できないな、かと言って既存のAFや大型ACへの搭載も出来ん、新しく作り出さんとならん。ああ、こういうのはどうも苦手だ」



「どうしても作らなければならぬのですか？」

「そうさなあ……作ってもどうしようもないとは思いますが、技術の進化のためだ、作らねばならぬだろう」

「なあシン、それってココで話してていい事なのか？」

「理解できるやつが何人いるよ」

と返しながら企画書をガサと紙束の後ろに回して次の資料を見る。

「まーた奇妙な奴が現れたぞ」

「なんです？」

「身体に傷をつけない効果的な尋問、もしくは拷問だそうだ」

「趣味の悪い……」

「コレ俺に回す意味無いだろ、俺に何を求めてるんだ」

案1：空腹にさせた上で永遠と料理の画像を見せ続ける。

案2：薬と道具を使って墮とす♡

案3：精神的トラウマで責める。

「どれがいいかとき、ただのアンケートじゃねえか」

「1で」

「フランは優しいな」

俺なら能力使って心を壊してから俺に依存させる。

いかなんな、考えがゲスい。

## ハイスピード学園ハーレムバトルラブコメの中一人だけヘルシングなお話【挿絵追加】

教室の入り口際で教室の中をずっと監視しているのも、まあ中々に暇である。

割と高頻度で問題を起こしてくる人間も居るが30秒以内に対処されるのが殆どで大体が女性なので俺が手を出す前に蹴り返される(比喩)し男は男で生徒をナンパしようとしては俺に蹴り出される、比喩ではなく。

料理やら紅茶やら緑茶やらと奔走しているホール組やメイドとして男性客の相手やら手の回らないヘルプやらで走り回っているフロア組、最後に女性客の相手を永遠無限と続けているいつちーとシャルりん(執事服)に比べればまあ楽なものだ。

こういうので一番抵抗していたのは何を隠そうシャルりんなのだ、かたくなに「可愛い服が良い!」の一点張りだったが流石にいつちー一人では回転率が下がるし何よりいつちーが死んでしまう。の言葉により渋々執事側に回ったのだ。

まあいつちーがシフトから外れる午後からはメイド服を着れると言う事で今は頑張っている。

「暇だなあ…」

「しや、喋った?!」

「置物だと思ってた…監視システムみたいな」

次の行列待ち客が驚きの声を上げる、失礼な、確かに殆ど動いていないが置物は無いだろう。

ただずつと黒服を着て立っているだけだ、いつちーと違うのは常に前を開けていることだな。

ちなみに今回義手はオーギルではなくアイアンマンのようなスリムな物となっているので上半身はパツと見普通だ。

先ほどの驚いた客を通してなんかスゲエ問題起こすのが目に見えるてるパツキンのピアスをつけたチャライ男がその次に入っていた、

誰の招待だよ、逆に驚きだわ。

それに続いてなにやら外からザワザワと声がする、何か問題でも起こったのだろうか、教室外のことは管轄外なので基本は無視。

「え、えーと、20人の団体様ですー！」

20人、阿呆かそこから回ってる、一体どんな大惨事だよ。

「いやあ、いーよいよよ、5人以外護衛だから」

「え、あ、護衛…？ ぐ、ごめんなさい！」

と、外から藤原啓治さんみたいな声がする。はい父さーん！

「5名様？ 御案内ですー！ お帰りなさいませご主人様、お嬢様」

そして大人数で入ってきたのはまずレイ、続いて父さんと母さん、んでズラツと大量に、見ればアクアビットのリーダーも混ざっているあたりカオス空間不可避。

レイが俺の前でピタリと止まって綺麗に俺の方を向いた後綺麗に敬礼する。

「……………」

「んふーふ、いらっしやいませー！」

無言で敬礼するレイにこちらも敬礼で返しながらとりあえず店としてのテンプレを言う、やや敬語を使われる事に戸惑った様子だが腕を下ろし一歩後ろに下がり護衛の仕事へと戻った。

「やつほー！ シン君、きちやったあー！」

「きちやったー！」

「いらっしやいませ、お嬢様、ご主人様？」

「聞いたパパ！ シン君がお嬢様だつて！」

「職務に忠実なのはいい事だ！ んじゃ頑張つてね！」

ずらりズラズラと大量の人間が入って行く、勿論全員見知った顔だらけだ。

「信一郎君！ どうやら執事服ではないようですねえ！」

「信一郎様、お久しぶりです。リリウムは名ばかりで護衛側となっておりますが扱いは研究員となっております」

「いらっしやいませ、お嬢様方、リリウムの目当てはせつしーだな？ ちよつと待つてる、せつしー！ ぐ指名だ！」

お嬢様といわれて嬉しそうに悦に浸った表情でクネクネと身体を振るしつかりとメイクをしたアクアビツトのリーダーとなにやらモジモジしているリリウム、リリウムの頭を軽く撫で、せっしーを呼ぶ。「わたくしに指名？ 一体どな…りり、うむ？ リリウムではありませんか！」

「はい、お久しぶりです。セシリアお姉様、リリウムはお会いできてとても嬉しいです」

「ど、どうして貴女がここに…？」

「リリウムは現在カロードに雇われている身で社長や信一郎様のご厚意で護衛と言う形で連れて頂きました」

「と、籐ヶ崎さん?! いったいどういう…?!」

「何か、問題でも？ それよりすまないが今日一日リリウムと一緒に過ごしてやってくれないか？ 今回せっしーに会えるのを凄く楽しみにしてたんだ」

「セシリアお姉様は…お嫌ですか…？」

「そんな！ いいえ、そんな事はありませんわ、喜んでお受けいたします。リリウム、今日はお姉様と一緒に見学致しましょう？ 面白いところをたーくさん、教えてあげますわ。ですがもう少し待って下さいね？ チエルシーも一緒に回りますわ」

「はい、セシリアお姉様！ ではリリウムは社長や主任の護衛としてしばらくここにいます！」

滅多に見せない笑顔を輝かせながら全員のいるところに混ざって行く、と、やや半ばスルーしていたがオールドキングやナターシャまで護衛で来たのか、過剰戦力過ぎる気もするがまあ多いに越した事は無いしな。

ナターシャがいつちに話しかけていつちーがすこぶる驚いている、どうやらまさか来るどころかカロードに所属が移ったことも知らなかったようだ。

アメリカの代表候補生も口をあんぐり開けてナターシャを見ていた。

「や、やめて下さい、お客様！」

「なあ、いいじゃんよお。俺と一緒に回ろうぜ？　楽しい事教えてやるからよオ」

「籐ヶ崎君！」

「あーいよっと」

予想通りさつききのチャライのが店員の生徒に絡んでいる、一応ボデイガードとしてここにいるので対処してくるとしよう、右手でキラ男の腕を引っ掴み引っ張る。

「お客様、店員が嫌がっているので諦めては如何ですか？」

「あ？　んだよオツサン、調子乗ってんじゃねえぞ？」

「そんな細いもやしみたい腕で何か出来るとでも？」

「てめえ！」

空いた片腕で殴ってこようとするが生憎俺もそっちの腕は空いているので上腕二等筋あたりを引っ掴んだ。

「オイ、糞餓鬼」

「ああ?!」

「後ろこっちをしてみる、ガキ」

と、後ろを見たチャラ男がフリーズする。

ショットガンを顔面に突きつけてるオールドキングやらスナイパーライフルの銃口を向けたリリウムやらどこから出したのやらミニガンをキュイイイと回しているヴァオーやら銃口の数だけでも20を越える死の塊が多数の殺気と共に男に向けられている。

まだ向けられているのが普通の銃器な分マシだがそれでも一般人にとつてはどうしようもない、漏らしていないだけよくやっているとは思う。

「死にたくなけりや今すぐに坊ちゃんから離れて失せろ、10秒くれてやる」

「う、ひ」

「10 9 8 7」

「あえ…」

「6543」

「ぎやあああ!!」

情けない悲鳴を上げながら転げるように逃げて行くチャラ男、彼の所為で男の価値観が下がって行く。

豚のような悲鳴を上げろ、悲鳴を上げろ…豚のような！

「…マヌケが、話にもならんな」

フンと鼻を鳴らしながらショットガンを粒子化させ、続いて全員が次々武器を粒子化させていく、ああそういう。

「うーん、そうね…うん！ 社長として護衛の貴方達に指示を出します。もう自由に行動していいわ、好きに見学なさい、そう滅多に来れる場所じゃないんだから」

「社長！ 私も自由に見ていいですかあ?!」

「フレドリカ、貴女は私達と一緒によ、目を放したら危ないし」

「うわあん！ 酷い！ 酷いですよ!! うう、残念でしたねえ ジャック、研究員は自由行動無しだそうですよお…」

「ジャックも自由にしていいわ、フランと話もしたいだろうし」

「酷くないですかあ?!」

「いえ、私はフランとレイの仲を邪魔するほど空気が読めないわけはありません、それに今私は研究者として来ていますので、社長や主任と共に色々な技術に触れることはメリットになるでしょう」

「やあだあ！ 真面目すぎるんですもんねえ!!」

涙目でズルズルと引き摺られていくアクアビットリーダー、そして他のリリウムを残してバラバラに去って行く護衛たち、チャラ男の代金含め母さんが支払っていた、多分そろそろ俺も休憩のはず、だと思うんだ。

なお、何故かオールドキングとナターシャが同じ方向に歩いていった、気にはなる。

「午後からの3時間勤務のメンバーが来たから午前メンバーは上がっていいよー、織斑君も籐ヶ崎君もお疲れさまー」

「さっきのトラブルみたいなのとか対処できるか?」

「だいじょーぶだいじょーぶ、織斑先生が3時まで残ってくれるから、それに最悪警備員の人呼べばいいってさー」

「あいよ、相川もおっつー」









「やめてよ、人が不幸になる話とかって大嫌いなのよ」

ノーサンキューのポーズで後ろに下がった後簪に手を振りながら去って行った、では俺達はデートに行くとしよう、適当にそこらじゅう回ればいいだろう。

「んじやあどつか行くか、クラスのを見て回るか部活のを見て回るか、どっちがいい？」

「特にない……かな……？」

「それならー…俺の部に少し顔出してくるか」

それを聞いた簪が驚いた表情で俺を見る、どうした…ジャック…？

「信一郎…部活、入ってたんだね……」

「ああ、最近入った、と言うより捻じ込まれた」

「どんな部……？」

「そりや見てからのお楽しみ、ってな」

ちなみに何をやっているのかとかも全く知らない、予測するならば当てとかじゃ無かろうか。

く く く く く く く く く く く く く く く

「あらあらまあまあ、こんにちわー！ はいこんにちわー！」

「リサ先輩ちわッス」

「こ、こんにちわ……」

「何しにきたんですかあ？ もしかして、あなたも死にたがりですかあ?! まあどうでもいいですねえ」

「サバゲー部はどんな出し物してるのか気になりました、見たところ何もしてないようですね」

「いえいえ、私とサラ（サラ・ウェルキン部長）はここで指示を出している、いわばH.Qなんですわえ」

そういいながら胸ポケットの通信機を取り出すリサ先輩、その胸は豊満だった。

「道中出店を見ませんでしたかあ？」

「ああはい、幾つか」

「IS学園には現在37の出店が出ていますよお」

「はい」

「ちなみにサブゲー部の部員は籐ヶ崎君、リサ、サラを除くと74人います」

「…サブゲー部が出してる出し物って出店ですか…」

「正解ですねぇ！」

嬉しそうにポムと手を叩くりサ先輩、目エカツ開いてて怖い。

そうだと一言呟いてマガジンが半ばはみ出したバックパック（リサ先輩は何故か軍用バックパックを常用している）からグシャグシャになった紙束を引っ張り出した、一緒にマガジンも引きずり出される。

何事も無かったかのように実弾の詰まったマガジンをバックパックに押し戻し、紙束を突きつけてこう言った「あなたの泣き顔笑えませぬえ」呆れたが、なるほど笑えた。

「これは部員にのみ配られている出店のサービス券ですねぇ、色々回ってみると面白い物があるかもしれませんよお？」

隣で簪が「あれ？ え……？ 実弾……？」とあたふたしている。

「R1」可愛いじゃないか！

「あら、何をしていらっしやるのですか？ まあ、こんにちわ、今日はいい学園祭日和ですね、籐ヶ崎くん」

フランとはまた違ったふわふわした垂れ目の女性が部室から出てきてふにやりと笑みを浮かべる。

この女性、名はサラ・ウエルキン、イギリスの代表候補生にしてせつしーの先輩、そして実力至上主義の剛の者だったりする。

「貴女は日本の代表候補生の更識簪ちゃんですね？ 楯無さんから話は常々伺っています。口を開けば簪ちゃん簪ちゃん、ふふ、愛されていますね？」

「その……いつも姉がご迷惑を……お掛けしております……」

「いえいえ、こちらこそ。あらら、デートのお邪魔でしたか？ うふふ。リサさん、お邪魔しちや悪いですよ、よく言うじゃありませんか、人の恋路を邪魔する奴は戦車に轢かれてハンバーグって」

「ですねぇ」





かが直撃した音、そして勢いよく飛ばされ、床をガランガランと転がって行く。

さつきまで盾にしようとしていたトレーは無残にも穴が開いて遙か後ろ…って穴ア?!

見ればトレーのあった場所には細かく揺れる小さな赤い光、俺の記憶が正しければレーザーサイトだ。

「そ、そ、狙撃イ?! ありかよこんな事! じよ、冗談じゃ」

「二夏ア! 覚悟オオ!!」

最初に斬りかかって来た鈴を筆頭に遙か遠くでチラリチラリと赤い光が瞬く狙撃主セシリア、日本刀を持って斬りかかって来る筈に弾薬はせめてゴム製だと信じたいショットガンを持ったシャル、ハンドガンとナイフを持って素早く突っ込んでくるラウラ。

シャルのほうから嫌な予感がしてきたから咄嗟に避ける、後ろにあった背景とかのオブジェクトに無数の穴が開いて吹き飛ばされた。

たった今シャルの持つてるショットガンが実弾である事を思い知った、心が折れそうだ。

「武器イイイ!! せめて武器が欲しいよオオオオ!!」

「二夏ツ! お命…じゃなかった! 王冠頂戴する!!」

「おい箒お前今命って言った?! 言ったよなあ?!」

しかもよくよく見ればセシリアの横に双眼鏡でこちらを見ているモ〇ゾーみたいな人もいる。

きつとイギリスのSAS所属で無敵砲台の二つ名を持っていて今は前線から退いて司令官ベースプレートとかしてるんだ。

イギリスの司令官と言う事で偶々IS学園に来たら自分の国の代表候補生が頑張ってるから茶目っ気でセシリアのサポートしてるんだよ。

『さあ、はたして誰が王子様の王冠をその手に掴むのでしょうか!!』  
呑気に実況なんてしてくれちゃって!

すると急に鈴やラウラが一斉に後ろに下がる、直後大きな何かがあるの目の前を遮って地面へと叩きつけられた。

グチャリ、と生理的に嫌な音を出して叩きつけられたソレは人の形

をしていた。

夥しい量の赤い液体を回りに飛び散らせ、虚ろな目が見上げている、顔は整っていてきつちりとしたタキシードを纏っているが胸に剣で刺した様な大きな貫通痕が残っている。

ぞわり、と嫌な記憶が甦る、この手でもう既に親友とも呼べる人間の胸を刀で突き刺した記憶。

刀を血が伝い手を濡らす、刀を通して動く心臓の鼓動、ゆっくりと遅く弱くなつていく動き。

口から血を吐き、まともに喋れないはずなのに必死で喋る声、そして泣き叫ぶ知人の声。

「きやああああああ!!!」

「ひ、ひと?! 殺人?!」

手が震える、呼吸が苦しくなる、嫌な汗が噴出す、足が震える。

「大丈夫だ、アイツは…シンは、生きてたじゃないか…落ち着け、落ち着け織斑一夏…!!」

一度深く深呼吸して拳を握る。人が落ちてきた上を見ると、黒い影が俺を見下ろしていた。

『お前で28人目』

黒い影が上から自由落下してくる、十数メートル以上の高さから落ちてきた影は重い鉄の音を響かせて落ちてきた。

『恐れるな』

黒い影はゆっくりと手に持った剣を杖のようにして立ち上がり俺を見る。

『死ぬ時間が来ただけだ』

漸く見えた姿は青いボロ布を纏った騎士だった。

『ここでなんと乱入者です！ 各国の王子を次々と暗殺する闇の騎士がこの舞踏会に乱入しました!』

どうやらこれは演出的な何からしい、全く、本当に驚いた、心臓に悪いったらありやしな――

「危ないっ!!」

「うおっ?!」

鈴に押し飛ばされて床を転がる、一体何をするんだと講義しようと顔を上げるとさつきまで俺のいたところには剣が深く突き刺さっていた。

「このっ、貴様あ!!」

箒が真剣を構え騎士を縦に斬り付けようとする、だけど一瞬で深く突き刺さった剣を右手だけで引き抜いて箒が振り下ろすよりも先に軌道上に剣を移動していた。

箒は見た目より力が強く、剣を振ったときはあり得ないほどに斬撃は重い、それは長く剣道が続けていたからこそだろう、大の大人だつて両手で受けて微動だにしないなんて不可能、それも真剣ならなおさら。

しかしあの騎士は右手だけで容易く受けてしまった、微動だにさせず。

左腕は動かないのかダランと下げられたままだ。

箒の刀を弾き上げ剣の腹を顔の横へと移動させると銃弾の着弾音がする、まさかセシリアの狙撃を剣で避けたのか?!

「邪魔する者は轢殺し、破壊し、磨り潰す、ただの一人として私の邪魔はさせん、死ね」

観客の中から風のように躍り出た影が騎士に攻撃をする、その攻撃を咄嗟に防御した騎士はズリと衝撃で下がる。

その影は、声は、聞いた事のある、見た事のある、声と姿だった。と言うか。

黒いドレスを纏って出席簿エクスカリバーを持った千冬姉だった。

「一夏と同じ部屋になるのは私だ、千冬お姉ちゃんだ、黒い騎士として小娘共とて邪魔はさせん」

ヒュン、と剣を一度振り何かの構えを取った騎士に黒い影が集まる、何故かは知らないが、途轍もなくヤバイ。

「ほう、面白い、いいだろう、真正面から叩き潰してやる」



猛禽類だつて土下座して泣き叫ぶ笑みを浮かべた千冬姉が浅く構えを取った、千冬姉が構えたの始めて見たかもしれない。

得体の知れない重い音を響かせながら黒い影を全て纏った騎士が消えるような速度で突進して突きを放っていた、何故か凄まじい暴風が千冬姉と騎士の間から発生し、いつの間にか出席簿と剣が細かく振るえながら拮抗を保っている。

「ば、馬鹿なっ……こんなことは……!!」

千冬姉が狼狽している?!

ギン! と出席簿にあるまじき音を出しながら千冬姉の手から離れ、弾き飛ばされた、嘘だろ?!

騎士は剣を横に構え、首を刈らんが如く全力で振っている。

すると千冬姉はニイ、と身内だとは思いたくないような恐ろしい笑みを浮かべていた。

「ハハッ、とでも、言うと思ったのか? この程度、想定範囲内だ!

ハハ、アハハハハッ!!!」

懐からすかさず「二つ目」の出席簿を取り出し騎士の即頭部を殴打し、吹き飛ばしていた。

無茶苦茶に地面を転がり壁に叩きつけられた騎士がそのまま、地面に倒れこむ、と言う様な事にはならず辛うじて耐えていた、スゲエ。

『ジェネレーター出力再上昇、オペレーション、パターン2』

ノイズの混じった声と共に鎧の一部が隆起し、赤熱した内部を晒す、コイツ機械かよ!!

『かつて、幾つもの国を破滅させた力、その一つが、この機体』

楯無さんもノリノリですね。

『黒い鳥、人の中の可能性、そんなものは、ただの妄言に過ぎない』  
初耳です。

『人は、人によって滅びる、それが必然よ』

いや機械じゃんという突っ込み待ちなのだろうか。

『もういい、言葉など既に意味を成さない』

ナレーターと会話すんな。

『見せてみる、貴様の力』



ハ！ アーッハッハッハ!!! いいいいいいかああああ!!! 何と  
しても見つけるぞおおお!!」

恐怖だ。

さてさて、それは置きたてにやんから何も言われていないから、  
いつちーを追いかけるとしよう、嫌な予感がする。

「IBIS、いつちーの場所の特定及び現状報告を」

『3秒お待ち下さい……………発見いたしました、場所は第9アリーナ更衣室、IS起動反応が一つ、白式ではありません、織斑一夏様よりIS反応ありません、恐らく強奪されたものかと、お急ぎ下さい』

「分かった、ありがとう姉さん」

どうやら思った以上に厄介らしい、第9アリーナ更衣室、全力疾走  
で23秒か、PA起動、ブースター起動。

「今行くぞ、たまには正義の味方つてのも悪くない」

15秒、まあこんなもんか、熱源確認しながら更衣室の扉を破壊して飛び込む。

「ああ？ なんだテメエは」

「し、シン…?」

「よういつちー、元気かよ」

「おい、無視してんじやねえぞ!」

「五月蠅い!! 亡霊が喋るな!!」

そう言いながらゆっくり振り向くと半切れの女性が眼前にいた、  
ああ知っていると亡霊ども、亡国機業ども!

「この俺の眼前で亡霊デッドが歩き不死者ファンタムが軍団を成し、戦列を組み行進する。唯一の理法を外れ外道の法理をもつて通過を企てるものを、兵器開発者が、カラードが、この俺が許しておけるものか!! 貴様は震えながらではなく、藁のように死ぬのだ!!」

そう叫びながら徒手空拳の構えを取る、一度言ってみたかった。

目の前の女性はニイと笑みを浮かべる、が先ほどもっと凄まじいや  
バイ笑みを浮かべる女性とやり合っていたので怖いもんじゃない。

「ああ、知ってるぜテメエ、カラードの籐ヶ崎信一郎だな、私はオータム、亡国機業のエージェントだ」

「チェンジアーマー」

「おっと、展開はするなよ、した瞬間後ろのご友人に穴が開くぜ？」

「……なら素手で行つとくか」

「あ？」

ブーストを起動しながら踏み込み左手で殴りかかる。

シールドに干渉、即座に脚部ブレードを展開しミドルキックを力任せに叩き込む。

多少の衝撃とシールドエネルギーにダメージは入ったはずだ。

「正気かコイツ?!」

「いいや? ただのイカレ野郎さ」

「クソツ! つらあ!!」

再度殴りかかった左手が弾き上げられる、その勢いを残したまま脚部ブーストを起動し膝を顔面に直撃させ翻った。

しかしお世辞にも打撃技に優れているわけでもない俺はバランスを崩し地面に叩きつけられる。

「義手かあ! なら、コイツでどうだ!!」

立ち上がろうと地面についた左手を蜘蛛の脚みたいなので突き刺され砕かれる。

「畜生!」

「どうだよ、もう抵抗はできねえぞ、素手で殴りかかる勇氣があるなら別だがな?」

能力使用、痛覚神経を変化させる、と言うか消す。

「フンツ!!」

オータムにやんの顔面を右手で殴る、案の定シールドに防御された上にたぶん拳が砕けた。

「なんだよ、こいつ、ぶっ壊れてる!」

狼狽するオータムにやんに構わず再度砕けた右手で殴る、もう一度、殴る殴る殴る。

流星に返り血はシールドも攻撃と認識しないのか点々とオータムにやんに赤いお化粧が追加される。

OH、俺の右腕が非常によく見えない目になっているよ。

「クソが!!」

ブレードで右腕が斬り飛ばされ、地面へと倒される。

「化け物が、ついでだ、テメエのISも頂いて行くぞ」

何かヘンなやつを突きつけられる、なんぞそれ。

右手から夥しい量の血が流れてるけど失った端から創っているのが無限に垂れ流せる。アンリミテッドブラッドワークス、なんちて。

「なに…? 奪えないだど?」

「なら殺して奪ってみろ」

「ああ、じゃあそうする」

「シンツ!! 止めろおおおお!!!」

一切の躊躇無く蜘蛛の脚が俺の心臓を貫いた、マジかよ。

――織斑 一夏――

ISが奪われた、ありえねえ、畜生、俺はこんなにも無力だって言うのか、何の為に楯無さんに鍛えられていたって言うんだ、俺はまた、何も出来ないのか!!

なんとしても状況を打開する、その方法を見つけないと、そう思っている。扉が破壊され人が飛び込んできた。

「ああ? なんだテメエは」

オータムと名乗った女が声を出す、こちらに顔を向けた人はIS学園で出来た俺の親友のシンだった、俺を見るとシンはにやりと笑う。

「し、シン…?」

「よういっちー、元気かよ」

悪ガキの様な笑みを浮かべたまま楽しそうに笑っているシンが後ろから話しかけたオータムに顔を向ける。

「五月蠅い!! 亡霊が喋るな!!」

次々と叫ぶように言葉を放つ、オータムはシンの顔を見て驚いたよくな表情をした後狂ったような笑みを浮かべた。

「ああ、知ってるぜテメエ、カロードの籐ヶ崎信一郎だな、私はオータム、亡国機業のエージェントだ」

俺に向けていたライフルを俺から外し両手を広げるようにして自分の素性を明かす、俺の時と同じように。

「チェンジアーマー」

「おっと、展開はするなよ、した瞬間後ろのご友人に穴が開くぜ？」

再度ライフルを向けられる、俺は理解した、今の俺は邪魔でしかない、シンの枷にしかなくなっていない、なんでだよ、俺は何の為に…!!

「なら素手で行つとくか」

そう呟いた直後シンがオータムに拳と蹴りを叩き込んでいた、どう考えても自殺行為だ、オータムの顔が驚愕に染まり数歩後ろに下がる。

「正気かコイツ?!」

「いいや? ただのイカレ野郎さ」

少し笑いながらシンはもう一步踏み込んで殴りかかるが、容易く左手を弾き上げられる、それも想定していたかのように勢いを残したままオータムを蹴りながら跳んだ、だけど無茶な体制で攻撃した所為かバランスを崩し、地面に叩きつけられる。

すぐに立とうとしたシンの左腕が二本の装甲脚によって砕かれた。

「どうだよ、もう抵抗はできねえぞ、素手で殴りかかる勇氣があるなら別だがな?」

笑うオータムを相手にシンは右手で直ぐに起き上がり「生身の」右手でオータムを殴った。

骨の折れる音と肉の潰れる音がしつかりと俺の耳にも入る、間違はなくシンの拳はたつた今潰れた。

「なんだよ、こいつ、ぶっ壊れてる!」

狼狽するオータムを一切気にしないかのように潰れた右手で殴り続ける、嘘だろ、止めるよ、シン!!

声が出ない、あまりの事に動く事すら出来ない、何度も何度も殴るうちにボトリと何かが落ちた、目を向けるとそれはグチャグチャに拉げ千切れたシンの右手だった、今シンの手首より向こうには何も無い、それでもシンは全力でオータムを殴り続ける。

「クソが!!」

瞬時にブレードを展開したオータムがシンの右腕を斬り飛ばす、直後にシンを蹴り、地面に倒した。

「化け物が、ついでだ、テメエのISも頂いて行くぞ」

腕の付け根から血を噴水のように噴出しているシンにオータムが機械を突きつける、俺の白式を強制的に剥がして奪い取った機械を。

しばらくそうしていたオータムが不思議そうな顔をする。

「なに…？ 奪えないだど？」

「なら殺して奪ってみろ」

一切痛みに表情をゆがめる事もなく、冷静にシンがオータムに言い放った、オータムは一瞬動きが止まり笑みを浮かべながら装甲脚の一本を振り上げた。

止める、止める、やめろ！ やめろッ!!

「ああ、じゃあそうする」

「シンッ!! 止めるおおおお!!」

地面ごとシンの身体を突き刺した。

—Third Person—

「ぎやはははははははははは!!!! ひー、さってつと、んじゃじつくりバラしてISを頂いて行くとするかあ、死体には過ぎたおもちゃだよなあ？ ギヤハハ！」

「白式イイイイイイツ  
!!!!!!」

一夏が叫ぶと同時にオータムの手から光が飛び出し一夏へと吸い込まれた、オータムが声を上げる間も無く一夏が白式を展開する。

「なっ?! どうし——」

オータムが驚きの声を上げる最中「ゴン」と音が聞こえシールドに微々たるダメージが入ったことをISが知らせる。

目を向けると心臓を貫かれた筈の信一郎が狂ったような笑みを浮かべ紫電を纏った皮膚の無い右腕でオータムの顔面を殴っていた。否、正確には「まだ皮膚の再生していない」右腕でオータムを殴ったのだ。

最後の抵抗などではなくさも当たり前のように人間の限界に近い力でISを殴り続けている、その都度ゴキリ、グチャリと骨が折れ、肉の潰れる音が聞こえるが再度殴りかかるよりも先に修正されて行く。「ひ、こ…の、このっ…!! 化け物めッ!!」

信一郎を突き刺した装甲脚を振り回し装甲脚が体から離れ信一郎が壁に叩きつけられる、ISの力を殺す気で行使された身体は壁を陥没させ再度骨と肉が潰れる音を周囲に響かせ塗料の入ったバケツをぶちまけたかの如く壁を赤く染める。

ぐちゃりと重く濡れた音を立て信一郎が地面に落ちたとき、既に右腕は元あった通りに戻っていた。

信じられないほどの量の血を穴の空いた胸からぶちまけながらゆっくりと立ち上がる。

しかし胸に空いた穴さえも紫電を走らせ凄まじい速度で塞がって行く。

「なんだよ、なんだよ…:…なんだよお前え!!!」

答える事無く一直線にオータムへと走り拳をオータムの顔面に叩き込む、オータムが表情を歪め数歩後ろに下がる。

「来るなああああッ!!!」

幼子が泣き叫ぶような声を上げ装甲脚で信一郎の顔をなぎ払う、あまりの威力に身体を一切揺らす事無く下顎より上が消し飛んだ。

一瞬動きが止まり、ぐらりと身体を揺らし地面へと倒れ、漸くピクリとも動かなくなった。

「はっ、はっ…:…ち、畜生が、畜生が…!! くそっ、もう…:もういい!

織斑一夏、お前を殺してでもISを奪って、ここから離れ」

「あ、そん…:まだ…?!」

オータムが白式を纏い、驚愕の表情を浮かべたままの一夏の前に立ち震える手を握り拳を作った、しかし一夏はオータムの「後ろ」を見



ていた。

意識を回し後ろを確認すると左腕も新たに装着され、皮膚のみ残り修復された信一郎がただ悠然と立っている。

「うわああああああああああ!!!」

我武者羅に信一郎を破壊しようとする振り返りながら装甲脚を叩きつけるが左腕で一瞬捕まれ、回すように「生身で」投げ飛ばされた。

先ほど信一郎が叩きつけられた場所にぶつかり壁が崩れる。

「なんで、なんでだよ!! 心臓を突き刺しただろうが! 脳を消し飛ばしたじゃねえか!! なんで生きてるんだよ! なんで死なねえんだよ!!」

「再生者我々カラードが貴様等IS乗りと戦うために生み出した技術だ」

楽しそうに、愉しそうに、たのしそうに、そう笑った。

ジリジリと横に移動する震えたオータムにやんをニヤニヤ笑いつつ追い詰める。

「どうだ? 死なない化け物と対峙した気分は、最高だろう? 隠さなくていい、俺は今最高の気分だ」

「くそ、なんて無茶苦茶な科学技術だよ、畜生! こうなりやしかたねえ」

「逃がさん」

追いかけて手を触れてパチン、と指パッチンしつつ能力で概念を弄ればそれ、オータムにやんから「ISが空を飛ぶ」と言う概念が消失、これでオータムにやんにとってISは「空を飛べない世界最強の兵器」になった。

「…何をした? いったい、私に何をしたんだ!」

「なにも?」

「そんな筈はねえ、ナニカした筈だ、畜生、わかんねえ!」

さて次だゆっくりと心を壊してやる。

「クソオツ!」

「それ」

攻撃に繰り出してきた装甲脚のうち一本を「消す」他は直撃だが何一つとして問題は無い。

「やっぱり効きやしねえ、化け物が…!」

「な、え…?」

後ろでいつちーがあたふたしている、大方「脚が一本なくなったのに全く気にしていないのは何故か」とか考えているんだろう。

「さて、ではここで質問だ、確かそのIS、名前はアラクネといったな? アラクネは蜘蛛の名を冠するISだ、蜘蛛の脚は何本ある? 8本だ、昆虫類とは違うらしいな、それはさておき…!」

「蜘蛛の名を冠したそのアラクネに何か足りないものは…ないか?」

「足りない…? ツ!!」

「そうだ、脚が一本足りないな? いつからだ? それはお前にとっておかしかったか?」

「いや、まて…! おかしい、おかしいのに、当たり前だった…? なんだで、気づくだろう普通!」

オータムにやんにとってアラクネの脚が一本無いのは強奪した時からでそれが当たり前だと考えていた、とまあ概念消失による記憶の改変とかややこしい事になってるんだよね。

「さて、これから尋問を始める!」

「なに…?」

「思い出せ」

指パッチン、実は指パッチン必要ないんだけど触れて一応指パッチン。

物理的に無くなっちゃったもんは仕方ないがアラクネの脚は8本だった事を思い出させる。

「あつ、くつ…:テメエ…!!」

「お前は死を恐れるか?」

「何言ってるんだ、ぶっ壊れたクソ野郎め」

「怪我を恐れるか? 恐怖を恐れるか?」

何が恐怖だ？ 死か、破滅か、痛みか、それとも信じる人に棄てられる事か？」

「くだらねえ、怖いもんなんざもう、ねえよ、テメエの種明かしもわかつちまったしなあ…？」

「BINGO、お前の恐れるものは、愛する人に忘れられる事だな…？」

生前と一緒だ、テロリストやら狂信者つてのはどうも信じる人や物が全てである事が多い、いつでも殺せる状態にして死ぬのが怖いか聞くと迷いなくNOと言つても瞳孔が揺れる、これは死ぬのが実は怖い人。

んであとは揺れなかったら物に縋るか人に縋るかを問うといい、信じた人に棄てられる事が聞いた時一瞬瞳孔が揺れた、恐らく棄てられてもいいが忘れられる事だけは嫌なんだろうと当たりをつける。

もしかしたら自分がいた証を消されるのが怖いのかもれない。次々とアラクネの脚を消して行く、一本、二本、三本、何かが起こっているが何が起こっているのかわからない、そんな状態で心を揺らす。

「さっきの話は覚えてるな？ さあ問題だ、アラクネの足は何本ある？ 1, 2, 3, 4…4本だな？」

「やめろ…やめろ!!」

腹を半分ほど削られてバランスを崩しそうになる、支えるのも含めて右手でオータムにやんの首を絞めるように掴む。

「俺は消せる、お前を消せる、記憶を消せる、存在を消せる、記録を消せる、全てを消せる。お前は誰の記憶にも残らない、お前はこの世に存在しなかった、お前は愛する人の記憶の端にさえ残らない、そして誰の記憶にもいなくなるか？」

「あ、あ…やめ…やめろ…」

「さあ最後の質問だ」

「やめろおおおおおおおおお!!!」

「左手の義手で指を鳴らす。」

「お前は……誰だ？」

しかしやったことは全ての概念を戻す事、消しやせんよ、後味の悪い。

『いっちー、聞こえるな？ 一言「アンタ誰だよ」って言ってくれ』

『え？ あ、なん……わかった…』

「私、わたしは……わたしはあ……」

「アンタ……誰だよ……」

「あ」

ISを解除してその場で崩れる、たった今心が割れた、だがまだ碎けるには一歩足りない、今一歩踏み込んだ方がいいだろう。

ゲスい笑みを浮かべてしまう、イカンイカン。

と、ここで壁を破壊してISが一機突入してくる、増援か、面倒な！

「二夏君、大丈夫？ 遅くなってごめんね！ 生徒会長が助けに……  
籾ヶ崎……くん？」

「…遅かったじゃないか、目的は既に果たしたよ」

「どうしてここに？」

「嫌な予感が大的中ってな」

「私は、私はオータム…私は…私は…:…?」

「彼女は…?」

「う、ああ、アアああああああああああああああ!!!」

脚をもつらせながら幽霊から逃げるように、と言うか逃げるオータムにゃん。

「ねえ、何が——」

「まあ、丁度いいか、なあいつちー?」

血だらけでボロボロになった服を修繕する。

「な、なんだ…?」

「お前は襲撃を受け白式を一旦奪われた、それを助けたのはたてにやんだ、俺とは教室で別れて以降会ってない、いいな?」

「何言って…」

いつちーの記憶を作り変える、指パッチンはしない。

「え? あれ? シン、何でここに?」

「なんかISの戦闘音みたいなものがあったから急いで来たんだが、もう終わってたか、事後処理は教員方がやってくれるだろ。じゃあの」

「待ちなさい籐ヶ崎君!」

「あと頼むわ、義姉さん!」

今はいつちー優先だろうし俺が去って行けば追いかけてこないし大丈夫だろう。

さつてつと、んじやいつちよ行きますか!

く く く く く く く く く く く く く く く く

みつけた、マハハハハ! どこへ行くこうというのかね!

「ひっ、ひっ、はっ、ひっ」

おやおやおやあ? やっべ、ちっぷーじゃん、どうしよう。

「! どうしました、大丈夫ですか?」

「あ、ああ…わた、私…」

そりや半ば絶望した顔で必死で走ってたら教員であり意外とお人よしなちっふーは気にするだろうなあ。

オータムにゃんがちっふーの服を必死で掴みながら縋りつく。

「私は、誰…?」

「い、いえ、存じませんが」

「あ、は…あは、あはははは」

「大丈夫ですか?!」

「ちっふー！ 第9アリーナ更衣室で襲撃があつたらしい！ その人はその際に巻き込まれて混乱してるんだろう、いっちーが襲われた！ たてにゃんが撃退したが、いっちーも少し混乱しているとの事だ、その人は俺に任せて行ってくれ！」

「何?! わかつた、頼んだぞ籐ヶ崎!!」

全力で走って行くちっふーを眺め非常によろしくない笑みをついつい浮かべてしまう、俺が砕く前にちっふーが最後の砦を砕いちまった。

あとは俺に依存させるだけだ。

「そら、見ろ…誰もお前の事なんか覚えちゃいない、誰もお前のことなんて知らない」

「あは、アハハハ、アハハハハハ！」

「でもな、オータム、俺は、俺だけはお前の事を知ってる、大丈夫だ、俺はお前のことを忘れない、お前はまだ一人じゃない」

「ひとり…じゃない…?」

「そうだ、どうだ？ 俺のところに来ないか？」

「でも、私は…亡国機業の…」

「そうか、ならば無理強いはしない、だがそこにお前を覚えている人間は居るのか？ おっと、ただの独り言だ気にしないでくれ、じゃあな、もしかしたら二度と会うことは…無いかもな？」

「あ、ああ…まつ…て、まつ…」

俺の勝ち――

「ッ!!」

エネルギー反応があつた方向に左手を向け手動PAを発動させる、

直後エネルギーマシンガンがPAに着弾、スモークミサイルもぶち込まれる。

「ツチイツ!!」

簡易AAでスモークを散らすと既に空高くにオータムにやんと青いISが一機いた、逃げられたか。

「あー、クソ、惜しかったなあ」

『信一郎様、緊急事態です。簪様が襲撃を受けております、PAの起動を3秒前に確認いたしました、簡易式なので長くは持ちません、ポイントを表示します、お急ぎ下さい』

「なっ、クソ!!」

簪が襲撃を受けている?!

ポイントは…遠い!! クソ、クソ、クソ!!

「フラジール!! ACCB—O710!」

OBレディ!

『襲撃者と距離が近すぎる為レーザーキャノンの援護が出来ません、着弾まで1.0037秒のラグがあります、PA減少しています、残り防御可能回数3回:2回です、お急ぎください』

「分かってる!!」

『PA切れました、簪様右腕負傷、ポイントまで12.5キロ』

『簪様が戦闘困難な状態になりました、ポイントまで1.1キロ』

『100メートル、接敵しました』

「シユープリスツ!!」

サーマルを確認しながら壁をぶち破る、見れば10人以上の武装した人間が倒れ伏した簪の周囲にいた、床には簪以外で7〜8人倒れている。

ISによる破壊の痕跡は無い、ISを展開しなかったのか…!

「貴様は?!」

「戦闘用意!」

「遅い、死ね…!」

クイツクブーストで接近しながら両手のライフルでミンチ肉にして行く、1秒に満たない速度で片っ端から殺し、最後の一人を左腕武

装の04—MARVEで串刺しにし、そのまま引き裂く。

「…簪っ…!!」

倒れている簪を抱き上げ息を確認する。息はしているようだ、怪我也命に係わるものは無さそうではんの少し安心する。

破壊した壁から屋外に出て下に降り、リサ先輩の携帯電話に連絡する、学園の医療関係で知っている連絡先なんてリサ先輩以外知らない。

『どうしましたあ?』

「簪が怪我をして、学園の医療関係で知ってる連絡先なんて先輩しか知らなくて」

『落ち着いてくださいねえ、簪ちゃんの怪我の具合は見た感じでいいです。教えてください』

「右腕の上腕に裂傷、傷が少し焼けている事から恐らく銃創だと思います、他には…」

『銃創ですか、もう結構ですよお、わかりました応急処置は出来ますよねえ? 場所を教えてください、緊急医療車両を使います』

「ポイントを送信します、他には」

『簪ちゃんが気絶していたならもし起きた時支えてあげてください』  
「わかりました、ありがとうございます」

『では直ぐ向かいますねえ』

連絡を切った後急いで応急処置を施していきながら再度通信を起動する。相手は霧纏ミステリクス・レイデーの淑女。

『籐ヶ崎君? 丁度聞きたい事が——』

「簪が襲撃を受け負傷した、今応急処置をしている、もう少しで緊急医療車両が来るはずだ」

『そんな、うそ?! ど、どうして?! なんで簪ちゃんが!!』

「知らん! 俺だつて知りたい!!」

『ッ! ふ、っ、ふー…:…襲撃者は?』

「殆ど殺した」

『殺し…! …:…そう、生きているのは、ちゃんといのね』

「簪が、殺していなければ…」



『I Sを無力化するなんて……I Sを運用していたの?』

「I Sの、打鉄式式の起動履歴が無い」

『なんで:?!』

「相手がI Sを使わなかったからだろう……!」

『簪ちゃんのほか……! 死んじやったら意味無いのに……!!』

「応急処置が完了した、ポイントを送信する、死体の処理と尋問を頼んで良いか? 俺がしたら、殺してしまう」

『死体との見分けは付く?』

「人の形を保っているのが簪が倒した襲撃者、そうでないのが死体だ」

『わかったわ……今、行くわ』

通信を切断、簪を抱き支えながら頭を撫でる。

「……ん」

「簪?」

「しん……? 痛……」

「無理するな、何があったか、出来たら教えてくれ」

「信一郎と、わかれて……そしたら、つけられてるなって……周りに、被害が……ないよう、に、人気の無い所まで……移動して……そしたら、襲われて……ごめんね……」

「なんでI Sを使わなかったんだ……」

「私も……更識だから……打鉄式式を……使わなくても、出来るって……思っちゃって……それで、こんなになって……ばかだよ……」

「ああ、バカだよ、大馬鹿だ、お前が死んだら俺は、どうすりゃいいんだよ」

「ごめんね、ごめんね……」

「俺も、とんでもない大馬鹿野郎だ、俺が簪か離れなきゃこんな事にはならなかったってえのに……」

「ごめんね、信一郎……」

「すまん、お前の怪我を治してやりたいが、物理的な他人の作り変えなんてやったことがない、どうなるか、わからん」

「うん、いいよ……大丈夫……」

「音が聞こえてきた、もう大丈夫だ、簪……ゆつくり休め……」

「う、ん……………」

簪がゆつくりと目を瞑った後緊急車両が到着し、白衣を着た教員数人とりサ先輩が降りてくる。

「簪ちゃんの容体はどうですか？」

「今は意識がありませんがさつきまで呼吸も安定して意識もしつかりしていました、致命傷はありません、応急処置も完了しました」

「……一年生の専用機を所持した代表候補生ですからねえ、強奪するなら一番よかつたんでしようねえ、もしくはもっと別の思惑があつたか」

「……………簪」

「これからどうしますか？」

「ここに残ります、会長がじきに来る筈ですので」

「わかりました、自棄にだけはならないで下さいねえ、見た所籐ヶ崎君がいなければ最悪の状況も考えられた訳ですからねえ、簪ちゃんが助かったのは貴方のお陰ですよお」

「…はい」

「では、もう行きますねえ、ではでは」

簪に乗せた緊急車両が去って行くのを眺めながら拳を握り締める。

『籐ヶ崎君、もう到着するわ』

「簪は運ばれていきました」

『下で通過したのを確認したわ……………見えた』

　ISを展開した会長が俺の横に着地する。

「待たせたわね、襲撃された場所は？」

「そこに見えるぶつ壊れた壁の中だ」

「……籐ヶ崎君、凄い目をしてるわよ」

「だろうな、行くぞ。キルドーザー」

崩壊した壁の穴を潜りさつき廊下へと入る、中の光景を見た会長が口元を手で覆った。

「ひどい……………」

「死体を見たのが初めてと言うわけではないだろう」

「そうだけど、ここまで人の形をしていないのなんて見たことないわ、

逆に死体だって実感が無い位よ」

「そこに何人が転がってるのが生きてるのだ、こいつらから情報を吐き出させてくれ、亡国機業じゃない、無名すぎてIBISでも探せん」  
「わかったわ…任せて」

A Cを解除し赤色に染まった壁や床を見る、確かに現実味がない、手榴弾で吹っ飛ばされたってまだマシだろう。

「…初めてなのよね？ にしては冷静すぎないかしら」

「初めて？ ああ、そういえば、初めてだったな、人を殺したのは…兵器か、確かに兵器だ、間違いなく…一秒も掛からなかった、流石はカロードの最強戦力だ、競技用の制限なんてあつてないような物だな」

「きつと、まだ混乱してるのよ、後々辛くなるわ…ごめんなさい」

「謝る必要は無いだろう、それよりも頼んだぞ、本拠地だけは何としても見つけてくれ」

「え、ええ……」

原作からの剥離開始編

Posttraumatic stress disorder 心的外傷後ストレス障害

生徒会室で扇子を持った青い髪の女生徒と筋骨隆々とした義手義足の男が地図を広げた机の周りに立つ。

部屋に二人以外の人間は居ない、部屋の外では誰も入らないよう一人の生徒が見張っている。

男はコーヒーの缶を傾け中身を全て飲み干した。

「……奴等の潜伏場所が分かったわ、組織の名前は——」

「そんな物はどうでもいい、何処にいる」

青い髪の女生徒、更識楯無の言葉を遮って男、信一郎信一郎は低く、冷めた声を出す。

「…腸が煮えくり返ってるのは貴方だけじゃないのよ」

「何処だ」

右手で掴んだスチール缶がベキリと音を立てる、傍から見たとしてもイライラしているのが見て取れた。

楯無が細く短く息を吐き地図の一点を扇子で指し、拡大させ、位置をマーキングする。

「……………中東の……」

「間違いは無いか」

「ええ、一人一人別の部屋で尋問したわ、それぞれの証言は一致、指を押し折って再度聞いても同じだと言ったわ、うちの尋問のプロがやった、信用できる情報よ。でも奴等、ISも複数持っているらしいわ、テロリストが持っているなんて随分ISも安くなったものね」

信一郎がギリギリと歯を食い縛りスチール缶を生身の右手でグシャリと握り潰す。

「俺達が行く」

「……私も行くわ、大事な妹だもの」

「好きにしろ」

ゆつくりと窓まで移動し一つ溜息を吐き、通信機を起動させた。

「IBIS、フリーの私兵部隊全員に繋いでくれ」

『ですが…』

「もう一度言う、フリーの私兵部隊全員に繋げ」

『…はい……………全員の接続を確認しました』

「信一郎だ、簪に俺達に手を出したマヌケ共が中東にいる」

右手を壁に叩きつけ壁を破壊しながら叫ぶ。

「皆殺しだツ!! 一切容赦するな、全員殺せえツ!!! 女も子供も関係ない! ただの一人も逃がすなツ!! 生かすなツ!!」

凄まじい剣幕に楯無は一步、足を引いた、彼にはしたないと叱られた事は幾度かあった、怒る様子も何度か見た、だが根は優しい人物だと知っていた。

故に彼をからかったしワザと彼を怒らせようとした、しかし今の彼は憎悪と憤怒に塗れ叫び散らしている。

「今すぐに出る、出撃する者全員に最新装備を配備ツ!! 命乞いをするのが許すなツ!! 男を突き刺せ! 女を切り倒せ! 赤子を焼き殺せ! 老人を撃ち殺せ!! 一人として…………ツ! 生かして返すなアアツ!!!」

壁を破壊した時手に持つ潰れた缶が手を刺したのかポタリポタリと血が地面に落ち、色をつける。

『…信一郎様、ACの使用は止めて置いた方がよろしいかと、足が付きませす』

「はあ、はあ、はあーつ……………わかっている……………部隊編成は7つに分ける、それぞれリーダーはオールドキング、ポール・オブライエン、オメガ、アンシール、イルビス・オーンスタイン、リム・ファイアー、俺だ、思うように指揮しろ。使用コードはR・I・P、この作戦は女子供も容赦なく殺す、ジェラルドやリリウム、他信条に反すると言う者は降りろ、責めはせん」

「アール…アイピー…?」

楯無が一つの単語に反応し、信一郎の顔を見る、先程以上に苛立ち殺意を振りまいている。

「聞き覚えがあるわ、いえ…見覚えかしら…どこかで」

「IBIS、いいだろう、全て教えてやれ」

『…刀奈様、私がお答え致します。R・I・P、Rest In Peaceはカロードの特殊部隊です、テロリスト等に対処する為設立された対抗部隊であり、カロードの関連性を隠す為旧式に偽装した最新装備を運用し、その特殊な作戦内容から世間では別名で呼ばれることが多い部隊です。尤も知られている通称では死神部隊と呼ばれています』

楯無が「刀奈」と呼ばれたことに一度大いに驚き、直ぐ落ち着かせたのか冷静になる、しかし話を最後まで聞いた瞬間一歩後ずさった。「噂のみで映像も写真もない…皆殺しの死神部隊…?! ここ数年は一切目撃情報がなかったのに…!!」

『正確には敵対勢力の殲滅用です。作戦領域外の民間人には危害を加えておりません、データや物として残らないよう特殊なジャミングが施され、その証拠に遠距離からの目視情報は残っています。その為皆殺しの死神部隊、は適切ではありません』

「そんな、まさか…」

「IBIS、賛同した人員に通達、準備完了後座標137.021835,34.711627ヘキサラギの大型輸送艇で移動し浮上、俺がポイントで合流した後ミラージユの空中空母で飛び目的付近20キロで降下、移送ユニット搭載型。パワードスーツによる移動で目的地へと襲撃をかける、以降各部隊のリーダーに判断は任せる、命令は二つ、生き残れ、そして皆殺しだ。それと二つパワードスーツを多く用意しろ、防御特化型と高速近接型だ」

『了解しました…』

信一郎が通信を切断すると後ろにいた楯無が立つ気力をなくしたかのように椅子に倒れるように座り込む、震える声を発し、ゆっくりと信一郎を見た。

「まさか、あなた達が…カロードがあのだ死神部隊だったなんて…」  
「R・I・P部隊員は固定ではない、その都度人員を集め、指定された装備を装備し、出撃する。だが毎回固定で参加する人員もいる、先程

の6人だ」

「あなたは、籐ヶ崎君は人を殺す事に抵抗はないの…?」

「……………」

「この数年目撃情報がなかったのは何故…?」

「単純に見られていなかったただけだ、だが…：俺が学園に入学してから始めてだな」

手に持つ潰れた缶を部屋のゴミ箱に棄て、手の平を眺める、楯無が思っていたよりも深く刺していたのか少くない血が流れる。

だが信一郎が手を握りもう一度開くとそれ以降血が流れる事はなかった。

『信一郎様、部隊の準備、及び指定地点への転送終了しました、総部隊長のオールドキングに変わります』

『坊ちゃん、上部展開及び指定地点をヘリポートに合わせた、いつでもOKだ』

「わかった、直ぐ移動する」

通信を切断し楯無をちらりと見ながら口を開いた。

「本当に来るのか? 皆殺しだぞ」

「……………行くわ」

「ならこっちに寄れ」

楯無が近くに来たのを確認し投影ディスプレイを起動しパスワードを入れ特殊システムを起動した。

「転移装置起動、範囲指定+0-0、1. 5座標LPNX-137. 0  
21835・OBSL-34. 711627確定、経由INF-PH  
IRA、転移、やれ」

「ツ…!! ……………ツ?!」

一瞬無重力になった直後身体が重くなった感覚に咄嗟に踏ん張り目を瞑る、唐突に聞こえる風の音にゆっくりと目を開けると驚愕した、空には太陽が照り遠くを見るとかすかに海が見える、何よりもいつの間にか有り得ないほど巨大な船の上に立っていた。

周囲には100に近い数の人間が列を作り、一斉に右腕を前に伸ばしそのまま横へ90度曲げ敬礼へと移った。

「お待ちしておりました、信一郎様、簪様のことは聞いております。我々R・I・P特別編成部隊はカレードに、信一郎様に逆らう愚か者どもを抹殺する為集まりました、ご指示を、我々に皆殺しのご命令を!!」

「肥溜めにぶち込むなどと生ぬるい事はいけません、肅清を！ 我等に仇なすゲスどもを追い詰め大肅清を!!」

「戦闘要員我等総勢98名ツ!! 敵軍予測人数四桁!! されど我ら意気軒昂!! ご命令を！ 籐ヶ崎信一郎様ツ!!」

「……充分だ、奴等を塵殺しにするには充分だ!! 殺す、全員殺す!! 命令を下す！ 見敵必殺見敵必殺だ!!」

サーチアンドデストロイサーチアンドデストロイ

全員が同時に雄叫びを、否、大歓声を上げる、日本語で、英語で、イタリア語で、ドイツ語で、ロシア語で、中国語で、フランス語で、あらゆる言語で。

「狂ってる……」

大歓声の中小さく眩いた楯無の声は真横の信一郎にさえ届かずかき消された。侵攻であるこちら側は防衛の敵相手に挑まなければならぬ、侵攻側が防衛側を落とすには少なくとも3倍の戦力が必要だと言われている。にも拘らずこちらは僅か約1000人、対してあちらは最低でも10000人、防衛側であることも含めれば戦力比は30対1にもなる。

その上で相手はISを複数機所持している、たいしてこちらは2機、その上それは使用しないことを前提としているのだ、どう考えても勝てるはずがない、正気の沙汰ではなかった。

重い機械の駆動音と共に巨大な航空機が3機せりあがってきた、それと共に全員がその付近へと移動を開始する、大多数が愉しそうに笑いながら、晒いながら。

「こんにちわ、あなたが楯無ちゃんよね？」

唾然としていた楯無の肩をそっと叩き、赤い髪の女性が顔を覗き込む。

「え、あっはい、そうです」

「私はシャミア、一応ロシア出身よ、妹さんの事は気の毒だったわね、



でも心配しないで」

「ありがとうございます…」

ニコリと微笑んだシャミアがそのまま薄っすらと目を開き犬歯をむき出しにして晒った。

「私達が皆素敵な風穴だらけにしてブチ殺してあげるから、ね？」

ぞわり、と体の芯を冷やすような震えが頭からつま先まで走る、すると先程の笑みを再度浮かべて手を振りながら去って行った。

「怖いかな、今回の作戦にいる殆どの者はカラードが拾い上げた人間だ、優れた能力を持つ人格破綻者だ、いつ死ぬとも知れない生き方をしてきた人間達だ。……付いて来い」

信一郎が近付き呟くように言い、航空機へと歩いていく。

く　く　く　く　く　く　く　く　く　く　く　く　く　く　く　く

「これを装着しろ、防御特化型パワードアーマーだ、シールドを省いた状態で実弾防御エネルギー防御に突出してこいつを削りきるよりも先にISの方が先に弾切れになる、対照的に攻撃力は殆ど無い、両手に持つことが出来る携行兵器までだ、最高時速は250キロ、重量220キロ、跳躍高度15メートル、カラード以外のMBT程度なら体当たりで撃破できるだろう」

「私は…」

「ロシアの代表だろう、万が一にでも見られたら問題になる、着ておけ」

「……分かったわ」

巨大な鉄塊に背中を預けるとそれに反応したパワードアーマーが楯無の身体を包み込み込み駆動部分の長さなどが調整され丁度いいサイズと変化する、最後にヘッドアーマーが楯無の頭を包むとHUDが眼前に投影され生身で得た視界と相違ない、否、それ以上の視界感度と反応になる。それはまるで。

「ハイパーセンサー?!」

「汎用性はそれ以上だ、俺のアーマーはどこだ？」

信一郎が整備士に声を掛けると整備士がコンソールを操作して一

機の鉄塊が付近へと運ばれてくる。

「こちらは以前より作っていた次期社長専用の高速近接型パワーロードアーマーです、瞬間最高速度は音速の3倍近くにもなります、ACには及びませんが、高速型の弱点で薄い防御力、まあISの攻撃数発程度で破壊されるほど低いわけではありませんが、それと積載量が少ないので基本はブレードの戦闘となります。遠距離射撃武器は対人ハンドガン一丁となります。それとアーマー自体の防御力とは別にPA発生装置を全てのアーマーに組み込んでありますので同数のISと戦っても勝利できます。

続いて搭載武器の説明です。対人ハンドガンは45口径装弾数15発、有効射程距離は250メートル、反動は特殊機構を組み込んだため社長でも扱える低反動となっております。以降は実際に展開してみてください、装着の為まずは左腕を外して腰掛けてください」

左腕を迷う事無く外し鉄塊の臀部になる場所へ腰掛ける、すると自動的に上半身が包み込まれ左腕部がパワーロードアーマーに接続される。

「次に両足を外して下さい」

空気を抜くような音と共に両足が外され、足の付け根をアーマーに合わせる、残りの下半身が包まれ、続いて装甲が組み合わさって全身を包み込んだ。

「では説明に移ります、装備されている近接兵器はブレードが3種、ワイヤーアンカーが両腕です、まずは腰の二本を手を取ってください」  
刀のように吊るしてある両腰の鞘から逆手持ちのように抜き手の平で弄ぶようにくるりと回して順手持ちへと持ち替えた。

「それは大型のマチェットで名称は開発コードブラッドラスト、今は語呂が良いのでブラッドスライサーと呼んでいます、人斬り鋏と言って頂いても構いませんね、それ自体に高周波機能が備え付けられており戦車の装甲であろうが家屋であろうがトーチカであろうがぶった切れます。そのまま両手持ちの剣として使って頂いても構いませんが人斬り鋏の名の通り巨大な鋏としても扱えます、左手首に専用のマニピュレーターがありますので装備して下さい。」

「……………」

「では鋏を思い浮かべて動かしてください……そうです！ この状態ですと切断力が増しますので斬れない物はそう無いでしょう、そしてなんとと言っても握った時に親指周辺にツマミがありますのでそれを押し込むとコジマエネルギーを刃の表面に発生させます、この状態は対IS状態ですのでシールドエネルギーも何も関係ありません、そのままぶった切ってください」

左腕の巨大な刃をまるで肉体の延長上であるかのように滑らかに動かし両腰の鞘へと納めた。

「続いてもう一種の遠距離武器です、射撃武器ではなく射出武器です。ミサイル機構では無くISの偏光射撃に似たようなものです、脚に2箇所ずつと肩に1箇所ずつ、そして両脇腹に3箇所ずつ、計12箇所から射出できるスペツナズナイフの様な物で射程は100メートル、HUDからアイサイトでロックし射出可能です。回避はまず不可能で個別にロックされたナイフがエネルギーを纏って敵を追尾します、ヒット後PICにより戻ってきて射出前の状態へと収まります」

ナイフの射出口を操作しあらゆる方向へと向けた後一本取り出し再度戻した。

「お気に召して頂けたようですね、続いてウイングブレードです、その名の通り刃で出来た翼です、展開はブースター起動時にロックが解除されます、それ以降は任意に展開可能となります、レンジは片側2メートル、切れ味もさることながら凄まじい強度ですので通った後に生存者はいないでしょう、ソニックブームも含めてね。」

最後の装備です、ワイヤーアンカーは両腕の……まあ見て頂ければ分かりますね、前腕のニードルがそうです。基本的には移動ではなく武器と認識していただくのがベストです。移動自体はブーストシステムがACと殆ど同様の物ですので移動に使うことはまず無いでしょう、パワードアーマーですが基本平均筋力値は戦車を振り回す程度なんでもありません、またワイヤー自体も最新のものを使用しておりますのでそれが既に高周波処理を施されたワイヤーブレードとして扱えます、トラップにでも周囲の殲滅にでも好きに使ってください、レンジは両方とも20メートルです、ISを一撃で葬れる物ではありません。



「全員武器の最終チェックを移動しながら済ませておけ、支援型は迫撃榴弾を用意しろ」

「了解」

信一郎がブラッドスライサーを抜き刃で刃を研ぐように打ち鳴らす、皆が銃を構え刃を抜き、巨大な砲を上へと向ける、即席の部隊が、たった100人の部隊が10倍以上の戦力を相手に戦争の時を今か今かと待ちわびる、楯無はその光景を見て本当の死神を思い浮かべた。

「これは戦争でも何でも無い、虐殺だ、用意はいいか？ 全員止まれ。迫撃砲の弾薬が尽きるまで飽和攻撃を続けろ、なくなり次第支援型は任意の場所より狙撃を開始しろ、補給型は一機留まっておけ、戦闘開始、消し飛ばせ！」

刃を振り上げ前へと振る、土や石、木で出来た、家が数多く建つ小さな集落へと榴弾が殺到した。

「もし、もしあの集落が衛星を欺く為のダミーじゃなかったら……どうするの」

「違うんだろう？」

「……ええ」

家が破壊され、地面が吹き飛び、木をなぎ倒す、それでもただの一人も人は出てこない。

「両あわせて40発全員撃ちきりました、狙撃へと移行します、信一郎様、お気をつけて」

「ああ、ポールもな……散開!!」

集落から無数の人影が現れる、戦闘の火蓋が切って落とされた。

重装甲アーマーを纏った兵士が両手のガトリングで片っ端から人を赤い霧へと変えて行く、遠距離からの支援狙撃で人が人の形ではなくなる。

戦闘が開始されて30秒、たった30秒で第一波として出てきた敵兵の殆どがただの肉塊へと変わってしまった。

「ポイントをロックした、G地点の第一波残党を始末する、行くぞ」  
「了解しました、しん……隊長」

あらゆる場所から銃声が悲鳴が断末魔の叫びが木霊する、まるで散歩をしているかのような気楽さで発見した敵兵を殺して行く、屋内に逃げ込んだら家屋ごと吹き飛ばし、発狂して突撃して来た者は到達する前に撃ち殺され、運良く先頭に到達しても信一郎が両手に持つ巨大なマチェットで斬り殺される、楯無が目を背けても目を閉じてもハイパーセンサーが360度認識させる、リアルで、しかしどこか現実感の無い人の死を否が応にも感じさせられる。

今人を切り殺した信一郎はその見えないバイザーの下でどんな表情をしているのだろうか、怒りに震えた表情なのだろうか、人を殺している事を悲観する悲しみの表情なのだろうか、それとも恐怖なのだろうか、それとも……笑っているのだろうか。

「と……がさ……その……」  
「……………」

言葉が出ない、言葉が聞こえない、まるで全ての感情を落としてしまったかのように振り向く気配一つなくただ黙々と歩き、殺す後姿。急にピタリと足を止める、その場で横の壁にマチェットを突き刺し、縦に裂く。

その後ビチャリと音を立て男の横半分が家屋の入り口からはみ出した。

「ッ……!!」

「行くぞ、もう直ぐでポイントだ」

「♪ 流石にスマートだねエ」

4桁対100人、絶望的な数、防衛と侵攻の有利不利、そんな物は関係ない、例え万の軍勢が相手でも億の軍勢が相手でもただの人では数にならない、ISが出てこなければこの絶望的な殺戮は終わることが無い。

「ポイント到達だ、皆殺しにしろ、散開」

楯無と同系のアーマーを纏った人間が家屋を礮破し、火炎放射器を搭載したアーマーがトーチカごと人を焼き殺し、信一郎が視界内の人間にナイフを全て同時に射出し、殺す。

殺される事は無く、殺し、殺し、殺し、殺し、殺し、殺す。

家屋がトーチカが土囊が、一切壁の役目をなす事無く、有象無象の区別なく、破壊され、死ぬ。

悲鳴をあげ、絶叫し、発狂し、死んでいく。声を発する事無く、死んだ事にさえ気付かず息絶える。

「…戦車か、各自撃破しろ、5両だ」

ピクリと顔を上げ一言呟いた、楯無がHUDに表示されたポイントを注視するとデータとしてそれが浮き上がる。

ズームして見るとM1エイブラムズと呼ばれる戦車、ISが開発されるよりも前の主力戦車であり、今では最早古い物とされる戦車、だがそれでも脅威である。

はずの戦車に一機のアーマーが飛び乗り、銃座にいた男の顔面を踏み潰す。

身体を掴み、引きずり出し火炎放射器で中を焼く、主砲の一発どころか50calの一発を撃つ事も無く一機撃破された。

信一郎が姿を消す、直後には最後尾の戦車の向こうに翼のような刃を展開した状態で立っていた。

通ったであろう場所の人が全て立ったまま上半身がズレ、地面へグチャリと落ちる。

両腕のアンカーを戦車の後部に打ち込み戦車が宙に浮き、凄まじい速度で後方、信一郎の方向へと飛んで行った、信一郎が横に移動し、巨大な砲弾を回避、ブースターの光を纏いその場で戦車を振り回し始めた。

周囲の家屋や人を軒並み破壊し、飛び散らせ、上に飛び空中で回転を始めた、最早銃弾ほどの速度となった戦車の中に人は無く、ただの肉塊となっているだろう。

回転の角度を変更し斜めから縦へと角度を変える、そのまま他の戦車にその巨大な砲弾を叩き付けた。

容易くグシャリと潰れ叩き付けられた反動で浮く、それが再度信一郎へと引っ張られいつの間にか左腕に装着していた鋏で両断される。

ただ榴弾一発を前面装甲に撃たただけで木っ端微塵に爆散する、いくら古い戦車とはいえこれほど容易く撃破されるはずなど無い、楯

無は無意識のうちに歯を食い縛っていた、すこしでも力を抜けばガチガチと音を立ててしまいそうになる。

最後に残った1両の戦車の主砲が楯無の視線と合った、咄嗟にISを展開しようとした瞬間主砲が光る、間に合わない。

しかし衝撃はいつまで立っても来ず、ISの展開した感覚も無い、薄っすらと目を開けると緑に光る球体が波紋を打ちながら周囲を覆っていた、恐る恐るアーマーのステータスを見て声も無く驚愕した。

一切のダメージが入っていない、戦車の主砲が直撃したのは確実なはずにも係わらず。

「敵反応ISです、こちらに一機、それとポイントA、オールドキング部隊に一機近付いています、10秒で接敵します」

「固まれ、榴弾装着型はコジマググレネードを入れておけ」

一機のISが可視範囲内へと飛んで来た、そのISは上空で止まり周りを見渡した後フンと鼻で笑ってつまらなそうな楽しそうな声で話し始めた。

「この程度の人数にやられるなんて、男ってホントグズねえ！」

女が乗るISは現状最新クラスのコストを考えず作ったと言われる第二世代最終型とも言われる軍用機、恐怖の名を冠した「クアウフ」未だ試作機ではあるが試作機であるゆえの火力、防御力、機動力に偏った単機決戦型IS、コスト面でラファールやテンペスタに劣るが性能だけを見るなら充分な脅威。

並みの操縦者でも凄まじい強さを得ることの出来るこのISは楯無にとって相手にしたくない第二世代ISでかなり上位の存在だった。

「さあてえ？ この最新型軍用ISクアウフの的になってくれる哀れな貴方達には精々逃げ回ってもらいましょかしら？」

楯無が場合によっては自分が応戦する必要があるかもしれないと覚悟を決め一歩前に出た瞬間信一郎が手でそれを制する。

「まあ流石にISの一機ぐらい控えてるわよね？ 待っててあげるわ、出てきなさい」



数秒両者とも静止していると女が驚いたような顔をした、その後クスクスと笑い始める。

「IS二機に対してただの歩兵部隊だなんてね！ これだから男はダメなのよ！ アツハハ！ 残念だけど他はもう駄目よ、死んでる、だつてもう一人は容赦なんて無いもの!!」

愉しそうにクスクスと笑う女は手に持ったIS用のマシンガンを部隊へと突きつける、典型的な女尊男卑しこうでISに敵う物はありませんと信じて。

「ゴジマグレネード、やれ」

「Feuern!」 「発射!」

号令と共に砲撃とも言える弾速でISへと榴弾が射出される、女は男達の絶望や絶叫、恐怖の声を一目見よう、聞こうとその爆発をワザと受けた、ニヤリと笑みを浮かべた表情が次の瞬間に絶望に染まる。

ISのバリア機能が消され、強制的に絶対防御が発生する状態に陥った、いくら軍用と言えどこの状態ではISのアドバンテージは少ない。

「あ、あ、うそ、そんな」

「掃射、墜とせ」

短い指示の後榴弾が、ミサイルが、ガトリングが、無数の銃弾がISへと殺到、回避も逃走もパワードアーマーに搭載された高性能FC Sがそれを一切許さず一発と外す事無く全弾命中させる。

10秒と立たずエネルギーが枯渇、飛行に回すエネルギーも無く、地面へとゆっくり落ちた。

エネルギーの無いISは露出の高さから鎧にもならず、動く事も無いためただの凄まじいデッドウェイトとなる。

生きている機能は環境から最低限搭乗者の命を守る機能のみ、逃げる事も攻撃する事も叶わなくなった女はISの重さを支える事も出せず地面へと身体を落す。

「勝てない……ISじゃ……勝てない……!!」

仮に敵にした時の恐ろしさ、その爪が、牙がこちらに向いたときの恐ろしさ、何よりも仲間に付いている今でさえ抗えないほどの恐怖。

ISはISでしか倒せない、そう約10年も言われ、信じ続けられ、また信じ続けていた神話が崩壊する。

部隊ではあるが量産可能な通常兵器がISを凌駕する、信じるしかない、だが信じたくない、それはロシア国家代表だからなのか、それとも女性だからなのかは分からない。

地面で手足の重さに耐えれず四つん這いになった女が先頭に立つ信一郎を体を震わせながら見上げる。

専用機であつたなら即収納し逃走も出来ただろう、逃走した所で逃げる切るのは不可能だが。

「あ、や、そんな…な、たす、助けっ…」

対人用ハンドガンを右手に持った信一郎が恐怖を顔に貼り付けた女にそれを突きつける。

「ま、待って!!、いくら何でも無抵抗の人間を殺す事は!」

防御特化のパワードスーツを纏う楯無が銃を握る信一郎の右腕を掴む。

女が顔の見えない楯無へと縋りつくような目を見た、だが女はそれでも考えていた、もう一人が他を皆殺しにすればきつとこちらに来てくれる、そうすれば助かるし目の前の人間を皆殺しにしてくれると。

唐突に信一郎の無線機が通信要請を受けた、ただ無言で許可しオーブンモードで受ける。

『こちらオールドキング、ISを一機仕留めて操縦者を捕獲した、どうする?』

「うそ、うそ、そんな…そんな」

『誰か! 嫌だっ! 嫌! 助けて、助けて!!』

通信機の向こうで女が命乞いをする声が聞こえる、信一郎はそれに対したただ無感情な声で一つ命令した。

「殺せ」

『嫌! いやああ!! 何でも、なんでもします!! だから、死にたくない! なんでもします! 何をしてもいいです! だから命だけは!!』

通信機越しに絶叫として聞こえる命乞いに指一本動かす事無くた

だ聞き続ける。

右腕を楯無に押さえられ、それも振り解こうとする素振り一つ見せず、ただ立っていた。

火薬の破裂音、液体が飛び散る音。

『いぎやあああああああああああああああああああああッ  
!!!』

『チッ、弾を間違えたか』

悲痛な叫び声、舌打ちと小さな呟き、ガチャガチャと弾を込める音。  
『ア、アア、ギ…お、お願いじまず…っ!! だ…ずけでえ…! しに  
だくない…!! いのぢだけはア…! い、ヒッ?!』

お、ねがい、しまっす!! だすけで! いや、い、やあ!! おねが  
いじまず! お、ねがい、しま、す!! おねがッ——』

再度聞こえる火薬の破裂音、何か重く柔らかい物が水溜りに落ちる音、そして聞こえる物は何もない。

『片付いた』

それを聞き届けると信一郎が女の方を向き、一步近付いた、女は声さえ出せずただ首を横に振って涙を流し、楯無に縫りつくような目を向ける。

右腕を掴む楯無を邪魔だと言わんが如く左手で押し退け、また一步女に近付いた、カヒユ、カヒユ、と出せない声を無理やり出そうと息をする。

身体を震わせ失禁し、地面を濡らす、その濡れた地面を踏み、遂にすぐ目の前に立った信一郎は女の顎を左手で掴みハンドガンを口に捻じ込んだ。

女が出そうと必死になった声は漸く出すに至る、ただ望んだ物ではなく。

「ン——ッ!!!」

死の間際の恐怖による叫び声として。

無感情にハンドガンの引き金を引き、乾いた音が周囲に響く、白目を向いた女「だった物」の口から銃を引き抜き腰のホルスターへと収める。

楯無が信一郎の肩を掴み前後へと揺らしながら叫ぶように言葉を発した。

「おかしい、おかしいわ!! こんなの私が知ってるあなたじゃない!! あなたは簪ちゃんを愛してるところどこか抜けた優しい人じゃない!! こんなのあなたじゃないっ!!」

ただ抵抗もせず信一郎のアーマーのバイザーに赤い光が数本走る。何もしない待機状態で発する何の行動も操作も行わない無気力な証拠。

信一郎は楯無の叫びにただ一言だけ言葉を発した。

「そうだな」

「そうだな……? そうだなですって?!」

「今の俺はただの兵士だ……:そういえばお前は『兵士』じゃ無かったな、だがお前は何だ? ここは戦場だ、この戦場でいつまでお前は『更識』『刀奈』でいるつもりなんだ?」

「ッ……!」

「……まあ、いい、壊れた俺よりも……:お前のほうが……:」

楯無を押しつけ、死体を避け前へと進む。

『こちらポイントC、殲滅完了』

『ポイントD、Eと合流、殲滅終了しました』

『狙撃部隊、ざっと見たところ人の姿はありません、抹殺完了です』

『ポイントA、どうやらさっきのISが最後だったみたいだ、終わったぜ』

『ポイントF、殲滅完了、それとご報告があります。どうやら地下施設があるようです、如何いたしますか』

「俺は命令を下したぞ、何も変わらない、我々の身内に手を出したあらゆる敵は叩いて潰せ、全ての障害はただ進み押し潰し粉碎しろ」

『了解しました、流石はリーダー、ポイントを送信します、5分後に落ち合います』

信一郎が淡々と部隊員に指示を出す、指定されたポイントへと移動を開始した。

ポイントに全部隊が集結した、その数100人、作戦開始からただの一人も減っていない、千人も万人も戦車の十両二十両、ISの一機や二機でさえもその数を一つとして減らす事は叶わなかった。

「スキャン完了、IS反応が1、道は一本になっていて長い廊下に部屋が幾つも設けられています、最深部までこれと言った障害もありません、人も少ない、数百人程度です」

「俺が先頭に立つ、最後尾の人間は部屋を一つ一つ確認して人がいれば殺せ、その次の最後尾の人間が次の部屋の確認だ、行くぞ」

信一郎が武器を構える事も無く歩き、応戦の為顔を出した人間の額にナイフが突き刺さり、絶命する。

廊下が残り数百メートルとなった時黒白のツートンカラーをしたISが部屋の一つから飛び出してきた。

「ここから先は通せないわ、何があっても。例え貴方達と刺し違えてでも通す訳には行かない、死になさいっ!!」

「俺がやる」

両手に持つマシンガンを部隊へと連射する、無数の銃弾は緑の球体によつて防がれた。

翼を1メートルずつ展開し暴力的な加速を伴ってISへと突撃する。

消えるように加速したISが紙一重で突撃を回避、しかし所持していたマシンガンが翼により切り裂かれハンドマニピュレーターから弾き飛ばされ、IS自体もアーマーの加速に伴うソニックブームでぐらりと姿勢を崩した。

「このー」

女が悪態を吐くのと同時、脚部にアンカーが直撃、刺さらずとも特殊な磁場で捕まえられるように固定される。

天井や床に叩きつけられながら信一郎の下へと引つ張られて行く、女が瞬時にショットガンを展開し身体をそこら中に叩きつけられながらショットガンで信一郎を撃つ、しかし攻撃は一切通らない。

左腕でISを引きながら右手で腰のマチェットを引き抜く、突き刺さんと刺突を繰り返すも女がブーストでその刃を掠らせ回避、アン

カーが外れ遙か後方へと投げ出された。

床を破壊し、抉りながら動きを止め視線を上げると既に信一郎が真横に移動しその腕で女の首を掴んでいた。

そのまま壁に叩きつけ巨大なクレーターを発生させる、衝撃は相当なものだろう、信一郎が右手のマチエツトで斬りかかろうと腕を振り上げると女がその腕をマニピュレーターで掴み、止める。

「負ける…わけには…ッ!! いかないのよ…:…ッ!」

アーマーの背部ブースターが青白い光を纏い、女を壁に押し付けたまま加速を始める。

壁を抉りながら凄まじい速度で移動する。だがそれでも女は掴む手を離さない、女には傷一つ無いが砂や埃だらけでISは傷だらけになっている。

一定距離進むと女をその場で回転するように振り回し投げ飛ばした。

壁や天井、床へ無茶苦茶にバウンドし、一面を砂煙だらけにする、信一郎が左手でマチエツトを引き抜くとISがグレネードを持ったまま煙を突き破ってミサイルのように突撃してくる。

左手に持ったマチエツトを右へ薙ぎISを斬り、真つ二つにした。

かのように見えたがISの姿がそのまま煙のように掻き消え、その後ろから二本のブレードを振り上げたISが目の前へと躍り出た。

「アコイよ! 死ねえええええッ!!」

女が両腕を振り下ろすと右へと左腕を振り下ろしていた信一郎が何故か左へと手を振り切っている、その左腕には緑の光を灯した巨大なマチエツトが二本所持されていた。

そして女の両肘の先には

何もなかった。

ブレードを持ったまま女の両腕は宙に浮いていた、シールドごと斬り飛ばされたのだ。

「が、あああああああッ!!! まだ!! まあだあああああああ

ああ!!!」

女は叫びながら右脚を引き、ブーストと共に信一郎へと叩きつけた、脚部装甲はそれにより碎け散る、ISの四肢はその構造上格闘戦には向かない、腕部は武器を掴む為のマニピュレータでしか無く、脚部は加速用ブースターの役割をおっている為だ、だがそれでもたかが一度蹴りを放っただけで壊れるような作りではない、にも拘らず脚部装甲が碎けるほどの蹴りを信一郎に叩きつけた。

それによりついに信一郎を覆っていた緑の膜が粒子となつて霧散する。

しかし装甲が碎けるほどの蹴りを放った脚も無事なはずは無い、その反動で右脚は千切れ、後方へと破片や血を撒き散らし飛んだ。

だがそれでも女の瞳に宿る意思は揺らがない。

「約束したのよ……ッ！ 外の世界を見せるって……!! だから、負けるわけには行かないのよおおおおおおおッ!!!」

今だ宙に浮くブレードの一本に喰らい付き、そのまま刃を信一郎へと突き立てた。

しかし傷一つつけることさえ叶わず装甲に弾かれ女の口を離れて地面へとブレードが落ち、ガランガランと音を立てる。

左腕のマチエットを鋏のように女の首を挟むが刃は首に触れていない、この状態であつてもまだシールドは生きていた。

「あの子の……為にも……、あの子……だけは……」

やがて刃に緑の光が走り、紙を切るかのようにその刃が閉じる。

ゴトリ、と首が落ちる、命を失った目がまだ強い意志を宿したまま信一郎を見上げていた。

「……クリア、行くぞ」

突き当りの部屋、それを残し全ての部屋は今全部隊員が殲滅している、楯無はシャミアと行動させ、遂に最後となった。

研究所の一室、生体反応のあるこの部屋のドアを蹴破り、中へと歩を進めた。

「アアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

絶叫と共に銃声が響き、銃弾が壁や天井、床へと着弾し、PAにより無力化される。

跳ぶ様に銃声のした方向へ跳び左手の貫手で銃を撃った人間を貫く。

「ガヒュッ!! —— ……? ……?」

人が胸を貫く腕を見て、信一郎を見た。パクパクと息さえ出ない口を動かし驚愕の表情を浮かべ、信一郎をその目で見ながら「心臓を貫かれた少女が」絶命した。

イクバール、アルゼブラ関係でアラビラ語を齧る程度に学んだ信一郎はその声にならない言葉を理解してしまった。

「どうして?」と言ったのを。

ずるり、と腕を引き抜き子供が床に叩きつけられる、その顔はまだ信じられないと言った表情をしていた。

『生体反応全て消失、信一郎様、初陣お疲れ様でした。我々の勝利です』

通信機から声が響き、通信が切断された。

信一郎は頭部装甲を外し拳をギリと握った。

「ッ…!!! どうして…? 「どうして」だと?! ふぎけるな!! 貴様等がやったことだろうが!!!」

何故何も知らないような表情をする!! 何故「どうして」だと言う!! ふぎけるな、ふぎけるな!! ふぎけるなッ!!!」

吐き散らすように泣き散らすように、信一郎が叫ぶ、その声は誰にも聞こえる事無く消えていった。



## 占いに一喜一憂したり恋愛話に現を抜かすハートフルなお話

変わらない日々、変わらない日常、ただ毎日が当たり前のように消費され、当たり前前のように一日を終えて行く。

時代は変わった、発展途上国で毎日誰かが餓死するような事は無くなった、かといって無力に過ごせるわけではない。

しかしそれでも世界は変わった、少なくとも明日日の光を拝めるかどうか分からない、等と言う世界はとうに終わりを告げていた。

「おはよー」

「おっはー、今日の占い見た？」

「見た見た、おとめ座一番だよね、私大勝利」

「私なんて下から数えた方が早いもん、さいあくー」

「かに座で一番ケツだった私に何か一言」

「朝からおつかれー」

「おっつー」

いつの時代になっても少女は占いなどが好きで、毎日その手の話題には事欠かない。

そんな平和な日常、多くの生徒はいつもと変わらない日常を楽しんで過ごす。

「そう言えばサユ学園祭で一緒にいた男の人誰？」

「あ、アレはお兄ちゃんよ…」

「にしてはやけに仲良さげだったし第一年上にも見えなかつたけど？」

「じゃあ弟！」

「はい一名様尋問入りまーす」

「いやあああああああ…」

色恋沙汰に現を抜かし、それをネタにして話したり行動したり、毎日一生懸命に楽しんで生きる。

「あ、籐ヶ崎君おはよー」

「……ああ」

「サユに彼氏（仮）いたんだってー、今尋問中ー、知ってた？」

「いや………そうか………」

「…調子悪い？」

「いや、大丈夫だ………少し、寝不足なだけだ」

「あ、そーなんだ。うはははーサユー！ 早いところ吐いた方が身のためじゃぞー！」

女だらけの空間に一人入ってきた男、籐ヶ崎信一郎が呆けたような返答をし、椅子に倒れこむように座った。

そのまま机に突っ伏して眠るかのように体を倒す。

「おはよーっす」

「織斑君おはよー、サユに彼氏（仮）いたんだってー」

「へえー、お幸せに？」

「待ってフレイ！ もしかしてそれ全員に言うつもり?!」

「もっちー」

「鬼！ 悪魔!!」

「ふはは、何とでも言うが良い！ あ、籐ヶ崎君寝不足だってー、彼を起こさないでやってくれ、死ぬほど疲れてる」

「先週の金曜ロードショーコマンドーだったもんなー」

「うはは、面白いよねえ！」

連休前に見たテレビのネタで笑う。

「おはようございますわ」

「オルコットさんおはよー、あのさあ」

「もおおおおお!! いいじゃないもう！ 許してよおおおお!!」

「あら、何のお話です？」

「何で今日に限って興味持つのよおおお!!」

「おはよう」

「しなののさんおっはー」

「のが一つ多いぞ?!」

「しなのさん」

「今度は少ない！」

「ののの」

「しはどこに行つたんだ?!」

「あはは、冗談だつてしののめさん!」

「東雲つてもはや違う人おとおお!!」

「はあくホント篠ノ之さん弄ると反応可愛いなあ」

「イチカ、おはよう!」

「いい朝だな嫁よ!」

「ああシャルとラウラ、おはよう、今日もいい天気だな」

「デュノアさん、ボーデヴィツヒさんおっはー、ねえ知つてアバーツ

!!」

「アイエエエ?!」

「あれ? シン元氣ないね、珍しい」

「寝不足らしいよー」

「……右手…震えて……?」

「ラウラ、そつとして上げなよ」

「む? うむ、そうか」

そうしている内に一人のスーツを着た女性が教室へと入ってきた、それを合図に全員が静かになる、机に突つ伏した信一郎へと髪を後ろに結えた少女(その胸は豊満だった)篠ノ之箒が「起きろ籐ヶ崎」と言つて信一郎を起こす。

「おはよう、一夏♡、あと諸君」

「おはようございます、本当ブレないですね織斑先生」

「そうだろう? では点呼を取るぞ、相川」

「はい!」

「籐ヶ崎……籐ヶ崎!」

「…え、あ……はい」

「体調不良か?」

「…寝不足で」

「体調管理はしっかりとっておけ」

「了解」

「よし、全員いるな、では山田先生」

「はい、本日の連絡事項ですがもうすぐキャノンボールファストが行われます、本日のホームルームでその関係のお話をしますので覚えておいて下さいね、あと5連休はしっかりと休みましたか？ では私からはこれだけです」

「以上だ、では授業の準備をしておけよ？」

それと同時に教室が騒がしくなる、教科書を机から出し、朝の続きだと言わんばかりに会話を始める。

「うははは、尋問再開であるー！」

「そこまでよ！ サユは私が守る！ 親友だもんね！」

「ナギー！」

「とおう」

「うひゃいん！ いひいつ！ も、もうらめえ…ごめんなひゃい、ゆるひて…！」

「はやっ！ 即墮ち?! 脇腹弱すぎでしょー！」

「次は…あなたよ」

「ど、どうして…！ どうして私がこんな目に…?!」

信一郎の右腕がガタガタと震え始める、それに気付いた副担任の山田真耶は心配そうに信一郎を見る。

「籐ヶ崎君？ どうしました？」

「ツ!! ぐ、が…!! ア………」

唐突に信一郎が口元を抑え机を力づくで押しつけグラグラと覚束無い足元で教室の扉へと走る、身体をそこら中にぶつけ、真っ青な顔をして。

「籐ヶ崎?!」

「お、織斑先生！ 私が行きます！」

「お願いします、山田先生！」

教室の自動ドアである筈の扉を左手でガリガリと削り、冷静さを完全に失っている。何とか教室の外へ出た信一郎を真耶が追いかけた。

「ツ…!! ツ…!!」

グラグラと廊下を走っているのか、歩いているのか分からないほどの速度で移動し、突然左腕が外れ、落ちた。



「…織斑先生、籐ヶ崎の症状で心当たりがあります、場合によっては時を争うのでやむを得ず授業を抜けました」

「恐らく、栄養失調だろう、心配は要らない、休養を取れば」

「いえ、嘔吐の内容は別に震え、反応の遅れ、ないし上の空がありました、その上寝不足も本当にあつたのでしよう」

「ボーデヴィツヒさん、一体それは…」

「PTSD、心的外傷後ストレス障害です、軍で何人も見ました、それを引き摺って自殺した兵もいます」

「自殺…!」

「ASDであればいいのですが、本当にPTSDだと自殺の可能性は高くなります、私以外で気付いた人間は恐らく居ません、全員には黙っておいた方がよろしいかと」

「わかった、ボーデヴィツヒ、すまないな…籐ヶ崎の保護者とも話し合いをしないとな…だが何が原因でそんな事に…」

「4組の更識は今、入院中だと記憶しています、その関係かもしれません」

「本当にお前はよく頭が回るなラウラ…ありがとう」

千冬に敬礼で返したラウラが教室へと戻る、それを見届けた二人はタブレットを起動し、保健室の担当教員兼医師へとメールを飛ばした。

「PTSDの治療…まさかそんな物を学園内でする事になるとは……どうして、こんな事に…!」

「織斑先生、監視の無い特殊応接室で話し合いました」

「ああ、そうだな」

そう言っつて移動を開始した瞬間緊急回線で通信が飛んでくる、千冬が急いでそれを繋ぐと映った画面にはたった先程メールを送った教員が血だらけになつて映っていた。

『織斑先生!! 助けてください!! 籐ヶ崎君が、籐ヶ崎君が!!』

「今行きます!! 一体何が?!」

『籐ヶ崎君!! お願い、止めて!! 腕に、自分の腕にナイフを何度も突き刺しているんです!! お願いします!! 早く!! 力が強すぎて私

「じゃ!!」

「真耶! 行くぞ!!」

「あ、ひ…」

「真耶!!」

「ひ! ひゃい!!」

通信を切断もせず二人が走る、女性の叫び声が、肉に刃を突き刺す音が、液体が飛び散る音が、ただ二人に聞こえていた、真耶は肉の音が、血の音が聞こえる度表情を歪め泣きそうな顔になる。本来心優しい彼女には想像も出来ない、したくない音だった。

元代表と元代表候補、現役を退いたとはいえ教員である二人は凄まじい速度で廊下を駆け、階段を飛び降りるような速度で降りて行く。

「邪魔だ!! 退けろ!!」

絶叫が聞こえ、数人が野次馬をしている保健室前の野次馬に怒号を掛け散らせる。扉が開いた瞬間に赤い液体が空を飛ぶのが見え、奥歯をギチリと噛んだ。

「籐ヶ崎ツ!!」

「籐ヶ崎君!!」

赤く染まったベッドのカーテンを開けると、虚ろな目でブツブツと何かを呟きながら自分の腕にナイフを突き刺している信一郎が居た、教員が信一郎のナイフを持つ左腕を押しさえ込もうとするがISでもない人の力で義手の動きを止めることは出来なかった。

右腕は既に治療が不可能なほどにズタズタになって前腕に至っては肉が完全にこそげ落ち骨だけで繋がっている場所さえある、その骨も尺骨は既に断ち切られ、橈骨も傷だらけだ。

「あ、あ、う…ひっ!」

真耶が一步脚を引くと「ぐちゃり」と音を立て何かを踏んだ音がする、それを見ると血で赤く、肉で紅く、脂で白く、それが混ざってピンク色になった肉塊が落ちていた。

「クッ…」

千冬は保健室に置いてあった掃除用具の箒を手に取り瞬時に構え、振り下ろして左手のナイフを弾き飛ばした。





ブルブルと右手を震わせ、ナイフを取りこぼし両手で頭を抑え絶叫した。

屋外用の大きい扉が力一杯開けられ、教員用ラファールを装着した真耶が飛び込んでくる。

「生徒の命に係わる緊急事態のためISを使用しました、IS用固定具展開します!!」

機械式の固定装置が光の粒子と共に展開される、それをその場に置いた真耶がラファールのマニピュレーターで信一郎を押さえ込む。

「私が抑えます!! 今の内に!!」

「すまん!!」

信一郎の左腕と両足に機械を巻きつけ起動する、駆動音と共にベッドへと完全に固定され、動きが鈍った。

それを数度、左腕に3箇所、片足に5箇所ずつ使用し、ベッドに完全に固定した。

残る右腕をベルトで二箇所固定し、身体もベルトで押さえつけ動けないようにする。

「麻酔を!」

「止める!! 止めるオオオオオオオ!!! 眠りたくない!!! 目を閉じたくない!!! お願いだ!! お願いします!!! 止める、止めてくれ!!! 嫌だ!! 嫌だあああああッ!!!」

「籐ヶ崎君、ごめんなさい、ごめんなさい……」

固定された右腕に麻酔を打ち込む、首を振り回し右手を閉じ、開き、必死に抵抗する、やがて注射器を外され、麻酔を一本打ち込まれた状態で睡魔から逃れるように叫ぶ。

「IBIS!! 聞こえているんだろう?! 俺を殺せ!! レーザーで撃ち抜いてくれ!!! 殺せ!! 殺してくれ!!! IBIS!! IBIS!! IBIS!! 殺せ!! 殺せええええええ!!! 嫌だ、来るな!!! 誰か!! 誰か俺を殺してくれ……! 姉さん、お願いだ……殺してくれ……! 姉さん、殺してくれ……殺して、ころ……して……く……」

呻くように、魘されるように声が小さくなり、最後に声を失うと同時に、遂に身体が動かなくなった。

「う、ああ、ああああああああ!!」

ラファールを纏った真耶がガタガタと震え、その場に崩れ落ち、泣き叫ぶ、力付くで身体を抑えていたせいかなラファールの装甲とその顔には夥しい量の返り血がベットリと付着していた。

「誰が……誰が籐ヶ崎を、私の生徒をこんな目に遭わせたんだ!!」

千冬は返り血で鮮血に染まった手で拳を作り壁に叩きつけた。

拳と奥歯がギリと音を出す。

守るべきはずの生徒がその手から零れ落ち、壊れた。

「こんな、身体が再生するなんて……カラード、なんて……ッ。とりあえず、血液の補充と点滴をしましょう」

『その……必要はございません……失血する度常時血液は補給されていますし栄養も既に必要な身体ではありません』

千冬が先程まで持ち、今は床を転がっているタブレットの画面に女性が見え言葉を発した。

「この声、カラードの……」

『はい、カラードの軍用人工衛星及びカラードの電子空間管理AIのIBISと申します、織斑千冬様、山田真耶様、リーン・ウエルコニア様』

「IBIS……さつき籐ヶ崎が……」

『そうです……私には……信一郎様を殺す事は出来ません、いえ……信一郎様はそもそも死ぬ事が出来ません』

「ッ……! 籐ヶ崎を、ここまで追い込んだのは一体……」

『シンを……信一郎様を壊した犯人は既にこの世には居ません』

「それは……!」

『信一郎様本人が殺害いたしました、いえ、殺害したからこそ、心が壊れてしまったのでしょうか?』

「殺害したと……?」

『どうか、どうか信一郎様を責めないで下さい、お願い致します』

「……籐ヶ崎君が、あんなに明るかった籐ヶ崎君がどうして……どうしてこんなに苦しんでいたんですか?! 教えて下さい!」

ラファールを解除した真耶がボロボロと涙を零し継りつくように

懇願する。

『社長より、千冬様、真耶様にはお話してもいいと言われております。対監視特殊EMPを信一郎様の義手より発生させます。リン様、申し訳ありませんがどうかご退室を』

「……分かりました」

保健教員が部屋を出て扉を閉める、その後「何をしているの！早く戻りなさい!!」と怒号をかけ、野次馬の生徒を散らした。

『…まずは簪様が入院中である正確な理由は千冬様はご存知ですね、真耶様にも知って頂きます。学園祭時ある二つのテロリストが学園を襲いました、片方の勢力は大した被害も無かった為我々カロードも放置しております』

「二つのテロリスト…?! そんな、このIS学園に、いくら学園祭時だといっても…!!」

まだ震えが収まらない真耶が自分の手を握り締め尋ねる。

『片方は不可能ではありません、それ程の力を持っていました、ですが問題の片方がなぜ入れたのか、私でも疑問でなりません。その問題の勢力が簪様を襲ったのです、それにより簪様は負傷し入院、信一郎様がこれに対し勢力を壊滅させる為部隊を運用しました』

「そんなことが…」

『結果、IS3機を含め殲滅を持って任務終了となりました。ですが問題は信一郎様が最後に殺害した3機目のISパイロットと最奥に居た少女です』

「少女…?」

『双方とも武器を使用し攻撃してきましたので殺害いたしました、ですが後ほどその二人はテロリストではなく監禁されていた実験体である事が施設のデータで残っていたのです。信一郎様が本当に壊れたのはその時からです』

「ッ…!!」

「つまり籐ヶ崎は…知らなかったとはいえ、テロリストではない人間を殺害してしまい、それがトラウマになっているのか……」

『その通りです。……カロードに居るのはトラウマを刺激し続ける

事になります、治療はIS学園でして欲しい、との事です。ご迷惑をお掛けいたしますが、どうか……信一郎様を、私の弟を……お願いします……』

「分かりました、我々の大事な生徒です。責任を持って治療してみせます」

『ありがとうございます。千冬様、我々はIS学園に対し支援を惜しみません、どうか、どうか……シンを……!』

そう残してタブレットの画面が消える、千冬はそれを拾い上げ真耶の方を向いた。

自らの身体を抱きしめガタガタと震えながらもその目は何としても生徒を救ってみせると意思を持ち強い光を宿していた。

「とりあえずは、着替えるべきか、我々も、籐ヶ崎も。その後は念の為義手義足を固定したまま寮の部屋で休ませておこう、自傷行為を行わないように監視カメラで随時監視する。充分に睡眠をとったらトラウマで多少錯乱するだろうが、少しは落ち着いてくれるはずだ、それからゆっくり治療しよう、いいですね?」

「は、はい……分かりました、クラスの生徒には籐ヶ崎君は治療の為しばらく休むと言っておきます」

外から太陽の光が射す。今の俺にはありがたい、暗いとあの光景が見えてしまう、今日も一日眠る事は出来なかった、いや……目を閉じる事が出来なかった、あの二人が、強い意志を持った目と驚愕に染まった目が俺を見る、それが途轍もなく怖かった。

時計を見るとそろそろ教室に行く時間だ、食事は取らない、最初は無理をしてでも食うべきだと思っただが入れた端から吐いてしまう。

もう空腹も無い、腹の虫さえ鳴りやしない。

「顔を、洗わなければ」

ゆっくりと立ち上がり洗面台の鏡の前に立つ、元々の顔のお陰で多少目の下にクマが出来ようと変わらない。

歯ブラシにチューブを出し口に突っ込んだ、何も考えない、ただ体

が覚えている通りに手を動かす、能力も使えない、考える必要がある、考えるとどうしてもアレが浮かんでしまう。

幸運にも今は一段楽したのか俺が担当するものじゃないのか仕事の書類が来ない、考える必要がないというのはありがたい。

寝不足の為かどうも足元がフラフラする、歩く為の思考もやや覚束無い、だがそれでもたかが睡眠不足や栄養失調程度で死ぬような事は無い、幸運か不運かは分からないが。

教室から騒がしい声が聞こえる、何の話をしているのかは分からないが元気な事で何よりだ。

「あ、籐ヶ崎君おはよー」

「……ああ」

「サユに彼氏（仮）いたんだってー、今尋問中ー、知ってた？」

「いや………そうか………」

「……調子悪い？」

「いや、大丈夫だ………少し、寝不足なだけだ」

「あ、そーなんだ。うはははーサユー！ 早いところ吐いた方が身のためじゃぞー！」

椅子に座って机に頭を落とす、目を瞑る事はしない。ただ何も考えない、それが一番楽だ。

「起きろ籐ヶ崎」

「……ああ、すまん」

モッピーが俺に声を掛ける、顔を上げればどうやらちっふーと真耶先生が来たようだった。

「が……さき………籐ヶ崎！」

どうやら呼ばれていたようだ。

「……え、あ………はい」

「体調不良か？」

「…寝不足で」

「体調管理はしっかりとっておけ」

「了解」

叩かれる事は無くなった、無駄だと思われているのか、マシンになったのか。

「よ…、全い…る…、ではや…田…んせ…」

「はい、本日の連絡事項で…うすぐキャノン…ストが行われ…本日の…ームでその関…」

「以上だ、では授業…備をして…?」

「そこ…よ! …ユは…たしが守る!」

『ここから先は通せないわ、何があっても。例え貴方達と刺し違えてでも通す訳には行かない、死になさいっ!!』

『約束したのよ…ッ! 外の世界を見せるって…!!』

『あの子の…為にも…、あの子…だけは…』

『ど、…して…! どうして私…んな目に…?!』

『どうして…?』

『データベースを調べた結果最後のIS操縦者、どうやらテロリストではなく監禁されていた実験の被験者だったようです。あとは最奥に居た10歳前後の少女もそうだと言う事です、まあ両方とも攻撃してきたのでしょうか。でしたら殺しても問題は無かったですでしょう、敵ですから』

『信一郎様? どういたしました? 大丈夫ですか、信一郎様? どうしました?』

目の前に女が現れる、俺を射殺するような目で見ながらその首が落ちた、まだその目は俺を見ている。

目を逸らせば黒い髪の女の子が俺を見る、その胸には俺の腕の太さほどの穴が空いていた。

『どうし…?』

『どうして、殺したの?』

「ッ!! ぐ、が…!! ア…!!」

止めろ、止めろ、俺を見るな、話しかけるな、お前が武器を向けてこなければ、降伏していれば殺さずに済んだんだ、お前達が俺を刺激しなければ、止めろ、止めろ、止めろ、止めろ、止めろ!!

「ッ…!! ツ…!!」

これは? 俺は、何だ、地面?

いつの間に、俺は倒れてたんだ?

立ち上がろうと前を見たら二人が 俺を

見下ろして

いる

『この子だけは守りたかったのに』

『どうして私を殺したの?』

「ッ!! う、あ、うぶつ、ゲホツ、オ、エ、エ!! ガハツ、ゲボツ、ゴホツ!」

背中を強く押されながら撫でられる、周りにあの二人はいない、真耶先生が俺に触れていた。

「大丈夫、大丈夫です、落ち着いて…!」

「ゼエ…ゼエ…ツグ、う…オエエエ! ガフ、ヒュー、ヒュー」

出るものなんて何も無いのに、それでも身体は居の中身を出そうとする、歪む視界にはやや黄色い透明の胃液が排水溝に吸い込まれているのが見えた。

「もう、大丈夫です…ゼエ…すいません、迷惑を…かけました」

右腕で真耶先生をゆつくりと押し離そうとしたらその腕を掴んで身体を支えられる。

「心配し…で下…いい、な…たつて私は…ん生な…すから、も…喋っても大丈夫…で…か?」

「ゼエ、はい…一応は…ゼエ」

「いっ…い…ど…けの間食事…取って…いんですか…?」

「4日…ほど、でしょうか…」

「4日…?! わか…した、保健し…行…ましょう、織…ら先生…は

私から言っ……きます」

「ありがとうございます……」

視界の端に腕が落ちてるのが見えた、どうやらいつの間にか外れていたみたいだ、右手で拾い上げて肩に接続、身体を支えられながらゆっくりと歩く。

保健室に到着するとそのままベッドに入れられた、寝転んでいたら目を閉じてしまいそうになる、身体を起こして真耶先生と保険医の教員を視界に納める。

「睡眠……くと栄……う……調かも……ません、も……四日……く事を取っ……聞き……た、籐ヶさ……君を……し……」

「わかり……た、……い……薬と……ん滴で……は様子を見……こ……します」

「籐ヶ崎君、無理は……いで下……いね？」

真耶先生が俺に何かを言っ去って行く、意識が少し朦朧としていて何を言っているのかは余り分からなかった。

「籐……崎君、と……え……ず……んや……なん……ど、こ……を飲んで……るか……ら？」

何か薬を差し出される、生憎食道に何も通す事が出来ないので手で制して首を横に振った。

「わか……わ、じゃ……よ……と待……ね」

何かを探しているのだろう、音が聞こえる。

「取り……ず少……眠ら……だ……ら、強い……な……うほ……だけど、注射す……わね」

右腕に注射を射される、ちよつとした痛みで少し、意識が覚醒した。

「これ……は……？」

「麻酔薬よ、少し眠ってもらわ」

麻酔薬……？ 眠る？

一体何を言っているのだろう、俺は眠る必要など無いというのに、眠りたくなどないというのに。

駄目だ、意識が、重い……駄目だ、起きていないと……







く く く く く く く く く く く く く く く

―更識 簪―

「簪ちゃん、籐ヶ崎君には二度と近付かないで」

やっと退院出来る日だと病室の荷物を纏めていたらお姉ちゃんが病室に入ってきていきなりこんなことを言った。

「な……………で……………」

信じられなかった、あの日お姉ちゃんは交際を許してくれた筈だったのに。

私が、襲撃されたのが原因なの？

「彼はおかしいわ、狂ってる、簪ちゃん、これは貴女の為なの」

「ッ!!」

乾いた音と痺れる右手、私はお姉ちゃんの頬を叩いていた。

避けようと思えば避けれたはず、それどころか私を投げ飛ばす事だって簡単に出来たはずなのに。

「簪ちゃんが怒るのはよく分かるわ、でも、お願い……………お姉ちゃんの言う事分かって」

「分かんない……………わかんないよっ!」

「簪ちゃん!」

「うるさいっ!!」

信一郎の優しさを知らないくせに狂ってるだなんていくらお姉ちゃんでも許せない…!!

荷物を投げ捨ててお姉ちゃんから逃げる、どうせ、たいした物は入ってない。

病院から逃げるようにタクシーに乗り込んだ、お金はポケットに入ってる。

「IS学園直通モノレール乗り場まで……………お願いします」

「畏まりました」

携帯を開くとメールが幾つも入っていた、病院では使えなかったから十日で凄い数のメールが届いている。

下から見ると殆どが入院した事に対する大丈夫かどうかと言うメールばかり、クラスメイト全員や一年の専用機持ちからメールが届いている。

信一郎からのメールは無い、信一郎は私の容態を知っているからだろう、退院したとメールを送ってみるのもいいかもしれない。

全部見て行くと幾つか日本政府からのメールもあった、これも事務的なものだけと容態はどうかと言うものだった。

滅多にメールしない本音もメールしているらしい、内容はまだ見えないけど本音のメールだからきつと間延びしているんだろう。

「お客さん、じきに到着です」

「あ……はい……ありがとうございます」

携帯電話をポケットに仕舞う、本音のメールはまだ見ていないけどどうせもう直ぐ学園だ、その時に私は大丈夫だと言ってあげればいい。

タクシーの代金を支払って駅へと入る、足も腕も怪我をしていたけど、もう歩いても痛くない、包帯も殆ど取れてあとは絆創膏みたいな高性能ガーゼが腕や頬に張られているだけ。

丁度出発する時間だったからモノレールの警備ゲートをくぐってモノレールに乗る。

信一郎は、元気かな。

丁度放課後だったみたいで4組に行くと言にもみくちやにされた、フランは今会社の用事でカロードに戻っているらしい、でも他の皆は心配してくれてたみたい、号泣してる子もいた。

皆には用事があると言って教室を後にする、行くのは勿論1組。

「あ………」

「あ、更識さん！ 退院したんだね、おめでとう！」

「デュノアさん、えつと……信一郎は……？」

教室を見渡してみても信一郎はいない、もしかして何処かにいったのかな、デユノアさんに聞いてみる。

「え、知らないの？ あ、えっと……その……」

「退院したんだな、おめでどう。シンならこの三日間休んでるぞ、月曜日に調子が悪かったみたいで早退してそれつきりだ、なんか面会も出来ねえ、インフルエンザかな？」

「あの籐ヶ崎さんがインフルエンザ程度のウイルスにやられるものですか、きつとGウイルスとかですわよ」

「いや、ウイルスではないのかも知れん、何せ籐ヶ崎だ人なら一瞬で死に至る病原菌でも調子を崩す程度で済みそうだぞ、ボーデヴィツヒはどう思う」

「私か？ ……風邪、ではないか」

信一郎は休んでいるらしい、原因は分からないそうだけど。

「かんちゃん……」

「本音……？ 久しぶり、元気だった……？」

「こつちに来て、真剣なお話があるの」

本音が間延びしてない真剣な声で私を呼んで引っ張って行く、嫌な予感がする。

頭によぎるのはお姉ちゃんという言葉、人気の無い所に連れて行かれて本音が振り返った。

「あのね、かんちゃん」

「本音も……お姉ちゃんと同じ事を言うの……？」

「かいちよーがなんて言ったのかは知らないけど、私が言いたいことはシンにーが休んでる理由」

「知ってるの……？」

「生徒会権限で知ることが出来たの、お姉ちゃんに口止めされてたけど、それでも私はかんちゃんは知っておくべきだと思うし、知ってて欲しい、かんちゃんは私の大事な親友だし、私はシンにーが大好きだから」

「教えて……本音……」

「後悔するかもしれないよ？」

「それでも……構わない」

本音が真剣な眼差しでゆっくりと口を開いた。

「シンにーはPTSDで心が壊れて、休んで、るの……監視カメラの、映像を……お姉ちゃんと見たけど、あんなの……ひど、すぎるよ……ッ！」  
本音がポロポロと涙を零している、ゆったりしていても本音はとても強い子で、多少の事で泣いたりなんて絶対にしない筈なのに、それでも泣いていた。

PTSD、兵士が患う病気で、日常生活を送ることが不可能なほど重度の物もある。

身体が震える、嫌な汗が全身から噴き出してきた、聞きたいけど、聞きたくない。

「かいちよー、は……知らない、の……お姉ちゃんも、私も……声が、出なかった……」

「しん……いちろう……は……？」

「シンにーの、部屋で……ずっと眠ってるって、聞いている……」

本音が私の手を取って薄いカードのようなものを渡してきた、それは見覚えのある形、カードキー、数字は1026、信一郎の部屋のカードキーだった。

「きつと、きつとシンにーを癒せるのは、かんちゃんだから、生徒会室から取って来たの……お願い、かんちゃん、シンにーを、助けてあげて……!!」

「本音……」

「行つてー!」

本音に背中を押された、振り向くと両手で顔を覆って廊下に座り、泣いていた、本音は私を信じて、頼ってくれたんだ、私は怖い、信一郎が壊れたなんて信じたくないほど怖い。

でも、行かなきゃ。

足が震える、けど前に、進まない、駄目なんだから。

ようやく1026号室のドアの前に到着した、カードキーを震える

手で通す、空気の抜けるような音がして扉が開いた。

「ッ!!」

中に入って見た信一郎はベッドの上で義手義足がIS用固定具で固定され右腕はベルトで押さえつけられ身体が動かないようにされていた、固定具とベルトは赤黒くなっていてかなりの量の血で染まったのが一瞬で分かった。

顔は少しやつれて白髪も混じってしまっている、たった十日で私の知る信一郎と見た目が変わっていた。

「今、拘束を解いてあげるから……!」

義手義足の固定具をボタン操作して一つ一つ外して行く、理由は分からないけど身体と繋がっていないみたいで固定具を外すとベッドから義手義足が転がり落ちた。

右腕のベルトを外して最後に体のベルトも全て外した。

「んん……」

信一郎がほんの少し動く、私は無意識のうちに信一郎の右手を取って必死で握っていた。

ゆっくりと信一郎が目を開ける、そしてほんの少し私の顔を見ておじいちゃんみたいにクシャリと顔を歪めて笑顔になった。

今まで見た事のない笑顔だった。

「おお」

「信一ろ……」

「こらエライ別嬪な嬢ちゃんや、遂にワシも天使のお迎えがきたんかいな」

「……え……?」

「更識簪! 一体どこでカードキーを……ッ!! 籐ヶ崎、気がついたのか!」

「織斑……先生……? 信一郎が……」

「なんや、今度も偉い別嬪なお姉ちゃんやないか、こりやもう天国やったか、ガハハ」

まるで、私を、知らないかのように、私の知らない、信一郎の喋り方で、話しかけてきた。

「籾ヶ崎…？ どうした…一体、何を言ってる」

「とーがさきて誰や？ ワシそんなけつたいな名前初めて…うん？

何やエライ昔に聞いた覚えがあるで？」

嘘、こんなの、だって。

「嬢ちゃん、泣いたらアカン、可愛えんが台無しや、哀しい事があつたんやったら爺ちゃんに言うてみい、話聞いたら」

信一郎は、笑いながら、私の頭を優しく、撫でた。



愛？ 勇気？ 希望？ 理想だと?! 戯言だ！ な  
お話

頭を撫でられた簪が数歩後ろに下がる。

「ッ……………」

「おお？ 待ちいなお嬢ちゃん！ ああ、行ってもうた…………」

ボロボロと涙を零して口元を抑えながら簪が千冬に当たる事も構わず部屋から出て行った。

『男』は少し残念そうに苦笑しつつ眉を下げる、『籐ヶ崎 信一郎』のそんな表情はいまだかつて一度も見えたことはなかった。

「泣いとったなあ……………ワシ何かやってしもたんやろか、なあ？ 孫みたいな年の娘を泣かせてまうとか、ワシは阿呆かいな」

千冬は信じられないものを見たかのような表情を浮かべ奥歯をギリと噛む。

「ところで別嬪のお姉ちゃん、ちよつと聞いてええか？」

「……………ええ」

「何でワシの手足無いんやろか」

千冬の脳裏にはこの言葉で幾つかの単語が浮かぶ、そのうちの一つを無意識に呟いた、

「記憶……………喪失……………」

「んなアホな、いくらワシがボケとったかて流石に手足失<sup>うしのう</sup>うたら覚えとるよ？」

「幾つか、お伺いしてもよろしいか」

「ん、ええよ？ 爺ちゃんに答えられるもんやったら何でも答えたらろ」

「貴方の……………素性は……………？」

「ワシは見ての通り……………やないな、何や若うなつとるけど89歳でくたばったお爺ちゃんや、ここは天国やろ？」

「IS……………インフィニットストラトスと言う単語に覚えは」

「えらい昔に聞いた覚えがある、多分ガキの頃やったと思うんやけど」

「カレードという単語は…？」

その言葉を聞くと男は嬉しそうに口元に笑みを浮かべ指を鳴らした。

「ワシが昔から好きやったゲームのアーマードコアシリーズのアーマードコアフオーアンサーって作品に出てくるねん！ もう70年チョイも前やけどよう覚えてるわ！」

「……分かりました…ありがとうございます」

千冬は一つの結論を出した。『極度のストレスによる別人格の形成』である。

しかし一般的に多重人格により発生した人格は発生した時期より成長が始まる事が多い、よって89歳だと自称するこの目前の人格は千冬が思う物とはどこか違う印象を与えていた。

それに仕草や雰囲気などが本当に老人のようでいつものような生徒に接する態度が出来ない、本当に老いた目上の人間に対するように自然に話してしまう。

「んー、手足が無いのって不便なもんやなあ〜寝返り打つのも一苦労や、お姉ちゃん外見たいねんけどええかな？」

「窓からで宜しいならば」

「ホンマか、んじゃあ悪いけどお願いできるかな？」

千冬に支えられベッドで身体を起こし窓から外の景色を見た男は驚いた表情の後に嬉しそうに顔を綻ばせた。

「空が澄んどる、綺麗やなあ…：エツへへ、歳食ったらこんなんでもエライ感動できるもんや、生きてる時はもう濁りに濁ってたしなあ…：」

「そうですか」

多重人格の解消は人格ごとの悩みを解消すればいいと聞いた覚えがあるのを思い出す。

「何か、何か貴方は悩みはあるのですか？」

「悩みかあ、なーんもない、死ぬ時は娘や息子、孫に看取られて安らかに死ねたしなあ、アイツ等は強いからワシ一人おらんかてなーんもならへんやろし、思い残す事も悩みも何一つとしてないわ…：いや、一

つだけあるな」

「それは…?」

「さっきの女の子を泣かしてもうた事やな、それだけや」

千冬がそうですか。と返し、専門の医師を探そうと考え一つ息を吐いた。

「お姉ちゃん、えらい疲れとるみたいやな、少し休んだ方がええと思うよ、老婆心やけど」

「……わかりました、ご忠告ありがとうございます」

疲れている理由の一端は貴方だ、と心の中に止め通信機を男の近くの机に置く。

「私は少し用事がありますので失礼します、何か御用の場合はこれを使っていたければ私か、別の誰かが向かいます」

「至れり尽くせりや、ありがとうございます」

男は机の通信機を手に取り領きながらひっくり返してみたり横から見たりと忙しそうであった。

親指でボタンをグイと押すとホログラムスクリーンが男の眼前に現れ千冬のポケットで「ピピピ」と音が鳴る。

千冬がポケットから通信機を取り出しボタンを押すと千冬の眼前にスクリーンが現れ男の顔が映った。

「おっ、ほっほっほ、面白いなあ、どうなってるねやろ?」

スクリーンに映った千冬の顔と横に居る千冬の顔を見比べてくしやりと笑顔になる。

「では失礼します」

「ああ、ごめんなあ、ありがとうございます」

右手をユラユラと揺らすように手を振る男に千冬が会釈し部屋から出てドアを閉めた。

一つ息を吐き、壁に拳を打ち付ける。

「私が…!! 無理やりに眠らせればいいなどと…! 少しは落ち着くだろうなんて考えなければ!!」

ギチリと食い縛った歯が音を立てる、視界に入る動く影に目を向けると生徒が怯えた様子で千冬を見ていた、片手で顔を覆い深呼吸をす



「へりを用意して、今すぐよ」

「了解しました、社長」

「IBIS、アンジェ、ジナイーダ、付いて来なさい」

投影ディスプレイを起動し、背後のIBIS、通信先の二人へと指示を出す。

「了解しました」

『了解です、社長』

『了解』

エレベーターに入り上へと向かう、扉が開くと凄まじい風圧と共に一機のへりがホバリング状態からゆっくりと降下し、へりポートへと降り立った。

直ぐにへりに乗り込み待つこと20秒、二人の女性がへりへと乗り込んだ。

「出して頂戴、目的地はIS学園よ、急いで」

「社長、我々は護衛ですか」

「そうよ、かなり急いであるから連絡がしつかりと通達しきれずに襲撃者と勘違いされるかもしれないわ、それから守って欲しいの」

「お任せ下さい、銃弾一発このへりには直撃させません」

『プライマルアーマー起動、制御モードをローターからVOBへと移行、到着まで15分』

ガコン、と一度揺れると窓から見える外の風景が色のついた線と化した。

「信一郎様は……シンは大丈夫なのでしょうか……?」

「やはりあの時は冷静になって然るべきでした、どれ程大人びている、人間離れしているといっても信一郎様は20に満たない少年だと言うのに、それを我々は失念して……」

「大丈夫よ、きつと……アンジェは簪ちゃんを覚えているかしら?」

「……はい」

「きつと、きつとあの子がシン君を治してくれる」

「ですが、しかし……」

「私だってそうだったもの、主任の、パパのお陰で私はこうしてここに

居れるの、恋する人は強いのよ?」

『V O B出力低下、減速します。ローター展開、回転開始：回転数が安定、プライマルアーマーを維持したままI S学園へと向かいます、距離約6キロ、I S学園の防空圏内へと入りました、緊急通信、接続します』

『こちらI S学園、進路を変更せよ、さもなければ敵勢力として迎撃する』

「こちらはカレードです、そちらに緊急の用があり向かっています、着陸許可を」

『：カレードであろうと許可できません、速やかに進路をそれてください、最終警告です』

「仕方ありません、では強行着陸をさせていただきます」

『……わかりました、ならば仕方ありません』

通信が切断された直後アラートがへりに響いた。

『I S学園よりI S反応……スキャン完了、ラファールです』

「アンジェ、行って。殺さないように」

「了解しました」

『後部ハッチ、開きます』

後部ハッチが開くと同時にアンジェが空へと身を躍らせこちらへと向かってくるI Sを睨み付けた。

「オルレア」

刹那の光と同時にその姿は10メートル台の機械へと姿を変え、紅いアイセンサーが黒に近い蒼に光る。

『速やかに停止しなさい！ 抵抗は無意味です！』

『抵抗？ そうだな、たった一機で私と切り結ぼうと言うのだ、I Sでは抵抗にしなければならないだろうな』

『そんな巨大な機体でI Sに……勝てるっても?』

『そんな脆弱な物でA Cに敵うっても?』

『まずは……不時着してもら——ッ!!』

ISのライフルでヘリのテールローターを狙った瞬間ライフルが凄まじい力で弾き飛ばされる、マニピュレータ越して凄まじい痺れを訴える手を押さえながらオルレアを見ると既に下ろしたマシンガンの銃口付近に熱源反応が発生していた。

『速い…ッ！』

『遅いな』

『ならばッ！』

エネルギーをスラスターから放出、瞬時に取り込み最大のエネルギーを放出し瞬間的に加速、瞬時加速と呼ばれる技術、さらに方向転換しながら再度瞬時加速を行い、敵の後ろを突く、IS操縦者の中でも一握りのみが行える最高等技術だ。

だがそれでも、10メートルの巨大な機体は凄まじい速度で振り返り、瞬時加速以上の速度でISへと飛びながら紫の極光を右腕から放出していた。

咄嗟に上方へと回避するが極光は脚部スラスターの先端を僅かに削っていく。

凄まじい熱量の余波がISを打ち、エネルギーを50%近く奪い取った。

『私の突撃力で当るとは、もし真改が相手であれば今頃その身体は無  
いぞ』

『ぐ、う…！』

僅かに融解した右足の先端と膨大な熱量により破損し、仕様不可となった右脚部スラスターをチラリと見て両手にマシンガンを握る。

『そんな豆鉄砲ではアリーのプライマルアーマーを抜く事は敵わんぞ、諦めろ。我々は何も戦争を仕掛けに来たわけではない』

『私は先生なのよ、生徒を守る為に今ここにいるの、貴女達を通したらもしかしたら可愛い生徒達が傷つくかもしれない、貴女達の牙が生徒達に突き刺さるかもしれない、可能性は0じゃないの、なら通すわけには行かないわ、例え死んでもね！』

『ふ、フフフ…フハハハ！』

『何がおかしいのよ？』

『いや、申し訳ない、貴方は間違いなく素晴らしい戦士だ、数々の非礼を詫びよう。だが我々も退けない理由があるのだ、次期社長を、信一郎君を助ける為に我々はここにいる』

それでも、と口を動かして両手のマシンガンをオルレアへと突きつけると唐突に緊急回線を使用し通達が行われた。

『こちらは織斑千冬です。着陸許可が下りました、指示するポイントへと着陸してください』

『織斑先生?!』

『カレードには生徒の治療の糸口を見つげるために来て頂きました、私がおう少し早く許可を取り付けければ無駄な戦闘を起こさずに済んだのに……本当に申し訳ありません』

『生徒の…治療、本当ですか?』

『私はただの護衛だが社長にはどうやら心当たりがあるらしい、それゆえだ』

『貴女方には……とんだ失礼をいたしました』

『心配ない、我々もこうなる事は予想がついていた、逆に言えば我々は戦闘を起こす気満々で来た事にもなる、だが信じて欲しい。我々は信一郎君を助ける、それだけの為にここにいるのだ』

指示された地点へとヘリが降り立ち、その直ぐ横にアリーヤが脚をつける、アイセンサーをヘリから降りた麗羅へと向け、指示を待つ。

『ACCを格納してヘリに待機、行くのは私とIBISだけでいいわ』

『了解です、社長』

するとゆっくり光の粒子へとアリーヤが変わり、一人の女性が地面へと着地し一度髪の毛を掻き揚げた。

『行きましよう』

麗羅が一言告げるとIBISが後ろに付いて歩く、放課後のIS学園に部外者が歩いている事は非常に珍しく生徒達の注目を受けることを意味している。

興味本位で遠くから眺める生徒や何の為に来たかなどを予測する



生徒などで通路外はごった返していた。

その生徒を割って千冬が歩いて近付いてきた、一度頭を下げ後ろを向き生徒に全員戻れと指示を出すと蜘蛛の子を散らすように生徒達が姿を消す。

「お待たせしました、こちらへどうぞ」

「織斑先生……シン君は今どこにいますか？」

「自室にいます、ですが……」

「分かっています、多分ある特別な人にのみ起こる特殊な記憶喪失のような物です」

千冬がなぜと言った表情を浮かべると麗羅は苦笑いを浮かべた。

「私も……そうでしたから」

「では、治療法は……」

「ある。とは言い切れませんが」

確実な治療法があったのであれば恐らく麗羅は満面の笑みを浮かべていたのだろう、それでも笑みを浮かべるのはきつと自分の子を信じているからか。

「原因はトラウマです。世界も自分も何もかもが嫌になるほどのトラウマ、消えてしまった方が良いと思うほどに心が壊れてしまった時に浮かび上がる自分、それが今のシン君です」

「やはり……」

「治療法はわかりませんが、私はある事柄によって戻ってきました。でもそれは本当にそうだったのか一過性のものだったのか、今も分かりません」

ですが、と続け真っ直ぐに千冬の目を見つめた。

「可能性は0じゃない、なら賭けます、全てを」

「カレードの社長の全てですか、それは……随分とオッズの壊れた賭けですね」

「そうですね、まだまだシン君に比べれば安い物です。ですが賭け事は苦手ですので」

ピタリとある部屋の前で止まり拳を握り息を一つ大きく吐く、スツと振り返りカードキーを差し出す。

「この部屋です」

「はい、では少し二人きりにさせて下さい、IBIS少しお願いね」  
「わかりました」

「はい、了解しました社長」

カシユツ、と乾いた音と共に自動ドアが開き麗羅が部屋へと歩を進める、視線の先にはベッドで空を眺める男がいた。

「おや、お嬢ちゃんは誰や?」

足音に気付いた男が麗羅に視線を向け笑みを浮かべ質問を投げかける、それに対し麗羅が軽く会釈し笑顔を浮かべてベッドの横の椅子へと腰掛けた。

「始めまして、私の名前は籐ヶ崎麗羅と言います。おじいちゃんのお名前は?」

「おお、へえ、ワシの名前か? 吉田一成って言うねん、よろしゅうな麗羅お嬢ちゃん」

「一成おじいちゃんのお話を聞かせて欲しいなってここに来たんですけど、いいですか?」

「構へん構へん! 何でも質問してや! 可愛いお嬢ちゃんの質問は大歓迎やで」

男は嬉しそうに声を弾ませ麗羅の頼みを受け入れた。

「奥様との馴れ初めでも教えてくださいな」

「はあ、若いお嬢ちゃんてのはみーんなこんなんが好きやのなあ」

「戦争終わって地元の居酒屋でなあ、部下と飲んどったらエライ可愛え子がおつてなあ、店員さんやってんけどな、そこからやなあ」

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

「…んで不覚にもベロンベロンになってその子に結婚してくれえ言うてな、返事貰てん」

「そうですね、ありがとうございます、とても楽しいお話でしたわ。……そろそろいい時間ですので、私は失礼致しますね、今日はお話を聞かせていただいてありがとうございます」

「んああ、氣イつけて帰りや麗羅お嬢ちゃん」

「はい」

右手をゆったりと振る男に麗羅がにっこりと微笑み頭を下げた。

自動ドアが閉まり麗羅が一つ息を吐くと部屋の外で待機していた二人が恐る恐ると言った様子で近付いてきた。

「どう…でしたか…?」

「社長……!」

「…私の予想通りでした、あとは私がしたようにすればいいのかもしれませんが、ですが…シン君は私と違って結婚してたから…:どれだけ時間が掛かるかわかりません」

「…結婚? 一体何を言っているのですか?」

「シン君の治療のために絶対に必要な事があります、更識簪ちゃんと少しお話をさせて下さい」

「私は構いませんが、いま更識がどこにいるのか、私には分かりません」

IBISが一つ頷き眼前にマップを展開する、上空から見ただけの内部構造のわからない簡易的な地図だ。

千冬がその地図を注視して5秒、あることに気付く、何か小さい何かが大量に絶えず動いている。

「リアルタイムの映像…」

いくら嚴重な防御機能を持ったIS学園とさえど注目度は世界で最も高い、故にこうして撮影されている事は何も不思議ではなかった。

事実、世界の人工衛星に秀でた国々は常にIS学園を監視している。

尤も、堂々と監視していると知らせてきた国は今だ唯一つとして無かったが。

「ご心配なく千冬様、我々は簪様の場所を知ることが出来ます」

その言葉と共にある施設がポイントされ二進数が表示された、いくら千冬と言えど二進数の文字化を瞬時に行えるほどではない。

「忙しい教員をずっと拘束している訳には行きませんが、あとはお任せ下さいな、織斑先生」

「ですが、貴女方はIS学園の人間ではありません、流石に自由な行動を許す訳には…」

「それもそうですね、では……」

廊下の曲がり角へと顔を向け麗羅がにこりと微笑む。

「ご同伴頂いてもよろしいですか、更識楯無さん？」

「あらら、気付いていらつしやっただんですね」

「私ではなくIBISが、ですけども」

ひよっこりと姿を現した楯無が口元を「吃驚」と書かれた扇子で隠してクスリと笑った。

千冬は楯無を見てそれならばいいか、と小さく首を縦に振る。

「頼んでもいいか、更識」

「ええ、勿論です、織斑先生」

くるりと扇子を裏返すと現れた「快諾」の文字と共に大きく頷いた。

では、と残し廊下を歩き去って行く千冬を眺めながら移動を開始した二人をスキップの交じたような足取りで楯無が追隨する。

しばし歩きやや長めで障害物の無い廊下に差し掛かるとトン、トン、トントン、とりズム良く前に楯無が躍り出て二人に向き直った。

射殺すような冷たい目で睨みつけながら。

「申し訳ありませんが、お二人を簪ちゃんのお所へ行かせる訳にはいきません」

「シン君は確かに人殺しも躊躇わない人間よ？　でもそれ以上に優しさを知っている子よ」

「到底信じることは出来ません、あの光景を間近でみた私には尚更」

扇子で口元を隠すことも無く眉間に皺を寄せ、ギリと歯を食い縛り口元を歪ませる。

「でも私は信じれるわ」

「親の色眼鏡でしょう、それも極彩色の」

「なんだって構わないわ、行かせて貰います」

「なら、実力で押し通ってみては如何ですか？」

楯無が浅く構えを取った。

「貴女が今している事が分かっていいのかしら？ 『更識』さん」

「十二分に理解していますとも、『更識』としては途轍もない失態を犯していることぐらい、でも前に言われた事があるんですよ」「私は更識家のメイドだけど、それ以前に簪ちゃんのお馴染で親友だ」って、そう……私は更識の楯無である前に簪ちゃんのお姉ちゃんなんだから。だからこそ貴女達を通すわけには行かない、簪ちゃんと籐ヶ崎君を会わせる訳にはいかない」

「素晴らしい、感動的です、ですが無意味です」

I B I Sが一步前に踏み出した、それにあわせ楯無が凄まじい速度の蹴りを放つ。

「無駄です、相手が人間である限り誰であろうと私を越える事は不可能です」

空気を割る乾いた音を伴った蹴りは容易くI B I Sの手に収まり、掴まれる事も無くただ防がれた。

「くっ！」

腕や脚で咄嗟に防御したのではなく直撃地点を見極め手の平に収め、尚且つクツションのように受身さえ取られた事から凄まじい差があることを悟り、歯噛みする。

「では次は私が行かせて頂きます」

ゆっくりとそれこそ壊れ物を扱うかのごとく優しさで楯無の胸に手を添え、トン、と軽く押したように見えた。

だがその一動作で楯無が数メートル地面に脚をつける事無く吹き飛ばされる。

床を錐揉みに転がり、途中で体勢を立て直し両足で地面を削るかの様に滑りながら停止した。

「あ、つが……カハッ！」

吹き飛ばされる寸前にマズイと感じ咄嗟に身体を引いたにも係わらず押された胸がギシギシと軋みを上げる、一度呼吸する度に肺をズタズタに引き裂かれているのではないかと錯覚するほど痛みを訴えていた。

いくらあらゆる武術に精通した楯無と言えど生身でこれほどの攻

撃を受けたことなど一度も無い。

動作としては接触状態から重心を移動し一気に押す、コレだけの動作。中国では「寸勁」と呼ばれる攻撃方法、しかし今行われたのはその寸勁が出しうる「理論上の最高値」だ、人間には到底出しえない有り得ない希少な可能性の話でしかない。

「骨にも筋肉にも異常はありません、折れてもいなければヒビも入っていません、早く掛かってきては如何ですか？ それともあなたの意思は所詮この程度と言う事でしょうか」

「ぐ、あああッ……。」

「!!!」

音の無い絶叫を上げ殺意を浮かべ立ち上がると同時、体のバネを全力で弾ませ宛ら銃弾の如くIBISへと疾走<sup>はし</sup>る。

左腕を大きく引き拳を握り、それをIBISの顔目掛け風を切る音さえ聞こえそうな程の速度で打ち出した。

ともすればゆっくりとさえ見える動作で左手の拳の予測地点へ手を持つてくる。

しかしその拳は手に収まる事は無く寸前でピタリと動きを止めた。それと同時に、左腕よりも下部で鈍く重い音が響く、楯無の右手の拳がIBISの腹部へと突き出されていた。

「ツツ…!!」

だが呻き声を上げたのは楯無の方だ、咄嗟に引いた右手の拳は力が全く入らないかのように開かれ、中指と薬指は不自然に曲がっている。

ボディブローが入る寸前に防御に使っていた腕の肘の位置だけをスライドさせた為に拳は肘へと直撃し、結果的に拳が碎かれる事となった。

だがそれを歯を食い縛る事で耐えIBISの腕を掴み、全力で投げる。

つかまれた場所を中心に弧を描き地面へと叩きつけられるが静かにコン、とヒールブーツの音が鳴っただけであった。

瞬時に両足から床へとジャンプの後に着地し、体のバネを使い衝撃を完全に殺したのである。

「人間と言うのは実に不便で多くの欠陥を抱えています、どれだけ打たれ強かろうが顎を打たれば脳が揺れ、戦闘を行う事が出来なくなります。ご存知ですね？」

そう言いながら掴まれていない方の手を引く、それに対し右腕で顎付近を咄嗟にガードするもIBISはその引いた手で地面を殴りつけ、足の力も利用し叩きつけられた時の逆再生のようにクルリと跳ねた。

「そしてどれ程の使い手であろうと極限状態での心理戦は不利な状況しか生みません」

地面に着地したIBISは掴まれていた手を即座に振り払い、胸倉を掴み上部後方へと放り投げる。

「クツ…!? ミステリアス・レイディ霧纏の淑女が…!!」

「ISの機能を妨げるEMPフィールドです。ゆつくりお休み下さい」

空中でISを起動し、状況を打開しようとしたが不可視の電子結界がISを封じ、楯無が地面に叩きつけられるよりも先に到達地点へと移動した。

優しく受け取るように向かってきた背中に両手を合わせ一瞬速度を緩めた直後先程の寸勁を打ちつけ衝突エネルギーを相殺、瞬く間に楯無の意識を刈り取る。

「死んではいませんが…：右手を潰してしまいましたね、手加減や力加減は私には少々困難なようです。信一郎様が、シンがくれた身体です。筋力や性能が兵器染みてる…：そもそも手加減が難しいのは承知のほずです。うん、頑張りました」

ずる、と落ちる楯無を抱えながらうんうんと頷いた。

壁で支えるように床へと座らせ手元にナノマシン修復型治療キットを置き立ち上がって麗羅へと振り返る。

「行きましようか」

「はい、社長」

こつこつ、と靴底が床を叩く音を響かせ、ドアの前で二人が脚を止

めた部屋の用途が示された札を見ると『整備室』と表されている。

開けようと麗羅がコンソールに触れるが動く様子がない、ふう、と一つ息を吐いて投影ディスプレイを起動させ、5秒後『ピッ』と音を立て空気の抜ける音と共に扉が開く。

部屋の中にはハンガーに吊るされた打鉄式とそれに向かい合うように膝を抱え、立てた膝に顔を埋めて椅子に座り込んだ簪がいた。ピクリとも動く事無くまるでただの置物のようにさえ思えるがハンガーに吊るされた打鉄式が微弱な緑光を放っていることがそれを否定していた。

「少し、いいかしら？」

麗羅が簪に声を掛けるとピクリと肩を揺らし、ゆっくりとその顔を麗羅へと向けた、目は真っ赤に充血し頬には幾つもの涙の跡がついている。

いつも身に着けていた眼鏡型の投影ディスプレイも青い花の髪飾りも付ていない。

「麗羅……さん……」

「そうです。シン君のお母さんの麗羅さんです。で、シン君のことで少しお話があるの」

「しん……いちろ……う、うああ…… あああああ……!!」

信一郎の話題が出た瞬間、簪が目には涙を浮かべて泣き始めた、麗羅がゆっくりと簪に近付き優しく頭を撫でる。

「大丈夫、大丈夫よ……？」

「…ぼえて！ 覚えて……！ 無かった、んです……!! どうして……！ どうしてえ！」

「違うわ、正確には今のシン君は覚えていないんじゃないやなくて、まだ知らないの」

「わからない！ わからないです……!!」

「シン君を戻す方法はあるわ、でもそれには簪ちゃんが必要な、だから泣き止んで、お話を聞いて？」

それを聞いた簪が吃逆しながらボロボロと涙を零したまま麗羅を見る。



「でも、その為にはまず貴女に知って貰わなきゃいけないことがあるの、とても残酷なお話」

「そ、それは……？」

「シン君は、人を殺したの」

ひゅっ、と息を呑み口元を両手で押さえた。信じられない、といった表情を浮かべゆっくりと首を横に振る。

「本当よ、それも一人や二人じゃない、数百人、もしかしたら千人に届いてるかもしれない、それぐらい人を殺したの」

「う、そ……嘘、うそ、ウソだ……」

麗羅が簪の目を真っ直ぐに見つめる、逸らす事無く逃す事無く真剣な表情をしながら。

「もし、それでも簪ちゃんがシン君を愛せるなら、愛しているならこの続きを聞いて欲しい、シン君を助けて欲しい、でもその為に、それだからこそ、真剣に考えて答えを決めて欲しい、覚悟をして欲しい」

「ひ、とっだけ……っだけ、教えてください……！」

「うん」

腕で目元を一度拭い真っ直ぐに麗羅の目を見つめ返す。

「どうして、信一郎は、人を殺したんですか……？」

「それは……ね」

「私が、理由を説明させていただきます」

IBISは一步前に歩み出て簪へと一度会釈し、口をゆっくりと動かし始めた。

「学園祭で簪様が襲われ、重傷を負い入院したのは覚えておりますね？」

「はい……」

「信一郎様は簪様を救出する際意識を持っていた、つまり簪様が倒した者以外の人間を全員殺害しました」

「ッ……！」

「その後生きていた者を捕らえ口を割らせ、彼等の本拠地を探り当てました」

簪は自分の服の胸元を両手で握り締め息を荒くする、その先は容易

く想像できた。

「信一郎様はすぐさま私兵部隊を集め運用し、その日中に壊滅させました、生存者は0です」

「信一郎は……！ 私の所為で、人を……!!」

「それは違います」

「でも、だって……!」

「信一郎様が生まれた時より私は信一郎様を見続けてきました、信一郎様がもしここに居ればこう言うでしょう『俺は俺のやりたいようにやっただけだ、お前が気にする事ではあるまいて』と」

「それでも、理由がどうあれ、シン君は確実に人を殺したわ、それに言ってしまうえば無実の人間も殺してしまったのよ。簪ちゃん、貴女はそんな人殺しを愛する事が出来る？」

「少し、少しでいいです。数分だけ、考えさせてください」

自らの身体を抱きしめるように両腕を握り締め深く息を吸う、目を閉じ、一言小さく恋人の名を呼んだ。

ゆつくりと振り向き長く息を吐いてスツと目を開ける。

目の前にはハンガーに掛かったままの打鉄式式のアンロックユニットから淡い緑の光が漏れていた。

「おいで」

声と共に打鉄式式が粒子状となり簪の右手中指へと集まり指輪となる。脇に置いてあった眼鏡型投影ディスプレイを掛け、青い花の髪飾りを掬い上げるように優しく手に取り、愛しそうに左目にかかった髪の毛を耳の上で纏めるように付ける。

「お待ちせしました」

「答えを聞かせて貰えるかしら？」

目は赤く充血してしまっているが先程のように泣きそうな顔はもうしていない、真剣な表情で麗羅を見つめた。

「愛します、愛しています……!」

「貴女は一般人なのよ？ それでも背負っていける？」

「私は、特別です。一般人じゃありません、代表候補生です」

簪は生まれて初めて自分は特別だと言い切った。

「ならば尚更よ、相手は人殺しなのよ」

「見くびらないで下さい、私はただの簪ではありません『更識 簪』なんです」

ふう、と一つ息を吐き祈るような形で両手をにぎり合わせる。

「私は……信一郎に助けられました……。信一郎のお陰で今の私があります……。どんなに尽くしても返しきる事なんて出来ません。命も……心も……助けてくれました。だから今度は私が助けます……！」

麗羅が顔を俯かせ簪へと近付き力一杯簪を抱きしめる、その身体は小さく震えていた。

「……がとう、ありがとう、ありがとう…!! シン君の為に、そこまで言ってくれてありがとう…!! 簪ちゃん、本当にありがとう…!! ふ、うう、うええええええええ!!」

「簪様、ありがとうございます。私からも、お礼を言わせていただきます、本当にシンの為にありがとうございます…!!」

「人殺しとか、バケモノなんて関係ない、そうだよ……。私は、更識簪は信一郎を愛しているんだから……」

## 姉妹の決意と君に捧げる為のお話

「シン君があなったのはトラウマの所為よ、何もかもが嫌になって、もう自分なんて消えてしまえばいい、そう思ったとき心が壊れて、あなつてしまったの」

「トラ：ウマ……」

「先程説明いたしました、無実の人間も殺害した、と言うのを覚えていますか？」

「だから……」

IBISが頷き肯定を示した。

「人を殺したわけじゃない……いいえ、私も、そうだったのよ、今でも思い出したら怖い、本当に怖かった、苦しかった、痛かった、悲しかった」

「ッ……」

「IBIS、部屋をロックして頂戴」

「了解しました：ロック完了、セキュリティレベル5」

麗羅が椅子に座り簪と向かい合う、簪の手を取り両手で握り締めた。

「この世にはね、本当に特別な、有り得ない、有り得てはいけない力を持った人間が居るの」

「有り得てはいけない……ちから……?」

「そう、例えば物を見ただけで理論や構造を完全に理解できたり、音を膨大な幾つもの種類のエネルギーに変換する特殊な科学理論を理解していたり、物体を作り出したり、作り変えたり、そんな力を持った人間が居るの」

「物体の…?! それ……は……」

「知ってるみたいね、そう…シン君の力もその一つ、そして、私もそんな力を持っているの」

手の平を上に向け眼前に出すと粒子変換の光と共に一つの輝く結晶の浮かんだ半透明の球体が現れる。

「私の力はさっきの内の二つ、それと…これ、何だと思う?」

「IS…コア…？」

「そうよ、『私が作った』ISコア」

「え……？」

「最後の力は『世界最高の頭脳』、この世で尤も頭の良い人間は束ちゃんじゃないわ、私よ。あの世界の理を破壊した大天災じゃないわ」

「そう言う手の内にあるコアを粒子状に変化させ虚空へと消した。」

「最初は本当に良かったわ、何でも分かる、何でも知れる、何でも出来る、神様にでもなったような気分だった。私が20歳になるまでは」

「それ…からは……？」

「パパと、あの人と結婚して子供をお腹に授かったわ」

「それが……」

「その先を予測したのか麗羅はゆっくりと首を横に振った、そして苦しそうな表情を浮かべる。」

「ねえ、頭の中に無理やり知識を詰め込まれ続けるって、どんな気持ち分かる？ 教えてあげるわ、とても痛くて、苦しくて、まるで頭の中を無理やりかき混ぜられてるかのような痛みで、気が狂ってしまっそうで……」

「結婚して、子供を授かって、しばらくするまではこの世界に抜きん出た天才って言うのは居なかった、だから私もその少し上でしかなかったの、でもその時に凄まじい速度で成長して行く天才が世界の頂点を取った」

「篠ノ之……束……」

「毎日毎日そんな苦しみを受けて、痛みを感じて、耐え切れなくなった私はね……」

「流産したの」

「ツ…!!」

「女の子の筈だった、シン君はね、二人目の子供なの」

「それを受け入れる事が出来なくて、怖くて、それでも頭の痛みは終わ

ることが無くて、全てが嫌になって、最後に心が壊れて……」

「そんな、そんな……!!」

「何度も何度も何度も何度も、涙が枯れても、声が出ないほど掠れても、喉が裂けるほど謝り続けたわ、ごめんなさい、ごめんなさいって」  
「そして今のシン君みたいに私が私じゃなくなった、私は籐ヶ崎麗羅じゃなくて17歳の女の子になった。でもあの人が私を支えてくれた、周りの誰も私の知らない人で怖くて混乱して怯えていた私をずっと支えてくれたの、あの人を分けも分らず叩いた事もあったけど、それでもあの人は優しく私を支えてくれたの、そしてどこかでこう思ったの『私はこの人が好きなんだ、この好きな人と一緒に生きてい』って」

「……………」

「そうしたら私は17歳の女の子じゃなくて、籐ヶ崎麗羅に戻った。だからシン君を助けられるのはきつと、シン君が愛した、シン君を愛した貴女じゃないと、駄目なの」

「わかりました……わかりました……!」

「でも、いつ戻るのか分からない、簪ちゃんも転生って知ってる?」

「仏教における教えの一つ……ですか?」

「私もシン君もその前世の記憶を持っているの、その前世の記憶が今のシン君、そして心の壊れた私」

「え……?」

「私は病弱で、10の頃からずっと病院のベッドで過ごして死んじゃった17歳まで、初恋も何も知らなかった、だからあの人に簡単に恋をしたけど、シン君は違うわ。シン君の前世はちゃんと結婚して孫も出来てから亡くなったらしいの、だから今のシン君に恋をさせるのは難しいかもしれない。信じられないだろうけど、本当の事よ」

「……信じます、薄々感じてはいました…能力以外にも何か特別な物があるんじゃないかって」

「そう、ありがとう……もしかすると噂に聞く織斑君を落とすのと同じぐらい難しいかもしれないわね」

くすりと笑いながらそう言う麗羅の顔にもう陰りは見えない、簪



た、知らず唇を噛む。

「ッ、そうよ、簪ちゃんは、貴女は彼と会うべきじゃない」

「……舐めないで、その程度はもう受け入れた」

「…仕方ないわね」

楯無の左手がピクリと動いた直後、簪が後ろに身体を反らしながら跳び、床に手を付け一回転するように距離を離す、簪が頭を後ろに引いた瞬間、簪の顎があった場所を何か風を切っていた。

「流石ね、お姉ちゃん鼻が高いわ」

「言っただしよ、舐めないで……!!」

「どれだけ強くなったか、見てあげる」

左半身を前に出しゆつくりと身体を揺らす、拳を構える事は無い。

それに対し簪が右腕を前方へと構え深い構えを取った。

「更識流、重心も呼吸も安定してるわね、いいわよ」

「……行きます…ッ!!」

瞬時加速と見紛う始動速度、一跳びで数メートルを爆発的な速度で移動し見えない速度の拳が楯無へと打ち出される。

涼しい顔で一歩一歩と下がりながら息吐く暇の無い連撃を左手のみでいなし続け、乾いた音の連続を空間に残した。

「速く、重く、柔らかい、でも少し力を入れすぎよ、無呼吸は辛いんじゃない?」

「……ッ!」

時間にして約十秒、たった十秒、しかし一切の呼吸も無く殴り、払い、打ち、掴み、蹴り、突きを目にも留まらぬ速さで放ち続けるのは常人には不可能に近い。

回し蹴りの向きを上へと曲げられ、意図せず空へと浮いた。

そのまま勢いを殺さず楯無の頭を蹴り抜かんが如く体勢を変え踵落しを叩き付ける、咄嗟に左手で受けた楯無は滑らせるようにいなし、後ろへと跳んで距離を離れた。

タンツ、と音を立て簪は床へと脚をつけ大きく息を吐いて楯無を見る、どうだ、と言わんが如く。

「凄いわ、知らない間に強くなって、初見じゃ危なかったかもね」



「見せた……覚えは、ない……けど……」

「あら、気付いてない？ 今の……籐ヶ崎君の攻撃にそつくりよ」

ただ、簪ちゃんのほうが遥かに洗練されてるわ、と続ける楯無に簪は嬉しそうに笑みを浮かべた。

「意図したつもりは無いけど……ふふ、信一郎に似てる、かあ……」  
「あら、よそ見してて良いの？」

一瞬で距離を詰め掌底を打ち出す楯無に反応が遅れ、回避と受身のタイミングがずれて肩に浅く当たり、凄まじい激痛と熱が走る。

歯を食い縛って耐え、カウンターで貫手、これも脇腹に掠るのみとなった、しかし。

「クツ……！」

「ツツ……!!」

楯無が後ろに大きく跳び距離を離す、歯を食い縛り脂汗が頬を伝い顎から床へと落ちる。

ポーカーフェイスでも隠しきれないほどのダメージを負っていた。

簪は攻撃を受けた肩側の手を握り、広げ、腕を曲げ、伸ばし、肩をゆつくりと回し、笑みを浮かべ構えを作る。

まだ動く、まだ……戦える、その一心で。

「簪ちゃん、例えもうどうしようもないほど嫌われても、私は貴女と籐ヶ崎君と一緒ににはさせない、それが私の覚悟よ」

「覚悟なら私も、もうした……どっちも、譲れないみたいだね……」  
「——らしいわね」

その言葉と共に簪が爆発的な加速で楯無へと肉薄しアッパーのように掌底、楯無のガードを弾き上げる。

即座に回転しボディブローを剣で突き刺すかのように繰り出した、それを体勢を立て直した楯無が横へと打ち払い、肘打ちを簪の腹へと直撃させる。

「う、グツ……！」

更なる追撃を簪が打ち払い大きく後退、小さく息を整える。

「どうしてそこまで彼に執着するの……?! 彼は——何百人も眉一つ動かさず殺したのに……！」

「だから……?」

簪がクスリと笑い楯無を睨み付けた。

「そんなのは関係ない。私は……信一郎を愛している……それだけだよ……!」

距離を詰め、楯無のキルゾーンへと入る寸前でステップを踏むように跳び空中で一回転、常人なら直撃すれば骨が砕けるであろう威力の踵落しを叩きつける。

しかしそれは常人であればの話でしかない、楯無は最頂点で左手で受け、一切の無駄なく全ての威力を殺し即座に上へと投げ返す。

空中でバランスを崩した簪の身体に掌底が突き刺さった。

簪の身体が数メートル弾き飛ばされ、床を転がる。

「バカね、簪ちゃん……バカよ……」

愛や希望が全てを制する訳じゃないの……

簪ちゃんを……守る為なのよ……何物に代えても……

「ま、だ……まだ、終わって……ない……!」

楯無が床へと倒れていた簪へ目を向けるとゆつくりと身体を起ここしていた、少なくともアバラの数本はヒビが入った筈の威力だったにも拘らずまだ立ち上がり、戦おうとしている。

「そんな、どうして……?!」

「ISスーツって……すごい、ね……? お姉ちゃんは、常に着ている訳じゃないだろうけど、私は……着てる時の方が多から、ふふ……こんな時に面倒臭がりが生きるなんて……」

ISスーツ、至近距離からの拳銃弾を防御する事も可能な特殊化学繊維で構成されたレオタードのような形状の服。

楯無は理解した、対幹部への打撃は致命打たりえない、掴み技、及び四肢への攻撃が効率の良いダメージだと。

「さあ、もう一勝負……!」

「……いいわ、貴女も更識、諦めが悪いのは私と一緒にね!」

両者が一瞬で距離を詰め攻防を始めた。

打ち、払い、掴み、抜け、突き、弾き、押し、押される。

一進一退の攻防が恐ろしい速度と精度で繰り広げられ、意地と意地のぶつかり合いが続く。

例え代表候補であってもこの戦いの全容を知ることが難しいだろう、代表候補生であり、軍人であり、部隊長である少女ならば見る事は出来ただろう。

世界最強の称号を持つ女性ならば理解できただろう。

日本最強、世界有数の暗部、あらゆる技術に精通し、数々の武術を修め、殺す事さえも是とした家である彼女達だからこそその戦い。

『ハアアアツ!!』

ダンツ、と大きな打撃音と共に二人が動きを一瞬止める。

二人の掌底が手を合わせるように打ち合い、直後二人が弾き飛ばされるかのように離れた。

「もう、諦めたらいいじゃない……!」

「イヤだ、私には私の目的がある……!」

「貴女の為なの……」

「そんなに私が、信一郎が、信じられないの……?」

私は諦めたくない、だから何が何でも押し通る……!!」

「この分からず屋!!」

「どつちが!!」

怒りを向き出しにし、二人が衝突する、一撃二撃、五撃、十撃、十数撃、数十撃、最早何度掠ったか、最早何度直撃したか、最早何度罵倒したか、遂に二人の大振りの拳が双方の頬に刺さった。

ふらふらと二歩三步後ろに下がる、既に力は殆ど入らない、二人の頬はただ少し赤くなっただけだ。

ぜえぜえと息を切らし、相手を見る。

「こんなに、分かり合えないなんて」

「姉妹……なのにね……」

「ええ——そうね」

もう何度目の衝突だろうか、数えられないほど打ち合った、ともすれば二人にとって永遠とさえ思える姉妹喧嘩の中で簪は口を開く。

「お姉ちゃんは……覚えてる?」

簪の攻撃を払い、打ち出し、払われながらその問いに答えるべく口を開く。

「何を」

最初に比べ見る影も無いほど速度と精度の落ちた中、二人は会話を始めた。

「生徒会室で信一郎に言ったこと」

「覚えてるわ、忘れなんてしない」

「お姉ちゃんはこう言ったよね、私が拒否してもしなくてもいい、だって私も更識だから、って」

「ええ、私も更識も大嫌だって言ったわ」

「お姉ちゃんの言うとおりでだよ、どれだけ泣き叫んでも……どれだけ悲しんでも……どれだけ憎んでも……私は更識」

「…そうね」

「そう、私は更識簪、更識の人間が人を殺した程度の相手を突き放す必要なんて無いよ」

「詭弁よ」

「それに更識にとってカロードの次期社長が身内になるのは、凄くメリットになると思わない?」

「簪ちゃん…?!」

「だから、お姉ちゃん、ごめんなさい」

「え?」

楯無の腹部に拳が置かれる。

「しまっ……!」

助走無しの体重移動のみの打撃、ワンインチパンチが楯無に突き刺さり弾き飛ばされた。

咄嗟に体を捻り簪の顎を蹴り抜こうとしたが身体を後ろに反らせ回避。

「この言葉、返すよ……初見じゃ危なかった」

地面を転がり床に倒れた楯無が身体を起こそうと床に両手を着いた。

「ここまで、ね……凄く強くなったわ、簪ちゃん」

「お姉ちゃん?! その右手は……!!」

「ゆっくりと立ち上がった楯無の右手は潰れていた、咄嗟に近寄ろうとした簪の鼻先に左手で手に取った閉じた扇子を突きつける。

「行きなさい」

「大事な人が待つてるんでしょ？」

「私に構ってる暇は無いわ、ホンのちよびつと、疲れちゃったし」

「ふわりと笑みを浮かべて扇子を開く、そこには「フアイト」と若干崩れた字で描かれていた。

「……ありがとう、ありがとう、お姉ちゃん!!」

「そう言い残し走り去る簪にゆらゆらと扇子を持った左手を振る、簪が視界から居なくなつた直後、膝を突き壁に背中を預け扇子を取りこぼした。

「ぎ、すがに……右手、つぶ、れて……呼、吸さえ、痛、い……と、キツツイな、あ……」

「ともすれば死んでしまいそうなほど浅く不規則な呼吸、右手と胸部から常に正気を失いそうな程の痛みを感じ、喧嘩に負けたにも拘らずその顔は心の底から嬉しそうな笑顔だった。

「簪ちゃん、強……く、なつた、なあ……更識で、ある、こ、とも……利用……でき、るほど……ふふ、お姉……ちゃん、嬉し、いな……」

「コツ、コツ、と小さな音を立てて眼鏡を掛けた生徒が楯無へと近付く。

「会長……」

「あ、虚……やつ、ほ……初め、ての……姉妹、喧……嘩で、負け……ちやつ、た……え、へへ……」

「はあ、どうしてこんなになるまで……本当に、おバカ」  
「えう」

「ぺちん、と楯無の額に弱く平手打ちし楯無の左腕を持ち、体を支えて立ち上がらせようとする、が。

「痛い、痛い、痛い……!」

「どうしろと……」



「はい…？ 昔話…？」

「せや、ある人間の生まれてから死ぬまでのお話や」

「わかり…まし、た…」

ベッドに体を倒した男は胸に手を置いてゆっくりと語り始める。

「その男はどこにでもある至って普通の家に生まれたんや、兄が一人おつて、それが随分やんちゃな人で。

小さい頃は毎日のように喧嘩しとつた、勿論弟が勝てるはずないさかい、いっつも泣かされとつた、でもええ人で色々助けてくれた。

男は普通に生きとつた、普通に義務教育を終えて、普通の高校出て、若干よろしくない大学も出た——」

次々と男は語り続ける、その都度あつた出来事、その時その男が思った事、とても客観的だとは思えない事を語り続ける。

例えば自転車で転倒し、怪我で傷を縫わなければならなくなったこと。

例えば傷口を縫うに当たってまだ幼かつたその男は針を突き立てられるのが怖くて泣いたこと。

例えば20後半の時戦争が起こつたこと。

例えば軍で分隊長になり、部下の名前を全員覚えていたこと。

例えば戦争が終わり地元へ帰つたとき居酒屋で飲んだこと。

例えば居酒屋で働いていた女性に一目ぼれしたこと。

例えば30を越えた時結婚したこと。

例えば相手が一目ぼれした居酒屋の女性だったこと。

子が生まれたこと、除隊したこと、子が成長したこと、孫が生まれたこと、妻が病気で亡くなったこと、そしてその男が最後に家族に囲まれ亡くなったこと。

男は懐かしむように、時折嬉しそうに、時折悲しそうに、時折楽しそうに、時折寂しそうに、最後に幸せそうに話を終えた。

「これが、その男の一生やつた」

「その後は…？」

「さあなあ、ワシが分かるんはここまでや…願わくば、家族が幸せに暮らしてくれるといいなあ」

男の顔にどうしようもない寂しさを覚えた簪が無意識のうちに口を開く。

「私の、話も聞いて…くれますか…?」

「ええんやで」

「ある女の子が居ました…その女の子はある特別な家に生まれました——」  
「なんでこんな事を私は話しているんだろう、そう考えても口からは意識せず言葉が零れ落ちる。」

「女の子には姉が居ました、とても優秀で、何でも出来て、尊敬していた姉が……」

「いつか姉の隣に並ぼう、って…沢山勉強しました、色んな事を学びました、でも姉は女の子よりもずっと早くずっと多く、色んな物を吸収して、どんどん遠ざかって行きます。」

ある時、突然女の子は姉に突き放されました。「あなたは何も知らない、無能のままにいる」って……

今考えてみれば姉は女の子を全部から守るから、全部やりきつて見るから、だからあなたは好きに生きていいって事だったんだと思います……

でもまだ幼かった女の子はそんなこと考えなくて、大好きだった姉に嫌われたと思って塞ぎ込みました。

鬱屈として、大好きだったはずの姉がどんどん疎ましく思えて、どんどん疎遠になって、課せられた最低限の訓練と座学を終えたら部屋に籠ってしまおう、そんな毎日でした。

姉はどんどん凄くなって、いつのまにか国家代表にまでなっていて、女の子は望まずそれを追う様にしなければならなくなって、中学生で国家代表候補になりました。

人から見ればそれは凄い事なのかもしれない、栄光なのかもしれない、でも女の子にはそれを遥かに超えてしまおう姉がいたから……所詮候補でしかないんだってもっと惨めになって……

高校生になる少し前、その女の子には女の子の為だけの特別な物が与えられる事になりました。



もしかしたら、漸く姉の後姿が見えるようになるかもしれない、そんな希望を小さく抱えます。

だけど突然に特別が現れてその機会を女の子から奪いました。

特別はその女の子に嫌がらせをしようと思っただけじゃなく、ただ、偶然、そうなってしまうただけだけど…女の子にとっては絶望でした。

そのときある話を聞きます。姉は特別な物、専用機と呼ばれる物をたった一人で作った、と。

女の子はもし、自分も専用機をたった一人で作って見せれば、自分が認められるかもしれない、そう思っただけで量産機と呼ばれる物を譲り受け、自分だけの専用機をたった一人で作ろうとしました。

高校生になつてからもずっと、時間があればそれに費やして……しばらくしてから……

ある人と偶然出会いました、それはもう一人の特別で、女の子はその特別な男の人から……お説教、かな？

一人で出来る事なんてたかが知れてる、お前には頼る事が出来る人が居るだろう、って。

最初は変で嫌な人だと女の子は思った、でもどこかで飢えていたのかも知れない、自分を凄いい姉の妹じゃなくて個人として、女の子としてみてくれる事を。

それから男の人は女の子を気にしてくれるようになった、ちゃんとご飯を食べるとか、ちゃんと睡眠はとれとか、最初は上辺だけだったけど、どんどん女の子は心を開いて……

ある時女の子が、じゃないけど襲われた事があったんです……その時男の人は身を挺して女の子を守って人質状態だった人を皆避難させて、襲撃者をみんな倒してしまっただけです。

それで女の子は男の人が好きになりました、これって吊橋効果って言うのかな……？

最初は少し好きで、その気持ちはどんどん膨らんで男の人は女の子を守ってくれるって、言ってくれて。

デートもして、男の人や、幼なじみと専用機を一緒に作って、楽し

かった……

専用機が出来た日、男の人は綺麗だって言ってくれて、テストも手伝ったりしてくれて、凄く嬉しかった。

でもその日女の子の姉が女の子を利用して男の人を…陥れようとしたんです。

好きな人を陥れる為に女の子は利用される、それが信じられなくて、嘘だと思いたくて、姉のことも家のことも大嫌いだって泣き叫んで逃げた。

それでも男の人は女の子を追いかけてくれた、女の子を抱きしめてくれた、突き放す言葉も気にせず……

プロポーズしてくれた、嬉しくて男の人の胸でまた泣いて。

それからデートしたり、一緒に過ごしたり、色々あって、臨海学校になりました。

詳しくは言えないけど、男の人は重傷を負って、それでも女の子の危機に駆けつけてくれました、でも正気を失っていて、それが男の人だって知らなかった最初の特別な人が……女の子の目の前で男の人の胸を貫いて、血が滝みたいに流れて、押さえただけど、全然止まらなくて、ようやく正気を取り戻した男の人は血の塊を吐いて、女の子にキスをして、死にそうなのに笑いながら「なに泣いてんだ」って女の子の肩に頭を落として愛してるって言い切ることも出来ず、目を……閉じて。

でも、何とか蘇生して、一命を取り留めて、分けも分からず泣きながら男の人を抱きしめた。

男の人はそんなことがあったにも拘らず以前と同じように女の子と一緒に日常を過ごしていたんです。

男の人のお陰で姉と和解したり、男の人の実家に挨拶に行ったり、とても楽しかった。

それは、突然終わりを告げました。

女の子と男の人が離れているとき、女の子が襲われて、怪我をしました、男の人は直ぐに助けに来てくれたけど重傷を負っていた女の子は病院へ。

女の子が病院で入院している間に男の人は壊れてしまいました」

「これで、私の話は終わりです」

「……そうか……」

「あの、私——」

「なあ、簪ちゃん」

簪の言葉を遮り覗き込むように男が顔を見た。

「ワシがその男の人と似とるんかして、どうやら簪ちゃんはワシとその男の人を重ねとるみたいやな」

「ツ……いえ、そんな……ことは……」

小さな声で否定しつつ顔をそらせる、無意識の行動だった。

「ん、あかな……どうもう歳食ったらこの時間帯は眠うてしやあない……」

部屋に置かれた時計を見ると17時を示している、簪は駄目だった、と助かった、の入り混じったような思いで椅子から立ち上がる。

「では……私は、もう行きますね……おやすみ、なさい……」

「ああ、おやすみ」

笑みを浮かべて手を振る男に手を振り返した簪が部屋から出て、閉まったドアに背を預けた。

そのままズルズルと滑り地面へと座り込み、両手で顔を覆う。

「あ、はは……ははは、バカみたい……」

ポタリ、と一粒涙が落ちる。

「……簪ちゃんが見とったのは、ワシか、ワシの後ろか……いや、ワシやったな、けどワシや無い……」

ベッドに身体を落とし皺の無い右手を見つめる。

「……もう、十分、いや十二分に生きた、これが……そうなんやろうな」

「……潮時か……まあ良え……最早ワシも無用や……人類に……黄金の時代を……なんてな……」

薄く笑みを浮かべ男は目を閉じ、規則的な寝息を立て始めた。

「抱きしめて好きだって、言うだけなのに……素直に、好きだって……  
伝えるだけなのに……！」

「みんな臆病なだけ……はは、臆病なのは……私……だよ……」

音無き泣き声を出し涙が手を濡らした。

しばらくそうしていると、ふと足音がコツコツと簪に近付いてくる、途中少し速度を速めたのか一定ではなく不規則な音だった。

「簪？ 大丈夫か？ どうしたんだ、こんな所で」

手にスポーツ飲料を入れたペットボトルを持った男子生徒が声を掛ける。

「織斑……くん……」

顔を上げた簪の顔を見た男子生徒、織斑一夏がギョツとした表情の後簪が背を預けているドアがどこのドアかを理解し眉間に皺を寄せ、不機嫌な表情になった。

「……シンだな？ あいつ、調子悪いからって簪に当たる事ねえだろうが……」

「違う、違うの……信一郎は何もしてない……！ 私が、私が臆病だから……弱いから……」

ムツとしていた表情の一夏がしばらくして力が抜けたような表情になる。

「シンが人を殴る事は無いと思うし、多分さ、話の纏れとかだろうけど……なんて言うか、簪は少し控えているって感じがするんだよ、だからさ」

うーん、と唸って手を組みながら口を開く。

「もう少し言いたい事を言っただいと思っただ、いや……多少の無理をしてでも言った方がいいと思う。何にせよまずは自分の思ってることを分かって貰えないと話も出来ないからな」

一度溜息を吐き。

「まあそれにしても箒達みたいに直ぐ暴力を振るうのは勘弁して欲しいよ、さつきもキャノンボールファストの練習って言うか話し合いで

何が起こったのか全員が俺を攻撃してきてさ、死ぬかと思った。そういう点ではシンが羨ましいよ、アイツ集中攻撃なんのそのだし」

ぐにぐにと眉間を揉みながら見た目より年を食った雰囲気を出す一夏を見て簪は少し落ち着いた。

「…織斑くん、ありがとう……私、頑張る」

「……おう！ シンがそれでも何かあったなら俺に言ってくれよ、これでも親友のつもりだからな、ぶん殴ってでも説得するさ」

そういう残し、自室へと入っていった一夏に笑みを返した簪は背後のドアに振り向き、カードキーを通した。

開いたドアの向こうには男がベッドで眠っている、時計は18時頃を示していた。

先程簪が座っていた椅子にもう一度腰掛ける、逃げてしまいたくなる感情を押し殺す。

「好き……私は、更識簪は…信一郎の事が、あなたの事が……好き……！」

腰を浮かせ、男の眠るベッドに腰掛けた。

「ねえ、信一郎……覚えてるかな……？」

静かに眠る男の頬を一度撫で、自分の青い花の飾りが付いた髪飾りに触れると、哀しそうな笑みを浮かべた。

「この髪飾り……初めてデートした時に、信一郎がプレゼントしてくれたんだよ……？」

静かな寝息を立て、動かない男の胸にゆっくりと頭を落とし、小さく震え、男の服を濡らす。

「帰って来てよ……信一郎お……！ 人殺しだって関係無い……また会いたいよ……！ 大好きだから、大好きなのに……！ 私の全部捧げたっていい……だから……だから……」

「お願い……帰って来て……!!」

「ん……うん……」

簪の耳に自分以外の声が入る、顔を上げると男が眠そうに薄っすら

と目をあけていた。

息が詰まる、直ぐに逃げ出したくなる、しかしそれを踏みとどまった、麗羅が、楯無が、一夏が、背を押してくれた、もう…逃げるのは止めよう。

意を決し、思い切り、カ一杯男を抱きしめる。

「好き…！ 私はあなたが…更識簪は籐ヶ崎信一郎が大好き！ 愛してる…！！」

そつと頭をゆつくりと撫でられる感触を簪が感じて顔を上げた、そこには男が優しい笑みを浮かべて右手で簪の髪を梳くように撫でていた。

「ムラサキナズナ、別名オーブリエチア、実物は見たことないなあ」

「……………花言葉は「君に捧げる」やな、ホンマ…」

……………買った時はそんな花言葉とは知らなかったな」

簪がキョトンとした表情を浮かべ男の顔を見る。

「随分泣いたみたいだな、目元が赤く腫れちまって…笑ってる方が可愛いって、言っただろう。簪？」

「あ、あ…あ…あ…！！」

「ただいま」

ニイ、とイタズラ小僧のような笑みを浮かべて簪の目元に浮かんだ涙を指で拭った。

「う、うあ…うああ…うああ…うああ…！！ ああ…うああ…うああ…！！」

# War of Verdict day

## なお話

戻ってきて早々俺に抱きついて泣きじゃくる簪の背を撫でながら思いつく。

俺が今の俺ではなかったときの記憶、何ともまあ確りと覚えてるもんで、にも係わらずそれは俺ではなく、しかし俺でという無茶苦茶な記憶だ。

それにしても、こうまで俺の為に泣いてくれるとは、いい女と巡り会ったもんだ。

『前世』の妻は俺の愛「した」女で簪は俺が愛「している」女、別物だな。

「…すまねえなあ、簪…：…守るって言ったのに、またお前を泣かせちゃった、ハツ…：ダセエな、俺も」

「バカッ、馬鹿ばかバカッ!! 絶対に許して上げなんかしないから…！ もう、どこにも行かせないから…：!! 絶対に離さないから…！！」

おっと、どうやら流石の簪もおこらしい。

どうすれば許してくれるのだろうか、絶対に許さないとか言われたし、無理だろうなあ…。

「許してくれ簪、心労で老けそうだ」

「知らないっ…：！ 老けちゃえばいい…：！」

「じゃあ死にそうだ」

そういつた瞬間簪に両手で顔を挟まれる、顔を逸らすことは許されない、目を逸らす事も雰囲気的に許されないだろうな。

真っ赤になった目で涙をボロボロ零しながら怒ったような哀しいような目で見つめられる。

「絶対…！！ それだけは駄目…：！ もう、そんな…：ことっ…：言わないで…！！」

「…ごめん…：」

真剣に怒られた、凄く反省。

A Cの投影型ディスプレイが起動し通信要請が発生、右手で受諾し画面が表示される。

『……信一郎様……なのですか?』

「そうだ、すまないね、姉さん…苦勞を掛けた」

『シンが、シンが戻ってきた時、言おうと思っていた言葉があるの……おかえりなさい』

「ああ、ああ…ただいま」

珍しい優しい笑みを浮かべながら言う姉さんの言葉を噛み締めながら返答を返す、思えば回りに随分と迷惑を掛けたようだ。

すると画面が切り替わり母さんがコンニチワ。

「おはようございます」

『おはようシン君、ジャスト三日だ、いい夢見れたかよ』

「なんだったつけそれ」

『もう数十年前だし覚えてないわ、ところでシン君には今からお説教をします』

「えっ」

『シン君、どうして一人で溜め込んだりしたの? どうして相談しなかったの? ママはそんなに信用できない? I B I Sにも相談できなかったの? 簪ちゃんには?』

「相談、できるわけない…」

『シン君、よく聞いて、カロード…いいえ、ママは私兵部隊を持つてるのよ、そんな相談なんてされた事一度や二度じゃないの、それにI B I Sも同様よ』

「ねえ、信一郎…私はね、例えば信一郎が何であっても構わない」

「人殺しだぞ、それも民間人を……10にも満たない小さな女の子を殺したんだ!! 馬鹿じゃねえか、そんな殺人鬼と一緒に居れる訳ねえだろ」

「舐めないで、信一郎…私は更識簪、対暗部組織「更識」の更識簪なの、たかが人を殺した程度で自惚れないで、私のお父さんも、お母さんも、組織の人たちも殆ど人を殺しているの……中にはやむを得ず民間人



を害してしまった者だつて当然いる」

「人殺しをステータスみたいに言うんじゃないやねえよ……」

「そりゃ無い方がいいステータスだからバッドステータスだけど……この世の誰もが一つは必ず後ろめたい物がある、その中でも突出した物かもしれない、でもね？」

「私にとっては例え何であろうと、信一郎は私を救い出してくれたヒーローなの、暗い世界に光を与えてくれたヒーローなの」

「とんだ最悪のヒーローだな」

「ダークヒーローつて言うのも悪くない、格好いいよ？」

「でも、だが」

「でも だって しかし だけど、そういうった類は禁止、もう一度言うから……もうどこにも行かせない、絶対に離さない、私はね、意外と重い女の子なんだよ」

「そうであつても俺ムグツ」

急に唇を塞がれた、何でとは言わんが。

「ぶあつ……今度から言い訳しようとしたら、こうやって塞ぐからね」

「……俺は、んぷ」

「ん、ちゅ……ぷは……」

「本当に、んむっ」

「待ってく、んぐ」

「喋れな、っ」

「今齒が当たっ」

いい加減普通に話がしたいのでこう、年齢的には余りよろしくないアンバランスなキスを交わして簪を蕩けさせる、前世で鍛えた俺を余り舐めんで頂きたい、経験豊富（人数一人）だぞ。

「分かった、だが……後になって後悔しても、遅いぞ、俺もお前を離したりしないからな」

「は、あ……しないよ……後悔なんて……」

『お話、また始めていい？』

と、母さんの声が聞こえると簪が急に艶っぽい表情から焦ったように真っ赤になった、始めたのはお前だぞつと。

『そうね、ママやIBISに相談し辛いなら簪ちゃんが居るじゃない、簪ちゃんはシン君が思っているより何倍も何十倍も強い女の子よ、簪ちゃん、息子をお願い致します』

『はい、任せてください、その………お、お義母様』

『うふふ、いいものね、お義母様か……早く孫の顔が見たいわ』  
気が早い。

『あ、あと十ヶ月ほどお待ちしていただければ……!!』

気もそうだが年齢も早い、あと2・3年待ちなさい。

『18になるか卒業してからな』

『えうう……』

『ふふ、シン君。本当に、何かあったらすぐ相談してね?』

『ああ、わかったよ』

『じゃあね?』

『じゃあ』

通信回線切断、一息つく前に手を伸ばしちっふーに渡されていた通信機を手取る。

『ちよつとだけ離れててくれ』

『やあ……』

『ちっふーに通信するから、な?』

と、言うど渋々とギリギリ通信画面に入らない距離へと簪が離れた、本当にギリギリ、1センチこっちにずれたら多分ギリギリ見えるようになる。

『まあいいか、通信起動、ポチツとな』

3秒以内に通信が繋がった、待機してたのか知らん?

昔の感覚を思い出しおじいちゃんの笑顔になってみる。

『如何致しましたか』

『すんまへんなあ、ちよつと頼みたい事があるんやけども……』

『分かりました、今向かいます、そのまま内容を』

『ちよつと明日からなあ……』

『はい』

簪が冷たい目をしている、あ……あの簪の目……

養豚場のブタでもみるかのように冷たい目だ

残酷な目だ……「かわいそうだけどあしたの朝にはお肉屋さんの店先にならぶ運命なのね」ってかんじの！

「復学してえ、どうだろうかちっふー」

『なっ?! 籐ヶ崎なのか?!』

「遅かったじゃないか……目的なら既に果たしたよ、彼女がな……」

『待っている、直ぐそちらに行く!』

簪と戯れながら待つこと数分、そこらに転がっている義肢とは別にセラフのパーツを展開しておく、すると自動ドアが開いて焦った様子のちっふーが飛び込んできた。

「やっぱり、ここに来た。怖くてたまんなくなるんで、すぐに分かる。

アンタが近くにいるとね」

「…お前が呼んだような物だろうが、阿呆」

「くっは、籐ヶ崎信一郎。ただいま戻りました」

すちや、とおもむろに出席簿を手に持ったちっふー。じよ、冗談じゃ……

「3日分の補習、連休明け直後でよかったな、それにもうすぐキャノンボールファストがあるのも幸いした、それほど補習は必要無さそうだ」

「トラウマで精神崩壊した生徒が復帰した直後に補習とは、随分と酷な……見逃してはいただけませんかねえ?」

「もう後遺症はないだろう、お前の事だ」

「いやあ、恥ずかしながらそうでもないんで、今も眠るのが怖いぐらいなんです。簪と一緒に安心できるんですが」

小さく震える右手を左手で押さえる、どうも一朝一夕でどうにかなるものではないらしい、難儀なもんだ。

「……だが授業に付いてこれるか? お前の成績は技術関連意外は可と言った具合の筈だが」

「まあそこは愛しの簪に教えてもらいます、もう簪に依存しねえと生きてくのもままならねえや」

俺は簪の為に生きて行くし簪は俺のために生きて欲しい、簪が自分

は思い女だと言ったが俺も相当重いんだから救いようがない、それに体重も重いし、じやつかん痩せたけど。

「私も……それで、ううん……それがいいんです。助けられるばかりじゃなくて、支えられるばかりじゃなくて……私は信一郎を助けたい……支えたい……」

「……いいだろう、それほど言うならばそれでいい、だが特別だぞ」

「ええ、感謝します、それと特別ついでなのですが」

若干簪が近付いてきていたのでそのまま右手で肩を抱き寄せ抱きしめる。

「二人で眠るのは怖いので、簪と一緒に寝たいのです。詰まる所同部屋になりたいのですが」

「……何を言っているのか分かっていいるのかお前は」

「勿論、その上で言ってますが」

むん、と腕を組んで考え込み始めたちっふー、よくよく考えてみると別にセラフにする必要ないんじゃないだろうか、義肢としては転がってる物の方が性能はいいし。

まず片足ずつ解除し、ベッドの上にある脚を手にとって接続する。

動作確認をしたら続いて地面に転がり落ちていた腕を取り、腕を解除し接続、動作確認の後ちっふーに向き直った。

「……私はただの教師の一人でしかない、それ程の権限は私にはないぞ」

「あら、ではその権限があればいいんですね？」

いっちーと同部屋になろうと学祭ではちちゃけた人が何言ってるだと思ったらそうか、それ程の権限がないからルールに則ってイベントに参加してたのか。

なんて考えているとちっふーの背後から声がする。驚いた、もうどうしようもない位嫌われているもんだと思ったが。

「更識楯無か、なるほど、生徒会長であるお前ならその権限はあるな」「そういう事です」

振り向いて入り口の方を見るちっふーと扉をゆつくりと閉めるたてにゃん、簪がその姿を見て随分と驚いた様子だ。

「お姉ちゃん……?! 手は、右手は大丈夫なの……?!」

「心配しないで簪ちゃん、カレードの技術って凄いわ、もう完治に近い状態まで治されたんだから、少し身体が熱いような気もするけど」

はて一体何の話をしているのか、俺にはサツパリわからん。

「さて、1年4組、日本代表候補生、更識簪。1年1組、籐ヶ崎信一郎、あなた達は生徒会長権限によりお互いの部屋での自由な移動、及び宿泊を許可いたします」

「随分と毛嫌いされていると思っただがな」

「そりやあただ人を殺してのうのうと生きてたら正直軽蔑するわよ、でもまあ……虚に映像を見せられてね、籐ヶ崎君も何も感じなかった訳じゃないし、何よりも精神が崩壊するぐらい悔やんでたって言うなら人殺しも是とする私達のほうがアレだしね、結局同じ穴の貉みたいな物よ」

「お姉ちゃん……! ありがとうございます……!」

ゆつくりと近寄り抱きついた簪にたてにゃんは柔らかい笑みを浮かべ簪の髪を梳くように撫でる。

「それに、心の内を曝け出して喧嘩するってのも中々いいものね、凄くすつきりしたしそのお陰かも」

「…ありがとうございます、たてにゃん……いえ、ありがとうございます。楯無さん」

「お義姉さんでもいいわよ」

どうやら義姉と呼ぶことも許されるようになったらしい、一体俺が呆けながら空を眺めている間に何があったのやら。

「ならば、言う事は多くない、まずは…籐ヶ崎、お前は明日から授業に復帰しろ。だが無理はするな、多少の優遇はしてやる」

「了解」

「先程少し言ったと思うがもうすぐキャンノンボールファストが開催される、今年是一年も参加となる、理由は今年の一年生に専用機持ちが多いためだ」

「と言うのは建前で実際は立て続けのイベント時の襲撃によりデータやら実戦成績が出ない事が多かったから少しでも量増しするためよ、各国から文句が多かったのよね」

「楯無…」

「いつけなあい☆」

テヘペロと舌を出すたてにやん、本当にこういうのが似合う人だ。「怒られる前に逃げなきゃ、そうだ、籐ヶ崎君…簪ちゃんを幸せにしてあげてね」

「任せてくれ、オレは迷わない。敵が目の前に現れば、叩き斬るまでだ！」

「そういうちよつとベクトルが外れた決意はいいかな、簪ちゃん、籐ヶ崎君に幸せにして貰いなさい、もう何もしなくていいなんて言わないわ、しつかりと籐ヶ崎君を支えてあげなさい、その為の努力は怠らない事」

「うん…もちろん、ありがとう…」

よろしい、とにっこり微笑んだたてにやんがどこか大怪盗の3代目を思わせる声で「あーばよーとつつあくん」といいながら走り去った。それを見届けたちつぷーが無言でタッチパッドから通信機能を起動させる。

『はい、どう致しましたか？ 織斑先生』

「…布仏虚、更識楯無を見つけたらそれとなく捕まえて私に連絡を入れてくれ」

『はあ……また何かしたんですね……わかりましたしつかりと捕まえておきます』

「すまんな」

やめたげてよお！

「では、また明日会おう……くれぐれも変なことはしないように、当主が許可し、いくら婚約しているからと言ってここは学校である事を忘れるな」

「了解」

「はい…」



うに優しく撫でながら。

く く く く く く く く く く く く

「神話に置いて（神、）とは力だった、詰まる所ガチタンは最強だ」  
最早懐かしいとさえ感じている一年一組の自動ドアが作動、開くと同時にガチタン最強説を唱える。

「シン?! お前、随分と……やつれたな。それに白髪も生えて髭も無精じゃねえか、40台後半にしかみえねえぞ」

「そりゃ一週間ちよい飯を食わなきやつれもするさ、それと放課後俺のリハビリに付き合え、コジマパーティの開催が決定だ」

唐突に遠い目をするいつちー、周りを見れば他の面々も驚いた様子だ。

「OH:てか飯食ってないのに来て大丈夫なのかよ、倒れるぞ」

「朝は食ってきた、簪の作ってくれたおかげ美味しかったです、三杯食った」

「元氣じゃねえか」

落ちた筋肉は能力で作った、脂肪は元々殆どなかった、などといったと雑談していると教室の扉が開く、目を向けると小さく震えながら目に涙を溜めた本音ちゃんが見ていた。

ぼんやりゆったりしているとは思えない武人も真つ青な踏み込みと共に俺へと飛び込んできたので出来るだけ優しく受け止める。

「シンにー! シンにいいい、うわあああぁくん! 良かったあ、良かったよおく!!」

「ああ……ごめんなあ、随分と心配させたみたいで」

実際泣いているのかは顔が見えないので分からないが俺の鳩尾周辺に顔をこすり付ける本音ちゃん、孫をあやす様に背中を優しく叩きながら頭を撫でる。

「おはよ、籐ヶ崎君。本音ったら最近ずっと上の空でき、すっごく心配してたんだよ」

「おはよう、まあ……この様子を見ればよく分かるさ」

「それにしても、一体どうして休んだの?」



「コジマ粒子の汚染が遂に無視できないレベルまで進行した」  
「アカン奴や」

「冗談だ、食中毒だよ、ただの」

谷本さんの言葉に対して適当な嘘を吐く、ばれんだろ。

「ダウトですわ」

「うん、ボクもダウト」

「ダウトだな」

唐突に横からせっしーとシャルりんとモッピーの声、馬鹿な…こんな事は…！

「たかが食中毒程度で休むはずはない、と言うかそもそも籾ヶ崎は食中毒なぞならんだらう、と言うのがこの3人の見解だ」

「らうりーか、随分とまあ酷い扱いだな俺は、ところでらうりーの見解は？」

「どれほど奇妙奇天烈摩訶不思議奇想天外四捨五入と言っても人間である事には違いない、風邪だと思っただけだが、食中毒とは実にお前らしい」

古い、らうりーの知識が凄く古い。

どうせ俺が会った事の無いクラリツサとやらの人物の所為だらう、らうりーから恥じらいを奪っただけでは足りぬらしい。

すると若干呆れた表情のらうりーが俺だけに見えるよう髪を掻き上げるついでに首元をトントンと指で叩く、ISが普及した今ではよくある秘匿回線のハンドシグナルのような物だ。

音声通信を起動してサイレントモードにする。

『ふっふっふ、何用かね』

『……PTSDか？』

ではな、といっちゃん達に挨拶をして自分の席に戻って行くらうりー、こちらには一切注意を向けないあたり凄まじく自然でよく訓練されている。

『よく分かったな』

『まあな、この教室でそれを理解しているのは布仏と私、それと織斑先生、山田先生の4人ぐらいだろう、話し辛いかも知れんが私は軍人だ、



ね？ そのための先生でもあるんですから」

「肝に銘じておきます、では俺はいつちーがりハビリに付き合ってくれるので」

「あ、そうだー」

真耶先生が再度俺を引き止める、まあ特に急いでいるというわけでもないので問題ないが。

「お髭、ちゃんと明日は剃って来て下さいね」

「アツハイ」

お髭を剃れとのお達しが出た、かつて、俺を老け面にさせた原因。そのひとつが、このお髭。

ダンディー、おっさんの中の可能性。そんなものは、ただの妄言に過ぎない。髭はシェーバーによって滅びる、それが必然だ。

移動をしながらACのデータベースを更新、数ヶ月ぶりの更新だった為か新規パーツが凄まじい数追加されていた。

コジマエネルギーを流用した大容量光速通信で新規パーツデータをACに追加、その過程で新規パーツに名称をつけて行く、それと平行的に新規パーツのスペックと動作を確認。

うむ、なんだか楽しくなってきた。

「む、籐ヶ崎か、一体どうしたんだ、ニヤニヤして」

「ん？ らうりーか、いやな、今からいつちーにリハビリを手伝って貰おうとしてたんだがな、移動のついでにACの新規パーツを追加したら面白い物が大量にな」

「ほう、気になるな、丁度いい、私もついて行って良いか」

「構わんよ、ついでだ、らうりーには誰よりも先にこのデータを見せてやろう」

「いいのかー」

「応よ、まずコレなんだがな、らうりーはこのサイズの口径のスナイパーキャノンをISで扱えるか？」

スナイパーキャノンのスペックと実物3DCGをらうりーへと見せる。

「ふむ、私のレーゲンならばAICと併用して撃てるが固定が必要だ

な、少なくとも移動しながら撃つのは出来ん」

「で、それとほぼ同じ口径のスナイパーキャノンを構えず撃つ事が出来る銃身自体を内蔵したパーツだ」

「腕部か、背後にあるものがバレルとしてどうするつもりだ」

「ここに変形ボタンがあるじゃろう？　こうじゃ」

左肩を基点として砲口が上を向く、既にらうりーの目はデータに釘付けた。

「お、おお……！」

砲身が下部にスライドし、地面と水平になる。

「まさか、まさか……!!」

砲身が肩のパーツから迫り出し腕自体が銃身となり、おまけで砲口がカシユンと開いた。

「わあああ！　真ん中だああああ!!」

目をキラツキラ輝かせてデータホログラムを見つめる、まるで小さな女の子が毎週のプリキ〇アを楽しみに見てるようだ、俺の腕を抱きしめてでも近くで見ようとしている。

見れば見るほど年相応といえないほど幼げな少女だ、見ている物が兵器でなければの話だが。

「も、もう一度、もう一度頼む！」

と言われたので今度は展開状態から収納状態への変形を見せる。

「凄い！　凄いぞ！　流星はカラードだ！　他のも！　他のも見せてくれ！」

「わかったわかった、じゃあ次はレーザーキャノ——」

『信一郎……？』

ぞわり、と俺の背を良くない物が走り、駆け上がる、小さくて可愛らしい声なのにもまるで深淵から響いてくるようだ、呼吸する事さえ恐怖、意を決すか否かなど関係なく無意識にゆつくりと背後に視線を向けた。

そこには、薄ク笑ミヲ、ウカベル、簪ガ、イタ。

別段怒りの表情を受けべている訳でもない、別段拳を握っているわけでもない、ただ簪にしては珍しく歯を見せる笑みを薄つすらと浮か

べていたのだ。

ある人は言った「笑顔とは本来攻撃的なものである」と、歯を剥き出しにするのは威嚇の為だと言うからだ。

「ねえ……どうしてボーデヴィツヒさんが信一郎の腕を抱きしめてるの……」

「おお、更識簪か！ 凄いぞ！ 私はたった今籐ヶ崎にすごい物を見せてもらったのだ！ 凄く大きな砲塔が上に反り上がって穴を貫通したのだ！ それも凄まじい勢いで撃つんだぞ！」

「へえ……信一郎……へえ……？ 大きな砲塔が？ 反り上がって？ 穴を貫通して？ うつんだあ……へえ……」

「こんなに興奮したのは久々だ！」

ああ……どんどんボロボロに……

「ま、待て……ちが……！ お、俺は……別にやましい事など……!!」

簪が下を見つめながら滑るように迫ってくる、凄まじい速度で近づいて来た為一歩たりとも後ずさる事など出来なかった。

ふわりと抱きしめるように俺の首に腕を回し俺の耳元に息がかかるほど顔を近づける。

「離さないって、イッタノニ……」

「い、ひ、あ……！」

俺の物とは思えないような上擦った情けない声が出る、俺は無実だ、本当に。

「ほら見ろ、更識簪！」

いつの間にか俺のホログラムを移動させ簪に見える位置に持ってきて変形機構を作動させる。

「この砲塔が上を向いてだな、肩の穴を……どーん！ それで撃つらしい！ 凄いな！ カラードは！」

「……………」

「俺は……無実です……！」

最早若干視界がぶれ始めてる、それと一緒に情けない声も漏れ始めた。

そうしていると背中を突き刺すような冷たさが無くなって身体を

ほかほかと暖かさが包み込む。

「ごめんね……疑っちゃって……信一郎……」

「あ、うむ、すまん、こっちこそ」

トラウマの上書き更新を行われそうになっていると俺の服の袖をぐいぐいと引つ張つてくる者がいる。

「籐ヶ崎！ レーザーキャノンを早く見せてくれ！」

俺の恐怖もどこへやら、ぽひゅうとマヌケな音を立て緊張感がどこか遠くへと消えて行く、苦笑いしながらレーザーキャノン武器腕をホログラムに映して変形機構を作動。

「おお、これが、おお！ 回るのか！ シリンダーがこんなに回るのか！」

く　く　く　く　く　く　く　く　く　く　く　く　く　く　く　く

「おつまたー」

「おお、来たか！ ラウラと簪も来たのか」

「うむ、籐ヶ崎が面白い物を見せてくれたのだ、これならば嫁も間違いなく目が釘付けになるぞ！」

「信一郎が体調を崩さないか心配だから……」

更衣室を抜けた共通ピットでいっちーが白式のスラスタール出力調整しながら声を掛けた俺のほうを向く、なんとまあ少し見ない間にスラスタールの出力を弄れるようになってたとは。

「ああこれ？ 適当、と言っても何回かテストしてるんだけどな、その度に速度が合わないわグリッブ悪すぎてシールドバリアに機体擦りつけたりするわで大変だ、一応元々の出力比はメモってるから戻す事は簡単なんだけどな」

「いいことだ、試行錯誤して何度も失敗するのはどんな研究者でも通る道だ」

「そうだな、私もレーゲンの調整には手を焼かされた、出力が合わん事など弄っている時は日常茶飯事だな」

「えっ……っ？」

機体調整あるあるを三人で話していると簪が疑問を持った声を出

す。

「ミサイルのランダム射出航行、同時着弾調整プログラムの新規作成は手間がかかったけど……出力調整ぐらいなら……簡単じゃない……？」

「あー、アレだ、簪はベクトルの違った天才だから」

「そういうえば、ISをほぼ一人で作り上げたんだったな」

「シンの嫁さんマジやべえ」

「えっ……？ ええっ……？」

わたわたと混乱する簪が実に可愛らしい、だがそろそろリハビリに付き合っつて貰おうといっちーに目を向けたら同じ事を考えていたの  
か目が合った、これには苦笑い。

「シン、リハビリつつつたけどアリーナを見てくれれば分かるように  
キャノンボールファストに備えて練習中の生徒で一杯だぞ、いくら  
専用機でもここに割って入るのはなあ……」

「それは心配ない、確かに多いしこれ以上はISの数が問題だがそれ  
以上にピット備え付けのコンピュータ前にいる人間が多いとは思わ  
んか？」

「まあ、確かに」

周りを見渡せば部屋の其処彼処に特殊なHMDを装着した生徒が  
PCと顔を合わせている。

「これな、ISシミュレータなんだよ、だってそうでもないISの数  
とアリーナの面積、及びタイプ別の数、それと生徒の数が違いすぎる  
からな、最悪1年間授業以外でISに触れない生徒も出てくる」

「なるほどー」

「まあ専用機持ちの俺らが知らんで当たり前なんだが」

簪がうんうんと頷いている、そりや代表候補になってから何もせず  
候補であり続けることなんて出来ない、ISシミュレータを使用した  
テストや訓練を何度も何度もやってきたはずだ、簪の専用機が完成し  
たのが極々最近なのだから。

「さて、まずは単純に戦闘訓練を2・3回するか、それからスピードテ  
ストにも付き合っつて貰うぞ」

「おうよ……ところでコレでどうやって白式を使うんだ？」

「……まずそのコンピュータを俺の使う物と接続してからそれ以外から遮断してスタンドアロン化させろ、次に専用機の待機状態とコンピュータを接続してHMDを装着するんだ」

「なるほど、ところで前々から思ってたんだが……」

「ジャック、どうした……」

「シンの専用機の待機状態って……何？」

「秘密、簪にも言ってるねえんだ、いいからとつととHMDを装着しろ」「そりゃ残念」

笑いながら残念そうは見えないいつちーがHMDを頭に装着、俺がレギュレーションとアリーナを設定して接続させた。

ついでに二人の間にホログラムを展開、機体の詳しい情報以外のバトルデータを外部から見れるようにする。

なんかゲーセンで格ゲーしてるみたい、丁度コンピューターで相手の顔が見えないし対面状態だし。

「おお、すげえ……まるでリアルにISに乗ってるみたいだ、アリーナのワイヤーポリゴンがちやちいけど」

「出来るだけ静かにしてるよ、いるのは俺らだけではないからな」  
俺の対面上にいる人の乗っていないガワだけの白式が周りをキョロキョロと見渡す。

「なあ、シンはどこだ？」

「まだ機体を展開していないからな、ガワだけ読み取るシミュレータでは俺の姿は見えないんだな、よし、ちよつと無茶させるか。チェンジ、アーマードコア、コジマ色々てんこ盛り」

「ひっでえ名ま……え、ええええええええええ?!」

「煩いなコイツ、たった今静かにしろと言ったのに。」

「な、なんだよそれ……!! 無理やり全部乗つけました感満載の機体……!!」

「よく分かったな、コジマ兵装を全部乗つけた、さつきからシステムエラーが煩くてたまらん」

だからとつとと始めようぜ、と考えながらライフル、キャノン、武



器腕のチャージを開始する。

「ヤバイ、シンが緑に輝いてて人の形がわからねえ。深緑のシン、なんちやって」

「そろそろ、死んでもらおうか」

ふざけた事をのたまったいちーにコジマライフルを一発お見舞い、うひいと妙な声を上げながら回避した。

即座にコジマミサイル二種を撃ち、武器腕コジマを片腕撃ち、最初に撃ったライフルをチャージ開始、PAが減少してきたらコジマ粒子を周囲に拡散しPAを回復。

「冗談じゃねえ冗談じゃねえ！ 畜生、喰らえ！」

「たかが荷電粒子砲一発程度喰らうか、キノコ積みランスタン舐めんな」

「なんだよこのバ火力と装甲！」

まあ弱点はしつかりとあるんだがな、いちーは必死で気付いていないかもしれないが俺、実は一步も動いてないんだよな、理由が重量過多と最早一秒噴かす事も出来ないEN負荷、しかもコジマエネルギーだつて最初以外全部コジマ電池に頼りっぱなしで弾切れしないVR空間だからいいがリアルでこんな事しようだなんて思えねえ。

「ぬわー！」

ミサイルに巻き込まれたようだ、何で斬りにいったかねえ。

ここで体勢を立て直したいっちーが器用にコジマライフルやキャノン回避しつつ近付いてきた、昔はこんなこと出来なかったのに成長したもんだ。

「ツシャオラアアア!!」

「AA起動」

「アバーッ！」

90年代の漫画のように吹き飛ばされていくいちー。

「こなくそー！」

「AA起動」

「チャージ早過ぎィー！」

即座に体勢を立て直して再度突っ込んできたので電池で急速回復

し、即座にAAを展開、今度は耐えるようにブースターを調整しているらしい。

AAが終わった瞬間に瞬時加速で右手の刀と左手の爪を振りかぶりながら接近。

「怯むかああああ！」

「ゴジマパンチ」

「見切った！」

「あ、斬られた」

「つしやあ！」

とまあ一連の流れでみえみえのゴジパンを容易く回避され零落白夜で一閃、返すように爪で背中を切り裂かれる。

俺のキルゾーン外に潜られ、且ついつちーのキルゾーンに入ってしまったのもうこの機体でなす術は無い。

「投了、俺の負けだ、この機体ではもう勝てん」

「えー、随分とあっさりしてるなあ……」

あまりにあっさり負けを認めたので何やら納得がいかない様子だが潜り込まれた以上連撃でPAの回復は無理、故にAAを起動できない、移動が出来ないので逃げる事も出来ないし逃げたとしても簡単にくつつかれる。

この状態で使えるのはゴジパンとミサイルぐらいだがミサイルのロックがまず近すぎて無理、パンチも当たるとは思えない、故に俺はもう詰んでるのだ。

「よし、じゃあ次だ、先に言つとくが俺が次に使う銃はスナライだけだぞ」

「いいのか？ そんな事言つて」

初期位置がりセットされ再度同じようにガワだけの白式が俺の視界に映る。

H12 Swallowtail

C03 Malicious

L03 Frequency

SUZUMUSHI mdl. 1

BA—309

USUGUMO mdl. 3

R AM/SRA—133

L AM/SRA—217

「喜べらうりー、もう一つサービスで見せてやる」

All Vendetta

「さあいつちー、見惚れたら落ちるぞ。チェンジ、アーマードコア、  
『<sup>V</sup><sup>E</sup><sup>R</sup><sup>D</sup><sup>I</sup><sup>C</sup><sup>T</sup>』<sup>D</sup><sup>A</sup><sup>Y</sup>を告げる、評決の日」

## 扱い辛いパーツとかつて話だが、最新型がなお話【挿絵追加】

さて、いつちーが怪訝な顔をしているな、まあ外見だけで言えば今まで見たことのないパーツだらけだからだろう、それも複数のバリエーションからなるUCR-10シリーズと違い完全新規だ。

「おいシン、それ腕離れすぎじゃねえ？ 千切れてんじゃねえの」

「ああ、前にも似たような説明しただろ、量子変換してるって」

「そう言えば、じゃあ始めるか」

「おうよ、さてカウント起動」

どうやら腕パーツの接合部だけに目が行ってたらしい、もつと見るべき所があるだろうに。

残りカウント5、4、3……

「行くぞッー」

「くんな」

開始と同時に腰だめに刀を構えて姿勢を低くしたいいつちーに背を向けず全速で後方へグライドブースト、あつズリイ、と言いたげないつちーに構わずスナイパーライフルを撃ち始める、こちらら狭めのFCSだから高速機に寄られる訳にはいかんだよ、サブコンも積んでねえし。

「あつズリイぞー！」

「本当に言いやがったよこいつ、遠距離機が近接機に寄るわけねえだろバカか」

「そりゃそうか！」

距離を詰めようと飛び廻るいつちーから逃げるようにGBにHBを織り交ぜながら、エリア端の壁（チャチなワイヤーCG）でブーストドライブを使用して消費ENを節約して逃げ回る、一次ロック警告と同時に横へとHBをして荷電粒子砲を回避、機体制御や近接戦闘に關しては凄まじい練度を見せ付けてくるが遠距離装備に關しては素人もいい所だ、殆ど何も考えず二次ロック完了と同時に撃つてくる為

H Bの最高速度時に発射されH B終了時に着弾する頃には着弾点は10メートル以上向こうだ。

対照的にこっちはこういうピーキーな戦いに離れている、全弾着弾はもういつちーには無理だが確実にH I Tを奪える。

まあ尤も、いつちーが被弾も考えず一直線に突っ込んでくればこの機体の最高速度では逃げ切れんのかな。

「ふむ、このままじゃ新装備のお披露目も出来んじゃないか、もつと粘れ」

「クソ、的確に避けやがって!」

「じゃあまずはそのトリガーハッピーに近い癖を治せ、確実に相手に当たる時に引き金を引け、お前のソレが当たった例など数える程しかないじやろうて」

「老人みたいな喋り方になってるぞ!」

「すまん癖になった」

「いかんいかん、だがまあこれで問題が出るような癖ではないし治さんでもいいだろう。」

「さて簪、いま観客はどんなもんだ?」

「へあ? 観客?」

「えーと……、15人ぐらい……かな……?」

「上々だ、さあいつちー気張れ、俺に一撃も当てれず落ちれば大恥をかくことになるぞ」

まあこちらは戦法を改めるつもりはないがね。

「リスクなくやるのが、俺の主義でね。つまらん戦いになると思うが、勘弁してくれ。負けるのは嫌なんでね、悪いが、いつちーが負けてくれると助かる。キヒヤハハハッ」

「ええい、この際プライドは抜きだ!」

「馬鹿正直に突っ込んでくるとは、正解だ、だが……」

変形機構作動、ライフルを持った腕をそのまま折りたたみ後部へとスライドさせる。

武器を収納した今がチャンスと踏んだのか瞬時加速を作動させて両手で刀を持ち向かってきた。

こちらも後ろへハイブーストを噴かせつつ畳んだアームをロック、肩パーツから起動したアームマニピュレーターで肩後部の「持ち手」を掴み深く差し込むように接続、即座にロックし固定パーツを解放。

展開時に自分のパーツと接触しないように角度を調整し。

「オオオオオオオツ!!」

逆袈裟斬りで振り上げてきた刀に叩きつけるように展開、いつちーの手から刀を弾き落とし即座にブーストチャージ、距離を取る。

自動で刃が砥がれ、火花を散らした。

「な、なんだよ…それ…!!」

すると周囲かららうりーを筆頭に歓声が上がる、どうにも皆様方は男臭い趣味をお持ちのようだ。

「扱いづらいパーツとかって話だが、最新型が負けるわけねえだろ！  
いくぞおおおあ!!」

いつちーが体勢を立て直すよりも先に突っ込んで斧のような形状の巨大なブレードを叩きつける。

だがまあ流石とは言うもんで左手の爪が装着された装甲で根元を押さえられ威力を削られた。

荷電粒子砲が俺のほうを向くのを確認すると同時右腕のブレードで砲口を全力で弾き上げると砲口が破片を撒き散らし飛んで行く、バカみたいな威力だな。

まあ相応に重いため両手を使った攻撃の後はブレードを即座に再度扱えないんだがな、砥いでる隙を狙われないように脚部出力のみの蹴りで横へとずらし、砥ぎ終えたブレードを両手連続で左へと切り込む。

曲芸の如く刃の間を通り抜け回避される、突き出された爪が俺のコアに食い込む、咄嗟の物だろうが到底ダメージは無視できる物ではない、どうやらあの爪はTE属性らしい、そう何度も喰らうわけにもいかん。

不要と断じたスナイパーライフルをパージ、左側にAMAGORO Model 1 右側にAM/SHA-109を展開、左に振り切ったブレードを×印を描く軌道で右へと全力で振る。

再度曲芸染みた起動で回避される、が、この程度想定範囲内だよ!!

即座に振り切った力を殺さず背面をいっちらに向け突き出された爪を天衣で受け無力化、驚きの声を上げたいっちらを確認するよりも早くブースターの向きを調整しブレードをいっちらに全力で叩き落す。

防御の間に合わない白式の肩にブレードが食い込み隕石もかくやと言う速度で地面へと叩きつけられた。

一切合財何もかもを込めるようにブレードを砥ぎ白式が落ちた方向へGBとHBをエネルギー全て使い潰す勢いで突撃、地面で仰向けになった白式の右手が何かを掴んでいるかのような形状をしている、直感的にヤバイと感じぐると半回転、光の粒子が細長い形状に変化し俺を穿つかのごとく突き出された。

咄嗟の賭けは俺の勝ち、突き出された刀身の輝いた雪片式型は背部のKEシールドに突き刺さり、俺へのダメージを0へと消す。

回転の勢いも乗せ右手を突き出された白式の身体へとブレードを叩きつけ装甲を砕き完全に破壊した。

「ク、キヒヤハハッ！ 残念だったな、俺の勝ちだ」

「だアーツ！ 負けた！ てかズリイぞ！ 使うのはスナライだけって言ったじゃねえか！」

「いや嫁よ、今のは文句無しに籐ヶ崎の勝ちだ、まずは遠距離からの攻撃に徹するのは対近接格闘機の鉄則であり、その後の武器使用も使ったのはブレードと盾のみ、籐ヶ崎の言った通り使用する「銃」はスナイパーライフルのみと言う条件から外れてもいない」

「違うんだラウラ！ 何よりもズリイのはシンの使ったブレードが格好すぎるんだよ!! 俺のだってそんなに格好よけりやあいいの!!」

ああ、ズリイってそういう。

「うむ、まあ格好良いと言うのは全力で肯定しよう、籐ヶ崎から聞いた話ではスナイパーキャノン、レーザーキャノン、そしてたった今使用したブレードの他にも幾つか種類があると聞く、今まで見た全てがなんともいえない高揚感を生んでな、是非とも全て見てみたいところだ！」

「まあそれは機会があればな」

「機会って……今さ……！」

と簪が呟いて十数秒以内に打鉄式式が電子空間内に出現、じよ冗談じゃ。

どうやらビジュアル設定も弄ったのかちやんと中身もある、ふんすと意気込む簪がこわい。

「面倒くつせえのは嫌いだけどよー、こんな面白そうなもん見せられてまだあると言われたら、なあ？ フォルテ」

「そうっスね、見たくもなるっス」

「カラードの技術力がアタシら二人の代表候補生で専用機持ちに通用するかも気にはなるしよお」

「久々に楽しそうっス！」

との会話と共に出現する二つの専用機、俺の記憶が正しければワールドブラッドとヘルハウンドver.：何かだろう。

冷血動物と地獄の番犬とは、勘弁していただけませんか。

カラードの情報では二人ともステインガーみたいな人間と聞いていたんだが、管制室ちゃんと情報を伝達しろよお！

「では私も加勢するでしょう、先輩の胸を借りるつもりでな」

「らうりーは俺の仲間になってくれるのか！」

「そんなわけないだろう」

「何このHカーパルスより酷い状況、オールドキングをくれ」

眼前には白式、打鉄式式、コールド・ブラッド、ヘル・ハウンド、シユヴァルツエア・レーゲンと見事に特化だの機体性能が異常に高かったりだの操縦技術がぶっ飛んでたりだのサポート機だのとヤヴァイメンツが勢ぞろい。

『ではせめて私だけは加勢致しましょう、姉の勤めです』



と空間に声が響き俺の横に一機の四脚が姿を現した、アルゼブラのコア、同皿頭、軽四脚、ローゼンタール腕部。

あらかんのお姉ちゃん、どうしてこんな所に。

「お、義姉様……?!」

『はい、そうです。簪様……いいえ、簪と呼ぶべきですね。改めまして皆様、始めまして信一郎の姉でございます』

「……IS学園の生徒……?」

「いや、これは……俺のパーツ通して接続してるな……」

『言葉など既に意味を成しません、見せて頂きませう、皆様の力を』  
勝ち確、やったぜ。

戦闘開始のブザーと共に我が姉が残光を残して消えた、ヤバイ。

「な、何だ?! つぐ! 後ろか?!」

『残念でしたね、側面です』

「くっ!」

『今は背後です、どうしました、織斑様? 私を捉えられませんか?』  
いつちーがグルングルン周りを見ながら仰け反ったりしてる、えぐい事をする…。

「だ、駄目だ…速過ぎてAICで捕らえられん…!!」

「んじやまあ織斑君が足止めしてくれてる間にアタシ等は籐ヶ崎君を狙うとすつかあ」

「っスね、さあて覚悟するっスよお!」

RDみたいな喋り方しておっからに!

「WAB—123! 換装Fs—L—E28!」

「なんなのかはよくわかんないっスけど取り合えず突っ込んでボコりやイイって先輩が言ってたっスよ!!」

「オイ、アタシそんな事言った覚えねえぞ」

手を腕部装甲に引き込みロック、さらに腕部を畳み込み後部のパーツを90度旋回させ垂直にし、前方へと迫り出させる、同時に前部にあった装甲を下部へとスライドしミサイルサイロを開く。

連装ミサイルを喰らえっ!

「うええッ?! それミサイルっスか?!」

「慌てんなよ、こう大した数でもねえだろ」

「め、面食らっただけっスよ！」

ち、畜生、なんてこった…的確に打ち落とされてやがる、流石は先輩方で専用機持ち、代表候補とはかくも剛の者か！

セラフで余裕の粘り勝ちしたけどガチでやったらたてにやんに技術で勝てるビジョンが浮かばねえ。

この二人相手でも余裕なんだろう、IS学園は化け物だらけか！

「あらぶる俺のミサ腕！ 全弾撃ち尽くすぞおおああ!!」

「何だこれ！ おもしれえ！ バカス力撃つてきやがる！ だっははは！ あたし等二人係でも迎撃で精一杯か！ 最ツ高！ 惚れるねエー！」

「うっひひ！ 冗談じゃないっスよお！ こういうの苦手なんスから！ もっとグワーツと行ってズバーンのドツコーン！ ってのが私等のやり方なんスよ！」

「うっひよお！ 攻撃回避しながらミサイル垂れ流してるだけなのにアドレナリンどばどば出てきやがる！」

いっけー等と軽くラリつていと処理限界を超えてきたのか滞空しているミサイルが目に見えて増えてきた、たった今俺が空中に放り出したミサイルとは別に48機のミサイル。

あのねー、なんかねー、こっちに飛んできてるのー。

「簪の山嵐だこれええ！」

「騙して悪いけど…これも仕事だから…落ちてもらうね…？」

「ああああアアア！ 俺の嫁本当に可愛いなオイイイ!!」

必死でミサイルから逃げるもかなりの的確に俺を追ってきやがる、これ絶対簪がサポートしてるわ。

「Wa—V—S111！」

リボルバーマガジンのような田柱のパーツと周辺の幾つかのパーツが腕のジョイント部を支点にするように下部へぐりと回り残されたパーツの砲口が90度回転し、固定用のニードルが一度反対へと突き抜けるようにスライド、続いてそれを纏めるパーツがスライドし前方へと移動。

その後そのパーツ群自体を纏めるパーツが武器を保持する用途の腕部と共に上へと大きく伸び、最初に下部へと回ったパーツ自体も伸ばされるように上部へと移行する。

砲口が180度回転、それに付いて行くようにニードルも前方を向く、リボルバーマガジンと砲口が接続されニードルが固定の為そのパーツを突き刺し固定。

纏まって完全な形となった武装とコンパクトに折りたたまれた腕部と交差するように前後へと移動、ジョイントごと固定された。

「ヤバイヤバイおもしろえ！ 最高におもしろえよ！ なあフォルテ！ 見たよな！ よなあ！」

「ええ見たっスよ！ あはあ……！ なんだか興奮してきたっス！ 下腹部がアツくなつてくるのが堪ないっスよお……！！ 欲しい、あれ……欲しいっスう……！」

ギラツギラ目を光らせて俺を指差しながらヤバそうな笑みを浮かべる三年生と内股になって片手で下腹部を押さえながら目をトロンと蕩けさせさつきとは違うヤバイ笑みを浮かべる二年生、アクアビツトのリーダーことフレデリカを思い出す。紹介したら意気投合しそうだ。

「応！ 撃つてやる、撃つとも、撃つともよう！！ ヒート！ ショットオオオオツツ！！」

詰まる所HEAT弾のショットガンだ、弾自体が糞テカイ上に滞空時間が長いからミサイルの迎撃には持って来いだったり……しない、一応当たったらいいな気分撃つに限る。敵自体に当たってもダメージは期待できない、瞬間火力も総火力も心もとない、相手がビビルだけ。

「駄目だ、ドク……ミサイルに当たらん」

「んくううつ♡ んああ？ 全然痛くないっス、んあつ♡ でも、小さな刺激が……ひいん♡ これはこれでイイっス……！」

「よろしくない！ 股間に対して非常によろしくない！！」

ミサイルに当たらずその向こうに居た二年生の先輩に直撃、案の定痛くはないらしい、人に優しい兵器、弾薬を競技用に制限しているか

らと言っているもあるが。

かわりにこつちの股間が痛い、若くなるってのはいい事ばかりじゃない、意識させねば起動状態とならなかつたエーレンベルグ掃射砲がもはや懐かしい。

これは何よりも優先して落ちて貰わねば俺のアレに係わる、尊厳とか、名誉とか。

「やっぱKEシールドって、侘び寂よねえ、つつーことで防御増し行こうか！ AM/SHA-207！」

「シールド増設か、それからどうなると言うのだ籐ヶ崎！」

「俺の記憶どおりだと確か簪のミサイルって破片を撒き散らすタイプだと記憶してるんだよな、ならKEゴリラで何とかなるだろ！」

「残念……どつかーん……」

と俺の周囲でミサイルが次々と炸裂、VTFミサイル……いや、遠隔爆破か?!

「なあっ?! シールドが融解した?! しかも……何だコイツ!!」

「ふふ……信一郎以外には飛んでいないでしょ……? クレイモア地雷を参考に……指向性を持たせているの……ミサイルの内部8方向と前後にC4が設置されて……ターゲットと反対方向のC4が炸裂……内部のIS用の特殊スパイクベアリングがターゲットに飛んで行くの……、そして物理耐性と熱エネルギー耐性を両方とも高水準で保つのは難しいって……MSACの主任さんが教えてくれたから……プラズマミサイル……積んじやった、てへ」

「ぐ、うお、俺の嫁が可愛くてこの戦闘が辛い……!! クソ、APがヤバイ……! ええい、この際プライドは抜きだ!! ブルーマグノリア!!」

「あっ……ズライ……!」

「かーらーのー、MINORI mdl. 2! パルスキャノンだッ!」

「機体の頭部とカラーリングが変わっただけか、まあいい、あと少しなんだったっけ?」

「違います……! また最初からやり直し……全回復しました……!」

「ハアツ?!」

「ンハアツ♡」

さて、戦いはこれからだ、どれだけダメージを与えても落とす事の出来ない理不尽な戦いを教えてやる。

「まだだ、まだ俺は戦える…!」

「ここが…! この戦場が、俺の魂の場所だ!!」

「ふおるるん先輩、まずは股間によろしくないアンタに落ちて貰う、逃がしはせん、逃がしはせんぞおツ!」

恍惚とした表情で若干涎を垂らしつつ時折ビクンと痙攣するふおるるん先輩へハイブとクラブを組み合わせつつ近付いて行くが信じられんことにその状態でも悠々と俺のキルゾーンから逃れるように回避し、銃弾を俺にぶち込んでくる。

しかもらうりーのレルキャヤらもう一人の先輩が高速で突っ込んですれ違い様に攻撃しては去って行く、AIMさえ出来やしねえ、何だこれ。

「信一郎…私だけ見てくれなきや、やあ…」

「ぐ、おあ…!! メインブスターがイカれただ?! 荷電粒子砲!

出力を上げて単発にしたか! 2対6で簡単に勝ったあの頃が懐かしいぞ!」

「これは…貰った、籐ヶ崎!」

背部メインブスターを潰され速度が落ちたところにレルキャヤノンが直撃、パルスキャノンが破損、してやられた。

「WAB—219!」

腕部を伸ばし引き込み腕を固定、肩関節ごと背面へと移動させ後部のミサイルサイロを前方上部へとスライド、ロックと同時にそれぞれ外側45度傾き、それに連なってサイロが開き、全ての発射口が次々と開かれる、その姿はまるで。

「ピザ、お届けに参りましたーッ!」

「み、ミサイル?!」

「ずるい…! 凄く苦労したのに…!!」

片っ端から近くにあるISへと群がるASミサイル達、今週のビツ

クリドツキリメカだ。

「あびやああああー！」

「何だ今の声?!」

珍妙不可思議な叫びが聞こえてきたと思えば視界の上部に出てくる「ENEMY DESTROYED」の文字、俺は落とした覚えがないのでどうやらついぞいつちーが落とされたらしい。

『ただいま、シン』

「早い(確信)、被ダメは?」

『被斬撃回数0 被弾回数0 至近危険回数0 被ロック回数3 ダメージ0』

「最初から勝つとは思ってなかったけど……。腕の一本でも道連れにすればいいものを……!」

「散々な言われよう、俺心が折れそうだ」

HMDに映るバトルアリーナで全く見えないが筐体越しのいつちーがずうんと重い声を出す。

『さて皆様、覚悟は出来ましたか?』

「くっ……! ならば……!」

すると直後、らうりーが反転、レールキャノンの砲口を姉さんへと向け射撃、音速を遥かに超える銃弾を射撃されてから回避した姉さんが銃口をらうりーへと向ける。

「私が相手をする! 更識! 先輩方は今のうちに籐ヶ崎を!」

「アツハ、アハハハ!! 最高だぜドイツの! 格好いいねエ!」

「するウ……♡ 私、あれの相手え……♡ あっ、あ……イ……、つくう……♡」

「まだ試作実験機だが……仕方あるまい……! 今ここでお見せしよう!! プロトタイプネクスト、00-ARETHA!!!」

と、同時にエラーが発生、試作段階だからと言うわけではなく純粹にコイツはデカイのだ。

俺がいつも使っている近IS型ACではなく通常型ACに近いがそれよりもデカイ、しかもコクピットタイプなのが災いしたのかアリーナ全体が赤く発光しエラーを全員に知らせる。

「な、何だコイツ……?! デケエ……!!」

「20メートルは………确实………！」

「んひひひひひ♡♡♡ あつ！ ああつ♡!! らめええええ♡!!」

2年生の先輩が全力で仰け反って痙攣したかと思えばホログラムが消え「ENEMY DESTROYED」と表示される、何もしてないのに一機落ちた。

……いや、堕ちた？

「……フオルテ、後でちゃんと掃除しとけよ……」

「ひゃあい……♡」

やっぱり股間によろしくない、だがそれもこれまでだ！ ……どうかテントが張られていませんように……。

「ああ、負荷やべえ……データ上の接続でこれかよ、これ実際乗ったら並の人間は廃人だぞ……」

「そ、そんなものを?!」

「まあ、実験の為だ、仕方ない……行くぞ、簡単に折れてくれるなよ……！」

右腕の五連装ガトリング（バレルが5本ではなくガトリングが5つ）を持ち上げ射撃を開始、撃てば撃つほど照準が広がりまるでショットガンを撒き散らし続けているようだ。

ロック警告が発生した瞬間横へとクイックブーストで移動、それだけで頭を掻き回されたような痛みが走り視界がぐらつく。

「ぐ、お、あ……!!」

「き、消えやがった?!」

「信一郎……!!」

「大、丈夫だ!! これは……必要なんだ……！」

歯を食い縛りガトリングを撒き散らしながらレーザーライフルを射撃、俺を見失っていたらうりーに直撃し莫大なダメージを与えた。「ならせめて……すぐ、すぐ……楽にしてあげるから……!!」

俺の「回避の癖」を熟知していた簪が移動した場所を予測し即座に俺をロック、それと同時にミサイルを一斉射出。

しかし搭載されているオートミサイルジャマーがミサイルのシス

テムを狂わせ全て見当違いの方向へと飛ぶ。

『ラウラ・ボーデヴィツヒ様、申し訳ありませんが遊んでいる暇は無くなりました、オペレートパターン変更、殲滅モード起動、行きます、逝って下さい』

「なっ…?!」

姉さんがモード変更をした瞬間動きが目に見えて…無い…、見えな  
い…!

ただ急にそこらじゅうロケットが爆発を始めたのでまあ今相当やばいんだろう。

ゆつくりと先輩へとヘッドパーツのカメラを向け、手に持った巨大なコジマキャノンを構え、チャージ開始、脚部のバンカーで脚を固定、関節部を次々とロックし反動で吹き飛ばないように自分を固定。

過剰に漏れ出したコジマエネルギーが砲身横の突起部から噴出し砲口自体にも莫大なエネルギーが充填され始める。

トリガーを引きコジマキャノンを発射すると本来反動の無いはずの射撃で左腕が後ろへと引つ張られる、全身の関節部をロックしたお陰で少し体を後ろに持つていかれるだけで済んだ。

全身の間接部ロックを解除し、バンカーを引き抜きコジマキャノンを回避した先輩のほぼ密着位置までクイックブースト、ジェネレータを瞬間的に自爆寸前まで稼働させエネルギーを一気に放出する。

「逃げて……ッ!!」

「な、んだコ——」

本来AAはコジマエネルギーを周囲に放出させ、空間を作り、その内部でエネルギーを乱反射させてシールドを剥ぎ取り莫大なエネルギーによるダメージを与える物で、空間を作った濃い膜が緑色の球体に見えるのだ。

これは試作の機能やテストの為に作られた戦闘用ではない物を無理やり戦闘用にした試作型実験機、コンセプトは「出力特化」この一言だとももおかしくは無いが先程のAAの例で言うならば。

ただ通常では出し得ない莫大なエネルギーのコジマ粒子を膜も作らずにただ爆発させる、それだけだ。



だがそのエネルギーは尋常ではなく、最早緑の球体ではない、白い爆発にしか見えないのだ。

攻撃力はAAアンプを装着した、などと言うものは比べ物にならない。

証拠に今まで無傷だった先輩の姿はもう無く、ただ視界上部に「ENEMY DESTROYED」と表示されるだけだ。

「なんだよそれ！ 馬鹿げてるじゃねえか！ ただのキチガイだぜそれ！ く、クツハハハ！ あー、負けた負けた！ 面白えもん見せてもらったよ、サンキューな!!」

「……………」

しかし反動も物凄い、意識が朦朧とするのとジェネレーター出力が通常に戻るまで一切の行動が出来ない。

「こんな、もんかねえ……………じゃあ、本気…出すか、ア!!」

能力を使用し自分の処理能力を上昇させ、痛覚を排除する、データは取った、あとは十全にこの機体を扱うだけだ。

「信一郎…!!」

『痛覚を遮断し、処理能力を上げた、もう問題ない、だから』心配するな、すぐに終わらせる」

「ッ!!」

クイックブーストを連続で使用しガトリングを撒き散らし続けながらクイックブーストを連続で行った後の一瞬のクールタイムでレーザーライフルを撃ち、再度クイックブーストでロックを外す。

しかし簪も流石更識、こと対個人に置いてはらうりー同様研ぎ澄まされたものを感じる、てかガト以外当たってねえ。

不意を付けば行けるんだろうがどうも難しい、んでこの試作機ってクソ分厚いPAしてる割にAP自体は低めなんだよな、こっちも簪の攻撃は殆ど当たっていないがジリ貧だ。

「罅が明かない……………ね……………」

「ああ、そうだな、もう逃げるのは止めにする」

急停止し、ガトリングを簪に向かって投げ飛ばす、当たればいいな、だったので簡単に避けられても泣かない、泣かないったら泣かない。

「もうこれで…終わってもいい…」

「一体何を…?!?」

コジマキャノンの砲口を簪に向けジェネレーター内のエネルギーの95%を全てキャノンに流し込む。

さっきのAAの使用エネルギーが60%だと言えはこの恐ろしさが分かるかな？

砲身が赤熱し、白い光があらゆる場所から煙のように漏れ出す、普通は噴出すはずのエネルギーを無理やり押し込み、充満させているのでいつ爆発してもおかしく無い。

「だから、ありったけを…」

砲身からリンリンと鈴を鳴らすような音がする、強度限界が来ているのだろう、じゃあ、行こうか。

クイックブーストで残った5%を使いきり簪の目の前で急停止。

「This way…」

「しま……ッ！」

一気にエネルギーを放出して擬似エネルギーブレードの刀身を叩きつ——

ぶつん、と言う音と共に視界が真っ暗になる、なんだ？

「なんだ？ 目が逝ったか？」

「…私も……真っ暗で見えない……」

「む、私もだ、残りエネルギーが100を切った瞬間に真っ暗だぞ」

どうやら俺だけじゃなく接続してた全員がそうらしい。

HMDを取り外してみるとPCの電源が切れている。

「PCのスペック不足か」

「……一台一台がスパコンレベルで……6台連動させてるはずなのに…」

「やっちゃったぜ☆」

うっひっひ、と笑っていると鼻の下に違和感、右手で触れると指が真っ赤です。

「お、鼻血、脳を酷使したからかな？」

「え、あ！ ど、どうしよう…!! 誰か、誰かこの中で医者の方は…!!」

「おい、落ち着けよ一年生、代表候補生なら応急処置ぐらいなんてこと無いだろう」

あたふたしている簪に先輩（変態じゃない方）が一言言うと、ハツとして真剣な顔で俺の前に立った。

「顔を上に向けて首元を軽く叩けば…!!」

「民間療法じゃねえよ、しかも完全にやったら駄目なやつだし、見てろ」

そう言った先輩（変態じゃない方）が俺の鼻をギョツと摘む。

「ほげっ」

「変な声出すな、まずは上体を起こして座らせた後顔をやや下に向けてる、んでこうやって鼻を摘んでだな」

「何かシンが応急処置とか受けてるの見てたら違和感があるな」

自分で押さええてろ、と言われたので左手で鼻を摘む、なんだかとてもマヌケな見た目。

「おい、氷嚢か水で濡らしたりした冷たいタオル無いか」

「あ、<sup>あ</sup>だいひ<sup>丈</sup>よう<sup>夫</sup>ふ<sup>で</sup>ひ<sup>す</sup>ひ<sup>左</sup>ひ<sup>手</sup>だ<sup>で</sup>いて<sup>冷</sup>ち<sup>た</sup>ゆ<sup>べ</sup>たい<sup>い</sup>いで」

「何言ってるのかわかんねえよ」

でひゅよれー。

とよくよく考えてみれば俺別に応急処置とかいらねえじゃん、ヒーリングファクター！

「おk」

「おい、鼻摘んでろ」

ポツケからポケットティッシュを取り出して二枚ほど手に取る。

「ちーん！」

「鼻かむ時口で言う奴始めて見た」

「おい、そんな事したらもつと血が出るぞ」

「あー、治った！」

「はあ?!」

クシャクシャのティッシュを左手で握りリパルサーレイで処理、

フウー、スツとしたぜ。

「あー、そうだそうだ、違和感はこれか、シンは腕が挽けても生えてくるもんな」

「バケモンかお前」

「な、NASAに送っても懸賞金は貰えんよ…?!」

「送らねえよ、まあ大丈夫なら大丈夫で別にいい、おーいフォルテ、満足したし帰る…‥何で泣きながら椅子拭いてんのお前」

と、目を向けると地べたに座りつつグスグスと鼻を齧り椅子を拭いている先輩が一人。

「こんな、惨めな気分、始めてツス…‥あんな醜態晒して、撒き散らすなんて、ううう…‥死にたいツス…‥」

これはフレドリカに比べて突き抜けてない分人生苦勞するタイプだ、せめて世界が彼女に優しくありますように。

「あー、ワリイな…アタシはコイツを何とかしなきゃなんねえから何処かに行ってくれねえか？ 見られてると流石にこいつも…‥な？」  
苦笑いする先輩に俺たちはただ頷いて去ることしか出来なかった。

く く く く く く く く く く く く く く く く

「なあ、結局スピードテストしてなかったな」

「もういいんじゃない？ 文字数が足りん時の埋め合わせを予定してただけだし」

「何言ってるんのお前」

「あ、いた！」

自販機で購入したクツソ甘いコーヒーを飲みつつ簪やらうりーいっちーと食堂へ移動していると前方で4人の生徒がこちらへと向かってきた。

「お、どうした？」

「どうした、ではありませんわ！」

「どこへ行っていったんだ！」

「僕達を探しても見つからなかったし」

「部屋には居なかったし」

いつもの如くいつちーを探していたらしい、もうすぐキャノンボールファストがあると言うのによくもまあ一日無駄な事に潰せたな、生き易いものだな、ふらやましいよ。

「ラウラも一緒に居たならメールを返してくれても良かったじゃないか、もう!」

「ん、メール? おお、すまん、気付かなかった、今日は面白い物が沢山見れてな! 皆に自慢してやりたいぐらいだが……」

「ん? どうしたらうりー」

「ふふ、秘密だ。私の胸だけに今はしまっておこう」

チラリと俺を見たらうりーが勝ち誇ったような笑みを浮かべて眼前の4人を見る。

「な、何よそれ、気になるじゃない」

「ラウラ、ボクにも秘密にするの……?」

「ず、ズルイ言い方をする……」

「どうでもいいことでも気になってしまいますわ……!」

多分これはアレだな、いつちーへの尋問を回避させる為に言い出したんだろう、こんなにもいい子に慕われて無反応とかいつちーは腹を切って詫げるべき。

「いつちーは腹を切って詫げるべき」

「いや、なんだよいきなり」

「おーい、何かいつちーがジャパニーズハラキリ見せてくれるってよ」「しねえよ?!」

高周波日本刀を取り出し上段に構える。

「ハイクを詠め、カイシヤクしてやる」

「アイエエエ?!」

「はいはい……ストップ……集まってないで、解散……切腹はしないよ……信一郎も下ろして……?」

「はあゝい」

「なーんだ、しないのかー」

「Oh ハラキリ見れないデスカー to feel very regretful……」

「籐ヶ崎君ももうちよつとだけ頑張って欲しかったですねえ、ああ残念です、ええ残念です！」

ナチユラルに混ざってたりサ先輩、やっぱりカツ開いた目がちよつと怖い。

「うう、ありがとうございます簪さん、ありがとうございます……！」

と言いながら簪にすがり付こうとしたいちーの首根っこを掴んで逆の方向へ向かせる。

「俺の女に手を出すな、いいね？」

「アツハイ」

## キャノーラ・ブレイク・ファストだったか何だったかの準備のお話と裏のお話

珍しく簪とは別行動で機体構成を弄りながら頭を捻っていると不意に肩を叩かれる、叩かれた方向に首を向けるといつちーが指を突き出していたらしく頬を突付かれた。

「引っ掛かったな」

若干イラツとしたので左手でいつちーの手を固定し指で頬を突かれたまま首をまだ横に向けいつちーの指に負担を掛けていく。

「い、痛っ、ちよっ…待っ…指痛い指痛い!! てか頬硬えな!!」

「折れろ」

「冗談じゃなく折れるから!!」

解放すると指を押さえながら息をふーふー吹きかけている、それで治ったら苦労はせんよ。

「俺の指が折れるかと思った…オレ、の指が、折れ、るかと思った」

「腕相撲しよう、左手で」

「腕が折れるだろ」

人間には15本も骨があるのよ、15本ぐらい何よ。

「ところで、シンは何してるんだ？ ホログラム画面には何も映ってないけど」

「ほら、あれだ…その…なんちゃらファスト…ブレイクファスト？ に使う機体のアセンブル、画面が見えないのは俺意外に見えないように設定してるだけ」

「朝飯じゃねえかよ、キャノンボール・ファストな。て言うかシンなら最速ってかアレあったろ、ほら…ナインボール？ ってやつ」

「こっちは、通常のネクストACを使うよ。セラフだと、たぶん戦いにならないからさ」

「何のつもりだ？ そうやって挑発して、そちらに、どういうメリットが？」

そっちの方が楽しいだろ！ マハハハハ！

「まあこっちはこっちでそれなりに忙しい、チョツカイ掛けるなら他のヤツにしろ」

「うん、まあその他のヤツにも忙しいって言われたんだけどな」

「そりやそうだろう、ここまで来てお前ほど呑気なヤツはいねえよ、簪だつて俺とは別行動で整備室に籠ってる」

「む、そう言われれば俺もそう呑気にしてられないな、よし、山田先生に指導願ってくる」

「そうしろ、あの人何だかんだ言つてちっふーと代表の奪い合いしたツワモノだからな」

「マジかよ」

マジだよ、ちよつとぐらい自分の副担任の事調べろよ、実はチートスペックのドミナントだよあの人。

手を振つてきたいっちに手を振り返し再度アセンブル考察にずぶと埋まりこむ。

単純に早いだけならソブレロでいいんだが攻撃を受けることも考えなければならのでソブレロでは少しキツイ。

まずスタートにVOBを使うのは大前提として大きなカーブ前までにトップまで加速、その状態でVOBをパージし、自壊させ後続への障害物にしたい。

すると以後はOBとQBを駆使しトップを維持しなければならぬ、故に必然的にOBの継続能力も高く無ければならないがそうすると一瞬でENが尽きる速度特化機は軒並み選択肢に入れ辛くなる。

逆にOB継続能力の高いアルギュロスになるんだがコイツは遅い、重量機ゆえ仕方ないんだが。

速度に尖らせてアドバンテージを一瞬で得てアドバンテージを利用しENとKPを回復、回復後すぐにOBで再スタートと言う戦い方をするか、もしくはアルギュロスで敵の後ろに付く事前提で前の敵を撃破して勝つタイプか。

VOBの改良を申請して速度を若干落とす代わりにカーブできるようにしたほうが早い気もしてきた。

「あゝ、ままならんもんだ」



「む、籐ヶ崎か…一夏を見なかったか？」

椅子で身体を伸ばしている後ろから声を掛けられたので伸ばしたまま首を後ろにもたげると逆さまのモツピー、まあ当たり前だが。「モツピーか、いつちーならブレイクファストの訓練で山田女史に教えを乞うてる」

「ふむ、そうか…」

「いつものアレ？　いつちーと一緒に居たい系ヒロイン？」

「なっ、ばっ、そ、そんなわけ無いだろう！　私はただ、その…：機体の…：その」

あーあ、もうセラフっちまおうかなー、面倒臭えなあ、痛覚全部潰してアレサしよかなあ、もう俺の変わりに姉さんに出てもらおうかな、それともフランのレヴアンテイン借りようかなあ。

「そ、そうだ！　私は一夏に機体の出力調整の事で相談をだな！　出力調整のみで出場するのは私と一夏だけだから！」

「え？　なに？　聞いてなかった」

「き、聞いてなかっただと…」

「いや、俺だつて忙しいのよ、逆にそっちは出力調整だけで済んでいいなあ、楽な物だな、ふらやましいよ」

「決して楽ではないぞ?!」

「俺なんか数千に及ぶパーツから場合によつては何百億と言う組み合わせで考えなきやならんのだぞ、億だぞ億、お前仮にパーツが2セットで外装だけだとして32通りだぞ」

「す、すまない…」

「な？　楽なもんだろ？」

「う、うむ……」

まあノーマルACとVACは速度が追いつかんで選択肢に入らんのだがね。

「で、では私はまた作業に戻る。忙しいところすまなかった」

「いいさ、だがまあ、どうしようかねえ…：VOBでも改造するかなあ…：」

面倒だ、面倒くせえ、いいか俺は面倒が嫌いなんだ。

なんて思っているとアラームが鳴り響き眼前のホログラムディスプレイにアラーム表示が現れる。

「あー、もうそんな時間か……しゃーねえ、仕事にかかるとするか」  
仕事を始める時間として設定していたアラームだ、部屋から持ってきていた書類を手にとつて既に冷たくなつたコーヒーをズズズと啜りながらチェックと修正、許可印を押していく。

「…無人機との差別化、か」

その内のひとつにふと気になる事柄があつた、有人機と同様の無人機があると仲間内で小さな混乱が発生するため無人機は無人機で完全に企画化して纏めてしまおうという案だ。

いくつかの試作デザインとカタログスペックが写真や設計図、もしくはイラストで載っている。

「……なるほど、確かにこいつは…ツ!!」

その中でひとつ、カタログスペックとデザインに大きく惹かれるものがあった、これは使える。

「姉さん、本社の……原案アクアビットかよ……アクアビットのリーダー、フレドリカに繋いでくれ」

『……繋がつたよ』

出だしに馬鹿みたいな音量の音が響くの予想できたのであらかじめ音量を半分に落としておく、それでもしないと俺の耳が持たん。

『しいんいちろおくうん!! どおしましたかあ?!』

「うつるさつ……あー、俺に送ってきた書類なんだけど」

『んああ、送りましたよお、でも私の記憶が正しければ割りとなつくさん送つてたと思いますがあ?』

「あー…無人機と有人機の差別化、企画書類W号なんだけど」

『ああ、あれですねえ? それについてですかあ?』

「そう、んでそれなんだが一機だけでいい、有人機化できない? 俺のAC規格に合う形だ」

『出来ない事も無いですがあ……AC以上にエネルギー喰いますよお?』

それに人が乗れる構造じゃありませんしい』

「コアは俺が新しく都合する、構造なら多少サイズが変わってもいい」

『それならあ……どう小型化しても4〜5メートルですかねえ?』

「通常のVACか……飛行形態時のユニットもあわせるとどれぐらいになる?」

『アレもですかあ?! 15か16メートル近くになってしまいますよお?!』

「それでもいい、キャノンボールファストまでに仕上げられるか……いや、仕上げてください」

そう言うとホログラムの向こうのフレドリカが若干イッてるいつもの表情からキョトンとした顔になり珍しくクスクスと控えめに笑う。

『く、ふふ、信一郎君、それ、中々無茶苦茶ですよお? 一ヶ月も無いじゃないですかあ!』

「分かってる、だがフレドリカ、お前なら出来る。俺はそうとしか思えんのだが」

『……………アハ、アハハハハ、ヒヤハハハハハハハツ!!! 最ツ高!!! 最高ですよおおお!! 最高の殺し文句じゃ無いですかああ!! ええそうですよお! そうですとも!! 私なら出来ますううう!!』

「いいね、信じてたよ」

『で・す・が!』

「ですが?」

『とてもじゃありませんが一人じゃ無理ですよお? チームV、もいい企業を基本として動いてもらって我々がエネルギー関連、ブースター関連をクーガーとアスピナ、武器をオーメルやMSAC、レイレナードやインテリオルにも協力して貰わなければなりません、場合によっては社長にも手伝ってもらわないと駄目かもですよお?』

「キャノンボールファストまでに出来るか?」

『馬鹿にしないでください、一週間で完成させますよお』

「く、ツキヒヤハ! 最高だ! 最高だぞフレドリカ!! 簪の次の次の次の次ぐらいに愛してる!! 社に帰ったらチューしてやる!!」

『ん ああああああああああ ♡ 待ってますよおおおおおおお!!!』



「籐ヶ崎、校内で煙草とは随分いい度胸じゃないか、ええ？」

横を見るとにつこりと笑みを浮かべたちっふる、いや、違うのよ、煙草じゃないのよ。

「おれはらうりー比べるとチと特殊な体でなくくくく 幻肢痛でトチ狂いそうになると 精神安定剤で 頭を冷静にすることにしているのだ。幻肢痛じゃないけど」

「煙草ではないというのか」

「葉巻タイプの精神安定剤はムラクモ製薬、お近くの薬局にて販売中」  
「そうだとしても火を使うのは関心しない、消せ」

葉巻つてのは紙巻と違って押しつぶして火を消すもんじゃないんだけどなー、と考えながら火を消した後携帯灰皿に入れる。

JAPANESE MOTTAINAI

ちっふるが周囲をぐるりと見渡し俺に小さな声で尋ねた。

「……………まだ、克服できそうに無いか…？」

「あ、これは例のものと関係ないです、別件です」

「まあ、いいだろう、以後気をつけろ」

「ういっす」

ちっふるが去る様子をヤンキー座りで眺めてたら前のドアからフランと簷が顔を出す。

「信一郎さん、どうしました？」

「フランに用って…………？」

二人揃って不思議そうな顔をしている、いつもは簷に直行だったからな、フランも簷も分かりかねているんだろう、もしくは会社関連のことだと思っっているか。

顎でクイと指し示しつついてくるように促す、屋上に到着し端のほうに陣取り音が聞こえないよう透明の遮断フィールドを形成する。

周囲を見渡していい具合。

「ああ、それなんだがな…フランはキャノンボールファストのどっち側になるのかと思っってたな」

「それでしたら量産機側ですよ、信一郎さんもご存知のとおり私はA Cの扱いが上手くありませんので」

「……え？ フランって専用機……持ってたの……？」

公式に使用したことはないからな、会社での実験で本人が使用した他俺が試運転をした位だ、俺や他のトップランカーが使用した際の単体戦力は少なくとも量産型ナインボールを超えている。

セラフ？ 無理。

「俺と同じ形式のACで手首に付けているリストバンドが待機状態、と言うかコールデバイスだ」

「私のレヴアンティンはデータスペック上は特殊なACを除き最強戦力と言って差し支えはありません……が」

フラン、AC使うの下手なんだよね、いくらIBISが操作しているとはいえ量産IS一機に負けたからな、普通はありえない能力比なんだが。

「なぜかフランは量産ISを使った方が戦績がいいもんな、操作システムはほとんど同じなのに」

「ひ、ひとには得手不得手があります……」

「まあそれでいいさ、いざとなりや俺が守る、妹を守れるのは兄の役得だ」

フランの頭をガシガシと撫でつけると笑いながら止めて下さいと小さな抵抗をする、なんだか面白くなったのでまだガシガシと撫でていると何度も「もう、止めて下さい」と言う。

「ほれほれ、んふーふ」

「もう、兄さん、止めて下さいよ」

「うりうり」

「本当にやめて下さい」

マジトーンで怒られた。

「あ、いや、その……うん、はい。こ、これはすまなかつた……ご、ごめん」ところで、兄さ……信一郎さんは機体がお決まりに？」

「あ……それは、気になってる……」

フランにならバラしてもいいんだが簪は一応勝負するからなあ、言っつていいもんか悪いもんか。

「そうさな、新型を使う事にする、細かいことは秘密だ」



「14号、誰が自身の調子を伝えろなどと言いましたか？　ISの調子を伝えろという意味を込めたのですが、14号には分からなかったようです、これだから頭の悪い生命体は困りますね。さて14号、頭の悪いクローン体であるあなたにも分かるように言っただけでしょう、私が改良を施したISコアナンバー269の調子は如何ですか？」

「く、はあ…ツ、…良好だ…ツ…！」

「ええ！　ええそうでしょうとも!!　なにせかの大天才篠ノ之束嬢に次ぐ天才の私が改良を施したのですから！　世界は狭い、しかしその狭い世界で唯一ISコアの解析に成功したこの私が!!」

「もう、私に用は…無いか」

「ああ、ええ、もうあなたは戻って下さって結構ですよ」

もう言葉を交わす必要など無い、と言うかの如く男に背を向けて少女はISを解除し歩き始めた。

「ああ、そうです。14号」

「……………なんだ」

「あなた、今は織斑マドカ、と名乗っているそうですね？」

「ツ!!」

男の言葉を聞いた瞬間少女、マドカが憎悪の表情を浮かべ歯を食いしばる。

「確かにあなたは織斑一夏のDNAから製造されたクローンですが、製造者は私であり、人ではなくただの「物」だという自覚を持った方がいいですよ、使うも廃棄するも私次第だという事を忘れないように、物は使われてこそ幸せなのですから！」

マドカは何も言わず男のいる部屋から早足で出ていく、男はただ篠ノ之束とISに行き過ぎた贅辞を述べ、同時にいかに自分がどれほど素晴らしいかをオーティエンスの全くない空間へ披露していた。

私はいずれ神になる、篠ノ之束と並び立つ全知となる、と叫び、酔いしれながら。



「ツアアアアア!!!」

誰もいない廊下でマドカが拳を壁に叩きつけ、ヒステリックに叫んだ。

「私は、私は織斑マドカだ!! 14号じゃない!! 私はツ! 私は…!! 私は………もの、なんかじゃ、ないはずなんだ……」

視界は歪み、声は震え、全身から力が抜けていく、ズルズルと壁にもたれかかるように視界が落ちる、嗚咽を漏らし、涙をぼろぼろと零し、泣き崩れる姿はただのか弱い少女にしか見えなかった。

「くそっ……! クソオツ……!! うう、ああああ……!! だれかあ……だれか、たすけてよお……いやだ、いやだよお……! おねえちゃん、たすけてえ……たすけてえ……! おにいちゃん……たすけてええ……!!」

廊下の向こうから靴の音が反響しマドカの耳に入る、するとヨロヨロと立ち上がり目元を拭い息を整えるために深呼吸をした。

「あら、マドカ、どうしたの? こんなところで」

「なんだ? 不貞腐れてでもいた……お前、泣いてたのか」

マドカが顔を上げるとそこには同じIS部隊の二人、金糸のような髪を持つスコールとマドカを心配するように手を差し出すオータムがいた。

「ふん、なめるな……この私が泣きなど、するものか……!」

「目え真っ赤にして目元を腫らした面で、説得力ねえぞ、この馬鹿」

手を払ったマドカを引き寄せ抱きしめたオータムが悲しそうに呟く。

「泣いてなどいるものか、私は、織斑だ、織斑マドカなんだ、人の前などで、泣けるものか……!!」

「……マドカ、あなたは強い子よ、でもそうやって何もかもを耐えてしまえば貴女は壊れてしまう、泣きたい時には泣いていいの、貴女はまだ子供なんだから、大丈夫よ、私達以外、誰も聞いてやしないわ」

スコールがマドカと目線を合わせるように屈み、頭を撫でる、小さな子をあやすように。

「つふ、う、ぐうう…ああ、うわああああああ!!! わだしは！  
わたしはあ!!」

「何もかも、吐き出しちまえ、楽になるならそれがいい、お前が望むなら忘れてやる」

「わたしは！ わだしはなんなんだ?! 14 14 14 14  
ごうなんかじゃないんだ!!」

慟哭に雑じる叫びを聞くオータムが表情を歪め、スコールがギチリと拳を握る。

「わたしはひとだ!! ひどでありだんだあつ!! いきでいるんだつ!!!」  
「ッ………!!!」

「それどもッ！ それともほんどうに!! わたしはアイツのいっただどおり！ モノでしがっ！ ないのかあつ?!」

「貴女は、貴女は人よ。間違いなく、貴女は一人の人、織斑マドカよ」  
オータムに言われたように、何もかもを吐き出すようにマドカが二人に縋りつき、泣き叫ぶ。

く く く く く く く く く く く く く く く く  
数十分と泣き続けたマドカはオータムの背に体を預け小さな寝息を立てていた、その表情は穏やかで到底テロ組織のエージェントには見えない。

二人はIS部隊に充てられた部屋へと歩みを進めていた、唐突にオータムがISのごく一部を展開し小さく周りを見渡しすぐにISを解除した。

「……スコール、少し話があるんだが、外で景色でも見ながら話さねえか」

「いいわ、多分、私もあなたと同じ事を考えている」

マドカに割り振られた寝室のドアを開け、ベッドにマドカを優しく寝かせ髪を撫でるように梳く、スコールがマドカの額に口付けし、ただ一言「おやすみ」とつぶやく。

「あら、どうしたの？ オータム、拗ねちゃった？」

「まさか、その程度で拗ねるわけねえだろ？」

くすりと二人で笑い合いそつと部屋のドアを閉め部屋を後にした。

カップ入りのコーヒーが湯気を立てる中二人は横に並んでいた、まるでガードレールのようにも見える柵にオータムは腰を預け、スコールは肘を乗せ体重を預けている。

「…………大丈夫よ、監視は無いわ、じゃあ、話を始めましょうか」

「ああ……………なあスコール、私はもう我慢ならねえ、元々あんな子供を戦わせる事自体反対なんだ」

「そうね、もう私も我慢の限界よ、世界平和のため、争いの無い世界を作るため、本当に下らない口車に乗せられた物ね」

グイ、とコーヒーを飲み干したオータムの右手がブルブルと震え、カップをグシヤリと握りつぶした。

「あのクソ野郎はあいつを、マド力を物だと言いやがった！ あの本当は優しい、誰よりも人間らしい寂しがりなあいつを!! ……私達はどう何度もこの手を血に染めた、けどよ、あいつはまだ引き返せる、まだ光の下で歩ける」

「そうね、だから私は、いいえ、私達は、裏切り者にでもなりましょうか」

「ああ、なってやるさ、だがまずはあいつに付けられた首輪を外さねえとな」

スコールがコーヒーを一口飲み、一つ息を吐き難しそうな表情をする。

「でも、あの子の首輪は頑丈よ、脊椎内部に嵌め込まれているのだから」

「胸糞悪い、わざわざ胎児の状態に取り付けて成長過程で脊椎内部に収まるようにしてるんだったな」

「これで平和のためだなんてのたまっているんだから、笑いものよ」

「あいつの首輪を外せる奴か、これほど身内が信用できないってのも、

珍しい」

「……………あるわ、一つだけ、当てが」

「本当か…?」

珍しくスコールが戸惑ったような表情を浮かべ言うべきか、言わぬべきか迷う。

「スコール、わかるだろ、今は藁にでもなんでも縋らねえと駄目なんだ」

「そう…ね……、じゃあ、言うわよ……」

ぽつり、と小さく一つ呟く、それを聞いたオータムが驚愕の色に表情を染め、口を開き、声も出さず閉じた。

「首輪カラドに首輪を外して貰う…か、シヤレにもなんねえ、第一、そこは一度敵対してるじゃねえか」

「そう、そうなの、でも、でもそこか篠ノ之束しか、多分外せない。きつとあの男でも外す事はできないわ」

「ISを手土産にすりゃあ、いや…いや、駄目だ、あそこは、あいつらは、『既にISを量産している』…!!」

「……………あその社長は随分変り者だという話よ、オータムの言う通りだわ、もう形振りなんて構ってられない」

「どう言うことだ…?」

「交渉してくる、オータム、貴女のアラクネ、私に預けて頂戴、上手く行くか行かないかは、神のみぞ知る…ね」

「馬鹿言えー！ 一度敵対してるんだぞ?! それにスコールは奴らに既に声を聞かれていますー！」

カップを傾け、温くなったコーヒーを飲み干したスコールがクスリと笑う。

「だから言ったでしょう、形振り構ってられない、あの子を助ける為なの、あの子の命と自由、私の命とIS、到底釣り合わないけど、いいのよ、出来ればもっと交渉材料が欲しいけど時間もないわ」

「クソツ……」

「次の作戦あの男は、あの子の命を使い潰す気だから」

オータムが手に持っていた潰れたカップを地面に叩きつける。







「ドウブエヘツクシヨオオオイ!!!」

「?!」

「あゝくホーリーファック……」

「もしシンのそれが普通のくしやみだというのなら俺はシンとの関係を考え直さなきゃいけない」

「そこまでか……?」



The Beginning of the End  
d 終わりの始まり

しえいきんしえいきんぶれいくだんしんで青いイレ  
ギユラーが開眼するお話

「さあ皆様大変長らくお待たせいたしました!! 白熱した量産機での  
1・2を争うトップの奪い合いを制したのは……イギリス代表候補  
生サラ・ウエルキンさんです!!」

ほう、流石は部長だ、画面に映る姿は汗一つ掻かずいつも通りニコ  
ニコとしている。

それを見て横でうるさいレベルで大騒ぎしているせつしー、自分が  
凄いわけじゃないんだぞ、落ち着け。

「インタビューを行いますよう、サラ・ウエルキンさん、今のご気持ち  
を聞かせて下さい!」

『うふふ、みなさま、とても……あら、恥ずかしい、今少し息が……  
すうー、はあー、うんっ、皆様とてもお強くて、最後は少し優雅では  
ありませんが賭けに出させて頂きました、あと一撃受けていればゴー  
ルさえ出来ませんでした。ほら、見て下さい、残りエネルギー……  
まあ! 一桁です! 本当に危なかつたですね』

どうやら表面に出ないだけで相当疲れているらしい、まあ後続も相  
当無茶苦茶な動きをしていたから仕方ないと言えば仕方ないんだが。  
「ありがとうございます! では続いて10位まで紹介させて頂き  
ます!」

画面に現れる10人分の表示、順位、名前、国籍、使用機体、小数  
点5桁まで表示したタイム、そして学生証の顔写真。

「2位のフィンランドの代表候補生メルヤリサ・ヴィルタネンさん  
! 惜しくもトップを逃してしまいましたでしたが今大会トップの選手撃  
破数を誇るスナイパーです! 一言感想をお願いいたします!」

『ふふ、うふふふふ、いやあ、楽しかったですねえ、一位はサラに持つ  
て行かれましたが、まあ8人も落としたので良しとしましょうかあ、

またやりたいですねえ！ それでは、さようならー！ さようならー！』

バケモンや、しかもあのライフルって命中精度がいい代わりに威力が低めのライフルだぞ、それで8人落としたってんだからやべえよ、やべえよ…

「なあシン、なあシン…：どうしよう、なんか俺スゲエ緊張してきた…：」

選手控室のような場所で横に座るいつちーがやたらビクビクしながら俺のバトルスーツを引っ張ってくる。

「なんで今さらビビってんだ、あまり緊張するなよ、普段どおりにやれば、それでいいぜ」

「お、おう…：な、なあ俺、勝てるかな」

「無理だ」

「ええっ?!」

驚いた表情をするいつちーに向かってニイ、と晒う。

「俺がいるからな、それにいつものいつちーなら兎角今のいつちーみたいなビビりに負ける可能性は微塵も無い」

「なあっ…：く、くくっ、そりやそうだ、そうだよな、人が多い程度でビビってちや勝てるものも勝てないな、ありがとなシン、吹っ切れたよ。もう一度聞くけど、俺勝てるかな」

「無理」

「無理を通して道理を蹴っ飛ばす、なんかのアニメで見たセリフだ、この勝負、俺が貫う」

「お次は8位に食い込んだ一年生の…：代表候補じゃない?! フランシス・バツティ・カーチスさんです！ お手本のような基礎、基本を守る堅実な戦い方でトップ10に食い込みました!! 何か一言お願いします!」

「お、おお！ おい見ろいつちー！ フランだ！ フランが8位だぞ!!」

「え？ ふ、フラ…：え？ 誰?」

『えと、そ、その…：に、兄さん！ お父さん！ レイ！ が、頑張りま



周囲へと優雅に礼をしいつもからは想像できない柔らかい笑顔で周りに微笑みを向けるせつしー。

とてつもなく恥ずかしいのか自分を抱きしめるように体を小さくして俯きながらチラチラと俺の方を見てくる簪。

フランスフランスと気合を入れて今か今かと待ちわびる様子のいつちー。

「トーマス！ トーマス！！ からの…エアートラックス!!!」

PAと義手義足、ACの重力操作にモノを言わせてひたすらブレイクダンスし続ける俺。

ヘッドスピンはしない、頭が痛いから。

そして何やら頭が痛そうに目頭を押さえ深く溜息を吐くらうりー、原因は多分応援席最前列にいるらうりーと同じ眼帯をした黒い軍服の女性。

「フレーツ！ フレーツ！！ た・い・ちよ・う！！ 頑張れ！ 頑張れ！

た・い・ちよ・う！！ エル！ オー！ ブイ！ イー！ LOVE

！ LOVE！ 隊長!!」

すかさずその女性にゆっくりと近づき肩をつかむちっふー。

「隊長！ たいちよ…何をやるキサツ…!! きよ、教官?! ちよっ、待って、待って下さい教官！ やめ、な、何をツ!! ああつ、あーつ

！ アツー!! なっ！ 何をやるだアーツ!!」

「…クラリツサ…」

「キヒヒ、キハハハ、なんだ、随分と、楽しそうな、部下じゃないか」「スマン、見苦しいところを見せた…」

どうやら彼女が件のクラリツサらしい。苦笑いしながら俺を見るらうりー、この様子を見ると仲がいいのがわかる、がしかし、お前には（らうりーへの間違った入れ知恵について）山ほど説教がある、楽しみにしているよ。

『では選手の紹介です！ 第1グリッド、中国、中華人民共和国の代表候補生、凰鈴音!! 専用機は第3世代機『甲龍』です!!』

紹介が済むと同時に鈴音がISを展開、特殊なユニットを外付けしたような姿で衝撃砲も前方ではなく横を向いている、完全に今大会に

特化させた姿だ。

『続いて第2グリッド、イギリス、グレートブリテン及び北アイルランド連合王国の代表候補生、セシリア・オルコット!! 専用機は第3世代機『ブルー・テイアーズ』!!』

同じようにISを展開しクルリと回転しドレスの裾を上げて優雅に挨拶するようにスラスターを動かす、その姿はついぞ俺が見る事の出来なかった高速戦闘用の外付けパッケージだ。

『第3グリッド、フランス共和国の代表候補生、シャルロット・デュノア!! 専用機は第2世代……え? ちよ、ちよつと待って下さいね……え、嘘?!』

全員がどうしたどうしたとザワザワしている、しかし当の本人、シャルりんは涼しい顔だ、否、どちらかと言うと誇らしげな顔。

『す、すいません、お待たせ致しました!! えー…シャルロット・デュノア、専用機は……『第3』世代機『ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅢ』です!!』

その直後全員がウソだろオイ、みたいな顔をしてシャルりんを見る、するとシャルりんがテヘペロしながらゴメンネ、と全員に謝った。

まあどんな機体かはカラードも携わったから知ってるんだけどな。

ISを展開したシャルりんがフンと周りを見る、その姿は特注のスラスターを外付けした姿で特にこれと言って外見が凄まじく変わったわけでもなければカラーリングに変更があるわけでもない、強いて言うなれば紫のラインデカールが端に追加されたぐらいだ。

『では第4グリッド、ドイツ連邦共和国の代表候補生、ラウラ・ボーデヴィツヒ!! 専用機は第3世代機『シュヴァルツェア・レーゲン』!!』  
シャルりんと似たような、と言えば失礼だが本当に大きく姿が変わったわけでもない、スラスターを増設した物となっている。

『お次は第5グリッド、日本の代表候補生、更識簪!! 専用機は第3世代機『打鉄式』!!』

我が簪がISを展開するもなんとパッケージを追加しているわけでもスラスターを増設しているわけでもなくいつもの姿そのままである、まあ辺に機体を弄ってしまったのでそういう追加が辛い

という所為だが。

『第6グリッド、日本の専用機持ち、篠ノ之箒!! 専用機は…なあんとっ!! 第4世代機『紅椿』!!』

しかしこれもいつもと変わらないお姿、凛々しい表情が眩しい。

『第7グリッド、世界でただ二人の男性操縦者、イケてるマスクが高い女性人気の秘訣!! 織斑一夏ア!! 専用機は第4世代機『白式・雪羅』!!』

やっぱり案の定いつもと変わらない姿、でもって凛々しいお顔がすべての女性（簪除く）を魅了するもげろ。

『第8グリッド、トリを飾るのは日本……あえてこう言いましたよ、世界最大の軍事機業カラーード所属!! 籐ヶ崎信一郎!! 専用機は……これなんて読んだらいいの、え？ そのまま英数字？ あ、はい。専用機は……』

瞬間的にACを展開、眼前にプログラムコードが並びシステムの状況を知らせる、結果はオールグリーン。

黒い巨大な機体を更に巨大なユニットで覆い、PAを起動、周囲に緑に輝く粒子を散らせ、さながら季節外れの雪のようにも見える光景を作り出す。

各々のパーツが展開し、赤く発光した内部機関が姿を見せた。

『アーマードコア・N—WGIX/v』!!』

全員が固まっていれば簡単に覆い尽くせそうなほど巨大なACを展開しゆっくりと宙に浮かぶ。

『なにあれ……でつか……あっ！ し、失礼しました、それでは皆様、用意はいいですか？ ルールは単純、一番早くコースを3周した人の勝利です!! 勿論攻撃しても構いません、むしろガンガンやっちゃいましょう!! スピードに自信がない？ 火力特化？ 大いに結構!! なら全員叩き落とせば必然的にトップです!! それでは行きましょう！ レディイイイ……』

『スタートオッ!!!』

それと同時に俺以外の全員が一気にトップスピードへと加速し飛び去っていく、あいにく俺の機体はゆっくりと加速していくタイプな上デカイので一々この最後尾を貫ったわけだ。

『まずはトップ、オルコット選手のブルー・ティアーズ！ 続いて織斑選手、凰選手、ぴったりくつつく様にラウラ選手と続いています。最後尾は大きく離れて籐ヶ崎選手、超巨大だからかやはり速度に難があるのでしょうか?!』

いい具合に機体も温まった、加速シークエンスも良好、ハイブーストグリーン、さあて、そろそろ刺しに行きましようかねエー！

『お、おお?! い、今のは何でしょうか!! 籐ヶ崎選手が一瞬消えて凄まじい加速を発揮、尋常では無い速度で追い上げます!!』

最後尾のモッピーを遥か向こうにロック、レールキャノンで叩き落とすとするか。

「なっ、籐ヶ崎か?! もう追ってきたのか!! クツ!!」

しかし遠すぎたのか掠ることもなく団体の中心をぶち抜いていき地面に刺さり地面が捲り上がるレベルで炸裂した。

「ばっ、バ火力め!!」

「今のシン?! あんなの食らったらボクも一たまりないよ!」

「あと少して直撃するところだったぞ! シンめ! イカレてるよ、お前!」

「その何が悪い」

続いて後方3人、モッピー、簪、シャルりんがミサイルのロック範囲に入ったのでマルチロックしてVTFミサイルを放つ。

「やっぱり……! マルチロックなんて、ズルいよ……!!」

「クツ、籐ヶ崎の前だと死ぬるな、これは! 雨月ツ!」

「もつと後に取っておきたかったんだけど……ツ! ヴイツセモート!!」

簪が人かどうかを疑う動きでミサイルのキルゾーンからXY軸の移動だけで回避、モッピーが雨月でミサイルを迎撃し、シャルりんへのミサイルがターゲットロックをズラされる。

「PA…展開…!! 行くよ……!」

「もういい、この際省エネなど無しだ!!」

「ボクも、こんなな神経がすり減るのは御免だよ!」

三人が一気に加速し前方のトップ争いチームにターゲットを擦り付けるように団子状態となる。

『こ、これは凄まじい混戦状態です!! 凄まじい火力の籐ヶ崎選手から逃げ惑うように押し合いへしあいの大乱闘です!! ……あの、本当に大丈夫ですか? そのお、シールドが破れたりとかは……あ、大丈夫? カラード謹製で内側からはめっっぽう強い、シールドレベル5相当? ああ、じゃあ大丈夫ですね』

「そうらそうら、道を譲れエ! 撥ね飛ばされてえか?!」

「ああクソっ! ミサイル垂れ流しやがって!」

「前に出た瞬間バラバラにしてやる…!」

「あああつ! 何これ?! 第三世代兵器ってこんなに頭が痛いのか?!!」

「ふっ! お? はは、ハハハハ!! いいぞいいぞ! いい安全地帯だ! ハハハハ!!」

センサーを使ってぐるりと見渡すとミサイルサイロの丁度間からうりーがワイヤーブレードでくつついている、そういうのもあるのか!

「そろそろどうした! もっと飛べ、駆ける! これはいい気分だ、エネルギーの節約にもなる!」

ちくそう、と丁度目前に急カーブを発見、ロールでらうりーを外側に向けトップスピードのまま120。ほどもあるカーブを曲がる。

「なっ! ぐうっ!!」

機体にしがみ付いていたらうりーが弾き飛ばされワイヤーブレードを伸ばした状態で宙ぶらりんになっている、まるで犬の散歩だ、俺が犬役で。

「振り落としてやる!」

上部を外にした異常ともいえるバレルロールでらうりーを振り回しようやくらうりーを機体から外した、とんでもない事を思いつくもんだ。



「チー！ まあいい、これでかなりのアドバンテージを手に入れたぞ、もうお前は用済みだ、籐ヶ崎!!」

生憎後ろへと攻撃する手段が皆無に近いのでらうりーや他の面々の攻撃、流れ弾などを防ぐ手立ても撃墜する手立てもない、だがこれでいい。

画面に現れるアラートと残りAP僅かという表示、後部に気をやると黒煙も吹き始めている、そろそろ『捨て時』だ。

「VOB、パージ」

コマンドと同時に画面がVOB視点からN—WGIX／vへと変わり前方のユニットが廃棄され後方へと飛ばされていく。

「うおっ！ 何だ今のは?!」

「巨大な鉄塊に見えましたわ、そこっ!」

「くっ……やっぱり……戦うのは……苦手……!!」

続いて背部のブースターユニット、ミサイルサイロ、主要機関がバラバラになり次々と後方へと飛んでいく、ミサイルサイロに至っては残ったミサイルを撒き散らしながら飛んで行くため非常に鬱陶しい攻撃だ。

「このっ、はあっ!! きゃあっ!!」

「ああもうっ! あつぶなっ! ちよ、大きい大きい!! うぎっ!!」

『と、籐ヶ崎選手! 次々とパーツを散らし……な、何あれ?! 姿が変わりました!!』

「さて、遊びは終わりだ……殺してやるよ ( [ C C ] )」

後続を正面にし、後ろへと最高速度で下がりながらライフルとハイスピードミサイルを垂れ流して嫌がらせをする、多少の被弾は異常なまでに強化されたPAでほぼ無効化、何の事はない。

時折横へハイブーストしロックを外してやるとなおよし、さつきよりも確実に遅いためかなり近付かれるがハイブーストで加速しながらだとギリギリ追いつかれるか追いつかれないかの瀬戸際だ。

そうこうしている内にか3週目へと入る。

そろそろ接近がシャレにならないのでコジマエネルギーを収縮、Aを準備。

「うおおお?!」

「く、食らって堪るかあ!」

「冗談じゃないよっ!!」

後続を一瞬だけ急停止させる事は出来たが発動時にはキルゾーンに誰もいなかった、これは再展開まできついで。

ここで俺に対するロック反応が増える、合計「8」個、疑問が頭を過った瞬間回避行動をとったせつしー以外の全員がスラスターやブースターを撃ち抜かれ錐揉みに落ちていく、俺も例外ではない、なんだこの火力は、競技用じゃないぞ。

『な、なんですか?! しゅ、襲撃?! ひ、ああ!!』

せつしーは上空を睨みつけてその場で浮かんでいるが、俺たちはそれどころではない。

何とか残ったスラスターやブースターで地面に叩きつけられるのだけは回避しようと必死だ。

「ぐっ、ぐっ、が、あだっ?!」

「シン!! 大丈夫か!!」

残念ながら姿勢を直しきれず地面に叩きつけられ無様に転がったのは俺だけのようだ、皆様運転がお上手なようで。

「ああ、くそっ! 怪我はねえ! 全員飛べるか?!」

「白式は……駄目だ、片側のスラスターが完全にイカれた、しかもエネルギーも心許無い、出たらただの荷物だ」

「こちらレーゲン、支援砲撃は可能だが同様に機動戦闘が行えない、しかも…あのシールド、外側からはそうでもないが内側からは尋常じゃない強度だ、とてもじゃないが抜けん」

「赤椿は、ああっ! くそっ! エネルギーが殆どカラだ! なにも出来ん! くそっ!」

「こら、女の子がクソとか言うな! 他は!」

「打鉄式、相当いい腕だね……スラスターコアを抜かれたよ……飛ぼうとしてもウンともスンとも言わない……」

「甲龍! なんてこう中国って!! スラスターをやられた時に連動して妙なところが爆発した! 本体自身にダメージは無いけどこれ外

すの一日作業なのよ?!」

「こちらラファール……よし! まだ動く! でも外すのに5分必要だよ! シンは?!」

「今再起動中だ、ひと月で作ったからな、行けるかどうか……行けそうだ、だが俺も5分いるぞ!」

『……こちら、ティアーズ、支援が到着するまでなんとか足止め致しますわ、ですが……いえ……こちらブルー・ティアーズ、青いイレギュラーを排除いたしますわ!』

そう言っせつしーが襲撃者の開けた穴を潜る様に飛び高高度で戦闘を開始した。

『私だ、今そちらに援護を向かわせたが……面倒な事になった、襲撃者は複数人いるようだ、時間がかかる、何とか持ち堪えてくれ』

「こちら籐ヶ崎、セシリア・オルコットに変わり返答する、了解した、A C、ラファール、共に再起動完了後ティアーズの援護に加わる、オーバー」

「くそつ、見てる事しかできないのか……!!」

「エネルギーに余剰がある機体はラファールに受け渡しをしろ。簪は他機体のエネルギー受け渡し完了確認後P Aを起動して全員の盾をこなしながら退避、いいな?」

「わかった……!」

「シン! 危険だぞ?! お前、簪は……!!」

「分かってる」

「分かってるってお前!」

「分かってるツ!!」

「信一郎! ……信頼してくれてありがとう……」

「レーゲン、エネルギーの受け渡し完了だ、残量は最低限スタート地点に戻る程度だ」

「同じく甲龍、受け渡し完了」

簪が俺を見て頷く、再起動完了まであとわずか。

「いっちー、モッピー、鈴音と簪を運んでくれ、俺の妻を、頼んだぞ」  
「ツ……わかった、なんとしても守る」

「馬鹿が、逆だろ、守られる、その為にエネルギーの受け渡しをさせなかったんだぞ」

俺もそうだがシャルりんも相当イライラしている、珍しいが、仕方がない。

「早く…早く……っ、早く!!」

「イライラするな、焦っても仕方がない」

「だって！　だってセシリアが!!　なんだでシンはそんなに冷静でいられるの?!」

「…人に言えた例じゃないがな、俺も相当イライラしてるんだ、生憎今ACにインストールしているのがN—WGIX／vだけだ、そうでなければ今すぐ他のを展開して援護に出る」

残り30秒、早くしろよ、そろそろ本当にやばい。

「そっちはどうだ、こっちは残り20秒だ」

「15秒、御免だけどシンを待つてられないよ」

「構わん」

上空をみると青い巨大なレーザーが4つ輝いていた。

「こちら籐ヶ崎だ、オープンで繋ぐぞ、可能なら状況報告を頼む」

『なっ……!!　「死ね」あああっ!!』

繋いだ瞬間に聞こえる悲痛な叫び声、横を見るとシャルりんが珍しいなどと言えるものではない憎悪の表情を浮かべ、歯を食いしばっていた。

「再起動完了ラファール出るツツ!!」

「オペレーションパターン1破棄、再起動準備、ジェネレーター出力再上昇、オペレーションパターン2、N—WGIX／v出るツツ!!」

ライフルを投げ捨てブレードを展開、出力をオーバーロードさせ、無理やり軍用まで引っ張り上げる、この巨体を通すためシールドを切り裂きハイブーストで抉じ開け、砕き、部分的に破壊した。

視界を通り過ぎ去ったレーザーが湾曲し襲撃者の背に刺さる。

崩壊していくブルー・ティアーズ、落ちていくせつしーをシャルリ

んが抱きとめた。

俺も戦闘区域まで数百メートルのところまで到達する。

「セシリア、セシリアッ!!」

「あ、ら……一夏さんでは、ないん……ですのね……残、念……です、わ……」

「そうだ、残念ながら助けに来たのは愛するいつちーじゃなくシャルりんとムカつくあいつこと俺だ」

シャルりんと襲撃者の間を遮るように俺が位置して二人の盾になる、APは40万もあるんだ多少攻撃されたところで問題はない。

「シャルりん、せっしーを連れて退避してくれ、俺が片をつける、せっしーが文字通り必死こいてダメージを与えたんだ、ブツ潰さねえと割に合わねえ」

「ボクも戦うよ」

「馬鹿言え、じゃあ誰がせっしーを守る、それにシャルりんの第3世代兵器、デッドエイミングなら防御に最適だろ」

「ヴィッセモートだって……わかったじゃあ、後は頼んだよ」

「任せとけ」

「逃がすか」

俺の巨体を避けるようにレーザーが湾曲しシャルりんに殺到する、が、ただの一発として当たることなく弾が自然に逸れて、否、もともと狙っていなかったかのように照準がズレる。

「おい、相手は俺だぞ」

「その機体は情報に無い、貴様……貴様は何者だ……!!」

シャルりんが離脱したのを確認して正面に意識を向けた。

「学園祭の時か、俺があの子と対峙したのは」

この一言であの時の事を理解した襲撃者が口元を歪め、ギリ、と歯を食いしばる。

「お前?! お前が、オータムを!!」

左腕のレーザーライフルが俺の方を向くのと同時にブレードでそれを斬り飛ばし、返す刀でマニピュレーターの先端を破壊した。

「ふむ、腕を斬り落とすつもりだったが、マニピュレーターのみか、存



「ふざける——」

セラフを起動した瞬間にビットを全てミサイルロックし射出、右腕のライフルを光波で切断、一瞬で近寄ってマニピュレータを握り潰す。

「——な……?!」

「言っただろう、遊びは終わりだ」

周囲にビットを配置しレーザー照射エネルギーをモニターしつつゆっくりと調整、残り1桁で止め細心の注意を払いながらエネルギー残量を0にした。

訳も分からないといった様子の襲撃者の首を解除して生身になった右腕で絞める。

「あつ……?! ぐ、があ……!!」

「……眠れ」

「かふっ、かふっ……か、ひゅ……」

パクパクと口を動かす襲撃者がそれを最後に気絶した。

酸素を求めるように俺の腕を引っ掻きながら口を動かしていたが最後だけは意味あり気にこう口を動かした「おにいちゃん」と、ISを解除したその姿はちっぷーをそのまま幼くしたようにしか見えない。

能力で言われた通りXレイでモニターしながら脊椎にある機械を引きずり出す。

仕方がないが所謂お姫様だっこをした状態で右手の中にある小さな機械を見つめる、解析した結果微弱な電気を流すのと石ころ一つ壊す事も出来ないが場所を考慮すれば十二分に人を殺せる爆弾だった。

「……ああ、くそっ、若干殺す気だったのになあ、こんなもんで無理やりやらされてたってか、胸糞悪い」

『……終わった?』

「終わった……だが、計画済みだったって事? もしそうなら十分納得行く説明をして欲しい、こちとら友人が重傷を負ったんだ」

『うん、ごめんね……?』

「それに、こんな小さな子に無理やり殺しを強要するなんざ、到底許せ

るもんじゃねえ、反吐が出る、胸糞悪い、原因をぶっ殺してやりてえ  
……ッ」

『うん、うん……その事でも、あとでちゃんと話をするから……その子  
は私達が拘束する事にするわ……』

ちゃんと呼吸していることを確認して能力で毛布を作り出し女の  
子を包んで移動を始めた、イライラしたせいか目の奥がズキズキと痛  
む。

小さな女の子の寝顔を見ると胸を貫かれた少女の顔がフラッシュ  
バックする。

「ッ……!! 世界の経済は…安定したんじゃねえのかよ……世界中の人  
間が、一端の暮らし出来るようになったんじゃねえのかよ、クソッ  
……」

ガラでもなく、涙が出そうになった。

く く く く く く く く く く く く く く く く く く く

「……どう言う事か、説明していただきましょう」

「今回の襲撃者は以前カロードへと襲撃を行い、物資等を強奪して行  
きました、ゆえに尋問する為、我々カロードが身柄を預かります」

椅子に座る学園長とその両隣りに佇むちつふーとたてにやんこと  
義姉さん、そしてそれに相対するように正面の椅子に座る母さんとそ  
の両隣りに佇むベルリオーズとなぜか俺。

いや、おかしくない？

ベルリオーズは分かるよ？ カロードのネクスト最高戦力であり  
対人格闘技も極めてるからね、でもなんで俺？

せめてさー、レイをさー、連れてこようよー。

ほらあの義姉さんの顔！ 裏切ったのねと言わんばかりのあの顔  
!!

どうしようもない気持ちになってもう最早どうにでもなーれ☆

「今回の襲撃で我が校の生徒が重傷を負いました、襲撃を受け、戦闘に  
なった原因はそもそもがシールドの外部からの耐久性ではなかった



のですか？」

「あれは内部からはレベル5相当、外部からもレベル3相当の強度で作ってあります。そうしると仰ったのはあなたではありませんか？」

両者一步も引きません、胃が痛い、そうして顔をしかめているとベルリオーズが顔をこっちに向けずに何かを渡してきた、受け取ってそれをみると胃薬だった、優しい。

水なしで飲める奴、嬉しい。

カプセルをごくりと飲み込んで同じように顔をしかめていた正面のちっふーに投げてパス、助かったと言った表情を作って同じように飲む。

更に回ってたてにゃんへ、これもまた飲んでベルリオーズへパス、涼しい顔で受け取って後ろで手を組むような自然な動作で直した。

この耐久戦を制したのはカラードだった、中々手に汗握る戦いで周囲4人の胃袋に多大なダメージを与えて行った。

「お疲れさまでした、信一郎様」

「いや、ありがとうベルリオーズ、助かったよ」

「私共も、助かりました、ありがとうございます」

「ええ、本当に、ありがとうございます」

「なんであなたたちは、そんなに仲がいいんですかねえ……」

「いいではありませんか、では、約束通り彼女の身柄は我々が、勿論約束通りそちらの監視もお受けいたします」

さて、やることが多いわ、と言いなながらベルリオーズを引き連れて歩いて行く母さん、近日俺が社に戻った時説明すると言っていたが、はたして……。

？  
気になるのは隣にいるちっふーだ、本当に瓜二つだったが一体……

「ちっふー、差し支えなければ一つだけ聞きたい、ちっふーの兄弟姉妹は本当にいつちーだけなのか？」

「なんだいきなり不躰に、そうだ…間違いない私の家族も、弟も、一夏しかない」

「……さよか」

「いやあ隊長！ ヤーパンはいいですね、素晴らしいですね！ 敬愛する我らが隊長にお会いできるし、可愛いにゃんこぽじやまも見れたし！！ アキハバラなんてもう最高です！！」

「……そうか」

「むっすーとしないで、ほおらニッコリして下さいよ、にっこにっこにー☆」

「最近な、知ったのだ、お前の入れ知恵は間違っている物が多いと」

「えっ?! そ、そんな馬鹿なあー、ねえ隊長、そんな事ありませんよー、だって私達黒兎隊は隊長の事を心から敬愛していますからっ！」

「うむ、それは分かっている、だがな、教えられたのだ、少し遊ばれているぞと」

「だっ、誰がそんな事を?!」

「私だ」

「お前だったのか」

「あ、そう言うのいらないます」

「アツハイ」

そこまで全力でボケられても、その、なんだ、困る。

「なんですかあ？ ああなあはあ？ 何我らの可愛い隊長に警戒心与えちやってくれちやってるんスかあ？」

お？ お？ とか最近見ないヤンキーみたいな事をしてくる残念美人。

「カラードの籐ヶ崎信一郎、私の友人でドイツに多大な利益を与えてくれている人間だ」

「…たあいちよお、もうちびいつとマシな嘘付いて下さいよ、籐ヶ崎信一郎で隊長と同一年ですよ？ 高校1年生ですよ？ こおんなオツサンなわけwww」

「………ハルフォーフ大尉」

「……マジすか？」

たっぷり10秒俺を指さして形容しがたいギャグ漫画みたいな顔をしてダラダラと汗を流し始める。

「しっ、失礼いたしましたアツ!!! 籐ヶ崎信一郎様ご本人とは露知らずとんでもない御無礼をツツ!!!」

びしりと敬礼をするがもう何もかもが遅い、ヒ○コの描くギャグシーンみたいな顔をしている。

らうりーは全身全霊で溜息を吐きゆつくりと首を横に振る。

「すまない、籐ヶ崎、クラリツサは、いい奴なんだが……こう、少し……残念でな」

「いいよ、慣れた、まあそれとは別に少々お説教と行こうか、らうりーここで待っててね、お菓子食べてていいから」

「うむ、お手柔らかに頼む」

らうりーに女性としての羞恥心がなかった事について説教したり変な入れ知恵のせいでちいとばかし危ない目に遭いかけたりした事に対して説教をしたりすると俺の評価が「怒らせたら教官とは別ベクトルで凄く怖い人」になった。

「——でだ、それによつてらうりーが裸で男のベッドに潜り込むなどと言う恐ろしい事が……聞いているのか?」

「はひ、はひい……!!」

「——それに、この前なぞ——」

「は、あん、は、ひいん……」

「——真顔で何も知らず下ネタでも特にヤバいのを——」  
「んう、んううう……」

「あし、いたくて気持ちいいのお……」とか言いだしたあたりで流石に説教を終えたが立った時に全力で足が痺れて痛かつたらしく虚しくも「開眼」してしまった事は完全に余談である。

時には悪役になるのもドアが開かないのも仕方ないね、なお話

小さな部屋の椅子に座る少女はほとんど動かず周りを観察していた。

「なんだ……ここは……」

その少女が目覚めたのはほんの数分前、ただ拘束されるわけでもなく異常なまでに分厚い強化ガラスの窓、内側から開く事のないドア、シンプルなベッド、ソファーのような2つの長椅子、椅子の間に机のある見た目だけは普通の部屋に寝かされていた。

一応内側から開くドアがあったが、その向こうはただのトイレを備えた浴室でしかない、ただ暮らす分には不自由のない部屋だ。

少女にとって腹の立つ事に冷蔵庫まで常備されておりその中身もちよつとした食料やミネラルウォーター、ついでにココアや牛乳、オレンジジュースなど妙に充実している。

「ISは奪われたか……私は……捕まったのだな……」

『その通りだ、亡国機業のエージェント』

小さく呟いた瞬間機械で増幅された声が部屋に響いた。

「…誰だ……!」

『私は誰か、その前にまず最初の疑問に答えよう、そこは所謂独房のような所だ、急ごしらえなので不備があったら申し訳ない』

「ふん……これが、独房か……私にはホテルの一室にしか見えんがな」  
『まあ、それはいい。次はさっきの質問に答えよう、私は……カラードの尋問官、とでも言えばいいかね?』

つまり、ここはカラードか、そう理解した少女は即座に脱出するプランを練り始める。

『そう、そうだ、まずは君と直接話をしようと思ってたんだ、入ってもよろしいかね? なに、プライバシーは大事だからね、中が見えないんだ、ちゃんと服は着てるかい?』

「ふん、聞き耳を立てている癖にプライバシーか、面白い事を言う」

『それはすまないね、だけどまあ、いきなり話しかけて脅かすわけにも  
いかないだろう？ それはそうと随分可愛らしい寝言だったね、ふふ  
ふ』

「ぐっ!! つく…!!」

少女は精一杯の恨みを込めたような顔をするが如何せん顔が真っ赤なので可愛らしくしか見えない。

『では失礼、入らせて——』

ガチャリ、と音が鳴る。少女は扉が開いた瞬間入ってきた人物を無力化し、脱出しようと身構えた。

「——— いただくよ?」

きつと、入ってきた人間が生身であったなら首の骨をへし折って逃げ出さだろう、きつと、ただのワードスーツを着た人間だったなら蹴り倒して逃げただろう。

きつと、その入ってきた人間が赤と黒の装甲を纏った、気を失う前に対峙した圧倒的な力を持ったモノでなければ。

「ッ!!」

「ロックしてくれ」

少女が固まっている間にドアを閉め、ロックをかける。

「まあ、掛けたまえ」

「ふっ…ふうっ…!!」

少女の呼吸が見る見る荒くなり、目もしきりにそこら中へと視線を向けている、流石に彼女にとっては苦しい物があるだろう。

仕方がない、と信一郎はACを解除し自分から先に椅子へと座った。

— Third Person End —

「まあ落ち着け、何も取って食おうと言うわけでもない」

「ッ、触るな!」

背中を撫でてやろうと触れた瞬間力いっぱい手を弾かれる、シヨック。

「そうだ、何か飲むか？ それとも何か食べるか？」

「不要だ……！」

随分嫌われてて割と真剣にショック。

「まあ、掛ける、話も出来ん、大事な話だ」

「……………」

ようやく、しびしびと正面のソファに座る少女。

「まずは挨拶だ、初めてではないが、まあ一応こう言っておこう。初めまして、俺はカラードの籐ヶ崎信一郎だ、君の名前は？」

「……………」

「まあ、知っているんだがね、『M』ちゃんでもいいかな？」

「それでいい……」

ぶつすーと愛想のない子だ、まあ敵に捕らわれて愛想のいいってのはおかしいんだが。

「まずはMちゃんに見てほしい物がある、このマイクロチップに見覚えはあるか？」

「…知らない」

「だろうな」

「…なぜ聞いた？」

殺伐とした雰囲気の中短い受け答えだ、これではなんの面白みもない。

「このマイクロチップは微弱な電気を流す事が出来、かつ超小型の爆弾でもある」

「ッ?!」

「威力は大したものではない、破片も散らず、爆竹程度の爆発しか起こさない……その起爆スイッチがこれだ」

ポケットからこれ見よがしの起爆スイッチを取り出すとMちゃんが見るからに狼狽している。

「…や、めろ……」

「今からこいつを爆発させる、恐ろしい事に別段特殊なコードを使っている訳でもない為類似コードを持つ爆弾などは巻き添えで爆発するだろうな」



『…やっぱ、テメエが出てきやがったか…!』

アラクネを纏ったオータムがバイザーの奥に見える表情を歪めた、視線の先にはフォーミュラにも似た雰囲気を持つ紅い鋭角的なACを纏う男。

くつくつと晒うように肩を揺らし派手に両腕を広げた。

『ようこそ…歓迎するよ、亡国機業のエージェント。一度引いた身で、素晴らしい執念だ。狙いは、あの女の子かい？ かつて君を助けた。それとも、ひよつとして俺かな？ 何でも構わないよ、このシナリオを滅茶苦茶にしてくれれば。』

選ばれるのは、二次移行した第四世代機かと思つてた。だけど興味深いね、君のその、仲間への執念は』

『ほごきやがれ、クソ野郎、テメエをぶつ殺してアイツを取り戻す、やらなきゃならねえ事がある』

形状の違うライフルを両手に展開し、背に異なる武器を出現させ赤いアイラインセンサーを光らせる。

『君たちのエージェントは大体処理した、もうめぼしいやつは残っていないと思うよ、君以外は。』

そして、ここでこれから君も死ぬ!!』

『舐めるなアツ!!』

異形ともいえるISの毒々しい色と緑の残光を引く紅い色が一瞬交差する。

それが戦いの火蓋を切る合図だったかのようにレーザーやマズルフラッシュが空を彩った。

紅いACが両手のライフルを人が捉えきれない速度で移動しながらアラクネへと連射する。

対するアラクネがその異形とも言える機体にクリーンヒットを発生させず巧みに回避させながら装甲脚からのレーザーや手に持ったライフルを操り紅いACへと攻撃を仕掛ける。

紅いACの戦い方は巧いとは言い難かった、機体性能に丸投げしたかのように単純かつ荒い動き、しかしそれでも優勢なのは紅いAC



だった。

荒い狙いの銃撃は高性能なFCSで修正され的確に危険域へと刺し、単純な動きは人への負荷を一切考えないような異常な速度により凄まじい回避行動へと変化する。

ようやく紅いACへと刺さった弾丸は緑の粒子に掻き消され殆ど全くと言っていいほどに無力と化す。

『どうしたんだい、競技用で出た方が良かったかな？』

『この、イカレ野郎が…!!』

『俺からしてみれば、イカレてるのは全部だ、この世界の』

いずれアラクネが敗北を喫し、死に至るのは誰の目から見ても明白だった。

監禁された状態で戦闘映像を見せつけられている彼女、「M」から見ても。

「いやだ、嫌だ…：オータム、オータム…!! 逃げて…!!」

その頭の中では彼女にとって大事な仲間が惨たらしく殺されている姿がまざまざと見えていた。

『クソ、クソ…!! スコールさえいりや、二人掛かりなら…!!』

『スコール？ ああ、黄金のISを使ってた彼女か!』

紅いISがまるでスコールを知っているかのような声を出す、楽しそうに、愉しそうに。

『まさか、まさかテメエ…ツツ!!』

「そんな、嘘だ、嘘だ、うそだ、うそだ、うそだアツ!!」

『言っただろう？ エージェントは大体処理した』

紅いACが左手のライフルを無造作に投げ捨てその掌を前へ突き出し空へと向ける。

『君以外にめぼしい奴は残っていない、と』

その掌に現れた物は「M」にとって、オータムにとって見覚えのある物、スコールのIS「ゴールデン・ドーン」の待機状態だった。

『中々面白い相手だった、でもまあ、ACに打ち勝つ事なんて出来なかつたけど——』

左手をおもむろに握ると『バキン』と甲高い音と共に粉々に砕け散

る。

『——ね?』

ゆっくりと掌を開くと手に残っていた破片がバラバラと、サラサラと落ちて行った。

「嫌だアアアアアアアッ!!!!!!」

『テメエエエエエツツ!!!!!!』

アラクネが武器を片方投げ捨て掌を紅いACへと向け、即座にある物を射出した。

『巢』が紅いACを捕らえ身動きを止める、ギチギチと怒りにより震える手で片手のライフルを捕らえた紅いACへと向け、叫んだ。

『殺す! バラバラにしてブチ殺すッ!!』

巢に捕らわれた紅いACが腕を動かすがギシリ、と巢が音を立て歪む、それだけだった、諦めたように、ともすれば呆れたように右腕のライフルも捨てる。

『ガコン』と異質な音を立てながら。

『死——』

トリガーを引き絞る、その寸前に甲高い音と共に両腕にブレードを展開した紅いACがすぐ眼前へと迫っていた。

瞬間時速4000kmを超える物体を200メートルと離れていない距離で知覚出来る存在などこの世に存在はしない。

ドン、と衝撃が走ると紅いACの両拳がアラクネの腹部に突き立てられていた。

『——ね……? な、んだ……これ……?』

アラクネから小さな声が聞こえた直後紅いACがアラクネを持ち上げ、自分ごと地上へと落下していき、衝撃を走らせ、砂埃を巻き上げ、森の中へと消えていった。

数秒の後、二人が落ちた場所で巨大な緑光が球形に炸裂する。

その後クレーターの中でゆっくりと佇んだ物体は、緑のラインセンサーを輝かせる紅いACだった。

『まあ、こんなもんかね……終わってみると——』



「キサマツ！ キサマアアツ!!! よくもオータムを!! よくもスコールをおツ!!! よくも私の大切な人達を!! よくも私の大事な人達をツ!!!」

何度も殴られているが一番最初ほどの痛みは無い、殴る力も徐々に落ちてきている。

「返せツ!! かえせ：ツ！ ふたりを、かえせえ：：!! うう、うあああああ……!!」

ニヤニヤ眺めるのは構わんが速いところ助けてくれんか、顔も心も痛くて堪らん。

「そいつがボコボコにされんのはいい気味だが、手エ痛めるからそこまでにしとけ『マドカ』」

「そうね、拳を痛めちや大変よ、もう大丈夫だから、ね?」

「…え、え…?」

ようやつと助け船を出してくれたがこいつら二人揃って俺の事全く考慮してねえ。

「な、んで……? どうして……?」

不思議そうに目を白黒させて助け船を出した二人、「オータム」と「スコール」を見るMちゃん、いや、マドカちゃんかな?

「そうだなあ、分かりやすく言えば、助けて貰ったんだ、私も、スコールも……そしてお前もな、マドカ」

「ごめんなさいね、隠してて、でもこうするしかなかったのよ」

「感動の、再開は…素晴らしい事なのは、よく…分かるが…そろそろ、放してくれないか…?」

なぜ殴られる側の俺がゼイゼイ言っているのだろうか、これってトリアビアになりませんか?

なりません。

じゃあ妖怪のせいだよ。

違います。

「あだっ」

ふいに手を離されて地面に落ちる、なんでや、なんで俺の扱いこんな悪いんや。

「で、も…だつて…二人は…」

「それは後で説明するとして、私達も随分と幸せ者だな、お前に大事な人と言われるなんてな…なあ？」

そろそろ立てそうだ、とりあえず自分で触った感じ歯が逝つてたり骨が逝つてる訳では無さそうで俺ちゃん自分の強度にドン引き。

「ゲホッ、ガホッ…まずは、全員椅子に座つてくれたまえ、後からと言わず、今説明する」

俺を立てせようと手を伸ばそうとしたスコールを手で制し、自力で立つ、怪我など大した物ではない。

「ぐ、ふ…ああ、さて、まずは何から話した物か…」

「…全部だ、さっきの事も含め全部話せ」

両手でオータムのスコールの服をしっかりと握りしめたマドカちゃんが睨むように俺を見る。

「そうか、ならば元から話をして貰おう、スコール」

「そうね、私は、いいえ、私たち二人は我慢できなかったの、マドカ…あなたが道具のように扱われている事が…」

「スコール…オータム…」

「ああ、だから私達はあの肥溜めみたいな組織を裏切つてここに頼みに来たんだ」

「聞いた話だが、「M」ちゃん、君はまだ人を殺した事が無いらしいな、故に彼女たちはこう頼みに来たのさ」私達の命もISも何もかもを捧げてもいいからマドカを助けて下さい、あの子はまだやり直す事が出来るから」とな」

「そんな、そんな…!!」

「だがその話を聞いて君だけじゃなく二人も助けようとした人がいた、カラードの社長だ、これが元だ」

戸惑った様子で二人の顔を見るがその二人は優しい笑みを浮かべてマドカちゃんを見ている。

「それで次だ、先ほどの映像はセキュリティの甘い、それこそ多少ハックやクラックを学んだ子供でさえ簡単に盗み見る事のできる回線で記録していた、我々カレードは各国から多数の監視やハッキングを常に受けている、もう既に全世界のトップが今の映像を見ただろう」

鼻がムズムズするのでティツシユで鼻をかみクシヤクシヤにしたティツシユを左手で焼く。

「ん、んっ、つまりだ、各国での君たち亡国機業のエンジニア二人は死亡したという扱いになる。スコール、オータム、この二人はもうこの世に存在しない、死んだ者だ。後ほどカレードの人間として新しい記録を作る、それが社長の考案した二人を助ける術だ」

まあ、軍用兵器としてのACの広告も兼ねているんだがね。

「君たち二人のISも破棄した、思い入れがあつた場合は申し訳ないが十中八九GPSが仕掛けられているだろうからな、その為君たちに二つの選択肢を与える、戦いと離れ、研究員か社員として過ごす道、そして…カレードのACを駆って臨時の戦闘要員となる道、この二つだ」

「まって、この子は、マドカはどうなるの?」

「勿論彼女にも同じような選択肢を与える、ただ…ACではなくISを使うだけだ」

「まだこの子を戦わせる気なの?!」

「戦いたくないならそれでもいい、約束、契約しただろう、彼女に自由を与える、いずれこの日の下を気兼ねなく自由に歩き笑う事が出来るようにする、それがカレードの決意だ」

「…わたしは、わたしはまだお前を信用したわけではない、だが…本当に、二人を、私を、助けてくれたのなら、私は戦おう、恩返しを、させて貰う」

「マドカ! お前はもう、戦わなくていいんだ、もう自由なんだぞ…!」

「自由、か…ならば戦うのも自由だ、私は戦う事しかできない…:…:それしか、知らない…!」

「こっ…:…:の…ッ!!」

「…分かったわ、マドカがそう言うなら、私も決まったわ…：力を下さい、私に戦う力を、この子を守る力を…!!」

「つはあ…：分かったよ、勿論私にもだ、守るための力をくれ」

「二人とも?!」

「いいだろう、まあ可能性も0では無かったからな、用意はしてあるがここには無い、後ほど渡す。さて肝心のMちゃんにだが——」

と話をしているとロックしていた筈のドアがグシヤアと嫌な音を立てて抉じ開けられる。

即座にマドカちゃんを後ろに隠すよう庇う二人、俺も左腕の無反動レーザーを起動準備にしてドアを見る。

「いいヤツホー!! 呼ばれて飛び出てジャジャジャジャー!! みんなのアイドル束ちゃんだよおー!!」

素手でロックの掛ったドアを抉じ開け満面の笑みで自己紹介をするかの大天災。

「…：だからその時になったら呼ぶと言ったのに…：なにもドアをぶつ壊さなくてもいいだろ…：」

予定ではあと数十秒だけ後の出番だったのだがどうやら我慢できなかったのかそれとも。

「うっさいなあ」

「困るのは社長である母さんなんだけど」

「うわあ?! ど、どうすれば…：ハッ! 今ここで直しちゃえばいいんじゃない! さすが束さん!」

言うや否やどこから取り出したのか初めて見るツールやら工具やら、なんか変な空飛ぶ物体やらが篠ノ之束の周りに現れる。

量子変換独特の発光が無かったので本当にどこから取り出したのやら…。

目の前で「トントンカントントンカングイーン」と言いながら(余談ではあるがそのような実際の作業音は出ていない)見る見るヒン曲がったドアを直している。

変に曲がったドアを素手で無理やり形を整えているのを見ていると俺はまだまだ人間なんだと思えてくるから不思議だ。

「んふいー、久々にいい仕事したあー！ んっんー！」

こちらに振り向いてキラキラとした笑顔で額の汗を拭うとにんまりと笑みを浮かべてマドカちゃんを見る篠ノ之束。

「はい二人ともどいてー、うんうん！」

両手の手首をスナツプさせて手を振ってオータムとスコールに退くように促す、二人はちらりと俺の方を見て頷いたのを確認するとゆっくりと退けた。

「さあこつちを見てー？ んっふふ、本当にちーちゃんそっくりだあ、そうそう、ちーちゃんも昔はこんなにかわらしい顔だったなあー、不機嫌そうな顔もそっくり」

「あ、あなたは……」

「んー、そうそう！ れーさんに言われたもんね、まずは自己紹介だね、私は篠ノ之束、しがない天才の一人だよ、貴女のお名前教えてね？」

「わたしは……わたしは……っ、お、り……おりむ……」

ぎゅつと両拳を握りしめ、唇を噛み、苦しそうに表情をゆがませる。

「クローン体……クローンナンバー……14号……ッ」

「ノンノン！ 違うぜえく、超違うぜく！ いいかなつ、私が知りたいのは貴女の名前！ 識別番号とかそういうのは今はお呼びじゃないのさー！ それにそんな大雑把な識別なら束さんは「大天災」になるしそののれーらさんの息子なんて「よく分からないつきはぎのヘンな」だしね、だから私が知りたいのは貴女の『名前』」

依頼はごく単純、篠ノ之束の発言で傷ついたこのヘンなのを励ますだけ、言葉は実弾を使用、なんで最悪こつちが死ぬけど、まあそのつもりで。

「名前……私の……名前は……おりむら、織斑……マドカ」

「おーいえ、マドカちゃんだね、ならならく……まーちゃん、かなつー！」  
につこりと子供のよ様な笑みを浮かべる篠ノ之束と泣きそうな嬉しそうな複雑な表情をしたマドカちゃん。



「じゃあまーちゃんにプレゼント！ 158番目の束さんの娘をまーちゃんの為にカスタムした子だよ！ 元がイギリスなのでそれが変に改造されてたね、コアの最外層にヘンな落書きがしてある感じの！ しかもセンスが皆無!! れーさんが見たら笑うねあれは！」

「158…？ コアナンバー269だと私は……」

「269番目？ あの子はいまIS学園で打鉄って言うのに入ってるよ？」

まあまあそんな事はおいとして、と言いながらくるとドアに体を向ける。

「かもん！ くーちゃん!!」

全員がドアに目を向ける、が。

動かぬ事約10秒、ドアが開く気配は無い。

「…うわああああああん!! クーちゃんに嫌われちゃったよおおおお!!」

くーちゃんなる人物が誰なのかは皆目見当つかないが冷静に考えたら単純にドアのロックが掛かっているだけなのではないだろうか、ロック簡易解除のコードである俺の指パッチンを一度行う。

自動ドアがういーむと音を出し開いた。

「開けーごましおっ……あっ……」

扉の向こうにはこちら側に両手を突き出しながら変な呪文を唱える少女、両目を閉じているがその姿、というか雰囲気はらうりに酷似している。

ごめん嘘付いた、らうりーよりも遥かに常識的にしつかりしてそうだし雰囲気も柔らかい、ただ人工的のような髪色とかがらうりーに似ている。

ごめん嘘付いた、らうりーだけじゃなくて大体の主要人物の髪色が人工的。

クーちゃんなる人物がドアが開いたのを理解するとその姿勢のままゆつくりと顔を赤く染め始めた。

「うおおおおおあああ!! ぐーぢやああああん!! ごべんねえ!!」

「ごべんねえええ!! だばねざんがわるがっただがらああああ!!! ゆるじでええええ!!」

「たっ、たばっ…束様…?!」

淑女にあるまじき顔を晒しながらクーちゃんなる人物の腰にしがみ付き号泣する世界が羨む大天災。

「えと、その、違うのです…ただ、ドアが開かなかっただけで…」

「あ、なあんだよかった! さあクーちゃん、まーちゃんに新たな力を授けるのです!!」

切り替え早すぎるんですがこれは。

「の! 前に!! クーちゃんも自己紹介しなきゃねっ!」

「はい、束様。はじめまして皆様、私は束様の…束様の…なんでしようか? メイド? 部下?」

「家族だねっ! 大事な娘だよ!」

「束様の娘、クロエ・クロニクルと申します。本日は束様が麗羅様に自慢したいとこのことで連れて来られました、また、マドカ様に新たなISをお渡しするという役目も承っております」

「なんと! この束さんが唯一! ただひとりだけ!! まーちゃんの為だけにカスタムした真正銘最初で最後の『戦闘用』ISだよ!」  
てことはですね、本当にこれと対峙するなら今の福音が軍用のACで対峙するしかないってことですね。

「最初で最後の…戦闘用…?」

「そっ! でもでも、この子はあげるんじゃなくて貸し出すって感じかな、コトが終われば国同士はいざごきはれーらさんが受け持つてくれるって言うから、ISは全部本当に宇宙開発用になるんだ! だからこの子はまーちゃんが成すべき事を成し遂げたら自由にしてあげてね」

「…:…はい、深く…心に留めておきます」

「んっ♪ さて、じゃあクーちゃん!」

コクリと頷きマドカちゃんの前に歩み出て、まるで結婚指輪が入っているような箱を手渡す。

全員が見守る中息をのみゆつくりと箱を開くマドカちゃん。

マドカちゃんだけが箱の中を見れる中数秒制止、ゆつくりと口を開いた。

「えっ」

オータムもスコールもどうしたどうしたとマドカちゃんの手にある箱を見ると狐につままれた様な顔をする。

その箱から取り出されたのは……

「箱」

「ああ、箱だ……」

一回り小さな箱、今度はプレゼントボックスみたいな形状をしている、ご丁寧にリボン付きだそれも花卉のような形状。

「んぐふふっ」

「束様、その下品な笑い方をお止め下さい」

微妙な表情をしながらまたリボンをゆつくりと外し几帳面にラッピングを剥がす、置いておけば何かに使えるかな、あの紙。

中から現れたのは幾何学的な淡く発光する模様が描かれた立方体、上部にはまさに何かありますよと言わんばかりに円形に発光している。

マドカちゃんがその円に触れるとパズルのように開かれ中から指輪が現れた。

「……これが……」

「そう、それがまーちゃんの『Battled Infinite 戦闘用インフィニット・ストラトス』黒騎士だよ」

「……黒騎士……」

「どの指でもまーちゃんにフィットしてくれるよ、好きな所に、ね！」  
右手の人差し指へとゆつくり嵌めようとしたマドカちゃんが突然それを中断して左手の親指へと指輪を嵌めた。

「左手の親指、意味は確か……信念、強い意志を持ち、貫き通す。だな」  
「……そうだ、私には目的がある、やらねばならない事がある……」  
「んふっ、じゃあ束さんはれーらさんところに行くねっ、ばっははあい！」

クロエ・クロニクル、くろろんの手を引きドアへとずんずん歩いて

行く篠ノ之束、目の前に立つも扉が開く様子は無い。

「開けゴマ！」

「開きません」

「開けごましお!!」

「駄目です」

「アプアプカムカムドアドアバンバン!!」

「なんですかそれは」

「ひらきつちよんちよめりんげんチャツボにハマってどっぴんどアドアおーぷん!!」

「束様、せめて私にも分かる言語で…」

流石に不憫なのでドアを遠隔で操作して開くとくろろんの方へ振り向きながらすごい笑顔になった。

「合ってた！ 合ってたよクーちゃん!! でももう束さん今のもう一度言える自信がないかな!!」

「そ、そうですか…」

陽気に鼻歌を歌いながら去っていく篠ノ之束、世界を揺るがせた人物とは到底思えない。

「……さてと、ではオータム、スコール、少し外してくれ。俺は…マドカちゃんと言っているか?」

「…ちゃんは要らない、マドカでいい」

「わかった、俺はマドカと少し話がある。そんな目で見るな、変な事はしない」

「マドカに変な事したらぶっ殺すぞ」

チラチラとこちらを見ながら部屋を出て行く二人を見送り、ドアがロックされたのを確認して目を前に向ける。

「やっと落ち着いて話ができるな、どれ、飲み物でも飲むか?」

「……貰おう」

特に何というものでもない市販のココアを紙コップに注ぎマドカの前に置き、向かい側の椅子に深く座りこんだ。

「まどつち、君に会って貰いたい人物がいる」

「まどつち?! な、なんだそれは?!」

椅子から乗り出して俺の方へと迫り問い詰めてくるがちつぷーよりも幼さの残った可愛らしい顔で怖くは無い。

「この会って貰いたい人物だが、君もよく知る人間だ、しかし相手は君を知らない」

「さて、おい！ 話を進めるな!!」

子犬がきやんきやんと吠えるように可愛らしい抵抗を続けるまどつちを無視して話を続行。

「いつちー、織斑一夏だ」

「ツ!!」

「お前ツ!! ふざけているのか?!」

「いいや、大真面目だ。生憎二人と約束したからなお前を自由にする、その為の一過程だ」

「ふざけるのもいい加減にしろツ!! 私に殺されたいのか?!」

胸倉を掴んでいるが身長も筋力も体重も圧倒的にこつちが勝っているので服が上に押し上げられているだけだ。

「…オータムから聞いていないのか？ 殺せない化け物だと」

「ツ……」

「まあ、放せ。いったい何が不満なんだ、何が心配なんだ」

「不満だと?! 心配だとツ!!」

右手で俺を掴む手をトントンとあやすように軽くたたくとゆつくりと手を離し顔を下に向けた。

「…たしは…クローンなんだ…認められるわけ…会えるわけ……ない、じゃないか…!!」

「こつちを見る……わかった、なら見なくてもいい、だからよく聞け」  
床にぽたりと雫が落ちる、仕方が無いのでこつちを見せる事はあきらめる。

「いつちーはな、俺の親友はな、そこまで器の小さい男じゃない、そりゃ鈍感だし馬鹿だ、でもな、アイツほど底が抜けてると思えるほどの器のでかい男は見たことが無い。会いたいんだろう、見てほしいんだろう、認められたいんだろう、だから逃げるな、どうせ何時かその時



「妹…弾か、いるぞ」

立ち止り、後ろに振り向き腕を組みながらいつちーを見据える。

「妹の事をどう思っているか、聞いた事は？」

「ある、俺はそう思わないんだけど乱暴でガサツだって言ってた、でも……たったひとりの大事な妹だ、何をしてでも守るべき妹だって言ってたな」

「…そうか、俺にとってはな、妹を守れるのは兄の義務であり権利なんだ、うちの社員全員そうだが、俺にとっては世界すべてを敵に回そうが、両の瞳を灼かれようが、唯一残った腕をもがれようが、幾千の命を奪って万の刃を受けようが、護るべき対象だ」

「あ、ああ…」

「大事な用件ってのは人に会って貰う事だ」

「それが…どうして？」

「……本当に鈍くないっちは、会って貰いたい人物の名は『織斑マドカ』お前の妹だ」

「俺の……妹？」

「そうだ、そして妹を持つ兄として一つだけ言っておく、いつちー、お前の妹を嬉し泣き以外で泣かせてみる」

「お前をぶち殺すぞ」

救いと絶望と世界の異常が足音鳴らしてやってくる  
お話

二重構造のドアの前、友人に促され一枚潜った所で少年は一度大きく息を吸い、ゆつくりと吐いた。

握りこんだ手が汗ばみ、不快感を少年に感じさせる。

十数秒、決心をした表情の少年がドアをノックした。

『誰だ？』

中から聞こえる少女の声に少年は一步後ずさる、その声は少しだけ知っている人物に似ていた。

「お……俺は……その……」

『……織斑……一夏か、籐ヶ崎部長から話は通っている……ロックを解除した、入れ』

ドアへと再度近づくと空気の抜ける音と共にドアが開く、顔は後ろを向いているので見えないが黒い艶のある髪に小さな体軀、窓枠に置かれた手、細く白い指。

窓の外を見る少女の後ろ姿は弱弱しく、今にも消えてしまいそうだった。

「……久しぶりだ……いや、そっちは私の顔を知らないんだっただな……」

ゆつくりと一夏へ振り向き、ようやく少女の顔が明らかになる、一夏は心臓が止まるかのように内心驚いたが、表に出さぬようそれを押し殺す、その顔は――

「初めまして……織斑オリジナル一夏」

「その……顔……」

――一夏の姉である織斑千冬と瓜二つだった。

「私はお前なんだ、似ているに決まっているだろう」

「どういう、ことだ……？」

少女は口元を歪め、笑みを浮かべる。

「分からないか？ 私は織斑一夏、お前の……クローンだ」

「クローン……」



「自己紹介といこう、私は…クローンナンバー14号…織斑マドカだ」  
傍から見れば嗜虐的とも思えるその歪んだ笑みは、一夏にとつて笑っているようには見えなかった。

まるで…苦しんでいるような…それとも悲しんでいるような、そんな表情にしか思えなかった。

「ククク、自分のクローンと初めて顔を合わせた気分はどうだ？ 不快だろう？ 怒りが湧いてくるだろう？ 悔しいだろう?!」

わざと相手を煽るような物言いさえ、一夏を怒らせる為でも無い、そうとは感じられない。

「…：ひとつ、一つ聞かせてくれ…お前は、お前は俺の何なんだ」

「あ、ハハ、ハハハハツ!!! これほど物分かりが悪いとは!! 私の元だとは恐れ入る!! 言っただろう、織斑一夏ア!! お前のクローンだ!」

「クローン<sup>鷹作</sup>なんだ!!!」

「そうじゃない!!! クローンとかじゃなくて!! お前は、織斑マドカは!! 一体俺の何だ!!!」

一夏が叫ぶ、しかしその顔に宿るのは怒りなどではなく悲しみ、その顔を見たマドカが驚いた顔をしてすぐに顔を伏せた。

「…私は…：お前の、妹だ…：そういうえば、満足なのか…?」

震える声で、絞り出すように、聞こえるか否かと言うほど幽かに呟き、濁したが間違いなく本心だと確信する。

「だったら…：それでいいじゃねえか、お前は、織斑マドカは俺のクローンなんかじゃない、俺の妹だ、それでいいだ——」

ゆっくりとマドカに手を伸ばしその肩に触れようとする。

「触るなあツ!!」

びくりと震えたマドカが反射的に一夏の手を力いっぱい弾く、爪が掠ったのか少量の血が一夏の手の甲から飛ぶ。

一夏の血を見たマドカは恐怖と後悔の入り混じったように顔を引きつらせてすぐに嗜虐的な笑みを浮かべた。

「私に触れるな…今この瞬間だってお前を殺す事など何よりも簡単なんだ」

「だったら殺せばいい」

目を見開き、呆気にとられた表情をするマドカに対して、ただ一夏は悲しそうな表情を浮かべている。

「どうした、簡単なんだろう」

「お、お前…狂ってるのか…？ あ、アハハツ!! そう、そうだ!! だったらひとつ教えてやる!! キヤノンボールファストでボロボロになった女!! セシリアとか言ったか?! あいつはどうだ?! まさかもうくたばったか?!」

おねがい きいて おねがい おこつて

「あの女をスタボロにしたのはこの私だ!! 織斑マドカだ!!!」

おねがい わたしに ばつを あたえて

「どうだ! どうしたっ!! 目の前に憎い相手がいるぞ?! 精一杯殴ったらどうだ?! 首を絞めればどうだ?! 縊り殺せばどうだアツ!!!」

一夏にはその叫びが慟哭にしか聞こえなかった、故に一夏が無言のままに取った行動は。

「なにを、している…? まさか、私を抱きしめて…殺す…? つもりか…?」

「もう、もういいだろ…俺には分かるんだ、無理なんてすんなよ、そんなに苦しそうな顔で悲しそうな顔で、どうやってお前を、マドカを責める事が出来るんだ…」

ただ優しく、強く抱きしめる事だった。

「あ、ぐう…!! うあああ…!!」

「いいんだ、無理なんてしないでいいんだよ、全部吐き出しちまえ、何もかも吐き出せ、全部余さず受け止めてやる、だからお願いだ…: 兄ちゃんに、俺に頼ってくれ」

「ああ、あああ…!! うわあああああああああああ!!!」

「いいよ、泣けばいい、どうせ俺しか聞いてないんだ、気のすむまで、



げんなりしているとロック解除の電子音とドアが開くときの空気の抜ける音、目を向けると何かを決意した目をしたいつちーが出てきた。

「……よお、いつちー、マドカは？」

「泣き疲れたんだろうな、眠ったよ……。 …？」

俺の方を見るいつちーがワンテンポ遅れて凄まじい顔つきになる、敵意を剥き出しにした顔だ。

「お前…!!」

「ああ待て!! 違う！ 確かに本人だがお前の敵でもないしましてやマドカの敵でもない!!」

今にもISを起動して殺しに掛からんとする方向性のヤバイ間違え方をした決意を持たれても困る、多分俺と似たような護る為とかそんなんだろうけど、まだまだ道を違えてない小僧がしている目じゃない。

「……シン、説明してくれ、なんでそこに『亡国機業のオータム』がいるのか」

だからこうなるのは目に見えてるってのに部屋での待機を指示してたのに全く聞きやしねえんだもんな、この女。

「分かった、だからまずその敵意か殺気がよくわからんもんを収めろ」「構わねえさ、私達はそんだけの事をしたんだ、殺されても文句は言えねえ」

「いいか、いつちー、こいつは亡国機業のオータムじゃない、わが社の新入社員、オーシエーニだ」

「本気で言ってるのか」

「じゃあこう言えばいいか、亡国機業を命を捨てる覚悟で裏切ってマドカを助けようとカロードに来た『元オータム』だ」

「……分かった、俺の親友が言うなら、信じよう」

「そりや俺の株も随分上がったもんだ、で……どうする」

「決まってるんだろ、マドカは俺の妹だ、何が何でも守り抜く、どんな事をしてでも、何を敵に回してもだ」

「…そうか、そうかそうか…よかったなオーシエ」



「随分…顔色悪いね…：母さん」

「…それはそうよ、だってシン君が急に倒れたって聞いたもの…：」  
くすりと笑う母さん、しかしまあ…：なんでカラコンなんて入れているんだろう、灰色じゃん。

「う、ぐう…：！」

「無理はしないで？ 何があつたの…？」

清潔そうな白い患者衣まで着せられている、まあそれはいいとして周囲を確認すると母さん以外に人はいない。

「監視を…：」

「そつちね、分かったわ…：切ったよ」

「能力を、使おうとしたら気が狂いそうなほどの痛みが頭を…：」

ハツとした表情をする母さん、どうやら心当たりがあるらしい、それにしても…：随分俺も調子が悪いらしい、右腕が真っ白だ、左手は相変わらず黒と白のツートンだが。

「多分…：それは能力の反動よ、ねえシンくん。これから一年は絶対に能力を使わないで、たった一度でこんなに酷いなら、本当に死んでしまうわ」

「…：…痛覚の遮断も能力が必要か…：わかった、そうする…：死にたくは無いからね」

母さんに支えられて（母さんは力が絶望的に無いので特に意味は無い）ゆつくりと立ち、体に問題が無いのを確認して自室へと行こうとする。

「一人で大丈夫…：？」

「ん、まあね。今んとこ体に異常は無いし、あと母さん、別にカラコン入れる必要はないと思うよ、今の時代気にする人なんていないから」

「じゃあね、と残して部屋を出る。」

そして一瞬で嫌と言うほど後悔した。

体が震えて嫌な汗が出る。

「あ、あ…：…嘘…：だろ…：？」



パライフルでも、少しでもFCSに頼るとまず僕に攻撃は当たらないね。そして仲間のISのサポート、ぎつくばらんと言えば仲間のロック精度やロック速度を上げるサブコンピュータの役目も果たせるんだ。凄いでしょ？」

「それってラファールRCⅡの拡張領域でのメリット潰すんじゃない？」

「なんとね！ そんな事無いんだよ！ 領域の圧迫なんて精々がIS用ナイフ一本分なんだ！」

「じゃあデメリット無いじゃない」

「で、デメリットなんだけど、これ起動中は凄く処理能力が必要でISのメモリだけじゃなくて僕の脳も処理に追われるんだ、逐一考える必要は無いんだけど、やっぱり結構負担が掛かってるらしくてすつつつごく!! 頭が痛い!! まあ操縦者にある一定以上のダメージが入らないようにちゃんとリミッターは掛けられてるんだけどね」

「なーる」

「でもまあ、ボクもボクでいろいろ違和感を抱えてるんだよ？」

「どんな？」

「うーん、ボクももう第三世代機だけどき、ずっと第二世代機を使ってきた人間としては何だか第三世代機は使いどころが限られているって感じるんだよね」

「それはまだ慣れていないからでしょう、慣れればそんな事は無かったと言えますわよ」

「そうね、それにイメージインターフェイスと違ってき、適性が無いと使えないじゃん？ だからそれで相手より有利取れるのよ」

「まあ第4世代機の俺たちにはあんまり関係の無い話かな」

「そうは言ってもだな……」

「わたしは一軍人としてその話にもろ手を挙げて賛同はできないな、そうだろうか？ 籐ヶ崎」

「あー……そうだな、まあ軍事機業の人間としても、一兵士としても第3世代機が兵器として優れているかと言えばNOと言えるな」



するとせつしーと鈴音がぶーぶーと声を上げる。

「よし、じゃあちよつと話をしよう、あれは今から……」

「信一郎……そう言うのは……いらなと思う……」

「OK、じゃあそうだな世界にISが無いとする、ほら無いな？」

「あるわよ、何言ってるの」

「茶化するな鈴音、おいいつちー、鈴音を後ろから抱きしめとけ、そしてら黙る」

「にや、にやにおう?! ちよつ、やめ——にやふう……」

「おーし、じゃあ話の続きだ一台で100や200の戦車と渡り合える戦車があるとす。

で、その戦車には極々限られた一握りの、いや、一つまみの人間しか適性が無く他の人間に動かす事は出来ない」

「ISだね、もしくはその適性がイメージインターフェイス適性かな?」

「そう、この場合は後者だな。でだ、戦争が起きてその適性を持ったパイロットが暗殺されたとする、じゃあその100や200と渡り合える戦車は一体何になる?」

「ゴミだな、高価で嵩張るゴミだ」

「そう、もうその兵器を使えるものは誰もいない、兵器っていうのはな機体だけじゃない、パイロットでさえ使い捨てなのを考慮するべきなんだ、その点から言って兵器として完成してるのは第3世代機より第2世代機なんだ」

「と言う事は第3世代機は無駄とでも仰るのですか?」

「いや、そうじゃない、あくまでこれは『量産できる』兵器としての視点だ、数が限られている場合は個々の能力を上げて対処するしかない、その点じゃあ今のISは間違っていない。ただ最初期の目的と照らし合わせたら真逆の方向だけだな」

ほうほうと納得する方々、そして話を一切聞いてない蕩けた顔でいつちーの腕の中に収まった鈴音。

何だかもう恋のライバルじゃなくて一種のペットとして扱われて涙を誘う。

「まあカラードとしては兵器としてあってくれるなら現状のISの状態が一番ありがたいんだけどな」

「ほう、それはなぜだ？」

「あー……IS学園で言うべきか迷うが、一応言っておこうか、こういうのもあると気を付けてくれた方がいいしな」

ACの拡張領域から量子変換していたブレードを二本取り出す。なお現在放課後でアリーナの整備室なので武器を出しても咎められない、やったぜ。

「何だこれ、IS用のブレードか？ にしては持ち手が小さいな」

「もしかして……これ……アレ……？」

「そう、例のアレだ、こいつの名前はブラッドスライサー」

「あ、ボクのブレッドスライサーに似てる」

「まあこいつの特殊効果とは似て無いはずだ、こいつはいつも俺が学園の戦闘時に使っているコジマエネルギーよりも遥かに濃いコジマ粒子を纏わせる事が出来てな」

「ほう、絶対防御を発動させるのか」

「いやあ？ 絶対防御もぶち抜く」

『は？』

「だから絶対防御もぶち抜く」

「え、なにそれ……つまり……？」

「こいつにコジマ粒子を纏わせて油断しきってるIS乗りの首に振るとだな……まあそう言う事だ」

「ウソでしょ?！」

「じよ、冗談にしても、笑えませんか…」

いやそれが冗談じゃねえんだよなア、すでに実地試験終わってるんだよなあ……

「カラードにはこういう兵器がいくつも配備されている、だからISを相手にする可能性もあるカラードはそう言う反則技で代わりの無いIS操縦者を消せるからな、第3世代機の方が相手をしてあげたい」

今のところ一番えぐいのはガトリングパイルかな、狭い通路を通つ

てセンサーに掛かると例え防御特化のISだろうと5秒と持たずモザイク必須な愉快なオブジェになるだろう。

まあコジマエネルギーなくても10秒ぐらいでエネルギー0になるんだけども。

「あとこれな、別にIS用とかじゃなくて普通に個人携行用なんだ、尤も、この二本を扱えるのは俺だけだが」

「うわあ」

「やだあ」

「うむう」

「うええ」

「お前ら酷くない?」

散々じゃねえか、こんな（俺に否定的な）環境で、まともに戦えるわけがない……!

「まあアレだ、友人方に注意と忠告、あと親切心だな、今若干環境が悪いが、それでもカラードは全世界と戦争できる。それにこの技術は何もカラードだけにしか使えないってわけじゃないだろう、可能性は低いかな。もし戦場に出る事になった場合は決して慢心するな、例え相手がただの歩兵部隊でも一瞬で殺されるかもしれないんだからな」

「う、うん……なんかシン、ここ数日変じゃない?」

「そうだな、妙にリアリストと言うか、とにかく変だ」

「あー、最近調子悪いからな、目が疲れて少し変なんだ、だからイライラしてるのかもな……」

「……………」

寝不足か? と周囲が笑いながら言っている、そうそうなんて言いながらヘラヘラしているが少し気を抜けば力が抜けて崩れ落ちそうにさえなる、思考自体はおかしくないがそれでも変な考えに行ってしまうのは否めない。

ふと、簪が俺の顔をずっと見ているのに気がつく。

「どうした?」

「ううん、ただ信一郎を……見てただけだよ……?」



『信一郎様、最近世界情勢がおかしくなりつつあります』

「おかしく、と言うと？」

『I Sの緊急配備が増えています。研究用のコアでさえ量産型の機体に収められ各国での軍備増強が増えています、何か心当たりは？』

「…いや、I S学園からは何もおかしなことは分からないな、と言うよりI Sの緊急配備でさえ初耳だ」

『そうですか、ではこちら側で深く探ってみる事にします、一週間もすれば御報告できるかと』

「了解、よろしく頼む」

『はい、それと……いえ、何でもありません、それでは、失礼いたします』

I B I Sからの連絡が切られた後、部屋を見渡す、白、灰、黒、決して他の色は無く、何もかもが色の無い世界、動く物が無ければまるで時が止まってしまったかのような、そんな虚しい世界。

I B I Sからは分からないような角度にあった俺のベッドは俺の手によりズタズタに引き裂かれ白い物が見出している。

あらゆる物が無茶苦茶に放り出され、砕かれ、散らばっていた。

胸ポケットから葉巻を取り出し正しい手順で吸える状態にし、躊躇うことなく火を付け、煙を肺へ通しこんだ。

緊急用の筈の精神安定用の葉巻はすでに平均で一日一箱の速度で、しかも加速度的に消費されている。

麻薬の常習者の気持ちも今なら十分に理解できるほどだ。

持ち込んだ灰皿には山盛りになった吸殻、精神安定用と言っても劇薬には違いなく、体にいい筈もない。

一年、一年で俺の能力は再度使えるようになり、そうなれば目も治療してこの劇薬を服用する事もないだろう、だがその一年で俺が耐えきれず狂うのが先か、葉巻の副作用で死ぬのが先か、それとも耐えきれるか、賭けに似ている。

聞いた話では麻薬の中にはサイケデリックな色の幻覚が見えるものもあるらしい、最悪それを使うことも視野に入れなければ俺は狂っ

て死んでしまおうだろう。

かなりの速度で葉巻を一本吸いきった俺は吸殻を灰皿に入れ直ぐに二本目に火を灯し、再度煙を肺へと飲み込んだ。

すると俺の耳にブザーの音が入る、俺に何か用があるらしい。

「……………誰だ…？」

ドアのロックを解除しドアを開き、丁度この時ちよつとした失態に気付いた。

「信一郎……………?! なんて、煙草——」

「簪か、あー、その……………これは、うちの商品で煙草じゃないんだ」

ドアを開いた先にはこつちをきよとんと見つめた簪がいた、もしこれがちっふーや山田先生なら大目玉を食らっていた所だ、ある意味助かったと言える。

「……………話があるの、中に入っても…？」

「いやっ！ 駄目だ!! 中は、ちよつと、その、散らかってて…そう、散らかってるからさ!」

「そう……………ごめんっ…!」

「あつ、おい！ 待て!!」

ごまかそうとした俺を押しつけて無理矢理入った簪は俺の言葉も聞かず奥へと行き、俺の部屋を見て絶句した。

「ッ……………!!」

「ああ、クソ、だから言ったんだ…散らかってるって……………間違っってはねえだろ?」

そう、間違っつてはいないはずだ、例えそこでなんらかの戦闘が起こったような痕でも散らかっていることには変わらない。

「信一郎……………お願い、何があったの…?? 教えて……………!」

俺の顔を見た簪はまるで泣きそうな顔で、涙が零れるのを耐えているような顔で、俺へと振り返った。

「いや、何も、何も無いんだ、ただ部屋が散らかつてるのは——」

「嘘を言わないで!!」

「ッ!!」

「一人で溜め込まないで！ 信一郎が辛そうなことぐらい！ 何かを

耐えていることぐらい！ 私にだって分かる!!」

「お願い……私に、ううん……私じゃなくてもいい、麗羅さんだって、I B I Sさんだっていい、だからお願い……一人で溜め込んだりしない……私はもう、信一郎が壊れる姿なんて見たくない……!!」

ああ、ああ畜生、なんで、バレたんだ。

俺は、俺はお前に見せたくなかったんだ、母さんにも姉さんにも友達にも、ましてやお前に、見られたくなかったんだ。

「かん、ぎ……し……簪、かんざし、ああ、ああああ……!! あああああああ、ああああああああああああ!!」

俺の、弱い姿を。

「ぢぐじょう!! ぢぐじょうつ!! こわい、こわいんだっ!! 助けてくれ!! たすけでぐれえっ!!! かんざし! かんざしいっ!! あああああああああああああああ!!」

いまはただ、何も言わず、俺を抱きしめてくれ、今俺の心を、助けてくれ、かんざし<sup>愛する人</sup>。

く く く く く く く く く く く く く く く く

いつの間にか落としかつした葉巻は他の物に火を分け与える事もなく消えていた。

俺は簪の胸で抱きしめられただ優しく頭を撫でられている、とても心地よくてまだ簪に甘えてしまいたいそうだった。

「簪、ありがとう、落ち着いた」

「……ん……」

「よければ、俺の話を聞いてくれ、悩みを吐き出させてくれ」

「うん、いいよ……はい」

ズタズタに引き裂かれていない方のベッドに腰掛けた俺と簪が隣り合う、俺の右手を優しく握る簪にようやく、覚悟を決めた。

「簪、簪の髪飾りは、青色だったな、眼は綺麗な赤だった、髪の毛は水色だった、そうだな?」

「……うん、そうだよ……?」

「じゃあ、簪……いま、今お前の目の色は、髪の色は……何色なんだ……?」

俺の右手を握る簪の手に力が入り、強張る。

「俺には、俺にはもうこの世界に色が無い、簪……何よりも愛してるお前でさえ、白と灰と黒にしか見えないんだ……!!」

「そんな……!! どうして……?! なんで……?!」

「空は何色なんだ？ 土の色は？ 草は、木は？ いや、そもそも赤色は何だ、青色は、緑は？ いや、いや……色とは、色とはなんだ?! 何も分からない!! 何も理解できない!! ACの視界を通せば何色なのか『文字として』理解できる!! だが、だが俺には、今の俺には色と言う物が分からない!!」

「信一郎……!! 私が、私がいるから……!! 例え、信一郎の目が色を映さなくっても……私が傍にいて……教えてあげる……感じさせてあげる……!!」

簪がまつすぐに俺の目を覗き込む、色は分からないが、俺が覚えている。

俺の両目を覆い、額に口付けがされた、色どころか光さえ入っていないが、そこには確実に俺の記憶通りの簪と言う色があった。

「ああ……そうか、そうなんだな……分かる、覚えてる、簪の色だ……俺が何よりも愛している色だ、何よりも愛おしい色だ……」

「大丈夫、大丈夫だよ……信一郎、私は変わらない……信一郎の記憶通りでいるから、ずっとあなたの覚えている色でいるから……」

目を閉じ数十分、その間ずっと簪の胸に顔を埋め、簪と話をしていた。

「それと、簪……あと一つ、聞いてほしい、多分俺が色を失った原因だ」「うん、教えて……」

目は決して開けずベッドで仰向けになっている俺に覆い被さった状態であろう簪にもう一つを打ち明ける。

「能力が、使えなくなった」

「だから、治せないんだ……」

「ああ、5日ほど前、能力を使おうとした時に脳がグチャグチャになりそうな程の痛みで気を失ってな、目を覚ましたら世界から色が無く



なつてた、母さんは能力の反動だろう、一年ほどでまた使つても大丈夫になると言つてたが」

「じゃあ、一年の辛抱なんだ……」

「そうだ……もし、簪がいなけりや、俺は半年も経たずに死んだだろうな」

苦笑いをする俺の頭が柔らかい物に包み込まれる、耳を澄ますと小さな鼓動が聞こえた。

「信一郎、一年間は私が守る側だね……?」

「そうか、そうだな、簪……一年、俺を、この弱い男を守ってくれ」

「今、この瞬間から、私は信一郎を守る騎士、かな?」

「俺は守られる姫つてか、冗談きついで」

「信一郎、今日は……一緒に寝よつか……」

「ああ、頼む、最近どうも、一人は寂しいな……」

簪が俺の部屋の冷蔵庫にある適当な物で夕食を作り、共に食べ、本音ちゃんに連絡を入れる。

二人で腰掛けていた無事なベッドで共に抱きあつて目を閉じる。

「おやすみ、信一郎」

「おやすみ、簪」

一晩、簪の胸に抱かれて俺は意識を暗闇に落とした。

VERDICT DAY 『評決の日』【挿絵追加】

IS学園のモノレール乗り場でスーツを着た数人の男女と水色の髪の少女が向かい合っていた。

リーダー格らしき男が資料を見ながら少女へと問う。

「日本代表候補生更識簪、専用機は打鉄式、本人だな？」

「はい……」

水色の髪の少女、更識簪は本人確認に肯定で返す。

念のためと毎回毎回行われる無意味とも思えるような確認、慣れた様子で質問に淀みなく答えた。

「通達は知っているな？ 倉持技研より緊急招集だ、異論は無いな？」

簪が頷いたのを確認した男が「よろしい」と一言呟いて後ろへ振り返った。

緊急招集通達とはその名の通り、国から、あるいは所属している組織からの招集だ。

簪のもとに昨日届いたもので理由が「新しい武器のテストパイロットとなって欲しい」という物だった、例え学園で授業が行われる日でもこの招集に国家代表候補で専用機を与えられた簪は断ることはできない。

それが義務であり責任であるからだ。

まるで護衛のように周囲を囲むスーツの男女達、代表候補生で更識、かつ専用機を持つ簪には不要なものだが念の為との事らしい。

確かに周囲の男女はまるで戦闘経験を積んだような佇まいで一分たりとも隙を作らない、常に周囲を警戒し、即座に戦闘が出来るようにしている。

周囲には簪と男女達以外はいないにも拘らずだ。

簪は妙な違和感を拭えぬままモノレールを降り、金属探知機のゲートまで辿り着く、IS学園学生証を取り出そうとした簪を制止した一言こう言った。

「探知機に掛かる物を全て外したまえ」

一つ頷き隠し持っていたハンドガン、いつも付けているメガネ型投

影ディスプレイ、打鉄式式の待機状態である指輪を外す。

いつも通りの、毎回毎回行われる指示でしかない。

「待て、その腕輪もだ」

「……？」

首を一度傾げるも言われた通りカロードより渡された腕輪を外した。

外してしまった。

「あつ、ぐ?! な、何を…?!」

その瞬間、男たちが3人がかりで簪を拘束し、床へと押し倒す。

抵抗しようともがいた簪の後頭部に堅い物がゴリ、と押しつけられた。

「誰か!! 誰かツ!!」

「黙っている!!」

大声を上げた簪の後頭部に押しつけられた物がさらに強く押し付けられる。

「な、何をしているお前たち?! 警察を呼ぶ——」

簪が顔を上げると駅員と思しき人間がこの状況を見て声を荒げた、直後、乾いた破裂音が二度三度響き、駅員が赤い液体を散らして床へと倒れ、液体に重い物が落ちた音を立てる。

チリンチャリンと軽い金属が落ちる音を聞いて簪はようやく何が起こったのか気付いた。

簪が叫び声を上げるよりも先に女がハンカチを簪の口に押し当てる。

「——ツツ!!!」

叫び声もくぐもった声にならず体を動かす事も出来ない、ハンカチにはどうやら何らかの薬品が染み込ませてあったようで意識も



「ああ、本音ちゃん、どうしたんだい？」

本音ちゃんが心配そうに俺の顔を覗き見る。

精神状態に変な異常が出てしまったと言うのは簪に見破られた次の日に全員に宣言した、流石に色盲になったとは言っていないが。

「大丈夫ー…？」

「ああ、んー…まあ簪が帰ってくるまでの辛抱だな…それまでに俺が薬中になってなけりやいいなあ、マハハハ」

まあ簪が所用でどこかに行ってもう3日だがまさかこんなに駄目だとは思わなかった。

ますます白髪が増えつつある、もう遠目に見たら黒に近い灰色にさえなっているらしい。

「大丈夫さ…死にやしねえ」

「うん……」

本音ちゃんの頭を撫でながら左手で葉巻を摘む、そろそろ次の授業の準備をしないと。な。

「ところで本音ちゃん、簪はどこに行ったか分かるか？」

「うーん、かいちよーなら知ってるんじゃないかなー……」

俺の質問に答えてくれるがまだ少し俺を心掛けるような悲しそうな顔をしている。

「本音ちゃんには笑顔が似合う、俺に笑顔を見せてくれ、そしたら頑張れるさ」

「…うん！ がんばれ♡ がんばれ♡」

不穏な空気を感じたが特にこれと言って変な物は無い、手を振りながら自分の席に戻って行った本音ちゃんを見届けて机から教科書を引きずり出す。

その時丁度ドアが開いて山田先生が顔を出す、ちっふーの姿は無い。

「はい皆さん、授業を始めますよ。織斑先生はIS委員会からのお客様の対応で少し遅れるそうです」

「では皆さん、教科書の146ページを——」

ぼわわと何かよくわからない視覚的にフワフワした物を散らす山

田先生の言葉を遮るようにドアが再度開かれる。

「IS委員会の者だ、失礼する」

二人組の女性が教室に乗り込む、ワタワタとした山田先生を無視して俺の前に立つ二人組。

「カロードの籐ヶ崎信一郎だな」

「……そうだ」

ふと、凄まじく嫌な予感と想像が俺の頭をよぎった。

俺に懐から取り出したであろうハンドガンを二人で俺に突きつける。

「来い、貴様に用がある」

「ま、待てよ!! なんなんだアンタ等!! 一体どんな権限があつてシンを!!」

「権限ならある、IS委員会としてのな」

いっちょが制止しようとするのと冷たく言い放つ。

ゆつくりと首元のPA発生装置に手を伸ばす。

「変な真似はするな、撃ち殺すぞ」

「チツ」

ゆつくりと両手を上に挙げ立ち上がると後ろを向けと指示を受ける。

後ろを見ると生徒たちが何が起こっているのか分からない様子で絶句していた、ただ本音ちゃんや代表候補生は除いて、だが。

「一体何の真似だ、俺が誰だか分かっているのか?」

「………時間だな、ただいまを持ってカロードを国際犯罪組織として指定する」

「あゝ あ?」

「お、お待ちください!! いったいどういう事なのですか?! 説明を要求いたします!!」

せつしーが立ち上がり説明を要求する、背中、肩と肩の間あたりにハンドガンを突き付けられたまま片方の女が俺の視界内に出てくる。

「……カロードに複数の行方不明ISコアがあるとの証言、そしてそ

の裏付け、および膨大な量の兵器を違法に保有しているとして国際 I S 委員会、及び全世界の首脳でカレードは異常なまでの危険性をもつ犯罪組織と指定した、よってカレードの人間である籐ヶ崎信一郎を拘束する」

「そんな……そんな！ 納得行きませんわ!!!」

「黙れ!! 貴様も拘束されたいか!!」

俺の視界内にいる女が声を荒げた瞬間に左肩を後ろにするように背中に突きつけられた銃口を滑らせ、左手で即座に握りつぶす。

「素人がア!!」

そのまま右腕で視界内にいた女の顎を右手で殴り抜き、返すように肘打ちを背後の女に打ち込む。

「う、ぐおえあ?! ぐ、クソツ!! 打鉄エ!!」

後ろの女は仕留め切れなかったようだ、即座に反転するとデジタル迷彩の打鉄が I S 用ナイフを握っていた。

「ブラッドスライサー!!」

左腕の袖を引き裂きながら二本とも左腕にブラッドスライサーを出現させマニユピレータごと挟んで壁に腕を縫い付ける。

「貴様らが一体どこの誰に喧嘩を売ったのか、思い知れ……後悔させてやるからなア!!!」

ブレードにコジマエネルギーを流しマニユレータを斬り落とす、生憎中身はぶった切れなかったが次の手で殺せばいいだけだ。

「ぜ、絶対防御が……?」

すぐにブレードを引き抜き首を挟み込む、ズキリと頭が痛んだ。

「ひ、ひっ……や、やめて……!!」

「うるせえ……!! 殺してやる、殺してやる……!! ぶっ殺してやる!!!」

俺たちが犯罪組織だと? 舐めた事を言いやがって、こうなりや全

員殺してやる、皆殺しだ、一人とて生かして返さねえ。

「シンに——!!!」

「……ッ!!」

俺を呼ぶ声に気付いて周囲を見渡す、恐怖に顔を引きつらせる者、嗚咽を漏らしているもの、信じられないような物を見る者、全員が俺





倉を掴み上げる。

「貴様らに指示を出したのはIS委員会で合ってるな?」

「あぐうう、い、はい……!」

「奴らに伝えておけ、この戦争買ってやる、だが死んだ方がマシだと思わせてやる。とな」

地面に落ちたハンドガンを踏み砕いて女を投げ捨て、PDWを構えなおし4組から出た。

目的地は生徒会室、一つ、聞かなければならない事がある。

「いたぞつ!! 撃て!!」

「クソが、ド素人共め……これが日本のIS委員会エージェントか、泣けてくるな……!!」

一々自分の場所を大声でバラした素人の射線から回避するように角へ隠れ、腕だけ出し、乱射する。

「俺も言えたもんじゃねえけどなア……、弾切れか」

即座にマガジンを外し投げ捨て、新しいマガジンを拡張領域から取り出し、ガチャリと嵌め込む、コッキングレバーを引いて一つ息を吹く。

「仕方ねえ……か!!」

再度角から乱射しつつ、今度は飛び出し窓を破って外に飛ぶ、左腕を窓の上外壁に突き刺し左腕の出力だけで上に跳んだ。

2階層上へと上がり、窓を破って中に入る。

どうやらここに奴らは居ないらしいが時間の問題だろう、脚部出力を上昇させ目的地の前へとすぐに移動した。

「すまんが緊急で聞きたい事が……なんのつもりだ」

生徒会室のドアを開けると二人の女が俺に銃を突きつけていた。

「虚さん、義姉さん」

「今は授業中にも拘らずここに来たという事は……分かってるんですけど……?」

「もうしわけ、ありません……」

奥歯をかんで数歩前に歩く、それに合わせるように左側にいる虚さんの銃口は俺を追いかけるが正面の義姉さんの銃口は僅かに震えるだけで動く事は無い。

「……私は、更識楯無……更識家の跡継ぎで、生徒会長で……でも、でもっ!!」

「ロシアの国家代表なのよ?!」

ついに銃口が俺の心臓、胸の中心をぴたりとくっつくほどに近くに立つ。

「簪は、何処にいるんだ?」

「あの子なら、倉持技術研究所に武器のテストとして呼ばれてるわ……」

俺の嫌な予感は的中したらしい。

「くそっ、クソ、クソ、クソオツ!! やられた!!」

「なに、何を言ってる……?」

「おかしいと思わんのか?! たかが武器のテストで3日間も学園を離れるわけないだろうが!!」

「そんな、だって……!! いつもの……!!」

俺に当てられた銃口がガタガタと震え始める。

「IBIS!! 俺を本社に転送しろ!! ……IBIS?!」

『……申し訳ありません、現在転送を行うほどのリソースを確保できません、たった今フランスを転送した直後に大規模なクラッキングが行われました』

「ツチイ!! ならセラフも使えんか、仕方ない、VOBを使用して直ぐに社に戻る」

『了解しました、アウト』

「待ちなさい……私が、貴方の目の前にいるのよ……!」

持っていたPDWを拡張領域に収納しまっすぐに目を見る、更識楯無には珍しい迷っている目だ。

「撃ちたいなら撃て、それでも俺は行く」

「……いい、わけ……しょう……」

「撃ちたい訳無いでしょうツ?! 何が悲しくて!! 何が悔しくて!! 簪ちゃんのお愛する貴方を!! 籐ヶ崎君を撃たなきゃならないのよ!!!」

でも私は、私はロシアの指示を……!!」

「うるせえっ!! I S委員会だかロシアだか、俺が知るかアツ!!! 俺は簪の為に!! カラードの、家族の為に行く!!!」

「……ッ、ぐ……!」

言葉を詰まらせた義姉さんがゆっくりと銃口を下し、床へと膝をついた。

「俺は行くぞ、ホワイトグリント」

ホワイトグリントを展開しドアの向こうをサーチ、案の定数人待ち構えてやがる、甘えよクソツタレ。

壁ごと破壊して一人弾き飛ばし、残りの二人に両手のライフルを突きつけ、ダメージを与えうる武器が無いのを確認、軽く小突いてから窓側の壁をぶち破って外へと出た。

海の上へと躍り出た直後学園島を一瞥する、どうして、こんな事になっちまったんだらうな。

『止まれ!! 撃ち落とされたいか!!』

「間抜けが、たかが攻撃ヘリでACをどうにかできると思ってたんのか、ここは海の上で海面まで50メートルと無い、運が良ければ死なねえだらうよ」

クイックブーストで即座にヘリの背後に付きテールローターをライフルで破壊し落ちて行くヘリを眺める。

「V O B、起動」

「俺は行くぞ、ホワイトグリント」

彼がそう残し壁を破壊して去っていく、私にはそれを見送る事しかできなかった。

「……お嬢様……」

「家族の為……ねえ、虚……わたし、間違ってるのかなあ……?」

「わたしね、頑張ったよ？ 簪ちゃんのため、学園のためって、どうして、どうしてこんな事になっちゃったんだろう…?」

「お嬢……いいえ、刀奈、貴女が頑張っているのは、私が一番知ってるわ」

「うーちゃん、うーちゃん……!!」

「刀奈、貴女がまだ刀奈だった頃、覚えてる？ 迷った時は刀奈が思うようにしなさい、うーちゃんはずっと刀奈の味方だから……」

虚、うーちゃん、私の幼馴染、私が唯一弱いところを見せれる私にとつてのおねえちゃん。

「うん、ありがとう……虚、私…決めたわ」

「ええ、サポート致します、お嬢様」

「お嬢様じゃなくて会長、ね?」

くすりと微笑んだ虚に笑みを返し立ち上がるとドアから女性が飛び込んでくる、IS委員会の人間ね。

「ロシア国家代表更識楯無！ 何をしている!! 早く追え！ 捕まえろ!!」

傲岸不遜な女性を前に少しだけイラツとした。

「すう……」

「早く追わな——」

「うっさいわねえ!!! 黙ってなさい!!!」

「なっ?!」

「籐ヶ崎君はうちの!!! このIS学園の生徒よ!! 犯罪者ア?! IS委員会イ?! んなの知るかアツ!!!」

「ぎ、貴様……」

「IS学園特記事項第21項!!! 本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない！ 本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする!!!」

「それは我々が、IS委員会が決めた——」

「知るかつつてんだよこの間抜けがアツ!!! この学園の生徒である

籐ヶ崎君はこの私が!! IS学園生徒会長!! 更識楯無が守るべき生徒だつてんだよ!!! ハアーツ、ハアーツ:!!」

「どうやら、少しだけなんて可愛いものじゃないぐらいイラツとしてたらしい、うーん、失敗失敗!」

「虚、代表候補生たちと協力してこの不当に武器を所持した侵入者共をひっ捕まえて地下収容施設に叩きこんどいて頂戴」

「了解しました、会長」

「貴様ら!! 貴様らアツ!!」

殴りかかってくる女の肩を力づくで外して机に投げ飛ばす。

「ガアアアアツ?!」

「知らないのかしら、間抜け。生徒の長たるものは最強であれ。IS学園の生徒会長つて言うのはね、ISの有無に係わらず最強なのよ」さて、今から大仕事を始めますか、お姉ちゃん頑張っちゃうぞ!

だから籐ヶ崎君……簪ちゃんの事、頼んだわよ。

「まずは、一年生からつと」

『あーあー、えーつと、専用機持ちの子たち? 聞こえてるかな?』

5秒と経たずに全員からの接続を確認、みんなで話しかけてきているけど、ごめんね。

『ゴメン、時間無いから用件だけね。もしかしたら全員知ってるかもしれないけどカロードがIS委員会、及び全世界から国際犯罪組織に指定されたわ、勿論籐ヶ崎君もよ。私から言わせて貰うと、知るかつての、籐ヶ崎君はこのIS学園の生徒よ、IS学園特記事項第21項、勿論みんな覚えてるわよね? そう、つまりそう言う事、この私が学内でのISの使用を許可します。不当に武器を所持した侵入者共をひっ捕まえて頂戴、国からの指示に従うならそれでもいいわ、まあ貴方達はその心配は無いだらうけど』

『織斑一夏、勿論、俺はシンの親友なんだ、このぐらい何て事は無い!』  
『凰鈴音、アタシも、籐ヶ崎には色々世話になってるからね、まっかせて!!』

『セシリア・オルコット、IS学園は治外法権、同じ生徒を守るのも貴族の務めですわ』



ンス政府の指示でカラードへのISを使用しての攻撃命令が下された』

『……………』

『でもデュノア社は“丁度たまたま”社内の全ISを分解してて再度組み立てにあと少なくとも1ヶ月はかかる、らしいよ』

そんな事をすりや国内での立場が危うくなるのは火を見るよりも明らかだ、なんでそんな事を。

『そしてお父さんからシンへの伝言“娘との懸け橋となってくれた貴方をどうして裏切れようか、私も、社に残った馬鹿者も貴方に感謝している”』

『…く、クク……………わかった、その選択は決して間違いではなかったと、思わせてやる』

『シン、IS学園にいるみんなは、何があってもシンの味方だよ』

『ラウラ・ボーデヴィツヒだ、籐ヶ崎、単刀直入に言おう、我々ドイツ軍はカラードからの支援を省みてドイツ政府の指示を真っ向から拒否している、おかげで東西でまた分かれそうだが、ベルリンの壁がまた出来てしまいそうだな』

『それは、すまん』

『なに、心配するな、こんな選択だが私は自分のドイツ軍の人間であることを誇りに思えるよ』

なるほど、俺は、俺たちはどうやら、何も世界すべてを敵に回した訳じゃないらしい、ならまだ、世界を終わらせる必要もない。

『もし、もしだ、俺達カラード対全世界になってしまったら、この世界から国と言う物が無くなるところだったな』

『国家解体戦争か、笑えんな』

国家解体戦争、因果だな。

『私からはこれだけだ、シャルロットも言っていたが生徒会長も、そして我々専用機持ちもお前の味方だ、心配するな。オーバー』

揃いも揃って馬鹿だらけだ、本当に……………俺はまだ恵まれている。

『こちら信一郎だ、あと数分で社に到着する、使用ACはホワイトグリント、VOBだ』





だ」

横の研究員を見ると苦虫をかみつぶしたような顔をしている。

「それが……地下に保管してあるISは全ての武装、及び戦闘機能がオミットされています」

「こんな時に…!!」

「敵の予測数は400程、こちらは40ですか、数の上ではかなり不利ですね」

「だがコジマ兵器を利用して殺傷兵器を使えば簡単に皆殺しに出来る」

「それですが、社長からの厳命で殺す事は許されない、との事です」

「……俺が、留まれば……」

「それは駄目です！ 信一郎様は行かねばなりません！ 心配ありませんよ、我々研究員もやれる事をします」

それでも、不利であることには変わりない、ならば下す命令はただ一つだけだ。

「いいだろう、ならば俺が下す命令はたった一つだけだ、何があつても、誰一人死ぬ事は許さん」

「わかりました、心に銘じておきます」

軽い調子で敬礼をする研究員の肩をたたき笑みを浮かべる、俺は上手く笑えているだろうか。

「まずは、腹ごしらえですね、戦闘が始まれば満足に食事もとれませんが、ISの構造上長時間の戦闘にはならないでしょうが、食事は大事です」

「そうだな」

食堂へと移動すると今回戦闘を行うランカーやそのサポートに回る人間、研究員などでワイワイガヤガヤと騒がしい様子だ。

「坊っちゃんじゃアねえか、今回の戦闘、中々手ごたえがありそうだな、楽しみにしてるぜ」

「御子息殿！ 今こそ我々の力を見せる時ですな！」

「リーダー！ ACだけじゃなくて私と銀の福音も、参加しますよ！ IBISさんのサポートが無いから連動できるコアは2つですけ

どね」

『がんばろう！』

「防衛線ですか、それならば我々警備部隊の出番ですな、我々にお任せ下さい。負ける事など万に一つもありません」

「この戦いこそ、レイヴンとしての戦いにふさわしい」

揃いも揃って笑顔で死地に赴こうとしている、どいつもこいつも

……

「このっ、馬鹿どもがあ……い！」

「馬鹿で大いに結構だぜ、俺らアよお、社長やリーダーに助けて貰った奴らばっかりだ、いまその命を使えるんだ、大喜びだぜ、そりゃアよ」  
「そうね、トップ10ランカーって言ってたけど、別に自分が望むなら前線に立っていいんでしょ？ なら最高じゃない、一度ISを穴だらけにしたかったのよ」

「おっかない女はこれじゃから好かん、じゃが、わしも恩を返す時じゃ、前線に立たせて貰うで」

「ポールが出るなら俺も負けてられん、何が糸を引いているのかは知らんが、俺は死ぬ気は無い」

ああ、クソツタレ、俺の家族は全員馬鹿だよ。

「いいだろう、なら作戦変更だ!! 出たい、ないし出れるものは出るがいい!! だが、何があっても死ぬ事は許さん!! いいなア!!」

『ウオオオオオオオオツ  
!!!!!!』

簪、絶対に助け出す、あと少しだけ、待っていてくれ。

SILENT LINE 『未到達領域』

数百数千という数にまで及ぶ格納庫の内有人機が収められている格納庫は実の所100に満たない、しかし数こそ少なくとも一つ一つの規模はどこにここまでの面積や体積が余っているのかと思えるほどに巨大だ。

うち一つ、横幅数キロに及ぶ地下第56階層B5番格納庫、ここに置かれたネクストAC10機のうち一つ、オリーブドラフの逆間接型AC『リザ』のコクピットでタバコを啜えた男がコンソールを弄り、細かな調整を行う。

「……ISと潰し合いか」

ふと、開け放たれたコクピット内部に一つ影が差し、分厚い鉄板をノックする重苦しい音が男の耳に入った。

男は一切目を向けることなく右手でコンソールを弄りながら左手で葉巻を摘み、呷く。

「お前はネクスト格納庫じゃねえだろうが、ファイルス」

「……まだ、ナターシャって呼んでくれないのね」

誰が誰をどう呼ぼうが勝手だろう、と独り言ちてタバコを再度口に啜えた、もう喋る事は無いという意識の表れでもある。

ナターシャはコクピットの開け放たれた段差に腰掛け無骨な装甲に背を預け、ぼうと外を見た。

「ISと……戦闘になるのよね」

返事は無い、それでもいい、と思いつながらナターシャは苦笑いをした、会話をすることもなく、目を合わせる事もないがそれでいい、それがナターシャにとって心地良い。

「対IS用パルス、リーダーの協力ありきの物だけど今は使えないみたい。ねえ、今回の戦争、多分イーリも出る…あ、イーリって言うのは私がアメリカにいた時の……親友なの、だから私ね——」  
「なら、出なきやいいだけだろう」

言葉を遮られ驚いたナターシャが振り向く、男はタバコを摘み、作業も中断してナターシャの目を見ていた。

「別に出たくない奴は出なくていい、社長がそう言っただけだろ」

ふ、と笑みを浮かべたナターシャがゆっくりと首を横に振った、それは、彼女の決心だった。

「…決心付いたわ、私はこの作戦に何が何でも出る、私天邪鬼だから、あなたに否定して貰いたかったのかもね?」

「ケツ、くだらねえ…」

「ふふ、ごめんね?　じゃあ行くわ…:そうだ、決心ついでにもう一つ」

コクピットに移る為のメンテナンスブリッジで振り向いてニイ、と笑みを浮かべたナターシャが男に指を突きつける。

「この戦いが終わったら私の事「ナターシャ」って呼んで貰うからね、オールドキング!」

カタンカタン、と音を立て去っていく、姿は今の位置からは見えな  
いし、何よりもコクピットから出てでも見る気など無い。

作戦開始まで残り一時間を切った、コクピットを閉じ最終確認を始める。

「縁起でもねえ事言いやがって、間抜けが…話にもならんな」

「所長、今回の作戦に我々は向いてはいません、如何せん火力があります  
ぎる」

「信管を抜くか、爆風のみを当てるか、になるだろうな」

ああでもない、こうでもない、複数人の男たちが巨大なタンク型A  
C「雷電」を前に話をしていた。

「競技用、つまるところお遊び用ならばISを一撃で木端微塵にする  
こともないでしょうが、それだとリロード速度や命中率の問題でグレ  
ネードである必要性がありません」

「精々出来て盾か、歯痒い物だな、最悪、出ないことも考えねばならん」  
所長と呼ばれた男が一つ息を吐き雷電に背を預けると胸ポケット  
が震える、しまった、置き忘れたかと呟いてポケットに入っていた携

携帯電話を手に取り、電話の相手の名を見た。

「谷本君……………」

IS学園所属のたまに遊びに来ていた少女の名だ。

今現在犯罪組織として指定されている企業の人間への電話、出ることに躊躇いを持つ。

「所長…あなたらしくもない、悩む前に出てみては如何です？」

「むう……………有澤重工所長、有澤隆文だ」

『あ、の……………その……………私です…！』

電話越しに少女の声が聞こえる、何かを言おうと必死になっているような、しかしそれを躊躇しているような、そんな声だ。

『戦争に……………なるんですよね…』

「ああ、そうだな、我々カロードが絶対悪として行われる戦争に、なるのだろうか」

『例え、例えカロードが世界中で犯罪組織に仕立て上げられたとしても、私は……………いえ、私達IS学園は、カロードの味方です!!』

「だが、しかしと言って今回ばかりは我々が勝てるという保証は無い、今我々の味方と言って我々が敗北してしまえば、谷本君、君も、君たちも犯罪者として処断されてしまうかもしれないのだぞ」

『そうであったとしても、私は絶対に後悔はしません、私は決めたんです。まっすぐに、愚直でもいい、突き抜け通すんです、正面から行くしかないんです。私はIS学園の代表候補生たちみたいに強くもないし、カロードの人たちみたいに頭が良いわけでもないです、だからそれしかできません』

「それは……………」

『はい、有澤さんに聞かせて頂いた話です』

それを聞くと有澤がくつくつと笑みを浮かべ小さく笑う、悩み考えていた事が唐突に途轍もない馬鹿なことだと思えてしまえた。

『…どうしました？』

「くつくつ、そうだ、そうだった！ まさにその通りだ、私はあれこれ考えるのは向かない、愚直なまでに突き進み、正面から行かせて貰う、それしか能がない！」

「谷本君、おかげで思い出す事が出来た、最初の気持ちと言う物だ、ありがとう、最高の気分だ!」

『悩まれていたんですね…』

「ああ、だがこれまでだ。 時間がない、それでは私は行くとするよ」

『あの…! 死なないでください…! 絶対に!』

「勿論だ、雷電の装甲は伊達では無い、削りきる事など誰にも出来やしない、死ぬことの方が難しいだろう、それではな」

通話を切り、大きく一度深呼吸をし、雷電を見上げた。

「さて! お遊び用でも何でもいい! とにかく弾を詰める! 行くぞ、我々の力を見せつける時だ!!」

声を聞いた周囲の男たちは全員笑みを浮かべ了承の声を出しコンソールや機材を動かし始める。

「そうだ、正面から行くのが私だ、私達だ!!」

「武装と内装を変える」

「と、いうと?」

愛機の図面と実際の愛機を見比べ女性が指示を出す、その言葉にメカニックは信じられないと言った表情を浮かべた。

レイヴン・リンクスの大多数にとって固定アセンブルと言う物は一種の自己成形と言っても差し支えないの無いほど不変なものだ、ただ一部それに当てはまらない物があるのも確かだが彼女は決してその一部では無かったはずなのだから。

一部の例外と言うのはそう多くない、まず状況によって何でも使えるものを使うスタイルの「籐ヶ崎信一郎」、相手や場所を考慮しあらゆるパーツを使いこなす「シーモック・ドリ」、作戦内容により武装のみの変更をする「ベルリオーズ」等ごく限られた人物でしかない。

武装だけならばまだ信じられたが内装も含めるとそれは最早ガワだけが同じの別の機体だと言い張るパイロットもいるほどだ。

「確かに信じられんだろうが、それだけ私も形振り構ってられないと言ふ事だ、私はこの場を守る為なら恥も外見もかなぐり捨てるよ」

「わかりました、して、どのように……?」

「図面の武装をパーツ群の中から選択し、次々と入れ替えて行く。

「ミサイルをデュアルミサイルに、ロケットはパルスキャノンに変えてくれ、左腕はマシンガン、これはレールガンだ」

「それですと長時間の戦闘行動が出来ません、あつという間にマシンガンが弾切れしてしまいます」

「わかっている、だから格納にハンドガンを入れて弾薬の補充まで持たせる」

「武装を一新した図面を見てひとつ、大きな問題が出てきた。

「何が言いたいかは十分理解している、その為に内装を変えるんだ。………?」

「どうしました?」

「リストに無い、確かあった筈なんだが、半年前にノーマルACを準ネクストレベルに機動力を引き上げる為のパーツが」

「あれは、体に掛かる負荷の問題でお蔵入りです、ネクストACに近づける意図でしたが、そもパイロットもリンクス用の強化人間AMS適合手術を施さなければ使えない代物ですよ」

「ならば問題無いだろう」

「女性はおもむろに來ていたスーツを脱ぎ、シャツの襟を曲げ項を見せる、そこにはネクスト接続の為のパーツが埋め込まれていた。

「元より手術済みだ」

「適性は低いがな、と笑みを浮かべる女性に深く溜息を吐いたメカニックは仕方がないと格納庫のパーツを選択し移送させる。

「やってみますが、元々の性能と大きくかけ離れてしまいます、差異を修正する場も時間もありませんよ」

「あるじゃないか、実戦と言う場と時間が」

「呆れて物も言えないと肩でジェスチャーを行ったメカニックに苦笑いしながら女性は自分の愛機を見上げた。

「私達の存在……それが何を意味するのかこれで分かる気がする。そう

だろう？ ファシネイター」

「予備のバレルを最低10本は用意しておけ！ その貴様ら、サボる暇があるなら自分の機体の調整でもしている!!」

筋肉質で見るからに几帳面そうな男がテキパキと指示を飛ばし叱咤する。

「イライラしているなポール、まあある意味お前らしいと言えばらしいが」

「パーシヴァル、貴様も暇など無いはずだ、それに私はイライラなどしていない」

「いつも通りと言う事でいいな、そう当たるな、同じスナイパーだろう」

ポール、警備隊長が嫌そうな顔を隠そうともせず強く舌打ちをして横に立った男から眼をそらす。

「ありがたい事に敵は一方からのみ進撃してくるらしい、肩を並べて戦う事になるな」

「気にいらん」

「警備部隊だけで十分だ、ということか？」

「私はそこまで自分を過信していない、我々だけで勝てると思うほど愚かでは無い、ただ貴様と並んで戦う事が気にいらんだだけだ」

パーシヴァルがニイと笑みを浮かべながら「ほう」と呟いた、その声を聞くポールがより一層不機嫌そうに眉を寄せる。

「私はカレードに拾われるまで根なし草、などと言うお上品な物ですらなかった、刃毀れたナイフを握り食い物を脅し取り、路地の陰でネズミのように貪り食う。そんな生活をしていた、それを救い上げてくれたのは他ならぬ社長だ、故に社長の御意志は私にとって絶対であり、社長の敵を排除するのは義務であり誇りだ。私の取るに足らぬ自尊心などいくらでも捨てる」

「そして私にとって貴様が気に入らん理由は同族嫌悪であり、ただの八つ当たりだ」



「そうか、同族嫌悪か…なるほど、ポール、お前らしくないな」

「ああ、私らしくない。だが、だからこそ貴様の腕を信用している。精々利用させて貰うとしよう」

「く、くくくつ、いや、なるほど、間違いない、お前はお前だ、それが、それでこそポール・オブライエンだ」

「ふん……」

皮肉であり讃辞である言葉を聞き流すように無視して歩き無線機を持つ。

『戦闘開始予定時刻残り5時間を切った!! 防衛システムも既に稼働可能な物はすべて起動している!! だがそうであっても対IS兵器では無い、30分と持たないだろう、1割落とす事も出来んだろう!!』

だがそれでも我々がいる!! 警備部隊が!! 我々だけではない! 数多くのカロードの戦闘員が戦いの時を今か今かと待っている!!』

『我々に出来る事は戦う事だけだ!! だが、だからこそ何があろうと成し遂げねばならん!! 我々が守るべき場所は最前線であり!! 第一防衛線であり!! 最終防衛線だ!!! 奴らにはただの一步とて侵させてはならない、ただ静かな場所であればならない、心に深く留めておけ!!!』

『我々こそが未到達不可侵領域だとツツツ!!!』

ありとあらゆる武器兵器があるとも思えるほど、ともすればそういう類の博物館だと納得できそうな程の武器が置いてある武器庫で4人の人が武器兵器を物色していた。

「ISじゃなくてACでもない、普通の歩兵武器、これって必要なのかしらっ。」

「言って帰ってハイ終わり、なんて事になる可能性は低い、エネルギーが持つかどうかもわからん、予備エネルギーは積んでいるがそれで十

二分でもない、最悪ある程度ジエネレータが追いつくまで生身で逃げるか戦う必要がある」

最新型の超振動ナイフを手の上で弄び、ナイフシースへと押しこんだ、かつてスコールと呼ばれていた女性、レーゲングスの質問に答えた男がセミオートショットガンを手取る。

「問題はあそこに配備されている無人防衛機だな、歩兵武器じゃ心許無え、数こそ少ねえがある程度ISと張り合えるスペックだからな」  
「生身の場合遭遇したくはないな、気にいらないがテスト相手にさせられたからな、生身では勝てん」

「ならこいつはいらんな」

ぶとり、と重い音を立て掴んでいたショットガンを戻し近場のコンソールを操作する。

「なにを…？」

「決まっているだろう、ぶつ壊すなら武器より工具だ」

コンソールの操作を完了すると同時に武器貯蔵庫の一角の地面がせり上がり、武器用のロッカーを思わせるように数多くの機械が並べられていた。

武器とは違う隠密性を度外視した存在感のある様々な機械、黄色と黒のツートン、やや塗装の剥がれた赤のカラーリング、それらすべてに共通して言える事は「グリップとトリガー」が存在すること、ともしれば何らかの武器にも見えるそれらを丁寧に選んで行く。

「これが……工具」

「そうだ、1世代ほど古いが、まだ現役で使える信頼できる工具だ」

おもむろに手に取った一つを起動し動作確認を行う、武器と言われれば武器に見え、武器ではないと言われれば納得するような形状のそれに興味を惹かれたオーシェが尋ねる。

「それは？」

「小型の切断用工具、プラズマカッターだ、その大型機である大型の資材切断用カッターはこのラインガンだ」

「……人に対しては…？」

「使える、当り前だろう、鉄骨だつてぶつた切るんだ、人間の体なんぞ

無いのと同意だ」

「プラズマカッターと言われたその工具を収納し、続いてもうひとつ大型の工具を手取る。

「フォースガン、瓦礫や粉塵除去に使う空気圧衝撃砲だ、至近距離なら人体を木端微塵に吹き飛ばす威力を持つ」

量子変換し、記憶領域へと収めそれ用の弾薬をいくつも手にとつて収納していく、まるで色を映していない目で生身で相手にするかどうかも分からない敵の為に人を破壊できる機械を手際よく、迷いなく選ぶ。

「フレイムスローワー、金属の溶接、及び不要資材の焼却に使う、ただ、今は粘度の高い可燃性燃料が入っている、追われている時後ろに撒けば炎の壁が足止めになってくれるだろう」

もし、仮にその粘度の高い炎の塊が人に付着すればどうなるか、容易に考える事は出来るが決して言葉には出さない、出してはいけない。

そう、水に飛び込もうが地面を転がり廻ろうが決して消える事の無い炎に人が巻かれて酸素を奪い、焼き殺すなど、まだ心の幼いマドカに考えさせてはいけないのだから。

小型のボンベのような物を幾つも量子変換し、次々と収納していく、まるで人を相手にすることも考慮しているかのように。

「あなたは、何をしようと言うの…なにを成し遂げようとしているの」  
ぴたりと動きを止めた男は色の無い目を細め、浅く考えた後にレーグを見る。

ただ、ゆつくりと口を開いた。

「俺に御大層な思想は無い、母さんのように世界の戦争を終結させ、皆が思うように選択し、十全に戦えるようにしようとしているわけでもない、篠ノ之束のように宇宙進出を目指して果てなき探求を求められるわけでもない、いつちーのように周りの人間すべてを守ろうと思っていないわけでもない、お前たちのようにマドカを守り、自由にさせる為に戦っているわけでもない」

笑みを浮かべる事もなく、怒りを浮かべるわけでもなく、悲しそう

にすることも無い、ただ何もかもが抜け落ちた様な、空っぽの穴を覗きこむような、深い深い深淵を覗きこむような顔でレーグを正面から見つめる。

言葉に出来ない、嫌悪感でも恐怖でもないよく分からない物がレーグの背をジワジワと昇る感覚がした。

「ただ、俺は受け身なだけだ。俺の大事な物に手を出した奴らを叩き潰すだけの、ただどうしようもない力だけ持ったガキの癩癩だ」

「殺す事に、嫌悪感や恐怖は無いの…?」

深く深く、濁ったような瞳が開く、今初めてその目に恐怖が映った気がした。

「あるさ、怖いし死ぬほど後悔してる、今でも思い出すと震えが止まらない、目を閉じれば暗闇の中であの目が俺を見ている、何もかもを投げ出して死んでしまった方が楽なんじゃないかと考える事もある」

右腕で義手の二の腕を掴み、力を込める。

歯を食いしばり感じる恐怖や痛みから目をそらす。

「でもな、俺は決めたんだ、その恐怖さえも全部薙ぎ倒して俺は生きる、耐えきれなくなったら簪に縋り付いて泣き叫ぶ、でも今はその簪が奪われた、だから取り返しに行く、俺の大事な物を取り戻すために、奴らは俺の家族を、家を奪おうとしている、だから叩き潰す、俺の大事な物を守る為に」

漸くその目に感情を乗せて自嘲的な笑みを浮かべた。

「だから俺には大きな思想は無い、ただ私利私欲の為だけにこの力を振るうガキなんだ、キヒヒ、笑ってくれてもいいぞ?」

レーグはそれを笑う事はない、笑える筈もなかった、なぜならそれは苦しさをひた隠し、痛みを隠れて苦しそうに受け入れ、だれにも弱さを見せまいと必死になっていたマドカに似ていたのだから。

だが男は、信一郎はマドカでは無いマドカにそうしたように抱きしめたとして決して自分の弱さや苦しさを吐き出したりはしない、そして何よりも信一郎はそれを決して受け入れない、信一郎が受け入れ、信一郎を受け入れる女性は、今は居ない。

だからこそ、マドカを、自分たちを助けた、どこかマドカに似てい



「お願いだ、言わないでくれ……」

きつと、友達を助けたいと、そう言うだろう。

たとえ、その場所は命が紙のように軽い死地だとしても、行きたいと言うだろう。

おそらく、千冬はそれを止める事が出来ないのを知っているし、それを止めてはいけない事も分かっているだろう。

だから「行くな」と言えない。

だから「言うな」としか言えない。

それが千冬にとって無駄な抵抗でしかないと分かっている。

もし、一夏がこの学園に入ったばかりのままだったなら千冬を悲しませまいと思いついただろう。

もし、一夏が臨海学校以前であつたなら千冬に言いくるめられただろう。

だが、一夏は千冬にとって誇らしい弟だった、自慢できる弟だった、十分以上に愛せる弟だった。

「ごめんな、千冬姉。俺、行きたい……シンを、俺の親友を助けたいんだ」

もう千冬にはそれを止められない、ならばせめて送り出そう、死なぬように、生き残れるように、送り出すしかない。

「やめろ」

しかし喉から絞り出されるのはどうにかして引き留めようとする言葉だった。

「それは勇気じゃない、ただの蛮勇だ」

そんな事は言いたくないんだ、ただ優しく送り出したいんだ。

「お前のような半端物が行った所で邪魔になるだけだ」

やめろ、やめてくれ、まるで子供の癩癩じゃないか。

「それとも、ただの自殺願望なのか？ お前は死にたいのか？」

言うな、そんなこと、嫌だ。

「聞いているのか！ 一夏アツ!!」

いやだ!!!

「泣かないでくれよ、千冬姉」

ゆつくりと千冬に近づいた一夏がただ優しく千冬を抱きしめる。

千冬は初めて自分が泣いている事に気付いた、呼吸は震え、視界が歪み何もかも整理がつかないでいた。

「あ、ぐう…うああ…!!」

「千冬姉、俺さ、千冬姉にも言わないでいたけど妹が出来たんだ、亡国機業が俺の遺伝子で作ったクローンらしい、でも、そうだって俺の妹なんだ、それを助けてくれたのはシンで、妹…マドカは今カラードで保護されている」

一夏の体を掻き抱く千冬が嗚咽を漏らしながらも一夏の話聞いていた、それはまるでマドカが一夏の体を掻き抱いて泣き縋っている時のようだった。

「だから、俺はマドカを助けたいし、マドカを助けてくれたシンを助けたいんだ」

「このお…!! 馬鹿が…!! 大馬鹿物がア…ツ!!」

「うん、うん、ごめん、でも、俺行くよ。これも…俺のわがままだ…」  
強く、強く一夏を抱きしめた千冬が一夏の額にキスを落とす息を整えて微笑んだ。

「もう、心に決めたのだろう…? 止められるわけがない…!!」

一夏が返すように微笑んで千冬から離れて空を睨み、獰猛な笑みを浮かべた。

「今からが正念場だ、行くぞ白式!!」

白式を展開し勢いよく地を蹴り、飛ぶ。

「じゃあな、千冬姉! なーんて気障な事は言わねえ!! 行つて来る、千冬姉!!」

ブースターの青白い光と機体の輝くような白の残光を残し飛んで行った。

そして、まるでそれに続くように五条の光が学園から飛び立ち白い光を追う。

「…揃いも揃って大馬鹿者どもが…絶対、絶対に帰つてこい」

「チエルシー……わたくし、どうすれば良いのでしょうか……？」

元々寮に備え付けられていた物ではない特別製の机で突っ伏しながら通信ディスプレイの向こうにいる親友であるメイドに問う。

『お嬢様は、どうしたいのですか？』

小さく震えるように反応した少女、セシリアは返答に詰まり、手を握りしめた。

「……わからないのです、わたくしは、どうしたいのか、どうすればいいのか、わからないのです」

『お嬢様……』

いままでセシリアには確固たる信念があつた、意志があつた、目的があつた。

厳密に言えば、今もその信念も意思も目的がある。

だが、それ以上に混乱していた、国、家、家族、友人、そして愛する人。

目指す物が、目指す事が、あまりにもセシリアにとって増えていた。言うなれば、取りたい物が多すぎてどうすればいいのか分からなくなっていたのだ。

このIS学園に入るまでの確固たる決意はただ一つ「家を守る」と「これだけであつた。

国家の代表候補生となれば家を守る。

より良い成績を残せば家を守る。

その一つだけがセシリアの決意だつた。

「わからない、わたくし……わかりませんわ……!!」

IS学園に入るまでは家の為に奔走した。

IS学園に入ってから愛する人と恋仲になろうと奔走した。

盲目的なまでに、ただ一つの事に集中できた。

だが先のキャンボールファストでセシリアは一つ成長した。

成長してしまった。

今までのように目先一つだけを見る事はかなわない、もっと多くを見て、多くを知り、決意をしなければならぬと理解してしまつたか



ら。

今までならば友を助けるのは貴族ノブレス・オブリージュの務めの言葉の元に助けに行けただろう。

しかし今は多くの物が見えすぎていた。

IS学園にいる事によって辛うじて国家の要請をはね避けられている事。

友を助ける事による国家への裏切り、そして家の立場。

家の立場を守る事による友への裏切り。

そして消えてしまったと思っていた大事な従妹、それが今カロードにいる。

世界中でテロ組織だとされてしまったカロードに、今現在世界中のISの攻撃に曝されているであろうカロードに。

心では助けたいと想っているのに理性では国家を裏切るべきではないと考えている。

だからこそセシリアは迷う、どうしてよいのか分からないでいた。

『お嬢様、よく聞いてください』

「……………」

『何がしたいか、何をすべきか、というのは得てして判り辛い物です、ですからこうしましょう』

通信ディスプレイの向こうには優しい笑みを浮かべて人差し指を立てる少女、チエルシーがいた。

『何がしたくないか、何をいちばん失いたくないか、それを考えて下さい』

「わたくしが、したくない事……………」

ふ、と脳裏に過るのは小柄な少女。

「わたくしの……………」

思い出すのは幼いころ、まだ両親が生きていたころ、本家や分家など難しい事は分からなかった頃。

「失いたくない……………」

自分の手を掴み、いっぱいの笑みを浮かべてセシリアを「おねえさま」とよぶ少女。

「だいじな……」

カレードに拾われ、保護されていた大事な大事な「家族」である少女。

「……リリウム」

『決まったようですね?』

いま、セシリアに明確な新しい決意が生まれた。

「…はい、ですが…間違いなく国家を敵に回す事になってしまいますわ」

『聞かせて下さい、お嬢様の決意を』

セシリアはディスプレイの向こうにいる少女の目を見る。

「わたくしは、もう家族を二度と失いたくない」

『それでいいのです、やっぱりしっかりと決意したお嬢様はとても美しいですね』

「そうですか? なら一夏さんもわたくしに惚れてくれるかしら」

『ええ、きつと』

ゆつくりと微笑んだセシリアが一息、真剣な鋭い目をした。

「ですが、それは後ですわね」

『はい、お嬢様、この言葉を忘れないでください』

『国家や他人に期待されるような自分じゃなく、お嬢様自身が信じるお嬢様を、信じて下さい』

「……ええ、しっかりと心に留めておきますわ」

広い目で見える事だけではない、それも含め、愚直に突き進む事も一つの大きな成長。

「行きましょう、ブルー・ティアーズ……大切な物を守る為に!!」

大きく窓を開け、まるで羽ばたくように空へと躍り出る。

蒼く輝く光を引いて空へと蒼い雫が飛び立った。

-----

篠ノ之箒、彼女が自ら選択した事は非常に少ない。

今まで受け身だらけの結果だった。

祖父、父親にやってみるかと問われ始めた剣道、確かに才はあったのだろう、真剣に取り組んだのだろう、だからこそ全国大会で優勝できたのだろうしそれを誇りに思っていたのだろう。

だが自ら選択した物ではない。

だからこそ自ら与えられた選択肢を棄却できる意志があつた姉を  
凄いと思えた。

だからこそ自らの意思で強くあろうとした千冬を真に強いと思え  
た。

だからこそ流されることなく自分を持ち、違う事を違うと否定でき  
る一夏を想った。

故に自分と違う選択を出来た姉を眩しく思い、疎ましく思った。

故に強い意志と強い力を持ち確固たるものを持った千冬が苦手  
だった。

故に決してぶれる事の無い筋の通つた愛おしい男がどこか怖かつ  
た。

IS学園に入った事もそうだ、ただそうしろと言われたからそうし  
ただけの受け身の結果だった。

だが、その結果愛おしい男に再度巡り会えた、嗚呼、何と素晴らしい  
選択を私はしたのだろう。

「違う……」

今こそ別の部屋で過ごしているが愛する男と同じ部屋にいられた巡  
り会わせは運命とも思えた。

それもこれも、素晴らしい選択を続けてきたからだ。

「違う」

今、紅のISを纏い愛する男と共に空を翔ける事が出来るのは、あ  
の時姉へと伝える選択をしたからだ。

私は間違つてなかった、あの選択こそもつとも正しい物だった。

「違う……」

違わない、今までの選択の結果だ、選んだ事はすべて正しかった。

例えば臨海学校で一夏と友人の仇を取る為に仲間と共に立ちあ

がった事。

例えば一夏と離れ離れになった時、その憤りを一方的に姉に向かって叩きつけ、一方的に拒絶し、敵意を向けた事。

「違う!! 違うっ!! それが、それこそが一番大きな間違いだ!!」

頭を押さえ、髪を振り乱し、否定する。

自分の心は知っている、自分がどうしたいのか知っている。

だが選択を与えられ、疑問を持つ事もなく受け入れ続けた筈にはその決断が出来ないでいた。

「分かってる、分かってるんだ!! 私が、姉さんを全く恨んでいないことぐらい!!」

声に出し、慟哭のように垂れ流したとてそれは決断では無い、ただの自己満足だ。

「今でも! 姉さんを心の底から愛していることぐらい!!」

もし、自分にもう少し勇気があれば、もう少しだけ自分に自信を持てたら決断できただろう。

一夏には凜とした女に見られたかった、お前に横に並べる相応しい女なんだと見られたかった。

だから一夏の前では自分に厳しく、他人に厳しい、凜とした女を演じてきた。

だが実際はどうだ、自分で道を決める事も出来ない惨めな女でしかない。

「もし、私が姉さんのように強い意志があるなら」

そうじゃない。

「千冬さんのように強くあつたら」

そうじゃないだろう。

「一夏のように揺れる事の無い決意があれば」

いい加減認めたらどうだ。

「そうだ……そうだっ!! 『もし』とか『たら』とか『れば』だとかそんな物に惑わされてなるものかあッ!!」

少女は自ら選択する為の決して揺れる事無い、強い意志を持ち始めた。

「私は許せない、姉さんの想いを踏みにじる物を。私は許さない、友を傷つける物を。私は許さない、何よりも、今までの私を!!」

だから、立ちあがり拳を振り上げる。

「行くぞ、紅椿、姉さんの想いを踏みにじる不屈き者を叩く、力を貸してくれ!!」

りいん、と高い音が響き、紅の装甲が箒を包む。

「ふ、ついでだ、今度こそ一夏に告白するとするか」

空気を叩き斬るような衝撃と共に紅の光が空へと舞い上がった。

自動販売機付近のベンチに座り込んでカフェオレの缶を傾けながら脚をブラブラと揺らす小柄な少女、風鈴音。

「どーするべきかなあ、どーしよっかなあ」

携帯電話に届いた本国政府からのメールを見ながら思案する。

内容は単純、カレードとの戦闘行為に参加せよ、と言う物だった。

勿論参加するべきかしないべきか、などと考えている訳ではない、ただどのように当たり障りなく断ろうかと考えているだけだ。

「お生憎様、あたしは友達裏切れるほど薄情じゃないってーの」

空になった缶を正面のスチール用のゴミ箱へと投げ込む。

「よしっー」

的へと見事命中、しかし気分が晴れる様子は全くない、つまるところ悩みはそう簡単な物ではないと言う事だ。

「悩むなんて、あたしらしくない、けどさあ……どうすりゃいいってのよ」

戦闘に参加しない事が友人を裏切らない事なのか、それとも助けない事が裏切っている事なのか、どうとでも取れるだろう。

だが、鈴音には珍しく決められないでいた。

「そりゃ、助けたいわよ、でもそれでその後どうなるのよ」

もしカレードが敗北すれば自分はもれなく犯罪者でテロリストの

一部、勝利したとて国から目を付けられるのは火を見るよりも明らかだ。

だからこそ、悩んでいた。

ただ、何か自分にどちらにでも発破をかけてくれる物は無いのかと頭をからっぽにして携帯電話を弄っていると、一つ、ある名前が目に留まる。

「…あいつに、聞いてみよっか」

中学生の頃の親友、五反田弾、それが鈴音の目に留まった名前だ。

『鈴か…？ どうした？ こんな平日の真昼間っから』

鈴音にとつて聞きなれた、安心するとともになんてバカな声出してるのよ、と失礼な感想を抱く声。

「アンタこそ、まさか出るとは思わなかったわ」

『ああ〜それな、なんかカラードがどうこうつつて危ないから帰れって学校追い出された』

「ブフツッ！」

テレビを付ければ大ニュースになっている筈の出来事を全く理解していない親友に思わず吹き出してしまった、まるで悩んでいた自分が馬鹿らしいと感じてしまうほどに。

「じゃあ暇なのよね、ちよつと相談に付き合いなさい」

『まあいいけどよ、何だ？ やっぱ一夏か』

「あー、今日は別件、あたし今すっごい悩んでるのよ」

事情を知らないと言う事に、若干呆れながらも、またとても羨ましいと思えた。

「あたしの親友が今スツゴイ困ってる状況でさ、助けたいには助けたいんだけど後の事考えると尻込みしちゃうてるのよね」

『はあ？ そんな事ですか？ 全くお前らしくないなあ鈴』

「そりや自覚してるわよ、んで、もしアンタならどうするかなーって」  
『馬鹿な事聞くんじゃねえよ、決まってるんだろ？ 後の事なんざ二の次三の次だ、助けに行くー！』

一切迷いの無い声でそう言い切った親友に鈴音はニイと口元に笑みを作った、そうだ、もしかするとこの答えを誰かに言ってほしかった

たんだ、と。

「そーよね、そうよ！ うっし、決まった！ んじゃアタシ親友を助けに行つて来るわ、弾！ ありがとう!!」

『応よー！ それでこそ鈴だ！ んで、親友つて誰よ、一夏じゃないんだろ？ よければ紹介して欲しいなーなんて』

親友、弾の言葉に満面の笑みを浮かべたまま大きく頷いた。

「別にいいわよ、そいつは今世界中からテロリストとして指定されたカラードの次期社長、籐ヶ崎信一郎つてーの、んじゃ、今から戦場行つてちよーつと親友助けてくるわ!!」

『はあ?! おまつ、ええ?!』

「しつかりテレビの生放送見ときなさい!! もしかしたら、アタシ映るかもよ?」

『おつ、おい待…』

まだ何か言おうとした電話先の相手の話も聞かず通話を切り、画面を変えるとその小さな体躯をバネのように弾かせ、外へと駆け出す。

走りながら本国政府からのメールを打つ。

『アンタ等の望み通り戦闘に参加してやる、ただしアンタ等の敵としてね、クソ食らえ』

「さあ行くわよ甲龍!! 親友助ける為に世界中に喧嘩売つて全力でブツ飛ばしてやろうじゃない!!」

外に出るや否や甲龍を纏い、地面を踏み碎き、クレーターを生産しながら跳ぶ。

荒々しく紅紫色の線を引きながら空へと駆け出した。

「お父さん、ボクね……シンを助けたいんだ」

『そう言うだろう、とは思っていた』

電話越しに父の声を聞く少女、シャルロット・デュノアは父の返答に苦笑いする。

「やっぱりっ!」

『当り前だ、お前は母によく似ている、どうせ私が止めても無駄なのだ』

ろう?』

「……うん」

娘が戦場へと行こうとするのを止めない薄情な父親、とも見れる会話にシャルロットは確かに親の愛を感じていた。

親子として真に心を通わせた時間こそ少ないが、父は娘を心の底から愛し、娘は父を心より信頼していた、時間など考慮すべきではない。「こうしてお父さんと話が出来るのも、社を立て直す事が出来たのも、シンのおかげだから。だからボクはシンに恩を返したい」

『それでお前が戦場に行くと言うのは納得行かんがな』

「やっぱり、納得はしてくれないんだ」

くすりと笑いながら父の苦言に返す、どこか不機嫌そうな声がシャルロットにとつて嬉しく、面白かった。

『当たり前だ、何を好き好んで大事な娘を戦場へ行かせようと思うのだ』  
「そっか、そっか……ありがと、お父さん」

感じるのは親の優しさ、果てもう得る事違わないと感じていた親の愛、父は母と同じように自分を愛してくれる。

それだけでシャルロットは何でもなせる、あらゆる事を出来るときえ感じれる。

故に、深い愛情を与えられた少女は揺れることなく自らの意思で戦場へと出れるのだ。

『シャルロット、私からのお願いだ。絶対に無事で帰って来なさい』  
「うん、任せて、お父さん」

愛する者に信じて送り出されるとは、なんて心地いいのだろう。  
涙さえ零れてしまいそうになるシャルロットは満面の笑みを作つて一つ、父にお願いをする事にした。

「ねえ、お父さん…ボクからのお願いも、聞いてくれる?」

『ああ、聞いてやるとも』

「あのね、次に会ったときね? きゅって、して欲しいんだ」  
まるで林檎のように赤く頬を染め、恥ずかしそうに伝える。

シャルロットにとつての精一杯のお願いで、心からの我儘。

『ああ……勿論だ、勿論だとも…!!』





リツサ」

凜とした女性の声、どうやら問題はなさそうだと自分を明かし、相互認識を行う。

『隊長、いかがなさいましたか』

「そちらの様子はどうか、やはり軍部も怪しくなってきたか？」

『：はい、政府から四六時中上層部に通告をされているとの事です、今は将官の方々が突っぱねていますが佐官以下の方々が……最悪クーデター紛いの事さえ発生してしまう可能性があります』

自体は思ったよりも深刻だった、目を付けられるのは間違いなくISを複数所持しているラウラの部隊だろう、というのは容易に想像できる。

「クラリツサ、こんな時だが、少し個人的な相談に乗ってくれないか」  
『……わかりました、なんにしる今我々に出来る事はありません、それぐらいならばお安いご用です』

「そうか……ありがとう」

ふわりと笑みを浮かべ通信機の向こうにいる部下へと礼を述べる、珍しく飾る事の無い自分の言葉が出た気がした。

「私は、教官こそ全てで実力こそ最も必要とされる物だと信じていた、いや、信仰さえしていた」

思い浮かべるはまだラウラが落ちこぼれだった頃、最高レベルのIS適性を持ちながらも最低レベルの動作しか出来なかった、出来そこないの烙印を押されていた頃。

それを救い上げてくれたのは間違いなく織斑千冬だ、そして織斑千冬の教えには何一つとして間違いはなかった、過去だけではない、今、未来でも声高く言い続ける事が出来る。

ただ、昔は捕らえ方を間違えていただけでしかない。

力が無ければ何もできない、自分の意志を主張する事はおろか、自分と言う存在さえ認めて貰えない、そう考えてすらいいた。

「だが、私はこの学園で多くを学んだ、友を知り、愛を知り、優しさを知った」

事あるごとにラウラを着せ替え人形にし、その都度ラウラに頼ずり

をする同室の親友。

自分をありのままに認め、受け入れ、許してくれた愛する男性。

時折変な事をするが愛する者に至上の愛を捧げ、その手に獰猛さと深い優しさを持つ傷だらけの男。

「私は変わった、力こそ全てだとは到底思えなくなった、しかし私は自信を持って言える。私は弱くなどなっていない、なお強くなったと」友と切磋琢磨し、技術を磨く楽しさは今までの何事よりも充実し、強さを実感できた。

人を守る為に武器を振るう事は決して無駄ではない、有形無形に問わず必ず何かを得られた。

誰かを助ける事は美しい事なのだとなり、憧れの人に褒められる事もあった。

「だが私は、私は変わったからこそ、選択を誤ってしまう、しかしこれは間違っていないと、言えてしまう」

歩く先に出口と外の光が見える。

眩しいと感じてしまうそれはまるで身を焼く光のようにも思えた。

「クラリツサ、私は……友を、籐ヶ崎を助けようと思っている」

『……隊長……』

それは国家の代表候補生としても、軍人としても間違いだらけの選択、正しい物が一つもない選択。

だが、これはラウラと言う少女がラウラと言う少女である為のとても大きな、間違いの何一つとしてない選択。

「クラリツサ、私は有事の際に自信の権限を一時的に少将と同階級で扱う事が出来るのは、知っているな？」

『……はい』

「クラリツサ・ハルフオーフ大尉、現時点を持って大尉をシユヴァルツェ・ハーゼの隊長に任命する。また、同時刻を持ちラウラ・ボーデヴィツヒ少佐の軍籍を剥奪し、ドイツ連邦共和国の軍用I S『シユヴァルツェア・レーゲン』を強奪した反逆者とする」

ラウラが自身を犯罪者として自ら処断する、少女は抛り所を失った筈なのにも関わらず、自分でも信じられないほどすつきりとしていた。



「鈴?!」

至っていつも通りに一夏の横に並び話しかけると、当の一夏本人は非常に驚いた様子で目を見開いた、しかし今この状況で同じ方向へ向かっている事を理解すると嬉しそうに笑みを浮かべ、速度を鈴へと合わせる。

「そういうお前こそ! どっか人助けにでも行くのかよ!」

「あつは! だーいせいかい! 流石一夏ね、アタシの事よくわかってんじゃん!」

続いて二人に追いつこうと近づくIS反応を確認すると意識を後ろに向けた、その先には橙のIS、シャルロットのラファールだ。

「やあ二人とも! こんな所で会うなんて奇遇だね!」

「ほんとにな!」

「あーっと、二人とも、後ろ後ろ!」

続き、次々とIS反応が近づき、見覚えのある色が意識下に入る、それを見て3人はニイと同じような笑みを浮かべた。

「あらあら皆様お揃いのご様子ですわね?」

「ふふ、私含め馬鹿ばかりだ、どれだけ分が悪いかなんて分かりきっているだろうに!」

「まあ、目的地はみな同じだと言うわけだ、無駄口を叩かずに行くぞ!」

口元に手を当て、クスリと笑う蒼を纏うセシリア。

獰猛な笑みを浮かべる黒を纏うラウラ。

口元をほんの少しだけ吊り上げ、真剣な目で正面を見る筈。

「一年の専用機持ち殆ど揃ったな、あとはシンと簪だけだ」

「そ、だから今から全員揃う為に行くのよ、アタシは」

「そうだね、これからもみんなで笑っていけるように、今ここにいないだもんね!」

まるで今から戦場に行くとは露とも思えない会話を続けながら、決してぶれることなく目的地へと飛ぶ。

その中で一人、篠ノ之箒、彼女だけは難しい顔をして、黙っていた。

「……………ふむ、一夏! 聞いてくれ!!」

何かを決断した箒は顔を一夏へと向けて真剣な表情をして、全員に聞こえるような声を出した。

「何だ？ 箒」

「私、篠ノ之箒は織斑一夏、貴方の事が好きだ！ 心より愛している！！ 友人云々では無い！ 一人の女としてお前を愛している！！」

「……………な、ああ?！」

一瞬、全員の動作と会話、そして思考が完全に停止し、続いて一夏の素っ頓狂な声が響く。

「ふむ、なるほど、吐き出してみれば何と心地いい、ふふ、いいものだな」

「あ、ああっ!! 箒ズルいよツ!!」

満ち足りた表情で優しい笑みを浮かべた箒に対して若干涙目のシャルが食って掛かる。

「ズルくない、ならばお前たちもすればいいだろう、私は一番最初に勇気を出した、それだけだ」

「う、ううく…………!! い、イチカッ!!」

「しゃ、しゃっ、シャル?! どっ、どど、ど、どうひた?!」

頬を朱に染めたシャルが一夏へと声をかけると、信じられないほど顔を真っ赤に染めた一夏が信じられないほど言葉に詰まりながら声を出した。

「ボクも！ シャルロット・デュノアも一夏の事が大好きっ！ 愛してる!! ボクと結婚して下さい!!」

目をグルグルと回しながら完全に男女を間違えた愛の告白をするシャル、肝心の一夏は高速で飛行を続けながらも完全に放心状態で顔を真っ赤にしている。

「んじやあアタシも遅れるわけにはいかないもんね！ 一夏！ 私はね、アンタの事がずっと好きだった!! 中学生のころから!! 今も、ずっとずっと大好き!! ここまで言って友達として、なんて寝ぼけた事は言わないわよね!!」

「では、次はわたくしですわね、一夏さん、わたくしは貴方をお慕いしております。心より貴方に尽くします。どうかわたくしと添い遂げ

ては頂けませんか？」

「む、これは私も言う流れと言う奴だな、任せておけ、籐ヶ崎に正しい知識を与えて貰ったんだ。嫁よ、いや、一夏よ！ 私は貴方のおかげで世界を知る事が出来た、貴方のおかげで私は満たされ始めた、だから私も一夏を満たしたい！ どうか私の媚になつてくれ!!」

これで全員の告白は終わった、一夏以外は返答を今か今かと待ち望んでいるのに対して一夏本人は目をグルグルに回しながら顔を真っ赤にして口元をひくつかせた。

「っつ、ん…!!」

『ん？』

「これが終わったらッッ!!!」

イザと言う時に男らしい織斑一夏は今この時、情報を処理しきれず、後回しにするという方法を持って逃れる事にした。

M A R C H E    A U    S U P P L I C E    『断頭台への行進』

『こちら前哨監視部隊、第一防衛線突破されました、撃破数……0』

「了解した、危険な場所ですくやくつてくれた、退避してくれ」

『わかりました……まさか、ただの防衛兵器とは言え一機も落とせないとは……』

「非殺傷の為に威力を制限して弱装弾を使用しているのだ、仕方が無い」

警備隊長ことポール・オブライエンが通信を終了し、各パイロットへと通信を繋ぐ。

「第一防衛線が突破された、撃破数は0、恐らく損耗率はかなり低いと思われる、あと10分も待たず射程圏内に入るだろう」

折り畳んでいたスナイパーキャノンを展開し、第一防衛ラインのあった方向へと向ける。

「各自、戦闘用意をしろ」

その言葉と共に全ACがカメラアイに光を灯し、各部から排熱の為に煙を吐き出す、数十の5〜10m級大型兵器が一斉に動き出す様は間近に見れば圧巻だっただろう、恐怖さえ感じるだろう。

『こちらネクストランカー1ベルリオーズ、数こそ向こうの方が遙かに上だが、錬度ならば我々の方が遙かに上だ、しかし油断するな、潰すぞ！』

漆黒のACが紅くアイセンサーを輝かせ、激励を飛ばす。

『ハイエンドノーマル、トップランカー、シーモックだ、本当の殺し合いも経験した事のない小娘どもに後れを取る訳には行かないだろう、すでに老骨の身だが、あんな物に道を譲る訳にはいかん、今この瞬間は力こそが全てだ!! これを乗り越えるぞ!!』

黒銀のAC、デュアルフェイスが腰を深く落とし両背のグレネードランチャーを展開する。

『……レイ……勝つぞ……』



復讐の意味を持つACが脚部のシールドを展開し、スナイパーキャノンを構え、正面を睨むようにアイセンサーの光を絞る。

各ランキングトップが通信を行い、全員へと言葉を飛ばした。

その瞬間全ての人員が腕を振り上げ、雄叫びを上げる、まるで爆音のような声が周囲に響き振動が肌で感じ取れるほどとなった。

事が動いたのはそれから僅か数十秒、無人偵察機が何百と言う小さな光を捕らえる。

ポールは音声通信を起動し、麗羅へと繋いだ。

「射程圏内に敵勢部隊が入りました、社長、抹殺の指示を」

コクピットの操縦桿を握り、トリガーに指を掛け、雲霞のような軍勢の最前機を狙う。

『ただの一人も殺す事は認めません、ですが大怪我は受け入れて貰いましょう。防衛戦開始して下さい！』

戦闘開始、その言葉と共に全ACが行動を開始する。

スナイパーキャノンを構えた狙撃型のACが一斉に砲口から眩い光を散らし、巨大な葉莖を地面へと叩きつけ、巨大な弾丸を水平線に見える300を超えた数のIS達へと奔らせた。

「ポール、ちゃんと当てられるか？」

「舐めるな、パーシヴァル、貴様に心配される謂れは無い」

言葉通り、ポールの駆る「警備部隊一番機」の放つスナイパーキャノンの弾丸が次々とISへ突き刺さり、炸裂した。

『今こそ我々警備部隊の真価を発揮する時だ!! 我々の、社長の、カロードの意志に逆らう愚か者どもを抹殺せよ!!!』

「殺すな、と指示を受けているはずだが…まあ、いいか」

スナイパーキャノンの弾丸が、グレネードキャノンの砲弾が、高圧エネルギー体が次々とISへと迫る。

徹甲弾の命中により装甲を散らして弾き飛ばされるISや、榴弾の着弾で発生した爆発に巻き込まれ甚大なダメージを負うIS、焼夷弾の粘着燃料が付着し、燃え盛る機体と共に地へと墜ちてゆくIS、高圧エネルギーの直撃でオーバーヒートを起こし行動の大きく制限されたISなど、見る者が見れば地獄だ、と言うような光景が広がって





「ふふ、フハハハ、これが、ネクストの感覚か…!! 柄にもなく、興奮する…!!」

視線を忙しなくコクピット内のあらゆる数値に向けながら、ミリ単位の細かい操作を何よりも素早く、かつ正確に叩きこみ、機体を操る。こちらにロケットランチャーを向けた機体の正に今発射されんとした砲口にレールガンの弾丸を叩きこむ。

砲身自体が炸裂し、担いでいたISの肩部と胸部の装甲が砕け、弾かれた。

「もう一発、おまけだ」

地面へと墜ち行くISの背にレールガンの弾丸を直撃させ地面への旅路を短縮してやる。

「ふむ、やりすぎたか…：生命反応あり、大丈夫だな」

視線をすぐさま周囲へと向け、口元に笑みを浮かべ、グリップを握りこんだ。

「有象無象の雑兵だらけかと思っただが、中々に楽しませてくれる、これならば私の、いや…我々の存在の意味が分かるかもしれない!」

戦意を保ってこちらへと向かって来るISへ向けマシンガン突き付け、トリガーを引く、刹那、まるでショットガンの散弾のような銃弾で構成された壁がISへと迫った。

その壁から瞬時加速を用いて大きく回避した一機に狙いを定め、コクピットのペダルを強く踏み込む。

まるでOBを使用したかのような瞬間加速にコクピットのシートに体が押し付けられ潰されるのではないかと錯覚さえする、だがそれさえも興奮を与える刺激として獰猛な笑みを浮かべていた。

「そおらー！ 墜ちろ!!」

瞬時加速の行き先へと先回りし、右足を大きく引く。

ISのパイロットの表情が恐怖に歪んだ。

『——ッ!!』

言葉にならない絶叫を頭部パーツが捉え、コクピットに響かせる、

ぞわり、と背骨に何かが走るような震えを覚える。

直後に複雑な形状の金属をプレス機で叩き潰したような、重なりあった金属が纏めて押し折れるような、重いとも軽いとも言えない音が響いた。

右脚部と右脚部ブースターを操作する右ペダルからまるでミシミシと何か堅いものを無理矢理へし折ろうとするような感覚が走る。

地面へと叩きつけられたISは何度か地面を跳ね、動きを止めた後光を放って生身へと変わった。

「まずい……これは、マズイぞ……!!」

自分が戦闘<sup>バトルジャンキー</sup>狂なのかサディストなのか区別がつかぬほどの興奮を覚え、呆けてしまう。

その直後、自分の背後で何かが爆発し、小さくない振動に現実に取り戻された。

『呆けるな、ジナイーダ。シーモックがお前の背後のISを撃って無ければ墜ちてたのはお前だったかも知れないのだからな』

「ああ、すまないジャック」

眼前のスクリーンを睨み、左側にいるISへとマシンガンを乱射した。

まるで察していたかのように大型のシールドで防御したISへ更にトリガーを引き絞る。

ガキン、と音が鳴った。

「弾切れかっ!」

弾膜が途切れたと同時に、前方と左方からISが迫る。

パルスキャノンを即座に前方へと吐き散らし、ISを攻撃、左のISがこちらに接触するまで1秒と無い。

だが、それでも十二分すぎる。

その場でマシンガンを落とすようにパージ、その開ききった手が――

「だが、残念だったな」

――閉じられると共に量子変換の光が形を作り――

「格納ぐらいあるさ」

——ISをリボルバーハンドガンで吹き飛ばした。

二発、三発、四発、マガジンを全て叩きこみ、パルスキャノン  
を撃ち、撃破する。

「こちらファシネイター、予備のマシガンと各種マガジンを用意し  
てくれ、連絡が入り次第取りに行く」

『こちらパウードスーツ部隊、了解しました、遅くとも1分で用意しま  
す』

「それは助かるな」

スクリーンに映る敵影を横から順に舐めるように見、ひとつ舌なめ  
ずりをした。

「さあ来い!! 敵はここだ!! ここに居る!! お前たちはそこに居  
て、私はここだ、ここに居る!!」

『狙撃部隊! Bポイントで囲まれている!! 援護射撃を頼む!』

「パーシヴァル!!」

「ああ!」

狙撃部隊に入った通信にポールがいち早く反応し、通達、それに応  
えた中量二脚のACが両手のスナイパーキャノンから巨大な音速の  
壁を突破した砲弾を吐き出し、赤熱さえ起こした鉄塊とも思える物体  
が赤い線を引きながらISの一軍へと奔る。

『援護感謝する! オラ押し返すぞおおおおああ!!』

スコープの拡大した視点に収まるISを砲弾で弾き飛ばし、排莢が  
終わるまでの刹那の間に次のターゲットへと狙いを付け、装填完了と  
同時に雷管を叩く。

ダイナマイトを爆破したような強烈な爆発音、プレス機で巨大な鉄  
を叩いたような重苦しい音、そしてそれと共に戦艦の砲弾ほどもある  
弾が吐き出され今まさに他のACへ斬りかかろうとしたISを弾き  
飛ばす。

その一打を放ったポールが視界内に映るアラート表示に大きく舌  
打ちをした。

「チイツ!! 工兵!! バレル交換だ! 早くしろ!!」

『ハッ! 弾薬と共に只今お持ちします!!』

陽炎によってぐにやりと曲がったようにも見える赤熱した砲身を  
畳み、左手のレーザーライフルを前方へと向ける。

FCSによって敵機の移動予測地点へとエネルギー弾を叩きこみ、  
視界内の全ての情報を処理し、細く息を吐いた。

「ビステス! リブラの援護をしろ!! カリウスは左舷警戒! エイ  
リーク、引いて弾薬を補充しろ!!」

近距離のISへと肩部のKEロケットをショットガンのように直  
撃させ、レーザーライフルを放つ。

『隊長! 弾薬及び予備バレルお持ち致しました!!』

サブモニターに目を向けるとガトリングを肩に搭載した大型のパ  
ワードスーツに身を包んだ工兵が機材運搬用のキャリアーにバレル  
と弾薬箱を二つ積んで運んで来た、想定よりも対応が速かった事に安  
堵し一歩、また一歩と工兵に近づく。

「スナイパーキャノンのバレル交換を頼む、その後肩部ロケット弾の  
補充、そしてレーザーライフルのエネルギーパック交換だ」

『了解しました、スナイパーキャノ...ッ!! 隊長! ミサイルが!!』

工兵が両肩のガトリングをCIWSのように飛来するミサイルへ  
と放ち、迎撃する。

飛来したミサイルの数は10にも満たず、威力こそ大きい物の相応  
にサイズが大きい、故に全て迎撃する事はそれほど難しい物ではな  
かった。

が、その爆炎からISが向かって来るのならば話は別だった。

ワードスーツに搭載されたガトリングの弾薬は身を守る為の護  
身用に過ぎない、無力とは言わないがISへの効果は薄い物だ。

極近距离であれば狙撃機の利点はないと言ってもいい、それを理解  
してのミサイルの爆風やガトリングによる被弾さえも是とした接近  
だ、これを行う事が出来るパイロットはそう多くない。

事実、彼女は所謂国家代表であった、故にその技術、度胸、共に有  
象無象とは違う。

だが、それはポールとて同じ、否。

お遊びなどではなく命のやり取りの場に立ち続けたポールに及ぶべくもない。

スナイパーキャノンを折りたたんだまま、ISを殴りつけた。

しかし、ブーストチャージや瞬時加速に対するカウンターのよう  
にダメージは期待できない、なればこそ。

弾き飛ばさずに腕部の微細な調整で地面へと叩きつけた。

狙撃の出来る精度には遥か遠く及ばないが、砲身を畳んでいたと  
して弾は出る。

撃針で雷管を叩けるのであれば、弾は出る。

狙撃など出来なくても、接射であれば、直撃する。

ISのパイロットがギリ、と歯を噛んだ、悪態など決して吐かない、  
ベルリオーズならば称賛の言葉の一つでも言っただろうがポールに  
そんなものはない。

何一つ躊躇なくトリガーを引いた。

巨大な砲弾が初速のままISへと突き刺さる。

後ろに衝撃を逃がす場もない、弱装弾と言えど狙撃弾だ、その一発  
でISのパイロットの意識を刈り取るには十分すぎた。

『流石…ですね』

「いいから早くバレルを変えろ」

『ハッ！』

チリチリと空気を焼くいまだ高温を保ったままのバレルをコン  
ソール操作で排出し、反響する重い鉄の音を響かせ左腕のレーザーラ  
イフル以外を固定。

工兵が巨大なバレルを持ち上げ装填、排出口を叩きつける様に閉じ  
た。

『バレル交換完了しました、ロケットの補充を行います』

「ああ」

コクピット内部のコントロールパネルのモニターを確認しながら  
あらゆる情報を読み取り、別に取り付けられた高高度偵察用UAVか  
らの視界を表すモニターを見て仲間へと指示を出す。



『隊長、弾薬の補給完了です』

「ご苦労だった」

その言葉と共にスナイパーキャノンのリロードし、巨大な薬莖を地面へと落とす。

重い鉄の音を響かせながら逆間接の脚部を一步前に出し、縁に乗せた後固定機構を展開、スナイパーキャノンを深く構えこんだ。

ふと、サブモニターに目を向けると先ほど撃破したISのパイロットがこちらを見ながら体を動かさそうとしている、その目に敵意ではなく一種の尊敬のようなものを感じたポールはまた、確実に肋骨は折れ、内臓も損傷しておかしくない筈のそのパイロットに称賛のようなものを抱き、不可解だと心の中で吐き捨て、気だるげに一つ、パワードスーツの工兵に指示を出した。

「そのパイロットを救護室に運んでやれ、丁重にだ」

『…りよ、了解しました…ですがなぜ…?』

「敵としては殺してやりたいほど気に入らんが、個人としては口汚く喚いたりせず、冷静に判断を行えるのは好感が持てる」

『わかりました、では指示通り丁重にお運びいたします』

「……らしくない、とでも思っているのか?」

『いえ、まさかそのような…!』

戦艦の主砲を放つ音を減音した物と衝撃波を正面に叩きつけながら不愉快そうに一つ、鼻を鳴らす。

「私もそう思っている」

モニターのスクリーン内で砲弾が直撃したISが弾き飛ばされ、壁へと叩きつけられた。

中空を縦横無尽に飛び回り、規則性もなく目につく物を片っ端から攻撃するオリブカラーのネクストACが敵を撃破するでもなくただ敵を引きつける。

「さて、こんなもんか」

眩い光を吹きながら半回転し後ろを向いたネクストのコクピット

に映る視界には10以上の敵がこちらへ銃口を向け、ひしめいていた。

それを満足気に流し見る狂ったような笑みを浮かべる男、オールドキング。

AMSによる思考制御で一点に狙いを定め体を前のめりに傾け背部のブースター出力を急激に捻り上げる。

10メートルにも及ぶ巨大な鉄塊が凄まじい速度で迫ってきた事に咄嗟に散開することで避けたIS達は丁度ど真ん中で動きを止めたオールドキングのAC『リザ』へ笑みを浮かべながら銃口を一斉に突き付けた。

それに対し包囲網の真ん中にいるリザに乗り込むオールドキングはなおも狂気的な笑みを浮かべる。

事前のブリーフィングにおいて各機種の指揮官及び社長から幾度も確認させられた禁止事項、数は決して多くない中の一つ。

それを使用すれば確かに広範囲にわたってISを大きく弱体化できるだろう、しかしそれを禁止とされた理由、ISのパイロットを最悪の場合殺害してしまう可能性があるから、ではない。

ネクストの防御の要であるプライマルアーマーが消失してしまうからだ。

最速のACたるネクストはその速度を得る為に非常に軽い、つまるところ防御力も相応でしかない、それを補うのがプライマルアーマーであり、それを攻勢エネルギーとして利用し、敵機の防御力を自らの防御力と共に消失させる装備はネクストパイロットの命を守る為使用禁止となっていた。

その装備をISに囲まれた中でオールドキングは何一つ迷うことなく使用する。

「…アサルトアーマー起動」

緑の膜が瞬間的にリザを包み込むように球形に発生、急激に圧縮され、ISのパイロット達が行動を一つ起こす前に、纏めて緑の爆風に包まれた。

それはまるでトルネードに叩き込まれたと錯覚するほどのエネルギー

ギーの暴風、その爆発を起こしたりザ以外の巻き込まれた全てのISが一時的に制御を失い、振り回される。

その中心で悠々と鼻歌を口ずさみながら両手、両背の武器から炎と銃弾を吐き出した。

『アグウツ?! な、どうし……ツカハア?!』

『シールドが!! なんて、どうしてえ?!』

『誰か!! 誰か助けて!! いや、いや、いやああああツ!!!』

「You can run

You can hide

You can pray

But I, m gon na cut you down」

カリードネクストラंक3、オールドキングの恐ろしさはラंकでは無い、総合的に見るならば確かにラंक3の実力だ、だがオールドキングには他の追隨を許さないある強さがある。

継続戦闘能力、オルレアには及ばない。

瞬間火力、月輪のアサルトキヤノン、雷電のグレネード掃射に勝る事はない。

彼の恐ろしさは純粹に相手を倒す能力だ。

例え刃をその身に受けようが、銃弾が肉を削り、抉ろうが決して揺るがない狂氣的なまでに相手を倒す意志。

ACに乘ろうが生身であろうが決して変わる事のない恐ろしい程の強さ、その強さに誰一人として彼に勝った者はいない。

ラंकは強さでは無い、ただの総合評価でしかない、純粹な戦闘において彼は誰の追隨も許さない。

例えそれは仲間であろうが彼の狂氣に当てられ恐怖する。

故に装甲板を散らし、スパークを散らし、銃弾が食い込もうが何一つ恐れない彼の狂氣を受け正氣でいられるISパイロットなど、居る筈が無い。

武器を捨て、無様に命乞いをし、神に祈る彼女らにも彼は何一つとして容赦はしない、それが彼の強さだから。

「殺す為に来たんだろう? 殺されても仕方ねえさ、だろう?」

オートリローディングシステムによりポンプアクションに似た機構が作動し、巨大な薬莖を排出、戦場のど真ん中にも拘らずまるで何も起こっていないのかと錯覚するほどに自然な動作で残弾数確認を行う。

戦場にいる事を意識していないのではない。

「ショットガンは、そろそろ補充時だなあと4発……いや」

半狂乱になった絶対防御を発動させたパイロットがそのサイズにしては巨大な実体斧で斬りかかるも、さして大きな動作を行うわけではなくただマニピュレータの手首を動かしショットガンの銃口のみをISへ向け、トリガーを引く。

「あと3発か」

戦場にいると言う事など、意識する必要さえこの男には無いのだ。

散弾の衝撃により大きく打ち上げられ、意識を失ったISパイロットが重力に逆らう事無く落ちて行く、このまま地面に叩きつけられればISを纏っているとは言えエネルギーが0では大怪我、最悪死に至るだろうが気にする事はない。

『つとー！ 危なっ！』

なぜならば、それを受け止めるISがいるからだ。

「ああ、ファイルスか、何をしてる？」

ISパイロットを片手に呆れた顔でリザの頭部カメラを見る『銀の福音』搭乗者ナターシャ・ファイルスだった。

『はあ……ここ数十秒の私が何してたか知りたい？』

「いや、要らねえ」

『ううん、教えたい。あなたがアサルトアーマー発動したら急いでこっちに来てボロボロ落ちてくるパイロットを拾っては降ろして拾っては降ろしてを繰り返したの、で…何か言う事は？』

「暇だなア、お前」

じろりと恨みがましい目でリザを見続けるナターシャにオールドキングが一つ溜息を吐いて降参した。

「分かった、悪かった、これでいいだろ」

『よろしい』



『…わかんない。マスターどうして?』

『どうして、ふたりとも、てっぽうむけるの?』

銀の福音がアンロックユニットの砲口を突きつけ、金の夜想が長大なガンブレードの砲口を突き付け、戦闘準備へと入っていた。

「……ごめんね、福音。ゴメンね、イーリ」

「…ハッ！ ゴメンだあ？ アタシに勝ってから……言うんだなア!!!」

同時に奔る高出力のエネルギーがぶつかり合い、眩い閃光を走らせた。

く く く く く く く く く く く く く く く く

何十という巨大な画面が壁一面に付けられ、めまぐるしく何らかの文字列が上へとスライドしては消えて行く。

眼前のキーボード、その数8機をまるでピアノの激しい演奏の如く叩き続ける。

カラードのサーバールーム、ある理由により決してオフライン出来ないその場所で膨大な数、それこそ万単位のクラック、ハックを受け、それに対処している女性、籐ヶ崎麗羅。

世界最高クラスの演算能力を備えた二人、麗羅とカラードの電子空間管理AIであるIBISが強固な防壁となつてその波を防いでいた。

「……この…調子だと、何とか持ちそうね」

『はい、ですが、私の処理に特殊ACを使用するほど空きがありません』

「大丈夫よ、貴方なら……絶対」

『はい』

凄まじい悪意の波をたつた二人で防ぐ、その上二人の処理で言うなればまだ60%も埋まっていない、このまま何も無ければ、否、多少何かがあつた所で問題はない。

「戦線が広がってきているわ、押し留めて」

『了解しました』

「それと、こっちの被害は？」

『既に6機落ちています。敵も含め死者はいません、こちらだけですと重症者4、軽傷が16です。ほとんどが救護活動中か補給時による物です』

「そう……分かったわ、絶対に死なないように」

『了解しました、社長』

突然、電子防壁への侵攻率が1%アップした。

「嘘!! そんな?！」

タカが1%、しかし0から1へと変わった事は、少なからず異常であり『多少』の枠組みを超えた事態だった。

見る見る2%3%へと上昇していく侵攻率。

指示を出す余裕は一切と言っている程なくなった。

『社長、駄目です、今の制限した処理率ですと持ちません……苦肉の策ですが……信一郎様のACサポート処理を……打ち切ります』

「ツ!! どうして、急に……!! こんな……ツ!!」

「出力が足りない……!! お願い、福音、今だけは……!」

『わかんない!! マスターのおともだち!! ゴスペウのいもーと!!  
なんで?!』

福音の戸惑いと疑問、そして葛藤により大きく機能が制限された状態でナターシャは戦闘を行っていた。

防御力こそ他のISとは比べ物にならないが攻撃能力自体は酷く制限され、ともすれば競技用のISと同等にまで落ち込んでしまっている。

「ナタル!! 今は、今この時は敵だろうが!! 力が……全てだろうがアアアツ!!!」

咆哮を上げ、獣の爪にも見える光の刃が福音に迫るが、爪に翼を打ち付け、防御した。

火花と鉄を引つ掻くような不快な音を立て、爪がめり込む、今の福音の翼は「機械的な」翼だ、最高状態の福音とは比べるべくもない程に相手と同等でしかない。

「来いよお！ ナタアアル!!! お前はどの程度じゃねえだろお!! お前と福音は、こんなもんじゃ無かっただろうがよおおおッ!!!」

「ツツさいわねエ!!! 分かってるわよ!! 私もこの子も!! こんなもんじゃないに決まってるでしょうがア!!」

『マスター……おこってる……?』

まるで叱られた幼子のようにビクビクと、ゆつくり声を選ぶ福音に、なぜかナターシャはストン、と心の整理がついた。

なんで私は怒ってるんだろう、なんでイーリはこんな声荒げているんだろう。

ああ、なんだこれは、こう言う事なんじゃないか、イーリもきつと、こういうことなんだろう、と。

「そうね、私はきつと、怒ってるわ。これはね、福音、相手が憎いんじゃないの、あなたが憎いわけでもないの、どれだけ仲が良くても、いいえ、きつと仲が良い程に、こうなるのかもしれないわ、これはね」

ニイ、と笑みを浮かべてイーリスを睨みつける。

「喧嘩って、言うのよ」

『けんか?』

「そ、だから負けてらんない……お願い福音、私に、喧嘩に勝たせて?」

『うー、うー? けんか、ダメだって、みんないつてる?』

「きつと、あなたもわかるわ」

『うー、わかった…』

視界に表示されるエネルギー数値が爆発的に上昇し、翼の表面についていた傷がみるみる修復され、翼がまるで生き物の羽のようになつた。

「待たせたわね、イーリ……ブツ飛ばしてやるから、覚悟しなさい」

「ハッ、やっとか! ナタルが福音に乗ってからは負け越したけど、もう負けねえよ、黒星付けてやる!!」

「あなたの黒星、増やしてあげるわ、感謝なさい!!」



大きく翼を広げ、アンロックユニットの砲口を周囲に漂わせる『銀』と中空で地を踏みしめるように姿勢を落とし、両手に巨大な爪を構える『金』、睨みあいからの喧嘩が今始まろうとしていた。

「行くぜ、ナタツ…?! な、なんだこれは?!」

唐突に『金』がビキリと動きを止め、装甲の隙間から光を漏らし、ギリギリと不快な音を立てて形状が見る見る変わっていく、まるで二次移行にも見えるそれは。

「あツ！ ガアアアアツ!!! 止める!! ヤメロヤメロヤメロオオオオオオツツ!!!」

明らかに、そう言う物ではなかった。

「グ、ア、ガアア!!! に、げろ…ナタ…ルウウ!! こいつ、こいつはアアアアア?!」

「イーリ?!」

『あう、だめ…こんなの…ちがう!! ちがう!!!』

歯を食いしばり、口元から一筋血を流し、凶悪な形状になった爪を福音に突き付ける様に、ともすれば助けを求めるかのごとく手を伸ばすように、震えながら動かす。

「こいつは、強制的に!! セカン、シフ…グアアア!!! 制御が…!! 効かねえ、暴走してツ!!!」

「イーリ!! 今助け——」

「避けるオオオツ!!! ナタアアアアルツツ!!!」

掌からエネルギーが収束しレーザーの様な物が撃ち出される、咄嗟に回避したナターシャの背後で遮蔽物として存在していた建造物にも見える壁の表面が融解していた。

『社長!! 緊急事態です!!! ISが! 残存していたIS残り約80が…!!』

『一斉に二次移行しました!!!』

それを聞いた麗羅が困惑の表情を浮かべる。

「まさかッ！　なんでこんな事を?!」

「束ちゃん!!!」

INFINITE STRATOS 『限界無き成層  
圏』

「ふふ、あはっ……っはあ……」

中空に浮かぶ幾つものディスプレイをともすればうつとりと、愛おしそうに眺め、まるで嬌声のような笑い声を洩らし、ほう、と息を吐く女性。

しかしその表情、その声から想像も出来ぬ程に、まるでチェーングンの速度のようにキーボードをタイプする。

「凄い、凄い凄い……ッ!!」

篠ノ之束、彼女はただ100に満たない小さな数字がゆつくりと、時間を掛けて増えていく様を眺め、乱雑に流れていくコードをほぼ無意識的にキーボードを叩き続ける事で追っていた。

「アハッ、アハハハッ！　今、凄く楽しいっ!!」

最初は全世界がカロードを攻撃していると聞いて憤慨した、舐めた真似をしてくれる。

ISを外部から操作してむしろ馬鹿な事を思いついた奴らを、思い上がった凡夫どもを逆に一掃してやる、とさえ考えていた。

だがその動きはぴたりと止まる。

ハッキングの進行率は依然として0のままだが処理が思ったよりも遅い、自分の想定よりも確実に、遅かったのだ。

ふと、魔が差したとでも言うのだろうか、少し、ほんの少しだけカロードへのハッキングを試みた。

目に見えて分かるほど、処理が遅れた、それを感じた束はぞわりと良く分からない物が背を駆け上がるのを感じる。

駄目だ、こんな事をしちやいけない、麗羅さんに迷惑を掛けちゃいけない、私はまた、棄てられてしまう。

そう、どこか冷静な部分が叫ぶ、だが指はその動きを止めてくれる事はない、それどころかただ速く、荒々しく、まるで興奮しているように言う事を聞かない。



目今の数値は先ほどよりも遙かにゆつくりと、それこそ一分に1%増えるかどうかという速度で、しかし確実に増えている。

「勝てる!! 今なら、今この時なられーらさんに勝てる! あはははっ! 凡夫どもも馬鹿にならないね! 塵も積もれば何とやら、つてよく言ったもんだねっ!!」

東は決して自惚れる事はない、今までの自惚れていたような言葉は彼女にとつての事実でしかなかった、世界中の人間など、自分が認める人間以外など塵芥のように、否、それ以下でしかなかった。

東は自惚れない、自分だけではどうあつても麗羅を超える事など出来ない、それを知っているからこそ、今この時にこんな事をしているのだろう。

「東……さま……?」

静かに自動ドアが開きモニターの光だけの部屋に新しい光源が現れる、東はその方向をチラとさえ見る事はない。

怯えたような、小さく震えた声を東はしっかりと捉え、息を短く吐くかのような笑い声を上げた。

「アハッ! 見て!! 見てクーちゃん!! 東さん、れーらさんに、れーらさんとツ!! アハハ、アハハハアツ!!」

幾つものディスプレイに映るのは膨大な文字列、侵攻率を示すバー、そしてカラード周辺で戦うISから拾われた狂った笑い声、凄まじい怒声、地獄と言つて差し支えない映像だった。

「ち、が……こんな………こんな……! 違います……!!」

「ホラッ、凄いでしょ?! 東さんが、私が!! れーらさんと同等に!! それ以上に戦つてるんだよ!!」

「アハッ! アハハハ!! アーッハハハハッ!!」

東はただ、生まれて初めて『誰かと一緒に』遊んでいるだけだった。全力で、全身全霊で、ただ我武者羅に。

「今なら!! 『今』ならっ!! 『今この時なら』れーらさんに勝てるんだあ!!」



からだ。

「王大人、真改殿が数的不利な状況に陥っております、片方だけでも注意を引けますか」

『分かった、やってみよう』

「あ、の……」

少女が小さな声で通信相手を呼びとめる。

『…リリウムか、今は忙しい、後にしろ』

「リリウムも！ リリウムも、出して下さい！ 王大人、どうか…!!」

『駄目だ』

にべも無く、ただ否定。

「ですが！ リリウムもリンクスで、ランク21です!!」

『実操作経験が無い、出せる訳が無からう』

「模擬戦闘のランクは10位以内です!!」

『だからどうしたと言うのだ』

突き放すような冷淡な声、感情の感じられない声、しかし、少女、リリウムにはそれが何の為なのか、よく分かる。

手間だ、手間だ、と言いながらも少女に物を教え、与え、親代わりとしてきたこの老人が、何を思い、突き放そうとしているのか。

それはただ一つ「心配しているから」と言う事に他ならない。

「……王大人…、リリウムは、リリウムはもう、家族を失いたくないのです…!!」

『………ならん、私に、面倒を掛けるな、私は忙しいと、そう言ったのだぞ』

「いいえ、リリウムは…リリウムは出ます、リリウムは悪い子です、反抗期なのです」

『…、の…!!』

「何と言われようと、リリウムは引きません、ですので…先に、言わせて頂きます」

決意を持った目を通信画面へと向ける、向こうにその表情は伝わらないし、向こうの表情もこちらには伝わらない、だからと言って形だけを繕うような不誠実な少女では無い、リリウムは、素直な子だった。





時間は……20分程度です』

ヘルメットの中でリリウムが目を見開く、それは小さな少女にとって信じられないほどの現実だった。

「たった、20分」

『はい、たった20分です、その上、それを過ぎた瞬間恐らく、1分集中力を維持する事さえ困難になるでしょう』

ギユツと唇を噛む、想像した以上に、実操作経験が無いと言うのは、響く。

『「たった」一分が「やつと」一分に変貌する事を、お忘れなく……ですが、御心配いりません』

視線を上げ、通信画面の映像を見ると、白いひげを蓄えた男は柔らかな笑みを浮かべていた。

『何と言ってもリリウムお嬢様なのですから、じいは、あつという間に終わらせて、無事に帰ってくるかと信じておりますとも』

「はい！ ありがとうございます、じいや」

『…ふふ、リリウムお嬢様に、はじめてじいやと、呼んで頂けましたな、このじい、もう心残りはありませんね』

「駄目です、そんな事を言っただけじゃありません、めっですよ」

人差し指をぴんと立て、叱りつけるような声を出す、その声に、老人は小さな笑い声を洩らし、大きく頷いた。

『そうですね、その通りで御座います。じいにはまだ沢山やり残した事がありますとも……それではリリウムお嬢様、よろしいですか？』

「はい、大丈夫です」

ひとつ、息を吸い、操縦桿を握りしめ眼前のディスプレイを睨みつける。

「リリウム・ウォルコット、アンビエント……出ます!!」

ハッチが重い音を立て開かれると追従するように、アンビエントのブースターが青白い火を噴き、徐々に加速していき、ぴたりと動きを止めた。

アンビエントとの接続ワイヤーがピンと張り、ブースター出力が上昇する。

エネルギーコアの循環数が最高値一步手前へと到達したとき、「じいや」より通信が入る。

『接続ワイヤー、切り離します。3・2・1、切断』

最後の言葉と同時に、太さ一メートルものワイヤー数本がアンビエント側の根元より切り離され、最高出力を維持したままのアンビエントが音の壁を叩き割る凄まじい爆音と共に外へと飛び立った。

「ッ……!!」

「……リリウムお嬢様、どうか、御武運を……」

グン、と急加速が終わり、安定した速度へと変化する、確かに、それはシミュレーターでは感じ得なかった感覚だ、カロード謹製の対Gスーツが無ければ今頃潰れていたとて可笑しくない程の暴力的な加速を前進が押し付けられるような感覚で留まる。

しかしそれでも肉体的な負担、ストレッチャーとなり、確実に、ジワリジワリと蝕むが如くリリウムの行動可能時間を削っている。

「行きましょう、アンビエント」

ライフルとレーザーライフルを前方に突き出すように構えると頭部のカメラが緑光を放ち、一点に絞るよう収縮した、それはまるで獲物を定めたスナイパーのように。

肩部ECMが扇を広げるように展開され、強力な電波をその扇の間々より電光と共に発生させる。

ネクスト、引いてはアーマードコアと言う物はそれ単体で一戦力であり、強力な兵器だ、だが何も全てが強力な自己主張で相手を殲滅するものではない。

ポール・オブライエンの操る『警備部隊1番機』が狙撃による戦闘支援を得意とする様に、アモアの操る『エンドボム』あるいは『バースボム』がロケット主体による制圧支援を行うように。

このBFFのリリウム・ウォルコットが駆る『アンビエント』もまた、それ単体が強力な戦力を持つ『狙撃機との作戦を想定した』支援機なのだから。

周囲、決して狭くない範囲でECMによるジャミングが発生し、敵ISのレーダーに遅延が発生する。

ACとISにはサイズ差とある一点を除きそれほど大きな差はない、火力であればACのアセンブルや、武器の選択に左右され、速度も千差万別、また防御力でもパイロットの命だけを絶対を守るか、また戦闘限界値の差だ。

だが全体的な平均値で見るとACに大きく軍配が上がる、しかしただ一点、ACがISに遠く及ばない物がある。

それは『索敵性能』のただ一点だけ。ACが地球上の限定作戦区域のみでの限られた空間で行動することに対し、ISは無限とも言える宇宙空間においての活動を基礎として作られた物だ、言うなれば成層圏と言う小さな惑星での小さな領域をISに限って限界なく広げる、それこそまさに与えられた名の由来『Infinite Stratots 限界無き成層圏』。

レーダー機能の遥かに劣るACによるECMの効果は決して大きくはない、相手のレーダーにノイズを与える事も出来なければ友軍のレーダーの反応を消す事も叶わない。

しかし、確実に1秒もの『遅延』を発生させる。

そのたった1秒の遅延は高速戦闘を行うISにとってはあまりに大きすぎる致命的な物だった。

レーダーを確認し、ハイパーセンサーによる視認後、行動を開始するという、ISのサポートによって間隔が引き延ばされた刹那のサイクルが大きく崩される。

大きくコレと言う事も無い一機のISを見る、パイロットがケタケタと笑い声を上げながら愉しそうに大型のブレードを振り回している、相手をしているのは桜色のAC、シリエジオ。

大きなダメージらしいダメージを受けることなく的確に回避し、攻撃し、ただ正確に『二対一』の数的不利を戦い続けている桜色のAC、流星は最初期のリンクスだと脳裏に浮かぶも押しきれている訳ではない、早急に対処する必要性があった。

「スミカさん、近接機を一機引き受けます」

『ウォルコットか、助かるが、大丈夫なのか』

「勿論です、お任せ下さい」

言葉と共にライフルとレーザーライフルの銃弾が近接戦闘を行っていたISに吸い込まれ、紙一重でそれを避けた。

数瞬目がぐりぐりと動き、ぎゅろりと開かれ、視線がアンビエントを、リリウムを貫く、その口元は楽しそうに歪んでこう動いた。

「ミッ ツ ケ タ」

ぞわりと背筋を嫌な物が駆け抜けるも、逃げる訳にはいかない、あくまでリリウムの仕事は十全にACを扱う事、支援機であるアンビエントの性能を100%以上に発揮することなのだから。

ISが中空で姿勢を低くし、ブレードを両手で握りこむ、何が来るかは一瞬で理解出来た。

「…来る…!」

「イヒイヒヤアハハア!!」

凄まじい速度で光を引きながらアンビエントへと向かうも、リリウムは揺らぐ事はない、初めての实战であろうが、相手が人であろうがISであろうが、ましてや二次移行してようがリリウムには関係が無い。

後ろへとクイックブーストを使い、引き、銃弾を吐き出す。

ISの瞬時加速は途中で曲がる事が出来ない、否、途中で曲がるような技術力を持つパイロットが一つまみもないのだ。

だが、完全に何かのタガが外れたパイロットにとっては銃弾など雨粒と同じような物ではない、故に、一切の躊躇なく全弾身に受けながらアンビエントへと迫る。

とは言えども所詮は直線でしか動く事の出来ない移動法、避ける事など一度横へとクイックブーストすることで事足りる。

ただ、冷静に、いつも通り、人形を相手にするように、数少ないシミュレーターでいつもしてきた事をするだけ。

「逃げないでエ!!! よおおおおおッ!!! イヒヒヒイ!!!」

「王大人」

相手が急停止しながら反転、一瞬動きを止めた直後、リリウムが眩くと同時にISパイロットの頭部にスナイパーキャノンの砲弾が突

き刺さり、横方向に高速回転しながら吹き飛ぶ。

「ア、ガ…えエ？ な、にい？ 誰？ 誰？ 誰だれだれだれだれエエエ?!」

空中で態勢を立て直し、まるで鼻を連想するように首を回し、周囲を確認し、狂ったように声を上げた。

再度、一点へただ笑みを張り付けた人形のように目を向け、口元を大きく歪めた。

「そこオ？ いひ、イヒヒヒヒヒイツ!!! そこオオオオオツ?!」

「行かせませんよ」

背部追尾ミサイルのサイロが開き、白煙を引いてミサイルが打ち出され、続くようにライフルとレーザーライフルのトリガーを引き込む。

ISの移動予測地点、そしてその予測回避地点へと、さらにその予測回避地点と幾重にも重ね、銃弾を放ちISの移動、攻撃、ほぼ全ての行動を阻害する。

「アアアアアアアアアアアアアアアアツ!!! うつとおしいいイイイイイいなアアアアアアアア!!!」

王小龍へと向かっていたIS操縦者が叫ぶのに呼応して握っていたブレードがまるで鉄塊を想い浮かべるほどの大きさの大剣と変化した。し迫り出したエネルギーブースターに電光が奔り、眩い黄の光が瞬いた。

大上段に構えたまま凄まじい速度でアンビエントへと愚直なまでに一直線に飛ぶ。

まるで溜めていたかのような電光が赤雷へと変化し、その刀身を包み始める、いくらACとてあんな物が直撃すれば無事では済まない、一撃で落ちる事はないだろうが致命的なダメージを負う事は免れない。

だがリリウムは引かない、それはプライド等と言うものではない、それが支援機としての役目だからだ。

アンビエントの支援機としての仕事とは？ 敵機の邪魔をする事、否。ジャミングによる友軍支援、否。

それは単純明快な事、 困だ。

つまり、今この時、数秒後にはISの握る鉄塊が叩きつけられたとて、それが攻撃のチャンスとなるならば、何一つとして問題はない、もつとも。

「ブツ潰ウウウウウ ツが?! えあ…?」

「他愛もない、よいのだぞ、 貴様」

その凶刃がリリウムに届く事はないのだが。

もし仮に、ISが万全の状態であったなら落とす事は難しかっただろうが、今は万全ではない。

アンビエントのECMで発生したわずかな遅延は、確実にISにとっての致命傷だった。

「次に、行きましょう」

「無理はするな、リリウム」

「まだ、問題ありません」

レーダーやコンソールの数字に視線を流し、一言呟いてペダルを踏み込んだ。

「あと、15分……!」

く く く く く く く く く く く く く く く

「ハッ……ハッ……」

『もういい、リリウム下がれ』

「まだ、行けます……まだ……!」

『リリウムお嬢様、もう限界です! もう30分です! 十分です、十分ですとも!!』

たった数秒が数分にも、たった一分が数時間にも引き延ばされたような感覚で、しかしながら極限状態を維持するようなものではない、ただただ苦痛がリリウムを絞めつけ、蹂躪する。

脳に棒でも突き入れ掻き回されているのではないかと錯覚するほどの激痛が走り、目の奥に重く感じる激痛で瞼を閉じてしまいそうになる。

「まだ……! まだあ……!」

この長時間の戦闘行為でアンビエントは幾度もプライマルアーマーを抜かれ、機体の装甲を削っていた、もつとも、それはアンビエントに限らず、この戦場に出ている全機がそうなってしまっているのだが。

酷い物では片腕を失い、スラスタを大きく破損させ、騙し騙し戦闘を続行している機体もある。

「ま……えっ……!!」

アンビエントはもとより、リリウムも既に限界を超えている。

その都度その都度、攻撃をされる度に攻撃方向を口で確認しながら回避してやっとう行動できる状態にまで陥っていた。

正面よりのマシンガンによる攻撃を横への二連続クイックブーストで回避、残り数少ない弾が込められた武器を敵ISに向けトリガーを引き絞る。

再度、位置を調整するためクイックブーストを噴かせようとした時、リリウムは致命的なミスを犯した。

レーザーライフルのトリガーから指を離さない連続使用、クイックブーストの短期間連続使用、つまりエネルギー不足による行動力の低下。

エネルギー管理が全てとさえいわれるACによる初歩的なミス、限界を超えた精神により発生した致命傷。

「あ、そんな……うご、いて……アンビ……エン……ト……」

だが、冷静に対処できるほどの余裕など、今のリリウムには一切なかった、何度も何度もクイックブーストのペダルを踏み続ける。

彼女の頭にあるのはただ一つ、これ以上家族を失いたくない。

リリウムにとって何よりも恐ろしい事はカロードの誰かが、大事な人が死んでしまう事、彼女の前から姿を消してしまう事、その想いがリリウムの限界を超えてなお突き動かす力だった。

それが今、バツンと、切れる。

眼前のモニターではたった今相手にしていたISがこちらに向かって大型のロケット砲を放った瞬間だ、今の動けないACでは間もなくPAに突き刺さり、爆風がアンビエントを叩き、破壊するであろう

うことは容易く想像できる。

限界を超え、あらゆる意志を吐き出し尽くしたりリリウムは、まるで抜け殻のようにゆっくりと迫るロケットを見つめていた。

ああ、もう、終わりなのですわね。

リリウムは……それでも、家族の誰かがいなくなるぐらいならリリウムが消えた方がよっぽどマシです。

でも、でももし、最後に願いがかなうのなら。

会いたい。

「セシリア……お姉さま……」

引き延ばされ、やけにゆっくりと大きくなっていくロケットはまるで大きな花火のように爆ぜた。

蒼いレーザーに貫かれて。

アンビエントを衝撃が打つ、しかしそれは決してPAを抜くほどの物ではない、リリウムは一瞬何が起こったのが理解できず、ただ呆けた。

ただ後に続く言葉でリリウムの願いは叶ったと、おぼろげに思う。

「リリウム、ですわね？」

ふわりとアンビエントに背を向けて艶やかな金髪を靡かせた蒼いISが眼前に現れた。

「あ、あ……!!」

「そうでしょうか？ 返事をしてくれないと、お姉様は困りますわ」

優しい微笑みを浮かべながらアンビエントへと振り返った、それを見て漸くリリウムは理解し、呼応するようにぼろぼろと涙が零れ始めた。

しかしながらハツとして声が外へと聞こえるようにコンソールを操作する。

『おね、お姉……さまあ……!!』



ハツとした表情を浮かべたセシリアが直ぐにまるで安心させるかのように再度笑みを浮かべる。

「やっぱり、リリウムでしたわね、わたくしの勘も、中々ですわ」

さて、と呟いたセシリアはISへと向き直り手に握るライフルのグリップを潰すのでは無いかと思えるほど強く握った。

今のセシリアは以前の彼女が見れば「はしたないですわ!」と言って卒倒したかもしれない。

まあ、つまるところ、セシリアは外見なんて一切気にせず、かなぐり捨てるとどだった。

「リリウム、ここはお姉様に任せて、下がっていなさいな」

簡単に言うと、ブチ切れていた。

「貴女が、いえ…貴女方が、わたくしのたった一人の妹を、わたくしの何よりも大事な家族を、リリウムを…痛め付けた、傷付けた…張本人ですわね?」

声が震えるほど、どうしようもない程の怒りと共に言葉を吐き出し、眼前を睨みつける。

強い意志を持った主、セシリアに伝えるようにブルー・ティアーズはここで一つ、大きな成長をした。

セシリアを眩い光が包み、そのシルエットを変えていく、カラードに敵対したISが異質な二次移行だと言うのなら、セシリアのブルー・ティアーズは確かに正当な二次移行、IS操縦者の望む高みの一つへとセシリアは今、踏み込んだ。

セシリアは愛機が自分に応えてくれた事に大きな喜びを抱き、相対するISに深い怒りを持ち、また、怒りと言う原動力で進化させてしまった愛機に少なからず申し訳ないと感じていた。

だが、自分の想いに応えてくれた愛機の想いを無駄にはしない、ただまっすぐにそれを扱う。

姿を変えたブルー・ティアーズはまるで騎士鎧を想い浮かべる姿をしている、しかしてその過剰にも見えるスカート装甲はほぼ全てビット兵器となっていた。

「貴女方の円舞曲はこれにてお終いです。ここからはわたくしの奏でる葬送曲で」

ゆつくりと右手を上げるセシリアに並ぶように『12』ものビットが追隨する。

「踊れ」

冷酷ささえ感じる声でそう宣言した直後、セシリアを含み13の攻撃を相対したISは浴びる事となった。

歪な二次移行による強制的な変化、それは必ずしも確実な強化となるものではない、主とは異なる情報さえも蓄積された結果無駄さえも表に現れてしまう物が正当に主の為に姿を変えた物に敵う筈はない、例え相手が国家代表で、自分が代表候補であつたとしても。

ましてや心と意志を持つISが強い想いでブーストされている現状で、それらが無視されたものに、1対1で負ける筈が無い。

だが、流石はこれほどに生き残った精鋭と言つたところだろう、圧倒的不利でありながらも致命傷は確実に避けビットを破壊しようとその手に握る武器を様々に換えながら攻撃する。

ライフル、マシンガン、ショットガン、ブレード、グレネード、ミサイル。

各種適した距離、適した配置、最も効果の高い攻撃を繰り返す。

しかし、騎士団のように統率のとれたビットはまるで意志を持つように対処し、回避し、迎撃し、防御した。

状況は大きく傾かない、数が多いとはいえ1対1、じわり、じわりと押しているが天秤が大きく傾く事はない。

『ガラ空きだぞ、貴様』

セシリアの相手をしていたISの背部スラスタが弾け飛び、一瞬の間を逃さぬと13の銃撃がISに突き刺さつた。

『すまないな、邪魔をさせて貰つた』

「構いませんわ、そのような小さな事を気にするほど英国淑女は器が小さくありませんの、それよりも」

ちらと背後のアンビエントを見る。

「リリウム、お下がりなさい。たつた今からわたくし達IS学園は、カ

ラードを支援致しますわ、だから後はわたくし達と大人にお任せなさい」

『セシリアお姉様、どうして、だって、ISは……』

「そんなの、決まっているでしょう？　大事な家族を守るため、あとついでに……友人を助ける為ですわ」

まるで誇らしげな笑みを浮かべたセシリアに自然と、リリウムは口元に笑みを浮かべた。

『セシリアー！』

そこで突然、セシリアの耳に鈴音の焦ったような、急ぐような、叫び声のようなものが聞こえ、セシリアはそれに対し何一つ焦ることなく武器の持たぬ左手を掲げる。

「プライウエン」

その言葉と共に姿を現した機械的な大盾が今まさにセシリアに突き刺さろうとしていた榴弾を受け止め、破片や爆風からその身を守った。

『おらブツ潰れるオ!!』

その榴弾の射手に紅紫色の光を引きながら乙女に有るまじき言葉を吐きながら双天牙月を叩き付け、一機のISを撃破、自らが巻き起こした粉塵から飛び出した少女はスツキリした！　と言わんばかりの清々しい笑みを浮かべていた。

「はしたないですわよ」

「アンタに言われたかあ無いわよ」

その言葉に対し「確かに」とセシリアは頬に指を当てながら一つ呟いた。

「確かに、じゃないわよ。さてと、IS学園1年2組、凰鈴音　これよりカレードの支援に入ります。ってね」

『助かる、凰鈴音と言ったな、そちらの識別信号をくれ、こちらのも渡そう』

「はいはい、どうぞ。親友助けに来たんだから徹底的にやるわよ」

『信一郎様は、よいご友人に巡り合えたな……』

「でしょ？　あたしもそう思う」

鈴音が双天牙月を構え直し、ちらとセシリアを見て小さく呻った。  
「いいなあ…二次移行…」

「あら、でしたら自分のISにお願いしてみればどうです？」  
ふふんと鼻で小さく笑いながらセシリアが自らのISを撫でる。

「…そうね！ お願いっ！ 甲龍、力を貸して!! ……ダメ？」  
両手を合わせ拜むような形で、しかしとても軽い様子で鈴音が祈った。

すると、仕方がないな、と言わんばかりに甲龍が姿をゆっくりと変化させ、主の願いに答える。

「できた！」

「できた！ じゃありませんわ?!」

さもありません。

「ちよつと！ 箒！ シャルロット！ ラウラ！ 朗報よ！」

「なんだ！ こっちは、くつ！ 忙しい！」

「手短に済ませてね！」

「重要なことか？」

「多分今ならISにお願いしたら二次移行できるわよ！」

「バカは休み休み言え」

「こんな時に冗談?!」

「ふむ…」

「できたもん！」

涙目である。

『おお！ 私の声に応じてくれたか、シュヴァルツェア・レーゲン！』

いや、Tief Schwarz<sup>漆</sup>のWalker<sup>豪</sup>Wolkenbruch<sup>雨</sup>、共に行くぞ!!』

『ええ…』

『うそでしょ…』

さもありません。

『すまん、誰か!!』

突如、焦燥した一夏の声が全員の耳に入り、全員の弛緩した空気が締まった。

『シンの姿を見なかったか?! 全く見当たらない!』

セシリアがビットをぐるりと周囲に回し焦点を絞るとゆつくりと首を振る。

『こちらティアーズ、確認できませんわ』

『甲龍よ、こっちも見えない』

次々と否定の言葉が紡がれ、一夏が落胆した声でそうか、と告げた。

『あー、あー……つと、つぶねえな! ったく、聞こえるかな? 織斑君?』

通信の割り込み、とはいえど暴力的な方法ではなく、登録されたクラウドの識別信号から発信された声だ。

その声は彼らの友人の声に似ている。

『あなたは、シンのお父さん……?』

『そ! 時間無いから用件だけね、シンは今さるクソ野郎どもの本拠地に簪ちゃんを助けに殴りこみんでる最中だ』

男が告げた「さるクソ野郎ども」、はつきりと明言された訳ではないが彼らは皆その正体に勘付いた。

『……亡国機業』

『知ってたかあ、それで織斑君、君に謝らなければいけない事がある』  
トーンが一つ落ち、真剣な声で謝罪を意味させる言葉が吐き出される。

『…マドカちゃんも、シンと共に居る』

一夏の息を呑む音が、全員に聞こえた。

『……マドカは、あいつは優しい子です、人に危害を加えた事を、ずっとずっと後悔するような、口は悪いけど、優しい子です。だからきつと、マドカが行くと言ったんでしよう』

『君が望むなら、IS用の試作型VOBがある、それで向かうと良い、これも試作だがIS用予備エネルギータンクもいくつがある』

一夏は口を噤み、押し黙った。

自分の心は今すぐにでも行きたいと思っている、妹であるマドカを、親友である信一郎を助けたいと、そう心が叫んでいるが、頭はここにいななければいけないとも考えてしまっている。

対ISSの最強兵器とも言える零落白夜が自らの手にある、ここに残れば恐らく、複数との協力により容易く危機を脱する事が出来るだろう、と。

『……はあ』

ひとつ、呆れたように息が吐かれた。

『一夏アツ!! 男なら迷うなツ! 自分の心に従え!! 私の惚れ込んだ、私が愛している男は、織斑一夏なら何と言うツ!!!』

篠ノ之箒、迷いを捨て去り、自ら選択することを是とした少女が声を張り上げた。

『ツ! お、俺……! 俺は行きたい! シンを、マド力を助けたい!!』  
『そうだ、それでいい! 最高だ一夏!』

フフ、と小さな笑いを零した少女は誰にも聞こえない声で「濡れてしまいそうだ」などと口走ったが、誰の耳にも入らなかったし、入ったとて彼女が発したなどと露ほどにも思わないだろう。

『で? 箒はどうすんの? 行くの?』

『いや、私はここに残る。ここでしなければならぬ事があるんだ、一夏と私は相性がいいんだろうが、私は私の選択をする』

『へえ、いい女じゃない?』

『だろう? 私もそう思っている』

今までだと決して行われなかった篠ノ之箒本人による軽口、それが本当に彼女は変わったのだという証に思えた。

『お前は どうする? 凰』

『アタシ? アタシも残るわ、夫の帰りを待つ妻よ、余裕ぶっこいて待ってるわ、それに、アタシもちよつと自国の奴ブツ飛ばしとかないと示しがつかないわ』

『わたくしも、ここに残ります。リリウムを守るために来たのですもの』

『シンはどうすんのよ』

『あの籐ヶ崎さんがそう簡単に倒れるものですか、か弱くて可愛らしいリリウムの方が、危ないに決まっていますわ、それにわたくしは一夏さんを信じてますから』

『ボクらも待つてるよ、シンは大丈夫だって信じてる、だからシンの帰る場所を守らないとね、あと僕も正妻の余裕っていうの？ 一夏を待つから、帰ってきてね、早々に未亡人とかボク嫌だよ！ 一夏が貰ってくれなかったらボク一生誰とも結婚しないからね！』

『嫁を信じるのも夫の役目だ、私も、ここを守る。それに私の新たな力はここでこそ生きるからな！』

皆の意見が出そろった、それは少女達の想い、愛する者を想い、支える事こそ彼女達の選択だった。

『そうか、わかった、俺は行くよ。皆、帰ったらまた、俺の家で皆で騒ごうな！』

『織斑君、準備は出来た、オペレーターの指示に従ってくれ』

『はい、よろしくお願いします！』

『ああ、うちの息子を頼むよ、織斑君。それとパーティー会場はこつちが都合しよう、学園の友達も呼んで皆でするといい』

少年が纏う白く輝くISが一機、カレードに向かって一直線に飛んだ。

## 最新型キャラクター及びマシン設定

よく出てくるオリジナルキャラクターやメカニカルなどを資料として纏めた物。

自分用であるとともに「なるほど、このキャラはこんな設定なのか」と理解していただければ幸いです。

また、初期から変わってしまった設定などもここにあります。

時間軸は亡国組加入後となっております。

メインキャラクター

主人公

『とうがさきしんいちろう 籐ヶ崎 信一郎』

男 16歳 誕生日4月7日

転生者、前世89歳、前世既婚

一人称：俺

二人称：あだ名

身長：185cm 義足を外した場合87cm

体重：143キロ 義手義足を外した場合58キロ

外見：イケメンではなく三白眼と眼つきが怖くパツと見極悪人

左腕および両足が義足でなお見た目がよろしくない

生身は筋骨隆々としてその体も顔含め傷だらけ、特徴的なのは顔の眉と顎にある傷、胸の中心にある大きな傷、あとは義肢との接合固定部の傷

髪は後ろに適当に撫でつけているだけがかつ元々若干天パの気があるので所々跳ねている、また白髪も増え自分の身嗜みに気を向ける余裕がないので髭も生えている

スペック：身体能力は高いが特定の物を除き技術があまりないので優れた能力を持った相手には素の技量では敵わない

生身の力も一撃で相手をダウンさせれるほどにあるがそれ以上に義肢の力が化け物染みている

車を蹴り飛ばしコンテナに穴を開け鉄筋コンクリート壁をたやす



く破壊する

義足は最初期のデザインのまま、義手は新デザインに、つまるところオリジナルに

色盲で色が一切分からない、全て白と黒のモノクロ世界になってしまっている

実は第二子

その他もろもろ、どうなのと聞かれば出るけど自分で捻り出すには困難

能力：あらゆる物体・概念問わず創り出し、変化させる能力

現在使用する際に正気を保てないほどの苦痛が発生する為使用を控えている

この苦痛により脳に異常な負担が掛かり色盲となった

オリジナルキャラクター

『とうがさき 籐ヶ崎 れいら 麗羅』

女 39歳 誕生日未設定

転生者、前世17歳、前世未婚者

一人称：私

二人称：部下には呼び捨て、その他はくくさん くくちゃん等

身長：142cm

体重：秘密（未設定とも言う）

外見：アルトネリコのシュレリア、小柄で白銀の髪を持つ可憐な少女（見た目）

スペック：世界最高の頭脳を持つ天生（読んで字の如く天で生まれた）の天災、ただその反動なのか何なのか、兎に角非力、想像を絶する非力、場合によっては小学生に劣るレベルで非力、赤子の手を捻れない非力

既婚者かつ子持ち、主人公の母、夫と息子を何よりも愛していて悪意を持って危害を加えた相手は死ぬよりも酷い目に会う

信一郎が生まれる2・3年前20歳の時第一子を流産しそれがトラ

ウマとなっている

なお、生まれる筈だった子供は女だった、その一年後AIであるI—CFF—SERREを製造し信一郎が生まれる半年前に人工衛星として宇宙へと飛ばした

能力：見た物の理論の完全理解 波動科学の完全理解 世界最高の頭脳

あらゆる物体を見ただけで原理や構造、理論などを完璧に理解できる、特許非申請の大敵であり全知の一端

波動科学を使用する為に特殊な機械を作らなければならないがそれを作る為の素材が存在しない為完全にデッドスキル

世界最高の頭脳、神より与えられた強制的な進化に近い物、最初期より誰も抜かす事の出来ない頭脳を持っているのではなく現状の最高頭脳である為それに追いつく物が出てきた場合は追いつかれないように強制的に知識を詰め込まれる、篠ノ之束と言う凄まじい天才が出現し麗羅が20になって、子を身籠ってしばらくしてから凄まじい成長を始めた為無理矢理詰め込まれる知識による苦痛の所為で流産してしまった

オリジナルキャラクター

『IBIS (I—CFF—SERRE)』衛星時

女 稼働年数18年（人工衛星としては17年） 製造日12月24日

一人称：私

二人称：くく様

全長：120メートル

重量：約280tただし月など重力の弱い限定空間に限る（震え声

外見：ACSLの空飛んでるアレ

スペック：軍事人工衛星、巨大なレンズのようなレーザーキャノンを搭載している

レーザーシステムのCIWSを搭載、スペースデブリを消滅させる戦闘能力は高く一撃でISを屠れる衛星砲を放つ事ができ、そうで

なくともカロードに保管されている無人ACを何千機と同時に操作し、敵を蹂躪する（アイアンマン3のジャービスが無人アイアンマンを大量に同時制御していたのをイメージしていただければよい、見た事が無いなら見てみることをオススメする）

ただ一機一機がISに匹敵するので戦闘ではなく読んで字の如く蹂躪である

また対少数（20までは少数）として特殊なACも操作する  
思考能力は高い

ただし本気の篠ノ之束には劣り数千数万の同時ハッキングを食らえば防衛機の操作を行う余力が取れない

信一郎のACのサポートもしており特殊なACの内部処理はほぼ全て請け負っている

オリジナルキャラクター

『IBIS（I-CFF-F-SERRE）』人型ユニット時

女 稼働年数18年（人型ユニットとしては1年未満） 製造日1

2月24日

一人称：私

二人称：くく様

身長：170cm

体重：70キロ（そも義体である上に内部に兵器を搭載している為重い、簡易的な反重力発生装置を搭載している為30キロ程度から調整も出来る）

外見：Eカップ結構パイオツカイデーな上に形が整っている、そしてヨーロッパ系の美人な上に引き締まった体に程良く脂が付いているので体のイメージは男性方からしてみれば非常にそそられる体をしている

複数の機能を有したメガネ型のユニットを付けているのでとても知的に見える

髪は黒の長髪で表情も乏しく見えるが家族（この場合カロードの人員）に対してはとても表情豊かに接する、特に信一郎

スペック：極論でいえば上記の衛星時とそう変わらない、と言うか衛星がこの人型ユニットを動かしているだけ

人間では決して成しえない精密動作を行い、信一郎の義肢と同等の出力を持つ、めっちゃ強い

その他：人としての主観的な知識が非常に乏しい、食事も必要時以外一切取らない（と言うよりそも食事が不必要）ので食べてよい物よくない物、可食範囲が分からず普通食べれない場所を戸惑い無く食べる、つまようじおいしいです

擬似的に付加された筈の感情は擬似ではなく本当の感情として存在する、しかし論理的に思考する事が常となっている為第三者的な視点や意見をよく使う

ただそれであつても10年間以上大事に大事に、それこそ目に入れても（物理）痛くない大切な弟に関する事は感情的になつてしまう事が多い、泣いたり笑つたり恥ずかしがったりと多感的な女性にも見える

実は元々感情自体は幼いながらも希薄に存在していた、信一郎の能力によつて一般的な段階まで引き上げられた状態が現在である

と言うのは元々人の脳が衛星の一部に使われている為だ

信一郎自身や本人さえも知らないが本当の名前は「とうがさきれいす籐ヶ崎麗珠」流産した麗羅の第一子、長女である

信一郎にとつて本当の姉であり、麗羅にとつて本当に娘

オリジナルキャラクター

『Francis Battly Curtis（フランシス・バツティ・カーティス）』

女 15歳 誕生日2月7日

一人称：私

二人称：くくさん

身長：147cm

体重：40キロ

外見：いくら対Gスーツを着てるとは言えまるで男の胸板のよう

だった彼女と同じくマナイータ

つるぺたすとい、外見だけ見ると太眉金髪ゆったりフワフワとしたイメージを持つが本来は多感的で感情豊かな

傍から見て何がどう違うのか皆目見当つかないレベルの改造制服を着用している

左手薬指に婚約者から貰った指輪を付けている

スペック：非常に多くの言語を喋る事が出来るマルチリンガル、だが非常に丁寧な言葉遣いになるので所謂スラングでさえまるで敬語のようなイメージがある

「アエエまるで猿みたいに頭の悪い奴だな!!」↓「貴方様はまるでおさるさんのように頭がよろしくありませんね!」

カラードの社員みな家族理論で信一郎に義理の妹のように扱われているし信一郎を義理の兄として慕っている

IS適性B、ISの使用時は代表候補に次ぐ程強いがACになると粗製真つ青な弱さ、余裕で壁に正面から突っ込むし護衛対象を木端微塵に吹き飛ばす

その他：ついでフランのAC「レヴァンティン」の登場が無かった、ぼんやりとしたイメージしか無い

凄まじい瞬間火力を誇る二脚で空間圧縮を利用した空間爆破システムや凄まじい出力の光波を放てる非光波の最大レンジ十数メートルのレーザーブレード、射撃能力を持った大型デコイを周囲に配置する、空間圧縮を防御に利用して弾道を捻じ曲げるなど並みのISを凌駕する能力を持っている

恐らくこの設定は他の物に継がれるだろう

「はいだらー」が掛け声、という初期設定はどこへやら

オリジナルキャラクター

『オールドキング』

男 47歳 誕生日10月4日

一人称：俺

二人称：お前 呼び捨て 信一郎に対しては坊っちゃん

身長：192cm

体重：73キロ

外見：信一郎と同様顔に傷のある筋骨隆々とした男

髪の毛ボサボサ無精髭、クツソ目付きが悪い、ほぼ常に給金の割に安い煙草を吸っている、愛用煙草はピースの21ミリ、黄色いやつ

常に12ゲージ二連水平散弾銃（アンティークレベル）とショートマチェットを腰に吊り下げている

スペック：生身の戦闘では世界最強クラス、信一郎のゴリ押しをある程度矯正してまともに戦闘を出来るようにした張本人、力もあり、技術もあり、ある意味達観した冷静な判断力と思考を持ち、経験も尋常ではないレベルである

古王≧千冬≡束≡楯無≡簪≧信一郎

ACでの戦闘行為では愛機「リザ」の3次元起動の優位性を最大限生かす戦い方を行い確実に相手を撃破する

リンクスランクは3、本人の苛烈な性格とは違う堅実な戦い方を突き詰めている一方死ぬ事さえも目的の一つとしているような戦い方をする

もしも生き抜くための戦い方をしたならばトップランカーに躍り出る可能性も低くはない

暴力的な物言いとは対照的に身内に対しては静かな優しさを持つ

なお既婚者であり妻とは死別している、それが彼の死ぬ事さえも目的である原因だ

元妻の名前は「リザ」

その他：ナターシャに好意を向けられているしそれを理解しているがはたしてその返答はどうなるやら

ナターシャがカラードに入った時最も早く彼女の異変に気付いたのも彼

オリジナルキャラクター

『Lilium Wolcott（リリウム・ウォルコット）』

女 14歳 誕生日4月24日

一人称：リリウム

二人称：くく様

身長：148cm

体重：39キロ

外見：アルビノにも見える白い肌と透き通るような白銀の髪、しかし目は蒼いので単純に色素が薄いだけである

非常に可憐な姿で見る者全てに守ってあげなきやという使命感を抱かせる

しかしその姿からは想像も出来ないほど洞察力や勘が優れていて狙撃手をさせると右に並ぶ物はカラード内でも非常に少ない

すごく華奢だがカラードで改造を施され、軽量化と反動低減されたスナイパーライフルを背負っており頑張っって重い物を背負っているように見えてかわいい

恥ずかしがりやで好きな人や大事な人、知り合いの後ろにちよこちよここと付いて回る姿はとつてもキュート

むっすり怒った顔もぷうと頬を膨らませてじつと見つめて（本人は睨んでいるつもり）くるので凄くぷりちー

スペック：筋力や運動能力は同年代の少年少女に比べて若干劣っている、が許容範囲

元タイギリスに住んでいたので英語は喋れる、日本語も子供特有の吸収の速さであつという間にマスターしてしまった

ACでの戦闘行動は実戦経験無し of ランク21、と言うのも本人への安全性を考慮して回数が非常に少ないうえにシミュレータのみでの物となる、ただし才能の片鱗は開花し始めておりその少ない回数 of シミュレータ戦闘に置いてランクSばかり記録しており、模擬戦闘もランク10以内と同等の戦力を持っている

また武器こそ持っているが実際に人を害した事はなく、傭兵として登録しているのも麗羅がお小遣いを与えるための口実に過ぎない

その他：オルコット家の分家でセシリアの従妹、セシリアの両親が存命の時はセシリアお姉さまセシリアお姉さまとずっと後ろを付いて回っていた、お姉ちゃん大好きっ子

セシリアの両親が無くなった時に会う機会が無くなったのと同時に余波が分家であるウォルコット家にも流れてくる、それを阻止し、加護下に置いたのがカレードだった、なお拾われた理由は麗羅の目に入ったからである

オリジナルキャラクター

『Paul O, Brian (ポール・オブライエン)』

男 30歳 誕生日6月20日

一人称：私

二人称：貴様 くく様

身長：182 cm

体重：86キロ

外見：ワックスで塗り固めたオールバックで冷静かつ冷徹な表情をしている

細身の筋肉質で見た目以上の力を持っている、すっげー小言を言うてきそう

しかし実は激情家で喜怒哀楽が異常なまでに激しい、元々ボロ布を纏って刃毀れしたナイフで金や食料を脅し取るような環境下で育ったためつちや怒りやすい

スペック：カレードの警備部隊隊長、カレードという組織の規模が規模なため過激な連中からよく狙われ、それを迎撃、制圧、根元の排除を仕事とする

対人戦闘能力は高いが型に嵌らない戦い方をする、悪く言えばロクデナシの卑怯喧嘩、しかし路地裏の卑怯喧嘩なら常勝無敗

だがその戦い方に対して計算や予測が非常に上手い、激昂していたとて戦い方を誤る事はなく、一瞬で冷静になれる

12歳の頃麗羅に拾われたのがきっかけで身の振り方や喋り方を改める、がしかし、昔の癖は抜けきらず死ねとか抹殺とかよく言う

また、カレードに、ひいては麗羅に命を捧げる事に一切の迷いを感じないほど恩を感じており保身や慢心等は一切無い

ACでの戦闘行動は主に狙撃を行い、弾道計算をFCSに頼らずこ



なし、百発百中の精度で射撃する

至近距離であってもスナイパーキャノンの砲撃を確実に命中させるセンスを持つ

ミグラントランク2、つよい…

その他：部下に超厳しいがそれ以上に自分に厳しい、根性論は大嫌い、休むべき時にはしっかりと休ませる

趣味は商店街での食べ歩き、食事と言う物を一種の神聖な物として見ている節がある、気にいった物は買って帰り部下に配る、信一郎とよく食べ歩きに出る

お気に入りの場所は大阪の商店街、連休時はホテルを取って数日かけて食べ歩く

太らないのかと女性隊員に聞かれた際体質と答えたらシヨツクな顔をされた、数ヶ月経つが未だにシヨツクな顔をされた理由が分からない

オリジナルキャラクター

『メルヤリリサ・ヴィルタネン』

女 17歳 誕生日8月23日

一人称：リサ

二人称：くくさん くく君

身長：150cm（ヒールを履いているので本来は143）

体重：49キロ

外見：かなり色白でスラツとした外見をしている、目は赤で黒い長髪に白のカチューシャを付けた美人

ここまで書くとき普通だが瞳自体は小さく目を常にカツ開いているのでどこかアブナイようなイメージがある

笑顔を絶やさず敬語で喋り率先して挨拶をするが目はカツ開かれたまま、実際コワイ

スラツとしているが正確には引き締まった体であり意外と筋肉質

スペック：フィンランドの代表候補生、自身はスナイパーだと言っているが銃器全般が得意、一年生代表候補たちよりも強い、そりやそ

うじゃ

保健委員でサブゲー部の副部長、銃を人にぶつ放しても怒られない部活を探していたらサブゲー部に辿り着いた、バスケットボール部とか料理部とか茶道部とかいろいろ回ったらしい、その過程で千冬と遭遇し独特な世界観と価値観を持つリサに対して千冬は友人との既知感と共に苦手意識を持ったとのこと

兎に角隙あらば許可を取って人を撃とうとする、どこか狂った感性持ち、しかし冷静な面も持ち思いやりもある

本国ではシモ・ヘイへの再来と呼ばれている

その他：まずは大きな声であいさつ、相手が困惑してる？知るか  
状況判断能力は高いがそれを全て無視して独創的な世界観で物を見る

リサちゃんマジ（キチ）天使

——登場メカニカル——

『アーマード・コア・オリジナル』

所有者：籐ヶ崎 信一郎

製造者：籐ヶ崎 信一郎

用途：兵器

籐ヶ崎信一郎の持つ専用機ことアーマードコア、ISに似たような全く違う物であり、名の示す通りコアこそがアーマードコアであり、戦闘時に展開する物はただのパーツでしかない

基本的にAC（以後アーマードコアをACと略する）の能力自体は非常に簡単なものであり、無限にも近い膨大な量の物体を量子変換で保管できる持ち運び可能な倉庫、である。

ISのエネルギージェネレーター機能と量子変換機能以外の全てをオミットし、代わりに膨大な保存容量を備えた物、がACだ

しかし、ISに手を加えた物ではなく信一郎がそういう目的を持って創り出した物

その有り余る空き容量を使い膨大な種類、数のパーツ、永遠と垂れ流す事さえ可能と思える量の弾薬、その他日用品、雑貨、ACの追加

データ、等が入っている

また、実の所持機状態と言う物が無く、常に起動し続けているが武装やパーツの展開さえしていなければさほど問題はない

体の設置場所は心臓に程近い左腕接合部位内部、体内である

取り出すには外科手術か信一郎本人の能力を使用するか、それとも無理矢理引きずり出すかしかない

理論や製造方法が不明なオーパーツ

『アーマード・コア・プロデュース』

所有者：カラード（籐ヶ崎 麗羅）

製造者：籐ヶ崎 麗羅

用途：兵器

上記、ACオリジナルの量産型

量産型とは言うが物自体が大きく違う、オリジナルがISとは似て非なる物に対し、こちらはISの発展形である

とは言えどもこちらも搭載している機能はオリジナルと同じで、保管容量が極少量となっているのが量産型たるゆえんだろう

しかし極少量と言えども数百トンにも及ぶ数の少ないパーツであるため、保管容量自体は現状のISよりも遥かに多い

名の通り量産品、販売こそしていないがカラード内で数多く配備されている

材料と機材、施設があれば容易に量産できるが数多くのレアメタルを使用するのは世界の技術がまだ追いついていないので作れるのはカラードのみ

『義腕』

所有者：籐ヶ崎 信一郎

製造者：籐ヶ崎 麗羅

用途：非兵器

信一郎の左腕にくっついてるやつ、太くて逞しくて黒くて硬い。肩の付け根より先がこの義腕でISの適合性を基礎として作られている筋電義手である

と言うのも未だに出力と正確性を両立させた筋電義手が無い為、IS技術を応用した物がこれ、元々、つまり信一郎がまだIS適性を持っていないと思われる頃は普通の筋電義手を使っていた

出力は凄まじく握力はトンに達し、物を殴ればマンホール程度の厚さの鉄板はぶち抜ける

また、レーザーキャノンと実体ブレードが搭載されていて緊急時の護身用として使用できる

レーザーキャノンの出力の元はACなのでACが使用不可な場合レーザーキャノンを使用できない

実体ブレードもそれほど切れ味が良いわけではないが力自体が凄まじいのでそのまま叩き斬れる

ブレード展開時に鋏のように扱う事が可能、どっちかっていうとニツパとかペンチとかに近い

レーザーキャノンは展開時手を二つに分解し横に配置、ブレード格納部を上やや隆起させフレームを斜めに傾け開く、下部のフレームも分離し隆起、コードやらワイヤーやらチューブやら内部機構が展開して排熱を行いながら射撃する。滅茶苦茶ゴチャゴチャしてて面倒くさい

肩も上腕も全碗も基本的にはメンテナンスのために内部を露出させる事が可能な構造になっている

### 『義足』

所有者：籐ヶ崎 信一郎

製造者：籐ヶ崎 麗羅

用途：非兵器

信一郎の両足にくっついてるの、こつこつしてて、ぶつかったら痛そう

股関節よりすぐ義足、これも上記と同じようにIS適性が必要

蹴りの威力はめちゃんこつおい、アラレちゃん基準

嘘です、MBTの主砲をひん曲げれるぐらい、また脚には固定用の小型パイルバンカーと展開型ブレードが搭載されている

あと、若干の滞空が出来るようにブースターも付いている

あ、ナイフも収納されてる

以後 INFINITE STRATOS 『限界無き成層圏』以降のメカニカルやIS等

『パワードスーツ』断頭台への行進

使用者：一般兵

製造者：カラード（個人製造では無い）

用途：兵器

工兵が使用していたパワードスーツ、両肩にガトリングガンが搭載されているタイプ

結構大型でミョルニルアーマーのプロトタイプ程度のサイズがある

頭にほわつとマスターチーフのミョルニルアーマーに似た姿がイメージできればそれで通して頂いても構わない

詳しいビジュアルは決めていないのだ、ただ頭部のメットはミョルニルアーマーみたいな、ともすればジムのようなバイザータイプではある

その大きさに対して腕は小さい、普通の人サイズ、工兵だからね、仕方ないよね

高精度マニピレータでもよかったかも知れないけどこの世界じゃ食通気味なので微異形

両肩のガトリングの口径は20x102mmの6本、ファランクス  
の銃口がそのままついてると思ってくれればベスト

パワーはかなりの物、車一台程度は持ちあげれる

『セシリア・オルコット専用機 ブルー・ティアーズ二次移行型（つま

るところ名称未設定)』

所有者：セシリア・オルコット

製造者：知らぬ、多分イギリスの企業

用途：非兵器（建前）兵器（本音）

穏やかな心を持ちながら激しい怒りによって目覚めた伝説のIS、マジギレしたシスコンの本気に応えて頑張った娘

そういや一番初めに二次移行したのも究極のブラコンだったしー夏もシスコンだった、これももうわかんねえな

あと描写はされていないがちゃんと謎空間でISと対話を行った、ガンダムで言うNTの全裸空間みたいなもん、セシリア、哀しいね……、それユニコーンや、しかもOVAや

と言うのは置いといて見た目は外装が増えてまるで女騎士のような華やかかつクールな見た目に、別にくっ殺はしない

ビットの数が総20以上あるが同時展開可能数は12、全てが個々にガンビット、ソードビット、シールドビットの機能を持っている

ミサイルビット？ ああ、やつあ死んだよ、いい奴だった

なお、幾つもの草釣のようにも見えるスカートは一つ一つがビットの予備みたいなもん

全部なくなったらおぱんちゅ丸見えなのかっていうと別にそんな事はない、無念……

ワンオフアビリティは全てのビットが自律行動、連携行動を取り、敵を蹂躪する『Knights of Round Table 卓の騎士団』別に剣からビームが出たりとかもしないしビットのうちどれかが「……Ar……thur……」とか言ってる襲ってきたりもしない

また、ごく短時間のみほぼ全ての指向性の持つ攻撃を無力化する「プライウエン」と呼ばれる大盾を持つ、全カット率100%耐久力10とかそんな感じ

スターライト自体に変更は無し

『凰鈴音専用機 甲龍・四神』

所有者：凰鈴音

製造者：中国の企業じゃねーの?!

用途：非兵器のフリした兵器

あいつに出来るんなら俺にだって出来る筈だ、そうだろ！俺の声に答えろ、甲龍!! そんな80年代のアツい想いに応えて「しゃーないの、今回だけぞ」と本気を出した娘

でもIS内の感応空間で殴り合いとかはしません、淑女がそんなはしたない事なんて出来ませんわ、80年代ならなおのこと！（トツプをねえ！は除く）

活躍の場こそなかったが至近距離での凄まじい制圧能力が強み

追加ユニットの炎吹ける衝撃砲がデフォになった、不可視化も可視化もお手の物、拡散もするし収縮もするし双天牙月は背部にブースターユニットが出来て大型化した、DMC4のレッドクイーンみたいななの

特殊兵装は同時起動不可の、武器による攻撃力を上昇させる青龍（この際全身が淡く緑に輝く、コジマでは無い）、攻撃に炎を付加し、敵のエネルギーを攻撃により微量奪う朱雀（淡く赤く輝く、韻が良い）、凄まじい速度を発揮し、空中をまるで地上のように走り回る事さえ可能になる白虎（白い）、防御力を一時的に爆発的に引き上げる玄武（黒）ワンオフは上記の4つを同時に発動させる黄龍（黄金の輝き！）

『ラ ウ ラ ・ ボー デ ヲ ヴイツ ヒ 専 用 機

シュヴァルツエア・レーゲン<sup>黒</sup>・ウバーホルン<sup>雨</sup>』

所有者：ラウラ・ボーデヴィツヒ

製造者：ドイツ連邦共和国 正式軍事研究所

用途：兵器

ラウラのよしやってやる、そんな想いに応え姿を変え、相応しい形となり、変な名前（+?漆黒ノ豪雨?+）を付けられかけるも「こんな名前だと絶対にいつかこの子が後悔しちゃう！」と無難な名前にして上げた優しい娘

中二病でも恋がしたい！そんなラウラを優しく見守り隊筆頭のI

S（ISでの総メンバー1人）

なお、ラウラはISに付けようとした名前を拒否されてちよつぷり悲しい、貴女の為なのよ？

姿は全体的にスタイリッシュかつサイバネティックに変化、武骨さは最早無い、また足元やスラストターの根元にウサギさんのマークがあつてちよつぷりらぶりー、レールキャノンは二門に増え、ワイヤーブレードのワイヤー部分がエネルギー化、つよい

あとはシールドも追加されたりと全体的なマイナーアップ、ただワソフがブツ飛んでる

ワソフは未来予知の『アカシックレコード』周囲のあらゆる事象を瞬間的に演算し、未来予知とも言える精度でラウラに伝え、一時的な全知となる

解は『無駄』に収束しているぞ！ 見え透いた解答だな！ 演算の必要もない！ 全知は私だ！私の導き出した解に間違いはない！

その特異性から司令塔に向いている

『カモフラージュ機構を備えたバトルドレス』

所有者：籐ヶ崎信一郎 織斑マドカ オーシエーニ レーゲングス

製造者：カロード

用途：防具

サーモ、エコー、ズーム、等々いろんな機能を備えた頭部パーツと全身を隙間なく覆う装甲板と特殊繊維が組み合わさったバトルドレス、簡易ながらもパワードスーツと同機構が備えられており飛んだり跳ねたりするのに全く疲れたりしないし普通の人よりちよつと力だつて強い

昨今のCODみたいな機動ぐらいはできる、BO2までしかやっつけないけど

戦車砲は耐えられないがバレットライフルぐらいなら耐えられるし足元でグレネードが爆発しても吹っ飛ぶけど死なないし目立った外



傷も無い

ステルス機能は持ってないが周囲の環境に合わせて装甲の表面や特殊繊維が色を変えて周囲と同化する

雪景色で地面にぺたってしてたらまず見つからない、例えば5m以内に来られても大丈夫

また武器をマウントする場所が背中と腰、あとは太ももにあるのでハンドガン以外にも2つ武器を持ちこめる

一応量子変換機能も付いているがどうしても音と光が出るので隠密作戦等にはそのままマウントしていく

ちなみにどんな女性にもぴったり胸にフィットするよう特殊かつ最新の技術が使われている、ブラジャーの代わりにもなる！

男の股間にぶら下がってる物は別にフィットしたりはしない、トランクス一枚あればいいしブラブラするのは慣れてるだろ？

RUSTING STEEL 『錆び付いた鋼』

「ああ、くそっ！ 寒いったらねえぜ、交代まであと何時間だ？」

凄まじい風の音と冷たい白く輝く粒が吹き荒ぶ中、目元さえもゴーグルで覆った完全防寒の男が、手袋に包まれた手をこすり合わせ、アサルトライフルを脇に挟みこみながら隣に立つ男へと尋ねた。

「あー…あと一時間ってところだな」

「冗談じゃねえぜ！ こんなクソみたいな所で突っ立つてるのをあと一時間！」

「本当にな、もう十秒だって待ってられねえな！ すぐにでもくたばっちまう！」

ハハ、と二人で笑ったのを最後にその言葉が現実となった。

ほぼ同時に二人の頭が熟れた石榴ザクロのように弾け飛び、一面に広がる銀世界に赤色の模様を描く。

『仕留めた』

『いいわ、流星ね』

白の世界に突然、マークスマンライフルを手に持った白の人型が姿を現した、頭部の前面上部を起伏の無い球を切り取った様なバイザーで覆い、生身の一切露出しない装甲板と特殊な繊維で構成されたカモフラージュ機能の搭載された細身のバトルドレスだ。

『どこ、から入れる？』

『正門は論外、非常路も整備用の行路もダメ、となると排気孔かしら』

『排気孔なら場所はこつちだ、来な、シンイチロー』

続いて3人の人型が姿を現し、先頭を歩く人型に追従する、一つを除き大小の差はあれど皆同じ姿をしていた。

『…警戒が薄い、な』

その中の両足と左腕の形状が違う人型、信一郎がふと、何かに気づいたように呟く。

『そうか？ 大体いつもこんなもんだぞ』

『周囲に生体反応も無い、何かがあるとは思えんが』

眼前のバイザーに投影されたレーダーを見てそう言ったマドカが

「いいから行くぞ」と前進を促した。

『奴ら、簪を攫ったんだぞ、俺が、いや俺達カラードが気付かないとは思ってな、い筈だが』

そこまで馬鹿じゃない筈だ、と言外に込め背部にマウントしたラージウエポンを横へと移動させ、グリップを握りこむ、それを認識したマウントシステムがラージウエポンを離し右手に収まる。

『内部の情報に精通した私たちから言うとう亡国機業は上から下までピンキリなのよ、そこまでの馬鹿が行動を起こしてたら奪還は簡単ね、でもそうじゃないなら、多少骨が折れるわ』

バイザーの機能をサーマルシステムに切り替え周囲の熱源に警戒しながらまるで滑るかのようなぬめらかに移動を開始する。

移動時間が5分にも満たない間に視界内に巨大な熱源を探知する、通常の視界に戻すと濛々と白い湯気を吐き出すガレージのような建造物を発見した。

『なんだこれは……隠す、気が無いのか……?』

『私達は場所を直接知ってたから呆れ返るけど上空から見たら衛星でも航空機でもISですら探知できないのよ?』

『警備も、監視カメラさえないのか』

『だから選んだのよ……さ、ここから降りるわよ、楽しい楽しいラペリングの時間ね』

堂々と鎮座している巨大な排気孔を覗き込んでなるほどと理解した、単純に下が見えないほど高いのだ。

人4人なら簡単に降りれるが大型の兵器ならば降りる事が出来ず、またISであるならば事前に高性能なリーダーに引っ掛かる、極めつけには人どころか鉄塊でさえ簡単に引き裂くであろう重厚な羽が送風の為に回っていた。

『あのギロチンを止め、る手段はあるのか?』

『無えな』

『でも途中で送電線を纏めてる縦穴に少し逃げればまたそのギロチンの下から降下できるわ』

『そいつは……いい』

そういいながら腰元にあるワイヤーで繋がれたアクセサリを引き出し地面へと当てると小さな空気の抜けるような音と何か突き刺さるような音を立てて固定される。

全員が固定を完了したのを確認し一つ頷いた。

『先行を頼むぞ、レーグ』

『ええ、遅れないでね』

左手でワイヤーを掴みながらトン、と飛び降り、壁に直立するかのよう足に着いた、それを追いかけるように信一郎、オーシエと続く、二人が壁に直立し、周囲を見回した後、最後の一人以外全員が上を見る。

『マドカ、どうした？』

『い、いや…その、な』

『ははあ、もしかして怖いんだな？ 高所恐怖症か？』

『ぼっ、馬鹿を言え！ 私はISの操縦者だぞ、高所恐怖症で乗れるものか！ ただ、生身で降りるのかって思ったら、ちよっと……』

信一郎がレーグを見ると丁度レーグも信一郎に目線をよこしている最中だった。

『……他のルートは』

『どうあっても正面突破になるわ、あまりオススメは……』

『まつ、待て！ 今行く！ 私一人がウジウジして迷惑を掛ける訳にはいかん、行くぞ、行くぞ！』

まるで恐る恐ると言ったように両手でワイヤーを握りながらズルズルと降りてゆく、壁にようやく足を着け、両手でしっかりとワイヤーを握りながら腰を引かせながら周囲を見た。

『ふ、ふん、なんだ、簡単じゃないか』

『マドカ、あなたその体勢ってファストロープでもするつもり？ 大丈夫よ、足裏がちゃんと壁に吸着するようになってるから、その体勢の方がかえって怖いわよ？』

『む、うむ、おお……』

『行くぞ、遅れるなよ』

その声とともに左手でワイヤーを確認しながら壁を駆け降りるよ



まさに今ずるりとナイフを引きずり出し、兵士を床に横たえさせていた。

『上手い物ね、彼、叫び声一つ、抵抗一つせずに死んだわよ、その刃物は毒でも塗った特別製の？』

『肋骨下から横隔膜を突き刺し、引き裂いた、こうする事によって大抵ショック死する、ついでに声一つ上げる事が出来なくなるらしい、どうやらその通りだったらしいな』

『なんなんだお前は……本当に一企業の御曹司か？』

『さてな、もしかしたら俺は化物かもしれんぞ、ヒヒツ』

ハンドガンサイズのスモールウエポンを右手に握りこんだ信一郎が移動先に照準を向け、動くように促した。

『しばらくはこのまま進むぞ、ISなり特殊な機動兵器が出て、きたら各自ISとACCを使用しろ』

『ふん、腕が鳴るな』

『ACCでの実戦は初ね、上手く使いこなせるかしら』

『ISとそう変わらねえし大丈夫だろ、みっちり訓練はしたしな』

3人がサブマシンガンを構え、移動を開始しようとした瞬間、オーシエがマドカを手で制した。

『待て、マドカ』

『? どうした』

おもむろに腰へと装着していたショットガンを手に取り、マドカへと差し出す。

『お前はこいつだ』

『ショットガンか……いいだろう、弾は何だ？ スラッグ？ フレ

シエツト? ドラゴンブレスか?』

『暴徒鎮圧弾』

『暴徒鎮圧弾だ?! 非殺傷じゃないか、馬鹿にしているのか?!』

オーシエに詰め寄るマドカにヘルメットの中で小さな笑みを浮かべ、ヘルメット越しで乱暴に頭を撫でた。

『まあ、それは冗談としてだ、いいか、今からマドカにスゲエ難しい事を頼む、でもお前なら絶対に出来る事だ』



事が起こったのか、そう思い、現在の通信相手に一言切るぞ、と伝え緊急通信を受ける。

『指定ポイントの兵士が殺害されている！ 侵入者だ!!』

性質の悪い悪戯だと思った、その通信兵と経った今まで喋っていたのだ、何かの間違いではないか、私はたった今までその兵士と喋っていたぞ、と。

『間違いなわけあるか!! 二人とも殺されてるし通信機も奪われている!!』

ならば、私が今まで喋っていたのは、誰だ？

直ぐに指示を出す、その場で待機しろ、警戒は怠るな、震える声でそう伝え、たった今まで話していた回線へと再度連絡する。

『こちらエコー8、どうした』

やはり間違いない、通信兵の声だ、震えた声のまま尋ねる、お前たちは今どこに居る？

直後、通信が切れ、ノイズだけが響く、そこに至ってようやく理解した、敵なのだ。

糞のような警備体制でも流石に長きに渡り表舞台に姿を現す事の無かった『悪の組織』と言う訳か、異常の発覚からの対処行動に移るまでは早く、また容赦も無い。

まだ発覚し、基地内部にうるさい程のアラームと放送が鳴り響いてから10分と経っていないだろうに重装甲兵や小型の無人兵器まで出てくる始末だ。

山の内部をくり抜いて作ったトンネルのような狭いポイントでは兵士による追撃が、広間のようなものがいくつか連なって出来ているような広くも無く、また狭くも無いポイントではドローンと兵士による追撃がある。

ここから情報が抜きとれるであろう中枢に行くまでには記憶が正しければドーム状の広い部屋を必ずいくつか通らざるを得ない上に確実に大型の兵器が待機しているだろうというのは元エージェントであるレーグには嫌と言うほど分かった。





「ねえ、貴方変よ？ 一体何があったの」

雑多なゴミともそうでもないとも言える物体が所狭しと放置されている部屋でレーグはヘルメットを脱ぎ、同じようにヘルメットを外した信一郎の顔を覗き込む。

「あ、あア……う？ ああ、そうだな……」

ゆらりゆらりと浮かんだような返答にレーグは信一郎の目を見て、小さく動揺した。

「そ、そろそろ、しよ……正気を保てる自信が、ねエ……？」

瞳孔が、瞳の形がまるで溶けるように、蕩けるように崩れていた、最早その瞳には何も映せないであろう有様に、絶句した。

「目が、目がおか、おかしいんだ、い、色、色が分からねエ、かた……ちもコン、コントラストも変だ、色差が、メチャクチャ、で……でも見えるんだ、おかしいぐらい、はつきり」

「それ……目が……」

「まるで、まるで……で、ブラウン管、の、テレビみたいだ、ノイズが、ひ、ヒヒ、ヒヒヒヒッ」

顔に深い笑みを張り付けながら小さく笑い、震えているのか歯がカチカチと音を立てる。

しかし、唐突にぴたりとそれが止まる、まるで時が止まったように表情が固まり、流れるようにヘルメットを装着し、首をぐるりと壁へ向けた。

「来る……何かア、準備しろ」

その言葉にハツとしてヘルメットを装着し、武器を構える。

確かに、小さな振動が地面を走っている事がヘルメットから送られてくる情報で分かった、そしてヘルメットに搭載されたCPUで処理された情報が大きさと重さ、速度を伝え、予測行動が表示される、その行き先は。

「突っ込んでくるッ！」

飛び退くように回避した直後、壁をぶち抜き、そこらに放置された物を轢き潰し反対側の壁をもぶち抜いて急停止した。

そこが目的地だったのかと言えばそうではない事が分かる、巨大な

砲塔を備えた機動戦闘車が信じられない程の砲塔旋回速度を持ってこちらにその砲口を向けたのだから。

一息つく間もなく即座に装甲車と同じ場所へと飛び込み入れ替わる様に砲弾が元いた部屋を吹き飛ばす。

爆風に煽られ、地を転がり、流れるように立ち上がり顔を上げ、レーグは即座に理解した、ただドーム状にだだっ広く、遮蔽物も何も無い兵器試験場、叶う事なら入るのを避けたかった場所だ。

「流石に無理よ、ACを使ッ……!!」

再度、驚愕した。

「ヒイ、ヒイヒヒヒ、ヒイアハハハハハハッ!!!」

狂ったように笑いながら、機銃の掃射を身に受け、装甲で弾き、機動戦闘車へと肉薄している青年を見てしまったがゆえに。

何一つ障害など無かったと言わんばかりに跳び上がり、車両正面に脚を叩き付け、砲塔を左腕で抱え、なおも機銃の掃射を受けている彼を見てしまったがゆえに。

そして、そのまま機動戦闘車に火炎放射機による攻撃を行い、瞬間に炎を纏わせたゆえに。

「ひ、引いてー！ その程度じゃ無駄よ！ 断熱装甲が多少焼かれた程度で……！」

断熱装甲が多少焼かれた程度で、確かにそうだ、装甲が焼かれた程度でどうこうなる筈が無い、だがそれは装甲はという大きな面積を示す言葉でありそうでない部品、例えばそう、機動装甲車の特徴である「タイヤ」であるならばどうか。

くぐもった破裂音と共にそれは証明された、金属の溶接に使われる程の高温に耐えられる訳が無い。

一つのタイヤが破裂し、一つ、また一つと次々に破裂する。

だがそれは信一郎本人も同様、確実にその命を蝕んでいる筈だ。

遂に全てのタイヤが融解し、動く事が不可能となった時、信一郎は何を思ったのか車両のハッチを潰し、中の人間を閉じ込めた。

結果など分かりきっている、長時間燃え続ける粘性の高い燃料による炎はいずれ中を蒸し焼きにしてしまうだろうという事は。

機銃の爆発に吹き飛ばされ地面へと叩き付けられ、ただただ叫び続ける青年はきつとそんな事さえ思考できていないのだろう。

だからこそ、レーグは雷光を纏う長大な槍で一撃のもと車両を木端微塵に破壊した。

彼女をよく知る二人は彼女をこう証する「優しい人間だ」と。

優しいからこそ、手を出した、それは決して車両に乗る哀れな兵士の為ではない、ただ狂ったような笑いの裏に悲痛な叫び声を隠した青年の為に、少しでも苦痛を和らげるために。

「行きましょう、助けないと、簪ちゃんを」

「あ、あア？ あ、うん、うん、そう、そうだ、助け、簪、ひひ、ひひひひ」

黄金の獅子を模した装甲を持つ特殊なACを纏うレーグはただ優しく信一郎を支え起こし、歯を食いしばった。

もう、限界なのかもしれない、いや、もう既に限界なんて超えてしまってるのかもしれない、表面が薄く融解した左腕と両脚を持つ前を歩く青年が、まるで鋼で出来た人形のように見えた。

それも錆び付き、軋んだ音を立て、歩くたびに歯車が零れ落ちる人形のように。

DOLL OF RUSTING STEEL  
錆び付いた鋼の人形。

く く く く く く く く く く く く く く く く く く く

『私だ、こっちは問題ないが、そっちはどうなってる？』

「マドカ、こっちも進行上は問題ないわ、進行上はね」

通信より聞こえるマドカの声にACでの移動をしながら応える、彼女自身にも珍しいと思えるほど動揺した声が出る。

『何か、他の問題が発生したのか』

「……………ちよっと待って」

視界内のHUDを思考操作し通信から信一郎を外し、再度通信を掛けた。

「二分一秒を争うわ、何ならすぐにも任務を中断して彼を緊急治療

室に押し込んだ方がいいと思えるぐらいにね」

『負傷したのか？』

「いいえ、精神的よ、もう彼まともに思考できてないわ」

『もともと不安定だったか、ここにきてか』

「一体何があったのか肉体的な物にも影響が出てる、目が融けてるの、もうまともに見えてるかどうかも怪しい」

目が融けている、およそ聞く筈の無い不穏な言葉にマドカとオーシエが息をのむ。

『ちよつと考えたんだけどよ、最悪の場合私とマドカで簪って娘を奪還してスコール、お前はシンイチロー連れて戻れるか』

「多分、できるならそれが最良ね、でも彼は絶対止まらない、そこそ化物になり果てても、ここで何もかもが碎けるまで戦い続けるわ、それと私はレーグよ」

『じゃあ、私達が必死こいて少しでも早く終わらせるしかねえか、そうだろマドカ』

『うむ、急ごう、黒騎士とてエネルギーが無限にある訳じゃないからな』

「そうね、急ぎましょう、オーバー」

かちつ、かちつ、何かを硬質な物を打ち付けるような音が響く、音に合わせてACを纏った信一郎の首が小さく小さく動く。

それは見える事こそないが、信一郎がただずっと歯を打ち付ける音だった。

「通信、終わったわ」

「そうか、どうだった？ もンダイがないなら、このまま進もうとオモウが、どうだ？」

「ええ、行きましょう、次のドームが最後の筈だから、私に任せて頂戴」  
「アア、頼りにさせて貰おう」

先ほどよりもよつぽど冷静に受け答えこそしているが、音に現れる狂気は嫌でも理解させられる。

「……ヘンだな、何かがおかしい、さっきのどーむヲ抜けてからなんのつイ撃も無い」

「多分、次で一氣に仕掛けてくるつもりね、もしくは、マドカとオーシエの方に行ってるか」

コオン、と特徴的な音を残し無駄とも言えるほどだだっ広い廊下を進む、シャッターをレーザーブレードで切り裂き、申し訳程度のバリケードを弾き飛ばす。

ふと、ブーストを緩めることなく進んでいたレーグがチラと一つのドアを見た。

頭部パーツ内部で目を細め、懐かしみを抱いた表情を一瞬だけ表し、それを振り切る様に視線を前へと向ける。

そこは、スコールと呼ばれていた女性にあてがわれた部屋だった。

「……見えたわ、行くわよー」

「か、ふっ……」

ドームのシャッターを槍からの雷撃で吹き飛ばし、内部へと侵入する、そこにはまるで来るのを待っていたと言わんばかりに大量の兵器が並んでいた。

最短距離の強行突破を思案していたレーグが一風変わったドームの形状を見て舌打ちをする。

「IS及び対IS兵器実験用アリーナ……!!」

その言葉と共に先ほどぶち抜いたシャッターさえもISの競技場のようにバリアが覆う、完全に閉じ込められたと、理解した。

「こうしている間にも……面倒な事を……」

「れーぐ、オイ、てイアンがアる」

「……聞かせて貰えるかしら?」

「イマのオレ達にこのばりあヲぶち抜く武器は無イ、そウオもツてイるだろ?」

「こいつらを倒さないとダメだっていうのは、私が一番分かってるわ」  
「ハングドマン、ヒュージキヤノン」

信一郎が小さく呟くと共にACのパーツを変更する。

「さんじゅうびヨウ稼げ、オレがばりあヲぶち抜く」

「…頼りにしてるわ」

レーグが地を踏み、砂で覆われた地面を蜘蛛の巣のような亀裂を作

りつつ槍を構え前方に飛ぶ。

信一郎が両手の武器を投げ捨て、ヒュージキャノンを腕部に接続、腕を大きく振り上げて展開完了直後に腕ごと振り下ろしバイポッドを地面に叩きつけた。

槍の穂先による斬撃で無人兵器を両断し、背後に回り込んだ無人兵器も巧みな槍捌きにより先端を突き刺し、凄まじい威力の放電で内部より炸裂させる。

「はっ、私は接近戦、あまり得意じゃないんだけど、この槍いいわね、流石カロード！」

『れーぐ、頼みがアる』

「何、かしらっ！ 改まって…っと！」

『オまエは一人で進んでくれ、オれはここに残って戦う』

「…馬鹿な事、言わないで、今の貴方を置いて行くななんて」

『だからこそだ、もうしヨウキヲ保てない、だからこそ、オまエにかんざしヲ頼みたい』

「最悪の地獄を見る事になるわよ」

『もう、見た』

ギリ、とレーグが歯を食いしばる、自分がまるで無力に思えた。

「絶対、死なないで」

『アたりまエだ…：ウつぞツ…!!』

一拍遅れ、射線上の無人兵器が消滅、バリアに突き刺さり、凄まじい轟音を生み出しながら炸裂する、レーグは付近の無人兵器を切り裂きながらオーバーブーストで圧縮された核弾頭により大穴を開けられたバリアを通過し、一度振り向いた。

「必ず、必ず助け出すから…!!」

『アア、これでアンシン、だ…：…』

コオン、光と音を残し消えてゆく姿と再度同じように張られたバリアを見つめながら頭部パーツ内部で笑みを浮かべる、ヒュージキャノンの配線を切断、砲塔や冷却機もまとめて廃棄し、地面に落とす。

「さアて、刺激的にやろウぜ、どちくしヨウども」

「プロビデエエエエンスッ!!!」

咆哮のような声に呼応し、赤い装甲が身を包む、即座に右腕を持ち上げ、トリガーを引いた。

空気中の気体を副作用でプラズマ化させ、それが散らされるよりも早く高圧のエネルギー体が射出される、一拍置く間もなく着弾し、エネルギーが破裂、まるで空間を削り取ったかのように無人兵器が消滅した。

それがトリガーだったかのようにヒュージキャノンの射撃後から一切動きを見せる事のなかった無人機が一斉に動き始め、周囲を旋回し始めた。

背のミサイルハッチが勢いよく前方を向き肩に叩き付けられ火花を散らす、旋回する無人機を追いかけるように四連装ミサイルが吐き出され、それに続き連動ミサイルが放たれる、撃ち漏らした無人機には肩部レーザーで焼き溶かし、放たれる銃弾を身に受けながら確実に数を減らしていった。

ISの撃破を前提に作られた無人機の銃撃はACの装甲に刺さり、避けることの無いその身を少しずつ削り、傷を作って、限界装甲値に近づける。

内部では煩いほどのアラートが鳴り響く、視界の端に濃い灰色が重ねられる、もはやその装甲は鉄の塊と成り果てかけていた。

表面装甲を大きく破損させ、スパークを起こすACにトドメを刺すべくレーザーブレードを展開し突っ込んできた無人機をようやく回避し、左腕の高出力ブレードで二つに叩き斬る。

「ストラックサンダアアアッ!!!」

今まさに砕け散ろうとした装甲が光の粒子に包まれ、その姿を変貌させる、脚部は人のそれとは大きくかけ離れた形へと折れ曲がり先ほどの機体とは明らかに違うことを示していた。

光は紫の装甲板へと色を変え、肩部にせり出した、ともすれば恐ろしい兵器の砲にも思える「それ」が青白い光を揺らす。

鈍く重い音が響いたかと思えば燻っていた青白い光が無人機に突



き刺さり下半分を残し弾け飛んだ。

「が、はッ、はッ、どオしたア……？　こんでオわりな訳ねエよなア……？」

周囲には信じられないほどの金属で出来たガラクタが散らばっている、スクラップの廃棄所と言われれば信じてしまいそうなほどに。その中心にひとつ不自然に何も無い空間があいている、そこにポツンとボロボロになった機体がゆつくりと肩を上下させていた。

左腕の肘より先が千切れ落ち、脚部も内部が破損したのか膝を突いて、装甲版がいくつも剥がれ内部を曝し、火花を散らし間接は赤熱してさえている。

視界内は邪魔になるほどの被害情報で埋め尽くされ、最早アラート音以外はほぼ何も聞こえない、もう十分以上前からそうだ。

コアの熱量は既に限界を超え、機体を変えようと被害情報を引き下げることにさえしない、破損過多とその収容格納内での簡易修理による発熱、度重なる機体の連続変更、エネルギー兵器の使用率による負荷、ほぼ無限だとさえ思っていたコアの総エネルギー量が最早雀の涙にさえ思える。

そして何よりももう体の限界、否、体の限界を超えて既に久しくさえあった。

体中の筋肉が裂け、右腕に至っては酷使しすぎたのか機械によるサポートで無理やり動かしているに過ぎない、もし外装がなければ骨は滅茶苦茶に押し折れ、皮膚が裂け、血の海を作っていたかもしれない、皮肉にも外装はそれを押さえつけるギプスであり、傷口を塞ぐかさぶたの役目を負っていた。

内臓もいくつか潰れている、口の中に広がる味から鉄分の摂取には事欠かないだろう、出来る事なら口に溜まった血やら何やらを吐き散らしたいほどだ。

『いやいや、お見事お見事！　素晴らしい結果ですよ、ストックしていた無人兵器がひとつ残らずガラクタではないですか！』

パチパチとスピーカー越しに聞こえる拍手と賞賛に反応し、油の注がされていない自動人形のようにゆっくりと、軋むように顔を上げた。ミシリと音を立て干渉したへし曲がった装甲版が折れて落ちる、そのボロボロの機体をさらに破損させてゆっくりと立ち上がる。

「なんだ、オわりかよ……たいた事無かったぞ、クソ野郎ウ」

『ううん、満足頂けなかったみたいですね、素晴らしい。クローンナンバー14号とは出来が違いますねえ、君のクローンを作ってみるのも正解でしょうか?』

その言葉を聴いた信一郎は頭部パーツの中で凄惨な笑みとも憎悪とも取れる表情を浮かべる。

「アア、てめエだツたか……探したぜ、すツげエ探した」

『おや、私のことを探してくれてたのですか? 外部にファンがいたとは、嬉しいですねえ、もったいない事をしました、もつと頻繁に外に出るべきでしたよ』

「てめエだけは、ねンイりに、しつよウに、確実に、ぶち殺したイトオもツつてたんだ」

右腕を上げ、中指を立て、憎悪に引きつったような声を出した。

『ふむ……君と私は面識がありましたか?』

「アる訳ねエだろ、だがマドカに殺しヲさせよウとしたオまエだけは、殺すと決めていた」

『……くふ、くふふふ、クーツハツハツハツハツハツハ!!』

スピーカーから聞こえる笑い、晒い、嗤い、心底可笑しいと、心底笑えると、まるで自分の声に喜ぶ赤子のようにただ笑う。

『アハ、アツハハ!! これは、これはこれはこれ!!! まさか、まさかあの、14号に! クローンに!! ただの「物」に情が移ったというのですか?!』

『たかが「物」に!!!』

息も絶え絶えに絶叫するように笑う男の声に信一郎は小さく呻くように、誰にも聞こえないほど小さく呟いた。

「もう少し、持ツてくれよ……ホワイトグリント」

『はあ、面白いですね、とても面白い、あなたは素晴らしい、その機体といい、物に情が移ることといい、本当に面白い』

「しんぱいするなよ、オマエも直ぐに『もの』いわぬ『肉塊』になる」その言葉と共にアリーナ上部に設置してあったカメラを撃ち抜き、破壊する。

『さて、困りましたね。もう君の侵攻を阻む無人機はもうありません』

「そいつはイイ、イま直ぐにでも、のウみそ撒き散らしてやる」

『ですのー！』

ガコンと大袈裟にロックが外される音が響くと同時に、壁の一部がせり上がる、有無を言わさず吹き飛ばしてやろうと両腕をその方面に向け、息が、止まった。

『とっておきのISををご用意しました！』

「て、めエ……ッ!!」

そこにあつたのは――

『感動の御対面です、さあ「彼女」を打ち倒して私の所に来て下さい!!!』

――見知ったISを纏う見知った、否――

「信一郎、おねがい……!」

――世界で最も愛した――

「私を、止めて……!!」

――掛け替えの無い人だった――



## Stain 『傷』

白く輝くISが巨大なブースターを背負い空を信じがたい速度で飛ぶ、視界に移る情報は色の付いた線となり、形さえ想像させる余地の無いまま後ろへと流れて行く。

視界内の情報には国境の情報やら領空侵犯やらの情報が高頻度で混ざり、その都度通信がひっきりなしに鳴るが今の彼にはそんな事などただの細事でしかない、なかでも最も多い言葉が「こちらのISで迎撃されたくなければ今すぐ出て行け」である。

尤も、あらゆる国のISは出払っていて迎撃に出るほどの余裕も無ければ仮にISがあつたとて発進準備が整って出撃するまでに先方の望み通り通過という形で出て行っているわけだが。

「……まだ、つかないか……」

『そうですねえ、あと一時間と言う所ですかねえ』

「あと、一時間も……!」

『そうは言いますがねえ、織斑君? 今あなたがどれだけの速度を出しているか分かりますか?』

「普通のISよりも早いってのは、分かりますけど……」

『その通りです、速度特化型ISの平均巡航速度である時速3,000キロを優に上回るSR-71ブラックバードのマッハ3、時速3,540キロよりもはるかに早い巡航速度で移動してます、それ以上を求めるのは酷と言う物ですよ』

通信先の女性、カロード所属であるフレドリカ・イエンネフェルトがカタカタとキーボードのタップ音を響かせながら応える。

『勿論私も一刻も早く信一郎君の救援に行つて欲しいですし、私自身も無人機部隊を編成して行きたいとは思いますが現状出せる最速の救援が織斑君である、というのは理解してほしいですねえ』

それは一夏本人も重々承知している、承知しているが「それでももつと」という人としての欲求が前に出てきてしまう、彼は超越的な人間では決していないのだから、当然だ。

『まあ、納得しろと言って「はいそうですか」と納得できないのが普通

ですし、あまり強くは言いませんよお、それが人の魅力でもありませんねえ』

くすりと笑う声に一夏は顔をしかめる、正直、状況は限りなく最悪に近いにも拘らず笑える余裕を持つ女性に違和感を感じていた。

『私が今笑えるのが不思議ですか？ 簡単な話ですよお、信じているからです、戦う傭兵達を、社長を、救援に来てくれたあなた方を、そして信一郎君を』

ね？ 簡単。そう言った女性の言葉に納得がいった。

「そうだ、そうだよ……みんな、俺を信じてくれたじゃないか、シンを信じていたじゃないか、だったら俺も俺を、シンを、皆を、信じるしかないじゃないか！」

『ふふ、いいですねえ、こういうのは、私も若いころは……研究室に詰めてました！ とうか私はまだ若……!!』

『織斑君！ IS反応が近づいてきます！ 振り切れますが、この状況でISを出してくるとは……』

一夏が視界端に映る通信コールに目を向け、苦笑いした。

「少しだけ、速度を落とせますか」

『……知り合いですか？』

画面に表示されるISの識別名は「Schwarzer Zwei g」わからないはずはない、知らぬうちにドイツの上空まで来ていたようだ、到着は思ったよりも近い。

『こちらドイツ軍IS部隊だ、お前はドイツの領空を侵している』

「IS学園の者です、すぐに離れますので——」

『その声は……！ なるほど、だがそれとこれとは話が別だ、君は今ドイツの領内に不法に居る』

「ならば、突っ切らせていただきます」

『できるものならばな、だが……そうだな、あと10 km高度が上であるなら、我が国も、他国も、追う必要がなくなるな』

通信の向こうで相手が苦笑する、剣呑とした雰囲気はすでになく、そこには一夏を思いやるような、そして諭すような声が聞こえた。

「はい！ ありがとうございます、クラリツサさん」

『さて、何のことだろうか？ ……あの子を、隊長を、よろしく願いますね』

「勿論です！」

そう強い声と同時に機首が持ち上がる、瞬く間に高度を上げ、一般に領空の判断が難しいとされる高度100kmへと到達し、同時にドイツの領内を通過した。

「結局、最後までドイツの領空を侵しちやっとなあ……」

『まあ、もう気にしても仕方ありませんねえ、ドイツでしたらまだ融通が利きますから、何とかなると祈りましょう』

「祈るんですね」

『勿論、私は敬遠な教徒ですから！』

祈る神が何なのかは知らないが、それでも彼女は都合よく神に祈った。

く く く く く く く く く く く く  
く く く く く く く く く く く く

カキン、と音が鳴る、気付く事はなかった、もう一度カキン、と音が鳴った。

トリガーを引き、ハンマーが雷管を叩き、真鍮で出来た筒内で爆発を起こし、弾頭を撃ち出す、その過程で行われる爆発音が無い事に気が付き、漸く弾が切れた事に気付いた。

「チッ！ 弾が切れたか！」

右腕に握る大型ハンドガンを乱暴に投げ捨てる、格納銃器は全てこれで尽きた、対峙するISが両腕の幾重にも重ね合わされた丸鋸のような武器の回転速度を上げ赤熱させながら歯を剥き出しにして笑う。

「奪<sup>と</sup>おおおつたああああアアア!!」

「そう簡単にイッ!!」

巨大な人型がハンドガンを投げ捨てた状態から拳を握り込み突き出された回転ノコギリの塊を真正面から姿勢制御バーニア、ブースト

による加速を用いて殴りつけた。

「奪とらせるかアアツ!!」

「ア、ぐぶあ…!!」

言葉にもならぬ呻き声を上げ、凄まじい速度で『射出』されたISがビル状の巨大な遮蔽物に叩きつけられ、破片を撒き散らしながら地へと墜ちてゆく、絶対防御があるので死にはすまいと目を別の方へと向けると突如右腕から凄まじい痛みが走る。

「つぐ…?! ……成程、AMSの、弊害か…」

ACは例外こそあれど基本的に拳や蹴りと言った肉弾戦による白兵戦は想定していない、故に回転ノコギリの塊を真正面から殴り抜いたためだろう、拳は引き裂け、砕け、肘より先が原形を留めていない状態だった。

AMSの安全機構で痛みは一瞬で収まりはしたがまだ鈍い痛みが残っているような気がする、まるで本当に腕が裂けたような錯覚さえした。

「まあ、問題はないな…あと……3人は潰せる」

左腕の拳を握り込み、空中で姿勢を前方に倒し、光の帯を引き砲弾の如く最寄りのISへと肉薄した。

もはやこの戦場に飛び交う弾丸の数は少ない、IS、ACともに弾がほぼ底を尽きかけている、あるいは既に撃つ弾など無いのだろう。

ブレードを格納していた者やそもブレードをメインとして戦うもの、あるいはキルドーザーのような変り者が今この戦場を支えているのだから中々どうして、ランクというのも信用できない物だ。

補給は望めない、既に補給を行える程の余裕はない、だがその中でも決して劣勢にはなっていない、それは新たに戦いへ加わった少女たちがいる故に。

360度視界を得ることのできるはずのハイパーセンサーも操縦者の疲労により眼前の方向ばかりに意識が行き、死角からの対処に遅れる、それはISだけではなくACのパイロットも同様である、だがそれは長年戦いを続けていた経験により補われる、なればこそ表情にまで疲労を滲ませていたISパイロットにそれを問うのは酷だった



だろう。

「ううっ、ぐっ……な、なに…?!」

意識する事で気づく、自らがその機械でできた巨大な「手」に捕まれているという信じがたい状況を、黒と紫の装甲に覆われた緑の単眼が自らを見下ろしているという事を。

「握り潰せるなら、楽なんだがな」

そう小さく呟くとギシリとISから音がする、無意識に力んでしまったのだろう、ACの武器は千差万別、反動の全く無い武器もあれば戦艦の主砲など可愛いものだと思えるほどのすさまじい反動を受ける武器もある。

それら全てを片手のみのマニピュレーターで保持するためにその機械の握力は戦車を軽く握り潰せるほどに凄まじい。

「やめ…て、いやだ、死にたくない…!!」

「ああ、そうだろうとも……私とてそうそう死にたいとは思わんさ、だから……」

ドンと何かが爆発したような音とともに地へと急降下する。

「死ぬなよ?」

緑の単眼が強く瞬いた瞬間に地との距離が0となった。

まるで隕石でも落ちたかのような衝撃と粉塵が周囲を舞う、しばらく後粉塵が晴れるとそこには左腕をぐしゃぐしゃに破損させながら地に突き刺したACが静止していた。

「ぐ、思ったより……きついな、ん…?」

動こうと意識しても機体はうんともすんとも言わず、コンソールを触れどもエラーコードのみが存在を主張し、ハンドルを触れども全く動こうとしてくれない。

「はあ……ついに、逝ったか…ん、いやまで、ISのパイロットはどうした、逝ったら洒落にならんぞ! 生きてるか、いや生きててくれ!」  
「あの」オールドキングでさえまだ一人も殺していないのにここで私が殺してしまったら社長に大目玉を食らうではないか、そんなの勘弁願いたいぞ、と至って自己中心的な思考の元、限られた視界を探しまわし、端のほうに少し見切れる形で装甲を解除したISパイロットがス

クール水着もかくやという自分がやれと言われれば顔いっぱい嫌な表情を浮かべてNOと突きつけるような服装で倒れていた、よくよく見れば豊満な胸も上下している、どうやら生きてくれていたらしい。

コクピットに備え付けられている携帯性を重視したPDWを引きずり出し、銃弾を装填、緊急用の手動開閉装置を回し、コクピットを開放する。

腕が半分以上埋まっているのもあってコクピットの位置は地上に近い飛び降りるのに度胸も苦労も必要なく、一息に飛び出した、一時気を張り周囲に武器を向けるも意味は特にないらしい、気が抜けたように空を眺めた。

「はあ、やってるやってる」

まるで他人事のように、ぽろりと言葉を零し、自らの機体をゆつくりと見上げた。

「なあ、私は限界までやった、限界を超えてやった、少し、分かった気がするよ、私の意味が、私の存在の意味が、お前はどうか？ ファシネイター」

その言葉に緑の単眼が明滅する、それは救難信号を飛ばすただのプログラムだ、それは百も承知だったがまるで自分の問いに答えてくれているようで嬉しかった、笑顔を浮かべ小さく「そうか」と呟きながらボロボロになった自らの愛機を撫でた、先ほどまでエネルギーを纏っていたからだろうそれは、少し、人肌のように暖かった。

「さあ起きろ捕虜のお嬢さん、君を怖いこわーいカレードに、君たちで言う処のテロリストの巣窟にご案内だぞ」

「うう、ぐう……やだあ……」

「やだあ、じゃない駄々をこねるな、よつとー！」

ひよいと担ぎ上げると、凄まじい抵抗をすることもなかったが涙をボロボロと溢しながら身を振っている、きつともう動ける体力のない体と気力を振り絞った必死の抵抗なのだろう。

「やだあ……たすけてえ……」

「さあて、どんな事をしてやろうか、何でもあらず、カレードは」



に残る爆発に対応していない盾で受ける。

先ほどの衝撃とは比べ物にならない、装甲の隙間から血が噴水のよ  
うに吹き出し、盾の裏側を、腕部装甲を、そして頭部装甲を汚した。

もはや右手に握力は存在せず、すべて機械だよりだ、トリガーを引  
くことさえ難しいが、それでも到底諦めるつもりなどなかった、否、諦  
めるといふ選択肢が出ない程度に思考能力がもはやないも同然で  
あった。

「やだ、やだ！ 止まって！ 止まって!! お願い、お願い止まって!!

打鉄式式!!」

ミサイルと荷電粒子砲をまるで単純にプログラムされた機械のよ  
うに撃ち続ける薄蒼のISを駆る少女は絶望と恐怖に顔を染め、涙を  
零しながら縋る様に懇願する。

否、実際に打鉄式式は単純なプログラムで動いているのだ、それこ  
そ多少プログラムをかじった程度の子供でも組める程度の単純なプ  
ログラムで。

そこに少女の意思は存在しない、少女はただISを動かすための  
キーとしてしか、存在していないのだ。

爆風が晴れた先には上半身をだらりと投げ出し、右腕から血を滴ら  
せる濃いオリーブの装甲を纏った男がいる。

ゆつくりと顔を上げ、左腕をギシギシと軋ませながら少女に手を伸  
ばす。

「か、んぎ……し……」

「あ、ああ……あああああ！ しん、いちろお……!!」

簪の声にピクリと小さく震え、手が小刻みに揺れる、まるで力を込  
め震えるかのように、徐々にしかし大きく。

「あ……ああ……ああああ、アッアッアッアッアッアッアッアッア  
ッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッ

まるで絶叫のようにも聞こえる咆哮<sup>!</sup>を上げ、それに合わせるように  
冷却用の頭部排熱機構が開き、赤熱した内部を晒す。

それは単眼の機械の獣が吠えるようにも見えた、もはやまともに二  
足で立つことさえ不可能なのか膝から崩れ落ち、両腕を地に叩きつ

け、四つん這いになる。

その姿は逆間接の脚部であることもあって正に傷を負った獣と言って差し支えが無かった。

油断一つさえあれば喉笛を喰らい千切ってやらんと言わんばかりに正面を、否その向こう姿見えぬ男を睨みつける。

その「手負いの獣」をニヤニヤと笑みを浮かべ、カメラ越しに眺める男が椅子に深く座りなおし長く息を吐いた。

「フウー……中々、面白い見せものでした」

悠然と何らかのコンソールを引きよせ、鼻歌交じりにキーボードへと何かを打ち込んでいく。

「そろそろ、弾もエネルギーも切れますね、まあ……軍用機ではありませんから、こんなものでしょう。尤も、この私の類稀な頭脳で稼働時間自体は平均的な競技用ISからは遥かに伸びましたし、言う事はありません」

画面に映し出される謎の文字列、一切の意味を見いだせないその文字の羅列を愛しげに指でなぞって、熱い溜息を一つ吐いた。

「ですがこのコード、この私できえ今は一切読めませんが、これはかの大天才、我が愛しのメーティス!! 篠ノ之束が作りし他の天才へ、いえこの私への課題! 何故このISにのみあるのかはわかりませんが……きつと、何か! 特別な意味があるのでしよう!」

ついに何かのコードをコンソールに打ち切った男は、ゆつくりと、勿体ぶるかのよう決定キーを指で撫でる。

「私は今最高に幸せです、これほどにも興味深い最高のモルモットと最高の篠ノ之束の愛の課題を得る事が出来たのですから!」

本人の気分はありありと見て取れる軽快な音と共に決定キーが強かに叩かれた。

「まあ……どうせ、クローンになるのですから」

打鉄式式がゆつくりと高周波数振動式薙刀、夢現を掲げ、構える。

「あ、ああ……イヤ、イヤだ……!!」

簪が涙を浮かべ恐怖に顔を引き攣らせる、首を横に振り必死で抵抗するが、少女の望みは決して受け入れられない。



ギシ、ギチと金属が軋むような音が響く。

『これは！ 博士が望んだことなの——』

『さつきから、黙って聞いていれば好き放題言ってくれる』

怒りに打ち震える声が、芯の通る、透き通った声が響く。

「箒、ちゃん……？」

その鈴のなるような清涼な声が彼女の指を止めた、あれは怒り狂っている、でも、なぜかそれは。

ずっと昔、自分に嬉しそうに話しかけてくれた幼子の頃のままのよ  
うな、そんな声を思い出した。

『私が、姉さんを、憎んでいる？ 貴様らがやっていることが、姉さん  
の望んだことだと？』

右腕で刀を押し込みながら、左腕でエネルギー刃を掴み取り、力尽  
くで相手へと近づく、掴む敵の刃から金属がひび割れるような音が、  
無理やり潰すような音が、確かに聞こえている。

『巫山戯るなよ、貴様が、貴様らが……ッ!! 知ったような口を聞く  
なアツ!!』

刃を握る左腕から紅い光を散らし、直後その刃を握り、碎き潰した。  
『私が今ここで貴様らと対峙しているのは……あの人を、姉さんを  
……! 誰よりも、知っているからだ……!! 誰よりもッ!!』  
刃を握り潰したその拳のまま、相手のISへと全力を持って叩き付  
ける。

『愛しているからだアアアツ!!』

『ガ、つぐうつ!!』

「あ、ああっ……な、なん……あ、うああ……」

両手をだらりと落とし、力無く椅子へと崩れ落ちる、その表情は困  
惑とも、歓喜とも、そして絶望とも、何と言う事もできないあらゆる  
ものが欠落し、またあらゆるものを内包した表情だった、ただ自分の  
知りえない何かが自分の内を掻き乱していることだけは確実だった。

手をゆつくりと前に出し、キーボードへと添えても何一つできな  
い、指が動かないのだ、金縛りというのは、こういうものなのだろう

かとおつ疑問が浮かび、即座に馬鹿らしいと思考を中断する。

『姉さんは、昔語ったんだ、私に、千冬さんに、一夏に……!』

ふいに、膨大な情報の中で輝く大切な記憶が脳裏に浮かぶ、満天の星空のもとその星空と同じぐらい輝く笑顔を浮かべる妹を、柔らかい笑みを浮かべる親友を、興味津津と目を輝かせるその弟を。

唇が、無意識のうちに言葉を紡いだ。

『いつか、あの宇宙そらに行くんだ、篝ちゃんと、ちーちゃんと、いつくんと、束さんで』

視界に映る妹に手を伸ばす、ゆつくりと震える手で、きつと、なにか、言わなきゃいけないことがあるはずなんだ、しなきゃいけないことがあるはずなんだ、と。

コツン、と指先が画面に触れる音がした。

「さわれない、ふれられないよう……ほうきちちゃん、なんで……どうしてえ……」

視界が滲む、大切な妹に触れようとどれだけ手を伸ばそうと、どれだけ声を掛けようと、その手は決して柔らかなはずの妹の肌に触れることはできず、その声は決して妹の耳には届かない。

『夢を叶える目処が立ったと、嬉しそうに私に語った姉さんの笑顔を覚えていて』

『なんで誰も分かってくれないんだと嘆く姉さんの声を今でも覚えている』

まるで自分の事のように嬉しそうに喜んでくれた妹の姿が、記憶が、目前に現れた気がした。

触れると蜃気楼のように消えてしまった。

とても悲しそうに、自分の手を握ってくれた優しい妹のぬくもりが蘇った感覚がした。

それをなぞってみるとぬくもりは消えてしまった。

「わたし、落としちゃったよ……大切なもの、沢山あったはずなのに、落としちゃったよお……!!」

『ISは、この子たちは姉さんの夢だツ!! 兵器としか見ない貴様らがア!! 姉さんの夢を穢すなアアアツ!!』



「ああっ！ ああああああああっ！！ うわあああああああっ！！」  
慟哭が咽を震わせる、暖かな雫が頬を濡らし、エプロンを濡らして  
いく。

私にはいらぬ、役に立たない、そう言つて捨ててきたいくつもの  
情報キオクの中に決して捨ててはいけぬ大切な記憶オモイデがあつた、そんな取り  
返しのつかぬ間違いを犯してしまつていた。

それがいつたいたいなんであつたのか、完璧ともいえる記憶力を持つは  
ずの自分は忘れてしまつていた、篠ノ之束わたくしの原初であつたそれを、い  
まようやく思い出したのだ。

「……ISで宇宙に行くことは、過程だつたはずなんだ、それが目的  
だつたなら誰にも構わずただ一人で事を成せばよかつただけなんだ」  
そうだ、私の本当の——

「——本当の目的は、箒ちゃんに、ちーちゃんに、いつくん……う  
うん」

両の手で顔を覆い嘆くように、懺悔するように叫ぶ。

「世界中のみんなに、宇宙を、知つてほしかつたんだ!!」

やつと思ひ出した、もしかしたらやつと理解した自分の夢に直面し  
て力無く乾いた笑い声を溢した。

「……は、ハハッ、ハハハッ……ハアッ!!」

拳を机に叩き付ける、中身の無いマグカップが跳ね床に落ち、ステ  
ンレス製のカップが甲高い音を立てた。

「……馬鹿じゃないの」

自分を噛いながら出した声は、自分でもぞつとするぐらい低い声  
だつた、とてもじゃないが明るい声なんて出せない、能天気だつた自  
分がこれほど怨めしいとは思わなかつた。

虚ろな目で前を見る、自分の愛する妹が、その友人が、そして夢を  
運ぶ自分の愛娘たちが、自分の手によつて憎み、争っている。

ああ、なんて馬鹿らしい、もう何もかもが失敗だつた、もう何もか  
もが遅い、もう……何もかもが手遅れ——

「たばね……さま……」

「え、あ……くー、ちゃん……?」

いつそ何もかもを消してしまおうとさえ考えた束の思考が小さな少女の声で止められた。

エプロンの端をぎゅつと握り、心配そうに眉を寄せるクロエと過去の箒の姿が重なったような錯覚がした。

「くーちゃん、たばねさん……間違えちゃった、失敗しちゃった……もう全部意味なんて——」

全てを言い切る前に腹部に小さな衝撃が走った、視界が滲んでいてもそれはハッキリとクロエが半ばぶつかるときに抱き着いてきたことが理解できた。

「……意味がないなんて、そんな事ありません……!」

「でも、でもっ! こんなに、こんなにも取り返しのないことをしちゃったんだよ?! もう、何もかもが嘘っぱち、もう私の夢に、願いに意味なんて!」

「あります! 私は、私はあなたの願いに、夢に救われたんです! 生きる意味のなかった私に意味をくれました……!」

束はその言葉に言葉が詰まった、否定することは簡単だ、だが、もし否定してしまえばそれは自分だけじゃなく、クロエの存在そのものさえ否定してしまう、前までは一切気にしなかったであろうソレがとつともなく重く、重要に思えた。

「私は、沢山間違えました、沢山失敗しました、作ったご飯は毎日黒焦げです、砂糖と塩を間違えるなんていつもです。でもっ……!」

束のエプロンに顔を埋め、暖かな雫をしみこませつつ、いつもは物静かな彼女が感情を爆発させるように束へと言葉を告げる。

「それでも貴女は……! おかあさんは! ごめんなさいと言えば許してくれました!!」

「それ、は……!」

理解が出来た、クロエはこう言っているのだ「謝れば許してくれるはずだ」と。

あまりに虫が良すぎる、謝れば許してくれるというラインなんてもうとつくに過ぎ去ってしまった、もはやただの悪戯で済むようなものではない。

でも……。

「そう、だね……許される許されないは置いて、悪いことをしたら、怒られて、謝らなきゃ……だね」

なんで、こんな事をしてしまったんだろう、私はなぜISを、自分の子供たちを兵器として見てしまっているんだろう。

「ああ、そうだ……そうだよ……!!」

兵器としてのISを否定してくれたのは、本当の姿にしてくれようとしたのは、進んで悪者になってくれていたのは……自分を認めてくれたのは……!!

「……れーらさんじゃないかつ……!!」

ぎゅつとクロエを抱きしめる、震えは収まった、精神的には万全だなんて言えないけど、それでもさつきまでよりずっと良い。

今なら勝てる、今この時なられーらさんに勝てるんだ。そう口走った自分を嗤う。

「ハハッ……なんだよ、今ならつて……違うでしょ……」

本当に馬鹿みたい……いや、違う……馬鹿みたいじゃなくて。

「ああ、馬鹿だなあ、ホント。ねえくーちゃん、束さんね……本っ当に馬鹿だったよ」

自分が見下してた奴らのほうがもしかしたら真っ当に、立派に生きていたに違いない。

さあ、だからこそ久しぶりに真剣に、まじめに、真っ当に頑張ってみよう。

「でもさ、だれか言ってたよね、馬鹿は馬鹿なりに、やるんだって」

「おかあさん……」

「見ててくーちゃん、馬鹿と天才紙一重、なら私は、今この瞬間から、天才になってやる!!」

キツと睨み付けるように眼前のモニターを見る、なにせ愛娘の前で馬鹿でなんていられない、自分の失敗は人に何とかさせちやいけな、い、そうでしょう、と記憶の中の親友に微笑んだ、彼女は呆れながらも笑みを浮かべて「今頃気づいたか、馬鹿め」と返していた。

コンソールを叩き進行中だったクラッキングを停止、ゴミ箱に手作

りの実行ファイルを叩きこむ。

そうだ、自分は自覚する、類まれな才能を持ち、あらゆることをこなし、肉体の細胞さえ常人を遥かに超越する、まさにそれは天才と言えないだろう。

ならば眼前のあらゆるものは私以下である、それは世間でどういわれようが私にとっては凡夫だ。

だが決して油断はしない、その凡夫にこそ、自分は最初に陥れられたのだ、そして今まさにその凡夫に自分は利用されていたのだから。

「さあ凡夫ども!! この天才である東さんと本当の大天才であるれーらさんを相手にどこまで粘れるかなあ?！」

眼前に広がるモニターにコンソールを同時に10近く展開し、両腕を大きく広げた、それに追従するように背後の拡張領域から左右4本づつ機械腕が展開された。

「まずは私の子供たちを返して貰おうか!!」

手始めにカラードで防衛を行うIS学園のISと一夏のIS以外を全て絶対防御を残しその場で待機するように機能停止させる、さあこれでカラードに直接攻撃できるものはいない、ここからは電腦空間上での攻防だ。

「けど、勝てるもんなら勝ってみな、言つとくけど東さんは本気だよ!」

だがどうだ、実際は思ったより耐えてくれる、1分持たずに瓦解して潰されると思ったにもかかわらず電腦空間での戦いは互角とはお世辞にも言えないが、それでも1時間程度は耐えてくれそうだった。

ああなんだ、自分がずつと馬鹿にしたのに、なかなかやるじやないか、それに何より心苦しきのない遊びのようで、思ったよりずつと楽しい。

「あつはは! これ、これも凄く楽しい!! なんだ、中々馬鹿に出来無いじゃん! 凡夫どもも、中々面白い!!」

でもこの遊びで全部が終わりじゃない、やらなきゃいけないことが沢山だ。

「れーらさんにごめんなさいしなきゃだめだし、箒ちゃんにも会って



と言いながら鉄塊を蹴る兵士に簪が悲鳴を上げるも兵士たちは一切気にしない、簪よりも直接的に被害を与えられた鉄塊のほうが彼らにとってよほど脅威なのだ。

「装甲車に括り付けて引き摺ればいいだろ」

「そうか……よくもまあやってくれたな、コイツはよオ！」

「やめて!!!」

鉄塊の頭と思しきものを蹴り飛ばそうとするもやはり微動だにしない、その蛮行に簪が声を荒げる。

「うるせえぞ、黙ってる!!」

そう言つて簪の眼前に銃を突きつけた兵士が突然に、まるで何かに引きずり倒されたかのように地に伏せる。

兵士の足にボロボロに拉げ、砕けかけた金属の腕が絡み付き、地を向いていたはずの単眼が赤く、暗い光を兵士へと向けていた。

「あ、ああああ!!! うわああああああ!!! クソツ、クソクソオ!!! 放せ、放せコイツ!!!」

ズル、ズルと少しずつ、まるで捕食されるように鉄塊に取り込まれる兵士の姿に誰もが理解できず、ただ見呆けるしかなかった。

「お、ごあ、やめ、やめろ…!! たすつ、だすげツ…!! う、ゲ、ギイツ!!!」

ぐしや、ぐちや、ごき、と潰れてはいけない何かを無理やり潰す音が止むと、今度はお前だと言わんばかりに、簪を取り囲む兵士を赤い瞳で見つめる。

「……う、撃てエ!! 撃ち殺せエ!!」

ギシギシと体を揺らしながらゆっくりと動くその「金属でできた化け物」に銃弾をこれでもかと叩き込むが銃弾が直撃した火花を散らすもまったくもってひるんだ様子はない、そうしてる間に一人、簪の近くにいた兵士が引き千切られ、磨り潰された。

返り血か、それともまさに喰い殺したのだろうか、まるで歯にも見える内部機関からボタバタと血を流してさらにもう一人とゆっくり首を向ける、ギチギチギチと弓を引き絞るような音の後、化け物が宙に飛び上がった瞬間、凄まじい轟音が響く。



装甲に比べれば随分と軟らかいであろうハンドルやメーターなどを碎き潰し、その悍ましい爪が操縦主の顔面を握り潰さんと開かれるのと、IFVが機能停止に陥るのと。

そして化け物の動きが完全停止するのは同時だった。

ぴたりと動きを止めて単眼が光を失い、続けてその腕や体が破壊されたIFVに落ちて重い音が鳴る。

「ハッ、ハッ……やつと、やつとかよ、クソ、クソツ……!!」

悪態を吐き散らしながら、意地でも化け物の作った大穴から出ようとせず、半ば拉げ、解放された上部のハッチから身体を引きずって出ると、化け物の装甲から光が弾け、機械でできた左腕と、腕も指もぐしやぐしやに折れ、拉げ、曲がった右腕を持つ男が現れた。

「これで、もう……大丈夫か」

「わかんねえ、わかんねえけど……」

油断なく銃を構え、血塗れの男に近づくとゴブ、と声が漏れると同時に小さく血を吐きだした。

「ヒッ、まだ生きてやがるぞコイツ!!」

「化け物め……!!」

兵士が二人顔を見合わせてひとつ頷いた、もう、ここでコイツを殺してしまおう、そうして照準を男の頭に向け。

「だめです、それは、いけませんね」

彼らの上司である科学者の男に止められた、だがここで殺してしまわなければ危険なのは誰が見ても明らかだった、抗議しようと口を開きかけるもそんな命を掛けた理不尽など今に始まった事ではないし、反抗した者がどうなってしまうかなど彼らには考えるまでも無かった。

「チツ……ファーフ、運べ」

「俺か?! ああ、くそつ……頼むから動き出さないでくれよ……」

ファーフと呼ばれた重装甲型パワードスーツを着こんだ男が恐る恐る、バケモノの脚を掴み引きずり始める。

他の兵士もゆっくりと簪に近づき腕を伸ばす。

「信一郎!! 信一郎!! はなせつ! はなしてえつ!!」



兵士の一人が簪を黙らせようとライフルのストックで殴るためライフルを振り上げる。

そこでIFVの操縦主の男が悲鳴を上げるように怒鳴った。

「よせー！ 女に乱暴はするな!!」

フェミニニストか何かだったかと殴ろうとした兵士が操縦主の男を見ると顔色を真っ白にしてガタガタと震えていた。

「あの化け物が目を覚ますぞ……ッ!!」

ヒュッと息を詰まらせた兵士が振り上げてたライフルをゆっくりと下ろす、もし「アレ」がもう一度動き出したとして止める術はもう無いのだから。

「もう、たくさんだ……」

その言葉に誰もが理解を示していた。

for fourth answer 『4つめの答えの為に』

一粒、水滴の落ちる音がする。

「———!!」

何かの音がする、いや、音というより声だろうか、でも……誰だったか。

また一粒水滴の落ちる音がした、声も聞こえるが頭の中で反響して水滴の音のほうがはつきり聞こえる。

「——ち——!!」

ああ、この声は知ってる……いつだろう、何十年前かだったっけ？

「しん——ろ——!!」

いや、違うな、もっと最近だ、にしても暗いな……いや、俺が目を閉じてるのか。

ゆっくり、目を開けると黒い何か床に広がっている、頭の中でガング音が響いて視界は歪んでいる。

なんだ、この黒いの……ああ、水か。

「目——覚ま——!」

俺から出てるのかこの水、汚えな……いや、これは……ああそうだ、これ、血か。

「ぐぷっ」

ビチャビチャと血と思しき液体が俺の口から零れ落ちて床にぶちまけられる、聞こえてくる声が一層大きくなった。

さて肝心の声の主は誰だったかと下を向いていた顔を前に向ける。意識がはつきりした。

「かん、ぎし……」

「ああ、信一郎……!!」

俺の眼前、10mもない場所で椅子に拘束される声の主が俺の顔をみてぼろぼろと涙を零している。

「よ、助け……きた、ぞ」

「そんなに、なつてまで……どうして!!」

そんなにつて、どんなだよ。

と思ひながら首を振るとどうやら俺は拘束されているみたいだ、義手義足に金属で出来た拘束が1本ずつと……。

「右腕に、6本か」

「ああ、その通り! いやなに、君の鉄の四肢にいくつ拘束を付けようが無駄だと思つたのでね、生身の腕に過剰なほどの拘束をさせて貰っているのですよ!」

ねつとりとした耳に入れるだけで不快になる声が簪のいる方向から聞こえてくる、顔を向ければああ確かに、白衣を着た痩せぎすの不健康の代名詞のような男がにやにやと笑いながら俺を見ていた。

「ああ、探して磨り潰す手間が省けたよ、結構気が利いてるんだな、無能」

「こんな状況でなおその言葉が吐けるとは、素晴らしい、賞賛に値しますよ」

ぱちぱちと余裕ぶつて拍手する畜生が死ぬほどムカつく、この右腕の拘束具さえなければやすぐにでも引き裂いてやれるんだけどなあ。

「まあ構いません、気分はどうです?」

「最高だよ、ここ最近で一番すつきりしてる」

それは間違いない、いやむしろ一周回つたのかとも思えるほどだ、ズキズキ痛みこそするものの得体の知れない震えも、視界のノイズも見事に消え去ってくれている。

「それは何よりです、ではさつそく公平な取引と行きましょう」

「頭湧いてんのかテメエ、どこが「公平」だ」

「おや、君はこれを公平ではないというのですか? では何でしょう、僕が有利とでも?」

「間抜け、テメエが下だ無能」

口に溜まった血を畜生に吐き掛けるが1mも飛ぶことなく床に伸びた俺の血に着弾する、どうも肺活量が死んでやがる、体調は最悪の3歩先ぐらいらしい。

ああクソ、この右腕がいつそ無けりやなあ。

「まあそれでもいいでしょう、では取引内容ですが、簡単です！」

「ほう？　言ってみろ」

「君の身体を細胞単位で解体バラしたいのです」

そう言い切って言葉を止めた畜生がクソ汚え笑みを隠そうともせず俺を見る。

「テメエは経営をさせたならダメな無能だな、取引って言葉を辞書で引いてきな」

「……私はハイ以外は聞きたくないですよ」

よくわからないハンドガンにしては妙に大きくサブマシンガンにしては妙に小さく、よくわからん無駄の極みともいえるフォルムをした21世紀初頭に想像したぼくがかんがえたさいきょうのてっぼうみたいなものを俺に突き付けながらそう言った畜生に意識せず鼻から笑いが漏れる。

あまりに武器といった実感がなさ過ぎて子供におもちやのレーザー銃を向けられているようだ。

「それこそ無能の極みだな、交渉事は断られることを念頭に置いておけ」

「では……こうしましょう」

おもむろに玩具を仕舞ったかと思えば今度は本物のハンドガンHK45CTを取り出してあろうことか簪へと突きつけた。

「待てー！」

「色よい返事をいただけそうですね」

「ダメ！　それだけは絶対にダメ！」

なるほどクソツたれ俺のアキレス腱をよくわかってやがる、というより俺が何のために来たのかなんざ考えなくても分かるか。

目の前の畜生はマドカの事を踏まえると倫理観なんざ皆無の自分に利のある、それも金銭ではなくクソみたいなひん曲がつた知識欲のためだけに動いてる、時間を稼ぐなんてのは悪手中の悪手だろう。

「……俺からも条件がある、分かるとは思いますが簪を開放しろ」

「だめ、いやだ……信一郎がいらないなんて、耐えられない……!!」

「ええ、残念ながら、彼女も必要でしてね」

……なんだと？

なぜ簪が必要なんだ、極論どこにでもいるISの代表候補制だ、簪でなければならぬ理由なんてどこにも――

「何故かは分かりませんが……彼女のIS」

ぞわり、背を嫌なものが駆け上がる、まさか……まさか、まさかまさかまさかッ!!!

「私にも一切解読できないんですよねえ……」

「それは……ッ!!」

「しかも！ 彼女がいなければまとも起動さえできないのです！」

俺の……所為かよ……ッ!!

「ですので、彼女は絶対に必要なのです、我が愛しの女神、篠ノ之束博士が私のために作った課題を解くために……ね」

右腕を引こうが押そうが全く動かない、拘束が幾つもあるからじゃない、右腕がピクリとも反応しない。

「それに君自身も面白い！ 君を拘束する時に少しでも調べたが内臓は既に幾つか破裂していて右腕なんて皮袋に入ったミンチ肉、しかも既に2リットル近く血液は失われている、君がいくら大柄だとしても生身の比率的には既に致死量の血液を損失している！ なのに何故生きていられるのか?! ああ面白い、とても面白い！ あのクローンで実験する事よりも強く興味を引かれているよ、私は！」

「クソッ、イイ趣味してやがる……!」

「ああ、そうだろう？ さて私がなんとか譲歩できる交換条件だがね、少なくとも彼女を五体満足でいさせてあげよう、どうだい？」

どうする、どうすりやいい、ここで呑むか……？

最悪俺が死んでもマドカ達がいる、簪だけでも助かる可能性は充分にある、もしダメでも大丈夫だ、母さんが簪を助けてくれるだろう。

俺のプライドなんざいらねえ、いや元よりそんな物はない、だが信じれるか、コイツの言葉を？

「待ってくれ、少し……少しだけ……」

「ふむ……」

俺が少しでも時間を稼げばそれだけ簪の助かる確率は高く――

「まあいいよ、でもリミットは」

簪にちらりと目を向けたクソ野郎が指に力を込めるのが嫌でも分かった。

乾いた音が簪の脚を貫く、黒い水が簪の脚から弾け、零れた。

「あッ!! つぐううっ!!」

「彼女が失血死するまでだ、早く決めてね?」

「なに、おッ!! お前えエエエエエッ!!!」

もう迷ってなんていられない、一秒でも早——

「だい……ッ、じょうぶ、だから……ッ!」

「大丈夫な訳ねエだろうが!! 俺は、俺はお前が……!」

歯ア食いしばって、汗ダラダラ流して、無理矢理作った笑顔の、何処に大丈夫な所があるってんだよ……!!

「私は、いいか、ら……ッ! 一人だけ、でも……逃げて」

「おや、彼女は中々君に酷な事を言いますね、この状態の彼にどうやって逃げる方法があると言うのですか?」

簪にハンドガンを突きつけながら残った左手でおもちやの銃を俺に突きつける。

「ハッ、アナタは……本当に馬鹿だね……信一郎の事を知りもしないで、よくもまあ、そんな事を」

「随分と調子よさそうですね、ではタイムリミットを早めてみましょうか?」

「止せッ! つがあああああああッ!!! 糞ッ! クソクソクソオッ!!!」

なんとか拘束から右腕を引きずり出そうともがく、既に右腕に腕の硬さは無く柔らかい生の腸詰め状態だ、引っ張れば抜けるかも知れない。

左腕レーザーを起動しようとしてもエネルギーが枯渇していてウソともスンとも言わない、だがこの純粹な力だけはエネルギーによるものじゃない、拘束を引き千切る事は容易いだろうが、右腕の拘束を引き剥がしている間に簪が撃たれるだろう、もう……

「やめたまえ、残った腕が千切れるぞ? 最後の『たった』一本だろう

？ 大事にしたまえ」

「舐めてくれるなよ、クソ野郎……!! 最後の『たった』一本じゃねえ……!!」

こうするしか、ねえ。

左腕両脚の拘束を引き千切りながら刃を展開する。

『どうせ』最後の一本ってんだよオオオツ!!!」

右肩に刃を突き刺し、挟りながら右腕を根元から引き千切り、走る。

「ガアアアアアアアアアアアツ!!!」

「な、ヒツ!! うわあああああああ!!!」

左腕を顔前に持つてきて頭を守る、ハンドガンの発砲音と共に左腕に衝撃、着弾したか、次いで右脇腹が引き攣る、大丈夫だ、もう痛みは無い。

たかが、45ACPで今の俺を止められると思うな、俺を一発で止めたきや。50calでも持つてきやがれ。

指の間からおもちやの銃を構えてるのが見える、首を下げる。

銃の音とは思えない甲高い音と共に光が俺の左腕を弾き上げる。

思いの外強い衝撃に踏鞴を踏みそうになる、だが足裏の固定用パイルを地面に突き刺し、耐えた。

ちらりと見た左腕はバラバラに分解されていた――

「く、ハハ!! クハハハ!! ツいてる! 私は――」

「――だから、どうした?」

体が後ろに持つて行かれそうになるが脚は下がらない、まだ生きてる筋肉がブチブチと音を立て千切れる。

一歩、前に踏み出した。

「ヒツ、そんな、馬鹿な……!!!」

「……やつと、トドイタ」

腕が無い、だからどうした、ブン殴るのに腕なんざいらねえ、コイツの頭カチ割るなんざ……。

「オオオアアアアアアアアアアツツ!!!」

無駄に硬エ俺の頭があれば、充分だろうよ。

「ツブ……ギ……!!」

まるで豚みたいな呻き声をあげたクソ野郎はそのまま勢いを付け地面へと叩き込まれたかのように倒れた。

鼻と前歯数本へし折ったらしい、ビクビクと痙攣してやがる、右目が少し暗く滲む、俺も頭を割ったか切ったらしい、でもこれで……やっつと。

「しん……いちろ……」

少し、しゃがもうとしたら膝から崩れ落ちた、もうまともに力も入ららしい、簪の脚の傷口に口を近づけれ。

大丈夫だ、カンギシ……いま、おレガ。

「ナオスカラ」

信一郎が私の傷に口づけをした瞬間、痛みが無くなった。

「なんで、信一郎……！　だって、能力は!!」

傷口は、綺麗に、まるで何も無かったかのように治っていた、治療して時間を掛ければ治る筈の傷が即座に治った、それは間違いなく、命を削って。

声を掛けても信一郎は少し体を揺らすだけ、このままだと死んでしまふんじゃないかっていう恐怖に襲われながら声を掛け続ける。

「う、ぐ……うぶ……！　ぐ、くしよ……なめ、やがって、殺しゅ、殺ひてやる!!」

「ツ!!」

鼻が詰まった様な声を出し、男がハンドガンを振り上げて立ちあがっていた。

「二人とも、纏めて死ねエエエ!!!」

とつさに信一郎を守る様に前かがみになって目を瞑って顔を逸らす、銃声が数発響いた。

「……っ」

痛みがない、死んだわけでもなさそうで、訳が分からない、目を開けて前を見ると。





『目標、目視圏内です織斑君、V・O・Bの接続を切り離しますよ』  
「了解です、V O B、パーズします！」

背後からゴン、ガゴンと音がすると同時に俺自身の速度が急激に減速する、それでも瞬時加速と同等ぐらいの速度なのにも関わらずパーズしたV O Bのバラバラになったパーツが俺の前方へと撒き散らされた。

凄まじい速度の低下に身体が思いつきり引つ張られてバランスを崩しそうになるが必死で堪えると、まるで爆撃のようにバラバラになったパーツが落ちて爆発する。

「もし、巻き込まれた人がいたら……」

『間違い無く死んでますがその心配はありません、今内部では大規模な戦闘が起きている筈です、外に割く人員等一人もいないでしょう』  
フレドリカさんの言葉に少し安堵して、あまりにも呑気な事を考えているんだと息を小さく吐いた。

『ええ、それが貴方達学生の『普通』です、それを大事にしてくださいねえ。どうですかあ、情報では巨大な排熱口だそうです、マップにはマークしてあります、見えますかあ？』

考えを見透かされてたようで驚いたが、兵器に携わる人間だと思えない程優しかった、いや兵器に携わるからこそなのかもしれないけど。

「探します……ありました！ 巨大な熱源です！」

『それでは、そこから内部に向かって下さい、その後マドカちゃんたちと合流を、今から約1時間後に我々からも増援を送ります』

増援？ 増援は期待できないってさつき確か……

『こっちは方が付きました、全敵I Sが機能停止、残るはクラッキングの阻止ですが状況が逆転、現在逆探知によるクラッキングを行っています、双方共に死者ゼロ、I S学園の娘たちは負傷も無しです、勝利ですよ』

「それは！ 良かった、のでしょいか……」

『そうですねえ、確かに我々カラードとしては『良かった』のでしょが世界的に見ると、最悪の状況でしょうねえ。ほぼ全てのI Sが力

ラードに奪われた上に明確な兵器としての勝敗が付きました、これは世界が荒れますよ』

そう事実を突きつけられると、俺は少し、やりきれないものが現れてしまった、けど俺は。

「少し、少しだけやりきれないって気持ちはあります、けど俺は……迷わない、俺はマドカを助ける、シンも簪も、助けて見せる、そう心に従ったんだ」

通信の向こうで小さく笑う声がする、それは馬鹿にしているとか、面白いからとかじゃない、見えないけどもそんな気がした。

『では、そこを降りて下さい、きつと中は既に我々が来た事に気付いているでしょう、多少派手な事をして問題ありませんよ』

「わかりました！ 織斑一夏、白式、行きます!!」

既にシン達が降りたからだろう、ワイヤーが何本か垂れ下がっているその巨大なトンネルを直下で俺は下り始めた、ワイヤーが途中の横道へと続くがISを装着した俺では横道は小さすぎる。

だからこそ俺は巨大なファンへと雪片を構えた。

「ツシイッ!!」

ファンの羽を一枚斬り飛ばし、その隙間をくぐる、あと4枚だ。

最下層へと降りた直後周囲に人がいない事を確認し即座にその縦穴から逃げる、数秒遅れて俺が切り落とした羽が轟音を立てて落ちてきた。

「マドカ、シン、皆、今行くぞ……!!」

視覚内に映る遮蔽物の描かれていない座標表示型の立体マップで唯一の稼働ISである一機を見る、俺の感が正しければ、これがマドカの筈だ。

極力そちらに向かうように移動を始める、何だか嫌な予感がする、急がないと。

「なっISだと?! 侵入者だ！ 無人機を出せ!!」

角を曲がった瞬間重装の兵士が数人、俺と鉢合わせして銃を向けてきた、ハッキリとした敵意と殺意に小さく息を吞んでしまう。

「無理だ！ 無人機が出せない!!」

「クソ！ 撃て、撃てえ!! チクシヨウ！ チクシヨウ!!」

よく見れば既に兵士達はボロボロだ、撃つてくる銃も咄嗟に顔を防御したけどISへのダメージはほぼゼロ、雪片で銃を斬り飛ばし、爪で潰す、でも油断はしない、シンが生身でISの防御を一撃で斬り飛ばしたのを俺は知っている。

「失せろ！ 命までは取らない!!」

そう宣言すると武器を失った兵士たちは我先にと逃げて行った、甘いかもしれないけど、そうでもなけりや俺は皆に顔向けなんてできないから。

知らないうちに呼吸が速くなる、マドカのISだと思っ光点を追いながら周囲を見回すとそこら中に弾痕やヒビ、崩落した天井に、壁一面の赤黒い血、少し、吐きそうになった。

いったい誰がこの惨状を作ったのか、あの二人か、シンか、それとも……マドカなのか。

「侵入者、敵の増援だ！ これ以上奥へ進ませるな!!」

「クソ、罅が明かない……!」

武器を斬り飛ばし、弾き、壊し、場合によっては兵士を壁に叩きつけて戦闘力を奪う、その度に僅かに時間を取られる、まるであらゆるものが俺の邪魔をしているかのようだ。

無視して行こうにも密集している場所だと撥ね飛ばし、殺してしまいかもと思えば思うほど慎重になってしまう。

再度角を曲がった先には既に俺が来ていることが分かっていたのかバリケードを作って待ち構えている兵士たちがいた。

俺は咄嗟に壁に爪を刺し込み、鉄板を剥ぎ取って盾として構えた。息を付く間もなく銃の掃射が俺に殺到、途轍もない大型の銃、映画なんかで見た戦車の上に乗ってるようなものがいくつも火を噴く。

俺が剥がした鉄板は瞬く間に穴だらけでグシャグシャに拉げた、ISのシールドエネルギーが少しづつ時間とともに減少する。

粒子砲の砲口を兵士たちの天井付近に向けた瞬間兵士たちの後ろの壁が吹き飛んで何かが二つ飛び込んできた。

「なっ、なんだ!!」

兵士が目に見えて狼狽える、すぐに視界内のマップに目を向けるとそこには先ほどまで追いかけていたI S反応がそこにあつた。

「マドカ……じゃない…!!」

土煙の中では黒い蝶のような翅を持ち片手に槍とショットガンをそれぞれ持った黒いI Sと赤く赤熱したヒビを持つ蜘蛛のようなシルエットをした全身装甲のI S、反応からして片方はI Sじゃないらしいが今の俺には考える余裕はない。

黒いI Sが槍でデカイマシンガンを破壊してショットガンを兵士に撃ち込んで無力化する、蜘蛛のI Sが赤熱している剣で兵士の武器を溶断し、蜘蛛の足で踏みつけて次々と倒していた。

あれは、敵か……??

すべての兵士を倒した後俺の存在に気付いた黒いI Sがピタリと動きを止める。

「な、なんで……?!」

「その、声は!」

「お兄ちゃんが?!」

「マドカ!!」

黒いフェイスガードが開き、嬉しいという表情と驚きの表情がごちゃまぜになったマドカがショットガンを取り落して呆気にとられていた。

俺は思わずマドカに近づいて抱きしめる、それを見た蜘蛛のI Sを纏った人は呆れたように頭部装甲の上からこめかみを搔いた。

「良かった、会いたかった……そうだ、大丈夫か! 怪我はないか?!」

「だ、大丈夫、大丈夫だよお兄ちゃん……」

「そこまでにしとけイチカ、こっちは一大事だ」

俺の肩を掴んでマドカから俺を剥がした人が落ちてたショットガンを手に取る。

「う、ぐう……」

「も少し眠ってる」

小さな呻き声が聞こえた瞬間、蜘蛛の人がショットガンを呻いた兵士に撃つ、ゴロンゴロンと転がっていったが兵士は血を出していない、殺さないような弾を使っているのだろう。

「あたし達はかすり傷一つ無いが、シンイチローがやべえ、早いとこ情報引きずり出さねえと死ぬぞアイツ」

「なん……ッ！ わかった、俺も手伝う、邪魔にはならないはずだ」

シンが死ぬという言葉聞いた瞬間戸惑ったけど、ならばなおさらのこと迷ってる暇なんてない、じゃあついてこいと移動を始めた蜘蛛の人を追いかけマドカと俺が一気に加速した、そのISはなんだとか、この人は誰だとか、色々聞きたいけど、今はそんな事よりも親友のことが心配だった。

「死ぬって、いつたいたいという！」

「ああ！ シンイチローが孤立したらしい！ いくらアイツだつっても精神がすでに半ばぶっ壊れてる、早いとこ任務終わらせて治療でもしねえと持たねえぞ！」

精神が、だつて？

いや、でも確かに、少し兆候はあったかもしれない、いつになくシャレが少なく、あと……あの時、人殺しも躊躇わない位、キレてた。

「ッ!!」

急に二人が停止して耳元に手を当てる。

「……本当か？ ああ、分かったすぐ行く！」

「どうしたんだ？」

「シンイチローとカンザシの二人の場所が分かっただらしい」

その言葉に緊張感が高まる、二人とも同じ場所にいるなら、なぜシンは簪を連れて脱出していないんだ、シンならそれぐらい簡単なはず、それをしていないってことはつまり。

「捕まったか……！」

「行くぞ、マジでやばい」

その言葉に頷いた俺とマドカが壁を溶かして破壊して先に行く蜘蛛の人を全力で追いかけて始めた。

廊下を高速で過ぎ去り、時には部屋の壁を破壊して、完全にそうじゃないとはいえほぼ直線で進んだ俺たちはものの数分で目的の場所へと到着した。

「ここだ」

「早く突入して……」

「待つて、お兄ちゃん、この部屋のどこに誰がいるかはまだ分かってない、慎重にいかなきゃ二人とも……殺される」

マドカに制された俺は、マドカの言葉にその通りだと口を噤む、それに関しては俺なんかよりマドカの方がよっぽどできる、従う以上のいい案は俺にはない。

蜘蛛の人は何かコードのようなものをドアの横にあるパネルを引き剥がして裏に刺して見るからにイライラしている。

「クソ、たかが一つの部屋にこんな面倒なパスワード掛けやがって……落ち着け、落ち着けアタシ、ふーっ……よし！」

しきりに空中へ左手を動かしていた蜘蛛の人が最後の一言と共にパネルを握り潰した。

「いいか、もうこの基地の中に敵ISは一機もない、ドアから突っ込んでしまえば相手が頭に突き付けた銃のトリガー引くより早く無力化できる、冷静に落ち着いて素早く判断しろ、出来ない事はないはずだ」

「ああ、分かった」

「任せろ」

合図で突っ込むぞ、と蜘蛛の人が言った瞬間、中から銃声と男の絶叫する声が聞こえる、全員が一気に目を見開いた。

「もういい！ 行くぞ!!」

その言葉と共にマドカと共に扉を斬り壊し、開け放つとそこには足元に上下に真つ二つになった男の人と、暗い部屋に幽鬼のように浮かぶ明らかに何かがおかしい親友の姿があった。

「……いつ、は」

足元に転がり言葉にならぬ呻き声をあげ、必死にマドカへと手を伸ばす白衣の男の上半身、マドカは少し驚いた、まさか即死していないとは恐れ入る、よほど生きる事に貪欲だと見える。

「……きつと私は待っていたのだ、ずっとずっと、この男をこの手で殺す事を」

その痩せぎすな頬に涙をボロボロと垂らし、ビクリビクリと痙攣する男に心からの侮蔑を送る。

「惨めな姿だ、私を兄さんのDNAから生み出し、首輪をつけ、人ではなく兵器として扱う、自分は神だとのたまった男の結末が、これか」

マドカがそう小さく呟き手に持つ槍を振り上げる、自分を、愛する家族を、自分を見てくれた者たちを苦しめてきた男だけは、私が殺さなければならぬと。

「死——」

「ダメだ」

だがその振り上げた右手を優しく掴まれ、止められる。

振りほどく事は容易いがそれは、優しく掴まれた手は、そして優しい声は、マドカが今まで受けたどんな拘束よりも強固で、逃れる事が出来ない。

なぜだ、と声を上げようとした、止めてくれるなど睨もうとした、だがそれは、いつの間にか装甲を解き、柔らかで細い指で手を支えられ、慈しみの表情で真っ直ぐに覗き込む大事な家族の一人によって止められてしまった。

「ずっと、待ってたんだぞ」

「……ああ」

震える声でそう小さく漏らした言葉にオーシエは優しい声で共感した。

「やっと、届いたんだぞ……！」

「……わかってる」

あらゆる感情が混ざって声と、振り上げた右手も槍と共に震える。



「こいつを、見逃せと言うのか、生かせと言うのか！」

「そうじゃない、マドカ」

そう言ったオーシェがマドカの頭を膝をつき、抱き込んだ。

左手にはハンドガンが握られている。

「これはお前の役目じゃない、お前はこの手を汚さなくてもいい、それも、こんな屑でなんて尚更だ」

「っ……………」

「人を殺すなんて、お前が背負うもんじゃない、これは、私の役目だ……見てろ」

ハンドガンを男に付けつけると男が震えながら手を伸ばす、まるで命乞いのようなだ。

「や、めっ…!! だず、て…!!」

正しくそれは、そのつまらない男の必死の命乞いだった、ハンドガンのトリガーはオーシェ本人が思うよりもずっと軽く、ただ乾いた音が一つだけ響く。

「お前なんざ、ただの凡人以下でしか無かった」

「終わった、んだな」

終わったと呟いたマドカが空いた手を握り締める、解放感も、哀しみも、そして喜びさえも無かった、ああ、こいつは所詮その程度だったのだ、と。

きい

音が聞こえる。

ごぼり

音が聞こえる。

暗い中響くその音に全員が目を向けた。

崩れ落ちる事も無く、そして動く事も無く、ただスクラップで繋がった良く分からない腕のような、それとも刃のような物だけが振り子のように揺れる。

全員が言葉を失った。

ようやく気付いたのだ、その男から右腕が失われ、とめどなく、だがゆつくりと、粘つくように血が右腕のあった場所から零れおちていることに。

ごぼ、ごぼ、粘り気のある液体から気泡が出てきては破裂するように、酷くはつきりと、だが酷くおぞましく、そして酷く苦しげな音がその男から漏れ出てくる。

左肩の付け根から延びる、歪な腕のようにも見えるよくわからないスクラップの集合体が男の揺れる動作に合わせて金属をこすり合わせるような不快な音を立て、揺れる。

千切れた右腕の付け根から今もなお心臓の鼓動を示すように液体を噴きだし、ただ、その男は後ろを向き、立ち尽くしていた。

赤黒い液体が止めどなく溢れ落ちる。

途切れる事なく唯々信じ難い程に、その液体を内包していたであろう物体の体積以上に、地に液体を撒き散らす。

それは血液だと言われたとてそう易々と信じる事はできない、それ程までに、どろりと、粘度を持つていた。

否、少しずつ、確実に、その粘度を増していく、それは最早溶けた硝子のようにすらあった。

きい、きい

「シ……ン……？」

一夏はまるで、恐々と、そして小さく、自然に声が零れたかのように名を呼んだ。

きい……

金属音が止まる。

ゆつくりと、男が振り向いた。

その顔に表情はなく、ただ顔の半分をまるで葉脈のように肉が根を張っていた。

唯一見える左目の瞳孔は融け、もはや色の境界線さえも分からず、肉の根に覆われた右半分は肉自体が融解したかのように窪んでいる。

「ヒツ……」

その小さな悲鳴をいつたい誰が溢したのか、だがそれを誰が責めよ

うか、男の姿は最早、人として認識して良い姿ではなかった。

どろり、どろりとゆっくりであったものの確かに流れ落ちていた赤黒い液体が、ついに動きを止める。

だがその赤黒い「ナニカ」は決してその千切れた腕の付け根から離れようとせず、それどころか地に溜まったその液体を吸い上げるかのように、ゆっくりと蠢き始め、太さを増して行った。

まるで、細く長い腕にも見えるナニカが新しく組み上げられたかのように。

「シン、シン……だよな……う？」

眼前の人に似た形をしたナニカは答ええない、ただ右腕のようにも見えるナニカだけがグチャリグチャリと音を立て蠢くだけ。

「とにかく、任務は達成だ、二人を…連れて帰——」

一步、マドカが足を踏み出した瞬間、眼前のナニカがゆっくりと、顔を上げた。

『aAe gIE……kAn aSI maM OI』

およそ言語とさえ言えない何かを、その肉の蔦に大半覆われた口から発した。

さらに一步、足を踏み込む、赤黒い血液で構成された腕を揺らし始める、さらに一步、ギイイとスクラップが地を擦る。

さらに、一步。

『IiiiiiiiGggieeeeeEEAAAAaa  
AAAAAAAaaaaaa  
』  
魂を削り取るような、おぞましい金切り声を上げ、両腕を振り上げた。

咄嗟にマドカの前に出た一夏が爪とガントレットでその攻撃を受ける。

「ッ!!」

ダメージはほぼ無い、当然だ、決して戦車砲ほどの威力も無く、特殊なエネルギーを纏っているわけでもない物理攻撃、ISに通る筈が無い。

だが、それでもこのナニカは、誰よりもISへの対処法を知ってる筈の一夏の親友は、ソレを止めなかった。

一夏とナニカの直線状には椅子からの拘束を解こうと必死でもがく簀がいる、一夏は歯が砕けるかと言う程に食いしぼる、彼は気付いてしまったのだから。

「シン、お前……こんなになつて……「こんなもの」になり果ててまで……ッ！ 簀を守ろうとしてるのかよ……ッ!!」

最早ソレに意識は無く、ただ執念のみで動いている、出来の悪い傀儡のようだ。

眼前のソレは一切届かぬ攻撃に一つの判断を下した、それはひどく悍ましく、そしてひどく惨たらしい結果を生成する。

ぶちゅ、ぐちゅと音を立て拳銃弾による傷跡がブクブクと泡立ち、脹らみ、肉と皮を裂き、もう一本の腕を作り出した。

二本連なるようにわき腹から作り出された骨ばったように細く、二つの「肘」を持った腕が一夏の腕へと掴みかかる。

「遅かった……！ もう、もうコイツは……ッ！ 人じゃない……！」  
「シン……!!」

足りないものを補う、ただそれだけの行動がこれほど惨いものだとは理解できなかつた、ダメージを与えられないなら攻撃するための腕を増やす。

目で追えないならば、追えるように「目」を増やす。

葉脈に覆われた顔の右半分、くぼんだ葉脈の隙間から飛び散るように赤い液体が漏れる。

ぎゅろりと無数の眼球が、一夏たちを見据えていた。

だが、10秒と経たずに一つの眼球が弾け、押しつけられた空洞からさらに小さな眼球が複数姿を現す。

「まずい、早く……止めないと」

無意識的に呟いたその言葉に、一夏は理解が追い付かない、もう既に手遅れであることなどわかるのに、それでも一夏にはまだ信一郎は人間であると、感じた。

だがそれも長くは持たない、今のうちに止めてしまわなければそれ



血を塗り固めたような毒々しい色合い、両腕は細く、だが大きくせり上がり、前腕が通常よりも長い、胸部はまるでフオーミュラを連想する形状へと変化し、背部にはまるで翼を思わせるような巨大な物体が蠢く、脚部にも装甲のようなものが張り付いている。

右半身はぐちゃぐちゃと蠢く肉塊で構成され、左半身は鉄くずを張り付けたような姿ではあるが、それは間違いなくナインボールセラフの姿だった。

だが、あまりにもそれは痛々しく、苦しげで、悲痛な叫び声をあげていた。

表面が泡立つように次々と膨れ上がり、それが目玉となる。

だがそのすべてが最早人としてモノを見れる形ではない、へこみ、歪み、繋がり、そして瞬く間に弾ける。

見えなくなった目を補うように新たな目が創り出され、また直ぐに弾ける、それを補うため今度は数を増やし、潰れ、増え、潰れ、増え、潰れ、増える。

顔を覆い、足りなければ体を覆う、体を覆い、足りなければ腕を覆う、腕を覆い、足りなければ脚を覆う、全てを覆い、全身が蠢き潰れる眼球の集合体となったとき、それこそがリミットだ。

「おい、イチカ！ カンザシの背後の壁を壊せ！ 裏に確かアリーナがあつたはずだ、ここじゃ狭い！」

「あ、ああ！」

「マドカ、イチカを手伝え、カンザシを助けたら私も助けに行く」

「わかった」

ギチギチギチと何かを引き絞るような音と共に例えるとするならば偽天使が両腕を前へ掲げる。

「来るッ!!」

一夏の言葉と共に3人が射線から遠ざかった、それを追うように床壁天井を無数の光弾が着弾する、地に転がっていた死体が弾け、焼け、粉々になって消え去った。

威力こそ以前に見たものよりも遥かに小さいが、それでも確実にこれはISにも通じるものだと言員が理解する。

「兄さんっ!!」

「ああ！ さあ来い、シンツ!!」

マドカが槍を使い、簪の背後にある壁を破壊し、偽天使がそれに意識を取られた瞬間、一夏が偽天使に掴みかかり自分諸共壁の大穴へと飛び込んだ。

「カンザシ、今から拘束を砕くぞ、大丈夫か？」

「は、い……」

「よし……いいぞ、もう大丈夫だ、今もう一人がこっちに向かっている、守ることに関しちやそっちの方が上だ、あとは私たちに任せておけ」  
「待つ……」

「わかっている、行きたいんだろう、でもダメだ」

簪の縋るような言葉に、オーシエはただ冷静にそれを拒否する。

「IS、動かないんだろう、そのの、ああもう肉片ですらないな、ソレが手を加えたってことはそう言うことだったのはよく知ってる」

オーシエの言うとおりだった、男に手を加えられたISは自らの意志で起動できなくなってしまうていた、もう起動できたのであれば簪は早急に逃げていたなどと当たり前のように考えられることだった。

「それに、お前のIS、さつき緊急停止したんじゃないか？」

「なんで、それを……」

先ほど、打鉄式が緊急停止し、そのお陰で信一郎の首を刎ねるなどと言う簪にとって堪らなく恐ろしい出来事が起こらずに済んだのだ。

「篠ノ之束が極一部を除き全ISを強制的に停止させた、今もまだ動かないはずだ」

「篠ノ之博士が……」

「だが、まあそうだな……これは私の経験談だが、ISを無理やり剥がされた奴が手を触れずに想いの力って奴だけでIS取り戻したのを見た事がある、アイツは諦めなかった」

「それはー」

ニツと笑みを浮かべたオーシエに簪は心から感謝した、この人は「絶対に諦めるな」と言ってくれているのだ。

壁の向こうを光を取り戻した瞳で見据える、赤い残光を引く偽天使と白黒の残光が幾度となく接触し、絡み合い、そして光をまるで花火のように散らしている。

「信一郎は、私を助けてくれました」

「ああ、私達もだ、返しきれない恩がある」

だからこそ、一秒でも早く行きたいだろうにオーシエはただ簪を待った。

「信一郎は、もう限界だったはずなんです、色も失って、気が狂う寸前だって、それでも笑ってたんです」

「……ああ」

分かっていた、何かがおかしいことは、だがまさか数日前から既にそんな状態にあったとは、思ってもみなかった。

「でも、そんなになっても信一郎は私を助けに来てくれた、こんな罠にかかった馬鹿な私を」

指輪を左手で握りしめ、一度、目を閉じる。

「今度は私が、私たちが信一郎を助けます、だから……一緒に行く……」

勿論と、確かにそう誰かが答えた気がする。

光が漏れる、簪を包み込み、その姿を劇的に変えた。

「撃鉄玖識!!」  
うちがねくしぎ

元々のスラスタ―兼ミサイルラックが大型化し、露出していた身を殆ど装甲で包み込み、頭部を口元を残し覆うような兜にはまるでアンテナのような機構が、それは形容するならば。

「似てるな、お前たち」

「ありがとう……最高の褒め言葉だよ」

ナインボール・セラフ、色こそ違えどその姿によく似ていた。

ギョロリといくつもの眼球が一夏を見据え、ぼこぼここと肥大化する。  
何かが来ると直感で感じた一夏が咄嗟に横へと大きく飛ぶとIS



ですら危険だと警告するほどの熱量を持つ光が細く先ほどまで一夏の居た場所を貫き、一夏の後を追う。

地に壁にと着弾した光は地面を捲り上げ、壁を溶かし砕き、それだけに飽き足らず数秒後に連鎖的に爆発する、確実に相手を殺すための攻撃であることは明白だった。

だが、唐突にその光が途切れる、肥大化して光線を放っていたはずの眼球がその負荷に耐え切れず破裂したためだ。

「!!!!!!」

もはや声ときえ認識できない絶叫を上げ右腕で顔を押さえ、残る左腕からレーザーブレードを伸ばし振り回す、その動きはひどく稚拙でまるで幼子が棒切れを振り回し駄々をこねるようだ、その攻撃力が壊滅的なほどの破壊力を秘めている事さえ除けば、ではあるが。

マドカがその攻撃に槍を打ち合わせる。

「つぐ……!!」

盲目状態で行われた無差別かつ雑多で稚拙な攻撃から繰り出されたとは到底思えないほどの、仮にISの土俵でない地上であったらたらを踏んでいるであろう程に重い斬撃に思わずうめき声をあげた。

「おおおおおッ!!」

咆えるように声を上げ、両手で槍を握り、全力で刃をカチ上げる。

マドカがチラと目配せをする、カチ上げられた刃と槍、その隙間を縫うように一夏が刀を滑らせ、スクラップの左腕に打ち付けた。

凄まじい火花と金属の接触音を残し、刀の切っ先が逸れる、決して凄まじい技量によって逸らされたのではない、純粹な装甲の強度によって逸らせざるをえなかっただけだ。

ビリと手に残る痺れに小さく舌打ちし、再度刀を構えなおす、マドカが並ぶように槍を深く構え、息を整えた。

「冗談みたいに硬いな」

「それに洒落にならないぐらい重い」

左腕を振り回していた偽天使がぴたりと動きを止め、ゆつくりと頭部を押さえていた右腕を離した。

「やっぱり、無尽蔵に出てくる、あの眼」

「シンは確かに変な奴だったけど、いまのアレは群を抜いてる、ああなってまで、簪を守ろうとしているんだな」

「それは……哀しいな」

「ああ、だからこそ止める、あのバカをぶん殴ってでも」

右手に持つ刀を握り込む、友を救う、ただその思いのために。

偽天使が金属を、金属のように硬質に固まった血液を、そしてその継ぎ目をミシミシと軋ませながら両腕を広げた、まるで天使が降りて来たかの如く神々しくある筈のそれは、悍ましく、そして醜く、悪しき物が降り立ったかのようにさえ見えた。

背後の空間が歪み、割れ、赤の光を湛える何かが浮かび上がる。

また、ぞわりと背を何かが駆けた。

「マドカ、避ける!!」

「ッ!!」

一夏の言葉に反応した瞬間瞬時加速でその場を離脱する、2人が同時にその場から離脱した瞬間、赤い光球から細い光が二人がいた場所を貫いた。

『ggGGGGYYYYYYyyyyyyyy!!!』

偽天使の呻き声と共に更に更に光球が周囲に浮かび、2人を追って細い光が幾条もいた場所を、そしてその先を貫く。

避け切れず一発掠る、衝撃は一切なかったがそれだけでエネルギーが無視できないほどの量を持っていかれ、冷や汗を流す。

「ただの熱量だけでこれなのか、いや……熱量だからこそというわけか……」

機械的、あるいはぎこちなさ、とでもいうのだろうか、そういった動きが明らかに最初に比べ減っている、立った今の偏差射撃といい『慣れてきている』のは明白だ、いずれあの時のようになるのは目に見える。

早急に倒してしまわねば、撃破がなお難しくなる、そうなればタイムリミットを迎えてしまうだろう。

唐突に、偽天使の背後が爆発したかと思ったら眼前にレーザーブ

レードを大きく振り上げた偽天使が現れる、咄嗟にレーザーブレードへと零落白夜を打ち当て、相殺する。

即座に偽天使を飛び越えるように移動し、その背にある翼のようなブースターへと爪を叩き付けた。

肉の葉脈で構成されたブースターは何の抵抗もなく引き裂かれ、飛び散るがまるで何もなかったと言わんばかりに赤い電撃とともに再構成される。

再構成された偽天使のブースターからぎよろりと眼球が現れ、一夏を視る、それが晒うように歪んで弾けると、続くようにブースターの上部に穴が開き、何かが空中へとばら撒かれた。

「ミサイルか!!」

その判断とともに背後へと飛び、前方にあるミサイルの密集地帯に荷電粒子砲を放つ、直撃したミサイルは消し飛び、そうでないものも凄まじい熱量に当てられ破裂する。

それを逃れたミサイルさえも黒騎士の腕部ガトリングですべて撃ち落された。

「兄さん！」

「助かった、マドカ」

「あとどんな武装があるか、わかる？」

「確か、ビットとプライマルアーマー、あとはブレードからビームを出せたはずだ、変形機構もあったはずだけど、それはどうだろう」

「……じゃあ流石にランスで凌ぐのは、無理かな……フェンリル」

その言葉とともにスタビライザーとしての役目を負っていた部位が右手に収まり、光を纏った大剣へと変化した。

「兄さん、残りエネルギーが30%切ってるけど、大丈夫？」

「なに、余裕余裕、そういうマドカは？」

「38%、何も問題ないよ」

「はは、上々だな」

「……うん！」

ぎ、ぎ、ぶちり、びちやり、金属の軋む音が、肉の千切れる音が、小さく鳴るのに合わせ、少しずつ体を丸める。

肉を無理やり千切るように胸部が前方にせり出しその空いた空間へと頭部を首の骨を無理やりへし折りながら埋め、収めた。

ゴリゴリと腰骨を削り、前方へとスライド、腹部を覆っていた装甲がせり出した胸部装甲を覆うように移動する。

徐々にその形を変え、まるで航空機のような形へと変貌した。

「オイオイオイ、冗談だろ……!!」

「生きた人間がやっていいことではないぞ、アレは……ッ!!」

1度、2度、背部のブースタが弾ける様に火を噴く、数秒間を置き3度目、C-4が爆発したような、そんな巨大な爆発とともに姿が掻き消えた。

「後ろッ!!」

一夏が叫ぶと同時に二人が間を空けるように横へと回避、その隙間をくぐる様に赤い影が通り過ぎ、爆発的な衝撃波が二人を打つ。

「速いー!」

「だけど、俺が知ってるよりも、ずっと遅い……!」

『!!!』

先ほどの巻き戻しのようになり、次は肉がはがれ、へばりつき、へし折れた首がつながり、千切れかけていた腕が繋がれる。

く く く く く く く く く く く く く く く

「兄さん!!」

「しまっ……!!」

偽天使の右腕のブレードを打ち弾き、続き振り下ろされるであろう右腕に合わせるために引いた刀を偽天使は左腕のブレードで即座に斬り付ける。

今までのリズムを意図的に崩された一夏が咄嗟に引いた刀を相手の左腕に合わせ、逸らしてしまう。

明確に表れた大きな隙をまるで噛うようにゴポゴポと破裂する眼球の隙間から覗くバイザーの目を細め、今度こそ右腕のブレードを振

り下ろそうと握りこんだ。

振り下ろされたブレードと一夏の間水色のエネルギーブレードが割り込む。

一瞬の拮抗の後さらにもう一本、水色のエネルギーブレードが偽天使の刃に叩き込まれ、偽天使の体ごと大きく後ろへと弾き飛ばした。

「……お待たせ」

「簪?! その、姿は!」

偽天使を睨みつけるように、いや、まるで悔いているかのように目を逸らすことなく、両手を握りこむその姿に一夏は驚愕した、まるで眼前の偽天使、その元となったニンボールセラフによく似た姿であったからだ。

「もう、もう私は立ち止まらない、そう決めたから……!」

「そう力むなよ、全員でやればなんとかなるかもしれないだろ」

「そうね、私たちも、彼を助けたいんだもの」

立ち並ぶように二機のISと同スケールのACが現れた、黄金の獅子を模した鎧と槍を持つACと蜘蛛のようなシルエットをした赤熱した片刃の曲剣を持つAC

「遅かったな、二人とも」

「ごめんなさいマドカ、私の遅刻よ」

槍をくるりと弄び深く構え、オーバードブーストと前方へのクイツクブーストを合わせ、瞬間的に爆発的な加速を発生させ雷光を引きながら偽天使に肉薄する。

偽天使が即座に反応し、その切っ先を逸らそうと右腕のブレードを振り上げるがその打ち合った衝撃は感じることはできず、ただ「妙に軽い」右腕を振り上げただけに終わった。

だが獅子を模したACは既に偽天使の背後にいる、ならばと右腕のブレードを作動させ、斬るのだと眼前に腕を持ってきて初めて理解した。

「もう、穿ったわ」

『G.i……』

肘がブスブスと煙を上げ、その先が消し飛んでいることに。



怒りと、悲しみと、そしてどうしようもない悔しさから。

「もう、やめようよ！ 信一郎、もういいよ!! 帰ろうよ、一緒にIS学園へ、カレードへ!!」

『……kaN zAk aEiIi CoiLaR……?』

ぶつぶつと何かをつぶやく偽天使に、ぼろぼろと涙を溢し、懇願する、もう帰ろうと、もうやめようと。

だが、もはやソレは、ソレである限り、だれの言葉なのか、何の言葉なのか認識することはできなかった。

『……AAAAAAAAAaaaaaAAAAAAAAA!!!』

簪を蹴り飛ばすように弾き、眼前にエネルギーを蓄積させ始める、確実に、前方の何かを「クロス」ために。

「……マドカ、援護してくれ!」

「兄さん?!」

「流星に、頭にきた!!」

ブースターよりエネルギーを放出、即座に放出したエネルギーを取り入れ、新たにエネルギーを上乗せして放出、瞬時加速と呼ばれる技術を用いて爆発のようなエネルギーの発散と共に、エネルギーをチャージしている偽天使へと肉薄する。

「シイイイン!! こつちを見やがれええええ!!」

—

もはや一応は音としての形をとっていた声さえも認識できないゴポゴポとしたノイズになり果てた偽天使の呻き声と共に簪を睨み据えていた無数の眼球が一斉に一夏をぎゅろりと視る。

偽天使の認識では一夏の攻撃とはそれ即ち致命的に相性の悪い天敵である、故に攻撃を中断し回避行動を取る事こそが最適解の筈にも関わらず、偽天使は蓄積していたエネルギーの矛先を一夏へと変えた。

一夏の視界を白い光が埋める、雪片式型から零落白夜を展開し、光を切り裂くように構えた。

視界の端に存在するエネルギー残量が急速に失われていく、零落白夜本来の使い方は斬る一瞬のみ起動させ、消費エネルギーを限界まで減らす業、覚えたての頃のような起動したままにいるなど今では考えられない事だった。

「お兄ちゃん!!」

マドカの悲鳴が木霊した、光に吞まれた一夏の残存エネルギー数値が瞬く間に削れている、その数字が0になったとき待っているのは愛する兄の死だ。

間に合え、間に合えと心の中で叫びながら大剣を振り上げる、カキンカキンと大剣の展開装甲が起動する、刹那の間に起動しているそれが酷く遅く感じられた。

自分の速度では絶対間に合わない、ならば。  
振り上げた大剣を即座に逆手持ちにし、全力で投げる。

一夏の既に100を大きく下回ったエネルギー残量が減少する。

87 マドカの手を離れた大剣が光を吐いて加速する。

52 まるでジャベリンのように光り輝く剣が音を割る。

26 大剣がまるで狼の歯のようなそれとも刃のような光を放出する。

10 偽天使まで残り数メートル。

4 大剣の切っ先が光の奔流へと突き刺さる。

0 フェンリルの名を冠した大剣が偽天使の両腕を喰らい千切った。

—— 数瞬の後、光が止む。

「あ」

小さな声は無機質な、呆けた声だった。

「ああ……」

声に絶望が混ざる。

優れた能力を持つ少女の頭脳は一つの結論を出した、兄は消し飛ん



だのだと、間に合わなかったのだと。

唐突に残留していた奔流の残り香である光が二つに分かれた。視界内の白式のエネルギーが急速に回復する。

「はあっ……!!」

冷や汗を一筋流しながら、一夏が刃を振り切っていた。

「ナイスだ、マドカ!」

「お兄ちゃん!!」

マドカが顔いっぱい嬉色を浮かべる。

偽天使がノイズを掻き鳴らし、その体を組み替える。

左半身の装甲を掻き集め、消し飛んだ左腕を補填する、装甲に覆われていた頭部が露わになり、蕩け、歪み、虚ろとなった左眼が一夏を「覗く」。

「しんいちろおっ!!」

泣き叫ぶような簪の声に呆然とした表情に偽天使が僅かに怯えたような表情を浮かべた。

「簪が大事なんだろうが!!」

一夏の声にまるで挙動不審になったかのように周囲をキョロキョロと見回す。

「だったら泣かしてんじゃねえぞ!! シン!!」

簪と約束したんだ、そう心の中で叫ぶ一夏が雪片式型から手を離す、地へと零れ落ちるそれを偽天使の眼が追う。

ギ、と右腕を大きく後ろへ引いた。

まるで落ちるように偽天使へと向かう一夏の右腕の装甲が光を散らして解れる。

光が果てた後に生身の右手は固く拳を握っていた。

「だから、とつととオ!!」

『偽天使がようやく一夏を見た時、そこには眼前に広がる拳があった。』



ルをぶちまけ、その被害を被ったジャックが苦笑いし、母さんがそれを見て笑う。

オールドキングがアンティークの上下二連にリボンをつけて俺に渡してきた、誕生日に渡すようなものではない、と言いながらもリボンの可愛らしさのアンバランスさに腹を抱えて大笑いするアンジェ。皆々、俺の大好きな家族だ。

「その前は、たしか」

ゆつくりと記憶を追いかけ、白い影はおぼろな記憶を補完するように、声を掛けてくれる。

「俺は、生まれてから、あんたに、会ってない」

「そうじゃ」

思い出した。

白い影が形を持つ、白いひげを大量に蓄えた痩せ気味な老人が目を細めてこちらを見ていた。

「アンタは、神か」

「そう呼ぶ者もおるな」

「俺は、死んだのか」

思い出せない、いつ死んだんだろうか、俺は。

何故死んだんだろうか俺は。

「事実上は死んでおるが正確には、まだ死んでおらん、と言うべきかどうか」

「まだ、死んでいない?」

その疑問に老人は数度頷いて、ゆつくりと説明を始めた。

「今、おぬしは植物状態となっておる、どうしようとも、目は覚めぬ」  
確かに、もはやそうなれば死んでいることと同義だ、生命活動だけを行う肉塊でしかない。

「おぬしは不快だと思うかもしれないが、おぬしの人生はそれこそ一つの物語として我々を楽しませた」

それは何よりだ。

「そこでワシ含め、我々はお主にもう一度生を与えることにした、だが今もなお、お主の記憶は曖昧でありその状態で選択を迫るのはあまり

にもアンフェアだ、故……お主の記憶を全てハッキリとさせよう」

そう言つて俺へと手をかざした老人が柔和な笑みを浮かべる。

どくん、鼓動がひとつ俺を震わせた。

ドクン、俺を形作るように何かが張り巡らされる。

「か、あ……！」

「大丈夫じゃ、落ち着き、ゆっくりと呼吸をすると良い、お主は人としての形を失つておつた、呼吸に慣れておらんだ」

無くなった筈の自分の体が急速に、冷えるように、あるいは熱されるように存在を主張する、ガキンと重い金属が叩きつけられる音と共に俺は膝を付いた。

ひゅうひゅうと音を立てる喉を抑えるように腕を持つてくると金属の左腕が姿を現す。

右腕は失われているようだが、それでも触れず、見えないだけでそこには確かに腕がある。

そして、身体が形を作るのと同じように抜け落ちていた記憶が一つ、また一つと組み上がっていく。

俺の家族が、俺の先生が、俺の親友達が、そして。

最愛の人が。

なぜ、俺は忘れていた、こんなにも求めたのに、こんなにも恋い焦がれたのに、こんなにも、心を埋めているのに。

ぼろぼろと零れる涙を視線が追いかけていると老人が俺の肩に手を置く。

「お主には三つの答<sup>みち</sup>えが与えられている、どれを取るかはお主次第だ」「みつつの、みち……？」

顔を上げた俺は老人に支えられ立ちあがる。

「まず元の現実へと転生する、次にこの世界で転生する、最後にまた別の世界に転生する」

大きな姿見が三つ、俺の目の前に現れる、それぞれが別の物を映している。

ビルが立ち並ぶ中で笑う人々、ISが宇宙を翔け巨大な施設へと向かう姿、そして光り輝き何も移さない姿見。

「この三つだ、我々としては娯楽のために三つ目を押したいが、お主は苦難に満ち、だがそれを謳歌し輝いていた、休むのもまた一つの手じゃ、お主が選択したまえ」

失われた右腕、機械へと変わった四肢、確かに存在する胸の傷、中心の姿見に、ちらりと水の髪の毛の眼鏡を掛けた少女が映った。

「……なあ、確かさ、俺が生まれる前にこう言ってたよな『好きな力を三つ与えてやる』って」

俺の言葉に老人は笑みを浮かべながら深く頷く。

「ああ、言つたとも、三つ目の答えの場合はもう一度リセットして力を三つ与えるつもりでもあるよ」

「確か、俺の能力は物体の創造変化、根性であと一個残ってたよな」

自らの記憶を引きずり出す、ここに記憶の劣化は無い、思い出そうとすれば、思い出せる場所だ。

「確かに、残っていたとも、次の転生で持ち越すかね？ ああ、ああ、構わないとも、構わないとも」

「それは、願いでもいいのか？」

そんな筈の無い喉が渴きを訴える、失敗どうこうは分からない、通るかも分からない、でも俺はそれを願う。

「ああ、勿論構わないとも、何を望む？ 生まれかな？ それとも次の世界の指定かな？」

「お主のその一つ願いは何を望むかね？ 聞かせてくれないか、何のためなのか」

現実か、空想か、新たな可能性か。

いや、違う。

俺の願いは……！

「決まっているだろう」

「fourth answer  
「四つ目の答えの為だ」

く く く く く く く く く く く く く く く く

「もうあれから2週間だよ」

「うん、これからどうしようか……」

教室で神妙な表情を浮かべながら、椅子に座り込む少女と机に座る少女、教師に見つかれば大目玉だがまだ来る時間ではない、彼女らは早起きなのだ。

「どうとでもなりますわよ、ISはISですわ、むしろ今までが間違っていたんだ、という気概が必要ですよ」

「セツシー強いねー、代表候補でしょ？ 結構深刻じゃないの？」

「まさか、全世界の宇宙開発用だったという建前が本音に変わるんですのよ、素晴らしいではありませんか、わたくしは何も変わりませんわ」

凜と静かに穏やかに、そして諭すように語るセシリアに少女たちは「ほえー」と可愛らしい声を漏らしながら感心する。

「まあ、IS学園の面々は何も問題ないだろうな、それはカラードに感謝だ」

「そう……だね」

ひよいとセシリアの脇から顔を出したラウラが出した言葉に少女が言いよどむ、無論ドイツも大丈夫だと誇らしげに言ったがセシリアの脇からひよっこりと顔を出している以上最初期の冷たさやキツさはない。

セシリアに頭を抱え込まれワシワシと撫でまわされる。

「ぐわー、やめろー」

「籐ヶ崎くん、まだ目が覚めないのかな……」

「大丈夫ですわよ、どうせいつの間にかひよっこりと顔を出していつも通りな挨拶をするはずですよ」

ね、と目くばせするとラウラを取られて若干しょんぼり気味のシャルロットが苦笑いを浮かべる。

「そうだね、シンは大丈夫だよ、ある意味一種の信頼みたいなものか

な」

だが植物状態であるという事実は既に聞かされている、普通ならば目を覚ます可能性は絶望的で、実質死んでしまったのだという話もある。

「おっはおっは、相も変わらずしんみりしてるわねえ」

「そりゃあそうだろう、正直世界はめちやくちやだ、カレードと姉さんが何とか必死で繋いでいるような状況に近いからな」

「まあね、でも悪い事ばっかじゃないでしょ」

飛び込むように教室に入ってきた鈴音がこぼした言葉に少々呆れ気味で返す筈、自分の席へ行けばいいものをこうしてここ最近ずっと扉付近で背を預けている。

「おはよう、みんな」

眠そうな目を擦りながら教室に入ってきた一夏に筈が満面の笑みを浮かべて正面に立つ。

「おはよう、だありん（はあと）」

そう言いながら一夏に抱き着いて頬に口付けの嵐を降り注がせた。最初期は頬ではなく唇にキスの嵐を見舞おうとしたが「恥ずかしいからー」と顔を真っ赤にした一夏に折れて頬で妥協することにした。ちなみにそれでも普通に一夏の顔は真っ赤である。

「なんかルージュラ思い出す勢いよね」

「一夏！ 私も！ 私もお嫁さんだぞ!!」

一周回って冷静になった鈴音とボサボサの髪で一夏にキスを強請るラウラ、なんと驚くことに日本という国に属しながらこの少年、一夫多妻の権利を各国から押し付け……もぎ取ったのである。

本来ならば到底肯定されるべきではないのだが先の、僅か2週間前の世界の歴史を塗り替えた事件により各国の影響力が急激に低下、多くの問題を抱えながらも国の影響力を戻す必要があると、あらゆる国がカレードに取り入ろうとし、また各国の繋がりを強固にするべきとの意見の一致により一夏と自国の仲が良い少女を結婚させてしまおうという杜撰極まりない取り決めがされた。

実際のところ兵器としてのISが無くなったからと言って有用性

がなくなつたわけではなく、本来の目的である宇宙開発用パワーワードとして華々しい再スタートを切つたのであるが。

それに転じてIS学園の方向性も兵器としての運用を学ぶための学校兼訓練校から宇宙開発としての運用を学ぶための学校兼訓練校として変わることになる。

とはいえ表の理由として出ている競技としてのISもまた華々しいものであることに変わりはないので渋々苦虫を口一杯放り込んで咀嚼したような顔で競技としてならまあ認めてやってもいいことも無いことも無いと篠ノ之東が首を縦に振つた。

急に軍用を止めてどうということなのだ、となると篠ノ之東がIS全共通に一つのロックを掛けたのだ「もし軍用として扱ったらIS強制停止すつからな!!」とのことである。

それにもし仮に軍用としてISが出張ってきたら本当に兵器として存在するACを部隊で向かわせて殲滅する、とカード及び篠ノ之東が全世界が見る前で協定を交わしたのだ。

数的不利の上でISを兵器として凌駕したACはそれまでの常識を覆し数多の小さな争いを生み出したが、ISを用いた大きな紛争は全て同時に片付いたとみてもいい。

なのでセシリアの言つた「何も変わらない」というのは競技者として事実、的を射た発言でもある。

しかし根っからの軍属であるラウラからして、それもIS部隊と言うそれ専用の所属である場合は深刻な問題となりえるはずだ。

が、ラウラは特に気にした様子もなく言つてのける。

「大抵は軍と宇宙開発は隣り合い、あるいは同一のものだ、私もその例にもれず宇宙開発研究部隊として少し横に滑るだけだ、そうでなかったとしてISとACは似通っている、私たちのやってきたことは全てとは言わんが多くはその役に立つ。ACを各国は挙つて購入するだろう、ブラックボックスの解説など放つて置き、な。私も近いうち宇宙開発用ISのテストパイロット兼競技用ISのパイロットとなるさ、両方ともにこいつとな」

そう締めくくり、待機状態となつた「黒き雨改」を撫でた。



ISを扱える女性こそ至上であるとして我が物顔で無茶苦茶な政治を行っていたいくつかの国のいくつかの政治家はまるでクーデターが起こったかのように引き摺り下ろされ、後釜についたものは滅茶苦茶になった現状を見て絶句し、引き摺り下ろされたものは責任を取れと厳しく責められたが世界が全て切り替わった現状ではそんな事でさえ些事であった。

「な、なあ箒、そろそろ離してくれないか……？」

「一夏は……私といるのが、嫌か……？」

泣きそうな顔で瞳を潤ませて、そう一夏におずおずと尋ねる箒に、一夏はウツと言葉を詰まらせてそんな事は、無いけど、と顔を再度真っ赤にして否定した。

それを聞いた箒がヒマワリのように笑顔になって、一夏に思いつきり抱き着いた。

一夏から見えないその顔はしてやったりといった顔をしているわけだが。

「うわあ！ あざとい！ ボクが言えた事じゃないけど、相当あざといよ箒！ ヘツ、ちよろいな、とか思ってるでしょ!!」

「しののん吹っ切れてキャラ変だよお」

ふええとちよつとした小動物のような反応を返す本音と自分を超越する逸材に危機感を覚えたシャルロットの視界におずおずと教室を覗く少女が映る。

「かんちゃん！」

「入ってきなよ、怖がらなくていいよー」

「あ、の……誰か、信一郎を……」

昔以上に小さな声を震えながら漏らす水の髪の少女、更識簪に多くの人間が表情を曇らせた。

「ご、めんね……わかってる、わかってるんだ……信一郎は、もう……目を……！ さま、さないって……!!」

でも、もしかしたら、私が知らないだけなんじゃないかと思って、もう来ているんじゃないかって思っ、と嗚咽を漏らす簪に鈴音がふうと息を吐き、簪の頭に掌を乗せてやや乱暴に撫で始める。

「アンタねえ、信じなさいよ、アイツをさ！ 大丈夫大丈夫、どうせ変なタイミングで変な方法で来るにきまつてるわよ、窓蹴破って突っ込んでくる可能性なんて私の中で一番高いわよ！ あいつが目を覚まさないなんて可能性皆無だもんね！」

「鳳さん……うん……！ そうだね、そうだよね……!!」

「そーそ、もしかしたらすぐにも来るんじゃない？ ほーらいきなりドア開けてとかさ！」

「そう言っ指をドアに指すと丁度いいタイミングでドアが開き、一人の人が入ってきた。」

「おはよう、諸君。今日も全員揃ってるな、最近は早起きなようでありだ」

織斑千冬その人だった。

「Holy <sup>嘘</sup>shit」

「何がだ、鳳」

同じ動きを続ける人形のように時計を見ては千冬を見て、を繰り返す鈴音に千冬はプリントの束をパンパンと軽く叩いた。

「言っておくが私たちが早かっただけでお前が教室に戻るのが遅れたわけではない、安心しろ」

「おほーっ！ よかつ——」

「だが人を指で指すのと、その言葉遣いは感心せんな」

「ぐえーっ!!」

軽いスイングでパァンと大きな音を鳴らし鈴音の頭をプリントでスツ叩いた千冬は箒から一夏を奪い取り、空いている肩に担ぎ上げる。

「あーっ！ 返して！ 千冬さん！ 私の<sup>だありんかつこはあとかつことじ</sup>だありん（はあと）を返してくださーい!!」

「私は見下ろしてこういう、『嫌だね』」

何せ私のものだ、と言いながら教卓につく千冬がプリントの束を机に置き、ぱちんと指を鳴らす。

「全員注目、席につかなくてもいい、鳳と更識も聞いて行くといい」  
たゆんと何をととは言わないが頭ほどもあるソレを揺らしながら千

冬の後が続いた真耶は顔いっぱい喜色を浮かばせて自分の発言の機会を今か今かと待っている。

「はい！　なんとですね！　今日からこの1組に二人の生徒が加わります！」

やったーわーい、どんどんぱふぱふー、そんな効果音が両手をタシツと合わせた真耶から聞こえてきそうになる。

「うち1人は私の身内でもある、入ってこい」

千冬がそう言いつつ扉の方に目を向けるとガチガチに全身を硬めてギクシヤクと大振りに手足を動かして歩いてくる少女が一人、右足と右足が同時に出ているのでとても不格好だ。

「わ、わたっ！　わたしは、おっ、おりっ……!!」

「落ち着け、馬鹿者」

「あうっ！」

千冬を丸々スケールダウンしたような少女が言葉を何度も詰まらせながらビシツと一直線に立ったまま、自己紹介をしようとして、千冬に軽く叩かれる。

「私はっ！　織斑おりむら円まどかですっ！　よっ、よろっ！　よろしくお願いしましゅっ!!」

「とまあこの通り、私と一夏の妹だ、人付き合いは下手極まりないがISの操縦に関しては私のお墨付きでもある、良くしてやってくれ」

頭を90度以上、バレエの選手が見ると満面の笑みを浮かべてうむと頷く角度でもって下げる少女に、全員がそろってあんぐりと口を開けた。

「あーっ!!　貴女はアアアア!!」

「うわああああん!!　ごめんなさああああい!!」

セシリアが円に指を突き付けて大声を出すと、びええええと泣き出し、いの一番にセシリアへと謝罪の言葉を出した。

「貴女一夏さんの妹でしたのオオ?！」

「はいいいいい！　そうですうううう!!」

「という事はわたくしの義妹ですね!!　ならば許しましょう」

スン、とまるで菩薩のような慈愛に満ちた表情を浮かべるセシリ

ア、まるで後光が射しているみたいだあ。

彼女は義妹という存在にめっぽう弱かった。

「マドカ?! 1週間見ないと思ったらー!」

「なに、色々手続きがあったのだ、これから3人で暮らせるぞ、一夏」  
セシリアに早速かいぐりかいぐり(擬音語)と撫で回されている円と肩に担いだ一夏(の尻)を回し見て笑みを浮かべた。

「はい! それでは次の生徒さんです、円ちゃん手伝ってくださいますか?」

「は、はいっ!」

セシリアの拘束から逃れ、パタパタと廊下に出て十秒ほどすると、車椅子が一つ、円に押されて入ってきた。

「……あ」

その声は、簪の唇から零れた。

一歩、踏み出す。

包帯で覆った顔、隠すようにフードをかぶり、体を全身隠すような大きなマント、布越しに分かる空洞の右腕の袖、そして下から覗く義足。

「あぁっ……!!」

一歩、また一歩と近づく、簪の視界が、少しずつ滲んでいく。

「シン、にー?」

「信一郎……っ!!」

簪がフードをゆっくりと外すとそこには。

包帯でぐるぐる巻きにされたマネキンが居た。

『は?』

全員の声が奇しくも一致、誰も彼もが何コレと円を見る、円も何だこれという顔をしていた。

「なんだこれ」

ちゃんと言った。

すると扉とは反対側、窓が一枚外側から弾け飛び、人型の影が飛び

込んでくる。

「キヒヤツハア!!」

大きな笑い声と共に入ってきたその男は、車椅子に乗るマネキンと同じ服装をしていた。

「お待たせエ!! 俺が居なくて寂しかったんじやあねえかなあ?！」

「信一郎!!」

「簪!!」

包帯で顔中を覆われた男、信一郎が自らをアピールするように左腕を広げる、それにボロボロと涙を流す簪が走って近づいていく、それに応えるように、ハグをしようと腕を前に突き出した。

パァン!!

乾いた音と共に簪の右手が振り切られる。

「ぐわああー!」

「バカあつ!!」

頬に左手を添えてスリスリと擦る信一郎に袖を余らせた少女、本音が簪と同じように涙をボロボロと溢しながら笑った。

「当たり前だよおく今のは無いよおく」

「ん、んん……ごめん」

流石に悪かったと思ったのかばつが悪そうに眉尻を下げながら謝った信一郎に簪が力の限り抱き着いた。

「おかえり……っ!!」

「ああ、ああ……!!」

左腕で簪を抱き留め、口元をニイと笑わせてこう言った。

「ただいま!」

全員が一度顔を見合わせ、誰かが「せーのっ」と声を掛けた。

『おかえり!!』